

日本美術年鑑

昭和十一年版

美術研究所

序

明治以降、時代を劃して急速の進展を遂げ來つた現代我が美術の興隆は、史上に之を徴するも例を見ること稀なる迄の、複雑なる内容と、技巧的發達と、個性的特質の伸張等を示し、我が國運の發展に伴ふ文化隆昌の現れとして、寔に壯觀と云ふも過言ではない。

而して又、現代の美術は、興隆時代に伴ふ潑刺たる氣力と共に、新時代創造の試みと悩みとを藏し、過渡期的なる一種の混雜をも示すことは否めないが、同時に是等の中には、將來の我が美術を完成に導くべき力強き萌芽をも認め得るのである。止まる所なき藝術進展の途上に於て、特に此の盛時に際會せる吾人は、今日の美術に對する深甚なる興味と注意とを惹かれると共に、其の更に健全なる發展に寄與すべき任の重さを感じるのである。

美術は既に一般の社會生活の中に入つて動かし難き位置を占め、美術及び美術界の事情は、深き社會的關心事となつてゐる。美術に關する幾多の事業が進められ、出版が行はれてゐる。而も此の時に當つて、美術界全般の活動、情勢を縮圖して一望し得る美術年鑑を缺くことは甚だ遺憾とした所であつた。

美術研究所は美術に關する事項の調査研究を使命として居る。美術に關する調査研究と云へば多くは古美術が其の對象とされる傾がある。現代に對しては多くの困難を感じるからであらう。併しながら、上述の如き見地から現代美術に對しても力を致すことは、本研究の最も重要な使命の一と考へるのである。嚴密なる意味で甚だ困難ではあるが而も能ふ限り正確公平なる調査を遂げ、其の結果を美術年鑑として刊行することは、現代に於て美術界並に一般社會に對し直接の貢獻たり得ると共に、將來に互つて永く、我が美術史上に最も信頼し得べき資料を蓄積して行くことに他ならぬものと信ずるのである。

此の計畫は美術研究所の豫てより企圖せる所であつたが、昭和十年度より初めて實施し得ることゝなつた。而して本

卷の編輯實務の進行し完成したのは、前所長事務取扱和田英作氏が任中に屬し、茲に之を出版し得るに至つたことは全く同氏の功に負ふ所である。唯だ印刷事務が遅れて、余の所長就任以後に残つたのみである。

年鑑の使命は、能ふ限り正確忠實なる記録の輯成に努めることに依つて、大部分果し得るものと信ずるから、編纂の方針としては此に主眼を置いたことは言を俟たない。併しながら此の場合にも、當事者は常に若干の批判を持ちつゝ爲すにあらざれば、編纂を行ふことは不可能である。而も藝術に關する批判程個人的なるはなく、主觀に従つて見解の相違を來すことは何人も之を避け得ない性質のものである。個人事業ならざる本研究所が美術年鑑を編纂する困難は、實に此に點に在つた。編輯員は能ふ限り其の妥當ならんことに努めたが、決して此の結果を以て完全なりと自負するものではない。本卷に就いては殊に、初年度のことであり、且つ不幸にして年度半ばにして漸く事業開始の事情に在つた爲に、幾多調査の不備を惧れるのである。又刊行日時甚しく遅延したことは最も大なる遺憾の點である。併せて一般の寛恕を請ふと共に、次年度以下の改善を期したい。

本年鑑編纂に就き、種々調査の便或は教示を與へられ、材料寫眞等を寄贈され、懇切なる回答を寄せらるゝ等、諸方より厚意を受けたことが尠くない。此の機會に於て深く感謝の意を表する次第である。尙本書の不備等に就いては、今後共江湖の垂教を惜まれざらんことを切望する。

昭和十一年七月

美術研究所長 矢代幸雄

凡 例

一、本年鑑は昭和十年度に於ける我が國美術界全般の活動を記録せんとするもので、同年一月初より十二月末日に至る一年間の主なる事象を、能ふ限り公平忠實に報告するを旨とした。

一、現代美術の部は、當該年度に於て製作又は發表せられたる作品、及び現代美術界の動きを調査記録することを主眼としたが、明治・大正年間以來活動せる作家の遺作展覧、回顧的展覧會、及び外國美術展覧會等に關しても、便宜上此に含めて取扱ふこととした。

一、建築に關しては、美術的見地より見て採録すべきものと認むるものみに範圍を限ることとした。

一、古美術に關する記事の中には、本研究所月刊「美術研究」彙報欄に掲載された記事を、抄出再録したものも多い。

一、作品に關聯して作家の名を擧げる場合及び物故作家等に就いては敬稱は總て之を省いた。

一、挿繪として掲載した寫眞は、當該年度中に新作として發表されたものに限り、遺作展覧、其の他に出品された舊作は、總て之を掲げぬこととした。寫眞は日本畫、洋畫、彫刻、工藝、及建築の五種に區分し、其の中であるべく展覧會毎に纏める様に努めたが、圖版の大きさ等に依る配置の效果の爲には、多少順序の不同を免れなかつた部分もある。

一、寫眞の版權を尊重して、撮影者又は版權所有者の明かなるものは、傍に六ポイント活字を以て其の名を記入した。

一、本卷は和田新（舊姓青山）編輯を主任し、現代美術を主として山田智三郎、便覽及文獻目錄を倉田平吉が執筆に當つた。又文獻目錄の中東洋古美術に關する部分は中川千咲之に當つた。

史蹟名勝天然紀念物保存……………七

史蹟名勝天然紀念物保存法……………七

史蹟名勝天然紀念物保存法施行令……………七

史蹟名勝天然紀念物保存法施行規則……………八

史蹟名勝天然紀念物調査委員會規程……………八

史蹟名勝天然紀念物調査委員會職員……………八

朝鮮寶物古蹟名勝天然紀念物保存……………八

朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然紀念物保存令……………八

朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然紀念物保存會官制……………二〇

朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然紀念物保存會職員……………二〇

著作權保護……………二〇

著作權法……………二〇

著作權審查會官制……………二五

著作權審查會職員……………二五

改正ベルヌ條約……………二六

美術獎勵施設一覽

帝室技藝員……………二二

帝國美術院……………二二

商工省工藝展覽會……………二六

商工省輸出工藝展覽會……………二六

京都市美術展覽會……………二六

名古屋市美術展覽會……………三

朝鮮美術展覽會……………三

臺灣美術展覽會……………三

美術研究施設一覽

工藝指導所……………三

陶磁器試驗所……………三

美術研究所……………三

東方文化學院……………三

日本古文化研究所……………三

其の他の官公立研究所……………三

美術教育施設一覽

東京……………三

學校……………三

研究所……………三

京都……………三

學校……………三

研究所……………三

大阪……………三

學校……………三

研究所……………三

其他……………三

美術觀覽施設一覽

帝室博物館……………三

關東地方……………三

東京……………三

地方……………三

奧羽地方……………三

中部地方……………三

近畿地方……………三

京都……………三

大阪……………三

奈良……………三

地方……………三

中國地方……………三

四國地方……………三

九州地方……………三

臺灣、朝鮮、關東州……………三

美術團體一覽

主要團體……………三

其他……………三

展覽會場一覽

東京……………三

大阪……………三

京都……………三

其他……………三

美術關係定期刊行物一覽

現代美術關係……………八

古美術關係……………八

美術家及美術關係者名簿……………八

五十音順……………八

現代美術

概観

昭和十年は、其の藝術自體の動きよりは美術行政的方面及び美術界全般の世間的な動きに於て、我が美術史上に特記さるべき重要な一年であつた。即ち岡田内閣の下に松田文部大臣によつて斷行せられた所謂帝國美術院の改組は、美術界の全般に異常な衝動を與へ、其の後の美術界はこの問題を中心として、別記（彙報参照）の如き活潑、複雑な動きを示したのであつた。

改組の事が五月末突如として發表さるるや、美術界の全神經は之に集中され、其に對する賛否に拘らず多くの美術家及び美術團體は之に反應して俄に緊張した動きを示し、特に不満を感じるものの間では、之が對策として諸種の運動を勃發させたのであつた。聲明書、建議書の頻發、團體の結成簇出等、凡そ美術界の現象としては殆ど其の例を見ざる迄の激しさを以て行はれた。是等の事件が新聞記事を賑はし、一般社會が美術界の動きをこれ迄に無い興味を以つて注意し始めた事も特記すべきであらう。

改革の事が發表されてより半歲餘、目まぐるしく喧騒を極めた此の事態は、年を終るまで何等の落着を見るに至らず、其の儘翌年に持ち越されることとなつた。

斯うした美術行政的論議と政治的活動の爲に貴重な時間と精力を費した作家も少く無く、又美術界の混亂の爲に受動的に焦慮の中に追ひ込まれて制作の手の鈍つた作家も可なりあつたやうである。斯かる紛擾が美術の爲に好ましからざることは言ふ迄もないが、一般的には、本年度中にそれが藝術制作自身に差して大きな影響を與へ

たとは見られなかつたやうである。之は、院展、二科、第二部會等の出品作が例年に比して優るとも劣らない出來榮を示した事によつても分る。のみならず、今次の改造が帝國美術院及び其の展覽會に及ぼした効果は未知數としても、之に基く動搖は反つて一種の刺激となつて、作家に反省と努力とを促したことが認められる。二科展に於ける中堅作家の活躍と其處に見られた清新味、第二部會の一部會員中に見られた自由な作畫態度への轉向等は其の好例と言へるであらう。

日本畫

本年は帝展が開かれず、而も日本畫界では洋畫の第二部會に相當するだけの抱擁力を有つた大團體が結成されず、やゝ之に近い第一部會も遅れて成立して、展覽會を催すに至らなかつたので、舊帝展に出品してゐた作家等の社會に發表する所は甚だ少かつた。唯新帝國美術院會員及び所謂參與級の作家が、淡交會、青々會、七弦會、珊々會、及び今年新に組織された春虹會、踏青會に、大作では無いが、相當力作を示したのみである。是等作家の作品は其の他にも百貨店及び畫商が随時催した小展觀に見られたが、其の他所謂舊帝展系の若い作家達の力作が世に發表されたものの少かつたのは寂しかつた。

舊帝展系作家が前記小展觀と十二月の三越日本畫展の外發表の機會を殆ど持たなかつたのに對し、院展系作家は春秋二季の展覽會に堂々たる發表の機會に恵まれた。共に試作展とて大作は比較的寡なかつたが、それでも横山大觀の「飛泉」、小林古徑の「白日」、小川

芋錢の「雲轡煙水」等を初めとし、多くの優品が發表された。

院展系作家で院展以外にも最も活躍せる作家は横山大觀と前田青邨であるが、大觀が前述の「飛泉」の外に特に傑作と稱すべきものを見せなかつたのに對し、青邨は四月中旬新に組織された踏青會に「眞鶴の沖」を出品、餘り氣乗りのしなかつたらしい他の作家の出品作の中に獨り出色の出來榮を示し、更に五月初旬には、岩崎家より御大典記念として獻上する「獅子」大屏風一雙を完成した。之は雄渾にして豪華なる構想と色彩効果を示した傑作であつた。

岩崎家よりの五雙の獻上屏風は之を以て四雙完成、最後の一雙は十月堂本印象に依つて完成された。「松鶴佳色」と題する水墨畫で、其の圓熟せる筆技を見せた壯麗なる畫趣は、青邨の「獅子」と共に本年度の名作として誇り得るものであらう。印象は恐らく本年最も好く活動し、最も多くの仕事を残した作家で、此の外、衆議院議員一同より皇太子殿下御降誕を奉祝して獻上した大屏風「翱翔開雲」一雙及び大和信貴山成福院の襖繪三十餘枚を完成した。

聖徳記念繪畫館の日本畫の部が、洋畫家の岡田三郎助の描くべき一枚を残して、全部完成した事も特記すべき事である。即ち、未完成であつた四枚の中、鐵道省奉納の小村大雲作「鐵道開通式行幸」は五月末、徳川慶光公奉納の村田丹陵作「大政奉還の圖」は十月十五日、大阪市奉納の菅桐彦作「皇后冊立」は十二月初旬完成を見、其々繪畫館に奉納された。日本畫は此處に襖繪とは違つた廣く社會に働きかける公共的な新しい仕事の領域を見出し、歴史畫の新しい復興の道も開かれたわけであるが、此の仕事の意義と性質とを十分理解して、其の記念碑としての使命を藝術的に完成せしめた作家は残念ながら少なかつた。

本年の日本畫には洋畫界と異つて、新しき傾向或は新しき運動の特筆すべきもの無く、僅に六月開かれた山樹社及び新日本畫研究會の合同展に、舊來の傳統から離れて新時代の「日本畫」を樹立しよ

うとする試みが見られた。其の中には材料のみ日本畫で其の手法は洋畫に近く、其處に現れた觀照も洋畫によつて表現するを妥當と思はしむるものもあつたが、福田豊四郎等の超現實主義的作品は、未だ試みを出ぬとは云へ、新たな日本畫の一つの道として將來の發展を期待せしむるものであつた。

「健豪なる會場藝術」を旨指して居るだけに、小さいながらに目覺ましい活動を見せたのは青龍社であるが、川端龍子が秋期展に水墨淡彩で大畫面の線描を試みた以外には、大體に於て此の會の從來の傾向をそのまゝ進めたゞけで特に新しい問題を提出するやうなものは無かつた。同展出品の杉本哲郎の「樵夫」は日本繪具で描いた、イタリヤ十五世紀の壁畫を思はせるやうな堅い線の大畫面であつたが、之は新しい傾向と見るよりは特殊なる例外的作品と見る方が至當であらう。

日本畫界は本年、高取稚成、速水御舟、榛澤菱花等を失つたが、中にも常に探求して止まず、新しい道を拓り開いて行つた、速水御舟の死は、未來を期待せられて居ただけに大きな損失であつた。

優秀作家のみを集めた小展觀の多かつた事は既に述べたが、個展の次第に旺んになつて來た事も、終りに一筆して置くべきであらう。審査に煩はされ、短時間に會場を一巡せんとする觀客に質を異にする他の作家の作品と共に一瞥を投げられるだけの大展覽會よりは、個展に依つて觀者は少くとも、眞實なる鑑賞を求めんとする氣持が次第に作家の中に強くなつて來たらしい事は頼もしい傾向である。例へば伊東深水是六月初めての個展を開いたが、美人畫専門家として「漸くマンネリズムに陥りかけて居る」事を自覺して、素材を美人畫に限らず廣く自然の事象一般に求め、靜物、風景畫等をも試みて居た。大展覽會には斯うした試作は避けられてつい手慣れた題材に終始してしまふ傾が多い。

洋 畫

昭和十年の洋畫壇を回顧して目立つ現象の一は、一般の社會思潮に伴つて近時起つて來た洋畫の日本化或は其への努力が更に顯著になつて來た事で、主要美術團體中最も前衛的で、強く巴里畫壇の影響を受け、國際的な藝術を目指して來た獨立展にもさうした意識的運動が表はれて來た。今春の同展には、既にさうした傾向にあつた林重義を初め、伊藤廉、兒島善三郎、小林和作等の諸會員が別記の如く(一〇頁)或は日本の美的表現に努め、或は日本畫の特殊な表現法を活用するに努めて居た。又同展の會員外の出品にも、以前より日本的要素を多分に有つて居た中村節也の作品は別としても、日本の洋畫への意識的努力が看取された。その中には「日本的」なる意義の曲解から、ぬえ的作品も見受けられた。

元來日本に於て日本人によりて創作せられた藝術は、作者が自己と其の周圍の世界に忠實なる限り當然日本的たるべきである。にも拘らず現在日本化への意識的努力を必要とするのは、一には過去に於て油繪の技法を歐洲より習得するに當り、精神的及感覺的美の標準をも歐洲の其に倣ふ傾向があつたからで、之は習得時代にあつては無理からぬと言ふよりは、殆ど必要の事であつたらう。のみならず、過去に於て日本の文化全般に行き互つた歐米心醉主義も亦其の外部的原因をなして居る。二には洋畫の日本化を試みた場合、其の材料と技法をこなし切れず、兎角悪い意味での「日本の洋畫」になつて了つたからである。斯く洋畫の特性を生かしての日本個有の油繪様式を確立した作家は少なかつたが、近時新日本文化の建設が努力せられ、繪畫に於ても、洋畫の材料及技法の特性が次第に呑み込まれるやうになつて、油繪の特性を生かしての新日本個有の精神及美的表現或は其の表現法の確立が意識的に努力せられるに至つ

た。先に獨立展に就て特記したのは、其の新日本主義が今年特に顯著であつたからで、此の傾向は近年其の他にも多くの作家に見られる所である。例へば本年に於ても其等の作家はその道を歩んで、安井曾太郎の「三寶柑」(十大家展)、「少女」(清光會)、野口謙藏の「夕日の家とひまわり」(東光會)、藤島武二の風景畫、牧野虎雄の旺玄社及三越洋畫展出品作、宮本三郎の「婦女三容」(二科)、藤田嗣治の「和船」(個展)、「Y氏婦人像」(二科)等を初めとし多くの佳品が發表されたのであつた。獨立展と共に最も國際色濃厚な團體で、フランス美術の牙城のやうであつた二科展に日本色の濃くなつて來たのも此處數年の事であるが、今年も其の傾向は強く、特に會員では前記藤田嗣治の外、日本的な題材を日本的な觀照を以て描いた鍋井克之、中堅作家の中では、宮本三郎、錦義一郎、酒井亮吉、高橋卯八等が目立つた。殊に高橋卯八は「白虎隊」に國粹主義的な傾向を示した。

此の「白虎隊」は國粹的作品としてのみならず、文學的内容を表現するものとして、成功とは云へぬにせよ注目し價する。と云ふのは、日本の洋畫界は印象派全盛の頃の歐洲より油繪の技法と共に、文學的題材を蔑む事をも習つて了つたからである。現代多くの洋畫家は自然の斷片を描く修業のみして、文學的或は歴史的題材を描くとなると一般に不得意であり又描かうともしない。自然の美を描かうとする欲求は日本の民族性に深く根差す所ではあらう。併し繪畫が社會に其の機能を果す爲には、單に自然觀照の表現のみに止まらず、更に領域が廣くあつて然るべきである。「白虎隊」は、若い作家が自發的にさうした題材を試みたものだけに、此の意味から將來の發展への喜ばしい端緒として見られよう。

繪畫の廣い社會への轉出として興味ある現象は、本年になつて壁畫の流行とは行かない迄も、それへの曙光が見え初めた事である。先づ本年初頭、藤田嗣治が昨年十月完成した銀座の聖書館一階にあ

るブラジル珈琲宣傳所の大壁畫が公開された。此の壁畫は目立ち易い場所の上に近來珍しい大畫面であり、而も優れた作品であつた爲世間の評判となり、建築家及建築主或は事業主をして各々の立場から、壁畫の價値を認識せしめた効果は大きかつた。本年秋になつて藤田嗣治は新築の大阪の百貨店十合の特別食堂に壁畫を描き、東京銀座に改築せられた喫茶店コロンバンには天井畫を描いた。更に朝日新聞社京都支局に於ては、内壁のみならず、大通りに面した三、四、五階を通す大外壁面に、伊藤藤、林義義、川口軌外の三人に依つて壁畫が畫かれた。その外、機會を得られぬので制作こそせぬが個人主義的な畫架（ポインティング）畫にのみ閉ぢ籠らず、より社會的な壁畫に廣い活動の舞臺を見出したいと考へて居る若い作家も相當多いらしい。若い作家達によつて、藤田嗣治、寺崎武雄を顧問として組織せられ十二月試作展を開いた日本壁畫家協會も、其の作品は幼稚で壁畫の特質も了解して居ない事を示して居たが、さうした氣運の一と見られよう。

其他個展の流行も今年の著しき現象と見る事が出來よう。之は前述の日本畫界に於けると同様の氣持から盛んになつたものと思はれるが、美術界の紛擾は其の氣運に拍車をかけ、個展の数の多かつた事は日本畫界との比ではない。併し主要展への出品を止めて個展のみを發表機關としたのは川島理一郎位のものであらう。残念な事には是等の個展には會場の都合もあらうが、主要展への出品作ほどに力を籠めた作は殆どなく、輕い小品を陳べたものが多かつた。やはり大展覽會への出品を社會へ出る第一の道とする風潮に支配されて居るからであらう。尤も之は批評が世間に權威を有せず、社會的に價値を認められるには、主要展に入選或は入賞する事が殆ど唯一の道である現狀では致し方無い事かも知れぬ。此の點日本畫界は一般鑑賞家就中購買者の目が洋畫に於けるよりは肥えて居る爲洋畫界よりは幾分恵まれて居ると云ひ得る。

彫刻

帝院改組に伴つた紛擾の結果、舊帝展系彫刻家に依つて新に第三部會、東邦彫塑院の二團體が組織せられ、二科會からは新彫塑協會が分立し、是等に舊帝展系の既成團體たる塊人社、日本木彫會、舊帝展に對立して居た構造社、それに二科、日本美術院の彫刻部を加ふると、相當優れた作家を會員とする彫刻團體は、八つの多きを數ふるに至つた。是等の諸團體は、新彫塑協會を除いては、何れも本年展覽會を開き、各會員また勉勵大いに努めて多くの作品を出陳、その藝術を世に問うた爲、本年の彫刻界は相當の賑ひを呈した。

併し此の相當の賑ひにも拘らず、傑作とし、或は本年度の良き收穫として擧げ得る作品は案外に少なかつた。その中、松村外次郎の新興日本人の意氣を象徵化したる如き「桃太郎」(二科)は、技術的にはより推賞すべき作品もあつたかも知れぬが、其の表現形式と表現せられたものが、新時代の波に乗つて居る點に於て、第一に擧ぐべき作品であらう。既に名を成した作家の作品には其の名を辱しめぬだけの佳作はあつたが、特筆すべきものは少かつた。右の外には高村光太郎の故光雲翁胸像(東京美術學校庭に建立)、及び缺點の多い作品とは云へ、新しい時代の仕事として中村直人の「石工」(院展)等を擧ぐべきであらう。又未だ試みを出ぬが、動的な彫刻(八四頁參照)柚木芳の「流雲」(構造社)は日本の彫刻界に新しい道を拓いたものとして注目される作品である。

本年は我が彫刻界の厄年とも云ふべく、帝國美術院會員藤川勇造を初めとし尙ほ若くして將來を囑望せられて居た木村五郎、橋本平八、堀江尙志、牧雅雄、陽成二の諸作家を失つた事は惜しみて餘りがある。

主要美術展覽會

獨立美術協會第五回展覽會

於東京府美術館

三月六日—同二十五日

創立當初の此の團體の主流はフランスの所謂フォーヴィズムに倣ふものであつたが、此の道をそのままに採る時日本に生活する日本人として當然到達しなければならなかつた行詰りと、近頃の國粹思潮も手傳つて、「新日本主義」とて色々な形で意識的な日本化が、此の會の指導的立場にある三、四の會員達によつて近時唱道せられその試みが此の春の展覽會に展觀された。日本に於て日本人の創作する藝術には意識的な日本化の努力は無用の事のやうであるが、此の會の會員の多くが純歐風のフォーヴィズムを習つて國際的な藝術を目指して居た所から、其よりの轉向には斯うした意識的努力も必要となつて來る事は肯ける。のみならず近時日本の凡ての文化の分野に於て、過去の歐米模倣主義を止揚し、新日本文化の建設が努力されつゝある現在に於て、「新日本主義」なる標語を掲げる事は自然な欲求でもあつたであらう。併し此の會の三、四會員によつてなされた此の宣言は從來の作風に顧て其の結び付きの唐突さを感じさせ或は時流に迎合する如き感を一般に與へたのは餘儀ない事であつた。殊に此の日本化なる意識的努力に依つて、無理な形式上の日本化を企てた鶴的作品が出品畫中に見られたのは残念であつた。

此の展覽會で、特に日本畫的要素を採り入れて居る作品の中、最も成功して居るものは兒島善三郎の諸作であつた。平面的な様式化

に好く成功して居た。但し日本畫的要素を採り入れたと云ふだけで之が特に日本的な作畫態度であるかどうかは甚しく疑問である。之はむしろ佛國のフォーヴィズムの作畫態度を以つて日本畫の平面裝飾的取扱ひを試みたものと見るべきものゝやうである。併し此の事が作品の價值を減すると云ふ譯ではない。「新日本主義」の惡影響はむしろ日本風な模様をつけた額縁を、繪との不調和をも顧ずに用ひた點に見られる。

藝術的には之と較べて落ちるが非常に日本人らしい觀照と技巧を示したものに林重義の作品があつた。「雪景山水」「山嶺秋霽」など題まで日本畫らしいものを用ひて居た。外に日本的なものを製作せんと意圖して目立つものに伊藤廉の「雨霽」があつた。日本畫には好んで取材される霧にけぶる山水風景である。從來とても霧にかすんだ風景が洋畫に取扱はれなかつたとは云へぬが、墨繪に於て、ほかによつて表現される霧自身の美と云ふものは洋畫に見られなかつた所である。それを作者は此處で企てたのであるが、相當の技巧にも拘らず結果は成功したものと云ひ難い。油繪具のそれに適せぬ事が第一の理由であらう。既に色と云ふものがかうした美の表現に邪魔になる。霧にけぶる山として色はあるが、我々はその色を表はして居る彩色畫よりも一色の墨繪の方に遙かに眞實性を感じる場合が多いのである。

外の點では特に、「新日本主義」を意識して居るとは見えないが、廣重あたりから考へたものであらうか雨を緑やウルトラマリンで描く冒險を敢てして、その點では成功して居たのが小林和作の風景畫「通り雨」「日照雨」であつた。唯風景の表現に細かい味と變化の

無かつたのは惜しい。

他の會員の新日本主義の唱道に超然と、「新時代美術の確立」(同會の宣言)を期して依然と歐洲風のフォーヴィズム或は其れ以後の新しき道を探つて居る會員達も相當にあつた。その中で出色の作品を示したものは中山巍である。其の「蔬菜」の形象の純化による本質的な美の表現は、小品ながら會宮一念の靜物二點と共に此の展覽會第一の收穫であつたと云ひ得るであらう。同じ中山巍の、「砂丘」は人物の描寫に何か眞實なものを寫して居ない空想的なものがあつて、其の力強い筆使ひにも拘らず力の弱い作品であつた、會宮一念の靜物はピツシエールの影響と共に南畫の手法の影響も見られる。

病氣を推しての出品と云ふ里見勝藏の「少女」は好い出來榮とは云へないが相當の才能の所有者である事は示して居た。同じ室には新會員海老原喜之助が愛すべき朗かな「曲馬」に天才的ひらめきを見せたが、此の作者が大成する爲には技巧上にも自然及人生を見る目に於てもつと鍛鍊を要するであらう。之も同じ室の野口彌太郎の「巴里風景」は中々野心ある構圖であるが、人物、窓、窓外の風景の關係に難のある作であつた。小品の「リヨンの橋」「カーニユ風景」は此の作家獨特の氣の利いた要領の好い筆觸で感じ好く描けて居た。此の團體のもう一人の代表的會員である川口軌外は中々華麗なモンタージュを示して居たが、かうしたものでは佳品であつた。

毀譽褒貶様々であつた須田國太郎の「水浴」に就ては「之を過去のものとして排斥し去るのは自らの不明を證明するやうなものである」(春山武松 大朝三月十二日)と迄讃め上げた評者があつたが、石井柏亭と共に「三途の川の趣に近い」(中央美術四月號)と云ふ感を抱き、宮本三郎と共に「其の意企が不明である」(アトリエ四月號)と現代藝術としての價値を發見し得なかつた觀者の方が、多數であつたらう。之は其の學究的洋畫家の腦裏に現出した美の世界の表現で

はあらうが、其の世界が現實の世界とは遊離して居て現代とは異なる往時の美の概念により多くのつながりを持つたものだけに、大作にも拘らず訴へる所の少い作品であつた。

受賞者の中では中村節也の「柄撰」が光つて居た。生地な日本的な感情と感覺の所産ではあるが、日本人特有な優しみや、繊細な感覺の見えないのが缺點であつた。D氏賞の三岸節子の「窓」は女性らしい感情の表はれた氣の利いた抒情的な作品であつたが、窓掛の描き足りないのが、全體のデリケートな調子を破つて居た。技巧の不足から來た缺點である。他の受賞作中には風變りなものもあつたが特筆すべき出來のものもなかつた。搬入點數四千百廿三點中より三百五十七點を撰んだと云ふ嚴選にも拘らず、一般出品の水準が低かつたからか、何の爲に賞を與へたかと思はれるものさへあつた。

受賞者左の如し

推薦	松島一郎	中村節也
獨立賞	菊地精二	飯田操
海南賞	中間冊夫	熊本登久平
D氏賞	今西中通	齋藤長三
		上田清一
		三岸節子

尙昭和九年七月物故した舊會員三岸好太郎の遺作十六點が並べられた。僅か三十二歳で逝いた此の作家には確に天才的な所があつた。尖鋭なそして動きのある感覺を持つて居たことが見られる。唯其れが社會的に鍊磨されずその結果その才が大成しなかつたのは惜しまれる。次から次へと新しい様式に移つて行つた此の人は其の才が廣かつたやうであるが、實は深さのみならず社會的な廣さも未だ有してはゐなかつた。此の奇才を大成せしむるには三十二年の生は餘りにも短か過ぎたのである。それでも白い畫面に釘様のものを以つて

出品目錄
(陳列番號順)

出品目録(陳列番號順)			山ノ土、石ツコロ			宮島佐一郎			
クリスマス	後藤 幸造	風景	海港、月	同	長島 常吉	靜物	中路 忠重	磯	同
婦人立像	關 千鶴子	坂ノアル風景	廣原 長七	鐵指 公藏	雪山	和田傳太郎	石膏と果物	濱田 重雄	
化粧	同	風景	米倉 壽仁	二人	風景	三好 正雄	机上靜物	富樫 寅平	
ストウブとランプ	中尾 彰	窓	菊地 精二	雪景	同	赤星 孝	堤防工事場	同	
疏水ダム	安田 謙	鐵	同	夏の農家	同	同	蔬菜	中山 巍	
庭	植田 俊夫	機械	同	臺所の一隅	齋藤 求	首藤 愛子	花	同	
月夜の梅花	森 有材	ガラス	同	ベンチレター のある風景	矢田 千秋	矢田 千秋	河内風景	中村 定吉	
雪中竹林	同	鱗粉	同	早春	中島英砂緒	馬	阪神池田地方風景	西浦 宣夫	
窓際	山田 榮二	くだものなぞ	片山 公一	花	安孫子真人	フタリ	同	坪内節太郎	
魚	同	分譲地風景	江淵 善仁	熱帶植物	綠川廣太郎	庭	同	同	
風景	橋本 春光	花の庭	矢澤 義龍	靜物	同	同	雪景	辻尾 知房	
男	中間 冊夫	バラオのカヌー	鈴木 昌枝	魚	同	同	水田	藤崎 元真	
裸	同	小屋	三崎 六郎	貝殻	同	同	リヨンの橋	吉田 二郎	
月ニ喜ブ	伊藤 和義	桃色の布	三岸 節子	無題	川口 軌外	同	巴里の眺	野口彌太郎	
椿のある風景	足達 襄	窓	同	鸚鵡と少女	同	同	カーニユ風景	同	
果物や	同	紅の布	同	朽木	赤堀 佐兵	同	獵(鐵砲)	宮城 輝夫	
果物など	常安 靜人	ビール工場を配 せる靜物	木村 孝三	切り通シ	同	同	機械を配せる風景	湯川 尙文	
文樂人形圖	山田 千秋	ビール工場	同	風景	同	同	靜物	岡部文之助	
室内裸婦	今西 中通	半面像とカゴ	中川 光延	野毛山風景	生田 實	柿手 春三	猿ヶ京風景	櫻井 濱江	
雪景	同	田家ノ裏道	森 勘三郎	冬の埋立地	同	同	木立のある風景	山道 榮助	
靜物	同	瓶等の靜物	明石 友次	機關庫附近	同	同	クラマール風景	今竹 七郎	
果物のある靜物	同	巖壁	小島善太郎	倉庫のある風景	同	同	ざぼん	森竹 五郎	
波止場	吉崎 正巳	激流	同	尾道風景	高原 政孝	種子靜物	同	曾宮 一念	
		渓谷	同	芍薬と少女	井出陽一郎	靜物	同	西村健次郎	

機械	村田 健治	風景	染谷田鶴子	代々木の原	兒島善三郎	緑の丘	桑原 宏
雪山と裸女	佐藤九二男	石楠花	藤井 利二	瀬戸風景	同	空と丘と	同
風景	田中安太郎	風景	島貫 義男	切られた樹	伊藤 健三	芦屋風景	小川 讓
雪景	江川 平三	野毛山風景	神谷 嘉和	少女像	榎本 友子	風景	河津 六郎
木と鋸	諏訪 邦一	ジョッキ其他	宮本 三覺	天主堂の横	山崎 正明	風景	平塚 武夫
花と蟲	同	撮影	鈴木 亜夫	夕月	熊谷登久平	若松	中村 鐵
要塞砲	吉田 宗一	馬と噴火口	同	五月幟	同	初夏の庭	同
曲馬	海老原喜之助	牡丹	同	朝顔	同	西宮郊外	龜井 貞雄
樹間	若林 和夫	湖	江口 秋彦	風景	同	靜物	船木 榮子
鎖のある風景	同	柿	同	夏木立	中原 清隆	靴屋	松島 一郎
無花果のある靜物	同	靜物	山中 徳次	尾道風景	小林 和作	豚屋	同
風景	田中 一郎	パバイの有る風景	横山 精一	桃	同	港の人夫	同
村落風景	藤井 一男	水族館	眞島 豪	通り雨	同	崖風景	同
少女像、外二點	里見 勝藏	室内靜物	法元 昌雄	梅	同	分譲地	松原 武雄
池畔	小川 信一	雪景	同	錦秋	同	盛岡風景	舞田 文雄
寝たるカナカ女	三崎 孝雄	公園にて	高橋 弘二	日照雨	同	人形と果物	笠井 隆吉
竹	上田 清一	癡屋早春	神子 義一	花屋	木島 眞二	桃	同
小松山	同	女座像	神津 隆一	かたつむり	木下 定	卓上果實	山崎 隆夫
屋根	同	秋草	荒井 彩子	雪	中村 道	搖椅子	同
山	荒井 街	靜物	同	水蓮	靜 君子	漁港	同
姉弟の像	中村 良明	かもめ	高橋 鷹子	風景	志村 計介	石膏と花束	同
玄奥の子供	同	きりの實	同	葡萄と西洋梨	同	靜物	同
靜物	岡村 芳男	風景	吉田 一夫	大谷風景	染谷 癸一	店頭	同
コムボジション	千原 三郎	風景	山村 猛猪	尾道向島風景	妹尾 正雄	馬と人	同
靜物	同	造船所附近	樋口 勝三	(山波)	同	鐵屑等ある風景	同
河岸風景	高橋賢一郎	雪の朝	石田 英吉	尾道向島風景	同	窓際	小田 三郎
鐵砲百合と薔薇	鈴木 保徳	山路	兒島善三郎	(晩夏)	同	横臥裸女	同
田舎娘像	同	瀧壺	同	風景	内藤 健一	どなたく	同
柿の實を持てる娘	同	庭の松	同	家	團 勇二	みなと	同
立てる小供	同	老松	同	石膏のある靜物	葛見安次郎	野末	同
靜物	同	庭の初春	同	晩秋	澤野岩太郎	女幻	同
					鎌田 知治		堀原 清一

現代美術

開墾地	井上長三郎	枯草の原	明榮光三郎	海苔洗ふ人	田中 行一	菊	岡島 吉郎
樹木	同	花	田邊徳三郎	鏡	同	月夜	奈知安太郎
肉と青年	同	砂山	尾花 經因	八百屋	猪俣 太郎	十字路	吉田 耕三
風景	同	花	鶏川 誠一	玖村風景	岩岡 貞美	風景	大口 登
花の交響詩	荒木 剛	雨齋(熊野川)	伊藤 廉	倒れた木	青木喜太郎	崖のある風景	櫻井 政雄
断面	矢橋 尙武	静物	同	小供	小川まり子	野菜と品	藤田 水祥
島	林 豊	切通	水谷榮之助	十二神將の一部	三水 公平	墓地の丘	國松のぼる
母子の像	永井 宏	名古屋城ノ一部	石井 國義	風の加茂河原	同	風景(A)	太田 亘
機械と貝ガラ	岡部 義朗	建築場	濱田 方一	静物	金井 正守	冬の丘	藤村 良一
工場	浅海 義治	鳥	静 千代子	静物	森沖右衛門	二人の漁師	小原 雄二
長崎風景	寺田 政明	花	同	静物	鎌田 功治	風景	同
海邊静物	同	風景と少女	佐川 敏子	石炭山	田村 一二	旅順新市街	山城 竹次
夜ノ式微	諸町 新	静物	同	八王子郊外	齋藤 紅一	百合のある静物	藤崎 利子
戦ひ	田邊 富治	溫室	北川 正一	竝木	同	午睡	田中佐一郎
静物	辻 芳雄	山麓眺望	小西清太郎	大仙院石庭	池田 治夫	裸女	同
春は風にのつて	千葉 健作	夙川風景	同	梅	關口 誠	牛	同
風景	六條 篤	水邊の冬木立	鈴木 清	風景	土井 貞雄	石景	同
虹を夢見る蝸牛	同	花束	市村 力	水浴	須田國太郎	静物	同
水泳家族	福澤 一郎	枯れた芭蕉	島津 俊一	少女	同	静物	同
水泳群像	同	蓮	同	婦人像	成瀬田鶴子	鯉と壽司	妹尾 正彦
觸手のある都會	同	静物	河村はる子	婦人像	伊藤 彌太	砂丘と鳥	同
森	淺田 欣三	枇杷のある静物	長谷川唯一	銀杏と墓	金各 義敏	馬車	同
鳥	生島 覺	雪景	青木 捷美	風景(1)	同	梅	同
作品	阿部 芳文	海の見える風景	村田 收巧	八月の風景	近藤 澄子	少女と絨毯	同
馬	末永 胤生	日曜の朝	齋田 武夫	オルガに紛せる	吉原 義彦	月、虫、裸婦	同
風景	廣江ミチ子	城のある風景	同	石膏	松崎 政雄	甲山	中本 久彌
朝	飯田 操	五反田驛風景	齋藤 長三	本牧風景	樋口 加六	庭園	渡邊健太郎
風景	同	馬車の到着	同	横濱	同	果實	高畑 正明
婦人の愛	同	我が旅への誘ひ	同	風景	同	鳥店	渡邊健太郎
眞登	加納 辰夫	胸像	田中 行一	疎林	原田 潤	冬枯れ	西村 清
冬丘	伊藤 鎌	風呂	同	自畫像	峰村リツ子	噴水	井澤 元一

池鯉	中村 節也	静物	兄王 貞平
柄選	同	オーケストラ	故三岸好太郎
伽藍鳥	同	ビロード・蝶	同
大谷風景	吉村 勇	立てる道化	同
印旛沼	水野 義正	貝がら 其一	同
崖	飯田 張	貝がら 其二	同
石垣のある風景	同	マリオネット	同
ドカン・海	猪飼 重明	海と射光	同
都會(隅田川)	清水 鍊徳	海洋を渡る蝶	同
牛の居る風景	野中寅太郎	女の顔	同
入江	佐山 武雄	花	同
花	山本 正	貝がら 其三	同
室内	同	道化	同
石など	多賀 延夫	花	同
土筆	清水 登之	道化	同
裸婦	同	旅装	同
静物	同	黄衣少女	同
薪を負ふ女	同	残雪	水沼 清
建物	同	アームルのある	井上 孟
道と斷崖	小山 昇	鳥	横山 清治
丘と道	渡邊 敏	貝と無花果	同
苺のある静物	同	風景	松方 芳雄
窓	池島勘次郎	鏡臺	沼 富次郎
地蔵様	村本 栄二	胡瓜	青柳 暢夫
教室	野中 秀郎	残雪	同
林	林 鶴雄	蓮鷺	同
花籠	高橋 勉	ラゲビー	同
山陰の杜	武藤 忠	競馬	同
室内	今井 憲一	父と子	熊木二三男
紙嵩持つ子供	山口 義朗	武蔵野風景 B	渡 洋一
現代美術	宇根元 警	柿の木	大内のぶ子

日本美術院第十九回試作展覧會

於 東京 府 美術館
三月七日—同二十四日

南瓜畑	大内のぶ子	峻嶺	文 挾勝
金魚	宮澤 喜一	雪景	佐野 健治
風景	江島 和男	司厨婦	藤岡 一
千帆	土屋 幸夫	走	同
尾道市全景	岩月 清	壺	同
崖	根岸 英二	花と駄馬	浦久保義信
風景	辻 潔	海	同
茶店	牧田 嘉一	春	同
女と	大野 五郎	夜店	同
朝	同	風景	久保田久一
紫陽花	北脇 昇	廟	鈴木 通雄
石庭	同	風景	岡田 邦義
白い道	大垣 泰治	雜木山の秋	宗像 逸郎
大谷風景	淺野 研兒	うめ	同
山麓雪景	中島 穰	ヒマワリ	垣内佳太郎
普請場	文挾 勝	ランプと柿	菅野 大乗

試作展なるが故か力作が餘り見當らず、試作展なるが故に勇敢な試みもあつて然るべきを其れも見出せなかつた。水準はさすがに高いとは云へ、餘り振はない展観であつた。尤も、日本美術院の傳統に對して可たりに革命的な道を探つて居る片岡球子の「炬燵」に賞を與へたのは、試作展なるが故の勇敢なる試みであつたかも知れない。

之は神經質な、對象の性格の奥迄突き込まうとする、鋭い寫實主義の所産である。好く描いて居るが歪形の一步手前迄至つて居

る、此の神経質な寫實を日本畫に於て突き進めて行く事の可否は、日本畫の本質から云つて問題である。春の試作展は後進拔擢を旨とすると共に同人は振つて新しい試みを示す所でありたいのに、安田靉彦、富田溪仙の出品が無かつたのは寂しく、速水御舟の此の時既に重病にして出品不可能なのは残念であつた。横山大觀は帝室技藝員拜命の記念として帝室博物館に納める作として彼の思ひ出の地、五浦の月を描いた。かうした題材から云つても大いに力を入れて描いたものと思はれるが、大觀としては特に成功したものとは云ひ難い。成功を示したものは小林古徑の「梅」であつた、白砂の上に立つた満開の紅梅は寫實に徹して故意に裝飾化を行はず、然も裝飾的な美しさを持つて居た。宋畫の自然觀照に琳派の日本的裝飾手法を採り入れて現代化したとも云へる作品である。同じく宋の花鳥畫の狙ひ所を現代的に生かして成功して居たものに中村岳陵の「竹聲」がある。外に同人の作では前田青邨の「毛抜形」、小川芋錢の「長沙散步」が優れて居た。前者はたらし込みを以つて黒き服を表現し、其れに華麗な裝飾を有つ毛抜形の大刀を配して、洗練された感覺と技巧とを見せて居る。後者は自然と共に生活して居る此の作家の心境を好く表はして興味の深いものがあつた。

同人以外の出品からは三百四十點の中約百點を採つてゐるが、前述の「炬燵」の外特筆すべきものを見なかつた。唯、入賞の安孫子荻聲の「菜園の秋」は見事な出来であり、同じく入賞の飯島柳三郎の「鯰」はしつかりした技巧で寫實的に面白く描いて居た。

彫刻では日本美術院は周知の如く可なり歐風の分子が強い。純洋風のものでは武井直也の「プロフェル」が目立つた。様式化された髪表現に髪的美と云ふものが忘れられて了つて居るのは惜しい。山本豊市の「裸婦立像」はマイヨールの量感を日本の女に日本人的に移して難は無いが、日本人には入り難いマイヨールの道を探りながら而も日本人獨特のものを作るには將來餘程の覺悟と努力を必要

とするであらう。歐風の彫塑の道を日本人らしく生かして居て、親しめるのは何時もながら藤井浩祐の作品である。中村直人は中々達者な技巧の持主であり荒けづりの表現法も氣が利いては居るが、内容がそれにそぐはぬ所がある、日本の木彫では平櫛田中が其の完成せる技術を「故雅邦先生夫人壽像」に示した。

受賞者

繪畫 安孫子荻聲 片岡球子 飯島柳三郎

彫刻 矢崎虎雄

出品目録(陳列番號順)

繪畫

山村秋暉	平野 芳泉	入日	小山 大月
春	菊池 公明	水郷	山内 大鳳
鶏頭	松本 英峰	冬日	吉田 澄舟
憩ふ農女	渡邊 春啓	湖南住宅	小嶋 彬
滋賀の夏	南摩 尙宏	市場	鷹尾 兵衛
夕影	神原登志夫	梅	橋本 秀子
吉見所見	加藤 勝重	おけいこ	桐谷 白鳳
鶏舎	岡田 雄饒	二月盡	久保 清子
赤秋	若杉シヅカ	夏草の花	岡田 重雄
菖蒲	佐々木京林	春曉	越谷長太郎
水ぬるむ頃	大野 緑川	朝顔	高橋 周桑
山に萌ゆる	我妻 碧宇	長沙散步	奥村 土牛
椿	船田 柑子	早春	小川 芋錢
鶯の圖	半田 泰至	水温む	小川 清
早春	石丸 太象	早春	吉岡 清
林徑	關 暁明	鯛の津	川合 白流
かも	松永 成路	小春日	水野 正春
		鯰	小島 一谿
		早春のかなめ	竹越眞三夫
			飯島柳三郎
			奥山 明甫

雞舍	田中 水蛙	日午	堅山 南風	棒	溝上 遊龜	Y氏像	關谷 充
雪景習作	大河内山喬	女人像	森山 麥笑	晚秋	館岡 栗山	試作	同
姉	三上嘉久子	霜	淺川 秀夫	霜晨	茨木 杉風	猫	大野 隆一
歳旦風景	村瀬 麥友	初冬	横山 善信	晚秋の樺太	鬼原 素俊	ベルシヤ猫	同
秋香榮魚	中川 博汀	春淺	石本光太郎	水蜜桃	黒田 典男	坐像習作	喜多武四郎
小鶯喚春	酒井 とし	芋苗	野口トシ子	雞	笠城 龍枝	裸婦腰掛像	宮本 重良
水邊靜日	宮坂 一義	淺春	鹽原 光且	日和	岡田 重雄	胸像(ろ)	村田徳次郎
眞雁	柿沼 宗居	檣茶屋	淺井 幽美	曇り日	杉山 哲朗	胸像(い)	同
春興圖	酒井 三良	蹴球場	梅原 藤坡	山中秋晚	小川 千麴	裸婦	藤井 浩祐
秋趣貴船口	松本 竹根	斷腸花	田代 放生	水仙	三澤 昭波	裸婦立像	山本 豊市
竹聲	中村 岳陵	小鳥	四夷 星乃	閑庭抄	渡邊得治郎	道化役者	中村 直人
山僧	山村 耕花	野榮籠	桑原 千里	納屋	新井 勝利	裸婦	同
菜園の秋	安孫子萩聲	冬枯れの山麓	新井 白鳳	釋	糸井 新樹	鼠	吉田 瀧藏
歳首三皓	石山 太柏	霜	木村 武夫	小驛秋景	戸田 英次	火消	高山 東一
五浦の月	横山 大觀	衣笠秋景	梶山 光樹	亥之子圖	恩田 耕作	犬	林 是
日永	中島 菜刀	犬	橋本 永邦	叢消	荒井 里曉	鳥名子舞試作	板倉 白龍
炬燵	片岡 球子	毛拔形	前田 青邨	中書島風景	野倉 樸儼	SHの顔	杵谷 精一
早春	大智 勝觀	春蘭二題	眞道 黎明	泰山木	杉浦 千秋	牛	中 平四郎
茄子	大久保青華	(其一) 迎風	同	爭ふ雞	松浦 智夫	女頭像	森 豊一
追ひやれ	増田 無相	(其二) 帶雨	大西 郷島	秋果	松山 廣幸	小諸の母	矢崎 虎夫
靜物	山田 廣吉	手賀沼	中村 六郎	老人像	森 博	仔猪	同
小正月のころ	小柳 泰然	道標山早春	冬木 大丙	停車場	西嶋 廣造	墓	宮本理三郎
あきざくら	山内 佑晃	下崩	小林 古徑	凡彩	丸 儀太郎	化粧	松原 松造
軍雞	上田 三郎	梅	石渡 龍豆	春の日	瀬戸阿以二	鏡を持つ婦	白井 保春
踏切	岡田豊五郎	畫室の一隅	鈴木 鳥心	大日堂天井繪	木村 武山	冬の日	櫻井 祐一
少女	村田 泥牛	秋池	中野 忠儀	彫 塑	相馬 安雄	習作	小林 章
蟹	保尊 良朔	春光	久保田 隆	若犬	松村秀太郎	聲好	千葉 正三
峠の櫻	田中案山子	葉椿	筆谷 等觀	少女裸像	同	S翁の首	新海 竹藏
龍	山口 靜恵	冬の湖	長谷川一男	T氏像	居崎 青峰	馬	小倉 清吉
凍泊	橋本 靜水	明石町所見	山口 肇	鶯	同	玉田貞也先生像	武末 與吉
不動	荒井 寛方	生果	山口 肇	鶉	同	ペンキヤ	小林 貞吾

現代美術

沼口氏像	河野 正造	ササムラ	大島住之助
五位驚	工藤 順三	習作	佐土 哲二
故雅邦先生夫人壽像	平櫛 田中	鳥氏	辻 汎吉
間鴨	岩木慶次郎	N氏	同
ドクケシ賣	森 英之進	ウトオ	工藤 繁造
胸像習作	關 長造	裸婦習作	木村 章平
少女坐像	同	辻氏の像	長濱 虎雄
老狗	大内 青圃	ヨシ子君像	片野不空藏
花精	同	少女	大和 作内
水精	同	牡牛	白取清一郎
シエバード	同	プロフヤル	武井 直也

東京府美術館十周年記念現代綜合美術展覽會

於東京府美術館
三月三十一日—四月廿一日

東京府美術館が佐藤慶太郎氏の寄附に依つて上野公園に建設せられ、大正十五年三月に開館されて以來、過去十年間に同館に於て開催された展覽會は其の數三百三十、陳列された作品は約二十萬點に上ると云ふ。其の中より各部門、各會派等を通じて代表的作品を選出し、同美術館開館十周年記念として回顧的に再び是等を陳列し、一堂に展観する催として行はれたものである。従つて往年朝日新聞社に依つて企てられた、明治大正名作展覽會程の歴史的興味は牽かれぬにせよ、最近の我が美術界の收穫を、粒選りにして綜合的に眺め得ると云ふ點で、甚だ意義に富み興味深き計畫と云ふべきであつた。

陳列品に就ては、各美術團體等より大體一定の基準に依つて主要作家を選定し、從來出品された作品の中から各人一點づゝを自選せ

しめ、總計六百三十四點を蒐めたものである。其の内譯は、日本畫百七十九點、洋畫二百六十二點、彫刻百十二點、工藝八十一點であつた。而して作家の選定は此の會の爲に組織された委員會が之に當つたのであつた。

現代の美術界は、日本畫と工藝の一部分を除けば大體中央集權的であり、東京府美術館は其の代表的舞臺であるから、斯る選擇によつて成立つた此の展覽會は、當然最近十年間に於ける日本美術の主潮を最も明らかに示すものと考へられるのである。之は或る程度果されたとは云へるが、尙十分であつたとは見られなかつた。それには種々の理由もあらう。例へば、作家自身の選定が必しも其の人の代表的作品とは云へぬものがあつたし、又作家としては舊作よりも成るべく近年の物を採りたかつたことも自然で、數の統計からもそれが示されてゐる。或は又所藏者の都合で、望む物を蒐め得ぬ事情もあつたことは已むを得ないであらう。

出品目錄 (陳列番號順)

第一部 日本畫

命題	年次	出品會名	作者	所藏者
秋の大原	大十五	帝展	大河内 夜江	東京 平尾 贊平
御裳着	同	同	荻生 天泉	同 作 者
淀の水車	同	同	宇田 荻郎	同 男大倉 喜七郎
娘	同	奏議展	上村 松園	京都 作 者
大納言公任	同	帝展	故小堀 鞆晋	東京 小堀 稜威雄
黄昏	同	同	森 月城	兵庫 志垣 榮助
木蘭	同	同	三木 翠山	東京 男入倉 喜七郎
野干	同	同	森村 宜稻	同 作 者
奥州街道	昭二	院展	近藤 浩一路	京都 作 者
峠の冬	同	帝展	川合 玉堂	東京 外務 省
雨後	同	同	森 守明	東京 平尾 贊平

大原の秋	淨化	芒池春宵	鳳池春宵	鶴市	花市	峠市	孔雀囀	高秋霽月	南支風色	離騷	野趣二題	瀑布	新冬	盤谷悠々圖	稚子文殊	山月	野守の宿	百萬	鹽田	南苑	春律	南波照間	鳴戸海峽	宵宮の雨	雪路	半仙戯	散る花	猿花	黒駒	
昭二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	昭二	同	同	同	昭三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
帝展	同	院展	帝展	同	同	同	日華展	奏養展	帝展	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	院展	帝展	同	同	同	同	院展	
山元春汀	町田曲江	小山大月	故田村彩天	山口玲熙	加藤英舟	尾竹竹坡	渡邊晨畝	長野草風	竹内栖鳳	故吉川靈華	故石井林響	故山田敬中	故平福百穂	故湯田玉水	宮田司山	佐々木 尙文	佐竹永陵	故薦谷龍岬	堀井香坡	平井樸仙	大村廣陽	石崎光瑤	菊池契月	前田荻邨	北野恆富	幸松春浦	矢澤弦月	八田高容	山口華楊	荒井寛方
埼玉 松下	千葉 作	東京 作	同 男益田太郎	京都 作	愛知 福田重助	東京 町野武馬	同 作	同 笹沼源之助	同 俵前田利爲	同 鈴木新吉	同 石井きん	皇太后宮職	東京 西澤喜太郎	福島 今泉得三	東京 清水釘吉	同 細川力藏	同 作	山形 長谷部善八	京都 清涼寺	同 作	兵庫 岩田仙宗	京都 岡崎美術館	同 作	兵庫 藤井 豐之助	大阪 白川朋吉	同 磯崎精一	東京 桑澤松吉	京都 清水寺成就院	神奈川 坂本嘉治馬	東京 福原平一
はまなすの濱	翠苔綠芝	實の秋	山月帶雨	漢織吳織	秋	山村佳節	春興圖	冬日帖	蘇樓波ハ	遊魚ノ圖	春曇り	梅雨晴	長恨歌	龍坂路	深雪	豐秋禽喜	群鷄	牡丹	牟禮の義經	溫泉場のほとり	風神雷神	信長が訪れた家	冬田	みやま	ウンスン骨牌	秋草	奈良の鹿	朝夕露	利休堂	
昭三	同	同	同	同	同	同	同	昭四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	昭五	同	同	同	同	同	
帝展	院展	帝展	同	同	同	同	同	國展	帝展	院展	帝展	院展	帝展	同	同	同	同	同	同	同	同	院展	帝展	同	同	同	同	同	同	同
高木 保之助	故速水御舟	山本紅雲	飛田周山	佐藤光華	畠山錦成	登内微笑	鴨下晁湖	小野竹喬	大木豐平	橋本靜水	故山元春舉	大智勝觀	橋本關雪	德田麟齋	阿部春峰	竹原嘲風	菊澤武江	松本姿水	木村斯光	川北靄峰	安田靄彦	磯田長秋	伊東紅雲	川船水棹	山村耕花	高橋周桑	吉岡堅二	菊池華秋	不動立山	田畑秋濤
東京 立川龍	同 速水彌生	滋賀 中江富十郎	東京 作	京都 井上勝之助	東京 平尾贊平	兵庫 寺島外次郎	東京 中村辰三郎	京都 上河源石衛門	東京 鈴木忠治	同 男大倉喜七郎	京都 山元清秀	東京 男大倉喜七郎	京都 作	兵庫 森喜作	同 井原外助	東京 蓮江光三郎	栃木 稻葉治三郎	京都 作	同 作	東京 男大倉喜七郎	同 高藥誠之助	同 作	同 作	同 作	同 作	同 吉田幸三郎	同 作	同 清水榮藏	同 宗室	

翠錦紅珠	長江大觀	濯足萬里流	平治の重盛	嶺頭白雲	三遊亭圓朝像	太古春	木曾川	葵上	雪晴れ	山峽春	法華寺曼陀羅	軍鶏	海濱群衡	南山秋思	春雨	鱗閃々	凱陣	牡鹿鳴く	明粧	鳴鶏	淨長	松尾祭	濤聲	小由留木城攻略	素踊	竹の子	午睡	巴	畫三昧	
昭四	同	同	同	同	昭五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	昭六	同	同	同	同	同	同	
池上秀畝	故山内多門	小室翠雲	松岡映丘	結城素明	横山大觀	鐫木清方	小川芋錢	赤松雲嶺	織田觀潮	永田春水	古屋正壽	太田天洋	奥村土牛	勝田蕉琴	岡田晴峰	板倉星光	堅山南風	小早川秋聲	中村丘陵	土田麥僊	故小茂田青樹	伊東深水	山下竹齋	小泉勝爾	小山榮達	山川秀峰	故下村觀山	柳原岩山	尾竹國觀	木島櫻谷
東京細川力藏	山形秋野光廣	福井永平寺	東京男大倉喜七郎	宮内省	東京玉置金八	同	福島池田龍一	大阪作	神奈川堀民三	東京細川力藏	神奈川野口貞一	東京作	静岡三枝基	久邇宮	群馬中村義一	京都作	新潟武彌三吉	京都作	静岡望月大太郎	東京侯細川護立	同	同	同	東京作	神奈川大雄山最乗寺	東京作	神奈川村仙	京都荒瀬藤吉	京都作	京都作
溪吟	默雷禪師像	征旅(ジャンヌ・ダルク)	飛泉涼々	禁教切支丹	松石不老圖	野末の秋	拾卵圖	雪	城ヶ島の夕	熱風爽風	髮冠花	雞冠堂	大雅遊	群	露	春光	連山復秋色	明窓	化粧	黃金の茶室	雨情	新篁	黎明	荒涼	汀に群るゝ	寂光	漣	新竹	女	蓮
昭六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
河野秋邨	故都路華香	勝田哲	兒玉希望	野田九浦	石川寒巖	吉田秋光	郷倉千靱	上村松篁	太田秋民	坂口一草	察本一洋	東原方僊	矢野橋村	小川翠村	金島桂華	山ノ内信一	横尾翠田	筆谷等觀	水越松南	小村大雲	武田鼓葉	小林柯白	木村武山	川崎小虎	五島耕畝	荒木十畝	福田平八郎	佐野五風	三谷十糸子	徳岡神泉
京都東本願寺	建仁寺靈洞院	東京佐上信一	同	同	同	同	同	京都作	東京清水英嗣	同	京都作	大阪作	東京三枝舉一郎	京都作	大阪上田仙次郎	京都田茂井重兵衛	新潟山田辰治	東京三淵忠彦	兵庫九鬼隆久	島根高小町尋	京都中村龜次郎	埼玉長島作左衛門	文部省	東京作	東京美術學校	福岡内本浩亮	兵庫寺田甚吉	京都作	同	

[illegible]

マルセイユの魚賣り	昭二	帝展	大久保作次郎	東京	作	者	南佛蘭西の古寺	昭三	春陽	藤堂 李三郎	大阪	作	者
林中春日	同	二科	小島 善太郎	大阪	野村 徳七	者	雨 晴 後	同	帝展	故山本 森之助	長崎	山本 保男	者
子 盧 賦	同	帝展	中村 不折	東京	作	者	秋 物	同	同	高橋 虎之助	東京	作	者
向日葵風景	同	同	牧野 虎雄	同	作	者	人 物	同	水彩展	矢崎 千代二	同	作	者
静浦風景	同	國展	野島 照正	同	作	者	花 物	同	春陽	久泉 共三	富山	木津 太郎平	者
樹陰讀書	同	獨立	鈴木 亜夫	同	作	者	裸 婦	同	春陽	片岡 銀藏	東京	波多野 春房	者
溪流に秋來る	大十五	帝展	大野 隆徳	同	東洋高等女學校	者	羅 摩 物 語	同	春陽	小杉 放庵	兵庫	山口吉郎兵衛	者
背面裸婦	昭二	同	高村 眞夫	同	作	者	婦 人 像	同	帝展	田中 繁吉	東京	廣幡 忠隆	者
モレーの初夏	同	光風	岡野 榮	同	三輪 龍平	揚 者	水 無 風 川	同	春陽	鳥海 青兒	同	作	者
雪の山	同	同	武内 鶴之助	同	武内 金平	龍 平	巴里風景	同	國展	山脇 信徳	同	藤井 暢三	者
パンの會	同	春陽	木村 莊八	同	高橋 龍	龍 平	雪の追憶	同	帝展	中澤 弘光	同	作	者
静物	昭三	槐樹	高間 惣七	埼玉	作	者	窓 ぎ わ	同	同	有馬 さとえ	同	男三井 高精	者
晩 夏	同	帝展	坪井 一男	京都	作	者	み も ざ	昭四	同	香田 勝太	同	作	者
春	同	同	辻 永	東京	岡崎 忠雄	者	古 雛	同	二科	椎塚 猪知雄	同	作	者
陽を浴びた女の像	昭二	春陽	林 俊衛	兵庫	作	者	金魚を見る子供	同	春陽	小林 徳三郎	同	鹿島 龍藏	者
田 植	同	帝展	太田 喜三郎	京都	作	者	鏡 沼	同	帝展	河合 新藏	京都	六鹿 清治	二
マダムシヤル	昭三	構造	佐藤 武造	東京	三井 高精	館 者	公園の冬	同	白日	相馬 其一	東京	相馬 閏二	者
F 君 像	同	帝展	江藤 純平	同	帝室博物館	者	清 涼	同	水彩展	榎 藤 種男	同	作	者
夜の床	同	二科	野間 仁根	同	作	者	静物ばらと柿の實	同	帝展	眞野 紀太郎	同	作	者
シニミウズの女	昭二	春陽	一木 稔	同	作	者	自 畫 像	同	二科	藤田 嗣治	同	作	者
南歐のある日	昭三	帝展	小寺 健吉	同	作	者	洞 像	同	帝展	石井 柏亨	同	作	者
休 み 日	同	同	河井 清一	同	作	者	伊豆の海	同	春陽	奥瀬 英三	埼玉	金子 孚水	者
ふくちゃん	同	同	吉村 芳松	同	作	者	帝大構内	同	二科	横堀 角次郎	東京	作	者
孔雀禮讃	同	二科	鈴木 信太郎	同	慶應義塾大學	者	女 の 顔	同	奉賛展	熊谷 守一	同	作	者
白耳義サボ作る家	同	帝展	小林 眞二	同	病 院 義塾大學	者	老 人	同	二科	高昌 達四郎	同	作	者
室 内	同	同	吉田 苞	岡山	作	者	夏の山門	同	槐樹	金澤 重治	神奈川	野口 彌三	者
曲 馬	同	國展	川西 英	兵庫	作	者	父母の肖像	同	二科	野口 彌太郎	東京	古賀 好江	者
S 氏 像	同	二科	中川 紀元	東京	作	者	無 題	同	同	故古賀 春江	同	作	者
赤い帽子	同	帝展	濱地 清松	同	田所 美治	者	池袋風景	同	春陽	栗田 修二	同	作	者
菊 景	同	同	金山 平三	同	日置 龜雄	者	モデル業者	同	光風	川合 修吉	同	作	者
風 景	同	春陽	故萬 鐵五郎	神奈川	萬 博輔	者			帝展	五味 清吉	同	作	者

薔薇吹くカブリ島	くもる途	奥の院	鶴渡る	狂女浴泉	坐裸婦	男の顔	コンセルジュ	舞妓	静物を配せる裸婦	三人の女	裸婦	母子	草上の裸婦	座像	街の群衆	晚餐の用意	斜陽	輕羅	肖像	顔	支那寢臺の裸女	早春	沼べり	熊谷守一肖像	鮮人街	新春寫之	婦人像	座像	蘇州の春	溪流三女人之圖
昭四	昭四	同	同	同	同	同	同	同	同	昭五	同	同	同	同	昭四	昭四	昭四	昭四	昭五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
春陽	春陽	二科	帝展	春陽	協會展	國展	帝展	春陽	帝展	獨立	帝展	同	同	同	二科	春臺	帝展	同	同	同	同	二科	帝展	二科	帝展	同	二科	同	同	構造
小林和作	井垣嘉平	故湯淺一郎	南薫造	石井鶴三	故前田寛治	佐藤豐吾	北蓮藏	田中善之助	富田温一郎	田中佐一郎	服部亮英	故松下春雄	鈴木千久馬	猪熊弦一郎	向井潤吉	中村研一	清水良雄	小林萬吾	故片多徳郎	中野和高	故小出檜重	和田英作	池邊貞喜	有島生馬	赤松麟作	鈴木誠	安井曾太郎	三田康	石川寅治	
東京	東京	同	同	同	同	東京	同	大阪	東京	京都	東京	同	同	兵庫	東京	同	同	同	同	同	大阪	東京	朝鮮	東京	朝鮮	大阪	京都	東京	同	同
木村増太郎	松崎文次	湯淺太助	廣幡忠隆	前田愛子	前田愛子	前田愛子	加藤甚七	加藤甚七	作	作	作	帝室博物館	作	岩田希芳	菅原榮藏	作	作	作	石井孝	辻本幸治	岩出惣兵衛	松原純一	作	京城藥學專門	作	上河源右衛門	波多野春房	作	作	
赤帽平山氏	前庭	帽子	手術室	野道	圓山夜櫻之圖	白布を纏へる	南佛風景	カナベの上の裸體	橋	緑蔭寫生	老婦と孫	リウ・ド・パリのほとり	下田港	貧しきキヤフ	エーの一隅	晩春の槍ヶ嶽	二人	奥入瀬川千島	裸婦リボン	早春の庭	類祭圖	冬のノートルダム寺院	少女立像	聲	ヒマラヤの朝	サン・ルイ病	屋上風景	山上の裸婦	臺灣の田舎	
昭五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	昭六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
國展	帝展	同	同	二科	帝展	國展	協贊展	奉養展	春陽	國際展	春陽	帝展	二科	國展	帝展	春陽	二科	國展	同	帝展	同	同	二科	帝展	同	同	同	同	同	光風
佐藤哲三	佐竹徳次郎	草光信成	牧野司郎	東郷青兒	和田香苗	辻愛造	伊原宇三郎	山下品藏	工藤信太郎	畦地梅太郎	水谷清	多々羅義雄	松本弘二	宮坂勝	佐分眞	足立源一郎	國部邦香	大橋孝吉	梅原龍三郎	満谷國四郎	小絲源太郎	栗原信	山下新太郎	關口隆嗣	吉田博	宮田重雄	前川千帆	熊岡美彦	石川欽一郎	
新潟	東京	同	同	同	同	兵庫	東京	久邇宮	東京	神奈川	東京	同	同	同	同	同	同	同	同	岡山	東京	同	同	同	大阪	東京	同	同	同	同
永田喜一	帝室博物館	大谷登	作	作	作	作	作	宮	波多野春房	作	作	作	信貴英藏	佐藤貞次郎	男三井高精	作	作	西村總太郎	田村謹壽	大原孫三郎	松本丞治	藤田八郎	中村勝五郎	山邊武彦	作	作	作	作	作	

八ヶ岳のお花晶	昭六	水彩展	丸山晚霞	東京作	者	書齋にて	昭七	帝展	梶原貫五	東京作	者
休 日	同	二科	佐野繁次郎	同作	者	道化者(レ・クルン)	同	同	佐藤 敬	大分 佐藤 通	
宵 像	同	獨立	大野五郎	同作	者	放牧三馬	同	二科	坂本繁二郎	福岡 石橋 正次郎	
驚けるダイアナ	同	同	福澤一郎	岡山作	者	樹の音	同	帝展	橋本 はな子	東京三井高精	
七里ヶ岩	同	春陽	土屋義郎	東京作	者	街の音楽	同	二科	田口省吾	同	
別邸の上より	同	國展	故竹添履信	神奈川作	者	男 二人	同	獨立	野村 勇	同	
夏のおとづれ	同	帝展	小柴錦侍	東京作	者	殘 菊	同	二科	故三岸 好太郎	同	
椅子にねた女	同	同	矢島堅士	東京美術學校	者	少 女 像	同	獨立	黒田 重太郎	兵庫 福井芳松	
ば ら	同	春陽	小穴隆一	中戸川吉二	者	ダンス・ス・M嬢	同	帝展	林 武	東京 坂上 眞一郎	
展 望	同	帝展	相田直彦	同作	者	高原の青沼	同	二科	平岡 權八郎	同	
千曲川夕照圖	同	構造	内堀一男	同作	者	畫家の妻	同	太平洋	赤城 泰舒	福岡 富安道義	
森ノ裸婦	同	春陽	若山爲三	奈良作	者	裸 女	同	二科	鹿子木 孟郎	京都 松岡嘉定	
平井村の山	同	二科	小林喜一郎	岡山作	者	川奈富士と道	同	國展	田村 孝之介	兵庫 作	
少女海水浴	同	春陽	大澤 鉦一郎	愛知作	者	ボルゾイ	同	帝展	柏木 俊一	静岡 作	
觀 客 席	同	二科	宮本三郎	東京作	者	グニス、カナルグランド	同	二科	三上 知治	東京 作	
仁和寺の丘	昭六	國展	村上 巖	同作	者	山ふところ	同	春陽	倉田 白羊	長野 作	
軍 雞	昭七	帝展	山下繁雄	大阪作	者	暮れゆく窓より	同	光風	角野 判治郎	兵庫 作	
疾風怒濤	同	二科	津田青楓	東京作	者	香貫風景	同	國展	鈴木 長久	東京 鈴間 かや子	
巴里風景	同	國展	益田義信	同作	者	窓外風景	同	春陽	川端 彌之助	京都 作	
水邊の鹿	同	二科	濱田義光	奈良作	者	バルコン	同	國展	福井市郎	兵庫 作	
文楽人形の樂屋	同	春陽	齋藤 清二郎	大阪作	者	熱國の女	同	太平洋	鶴田 吾郎	東京 相馬愛藏	
龜田・長谷川邸	同	國展	棟方志功	新潟作	者	ピクニック	昭八	國展	河野通勢	同	
ボスケ・デ・コロナード	同	同	川島 理一郎	兵庫作	者	森の橋	同	春陽	國盛義篤	京都 作	
畫 休 み	昭六	帝展	橋本 八百二	東京帝室博物館	者	果物靜物	同	國展	中村 茂好	神奈川 作	
八甲田山	同	同	柚木久太	同作	者	花にコップ	同	春陽	長谷川 潔	東京 鹿島龍藏	
C・M嬢	昭七	二科	伊谷賢藏	京都作	者	干 潮	同	二科	正宗 得三郎	同	
エホバは我牧者なり	同	構造	平井爲成	香川作	者	池 畔	同	春陽	故森田 恒友	同	
テラス	同	國展	久保 守	東京作	者	マルチーグ	同	國展	中村 博	高知 作	
り ん 子	同	帝展	永地秀太	東京作	者	女 窓邊の果物	同	獨立	鈴木 保徳	東京 波多野 春房	
京 子	同	同	北島 淺一	同男三井高精	者	鏡	同	獨立	松 邨 巽	同	
									兒島 善三郎	同	

[illegible]

[illegible]

鸚鵡葡萄金扇小宮	昭七	帝展	海野清	東京	峯島茂兵衛
白檀經筒	同	同	仰木政齋	同	男國伊能
鹿鉦獅脚罏	昭四	同	香取秀眞	同	小西新兵衛
銅香爐	昭三	同	高村豐周	同	作 者
斜交文花筒	昭四	同	三田村自芳	同	高野直治
百合花蒔繪文庫	昭二	同	小川雄平	同	阿久津勉
双鶴伏香爐	昭四	同	桂光春	同	佐藤茂兵衛
新秋黃銅花瓶	同	同	岩田藤七	同	三井高棟
硝子水漕	同	同	松田樞六	同	森川清次郎
秋夜(蒔繪飾宮)	同	同	故迎田秋悦	兵庫	岸本吉左衛門
蒔繪網干棚	同	同	六角紫水	東京	作 者
曉天の獅子吼手箱	昭五	同	四谷正美	同	歌橋憲一
金四分一装香爐	同	同	吉田源十郎	同	中島福子
麥の棚	昭三	同	木村雨山	同	佐藤義亮
染色(一曲屏風)	同	同	廣川松五郎	同	久保宗吉
(草花模様) 掛	昭五	同	伊東信助	同	澤本岩吉
白磁遊環花瓶	昭四	同	稻木春千里	同	大瀧徳三郎
鐵刀木壺	昭五	同	前大峰	石川	廣瀬嘉助
蟹と雜草盆	昭四	同	二橋美衡	東京	作 者
彫金赤銅獅子文丸	昭五	同	山本自爐	新潟	吉田吉左衛門
繪葉模樣花瓶	同	奉賛展	鹿島英二	大阪	中村裕次
大島小島壁掛	昭六	帝展	山形駒太郎	東京	作 者
湍流を溯る(壁掛)	昭八	同	磯崎美亞	同	作 者
ストープ前衛立	昭五	同	故木内半古	同	森岡文三郎
百鬼夜行象嵌硯宮	昭六	同	清水正太郎	同	藤岡淨吉
染付魚文盛花器	同	同	岡部達男	同	作 者
鐵 燭 臺	昭五	同	熊谷重太郎	同	山崎達之輔
メカニカルコンボジション	昭七	同	内藤春治	同	作 者
あかりのある噴水塔	昭三	同	濱田庄司	同	水谷良一
赤繪鉢	昭八	國展	信田洋	神奈川	佐藤美彦
黃銅香爐と漆透彫臺	昭六	帝展			

盛 籃	昭八	帝展	飯塚琅玕齋	東京	佐藤 銀
赤童子彫金手箱	昭六	同	清水龜藏	同	作 者
鑄銅花さし	同	同	豐田勝秋	福岡	石橋正二郎
彫漆花紋硯箱	同	同	佐藤陽雲	東京	長谷川太郎吉
嵌人見透裝飾	同	同	村越道守	同	作 者
サイドボード	同	同	山崎覺太郎	同	作 者
漆器花鳥紋飾宮	昭七	同	竹園自耕	石川	作 者
銀 皿	昭六	同	北原千鹿	東京	作 者
朱 銅 壺	同	同	杉田禾堂	大阪	作 者
鐵線花文文具宮	昭八	同	島野三秋	同	作 者
銀製花盛器	昭七	同	田村泰二	東京	芹川 武
銀黒味矧合花瓶	昭八	同	小野島知文	同	作 者
描染刺繡降誕之圖(衛立)	同	同	皆川月華	京都	作 者
蒔繪屏風	同	同	吉田醇一郎	新潟	中野 欽
海 鉢	同	同	石野龍山	石川	作 者
彫金花瓶	同	同	大須賀喬	東京	原安三郎
立 鶴	昭七	同	故植松包美	同	藤岡玄徳
青磁釉耳付花瓶	同	同	宮川香山	神奈川	作 者
方銅牡丹文花瓶	同	同	北原三佳	東京	馬場 鏌一
松に藤波文庫	同	同	植松彌吉	同	藤岡玄徳
流金文果物盛	同	同	山本安曇	長野	高田重隆
鐵製ファイヤ・スクリン	同	同	海野建夫	東京	濱口吉右衛門
黃瓷忍冬文花瓶	昭八	同	宮永東山	同	遠山芳三
置 物 鹿	同	同	根箭忠緑	同	鈴木六郎
唐華文手宮	同	同	平 館 齋	京都	作 者
染物獅子舞屏風	同	同	木村和一	東京	石坂泰三
紺地蔬果文壁掛	昭七	國展	芹澤銚介	静岡	内田六郎
手織錦屏風水結	昭六	帝展	山鹿清華	京都	作 者
茄子文硝子花瓶	昭八	同	各務鑑三	東京	杉野喜精
靈島香爐	昭七	同	佐々木象堂	同	阿久津 勉
雄鹿文庫	昭八	同	結城哲雄	同	作 者

青銅方盤	昭八	帝展	長野埴志	同	作者
葡萄紋様花瓶	同	同	澤田宗山	同	野依辰治
大阿蘇之圖	同	同	岸本景春	同	東伏見宮
(陶窯)綴織壁掛	同	同	遠藤順治	同	作者
梅花模様花瓶	同	同	伊東陶山	同	木村久壽彌太

商工省第十二回工藝展覧會

於東京府商工獎勵館

四月十六日——同二十五日

帝展第四部の出品には藝術的鑑賞を主とするものが多いのに對し、商工省工藝展はその性質から云つて實用性及商業的價值を主とする品種目を重んじて居り、又重んずべきでもある。とは云ふものの、商工展には藝術的價值が實用的價值の尊重によつて磨かれた作品が多くても構はないと云ふのではない。元來工藝品の實用性は理論的には其の藝術性と同一不可分なものであつて、如何に實用性を強

鑄銅水瀉文水盤 昭八 帝展 香取正彦 東京 小西 新兵衛
甜瓜龍耳花瓶 同 同 楠部彌一 宮内省
黃鈴堯花文壺 同 同 板谷波山 東京美術學校
鎮起黃銅家鴨香爐 昭七 同 石田英一 東京 佐藤 茂兵衛
磁製象嵌花挿 同 同 宮之原謙 同 作者
漁舟工作圖壁掛 昭八 同 櫻井霞洞 東京 籠橋秀次

調しようとも藝術美は達成せらるべきのみならず、反つて益々其の工藝品としての美を發揮するものである。此の自覺を商工省工藝展出品作家が有たない事が商工展を、其れが實用性を重んずるものだけに寂しくして居た。

工藝指導所長國井喜太郎が指摘した如く、此の展覧會に「時代に順應せる新品種の出品が少く」(工藝ニユース第四卷五號)又意匠にのみ凝つて用途を無視したものが可なり多かつた事などは、皆工藝の本質を理解せざる事に起因するもので残念である。

次に工藝ニユースに依つて本年度出品物の概略を示す。

種別	出品人員	出品點數	合格人員	合格點數
圖案	一六	一七一	五〇	一六
金工	二七一	五三三	一四五	一六
陶磁器	一八三	四四九	九〇	二七
染織	九七	二七五	五七	八
漆器	四三三	一、〇七七	二七七	三九
木工	二九	五〇八	一一一	一八
雜工	九六	二五九	四四	六
計	一、四五六	三、六六一	七四	一、二〇九

題別	出品人員	出品點數	合格人員	合格點數
バンド	四	九〇	三	四
髪飾品	二五	四三	二	二
碗及茶碗	三五	四六	六	六
玩具具	五	九五	六	二
金ア具	五	七	五	六
鏡臺	四〇	四四	三	二
計	一、四八	三、五五	一、二九	一、二九
授賞品名	府縣名	出品人		
商工大臣賞並二等賞(賞金五十圓)	東京	各務 鎮三	三等賞(圖案賞金百圓)	御菓子箱包裝紙圖案 同 玉生 寛治
二等賞(圖案賞金百五十圓)	東京	各務 鎮三	三等賞	小箱包裝圖案 同 西野 惠一
室內裝飾圖案	東京	岩 瀬 要三	二等賞(賞金五十圓宛)	鑄銅花瓶 同 山本 自 爐
花文チラシ手箱	秋田	加藤 俊治	魚文様風呂先屏風	石川 増田 辰雄
木象嵌祖國衝立	富山	中島 奎堂	寶飾宮	長野 宮坂 房衛
天目釉花瓶	愛知	加藤 青山	錫象嵌玉蟲文化瓶	東京 會田 富康
青銅花瓶	同	丸谷 端堂		

ある。

又課題出品の狀況を示すと次表の如くで

草花模様ストープ前立	和歌山	和歌山縣立工業試験場	流線切り果物セット
彫漆花筒	福井	眞保由齋	八方ズンドー花器
木目銅飾壺	秋田	近間永助	圓筒狀花瓶
青銅花生	東京	長野堉志	銀線應用小簾筒
淵龜甲盛鉢	福島	鈴木善五郎	華文飾手許簾筒
應接用セット	東京	鈴木善五郎	幾何文盤
衣服簾筒	長野	太田芳雄	渦巻形電氣スタンド
山梔文金具	東京	鹽原喜好	青銅花器
彫文袖花瓶	京都	淺見隆三	朱盛器
細線文耳付花瓶	埼玉	木村庄太郎	線模様菓子鉢
釉象嵌花瓶	東京	宮之原謙	盆
二枚折屏風	京都	大喜澤田商店	布地利用洋服簾筒
久留米絹綴通	福岡	國武特許合名會社	ヒシ目模様簾筒
書物兼和服簾筒	長野	西澤清作	花蝶文鐵瓶
花鳥文金具	東京	土用美雄	黒に銀丸型盛鉢
龜甲葉巻入	長崎	長崎商工獎勵館	黒味銅透彫文庫
草花模様盆	香川	谷澤不二松	ざくろ模様棚
葉文鐵鉢型菓子鉢	石川	平野直行	和服簾筒
櫻金具	東京	山下春興	魚バシヨウカジキ小箱
硝子吹込花瓶(葡萄)	同	宮代健三	彩漆研出鉢
糸瓜飾壺	愛知	加藤正實	六角形杖差
果物盛	宮城	熊谷榮吉	烏瓜の圖花瓶

國畫會第十回展覽會

於東京府美術館
四月二十八日—五月十七日

生活の第一義を美に見出して、高踏的に、各個人の生活の藝術化を目指して居る、十九世紀後半より二十世紀初頭にかゝり(日本に於ては大正年間)盛んであつた、人格主義的藝術至上主義とも云ふ

東京	河上傳次郎	魚文水盤	東京	府川一信
同	山口順三	硝子花瓶	同	岡本一太郎
同	岸野春一	課題賞(賞金五十圓宛)		
長野	井田清吉	レース皮と絹ハンドバック	同	川見スマシ
富山	新堀定郎	玉乗り木製引廻し玩具(大)	同	川見スマシ
同	豐國工藝會	丸鏡金枠型梅材鏡臺	神奈川	縣立工業試験場
京都	京都市工業研究所	襷(圖案賞金五十圓宛)	東京	鈴木松春
鳥取	齋江榮	毛皮店ポスター圖案	東京	武市政輝
岡山	難波仁次郎	客間室内構成圖案	同	渡部安吉
鳥取	共榮商會	馬の玩具展覽會ポスター圖案	香川	水野光雄
東京	中川哲哉	鏡臺圖案	東京	赤尾吉利
長野	萩久保忠一	應接室家具圖案	新潟	佐藤達雄
同	桑原主計	防火展ポスター圖案	東京	山野内孝夫
東京	藤ヶ谷覺之丞	農産獎勵ポスター圖案	大阪	上田健一
鳥取	木村泰之佑	扇嵌込用裝飾圖案	同	荒川互弘
東京	高橋千代三郎	朝霞の圖	同	荒川互弘
新潟	石井潔	婦人用海水著圖案	同	福田弘
埼玉	川越工業試験場	ポスター圖案	東京	伊藤祐義
秋田	八柳敬治	襷	東京	伊藤祐義
東京	山永光甫	青海波文花瓶	新潟	土屋宗益
滋賀	井口俊夫	外百六十五名		
京都	岡本爲治			

べき傾向の、最も純粹に表はれて居る團體が國畫會である。其れは美術上の主義による集まりと云ふよりは、生活態度による集まりの如くである。概して此の會の藝術は深き自然觀照を持長とするが、各々一點のみを掘り下げる爲大きさに缺ける憾みがあり、社會的には退嬰的で、悪くすると單なる趣味に墮する傾向を有つて居る。さうした藝術に對する態度による集まりなるが故に藝術的には可なりな伸縮性をもつて居て、昭和三年の創立以來既に七年を経過するにも拘らず藝術的には固まつて了はないで、新人を會員や會友に加へ

る事さへも出来たのである、此の展覽會に所謂梅原型及川島型の出品の多いのは、會自身の罪ではなく、自覺無き出品者の罪である。

斯うした會の傾向は日本人として必然日本往時の唯美主義と結び付くが故に、日本趣味が濃厚となる一方、十九世紀後半より大戦迄の個人主義文化華かなりし頃の西歐の藝術とも結び付いて、後期印象派及びフォーヴィズムに最も大いなる影響を受けて居る。是等東西二つの趣味は殆ど凡ての會員が、何れかの多少の差はあれ兼ね備へて居るが、前者の代表的なものに河野通勢、椿貞雄あり、後者に梅原龍三郎、川島理一郎がある。

梅原龍三郎は櫻島を時間による陽光の變化に従つて描き分けた三點を出品して會場を壓した。とは云へ、其れは作者獨特の盛り上つた量感が會場を壓したので、其處に表はれた自然觀照の深さと大いさが會場を壓したと云ふわけではない。併し、一見無難作に塗られながら、量と奥行きを表現するのみならず對照の美をにじみ込ましたやうな其の深みのある色彩は彼獨特のもので、是等の作品が此の會場に於て一頭地を抜いて居た事は争はれぬ。

川島理一郎の二點「花」「森」共に味の深い作品ではあつたが、此の作家の最上作の部には入れない。

椿貞雄はいつもの如く、北歐ルネッサンスの藝術の日本趣味化である手法と態度を以つて夏蜜柑、少女像を描いて出品した。此の人なりに出来上つた藝術であつた。河野通勢の日本趣味は既にして久しいが、過去の日本にこだわり過ぎて居て、今年の出品畫「二人花魁」なども外國人が描く様な日本的題材である。

武者小路實篤は五點も出品して居たが、技術の拙さにも拘らず、その人格が表はれて内容的には中々に見應へのある作品であつた。山下品藏は達者ではあるが畫面を一貫する統制力に缺けて居るのが筆使ひが荒いだけに目立つた。筆使ひの荒いものでは彼より遙かに激しい獨のコーリントの繪を價值あらしむるものは其の激情にも拘らず統一ある精神力である。

外に會員の中では辻愛藏がしつかりした腕を見せて居た。會友の中では、佐藤哲三がドミエーに強く影響を受け、他面カリエールからも影響を受けながら、人の内面的なものゝ直截な近代的表現を試みて居たが、未だ成功せず單なる試みに止つて居た。赤と黒の極端な對比も効果はあるがもう一工夫を要しよう。洋畫ではないが寫實的な刺繍を試みた仰木ゲルトルドの、「春の風景」は面白かつた。

彫刻では會員高田博厚がロダン風な達者な作品十三點を見せたがモデリングが表面に止つて居て心の命するまゝに作つたと云ふ感じ魂のありのまゝの表現と云ふ感じが無く、精神的内容を銜ふやうな何か無理に頭で作り上た様な所があつて人の心を打つ力に乏しい。此の會の彫刻部の指導的立場にある清水多嘉示の「伊能忠敬先生像」はおとなしい無難の作品であつた。

冒頭に述べた様な會員の生活態度は必然工藝に大きな價值を置く事となるので、工藝部は此の會の非常に重要な一部を形作つて居る。其處には深い觀照の成果なる富本憲吉の作品と並んで、愛すべき味を有つとは云へ、下手物趣味にも近い農民藝術的織物などが陳列されて居た。其れは人格主義的藝術至上主義とも云ふべき此の會の特長でもあり、又趣味に墮し易い短所を表はしたものである。一體此の會の工藝出品には高踏的な純藝術作品以外に單に「味」を喜ぶものが可なり多く、實用的であると同時に優れた造形的意匠を有つ工藝品の比較的少なかつたのは會として考ふべき事であらう。

受賞者及新會友

國畫獎勵賞 澁川駿二、藤田太郎、眞垣武勝、(以上繪畫)、徳

力牧之助、杉本幸一郎(以上彫刻)、仰木ゲルト

ルド(工藝)

新會友推薦

山田正、山村誠、大谷房吉、村上嚴(以上繪畫)。

棟方志功(版畫)

船木道忠、ビ・ハリハラン(以上工藝)

出品目録(陳列番號順)

植物園	旭 五良	早春	池邊 貞喜	オリヅ園	窪田 榮	夏の果物	眞垣 武勝
休息	安部 幸毅	讀書	石崎 文子	萬里の長城	吉見 庄助	井ノ頭辨天	茂木 一郎
ゴルフリンク	安藤 邦衛	風景	同	靜物	宮島 武男	漁港	水谷 大輔
鮮果	福井 市郎	春	石井 照	入村	宮本敬之助	龍宮淵秋景	水上 民平
赤・白・黒	同	ほほづき	同	牡丹	宮田 重雄	崖下の村	同
牡丹	同	柘榴と無花果	生田 正雄	城	同	柳町	同
魚籃	同	春日	同	河港	宮坂 勝	新聞社のある風景	元田 龍起
籠中靜物	福田 貂太郎	山	井上 重生	練光亭	同	街角	同
街の上水	同	松野村	川島理一郎	練光亭と大同門	武者小路實篤	井屋店頭	増田 匡彦
風景	同	花	川上 幸吉	女の肖像	同	芋一鉢	同
春庭	藤田 太郎	森	河原 勉一	風景	同	裸婦と花	村上 英明
楊梅林	同	伊豆の漁港	同	旅屋にて	同	家族	同
高知公園	同	秋果	同	裸婦半身	同	兒想ふ	同
金魚と果物	同	南瓜	柏木 俊一	Y氏肖像	同	林間	同
いちぢく	同	高根山	同	小手鞠草	益田 義信	休息	同
風景	二又川春子	砂丘	同	裸婦立像	同	春	難波田龍起
波勝岬	平塚 運一	てんぐさ	同	讀書の女	同	冥想	同
下田城山の展望	同	伊豆長岡	同	白菊懸崖	同	屏風	西山 閑二
安良里	同	富士	同	龍湖瀨小景	松永 謙	池畔赤屋	永原 織治
安良里へゆく道	同	小淵澤	同	ガラス器と無花果	松田 侯三	秋	同
竹林	同	南豆白濱	同	人形	村上たね子	池畔の初夏	同
春を迎へて	廣野 宏	二人花魁	河野 通勢	靜物(一)	村山 政司	道化面の在る靜物	梨本松太郎
笹果物	同	風景	同	靜物(二)	同	樹木	中村 茂好
樹間	弘田 國浩	雪國の子達	久保 守	晩秋	同	友人森田氏	同
四谷見付	原 信重	山櫻の頃	兄玉 勝次	甲斐駒ヶ岳の夕景	同	小兒	同
寒月	同	野榮靜物	小松 靈治	早春の富士	松本 保一	モデル	中村 博
景山の獅子	長谷川武雄	雪庭	香月 泰男	割木のある道	村上 巖	伊豆山	同
女	池邊 貞喜	新田	黒川 健夫	丘より	同	風景	同
公園	同	冬の葡萄棚	黒田 繁成	釋氏像	同	鶴と唐芥子	同
		道後公園	同	代々木風景	前田 政雄	江ノ浦	同
		花	黒澤 久乃	春の窓	眞垣 武勝	トルゲル	同

春ノ風景	仰木ゲルトルード	宗壺と木蓮	坂本 清雄	バラ	土田つぎゑ	巖	山崎 武郎
妹	大淵七三恵	六甲早春	同	秋保風景	土田 文雄	白岩	同
風景	大宮松太郎	津田風景	佐久間淑子	峽流	同	冬の崖	同
札幌風景	大江 正美	松林	佐藤 重義	白い花	同	丘	山田 一郎
春景	同	農村托兒所	佐藤 哲三	紅葉の庭	同	春の丘	山田 正
樹立	大貫 悌二	苦惱	同	猫(素描)	椿 貞雄	かうもり山	同
街道に望む家	同	たき火	同	夏蜜柑圖	同	風景	同
冬の靈山(行合道)	大橋 城	柿	同	少女像	同	冬の山村	同
春の池上	同	汽車	同	麥崎	辻 愛造	土佐の大風	山脇 信徳
魚止の瀧	大橋 孝吉	話する人	同	柳谷	同	土佐風景	同
パルテノン神殿	同	伊豆大川	佐藤 豊吉	曇り日	同	甲斐駒岳秋	山下 品藏
鉅鹿深碗と白樺	同	樹立	島田 直	北嶺晚秋	同	小淵澤	同
十和田山秋色	同	窓邊の靜物	崔 木朗	海邊村落	同	讀書	同
靜浦	同	風景	杉本 英一	雨	同	甲斐駒岳朝	同
山湖	大谷 房吉	若葉の邸	杉本 健吉	花	同	甲斐駒岳春	同
下之條風景	同	棒	杉浦 エコ	龍山	戸田 定	小兒	同
柘榴と無花果	同	窓外	澁川 駿二	風船玉と人物	爲本自治雄	上高地風景	同
江の浦	同	雨	同	風景	堤 正二	足利長林寺	同
瀧	同	薔薇	同	靜物	徳力牧之助	卓上	吉田 雖一
川岸	小栗慶太郎	木ノ間	同	分譲地風景	同	武蔵野風景	同
棒咲く風景	同	人形二態	下澤木鉢郎	梅林	富永 正雄	海近き山	和田 正一
婦人像	同	田園風景	菅藤 霞仙	蓮のある風景	高瀬 捷三	公園	米田歌之助
アネモネ	大槻 茂	神戸風景	同	外房風景	同	工場へ行く道	浅野 竹二
神戸布引の瀧	岡田得之助	家	同	櫻島の赤	田中常太郎	給油所	畦地梅太郎
雲雀ヶ丘の家	同	山門	鈴木 清	櫻島青(一)	梅原龍三郎	橋	同
探秋	同	金魚鉢	同	櫻島青(二)	同	百濟舊都	同
島と海	岡 千里	樹間風景	齋藤 清	花と女	同	新羅舊都	平塚 運一
手風琴をひく	奥村 博史	ガード	鈴木 長久	向山風景	内堀 勉	鷄林	同
朝	清水多嘉示	野の風景	立石 鐵臣	引佐細江	打木 勇治	天城植林	同
人物A	同	夏の大稻埕	同	富嶽	山村 誠	湯ヶ島の富士	同
人物B	同	曲り角の家	同	駿河灣	同		
築港遠望	坂本 清雄	旗後の濱	同				

畫

波勝岬の岩	平塚 運一	養魚場	小川 龍彦	男習作	宮島 久七	少女の首(鑄金)	高田 博厚
長崎風景	同	岩木山	下澤木 鉢郎	男エチュード	新田 實	或る日本人(同)	同
小蕪	同	高館山	同	女の首	同	男の胸像(習作)	谷本 整映
風景	畑野 織蔵	着物	谷口フミエ	高謙堂先生古稀像	笹村 良紀	チカケツの若者	淀井 敏夫
大島風景	稲垣耕四郎	霧島山大浪池	高田 一夫	ともだち	左 忠子	Tの首	山下 品蔵
朝顔	川西 英	浦上天生堂	寺内 長造	伊能忠敬先生像	清水多嘉示	顔	山本 常市
クニヤン	同	海の見ゆる風景	田川 憲一	立像(一)	杉本幸一郎	女 習作(一)	柳原 義達
室内静物	同	秋酣	宇治山哲平	立像(二)	同	女 習作(二)	同
阪神パーク	同	沖津燈籠流し(石版)	ブブノワ	習作	同	男 同(一)	同
室内洋燈	同	沖津地曳綱(同)	同	習作	千村士乃武	青年	山内 壯夫
ボーチ	同	午後の港	渡邊 光三	男の首	徳力牧之助	座像	同
静物A	川上 澄生	彫 刻	同	男の首	武内 収太	トルソー試作	同
静物B	同	横たわる子供	明田川 孝	女の首	同	工 藝	同
鏡捨山寒月	小林 朝治	少女像	同	シュザンヌ・ディ	高田 博厚	綴織(扇面)單帶	青田 五良
静物	岸本 擴	素焼のアトリエ	同	ン像(石膏)	同	平織(黄)シヨール ¹	同
熱海の春	栗山 茂	女の首	本郷 新	シュザンヌ・ディ	同	吉野織(赤)シヨール ²	同
駿府城趾	同	子供の首	同	スパンド・フロライ	同	1ル ²	同
白い家のある風景	松崎 卯一	男A	同	ハンガリアの女	同	銀象眼青漆赤漆塗	青田 七郎
富士川べり	村山 靚光	男B	同	(石膏)	同	帶留	同
大分川	武藤 完一	女の首	本莊 正雄	アラシ・シャルテ	同	銀象眼朱漆塗香盒	同
萬葉譜・矢車花	棟方 志功	押出動物メダリュ	日根野作三	マリイ・クローダチ	同	銀象眼青漆塗バツ	同
萬葉譜・藤の花	同	A かもしか	同	エグ夫人(ロマン	同	クル	同
萬葉譜・杜若花	同	B うし	同	ロラン夫人)像	同	大皿	同
萬葉譜・松・竹・梅	同	C しか	同	マルセル・マルテ	同	角皿	同
小笠原風景	前田 政雄	水浴	岩崎 良平	フーロン夫人像	同	中皿 六枚	同
棒	同	腰かけた女	同	アンナ・ドライエ	同	鉢	同
赤城夜景	同	首A	伊室 正次	トルスタン・レミ	同	大徳利	同
百姓家のおもて	中川雄太郎	首B	同	イ像	同	角徳利	同
晝房小憩	同	H氏の首	池上 璉	若き女優頭部	同	額入タイル	同
ダイナ(浅草の人々)	小野 忠重	老母の胸像	同	S・B・夫人胸像	同	紅茶器 一組	同
郊外秋景	小川 龍彦	子供の首	片山 義郎	(鑄金)	同	香盒	同

現代美術

香盒	バーナード・リーチ	鐵繪茶器(六客)	濱田 庄司	赤漆十字唐草刻帶止	黒田 辰秋	指環 B	奥村 博史
肉池	同	赤繪茶器(五客)	同	同	同	同 C	同
土瓶	同	鐵砂茶番器(六客)	同	同	河合 隆三	同 D	同
陶板	同	柿釉湯呑(一對)	同	黒陶櫃	河井 武一	同 E	同
女帶 草木染鶴山織	出口 澄子	柿釉小皿(六枚)	同	吳洲陶櫃(濃香付)	同	同 F	同
男物袴地 同	同	鐵砂茶碗	同	黒火鉢	同	帶止	同
綴織 ハンドバック	古戸 イセ	同	同	吳洲火鉢	同	プロオチ	同
扁壺	船本 道忠	柿釉茶碗	同	藥味入	河井寛次郎	陶板音楽	同
水注	同	柿釉角香盒	同	銀製指環 A	河野 健美	女片側帶 四本	同
ビール呑(一對)	同	赤繪香盒	同	同 B	同	ハンドバック(二)	同
紅茶碗(六客)	同	同	同	同 C	同	ピアノカザア	柳生 喜美
茶碗	同	鐵繪片口	同	同 D	同	木綿紉ラナー(三枚一組)	柳 悦孝
蓋附小壺	同	鐵繪水注	同	銀帶止金具 A	同	敷物(大)	外村吉之助
盒子	同	同 壺	同	同 B	同	同(中)	同
角盒子	同	鐵砂水指	同	白磁壺	喜多村作太郎	葛布座ぶとん(仕立) 五枚	同
水滴	同	柿釉向付 取鉢(六枚) 同	同	黒釉果物(大皿一皿 小皿六)	森川 唯一	葛布座ぶとん地 五枚 同	同
同	同	同 小皿(六枚)	同	一樂籠 籐組	森山千代市	同	同
コーヒー碗(六客)	橋本 清正	竹果物籠	平沼 淨	同 同蓋付	同	同	同
鐵繪水指	濱田 庄司	同	同	クツシヨン地	森永 重治	帶地	同
同	同	八角盛物器	同	銀の紐	中江 妍子	白化粧 壺	同
柿釉水指	同	花生	石黒 行鳴	金の紐	同	口鐵釉 湯呑六客	山田 徹秀
柿釉鉢	同	同	今西 洋	金・赤・蝶結び	同	座ぶとん地(純)	同
同	同	鐵火箸	同	紅茶々碗半打陶器	尾野 敏郎	織機圖染色屏風(假仕立)	同
刷毛目鉢	同	鐵火押	金田 勝造	ハンドバック(一)	仰木ゲルト	襖張型染(一坪)	同
鐵砂手附大鉢	同	鐵銀象眼帶止	同	同 (二)	同	同 (同)	同
鐵砂方瓶	同	同 カフス釦	同	同 (三)	同	藍染カーテン	同
鐵砂扁壺	同	花生	鹿島吉十郎	同 (四)	同	帶側(純)	同
柿鐵釉壺	同	刷毛三島鉢	同	平織物男帶	大家 千世	同(芭蕉布)	同
鐵繪花瓶	同	爐具 一揃	熊代 重延	同 女帶	同	卓子掛	同
鐵砂花瓶	同	同	同	指環 A	奥村 博史	陶器角火鉢	佐久間藤太郎
刷毛目壺	同	丸蓋物	黒田 辰秋				

現代美術

陶器ジョキ	佐久間藤太郎	角陶板あしの芽	富本 憲吉
同帶留 二個保付	同	角陶板魚と具	同
ハンドバック 綴織	鈴木 周	丸陶板	同
木綿テーブル掛	鈴木 至郎	角箱あしの芽	同
木綿テーブルセ	同	角箱具	同
ンター	同	角箱	同
八角形盛器	木工 酒井數次郎	角箱魚	同
蓋付物入 藥細工	孫 斗昌	角箱葉	同
物入	同	クツシヨン	同 林 笑子
大井	富本 憲吉	同	同
草花巻	同	單衣帶(一)	同 岡村 郁
白磁壺	同	染絨	同
大皿	同	同(二)二種	同
同	同	因州布 一反	同
平皿	同	半襟 三種	同
白磁大壺	同	手剝木鉢 木工	同 横原兼太郎
黒釉壺	同	硯箱	同 安川 慶一

春陽會第十三回展覽會

於東京府美術館

四月二十八日—五月二十日

全體から云つて親しみのある展覽會であつた。それは此の會の大部分の作家が日本風な觀照を印象派或はそれ以後の何れも試験済みの穩しい畫風で描いて居ると、氣分を本位として居る爲常識的であるがアカデミズムの固さに陥らないで居るからであらう。其の代り單なる趣味に終つて居る繪も多い。此の團體が今から十三年前創立せられた當時は進歩的な新時代の藝術團體の一であつたのだが、今は多くの會員が小さいながらに安住の地を得て了つて時代の進轉に伴つて新しい藝術を創造して行かうとする精進の意氣の見えぬの

は残念である。

會員の中では倉田白羊が三百號の力作「焚火」に外光を無視してのミニメンタルな作品への新しい試みを見せたが單なる外光派以前への復歸に終つたのは惜しい。それにしても失明の恐れ迄ある病軀を推して此の精進は壯とすべきものがある。彼の作品では「初冬」の如き外光寫生風のものゝ好いものがあつた。

白羊と同室(第二室)の會員作では長谷川昇の「モデル」が光つて居た。次の第三室では山本鼎が「讀書」「白菜圖」外一點に練磨された技巧を以て穩かな寫實を示して居た。其の畫境は中々に侮り難いが、もつと自然を視つめて底力の有るものを描けば立派なものである。木村莊八の「新宿驛」二題はスケッチとして見れば成功して居た。足立源一郎の山嶽風景數點は真正面からの寫實的作品。

第四室の鳥海青兒の「海邊」二點は此の展覽會では特に面白いもので、一番の出来とは云ひ兼ねるが、作者が此の團體に於て明日の藝術を期待し得る極く僅の一人である事は示して居た。但し大津繪(二四七番)の様な惡戯をして喜んで居ると駄目になる惧れがある。

國盛義篤の作品も優れた構想と味を示して前途を期待させた。馬と車」など小品であるが面白いものであつた。前川千帆の版畫は意想の愉快な作品である。水谷清の作品は描き振りに若々しさを見せては居るが其の氣持に於て退嬰的で若手會員の作らしくない。斯うした木村莊八の道を進む事は不賢明である。石井鶴三は第八室にクロッキーと日本畫を、第十室に水彩を陳べて居たが、クロッキーは流石に好い出来であつた。小杉放庵の「山居十趣」は味ひ深く、油繪「三魔女習作」は得意の裝飾的な畫風で壁畫としたら面白さうなものであるが何故「魔女」であるのか分らぬもの。「松下人」は水墨淡彩で南畫風であるが、斜に延した松の構圖は桃山風である。

中川一政の二曲「芭蕉屏風」は芭蕉の有名な句八つの意を扇面に描いた日本畫で、獨立した繪として含蓄ある内容を見せたものもあつたが中には單なる挿繪以上に出でぬものもあつた。

會友の中では伊藤慶之助、栗田雄の作品が優れて居た。

春陽會賞受賞の森田勝の滯歐作品十一點、秋口保波の九點は共に好い出来であつたが、もう一人の受賞者小泉倫之助の夢幻的な作品は眞實を以て居らず、さりとて象徴的意義も見出し得ず、眞のロマンティックにも缺けて居て氣の利いた畫面にも拘らず如何にも弱い作品であつた。

總攝入數二四五點の中入選數二六四點、陳列總數四〇二點

授賞

春陽會賞 森田勝 秋口保波 小泉倫之助

會員推舉 栗田雄

會友推舉 森田勝 兼平英示 和田歳一 楊佐三郎

出品目録(陳列番號順)

洋墓地の春	楊 佐三郎	ムードンの畑	秋口 保波
臺灣婦人像	同	セーブルの景	同
新緑の庭	同	畫室のモデル	同
ホテルの庭	同	休息	同
あみもの	同	草上	野口 亮
裸婦習作	國井 俊子	靜物	舟木 茂子
花	二見 利節	新緑	伊藤慶之助
卓上靜物	同	早春の露臺	同
種蒴子	同	谿流	同
裏の風景	同	黒いボアレの女	同
金魚の靜物	新沼 杏一	少女	萩原 芳枝
寫生	同	花	同
サンクールの景	同	朝霧	小泉倫之助
母と子	同	青年期	同
鏡を見る	同	劇場前	同
トランプ	同	夜霧	同
		海邊の村	藤堂奎三郎
		大王崎	同

濱木綿の花 藤堂奎三郎

志摩の海 同

横風裸婦 三木朋太郎

ソファ 同

裏街 同

巴里の街 同

道 同

犬吠岬 同

舞妓像 大前 丈英

桃 同

鯉 同

初秋の海 加山 四郎

靜物 同

濱港冬景 同

花 同

松林 同

立像 同

花 同

喫茶店小品 同

調布風景A 佐甲 久芳

調布風景B 同

花菖蒲 山下 邦雄

白壁の家 同

丘の路 同

雪原 同

チキウ岬燈臺 同

井戸の雪 同

男の全身(サカロンの舞踊による) 同

バラ 同

社の裏道 同

大佛殿 同

婦人像 若山 爲三

少年裸像 同

少年と犬 同

風景 同

風景(三笠山遠望) 同

風景(柿紅葉) 同

モデル 同

雨後 倉田 白羊

冬の午前 同

たき火 同

初冬 同

崖と胡桃の林 同

琉球香爐 同

稻田 同

靜物 同

郊外冬景 同

白椿 同

林 同

風景 同

裸婦A 磯田 新一

裸婦B 同

西芳寺林泉 同

舞妓 同

靜物 同

新緑 同

加茂川風景 同

室内 同

塔 同

新宿驛 (東京風景第五)稿 同

同前習作 同

窓邊の靜物 同

小川	原田 武男	海邊の小屋	鳥海 青兒	新緑	國盛 義篤	お食事に	野村 俊彦
浅春	横堀角次郎	小屋のある風景	同	馬と車	同	愛撫	同
沼畔	同	海邊	同	加茂川浅春	同	小松林	同
赤城風景	同	海濱	同	加茂川の櫻	同	卓上草花	古川 龍生
赤城小景	同	鳥	同	水蓮	同	花嫁	同
山麓風景	同	芽ヶ崎の海	同	葡萄	同	椿	同
A大瀬即興	山本 鼎	花、金魚など	池田雄次郎	大元像	酒井 寛光	信州更科大雲寺	深澤 索一
B白楽圖(西村氏藏)	同	壺の花	同	長崎の道	遠藤 典太	犀川べり	北澤 收治
C讀書(村上氏藏)	同	夏山	兼平 英示	三池の山	同	観客席	同
相模川上流	舟木 章	娘	同	眠れる子供	同	近郊春色	樋口源一郎
與瀬風景	同	秋近き風景	大森 滋	道	同	佐久島風景	魚津 良吉
早春	同	忠臣蔵道行	齋藤清二郎	澤野氏像	山田 義夫	雪	川端彌之助
鳥帽子獄	足立源一郎	さぎ娘	同	O氏座像	山田 才夫	寶塚風景	同
石楠花	同	狐火	同	早春	鶴城 繁	陽春	同
西鎌尾根	同	文樂樂屋にて	同	花	島田鎖太郎	稻荷山風景	同
F氏像	同	文樂人形樂屋	同	温室	金子清之介	街角	柴田 恕夫
東澤の夕	同	驚娘	同	早春	旭 正秀	南の國	同
婦人像	山田睦三郎	枯草の路	本莊 赴	馬櫓	藤森 靜雄	河岸	同
刈入れ頃の風景	同	牡丹の芽	同	港	同	郊外	同
人形	小穴 隆一	風景B	故關 徹郎	駒嶽山頂(馬飼の池)	山口 進	於小笠原	同
花	同	風景A	同	山峽展望	武田 由平	アネモネ	水谷 清
静物	同	早春の郊外	眞田 久吉	枯れた草花	同	鳥籠静物	同
習作	同	春光	同	チューリップ	前田藤四郎	秋庭	同
ギターを弾く	同	青いコスチューム	中谷 泰	鳥	同	椿静物	同
對岸	木村 勝	ビヤホール	同	湖森海(三部作)	前川 千帆	藝者屋	同
戸隠風景	手塚 緑敏	静浦	栗田 雄	野遊び	同	かほちやと河原	同
山	上野 春香	雨後	同	椿花二種	龜井藤兵衛	牡丹	同
花	同	鹽久津風景一	同	草花	山林 文子	名護風景	大嶺 政寛
門	同	鹽久津風景二	同	朝鮮風景	徳力富吉郎	首里風景	同
流れ	同	口野風景	同	婦女圖	同	冬の布留川べり	飯田 衛
山村の一角	島田四郎	麗日	橋本 三郎	ミコと花	野村 俊彦	洩るゝ陽ざし	同

花	大澤鉦一郎	若葉	山川 清	トレド風景	明石 眞三	安良里風景	岩田榮之助
少女裸體	同	ダムピエールの新緑	同	ボン、スーブニール	同	安良里風景	同
少女	同	眠る裸婦	同	母と子供	同	安良里風景	同
踊り子	津谷 鹿市	裸體習作	堀内 唯一	ビラ、フアリゲール	同	鯉	片岡 勝壽
室内	同	裏山風景	同	行人坂風景	森田 博	残雪山趣	坂口 三十
赤いリボン	同	港風景	桂 龍雄	白い舟	兒玉 彦三	常滑風景	佐藤 昌胤
のどかな日	同	早春	田中壽太郎	諏訪高木風景	關四郎五郎	大高風景	同
卓と椅子	岩井 濱子	石膏と花	大森 商二	風景	三繩不二男	雪景	野村 千春
風景	同	村落にて	森田 勝	花	石崎 玄作	靜物(花)一	加賀孝一郎
靜物	廣岡朋三郎	女	同	木蓮	同	靜物(花)二	同
アルゼーの港	同	桃咲く村	同	裸女	一木 弐	花と果物	同
ルクサンブルグの國境	碓田 克巳	花咲く海邊	同	海賊島俯瞰	矢野 眞胤	池畔暮色	同
アラブの家	同	モロッコの葺物	同	内海風景	同	ガラス鉢とラッパ	同
さんま	同	裸婦	同	初夏のみなと	伊藤 信夫	カボチャ其の他	同
さよりと赤貝など	伊川 鷹治	エールの女	同	磯邊	同	黃栗山の飯棚	石井彌一郎
クロツキ	同	靴下はくモデル	同	父と子	和田 歳一	洛北早春	同
クロツキ	石井 鶴三	晝集見る女	同	Aちゃん	同	牛	田家 秀雄
クロツキ	同	黒い手袋の女	同	驢馬と遊ぶ	同	夏日	加藤 一景
クロツキ	同	風景(ビュリエ・シユール・モーラン)	同	曇り日	小栗 哲郎	風景	洪 瑞 麟
クロツキ	同	風景(ブルターニュ)	同	天子ヶ岳	同	高井戸風景	同
クロツキ	同	鮎歸の秋	原田 和周	奥武蔵	同	廣濱風景	牧村 收三
婦女紳花扇面屏風	同	村の一廓	同	名栗川	同	山の池	中田 政夫
兎(一)	同	求麻川の秋	同	山中夕陽	同	裏の崖	同
山居十趣	小杉 放庵	葡萄を食べる子	宮脇 晴	早春	石黒平三郎	椿	佐野 八郎
松下人(屏風)	同	少女紅衣像	同	御宿風景	今井治兵衛	橋	土屋 義郎
三魔女習作	同	ゐる子等	同	將棋	石井 鶴三	野榮	同
芭蕉屏風	中川 一政	ピツプの男	明石 眞三	鐵橋	同	マデヨルカノ海	三雲祥之助
餘映	田中 咄哉	パリ、ソアル	同	土橋	同	マデヨルカ島デヤの谿	同
大津繪一束(七點)	鳥海 青兒	タイ村小景	同	鷹根山	岩田榮之助	樹間の春	茨木猪之吉

マデヨルカ島 バルマ港の夕暮	三雲祥之助	春の山	島田 福雄
晴美像	松本 茂	支那街	松本 道子
假睡	同	水邊風景	酒井巳代治
失題	同	メンタルテスト	山口 進
母子像	同	ポンプと金魚	簗口初太郎
丘	木下 公男	仲よし	飯島 祐壽
部落	同	庭	淺木勝之助
ワントネーの濱	同	石切場	向坂 次郎
山間風景	榎 信太郎	開墾地	松本 昇
冰淇淋をのむ支那人南大路	一	菊	齋藤勇太郎
裸婦	濤澤 秀雄	早春の函館港	西田 秀雄
裸婦	原 精一	女人像	福富 文子
本を見る女	同	おんメちゃん	松永浩二郎
倉庫	同	チイコちゃん	村上 尙雄
寫生する少女	石井壬子夫	曇り日の入江	同
早春大和路	畑中周次郎	社交室(4)	大久保一郎
唐招提寺	武若 武作	南窓	同
法隆寺仁王門	入江 令一	花	小泉 富司
初秋小憩	同	坂道	同
牧場早春	池谷 寅一	風景	長田 國夫
梅香望城	山口 南草	庭のある静物	調 燾 山
相模川沿(一)	倉田 三郎	或る校庭	小山 行綱
相模川沿(二)	同	田園薄暮	山根 義雄
和田風景	同	繪馬堂(御香宮)	藤野 龍
夏庭	同	室内	早川 芳彦
入江にて	同	窓邊の静物	同
サーカス小屋	常松 菅晴	植木屋の道	石塚 青道
室内	長岡 一敏	庭	河野 稔
風景	同	晩秋の山岳	高橋貞一郎
畫室にて	同	糸練之圖	同
櫻の頃	島田 福雄	街道初秋	宮田清之助

早春丘 宮田清之助 姉 後藤 禎二
古江風景 葛下 友造 妹 同

青龍社第七回展覽會

於東京府美術館
九月一日—二十八日

青龍社も春季展を別にして既に七回を重ねるに至り、社會的にも藝術的にも、次第に其の地歩を固めて來た。今年は形の上では例年の會場に更に階上の三室を加へ、内容に於ても一般出品の水準は向上して、相當なる充實振りを示した。主宰者川端龍子が帝國美術院會員に任命された故もあらうが、社會の關心も高まつて來たやうである。

日本畫の傳統に對してかなり自由な態度を持し、近代的欲求に鋭敏である事は此の會の特性であるが、「剛健なる會場藝術」を其の主張とする故か、裝飾的に過ぎて、桃山風な豪壯を好む傾向さへあるのは、時に現代日本の華やかな一面のみを見て、新興日本の實質な姿を忘れて居るかの印象を與へる。加ふるに、此の傾向は藝術の本質的なものを忘れしむる危険あり、事實其の弊に陥つて居る作品も見受けられた。

第一室の加納三樂の「飛彈山居五題」は有名な飛彈の白川郷の大家族の住む大建築の外部及び内部を描いたもので、何れも面白い構圖であつた。

第二室には特筆すべきもの無く、第三室では谷口富美枝の六曲半双の力作「粧ふ人々」が光つた。洋装、和装とりどりの現代の少女六人の著更へ、調髪、マニキュアなど様々の化粧を行ふ様子を描いた風俗圖で、略一扇に一人宛並べて描きながら巧みに變化をつけた裝飾的な構圖と新鮮な描き振りと近代女性の感じを好く表はして居る點とを採るべき作品で、深い觀照には缺けて居る。木村鹿之助

の「華鬘」は日本畫の構圖に洋畫風な描寫態度を以てして居た。坂口一草の「雨鷺」は穩しい裝飾的な作品。

第四室の白井充の「化粧」はその圖案風な作風にも拘らず、中々味ひのあるものであつた。安西啓明の「千代の翠」は龍子の「新樹の曲」に暗示を得たのであらうか、下方に石垣を見せて其の背後に高く千代の翠を誇る松數本を寫實的に描いて居るが、其の豪壯な構圖にも拘らず、固い覇氣の無いものになつて了つて居た。

第五室には川端龍子が「炎庭想雪圖」を出して居た。既に古人の試みた事ではあるが、着想の奇抜な所から一般の興味を集めたが、餘り好評ではなかつたやうである。第六室には龍子の太平洋運作の第三たる「椰子の篝火」が陳べられた。紙本六曲半双、堅八尺、幅二十四尺の大畫面である。作者の言に従へば篝火に踊りを樂しむ南洋土人の「踊り前の情景」とあると云ふ。作者は又、其の出品解説に「線描に對する自己解決です」と書いて居るが、實は解決ではなくして問題を提出した形になつた。元來龍子の日本畫の本質は線にはない。彼の線は洋畫出身者の多くがさうであるやうに、日本畫の線としては未だ洗練されて居らぬ。彼が此處に示した線はデッサンも正確であり、達者な力のこもつたものであり、古畫の線の面白みも活用しては居るが、未だ表現力に缺けて居る。之だけの大畫面を持たせるだけの内容のある線ではない。斯うした大畫面を線描のみ行く事自身大きな冒険であるが、殊に龍子にとつては不適當の企てだつたのではなからうか。

同室に福岡青嵐の「丙丁童子」があつた。ひのえ、ひのと、兩童子を火焰の中に踊らした題材、作風共に變つた作品である。之も同室の渡邊綱雄の「塔影」は藥師寺の塔を中心にした建築美の表現であるが、其の構成的で、然も情緒ある構想は好い意味での青龍社型の作品である。柴田安子の「牧婦」は優れては居らぬが其の大まかな表現、色の調子は作者の眼の凡庸ならざるを示して居た。安西啓明の「鳩遊ぶ」は數十羽の鳩の群の遊ぶ様をそのまゝに把へて而も

裝飾的效果を擧げた佳品であつた。

第七室の鈴木茂子の「溫習」は院展に見られさうな、青龍社には珍らしい、正面からの穩しい寫實である。杉本哲郎の「樵夫」は八尺四寸に十三尺六寸の大畫面で、シニョレリやゴツツオリを思はせるやうな堅い線で拙劣ではあるが克明に描いたもの、登場人物は總て裸體で此處にもルネッサンスの影響が見える。

第八室には龍子の南洋點描二十八點を陳列。何れの情景も才氣の利いた捉へ方をして居り、達者な筆を軽く走らせた佳品が多かつた。

出品目録(陳列番號順)

安息	利谷 双樹	千代の翠	安西 啓明
海濱風景	河野 正長	河邊	結城 正雄
飛彈山居五題	加納 三樂	裸婦と孔雀	三好 光志
安宅	山崎 豐	海風	谷口富美枝
芍藥	瀧澤 久子	青桐の頃	奥田 晩果
アコードオン	大塚 榮治	ガイド	松宮 左京
谷間	市野 亨	炎庭想雪圖	川端 龍子
下田	平岩長四郎	白孔雀	小島 鼎子
橡	坂 一	紫陽花	菱田 幾久
椎茸	鹿戸 林藏	哀愁	尾張勝之助
山躑躅	小林彦三郎	丙丁童子	福岡 青嵐
粧ふ人々	谷口富美枝	塔影	渡邊 綱雄
雨鷺	坂口 一草	椰子の篝火	川端 龍子
緑林	佐藤 木草	鳩遊ぶ	安西 啓明
倉庫	佐藤 正一	草薺	岡部建一郎
華鬘	木村鹿之介	牧婦	柴田 安子
八ツ手	渡邊 龍三	婦女像	奥田 晩果
牛歩	内山 英一	吉田屋	脇岡 大樹
化粧	白井 充	漁港	坂口 一草
北極熊	松村 五郎	テニールツブ	苦米地永子
		孤客	木村鹿之介
		溫習	鈴木 茂子

現代美術

大洋の前に	利谷 双樹	ダリア	演出 榮一
みのり	崔 木朗	湯の宿	上條 靜光
御茶の水風景	佐藤 正一	南洋點描(廿八點)	川端 龍子
樵夫	杉本 哲郎		

二科第二十二回美術展覽會

於東京府美術館
九月三日—十月四日

藝術上のみならず、政治的にも其の指導的立場にあつた五會員と絶縁した二科會の第二十二回展は、其等作家の不出品を償ふに餘りある多くの力作が並べられ、搬入數も反つて昨年より少しく増加を見た位で、一般出品の水準も向上こそすれ少しの低下も示さず、好成績を示して世間からも好評を受けたのは、何よりも此の會の爲に喜ばしい事である。之は此の會に残つた人々の發奮、再生の意氣に燃えての精進の結果であり、一種若返つた氣分が見られるやうである。

何れの展覽會でもの通例で此處でも第一室には特に出來の好い作品のみが並べられた。その中でも光つたのは推獎宮本三郎の大作「婦女三容」及び「青い敷物」等で、技術上では若くして安井曾太郎の技巧に肉迫した(内容は遠く離れるが)此の作家の達筆は賞讃に値するが、内面的な觀照の深さに缺け、趣味の悪いのが其の繪の價值を低めて居る。此の作家として人物を描いては、彼相當の性格描寫を行つて居るが、併し單に新聞記者的な外部的な性格描寫をするのみでその繪に深き内容を與へる事は出來ぬ。ジャナーリズムの喜ぶ挿繪は出來ようが、眞の藝術は出來上らぬ。此の珍しく優れた技巧の所有者が一度自然と人生を見詰め直して觀照を深める事が希望される。同じく安井曾太郎の風を學んで、技術は其れ程でも無いが、對象の精神を掴むに長じて居るのは特待になつた安宅虎雄である。

「子守と幼兒」、「手鏡」出品。推獎の栗原信の風景は構圖も好く破綻なく描れて居たが、自然の細かい味を逸して少しく單調な畫面であつた。小出卓二の「漁船」は鳥瞰圖的パースペクティブを用ひて觀點を高くして見下したやうに描いて居たが優れた構圖と云へる。

第二室の服部正一郎の裝飾的な形式化と同時に表現の強化を狙つた二點の中では「海」の方が出來が好かつた。外洋風景に見られる自然の大きさ、力強さを表現して居るが幾分作り過ぎた傾向が無いでもない。その作り過ぎた所に此の作品の弱點がある。吉井淳二の人物像四點は街はずに溫順に描き出して居る。鈴木信太郎の作品五點はどぎつい色彩で主觀的に對象をまとも上げたもの。其處に表はれた作者の小供らしい主觀が非常な魅力を有つて居る。特に「まるい池」は此の會で多數の佳品であつた。

第三室に特別陳列された高岡徳太郎の滯歐作品は、滯在期の短いにも拘らず喜ばしい土産であつた。風景に於ける形式分解の追求も好く、ロートの影響を受けドランを明るくし且堅くしたやうな裸體のデフォルマションも、一般からは無理があると不評であつたが特異な效果を持つて居た。同室の碓伊之助の滯歐作品は洗練されては來たが、個性を失つて了つて物足らぬ。一般の批評も毀譽相半ばして居たやうである。

第四室の古家新の作品二點、技巧は巧みで氣が利いて居るが、大きさに缺けて居る。錦義一郎の「七夕」は達者な筆で夕暮の七夕の仕度を描いて居た。京都邊りの山寄りの庭の紅葉の美しさを描いた「庭」と共に日本趣味の溢れた作品である。久し振りで二科に復歸した中川紀元は「無題」として海邊に横はる裸婦とシュミーズ一つ著て花束を持つて立つ女を描いて出品。其の構想の意圖は不明であるが、求めて居る美は其處に表はれた氣韻であらうか。東洋畫の技法を用ひた積りらしく荒つぽい描き振りであつた。鍋井克之の三部作雪月花は洋畫の描法を以て日本趣味的な風景を豁達に描いたもの。同室の坂本繁二郎の「二仔馬」は得意の題材で描法も何時もと變ら

ぬが、新しい魅力を持つて居るのは此の作家の靜中動ある心の精進の賜であらう。

第五室では田口省吾の「見物席」が光つた。構圖といひ、支那人の觀客の表情を巧みに捉へた描寫と云ひ、此の會の最も大きな收穫の一である。彼は外にも大小二面の「阿片吸飲の圖」を出品して精進振りを示したが、「見物席」に比べると落ちる。木下義謙の人物三點は成功したものと思へぬ。此の作家は人物より、風景、靜物に適して居るやうである。正宗得三郎は穩和なルノアール風の作品を出品。黒田重太郎は調子がよく、「卓上立秋」、「睡る女」等の佳作を示した。向井潤吉は「踊り子習作」二點と風景にクルーペー張りの精進を示した。

第七室には藤田嗣治の大作三點が陳べられた。各々違つた味を特つた力作で「五人女」は西洋婦人を題材にした彼の在來の仕事振りのもの。本格的な油繪の描き振りを示し、ロココ風な風景を背景に立つ五人の女の構想も純歐風のものである。西洋婦人の裸體の美しさを彼程に會得して居る畫家はフランスにも少ない。唯其の描く所が形而下の美にのみ止つて居るのが缺點である。一番の大作「北平の力士」は支那の大道藝人を中心に路傍の人物を描いたもので、其の背後の多くの人物が主題とは無關心に他處を向いて描かれて居て不自然であるのみならず全體としてまとまりが無いとの非難もあつたやうであるが、大道藝人を中心とする一の劇的場景を描く事が作家の目的ではなく、それよりはむしろ、大道藝人を構圖上の中心として種々なる支那の街上の人物を繪畫的に展開して行く事が作家の狙ひであつたと思はれる。其故に一々の人物が非常に細かい細部への興味を以て描れて居る。或る出來事の寫實を企圖したので無いとすれば不自然であると云ふ非難は當らない事になるが、構圖にまとまりの無さ過ぎる事は肯定されねばなるまい。他の一點は支那人の肖像畫で背景の金屏風には金箔をおき、猫を日本畫風に描いてある。油繪に金箔を置く事は此の作者は既に巴里に於て試みて居るが、金

屏風を背景に裝飾的に取扱ひ、其を成功せしめた作者の思ひつきと技巧は賞讃に價する。金箔を背景においたと云ふ事のみならず、日本畫の技法を應用して裝飾的に肖像畫を取扱つたと云ふ事が、日本の洋畫家に肖像畫の新しい道を教へよう。

同室の島崎鷗二の「笛」、「娘」は佳品であるが、父藤村を描いた「肖像」になると如何にも弱く、藤村の人間を描き得たとは思はれない。此の畫風では大作を持ち堪へるに難しいのみならず、或る一定の範圍の性格をしか表現し得ぬのではないか。高橋卯八の「白虎隊」は題材自身は面白いが、こなし切れずに情無い結果になつて居た。現代の日本の洋畫家は何れも印象派及び其以後の自然を描く修業のみで文學的題材を描くとすると殆ど無能である。文學的題材を蔑んだのは十九世紀後半に於ける反動に過ぎぬ。人間の外的、及び内的動きをも繪畫的に表現し得るやうにならねばならぬ。

第八室の野間仁根の「晩夏交響樂」は佳品であつた。描法はデュファイそつくりではあるが、其の蟲の世界を描く感覺と觀照は此の作家獨自のもので、樂める作品であつた。同じ作家の「海邊」二點は前者とはすつかり描法が異つて藤田嗣治の近作に影響を受けたらしきものである。

第九室には所謂アヴァンガルドの作品が多かつた。峰岸義一のエロティックを盛に發散させるロマンティックは仲々に面白い。岡田謙三のリリカルな作品三點は何れも佳品であつた。彼の畫風は現在の島崎鷗二と同様餘り多くの可能性を有つて居らぬ。東郷青児は三點を出品、洗練された近代感覺を以て近代女性の美を捉へ裝飾的に描き調へて居る。其の工藝的な技巧も益々冴えて來た。鈴木三郎は「邂逅」及「初秋」に面白い構想を示した。將來を期待せしめる。

第十一室の酒井亮吉の「提灯」のキアロスキュロは時代錯誤の感があつた。

第十二室の伊藤繼郎の褐色調のかすれたやうな描き振りは此の作家の持つ特異なものの表現に成功したとしても、迫力の無い點に於

て失敗であつた。

別に第十室に特別陳列としてモーリス・アスランの作品二十四點が並べられた。今の日本の洋畫壇は既にアスランの眞價を見極めるやうに迄なつたし、教へられる所も餘り無い迄に進歩して來たが、それでもフランス人だけに本格的な油繪を描くと云ふ點で若い洋畫家の參考になつたらう。殊にも其のフランス人らしいニュアンスは教ふる所多かつたであらう。

二科の彫刻は藤川勇造を失ひ、其の直系の弟子の脱會も見たので今年度は寂しからうと思ひの外、會員渡邊義知、會友笠置季男、松村外次郎の活躍で見應へあるものになつた。松村外次郎の「桃太郎」は大きな量の取扱ひにより、征服の意志を眉宇のみならず、全身にみまがらした力強い肉付きの好い男兒を表現したものの。ヒチツト彫刻に見られる大きな量の持つ迫力が巧に利用せられて居る。新興日本人の意氣を象徴化したものと思はれ、今年度彫刻界第一の收穫と云つても過言であるまい。同作者の「天の川」、「イマージュ」になると「桃太郎」だけの動きが無いだけに、益々ヒチツト彫刻に似て、迫力のある更りに、少しく不氣味であるをまぬかれぬ。渡邊義知は大作「國土を護る」の部分「空」及部分習作「日本刀」を出品して彫刻部の總帥たる意氣を示した。「國土を護る」全體が出来上つたら如何なる形を採るものか分らぬが、一個一個として見て力のこもつた面白い作品であつた。ザツキンに似た小品「首」の不評であつたのは致し方あるまい。笠置季男は「樂器を持つ女」、「横臥の姿態」の二點を出品。推獎にされただけの價値は立派にあるが、古典的な美を狙つて居るやうでありながら、その中から現實感が頭をもたげて來るのが妙に目障りであつた。

搬入總數、繪畫三九二七點、彫塑一七八點、入選點數、繪畫三六九點、彫塑四九點、陳列點數、繪畫四九八點、彫塑六三點

授賞

推獎、宮本三郎、高岡徳太郎、栗原信（以上繪畫）、笠置季

男（彫塑）

會友推薦、岡田謙三、山本直治、松井正、島崎鶴二、吉井淳二（以上繪畫）
特待、伊藤繼郎、安宅虎雄、浪江勘次郎、峰岸義一、古家新、福島金一郎、服部正一郎、錦義一郎（以上繪畫）、長谷川八十（彫塑）

出品目録（陳列番號順）

出品目録（陳列番號順）																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
-------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

黒衣の女	吉井 淳二	洋館	高岡徳太郎	巴里の或るパツ	有隅 善郎	芦の湖	鍋井 克之
バスク風景	鶴田 宏	婦人	同	サージュ	同	桃	同
オリブの林	塚口 正一	座像	同	ノートルダム寺院	同	はだか	松本 忠義
神戸港の一隅	細見 治逸	巴里	同	フォントネー附近	同	無花果	加藤 一也
山麓初夏	田中 修	臥像	同	オルリイの景	同	横たはる少女	仲田 菊代
ムスメ	井上 賢三	裸女	同	夕景	長谷川勝人	静物	同
高麗橋と櫻島	大森 靜樹	郊外	同	三月の街	同	富士山	熊谷 守一
長崎の家	小野里利信	田舎	同	ヒノミ雪景	山川 利男	雨	同
鹿三匹	濱田 葆光	踊子	同	湖畔風景	佐藤 眞樹	二仔馬	坂本繁二郎
朝の風景	同	室より	同	庭	錦 義一郎	青海の海邊	吉本 富三
緑蔭	同	港	伊之助	七夕	同	伊豆風景	鎌田朝二郎
静物	田中 太郎	海水浴場	同	虹	古家 新	井之頭公園	同
五月市梅林	松田 晃八	望遠鏡	同	海風	同	畫工と其婦	原 勝四郎
ガードのある風景	宮城三喜子	尼寺	同	タラップを持つ女	山尾 薫明	初冬風景	同
庭	黒田 孝子	荷物船	同	チレタ、チレタ	同	朝の富士	正宗得三郎
南總の海	鈴木信太郎	鐘樓	同	小梨平の樹木	横井 禮市	波濤	同
夜の花と野菜	同	漁船	同	ソファアの女	同	白帽婦人	同
麻雀と人形	同	ニース海岸通り	同	戯れ犬	同	カリン	同
花	同	ニース海岸通り	同	無題	中川 紀元	牡丹	同
まるい池	同	夕暮れ	同	瓦焼	水澤 正一	罌粟	大塚 與志
Y港	榎倉 省吾	伊太利の労働者 (石版)	同	七月の午後	難波 正人	白い塔のある風景	小松 益喜
熊野街道	同	堤防	同	浴衣の女	柏原覺太郎	野菜	高木 壽子
切目の丘	同	大きなバルミエ	同	黒衣の女	同	阿片吸飲之圖(一)	田口 省吾
飛彈の谿流	同	尼寺	同	畫室の幸	本多 幸市	阿片吸飲之圖(二)	同
出勤	山本 徳生	臺所	同	郊外風景	石川眞五郎	見物席	同
裸婦習作(一)	久保 光男	朝顔	同	柿	小林喜一郎	肖像	同
裸婦習作(二)	同	ニース海岸通り	同	平井風景	同	豆の花	同
犬鳴溪流	藤田勝太郎	南佛の村	同	家族コンボジ	同	朝涼	黒田重太郎
溪流	同	サン・ニコラ・	有隅 善郎	雪月花	鍋井 克之	爲朝百合とダリア	同
桃われ	末松 勇	デン・シャン	同	天の橋立の雪	同	網小屋	同
風景	高岡徳太郎	同	同	三笠山の月	同	卓上立秋	同

睡る女	黒田重太郎	胸像習作	金 學成	姉の像	諏訪 辰夫	庭池	野村 守夫
樹蔭讀書	柴田又太郎	Y君	柳田 昌	マドモアゼルY	織田久馬一	北平の力士(大道藝人)	藤田 嗣治
谷間の流れ	黒田 祐治	シュミーズの女	木下 正彦	Y子の首	三澤 賢三	五人女	同
兼六公園の噴水	正木 通子	女立像	長谷川八十	首	富久 經男	Y婦人の肖像	同
父の肖像	木下 義謙	第一步	加藤 隆	胸像	渡邊 政夫	下町の小公園	金子 博信
猫と女達	同	ワグナー少年	大橋 浩吉	おとこ立像	中村 暉	金魚釣り	渡邊造酒三
横光線の肖像	同	座女	同	首	高井 四郎	きんぎょ	高根澤政子
海濱風景	河野 潔	猫	松村外次郎	習作	守屋 海助	朝	柳 英夫
海へ行く道	加藤タキノ	天の川	同	弟の首	大間知龍之助	濱	平川 要
ジュームス様夫人	西脇マデヨリ	イマアージュT	同	Fの首	金森勝太郎	自畫像	竹内満砂子
池	同	立像	上田 曉	横臥の姿態	笠置 季男	勞働者	瀧川 太郎
水蓮	水清 公子	コムボジション	同	シアモ	大河内千賀	湖畔	同
風浪の室戸岬	向井 潤吉	男の首	柳田 昌	闘志(軍鶏)	唐木 政一	樹氷	橋本 徹郎
踊り子習作A	同	裸體習作	蔣 治民	五月	川崎 榮一	少女	玉澤 潤一
踊り子習作B	同	女の首	野水 信吉	女立像	金 學成	早春姉妹の圖	島 あふひ
山茶花	神田 英子	國土を護る「部分	渡邊 義知	女子立像	柳田 昌	ジャズシンガーとアドニス	同
海水浴場風景	加藤 敏子	習作「日本刀	同	首の習作	金 學成	金魚を買ふ	西村千太郎
彫 刻	同	國土を護る「部分」空	同	マダムK	木下 正彦	コンタリート管と岬	永井 武夫
首	内山 嘉吉	小品A	同	小品	渡邊 義知	機織娘と天使	尾澤 辰夫
裸立像	堀野 秀雄	首	同	臥裸婦	木下 敏一	白虎隊	高橋 卯八
老人の首	同	女の首	廣瀬不可止	繪 畫	島崎 鶏二	門	園部 邦香
男の首	同	女の首A	中堀 正孝	笛	同	室内	同
立像(習作)	同	女の首B	同	肖像	同	鳥と机	渡邊 西二
坐像(習作)	同	樂器を持つ女	笠置 季男	うちわ	同	白い孔雀	安部治郎吉
桃太郎	松村外次郎	首習作	大西金次郎	姉妹	同	鯉	同
拳闘手	山根 顯一	浴女	三浦舜太郎	娘	同	雨後	岩本 恒三
女の首	福田 安敏	立女	渡邊小五郎	大原女	野田加一郎	唐門	野田 武男
習作	水野美恵子	顔	山本 博一	椿と葉蘭	指田 由米	由良川山家峽谷	福井 勇
少女	蕭 傳玖	女の胸像	長谷川八十	銅像のある風景	尾田 龍	そてつ	小西 光雄
Tの顔	濃野 選	習作	長野 隆業	夏祭の頃	松村 綾子		
	土田 實	座像	金子 俊一	スタンドと子供	同		

踊り	近藤長三郎	清水 刀根	影を行く	峰岸 義一	アンドレ	モリス・ア
風景	河邊 實	木寺 轍	想ひを	高井 貞二	花と裸婦	スラン
窓	神保 俊子	杉 三郎	沼	同	メランコリー	同
はりがね	佐伯 米子	水谷川忠磨	花	伊藤久三郎	桃色のクッサン	同
龍	椎塚猪知雄	佐藤 俊介	あくろばつと	高橋 迪章	サン・クルーの橋	同
静物	同	井上 志星	家屋	青木 壽	編物をする女	同
矢大臣	同	青木 一夫	天牛	新井ふみ子	ヌイリー風景	同
電氣スタンドのある静物	同	遠藤 了敬	手袋	東郷 青兒	モデル	同
父鬼風景	川有智良三	西田 静子	テラス	同	コンキヤルノ風景	同
市ヶ谷風景	龜崎 頼一	西山 闇二	月光	同	ロアール河畔の村	同
野	佐野繁治郎	オーゲ・ヘンリクセン	美しき音の世界	阿部 金剛	二人の友連	同
菜園	丸野 豊司	同	馬	山本 敬輔	果物	同
愛犬三光	篠原 來介	同	海濱の家	齋田 喬	マンダリンを持てる女	同
鶏	三木 弘	山口 藤一	歸路	野田 英夫	マスコ	同
緑蔭風景	高木 四郎	伊田猪知雄	夢	同	ジャンの肖像	同
養鶏所と染色工場	飯塚 英夫	多木 透哉	解氷期	高田 力蔵	キモノ	同
春浅き頃	松島 蘇泉	我部 政達	古風な望遠鏡	同	レイモンド(二)	同
晩夏交響樂	野間 仁根	波多野正一	二重奏	藤田金之助	花	同
海邊 1	同	倉田 恒雄	舞踊	同	海岸	同
海邊 2	同	鹽野 博	海軟風	浪江勘次郎	我が家族	同
日曜日の横濱税關	横 性俊	岡田 謙三	龍骨	同	黄櫨	同
夏果	中山 安	同	石灰工場	鈴木 正治	卓上静物	同
平穩の入口	雄川 泉昌	同	池	山口 長男	憩ひ	同
濱名湖風景	竹田 久	山本 直武	コルセット	飛山 幸子	縁側の讀書	同
木曾川の舟	小澤 秋成	鷹山 宇一	室内	加藤 文正	百合	同
排水溝の午後	加藤 五郎	李 仲生	祭	桂 ユキ子	町の地蔵尊	同
静物	原 夏江	水谷 武彦	レイモンド(一)	モリス・アスラン	庭	同
庭	日高 健泰	後藤 繁喜	イボンスとチ	同	支那少女	同
裸婦	中村三樹男	鈴木 三郎	ユトリツブ	同	風景	同
海岸親子	清水 刀根	同	座せる裸婦	同	宮島 庸二	同
眠れる母子	同	峰岸 義一	青いフォトイユ	同		

チキユ岬	田邊三重松	靜浦之景	吉武 友樹	花	高取 榮枝	植物園初夏	小田 島義
碇泊	同	山陰海濱	尾崎悌之助	山橋と谷川	田崎 廣助	大谷石門	内藤 秀因
テル坊	笠置イヅ子	冬の湖畔	岡本 耕林	山村と小川	同	燈臺の見へる風景	中條 茂
朝	松井 正	風景	小野岩太郎	胡瓜畑	古茂田公雄	鳥	出口 實
窓	同	立秋	松本 弘二	風景	荒井 一郎	ダンシングホール	周 襄吉
早春	同	夏果	同	庭の一隅	野村百合子	田園雪景	宮川 秀左
湖畔風景	高田 誠	ブッペー	同	姿	溝部 壽子	魚屋小景	井口 節三
松原湖邊	同	小女	野尻 三郎	初夏の庭	幸島 重雄	立葵	中野 泰之
お祭り	石田 三郎	日置河口風景	清水 茂郎	池のほとり	榎 愛子	花	酒井 精一
力闘師	小島 詰治	町の裏	内山 泰一	鳥の見える無花	越智浪右衛門	ベナン入港	山路 眞護
小憩	森 英	利根の河原	神保 宣雄	果畑	伊庭傳治郎	小港	眞隅 太莊
春の丘	藪野 正雄	診察室靜物	寶角 律子	憩へる裸婦	同	木曾路の梅	高井壽三郎
黒衣婦人像	山口 久一	ドヤ／＼(四天 王寺の裸祭)	伊藤 繼郎	朝鮮服の子供	同	漁夫	下瀬 貞和
海邊の朝	伴 敏子	親子の行人	同	漁村	伊藤 澄子	菊の庭	藤田 輝世
風	小栗 三枝	鳥籠を賣る親子	同	靜物	米良 道博	群像	田村孝之助
はだか	下高原龍巳	二人	高橋 進	父と子	桑原 實	裸婦	同
海の見える風景	渡部 豁	横濱萬國橋風景	中村徳次郎	綠樹	岩崎 重雄	グロキシニア	同
風景	森 繁	面の畫家	遠藤倫太郎	花	長谷川そめ子	ロシア人の店	常岡卯三郎
八月の南圓堂	寺田清四郎	井邊	原 伊市	山門	南出 信一	迂り臺	御供 長夫
卓上靜物	近藤 七郎	白日の眩惑	松田 進	早春の丘	今井 退藏	山麓の冬	中野安治郎
裸體	遠山 陽子	志摩風景	竹内 喜助	鯛の加工場	園谷 敏樹	母	渡邊千代樹
虫	高橋 庸男	蒸し暑い日	甲斐 仁代	燈下	伊谷 賢藏	鳩の飛ぶ池畔	市野長之介
飴賣と子供	酒井 亮吉	竹屋	瀬尾 退	溪谷	同	M博士の像	三芳 悌吉
蔬果	同	睡蓮	廣田 延造	裸婦	同	番所ヶ鼻	辻村 富藏
提灯	同	奈良風景	長谷川清二	屋内プール	堀澤 好一	風景(水彩)	生田 正雄
秋の風景	同	時計のある門	同	花と少女	中西倪太郎	上海のボリス	間所 一郎
丘の眺瞰	中村 善策	山家	山本 直治	山ノ手風景	廣野 重雄	(水彩)	米倉 兌
照り翳る街	同	山容	同	雪景	山内善三郎	門と樹(水彩)	飯島 八郎
ウクレレと娘	西阪 修	城内風景	渡邊 信正	閻魔大王	岡田オカイン	田園調布(水彩)	井上 安男
ハルピン墓地風景	濱野 長正	冬の陽さし	仲 素可	溪流	藤井 義晴	斧ヶ淵(水彩)	

山と湖水(水彩)	渡邊 多平	石膏像と人物	田中 忠雄
巖と瀟 (同)	十龜廣太郎	テラス	伊東市太郎
岩屋 (同)	同	善人と悪人	榎方 寅雄
國際波止場雨景 (同)	別車 博資	都會の工事場	和田 裕介
水郷 (同)	早川 國彦	眞夏の池	中谷 輝造
潮來風景 (同)	同	森	渡邊 得三
横濱風景 (同)	財 保	ボクサー	飯田 清毅
動物園 (同)	岩月 虎雄	碍子	饒平名智行
トマトのある静物 (同)	藤川 九郎	春の瀬戸	清水 富久
斜陽 (同)	小堀 進	緑蔭に憩ふ	早川 貞明
縁日 (同)	金澤 信夫	競馬	芝野 武男
酒田風景 (同)	荻野 康兒	初夏	岸 頼正
丘の道 (同)	坂江 重雄	花菖蒲	小島申一郎
峠 (同)	大淵 晴雄	梅	仲野 俊正
水邊 (同)	山本不二夫	春立ち還る	太田 四郎
栗林公園 (同)	西原 務	よろひ屋	辰巳 義人
いちじく (同)	井上 正子	晩秋	加藤 尚義
山中湖畔 (同)	石野 隆	人物	松見 秀子
横濱 (同)	富田 通雄	風景	森島 包光
鱗雲と港 (同)	東木 春水	水車小屋の秋	山本 秀臣
レグユーと見物 (同)	小田 正春	避暑地にて	坂本 益夫
輝く夜景	横井 弘三	庭の隅	西村 五郎
郵便屋さん	同	庭	坂 宗一
榮えゆく観音堂	同	ヒバリ啼く頃	金 煥基
静物	同	鋼鐵場	長谷川利行
花	津田 周平	死屍を掘る	増田 英一
備中松山城趾	鈴木 國威	ル・エエル(夏)	中村 眞
池畔	畑 勇隆	大谷風景	菅野 廉
奉天の盛場	秋元 達三	港の朝	船橋 治彦
	田口 正人	小徑	今西 春治
		松とビルディング	石川 重信

日本美術院第二十二回展覧會

於東京府美術館

九月七日—十月三日

新帝展に參加の爲秋期展を中止する筈であつた日本美術院は、帝展開催が昭和十一年二月に延期された爲と、其の他の事情もあつて七月俄に秋期展を例年通り開催するに決し、其の第二十二回展を九月七日に開いた。時期切迫して開會の事が定まつた爲、出品者の都合を慮つて今回のみは一般より公募せず、「試作展」として同人、院友、研究會員等院關係者の作品のみを集め、別に今春逝去せる同人速水御舟の遺作を陳列した。

試作展とは云ふものの、春の其れとは異つて力作多く、その點では相當見應へあるものになつたが、溪仙、青邨、靦彦、朝山、浩祐六同人の出品の無かつたのは寂しかつた。

第一室の大河内山郷の「五月の大菩薩峠」は寫眞的な洋畫に近い構圖を持つ風景畫、安孫子狹聲の「落椿」は南畫を巧みに採り入れた面白い寫實であつた。鈴木三朝の「魚類圖」は構圖は好し魚類も生き生きとは描かれて居たが人の心を掴む事の少いのは寫實に徹して居らぬからで、之は作者の腕の罪のみならず、油繪風に厚く彩色して寫實を試みた材料を考へぬ畫風にも由來しよう。日本畫には日本畫の寫實の道がある。佐藤耕寛の「鰯舟」は荒波に揉まれつつ捕獲に従事する三隻の鰯舟を勇敢に描いて居たが、青邨の今春の踏靑會出品作「眞鶴沖」が思ひ出される故か、寫實に妙にこだわつて居る此の作は甚だ物足らなく感じられた。

第二室の中村貞以の「少女」は動きのあるポーズ及び其の配置も優れて居たが、其の顔の歪形に少しく不自然なものを感じたのは讀賣に批評を書いた川路柳虹のみではあるまい。筆谷等觀の「落飾」は平凡、富取風堂の「花蔭」も好い出来ではなかつた。上田睦

草の「松の林」、鈴木鳥心の「夕映」は兩者共に探求心が見えて獎勵賞を授與されただけの價值がある。前者は寫實的風景の表現に於て、後者は夕日に映える樓閣の軒下に鳩を配した取材と裝飾的な取り扱ひに於て。

第三室に於ては郷倉千靱の「高原新秋」が光つた。碧い秋空を背景に花咲く秋草より秋草に張つた蜘蛛の巣を裝飾的に描いた其の構想と瀟灑なる彩色に、作者の近代的に洗練された自然觀照を窺ひ得た。山村耕花は洋裝の少女を出品したが失敗に終つて居た。洋裝では作者の得意とする江戸風俗とは異つた觀點を必要とするし、日本服とは違つて其の中に生きた肉體のある事を表はさねば洋裝の美は現れぬ。在來の日本畫家のデッサンではやり難からう。併し斯うした題材をも描かうとする興味の廣さは結構である。小川千甕の「晁市」は環狀に建てられた田舎の魚市場の内外に雜沓する人々を好く動きを以て描いて居た。田中案山子の「山葵澤」は寫實を基調としながら裝飾的效果を採入れて居た。

第四室には近藤浩一路が水墨で連作「御水取八題」を出品。日本畫の線を否定して、總て明暗の調子によつて寫實的に表現したものの其の技法は驚歎すべきものであり、筆も墨も好く生かしては居るが其れが寫實的效果を増して居るのみで蘊蓄に乏しいのは東洋の水墨の特性を殺して居るやうなものである。

木村武山の大作「日蓮」は圖柄の大きい割合に日蓮の烈しい精神力が表現されて居らなかつた。

第五室は佳作揃ひの最も見應へのある室であつた。堅山南風の「狗子」も佳ければ大智勝觀の「青田」も愛すべき作品であつた。中村岳陵の「爽秋」は秋風にそよぐ玉蜀黍の葉を畫の下部右寄りに描き、高く晴れた秋空を畫面一杯に見せて「爽秋」の氣分を満喫せしめるもの。北野恒富の「花」は櫻花の下に徳川初期の赤衣の女を描く。徒に懷古趣味に陥らず、華やかにしてなごやかな春の氣分を一抔の哀愁を添へて表はした。色彩も古代調を巧みに現代化して美し

い。奥村土牛の「野邊」は野邊の秋草を描いて澄み切つた秋の空氣を好く表はして居た。

之等の佳品の外に猶ほ此の室には此の會第一の收穫とも云ふべき二點の傑作が陳列された。横山大觀の水墨の「飛泉」と小林古徑の「白日」である。前者は畫面兩側に大觀得意の奇松の生へた絶壁がそり立ち、其の奥に滔々と落下する大瀑の中腹を見せたもの。畫面一杯に水しぶきの漲り、落下する水音の畫中より響き來るが如き感があつた。後者は紅蜀葵に子猫を描いて白日ののどかさを表はしたものの。

第五室の酒井三良の「風雪」は吹雪の野路を馬に轡を牽かして急ぐ馬方を寫實的に描いたものであるが、日本畫の領域に止つて而も近代的な寫實を行つて居る佳品である。小島一谿の「高麗の舊都」は三角形の民家の蟬集を描いて其の間々に朝鮮風俗を描き込んだ、建築の面白さを狙つたもの。小川芋錢の「雲層煙水」は六曲半双の大作で遠く筑波山を望む水郷の美を作者の特異の詩の世界の中に咀嚼して描いた南畫である。長野草風は「ボブラの秋」にボブラの上部を仰いで背景に高く澄む秋空を描いた。

彫刻部には際立つた傑作の無い代りに、相當の佳作多く、中に一番の出來榮えを示したのは、缺點もあるが木彫の「石工」、塑像の「ミス・エマ」、「ミス・ツルコ」の三點を出品した中村直人である。山本豐市は「遊佐選手像」に寫實を基調に理想化を行ひながら堅實な作風を示した。マイヨールを好く咀嚼して、其の作風に從ひながら日本的感覺を以つて、日本のモデルに對して居るのだが、其の結果としてマイヨールの持つ強さとモニュメンタリティーを失つて居るのは遺憾である。彼の作品は貧弱な我が塑造界に於て上乘のものであり、而して又其れは將來の發達に好き段階をなすものに違ひないが、現在の作風は日本人としての彼に有利でないやうである。むしろ比較的安易に構へて日本人らしい感覺を以つて制作して居る大内青圃の「婦人座像」に反つてモニュメンタリティーを見出し得たの

は日本人の彫塑に關して考へさせる所がある。平柳田中は「辰澤氏像」一點を出品。其の修練の技は賞讃すべきものであるが餘り面白いものではなかつた。

出品點數、繪畫二七三點、彫塑九〇點、入選、繪畫五一點、彫塑三六點。同人出品、繪畫十八點、彫塑十一點

授賞

繪畫、樫村白圭、上田畦草、上田三郎、鈴木鳥心
彫塑、辻汎吉

速水御舟の遺作展は別記の(一二六頁)故人の代表的作品と稱すべきものは勿論、其の發展の各時代の佳作優品は殆ど網羅して約百六十點を、ほゞ年代順に、同一傾向のものは同一室に陳べて六室に展觀。會場の都合からか一部は陳列替を行つた。常に探求して止まず多くの名作を發表して、而も猶ほ將來の發展を期待されて居た此の作家の高き藝術の世界を展開して遺憾がなかつた。

出品目録(陳列番號順)

五月の大菩薩峠 大河内山郷
孔雀雛 川崎省三
胡瓜 木村武夫
人形(一) 久保清子
人形(二) 同
小緑雨趣 村田一橋
菖蒲 佐々木京林
落椿 安孫子荻聲
魚類圖 鈴木三朝
達磨市 河内舟人
鰯船 佐藤耕寛

二少女

青榮 中村貞以
牽牛花 尾内林叢
落飾 吉岡 湊
花蔭 筆谷等觀
松の林 富取風堂
夕映 上田畦草
スイートピー 鈴木鳥心
鶴匠の家 石黒清房
涼音 三村石邦
赤茄子畑 加藤晨明
花柘榴 中島榮刀
華嚴 中島清
柘榴 眞道黎明
岩田光壺

みのり

少女

高原新秋

晁市

菜園

山半

唐もろこし

立葵

山葵澤

游鯉圖

海邊殘秋

朝顔

御水取八題

山田

日蓮

萩

鶏籠

鮮菜物

操業

武藏野

夏の朝

狗子

爽秋

花

青田

花苑の朝

飛泉

野邊

伊勢海老

春日

白日

柳下善三郎

山村耕花

郷倉千靱

小川千麴

内田青薫

吉田澄舟

菊地シヅ子

荒井里曉

田中案山子

井上新爾

眞道秋皓

高橋都哉

近藤浩一路

鬼原素俊

木村武山

櫻村白圭

保尊良朗

後藤芳仙

葛村啓一郎

柿沼宗居

鹽原光旦

堅山南風

中村岳陵

北野恒富

大智勝觀

上田三郎

横山大觀

奥村土牛

橋本靜水

中島萬木

小林古徑

紅葉

空薫

濱松圖

門

朝顔

風雪

龍あみ

高麗の舊都

百合

雲轡煙水

ボブラの秋

雪路

少女と犬

犬

彫

アヒルの雛

鷹(習作)

老人の坐像

鼠

天野君像

婦人裸像

月神

日神

首習作

少女裸形

ブウちゃん

松村氏顔

裸女習作

首習作

勞働者

水口青峽

冬木大丙

森博

鷹尾兵衛

木村武夫

酒井三良

山下日出子

小島一谿

橋本永邦

小川芋銭

長野草風

松本竹根

小谷津任牛

山口肇

宮本理三郎

有松保

杵谷精一

吉田瀧藏

矢崎虎夫

大内青圃

同

同

同

辻汎吉

同

大和作内

杵谷精一

古藤正雄

大野隆一

同

トルソー	倉持 芳	農夫	小林 貞吾
佛法僧	居崎 青峰	喜多氏像	松原 松造
立像習作	關 長造	鳩	同
シヤモの雛	宮本理三郎	遊佐選手像	山本 豊市
本間俊平氏の像	長濱 虎雄	獅頭	平櫛 田中
婦人裸像	白井 保春	辰澤氏像	同
ミスツルコ	中村 直人	若き男	石井 鶴三
石工	同	村田君像	喜多武四郎
ミスエマ	同	皆川氏像	宮本 重良
女の像	松村秀太郎	習作	小林 章
鳩	寺瀬 默山	M子	武井 直也
裸女坐像	杉本 宗一	浴後	同
孔雀	岡村 進	老嫗坐像	長谷川豊雄
百姓試作	關谷 充	裸婦	村田徳次郎
鷹	橋本 平八	憩ふ	森 豊一
男のトルソー	河野 正造	少女立像	林 是

第二部會第一回展覽會

於東京府美術館
十月十五日—十一月十日

第二部會の第一回展は、舊帝展に育つた中堅作家が新帝院に反對して、初めて在野の一團體として行ふ展覽會である所から世間の興味を集めたが、作家自身が變らぬ以上在野となつたとて其の藝術が甚しく變る筈も無く、二三作家が卓越した出來榮えを示した外は實に於ても毎年の帝展に比して向上して居なかつた。唯入選作品には所謂舊「帝展型」から大分離れた新しい傾向のものが數點見られて舊帝展に比べれば自由な氣持が認められた。とは云へ、其等とて一二の例外を除いては特に新しい主觀主義的作品ではなく、寫實を基調とする客觀主義のもので保守的傾向はやはり強い。此の會唯一の

グロテスクなもの（「アトリエ十一月號、向井潤吉評」と評判を取つた朝井閑右衛門の「考古學者と其家族」の如きでさへも、主觀の表現ではなくして、對象の性格描寫に際しての一方的なる誇張（此の點主觀的ではあるがむしろ漫畫の範疇に屬し、現代の主觀主義藝術とは異なる）でしか無く、脇田和の「ピクニツク」の如きも畫面の裝飾的整調を企圖して居る以外に積極的な主觀の表現は認められぬ。

かゝる保守的傾向、特にその優れた一部會員によつて代表されるアカデミズムは此の團體の特長であり、反新帝院なる政治的存在理由を第一に推し立て、居る此の會の藝術的存在理由は、アカデミズムを中心とする保守的團體たる點にあらう。

搬入作品の鑑査を新聞記者に公開した事と、開會前一日をヴェルニサージュの日として筆を入れる事を許した事は、日本では目新しい試みとしてジャーナリズムの上では可なり騒がれた。併しより多く世人の目を歎たしめた事は、和田英作を除く舊帝院會員たりし帝院七會員が友情出品とて各作品一點を出品した事である。

第一室は野心満々たる、比較的に新しい傾向を窺つたものと、此の會特有の穩健なる寫實の作品との雜居である。前者には前述の朝井閑右衛門の「考古學者と其家族」と脇田和の「ピクニツク」の外に佐藤敬の「海邊裸婦」なるピカソ風の大幅面があつた。海邊に横はる三人の裸婦は、其の肉體の量感の表現は幾分成功して居たが、生命の無い空虚なものであつた。形の上ではピカソ風であるが、一本の線にも生命の躍り出て居るピカソとは實の上では距る事遠い。此の外前者に數へられるものに、其の描法は寫實的であるが山崎坤象の「魚村印象」がある。内容の上でも、色彩的にも對照の面白味を狙つたものであるが、生硬の嫌ひがあつた。後者の代表的なものには江藤純平の「ロシヤの娘」がある。穩健なる印象派風の佳品である。伊藤悌三の「花を賣る」は穩な代りに鋭さの缺けた、市井の一情景の平凡なる寫實である。

第二室の權藤種男の「樹下」は印象派風で十分動きもあり、十七

世紀オランダの風俗畫を思はせる美しさであつた。

第三室には此の會の長老の作品と、七帝院會員の「友情出品」が並べられた。中「藤島武二の「神戸港の朝陽」は彼が此の二、三年來特に用ひて居る特有な簡略な筆致で、寫實の純化を目指した風韻ある風景畫である。岡田三郎助の「裸婦」は本格的な印象派の作品で、行き届いたその描寫は今年度有数の力作である。同じく力作と稱すべきは白瀧幾之助の「小禽」で、小鳥の轉る樹の茂みを靜なる觀照を以て描いたもの自然の中に没入して然も自然の中に溺れざる寫實の作品である。池部鈞の「酸漿」は中々に味はあるが、洒脱に過ぎた嫌ひがあつた。中野和高の「M氏肖像」は平凡で深みも無いが、相當に成功した穩健なる肖像畫。

第四室では寺内萬治郎の「浴衣」及び「葡萄」が目立つた。殊に前者は素直に描いて破綻無く、色調も整つて美しいが、内面的鋭さの無いのが難であつた。鬼頭鍋三郎の「午後」は晩夏の午後、室内に水を飲んで憩ふ二婦人を立派な技巧を以つて描いて居たが、觀照が通り一べんで堅實に描いて居ると云ふだけのものではあつた。

等五室の矢島堅土の「裸體」は構圖も妙を得て居るし、修練の積んだ要領の好い肉體の描出は好く裸婦の美しさを捉えて居た。阿以田治修の二點は持味を示し、鈴木千久馬の輕妙な特異な筆使ひは、今回の二點に於ては既にマンネリズムに陥つて、自然の眞を寫さざる遺憾あり、其の「土用波」の如きは或る批評家に「シャボンの泡のやうだ」と形容された。マンネリズムに陥る危険は太田三郎の「房州の娘たち」にも見られ、努力の作ではあつたが感銘の薄いものであつた。大久保作次郎の平凡な二點の中「磯の女」は動きのある構想で、二人の漁婦が生活を以つて描かれて居た。

第六室の小堀四郎の「兄妹」は二人を如何にも自然に立たせて描いた人情味ある作品。石川寅治は得意の船を題材に「造船所」を出して居た。

第七室の大河内信敬の「花と少女」はつり合ひの悪い、ちぐはぐ

な構圖ではあるが、その少女は鋭く描かれて居た。

第八室の小柴錦侍の「お告げ」は動きが無く固まつて了つて出来が悪く、鶴田吾郎の「玄牛」は比較的小作品であるが面白い構想であつた。

第九室は力作揃ひの部屋である。片岡銀藏「興城々外の春」、牧野虎雄の「朝顔」共に佳品であり、田邊至の二點は好き意味のアカデミズムの申し分無い作品、殊に「少女像」は人格的深みも備へた傑作である。金山平三の洗練された筆を以つて描かれた「春光」は小さいながら、場中に清らかに光つて居た。之に比べての「朝」は彼としては好い出来栄ではなかつた。辻永は「玻璃器などのある室内」に相當面白い構圖を試みて居たがまとまらず、得意とする風景畫「若葉の伊豆」に比べると出来が悪かつた。伊原宇三郎の「明貌」も亦傑作と稱し得べく、ピカソに形式の純化を教はりながらピカソが古典的な普遍化を説つて居るに對し、寫實的に個々の美を捕へて現實的な作品である。其の量のある裸體の表現は日本人には珍しい裸體に對する健全なる感覺を示して居た。吉田博の「雨後」清水良雄の二點、有馬さとえの「綠臺の少女」は特筆すべきものではなかつた。

第十室の三田康の「教會の人」は中々手堅く、歪形を行つた性格描寫は可成りの成功で、唯一の第二部會賞を授與されるだけの價值ある作品であつた。中村研一の「瀬戸内海」は内海を見下す高いテラスに憩ふ三婦人を描いた大作。例のアスラン風の描法であるが、其の題材は遙かに近代色を帯びて居り、達者に描いてあつたが、その更りアスランの細かい、味のある調子に缺けて居た。特選の山喜多二郎太の「寫生」は量の構成的表現には相當の苦心を拂つたものの如くであつた。

第十一室では猪熊弦一郎の「海の女」が光つた。現代の夏の海濱風景を鋭く把握して、裝飾的に表現した近代的なジャンルである。霸氣の溢れた作品で、主觀的に裝飾化して居ながら、自然の眞から

遊離して了はず、大畫面をまとめ上げて居た。文化賞の倉員辰雄の「唄」は客観的の寫實で真正面から自然に對して描いて居た。寫實的なものは廣本季與丸も支那服の「娘達」に將來を期待せしむる堅實な好技を示した。

第十二室には此の會の最も大きな收穫の一である小磯良平の「日本髪的女」が洋装の「踊子」と共に陳べられた。前者はアトリエの中央に腰掛ける日本髪的女を描いたもので其處に示されたマネー風に洗練された技巧は日本には類が少ない。尤もマネー風とは云へ細かい所に神経が走つて、それだけに物質感の表現などは巧みであるがマネーの力強さと大いさに缺け、餘計なアカデミツクな技巧への執着が見られた。後者も亦優品である。内田巖の「子供達」自身は好く描かれて居たが、其の空の描き方は一般に不評であつた。

第十三室には桑重儀一、多々羅義雄、緒方亮平、五味清吉等の穩しい寫實畫が陳んだ。岩崎勝平の「式根の濱」は同じく穩しい寫實ではあるが、特異な細密描寫と色調で目立つた。

第十四室の伊勢正義の「集ひ」は淡い調子で描いた薄暗い繪で、餘りに弱々しいとの批評が多かつたが、優れた構圖は十分に其の弱點を補ひ、適切な歪形と相待つて相當の表現力を有つて居た。

第十五室では大貫松三の「夏窓」が特異な明るい色彩の用法と、家庭的取材とに觀者の注意を引いて居た。

第十六室は穩しい寫實の室で赤松麟作、鱧利彦、巽健次郎等の作品が並べられた。

第十七室には加藤靜兒、北蓮藏等の穩健なる寫實、橋本邦助の日本趣味の克明な寫實、高村眞夫の之も日本趣味であり乍ら、十九世紀のアカデミズムを思はせる典麗なる寫實の作品と共に、平岡權八郎のフオーブに近い奇矯なる「踊りの衣裳」、小林檜治郎の漫畫的面白味を多分に持つ風景畫にして風俗畫なる「宿場(富士見)」等が見られた。

第十八室は水彩、版畫に充てられたが、版畫には見るべきもの無

く、水彩では三宅克己、河合新藏が溫雅なる寫實の風景畫を示し、中西利雄が文化賞の「婦人帽子店」に店内の場景を、巧みな構圖の中に捕へて要領の好い線を以て描いて居た。春日部たすくの「山路の春」、渡邊菊一の「少年と獨樂」も特記するに足りる。搬入點數四三八四、入選點數二八六、陳列點數三七八。

授賞

第二部會賞	特選	三田 康	文化賞	特選	山喜多二郎太
昭和洋畫獎勵賞	同	脇田 和	同	同	有岡 一郎
文化賞	同	伊勢 正義	同	同	朝井閑右衛門
同	同	田澤 八甲	同	同	佐藤 敬
同	同	中西 利雄	同	同	南 政善
同	同	倉員 辰雄	同	同	耳野卯三郎
新會員に推舉せられたもの。					
角野判次郎	田中繁吉	中西利雄	内田巖	山喜多二郎太	濱地清松
牧野司郎	小林眞二	有岡一郎	佐藤敬	佐分眞	鬼頭鍋三郎
三田康	宮部進	耳野卯三郎	鈴木誠。		

出品目録(陳列番號順)

二人	内田 武夫	父子	脇田 和
考古學者と其家族	朝井閑右衛門	ロシヤの娘	江藤 純平
馬	井上 幸	庭前梅樹	近藤 洋二
山の靜物	岩船 修吉	障磚競馬の圖	高倉 一榮
山峽	同	雪晴れ	倉垣 辰夫
女	森田 元子	花を賣る	小林 泰山
海邊裸婦	佐藤 敬	靜物	伊藤 悌三
庭にて	石井 明	夕映	伊藤 鎭一
漁村印象	山崎 坤象	坐像	笹岡 了一
北海道海邊	西村 計雄	シユミーズの女	櫻井 悦
			山中清一郎

黒卓上の静物	川村精一郎	小窩	白瀧幾之助	土用浪	鈴木千久馬	和装座像	三谷 浩三
畫室にて	白石久三郎	紫陽花	同	小春日和	同	春雪	相馬 其一
南郊の池	高木春太郎	友だち	三上 知治	房州の娘たち	太田 三郎	子供	慶松左武郎
お茶時	藤 彦衛門	M氏像	中野 和高	老梅	水戸 矩夫	金魚のある静物	野村 豊子
巖	鹿島 治郎	少女	南 薫造	裸立像	和田 清	大島の春	安田 豊
木馬	高田 武夫	酸漿	池部 鈞	蓮	長原 坦	夏の休み	小林 邦二
秋の裏庭	新野 歡一	庭	土本 ふみ	睡蓮の客	大久保作次郎	雪景	黒田 頼綱
秋景静物	上田巳之助	庭	李 石 樵	磯の女	同	花と少女	大河内信敬
物賣り女	金澤秀之助	石の寶殿	工藤 正義	街頭所見	長屋 勇	魚市場	田中 孝夫
午後の庭	池島 慶春	晩夏	土本 薫	小牧山の麓	山本 信一	雪景	市ノ木慶治
花持てる女	水上 信雄	晩春の池畔	西岡 幹穂	黄色の服	田中 繁吉	青いスカートの女	佐々木兼次郎
初秋	二町欽次郎	蟬	大久保百合子	スキーの仕度	田中 甚吉	庭隅の春	浅井 政勝
漁夫	北島 浅一	高原秋深	柚木 久太	曇日	川口 四郎	刺繡	長 明
裸婦	同	島海浴口	同	風景	中山 正義	緑蔭	樋口 一郎
樹下	權藤 種男	壬生狂言	伴 庄兵衛	城下	福原 達朗	八月の頃	小倉 一雄
飾棚	小林 眞二	早春	田中 義夫	雪の宿場	松村 菊麿	青衣の女	藤井 芳子
閑庭	杉本 貞一	石切る村	大澤 海蔵	池畔の乙女	浅井 忠雄	浅春	青木 新作
晴	木下 邦子	浴衣	寺内萬治郎	瓦焼き	南 素行	海邊漁夫	榛葉嘉一郎
ヅキナス	牧野 司郎	葡萄	同	造船場	石川 寅治	或る家族	塚本 茂
子供	加茂うめゑ	静物	飯田 實	さゝやかな庭	筒井 茂雄	満人街	島野 重之
朝鮮紀念	永地 秀太	午後	鬼頭鍋三郎	桃のある静物	柏木 治子	机上静物	氏家 次郎
芦の湖	中村 不折	K教會	高山 道夫	肖像	能見 三次	静物圖	濱邊 萬吉
三千佛	中澤 弘光	甲陽園風景	山口 弘	裸婦	橋本 三郎	疎林の花	小林 榮
木屋	新井 寛	水浴	安宅安五郎	花園	箕浦壽喜三	たそがれの波止場	小原 誠
砂丘	同	湖畔	同	きやうだい	小堀 四郎	風景	名村 定志
畫室の内	和田 三造	裸體	矢島 堅土	クラリネットの	安達眞太郎	サカサの樂屋	新保兵次郎
神戸港の朝陽	藤島 武二	松樹と雲	奥瀬 英三	ある静物	榎戸 庄衛	岡	杉山 一正
赤城の新緑	満谷國四郎	海	同	夏の宵	岡 正一	椅子	田原 輝夫
雨後	關口 隆嗣	黒犬	前田 眞一	庭	内田 象水	裸婦	末長 護
寄せたる波	小林 萬吉	苺畑	阿以田治修	夕陽の峰	遠山 近	診断を待つ	中田 信
裸婦	岡田三郎助	裸婦	同	丘を越へて	武田 一郎	御告げ	小柴 錦侍

新緑の頃(奥多摩)	松尾 敬一	梅林	森 桂一	山男	野口良一 呂	窓	足代 義郎
お雛祭	澁谷榮太郎	縁先	松原 勝	娘達	廣本季與丸	羊舎にて	清水敦次郎
生簀への路	岡田 一馬	里の春	西山 眞一	雪景	大野 隆徳	室内	梅野 順三
秋の夜	河井 清一	瀬戸内海	中村 研一	夏の川畔	同	奈良の森	吉田 苞
蓮池	石田 興夫	海邊	高橋 道雄	水邊	川隅路之助	夏庭	多々羅義雄
布置圖	青柳喜兵衛	船小屋	古城 戸優	T子の像	辻谷 勝三	I氏の像	桑重 儀一
風景	有川 武夫	或殊の人達	圓山 信一	トンボ釣り	鈴木 大視	狩獵	同
研究所のおぢさん	石原 政之	静物	岸井彌一郎	山百合	清原重以知	初夏閑日	小野田元興
赤いカバン	市村 雄造	船のある二人像	河野 通暢	子供達	内田 巖	海岸にて	今村 俊夫
南天桐	伊藤源右衛門	丘上	新道 繁	マダム・カリオリ	服部 亮英	式根の濱	岩崎 勝平
玄牛	鶴田 吾郎	寫生	山喜多二郎太	夕の川岸	跡見 泰	三人の子供立像	東坊城光長
竹林	安藤 信哉	池畔	高山 武雄	静寂	同	花屋の店頭	橋 作治郎
興城々外の春	片岡 銀蔵	高原の初秋	石井四郎三	初秋行樂	栢 森 義	豚	鈴木 敏
鶏	太田喜二郎	看護婦	須田 烈太	柿のある風景	砂田 正二	男二人	高田 廣喜
朝顔	牧野 虎雄	卓に倚る三女	津田 巖	踊り子	小磯 良平	庭先	錦織 剛一
松下娘肖像	大井 基光	鯉	佐竹徳次郎	日本髪娘	同	ゴリラウンド	高昌 正勝
朝の湖	田邊 至	放馬	武永 楓雄	工大附近	木下 五郎	白馬二題目の出	香田 勝太
少女像	同	港の午後	石原 義武	室内裸婦	小寺 健吉	白馬二題月夕	同
朝	金山 平三	無題	鈴木 誠	庭の裸婦	同	緑蔭	緒方 亮平
春光	同	帝大風景	田中 政子	朝	小林 富藏	静物	東海林萬吉
若葉の伊豆	辻 永	馬車	笹鹿 彪	小寓の家	小泉 秀松	裸體	堺井 駁一
玻璃器などのある室内	同	後庭小祠	太田嘉兵衛	T先生の像	有岡 一郎	静物	尾崎 菊壽
雨後	吉田 博	蜷	倉員 辰雄	二月の河	朝倉 力男	婦人像	福田 新生
縁臺の少女	有馬さとえ	海濱の少女	富田温一郎	腰を掛けたる女	瀬戸千代三	秋	五味 清吉
明貌	伊原宇三郎	夏の花	同	秋近し	田邊 嘉重	少憩	同
夏の榛名	清水 良雄	花束	吉村 芳松	婦人像	松田 正平	女子像	田代 謙助
肖像	同	石楠花	松邨 巽	グラウンド	井口 清	露臺にて	江崎 寛友
岡つゞき	曾我 英吉	アマリ、スと果物	同	奥利根の春	鈴木榮二郎	池の畔	木下 克己
教會の人	三田 康	釣	武良 俊明	盲人と少女	南 政善	着衣座像	池上 浩
春の花	塚田 稔	屋上庭園	天井 陸三	アコデオ	同	黒と白の静物	松下 忠雄
髪を編む	鈴木 金平	海の女	猪熊弦一郎	ホームズ氏の庭	福岡 繁樹	小憩	鈴木 貫司

湖畔閑日	石川 滋彦	静物	中谷みゆき	隼	根本 雅夫	眞夏の大沼	河合 新藏
湊町風景	谷 福太郎	夏窓	大貫 松三	朝顔	足立眞一郎	雨後の草色	同
山	古山 武治	聴音	旭立 印象	踊りの衣裳	平岡權八郎	山	相田 直彦
小泉の畔	内藤 隼	庭前	須田 壽	宿場(富士見)	小林獺治郎	雪後	同
秋	三好 俊一	梅	金澤 重治	休日子等	星野 正三	初秋の窓にて	宮部 進
朝市場の一隅	富川 潤一	人形	山田ふじ子	風景	岩崎 愛治	伊豆風景	同
泥棒市場にある	野田武太郎	さぐえの圖	大森 茂樹	日の暮	安藤 義茂	婦人帽子店	中西 利雄
皇寺樓門	山口 猛彦	高島老人	田村 一男	G君	北 蓮藏	山路の春	同
果物屋	鈴木 貞子	OSA K A	池田永一治	海邊群童	井手 坊也	近郊	春日部たすく
少女坐像	奥森 隆	子供	瀬島 好正	兄の家族	坂田 虎一	玉葱のある風景	名柄 正三
お背戸	伊勢 正義	田舎の花賣り娘	杉村 惇	滞船(ツルガ港)	石塚 三郎	公園の朝(エツ チング)	大橋 義雄
集ひ	井口 勇	樹木と池	能勢 眞美	C嬢の像	松浦 莫草	布晒す家	三木 辰夫
榛名	中出 三也	室内	加藤 精一	波高き日	加藤 静兒	櫻山風景	曾我尾武治
自轉車練習	中村新次郎	母子像	青山 襄	小村五日	原本 虎雄	少年と獨樂	井原 大吉
窓ざわ	田原 利一	外出	白井 次郎	水瓜賣り	安武 芳男	廢坑の夏	渡部 菊二
裸婦	耳野卯三郎	風景	三上 亨	扇を持てる裸婦	高村 眞夫	初秋の山	長尾 三郎
庭	同	牡丹の咲く頃	赤松 麟作	ボンツクエ岬	山下 忠平		竹内梅治郎
裸婦	高橋 好雄	路傍の庚申様	佐藤 三郎	室内	伊藤 靖彦		
几上秋致	寺門 幸藏	人形を装ふ	鱧 利彦	栗	能勢龜太郎		
野鳥の剥製と花	田澤 八甲	森の家	鈴木 良三	寛城子所見	梶原 貫五		
庭の家族	林 應九	午後陽	木村 八郎	宿泊所裏	屋崎 三郎		
俊子の像	星野 二彦	青い静物	坂井 範一	洋梨のある静物	藤田 龜六		
丘の風景	村瀬 眞治	小閑	光安 浩	火	牧野 醇		
晩春の一隅	鈴木 啓二	想ひ出	前田 謙一	座像	中居 定雄		
海景	玉井 開藏	工場地風景	廣藤 道明	芍薬	橋本 邦助		
神武門	井上 種吉	落葉	橋田 庫次	菊	同		
静物	田村 信義	猫を抱く小年像	坪井 甚喜	秋深し	島口 信一		
支那机などに配	市川 勉	入江	安東 收一	十國峠の雲	三宅 克己		
せる静物	土佐林豊夫	集ひ	水戸敬之助	妙義山	同		
横濱港風景	角野判治郎	豊	巽 健次郎	八丈島風景	互井 開一		
花屋		裸婦	糟谷 實	梅林	雜賀 守三		

現代美術展覽會一覽

一月

刻正會農村工藝展(木彫) 四日—十日

於日本橋三越

出品せられたものは、農民を指導しての成果たる、副業としての純粹なる農民藝術品ではなく、長野縣上諏訪の小口正二等同人四人が寧ろ職業的に製作したもので、木を素材とする所にのみ農民らしさを見る「農民藝術」であつた。

意匠は北歐の農民藝術を手本として居て日本の農民らしき觀照及び感覺の現はれぬ謂はば銀座趣味に迎合するものであつた。技巧は副業ならざる職業として行つて居るので可なり優れて居た。技巧の完成は固より望ましき事ではあるがそれだけに農民藝術らしき素朴な味は失はれることとなる、のみならず一の獨立した職業としての「農民藝術」を作り上げる事は無意味である。今日要求されるものは農民殊に冬期整居を餘儀なくされる北國の農民を指導しての副業的農民藝術であり、又云ふ迄も無く日本人自身の創作である。

新時代洋畫展 五日—九日

於銀座紀伊國屋

二科、獨立、國畫會等の出品者であつた

長谷川三郎、大津田正豊、津田正周、村井正誠、矢橋六郎、山口薫の七人の若き作家が集つて、昭和九年春より毎月各自數點を出品、其の仕事に世に問うて居る「新時代洋畫展」の一月展は各作家相當の出來を示して樂しめる展観であつた。

此の團體は一言に云へばフォーブの流れを汲むもの、その現代的發展である。再び立體感を強調し單純化の中に現實美のクリスタリゼーションを試みるものもあれば、平面化を強調して裝飾化せんとして居るものもある。深みとモニュメンタリティーには缺くる所あり、完成せるものとは云ひ難いが、現代美術の好き一傾向を示す可なりレベルの高い團體である、將來の發展が期待されるが、遺憾ながら十年度を通じて何等の目覺しき進境を見せなかつた。其れ故に以後毎月の展覽會に就ては一々の記事を省略する。

NOVA美術協會第五回展(洋畫) 七日—十日

九日

於東京府美術館

寫實的のもの、シュールレアリスリズムに従ふもの、フォーヴィズムの流れを下手に汲むものなど、種々雑多な現代フランス畫の傾向を眞似た作品が見られた。出品點數一五四。

淡光會洋畫展 八日—十日

於大阪美術新論社畫廊

オサカ漫畫グルツペ展 九日—十日

於大阪阪急百貨店
京都美術館所藏美術品展覽 十日—

於京都岡崎美術館

所藏品四十六點及寄託品十七點の現代美術を陳列した。

山ノ宅宅展(建築) 十日—十三日

報知新聞社主催 於銀座伊東屋

第十回春臺美術展(洋畫、工藝) 十日—廿五日

於東京府美術館

本郷洋畫研究所の熟展である。従つて伊原宇三郎、辻永、中村研一、鬼頭鍋三郎、權藤種男、有馬さとえ等既に名を成して居る同研究所出身者の出品には申譯的のものも多く、特筆すべきものは無かつた。又一般出品中にも目立つたものは無く受賞作品も單に好く描かれて居ると云ふのみで、其以上のものを有つた作品は見られなかつた。唯今回の展覽會に就て特筆すべき事は昭和九年五月名古屋で自殺した片多徳郎の遺作を並べた事である。「花下竹人」(大正七年)「霹靂」(大正八年)の代表作を初め百廿九點が出品せられた。後期印象派の影響を受け、他方日本畫の構圖も採り入れてゐると同時に、當時ドイツに盛んになつた表現派からも多くの暗示を受けたかと思はれる「夏山急雨」を代表作とする、大正三年頃の激情の表はれた風景は若き彼の異常な才能を物語つて居た。「霹靂」は多くの缺點を有し又大作だけに神經の十分に畫の全面

に満ち溢れて居ない點もあるが、三十二歳にして此の作を成した彼が若し順調に進めば素晴らしい傑作を遺し得た事であらう。併し乍ら其の後の彼の仕事は遺憾ながら下り坂であつた。注意されることは彼が意識的に油繪を日本的なものにしようと努めてゐた事である。其の結果は藝術的に見て必しも成功してゐるとは云ひ難いが、個性的な特質と共に、日本人の感覚と神經とが繊細に涵み出てゐる一面は、近時屢々見られる同じ意圖に出でて粗笨なる仕事に對し、反省の資を與ふるものと云へるであらう。

出品點數 洋畫二四二、工藝五二、別に片多徳郎遺作一三〇、田中保雄遺作三〇、丹野次男遺作四、平田秋遺作一五〇
授賞

奉臺特賞 山崎坤象、和田清
奉臺賞 田中實一、伊藤悌三、大橋了介
新造型美術協會第一回展(洋畫)十日—十九日

於東京府美術館
昭和九年春獨立展より分離して結成した同人十一人の第一回展。其處には現代美術の惱みを表はすフランス畫壇の先端を行く種々な傾向が見られたが、其等が日本化したと同時に質迄も低下してつて居たのは本當に自分の惱みを惱まずに描いて居る結果であらう。出品點數九三。

鶴田吾郎近作素描展 十日—十四日

於新宿櫻葉集畫廊

美光會洋畫小品展 十一日—十七日

於大阪阪急百貨店
白日會第十二回展(洋畫)十二日—二十五日

於東京府美術館

此の會全體を通じて一番優れて居り、面白く見られたのは池部鈞の水彩畫廿四點(別に油繪一點)であつた。花見や踊りや化粧など様々の人物の姿態を簡略な筆使ひでスケッチ風に描いたもの。人の動きの瞬間を捉へて居るが、單に動きによつて形成された形の美しさではなく、人の動きの瞬間に表はれた人間的味はひ、生活の内容的なものをも鋭く描出して居て興味深い。漫畫家としての形よりも内容を掴まうとする才能が有利に働いて居た。併し是等水彩畫は結局スケッチとして成巧して居るので、油繪「校庭」に於ては本格的な内容とコンポジションを與へようとして失敗して居た。外の會員作中で特筆すべきは野口良一氏の「座像」「横臥」等の諸作であらう。白日會友獎勵賞の伊藤清水の「後庭」はラブラードの影響を示し可なり面白いコンポジションと風格を示して居た。

出品點數四四五。
授賞

白日賞 關口誠、綱島廉、山森茂(繪畫)
兒島典正(彫刻)
會友獎勵賞 伊藤清水、小堀進

富田溫一郎個展(洋畫)十二日—十七日

於日本橋三越

須田國太郎個展(洋畫)十二日—十八日

於大阪美術新論社畫廊

赫士社第二回展(洋畫)十三日—十七日

於日本橋白木屋

贊助出品 岡田三郎助、和田英作、田邊至

藤島武二、小林萬吾、南薫造

留加會第五回展(洋畫)十五日—二十日

於日本橋高島屋

清原齋畫展 十五日—二十五日

於新宿三越

東西諸家日本畫展 十七日—十九日

於銀座資生堂

主催 橋本多聞洞

久本弘一渡歐記念洋畫展 十七日—十九日

於神戸鯉川筋畫廊

早大高工建築作品展 十八日—二十日

於東京三共畫廊

水野喜作陶展 十九日—二十四日

於日本橋三越

島田福雄洋畫個展 十九日—二十四日

於大阪阪急百貨店

國風畫會第六回展(日本畫)十九日—二十三日

報知新聞社主催 於銀座松坂屋

國粹藝術として大和繪をより立てゝ行かうと云ふ高取稚成、磯田長秋、棚田曉山等の集りである。「少し保存にとらはれ過ぎて居る、古風を生かす事を考へて欲しい」

(報知一月廿一日)と云つた荒木十畝の批評

はそのまゝ出陳畫の性質を表すものと云へるであらう。

江藤純平個展(洋畫) 二十日——二十四日

於大阪美術新論社畫廊

蒼原會水彩畫展 二十日——二十六日

於神田東京堂

全國工藝品展 二十日——二十九日

於日本橋三越

居仁洞畫塾第一回展 二十日——二十七日

於日本橋三越

野田九浦門下生の塾展。

大阪美術同好會展 二十三日——二十七日

於神戸三越

日本水彩畫會第廿二回展廿三日——二月八日

於東京府美術館

所屬團體などの拘束なく、總て水彩畫を描く畫家は、三宅克己、石川欽一郎、眞野紀太郎等水彩の専門家、その他石井柏亭、南薰造、中澤弘光の諸家から、早川國彦、富田溫一郎、中西利雄等を網羅し、より若い多くの新人の出品をも見る此の展覽會は日本水彩畫の現状を示す特異なる存在である。此の會の性質並びに水彩畫そのものの性質から會場効果を狙ふ様な派手な仕事は少く、地道に自然を樂んで描いてゐる爲に親しめる作品が多かつた。とは云へ水彩畫をして本格的な繪畫に迄高めて居る人は割合に少い。其の中で優れて居たのは、やはり石川欽一郎、眞野紀太郎、早川國彦、中

西利雄、春日部たすく等水彩畫を殆ど専門にして居る人達であつた。

受賞者

李仁星、竹内梅次郎、野口健司、内山市郎

長尾三郎、光岡始

朱北樵子日本畫小品展 二十三日——二十七日

於日本橋高島屋

大阪新美術家同盟第二回展(洋畫)二十三日——廿七日

於大阪朝日會館

横山大觀作大楠公肖像展觀 二十三日

於谷中日本美術院

上山二郎洋畫個展 二十四日——二十六日

於神戸鯉川筋畫廊

日本漫畫展 二十四日——二十九日

於新宿三越

矢崎千代ニジヤヴァ風景畫展(洋畫)二十五日——三十日

於日本橋三越

曠技會牙彫展 二十五日——三十日

於日本橋三越

魯山人作陶展 二十五日——三十日

於上野松坂屋

星岡茶寮の主人魯山人の作品展。乾山、木米、祥瑞等徳川時代の種々多様な風を採り又吳須赤繪を倣ふなど、古來の名作に想を得て自由に各種の手法を驅使し、能く自身の藝術を完成して居る。澁さを有しながらに氣概に満ちた冴えた作品で有る。

諸家作品入札展(洋畫) 二十五日——三十日

於數寄屋橋日動畫廊

故三岸好太郎遺族慰問の爲、獨立美術協會によつて催された。

第二回三重縣輸出工藝展 廿五日——廿七日

於三重縣松坂市松信ビル

二科系作家洋畫展 二十五日——三十一日

於大阪阪急百貨店

郷倉千靱個展(日本畫) 二十七日——三十日

於名古屋市松坂屋

川西英版畫展 二十八日——三十一日

於神戸鯉川筋畫廊

日大専門部工科建築科第六回設計製圖展

二十九日——三十一日 於銀座紀伊國屋

奈知安太郎洋畫小品展 二十九日——三十一日

於銀座紀伊國屋

現代洋畫諸家近作展 三十日——二月五日

於新宿櫻製菓畫廊

日本漫畫展 三十一日——二月四日

於横濱壽屋

二月

田中佐一郎洋畫個展 一日——四日

於神戸鯉川筋畫廊

六潮會第四回展(日本畫、洋畫) 一日——五日

於日本橋三越

三名の日本畫家、中村岳陵、山口蓬春、

福田平八郎と、三名の洋畫家、中川紀元、

牧野虎雄、木村莊八との會で、洋畫家達も

日本的油繪を心掛け且つ日本畫をも試みてゐることが見られる。たゞ三名の日本畫家が在來の道を進んで小品ながら本格的な日本畫を描いてゐるに反し、洋畫家の中では牧野虎雄が南畫風を加味した完成せる特殊な畫境を示してゐる外は、未だ何方つかずで、殊に洋畫家の日本畫が甚だ幼稚な域に在ることを思はせるものであつた。

新時代洋畫展 一日——五日

於銀座紀伊國屋

第四回新興美術協會展(洋畫公募展) 一日——

七日

於大阪松坂屋

大森啓助滯佛作品展(洋畫) 一日——五日

於數寄屋橋日動畫廊

童實美術第五回展 一日——十日

於日本橋三越

柚木久太洋畫個展 一日——七日

於上野美蘭社

石川秀太郎個展(洋畫) 一日——五日

於大阪美術新論社畫廊

商業美術展 一日——七日

於名古屋松坂屋

大平洋畫會第三十一回展(洋畫、彫刻) 一日——八日

於東京府美術館

明治美術會以來の古き歴史を有つ此の會は、會の首腦である大家達を中心にして、同洋畫研究所に會て籍を置き、或は現在置いてゐる若い作家達の集つた展覽會で、云はゞ同人展と塾展とを一緒にした様なもの

である。往時の太平洋畫會と異つて、進んで其の藝術を世に問ひ社會に呼び掛けようとする意力の見えないことは、美術團體としての歴史的役割を果した、今は寧ろ教育機關としての仕事をしてゐる、此の團體の展覽會として或は已むを得ぬ所であらう。

授賞

相馬賞 廣本季與丸

中村彝賞 鈴木 滿

葵賞 大内 青坡

弘誓賞 江崎 寛友

昭和賞 岡 正敏

嫩草賞 井口 勇

石井彌一郎洋畫小品展 一日——七日

於大阪阪急百貨店

東西諸家日本畫新作展 二日——四日

於日本橋東美俱樂部

主催墨心莊

旺玄社第三回展(洋畫) 三日——十五日

於東京府美術館

主宰的立場に在る牧野虎雄は三點(けし、春、芍藥)を出品して圓熟せる畫境を示した。彼は油繪と云ふ材料を東洋的觀照の下に征服した極く少數の一人であることを見せてゐる。之に次で見應へのある作品は氣概ある達者な寫實を示した上野山清眞の作品六點、殊に魚の習作であつた。鱸利彦の「ミシン」に於けるしつかりした寫實も注目に價した。尾崎三郎の「停車場」に示し

た寫生力は斯うした方面には兎角弱い日本人として推賞するに足りるが、説明的なものは物足らぬ感がした。

陳列點數三五七

受賞者

旺玄社賞 薄田 芳彦

目白賞 關川富士郎

中村彝賞 宮島佐一郎

中央商會賞 松本 節

西綾女綾押繪展 三日——七日

於日本橋高島屋

武者小路實篤小品展(洋畫、日本畫、書) 五日——九日

於室内社畫廊

巴人社第二回作品展(洋畫) 六日——十日

於神田東京堂

藤田嗣治第二回油繪展 六日——十六日

於數寄屋橋日動畫廊

太平洋を取巻く人種を描く連作の一として支那、滿洲の人を描いた作品展。別に猫の水彩數點、それに昭和九年の二科出品作も見られた。小品が多く、中、支那人の胸像數點は背景に支那の版畫を描いて居た。其れは版畫の効果を丁寧に彼の達者な筆で眞似しながら支那の風物を古拙なる様式に描いたもの。他の水彩、油繪に於ては彼獨特のすつきりした日本畫の手法を加味した淡泊な描き方は相變らずであるが、色彩に於ては、歸朝以來其の濫いがフランス風に

洗練された色彩から轉向して日本風な、殊に江戸風な色彩に遷らうとして居るやうである。其の日本の色彩、日本の感覺を第一線に推し出して見やうとする試みのはつきり現はれて居たのは、どぎつい、然も原始的單純さと異なつて滋味ある色の和様の旗に飾られた和船の繪である。但し其れはそうした企圖のみが強く働き過ぎて、面白いが優れた作品ではなかつた。然し此の道は在佛時代行詰り初めた彼の藝術に新しい世界を開かしむるものであらう。彼は常に日本畫の手法を利用し、日本人獨特の纖細なる線を描いて居たが、永年の巴里に於ける活躍は彼の感覺と趣味を非常に歐羅巴的にしてつた。其れ故此の新しい道を切り拓くには尙多くの艱難が豫想される。此の個展にあつても在來の手法に據つたものゝ方が藝術的に完成して居た事は争はれぬ。

井上良齊作陶展 六日——十一日

村上美里油繪個展 六日——十一日

於京城明治町淺川號額縁店
第一回蒔繪展 七日——八日

主催日本美術俱樂部

三味堂洋畫二月展 七日——十一日

於銀座三味堂

中川紀元、曾宮一念、寺内萬治郎、東郷青兒の作品展觀。

河野通勢個展(洋畫) 七日——十三日

於大阪美術新論社畫廊

西陣織物大會 七日

於京都岡崎美術館

田邊至個展(洋畫) 八日——九日

於廣島文理大教育博物館

川路柳虹賛詩諸家小品畫展(日本畫) 九日——十五日

於上野松坂屋

永井久晴畫展(日本畫) 九日——十三日

於日本橋高島屋

六人會舞臺美術展 九日——十三日

於銀座松坂屋

第七回劇畫展 九日——十三日

於銀座松坂屋

主催日本劇畫協會

新興美術工藝品展(陶、漆、金、竹工) 九日——十三日

於大阪三越

清水登之廣島名勝スケッチ展(油繪) 九日——十三日

於銀座松坂屋

大阪女流畫家第二回繪畫展(日本畫) 九日——十三日

於大阪三越

日本畫の公募展。菅楯彦、矢野橋村、北野恒富三氏鑑査の結果八十點を出陳。

經人會洋畫展 九日——十四日

於大阪阪急百貨店

二科、春陽、全關西洋畫展等の新人出品。

構造社繪畫部試作展 十一日——廿三日

於東京府美術館

光風會第廿一回展 十一日——廿七日

於東京府美術館

白馬會が解散して光風會が新に生れた時既に此の會は、白馬會が有して居た様な藝術運動の團體としての意義は有つて居なかつた。それは白馬會系畫家の交友團體の如きものであつたが、今は單に東京美術學校出身畫家の集りとなり、其の展覽會は帝展無き春にお互の作品を陳列しよう云つた空氣しか窺はれぬ。可なり寛選であつたらしく随分駄作も交つて、二段三段とぎつちり六百點以上の繪畫が竝んで居た。帝展出品と異つて會員達には相當の冒險的試みもあつて然るべきであるが、少し名の知れた連中は若くても其の意氣を缺き、何時もの型を繰り返してすまして居るのは此の展覽會を退屈にして居た。唯一の見應へある作品は藤島武二の「瀬戸内海」であつたと云つても過言ではあるまい。特別陳列として久米桂一郎の遺作八十一點を年代順に陳べたのは意義ある催であつた。彼の遺作展は物故の後間もなく、昭和九年十一月美術研究所に於て開催されたが、其の時よりは出品數も多く、多數の觀覽にも供せられた譯である。

陳列點數六三四(久米桂一郎遺作を除く)

授賞

光風特賞 伊勢正義、脇田和

光風賞 石川滋彦

F氏獎勵賞 井手坊也

川端賞K夫人賞 直木小太郎、今村俊夫

レイトン賞 南政善

三星賞 伊藤悌三、加藤精一

船岡賞 水上信雄、田中實一

ローヤル賞 上野斌郎

香川縣主催香川縣工藝品展 十二日—十七日

綾朋會彫金展 十二日—十六日

洋畫四人展 十三日—十七日

丸野豐司、木寺轍、杉三郎、川城國司出品

藤の葉會展(染織) 十三日—十五日

藤田、東郷、小村雪岱等の圖案に依る

土岐氏蒐集初期洋畫展 十三日—十八日

於京都岡崎美術館

土岐氏が明治初期の洋畫蒐集を思ひ付いたことも卓見であるが、過去五年間に二千點迄も買ひ集めた努力は、玉石混合の嫌ひあるとは云へ敬服に値する。其の一部を賣却せんが爲水彩畫をも入れて約百六十點の展觀であつた。黒田清輝の作品四點の中「海」を除いては何れも曾ての遺作展に洩れたもので、中にも「摘草する女」は例のグレーの少女の摘草する姿を描き、彼の作中でも特に優れたものゝ一であつたことは喜ばしい發見であつた。尙作者の鑑定に就ては疑問とすべきものがあつたことも附言

して置きたい。例へばワグマン婦人像二點(十七及十八)の五姓田芳松作と思はれたが如きである。

堂本畫塾如月會展(日本畫)

十四日—十七日

染織美術展 十四日—十五日

加藤靜兒洋畫個展 十五日—廿一日

和風仕立洋畫展 十五日—廿日

小島善太郎、齋藤清二郎、榊原一廣出品

小川翠村第三回個展(日本畫) 十五日—十七日

フランス作家小品展 十五日—十八日

マチス、ユトリヨ、フリエズ、ユグ、の諸作。

幸松春浦個展(日本畫) 十五日—十七日

第二回如水遊心畫展(日本畫) 十六日—廿日

特別陳列 竹田、木米、玉堂、大雅、華山等

昭和美術會第八回洋畫展 十七日—廿三日

戸田觀美堂主催新作日本畫展 十八日—廿日

矢橋六郎滯歐作品及近作小品展(洋畫)

十九日—廿三日

於銀座近代畫廊

二光社第五回洋畫展 十九日—廿二日

於神戸そごう

大阪朝日新聞支局後援

繪更紗趣味工藝品陳列會 十九日—廿六日

矢崎千代ニバステル畫展 廿日—廿四日

於數寄屋橋日動畫廊

第三回東光會洋畫展 廿日—三月五日

於東京府美術館

技巧的には優れて居らぬが、企圖の大きくしつかりした作品の多い潑刺たる展覽會であつた。東光會受賞者の平通武雄の四點其の對象とがつちり組んで居る所はよいが技巧未だ洗練すべき餘地があり、細部にもつと行き届いた感覺が欲しい。會員野口謙藏の四點、單純化と模様化の中に鋭く自然の美を把へて居る愛すべき作品であつた。會員熊岡美彦の作品は何時もながら一種の癖があつて其れが觀者をして親しみ難くさせてゐる。此の展覽會第一の收穫は會員橋本八百二の大作「海」であつた。之は此の會のみならず昭和十年度日本洋畫界の最大なる收穫の一と云へる。岩多き海邊の好晴の日に輝く大きな波の動き、打寄せては引く水の流れをしつかりと把へて巾二間に近い畫面に力強く描き出して居る。唯畫面左下方の黄色の岩は少しく不自然の感を抱かしめた。外には會員高間惣七の獨特の様式になる器用で美しい諸作、堀田清治の「雪

の峰、大川武司の力強い畫風が目立つた。
陳列點數四六一。

授賞

會友推薦 中尾達

無鑑査推薦 益山雅衛、正田二郎、森田茂

大和田富

東光賞 平通武男、副島秀生、大川武司

田中獎勵賞 岩下三四、三輪孝

K氏獎勵賞 家永騏三郎、井上脩、手島貢

山田獎勵賞 染谷篤男、辻利平、西寺鉄舟

長進、廣津滿帆、桑重清、棟

方志功

Y氏獎勵賞 石本秀雄、三井正登

N氏獎勵賞 松本富太郎、岸田淑子

東西大家洋畫展 廿日——廿四日

於大阪朝日會館

岡田、滿谷、山下、林、ゴーガン、ドラク

ロア、ロダンの諸作。

川北霞峰日本畫展 廿日——廿三日

於名古屋松坂屋

福井市郎洋畫個展 廿一日——廿四日

於神戸鯉川筋畫廊

關東五府縣聯合工藝展示會 廿一日——廿四日

於横濱商工獎勵館

東京、神奈川、埼玉、山梨、群馬の五府縣

出品。

高間惣七洋畫個展 廿三日——廿七日

於大阪美術新論社畫廊

小泉癸巳男創作版畫展 廿三日——廿七日

東洋古陶器展 廿三日——廿五日

於日本橋高島屋

倉橋藤治郎氏の蒐集展觀。

脇田和油繪小品展 廿四日——廿八日

於銀座近代畫廊

織田一磨山の版畫展 廿四日——廿八日

於吉祥寺驛前ナナン

新美術家協會第七回展(洋畫) 廿四日——三月

五日 於東京府美術館

二科會の若き出品作家達の集まりで同人

廿三人の出品點數一八二、公募しないだけ

に皆相當の水準に達した作品であつたが、

其の中で宮本三郎、田崎廣助、早川國彦等

が特に優れては居るものゝ、特に推賞すべ

き作品としては無く聊か物足りぬ展觀であつ

た。

第五回二期會洋畫展 廿五日——廿八日

於銀座伊東屋

辻愛造近作洋畫展 廿五日——廿八日

於神戸鯉川筋畫廊

東西諸家新作日本畫展

於日本橋白木屋

油繪四人展 廿八日——五日

於名古屋丸善

鬼頭鍋三郎、遠山清、中野安治郎、大澤海

藏。

戊辰會第七回日本畫展 一日——六日

於日本橋三越

三昧堂三月展(洋畫) 一日——六日

於銀座三昧堂

獨立展會員 伊藤、林重義、野口、川口

の作品展。

太白洞東西諸家新作畫展 一日——四日

於日本橋東美俱樂部

東西大家の日本畫五十點、彫刻十餘點出

陳。

環堵畫塾第八回展(日本畫) 一日——五日

於日本橋三越

小室翠雲の熟展である。翠雲は小品「萬

里去來」に軽い作品ながら大きな味を見せ

矢野鐵山は「金剛山水晶峯」に達者な腕と

意氣を示した。外に石川寒巖、安田半圃、

岸浪百艸居等多くの既に名を成して居る門

人の出品もあつたが、何れも帝展と異り調

子を落してゐるので物足りなかつた。

古屋浩藏滯歐作品展 一日——五日

於數寄屋橋日動畫廊

瀬戸工藝綜合展 一日——二日

於名古屋新愛知講堂

染木煦寛集南洋土俗工藝品展 一日——五日

於銀座資生堂

舞臺美術展 一日——卅一日

於日比谷東寶グリル

福田新生、野口信、關川富士郎三氏洋畫展

一日——五日 於新宿櫻製菓畫廊

三月

新時代洋畫展 一日——五日

於銀座近代畫廊

武藏高工建築科第四回作品展 一日——三日

於銀座三共

無絃社工展藝 一日——十日

於銀座服部時計店

淡光會洋畫小品展 一日——七日

於大阪阪急百貨店

山下大五郎洋畫個展 一日——七日

於大阪美術新論社畫廊

駿河臺洋畫研究所製作展 一日——三日

於同研究所

大阪美術展 一日——六日

於大阪三越

菊地契月、北野恒富、矢野橋村、水田竹

圃の四氏を鑑査員とする日本畫々展、推

奨六點、第一入選十六點、第二入選百六點

吉田秀吉水彩展 三日——十日

於上野美蘭社畫廊

鳳祥會新作工藝美術品展 五日——十日

於大阪大丸

徳岡神泉日本畫個展 一日——七日

於大阪高島屋

野中秀郎洋畫個展 六日——十日

於新宿紅雀

第五回獨立美術協會展(洋畫)六日——廿五日

於東京府美術館

主要展の項参照

第廿八回讀畫會展(日本畫) 七日——十五日

現代美術

於東京府美術館

荒木寛畝の歿後十畝が主宰する會である

十畝は「麗春」「煙雨」「晚秋」「寒空」の四

點を出品して努力を示したが、何れも彼と

しては特に優れた作品ではなかつた。池上

秀畝の「閑寂」はすつきりとした畫面に閑

寂な春の氣分を出して居た。外に西澤笛畝

森白甫、竹原嘲風、木本大果等の作品が見

られた。出品點數一四、別に關啓畝の遺

作六點、荒木月畝の遺作二點が陳列せられ

た。

授賞

賞一席 桐、海老原南巢

二席 溫室の一隅、須田青蒲

三席 鶏頭花、小倉要人

次點 中山愛治

第十九回日本美術院試作展 七日——廿四日

於東京府美術館

主要展の項参照

新興獨立美術協會第一回展 七日——十一日

於神田東京堂

神戸創作圖案協會展 七日——九日

於神戸鯉川筋畫廊

池部鈞水彩畫個展 七日——十一日

於數寄屋橋日動畫廊

渡邊大虚子個展(日本畫) 七日——九日

於銀座資生堂

文樂人形繪小品展(仙波久榮作)

八日——十日 於大阪高島屋

橋本關雪個展 八日——十日

於大阪高島屋

日露戰爭從軍記念スケッチ畫を展觀

神美社邦畫展 九日——十一日

於神戸市縣會議事堂

神美社主催にて關西諸家百餘氏の近作展

觀

春の青龍社展 九日——十四日

於日本橋三越

春の青龍社展は秋季展に對し院展に於け

る試作展の如きものであるが、元來が此の

團體は「剛健なる時代精神に合致する」新

しい日本畫の道を開拓せんと試みつゝある

もので、秋季も春季も試作展たる事には變

りがない様である。秋季展に比して規模が

小さく、會場の關係から少しく大人しい

落付いた作品が多いが、さすがに意氣壯ん

な所を見せた、概觀して製作の意圖には現

代人にびつたりしたものが見られるが、觀

照及技術に於て未熟のものが多かつた。

主宰者川端龍子はさすがに飛び抜けての

出來である。其の「浪戲」は先に發表した

春雪譜、創夜、愛染と共に四季屏風をなす

ものださうであるが、浪の描いた砂地の模

様に千鳥を一羽配したもの。此處に桃山風

より琳派への轉向とも云ふべきものを見せ

たが、精神に於ては自然の大きさを現して、

龍子らしい豪壯さである。同じく龍子の「鶴

鼎圖」の構圖がわざとらしく不自然なのは

彼の作に時々見受けられる缺點である。

谷口富美枝の「帯」はしつかりした立派な出来で一般にも好評であつたが、「實驗室」は構圖は面白いが味の薄い繪であつた。渡邊綱雄の「夜漁」は恐しく達者な才氣走つた描き振りであつた。外に社人加納三樂、坂口一草がそれぞれ面白い構想を見せた。前者は「探根」に於て水墨にも巧みな所を示してゐた。

鈴木千久馬洋畫個展 九日——十五日

於大阪美術新論社畫廊

第二回現代漆藝品展覽會 九日——十七日

於銀座松屋

漆工藝に於ける最も權威あり、古き歴史を有つ日本漆工會の主催「現代の實生活に適應せる室内器具」の展觀である。別に「古作の迫力に頼つて社會人の漆器愛好心を促し、併せて作家の參考に資せん」との趣旨で時代參考品を並べた。

異健治郎油繪展 十日——十五日

於新宿櫻葉畫廊

江田誠郎洋畫個展 十日——十二日

於神戸鯉川筋畫廊

九名會展(日本畫) 十日

於京都祥雲堂

富岡鐵齋遺墨展 十日——廿五日

於京都岡崎美術館

「南宗の衣鉢を紹ぐ最後の巨擘鐵齋富岡百鍊の生誕百年を記念してこの展觀は開催さ

れた。鐵齋畫の展觀として從來曾て見ざる大規模のものであつた。」「而して本展觀は慶應二年三十一歳の時の作品より初めてその若書にして略信すべきものを甚だ多數に蒐集し得た。この展觀の第一の功はこゝに見るべきである。京洛の地に於て鐵齋の畫を索むるとならば寧ろその夥多に駭き、取捨の煩に堪えざる程であらう。しかもその大部分は恐らく斯人が大名を得て後の晩年期のものが多く、その風格、畫業より推して駄作陋作は尠しと云ふべきも未だ必ずしも精品を以て許すべきもののみとは限らないであらう。その中に於て能く求め難き壯年期の作を蒐め、晩年期のものと雖も概ね佳品を網羅し得たことは至大の成功である。鐵齋は晩年に於ては時に墨氣濕潤に過ぎ、揮洒筆を縱にして、稍晦澁に陥つた作がないでもないが、その畫品は概ね馴雅渾穆、洵に士夫文人畫の堂奥に參する事を得た奇特の人である。然しながら鐵齋畫の研究に於ては、その此處に至る精進萬苦の迹を明らかにすることに一の重大な意義がある。

時に一蕙、爲恭の徒に親炙して土佐の風を容れ、時には元明の諸家を臨し、或は百川を撫し、竹田に訪ひ、木米に迫り、米山人を摹し凡有る古人を歴尋究してこの高逸なる畫格を得たその徑路はこの展觀に於て或る程度迄具體的に辿ることを得た。この展觀の第一義的價值をこゝに置くことは必

ずしも余の一個の見止まるものではないであらう。たゞ觀覽一過稍不滿を覺えたことは鐵齋生涯中に於て重要な一時期を畫し、又甚だ多作であつた大島神社大宮司時代の作品が意外に少いことで、これは和河泉の地方に相當豊富に散布されて居る筈であらうと思はれる。」(美術研究四十號ヨリ轉載)

出陳約三百點

近代日本畫家名展展覽會 十日——廿五日

於京都岡崎美術館

明治以降に物故せる作家中、京都に活躍せる及び同地に生れた作家約四十名を選び各人宛數點、合計百三十一點の作品を陳列した。選ばれた作家は皆明治年間に活躍せる人々であるが陳列せられた作品は古きは明治以前より新しきは昭和の製作に及んだ。但しその撰擇の範圍を殆ど京都に限つたらしく、代表作のみを蒐め得たとは云ひ得ぬ。

木村武山佛畫展 十二日——十六日

於日本橋白木屋

近作佛畫三十點を展觀

片多徳郎遺作並に後援綜合展

十二日——十六日 於大阪松坂屋

三岸好太郎遺作回顧展 十五日——十八日

於數寄屋橋口動畫廊

遺作中特に好いものは同時期に開れた獨立美術展に陳列されて了つたので(主要展

の項参照) 故人を知るには不充分の回顧展であつた。

第二回昭和工藝美術展 十五日——廿日

東京、京都の工藝各部門の中堅作家の新品時代に即して而も質實な佳品が並んだ。

阿部金剛個展(洋畫) 十五日——十九日

於小倉市商工會議所

津田青楓個展(日本畫) 十五日——十七日

於大阪高島屋

表装同人會第十回展 十六日——廿五日

於東京府美術館

工藝品展 十六日——廿五日

於大分縣殖産會

春虹會第一回日本畫展 十六日——廿三日

於日本橋三越

三越の肝入りで、京都畫壇の大家、所謂帝展系十六名に院展の富田溪仙を合せて十七名を會員として、新に組織せられた春虹會の第一回展。各人一點宛を出品して合計十七點、大作は無いながら、總べて相當の力作であつた。

出品目錄

春寒 石崎 光瑤
晴靄 西山 翠嶂
嵐峽 西村 五雲
櫻山吹 富田 溪仙
春 堂本 印象
稻 小野 竹喬

山寺暮雨

爐邊

舞妓圖

春衣

旗手

天保歌妓

吉野山

双鯉

雪中松鷹

下萌

花櫻折少將

川村 曼舟

竹内 栖鳳

土田 麥僊

中村大三郎

菊池 契月

上村 松園

宇田 荻郎

福田平八郎

榊原 紫峰

山口 華楊

案本 一洋

第一回七洋會洋畫展 十六日——廿日

於神田東京堂

白山卓吉個展(洋畫) 十五日——廿一日

於大森白木屋

第十三回新燈社展覽會(洋畫及日本畫) 十七日——廿四日

於東京府美術館

堂本印象日本畫個展 十七日——廿日

於大阪三越

新作十點を展観

上杜會第八回洋畫展 十七日——廿五日

於東京府美術館

六和會洋畫展 十七日——廿三日

於日本橋白木屋

山華社第二回展(日本畫) 十七日——廿三日

於日本橋白木屋

本染手織友禪展 十八日——廿二日

於銀座資生堂

石井柏亭洋畫個展 十九日——廿三日

於大阪朝日會館

愛知社第十二回展(日本畫、洋畫、彫塑、工藝) 廿日——廿五日

於名古屋市美術館

小早川清近世風俗畫展 廿日——廿四日

於福岡市東中州縣公會堂

東海輪出工藝試作品展 廿日——廿六日

於愛知縣商品陳列所

青柳喜兵衛洋畫個展 廿一日——廿六日

於新宿櫻製菓畫廊

新人派第二回展(洋畫) 廿一日——廿五日

於銀座紀伊國屋

宮田重雄滯歐作品展(洋畫) 廿二日——廿六日

於名古屋丸善

萌生會第一回洋畫展 廿三日——廿六日

於銀座三共

くぬぎ會美術展 廿三日——廿四日

於神田東京堂

小室翠雲個展(日本畫) 廿五日——卅日

於日本橋三越

「最近是可成り堅い決心を以て箱根の別業に引きこもり、老來心境の平明と共に閑寂の地を樂み、自然の風物を見る目にも即時の變化に伴ふ微細な心が映る様になつて來た」(報知三月廿八日隨筆)と云ふ翠雲がもう一度自然を見直しての作品廿餘點の粒揃ひの展観であつた。「今回の製作に當つては、色々色彩上の新しい工夫も凝らし、近代的な實物色など自分の理想的な色調に於てこなし見て見た點が多い」(報知三月廿九

日)と作者自身も云つて居るが色彩のみならず、筆技にも徒らに南畫の約束に囚はれず喜ばしい一轉振りを示した。

東京美術學校春季特別展 廿五日——廿七日

於上野公園同校

展覧目錄

狩野芳崖筆 大鷲一幅
 菱田春草筆 水鏡一幅
 狩野芳崖筆 悲母觀音一幅
 下村觀山筆 佛誕一幅
 西郷孤月筆 春暖一幅
 野田九浦筆 辻說法一幅
 橋本雅邦筆 白雲紅樹一幅
 寺崎廣業筆 大佛開眼一幅
 川端玉章筆 墨堤春曉一幅
 小堀鞆音筆 常世一幅

參考陳列品

狩野芳崖筆寫生及畫稿類 三卷
 淀宇治嵐山地取 二卷
 蔭繪下繪 一卷
 悲母觀音畫稿 一卷
 唐子遊其他畫稿 一卷
 大鷲畫稿 一卷
 悲母觀音下繪 二幅

番外
 下村觀山筆寫生及畫稿 一卷
 川端龍子日本畫個展 廿五日——廿八日

於大阪高島屋

吉川靈華遺作展 廿五日——廿六日

於上野寛永寺
 吉川靈華の七週忌を記念して行はれたものである。嘗て同處に於て行はれた展覧の際に囑目したのもあつたが、概して前回に出陳せられざりしものを求め可なり多數に精品を蒐めたと言へる。殊に嘗て金鈴社

に出品された大作「かぐや姫昇天」、又は細川侯藏「藐姑射處士」帝展に於て評判となつた「離騷」傳教大師像草稿、桓武天皇像草稿等の勝れた作品を初め、極く初期(未だ延景と署名してゐた時代)の作品二三をも見る事が出来た。出陳點數約九十。會期も短かく出品もさまで數多くはないが故人の高き畫品と人格を偲ぶには好個の展覧であつた。

藝美社邦畫展覽會 廿五日——廿七日

於神戸朝日會堂

京都市工業研究所試作品展覽會

廿五日——廿七日 於京都高島屋

陶磁器、金工藝品、漆器の試作品が並べられたが、何れも時代性と實用性を尊重した佳品であつた。

福澤一郎素描展 廿五日——卅一日

於銀座アモレ畫廊

東京美術學校卒業生製作品展

廿五日——廿七日 於上野同校

矢崎千代二海外風景畫展 廿六日——卅日

於大阪朝日會館

飯塚正賢能畫展 廿六日——卅一日

於日本橋白木屋

京都繪畫專門學校生徒作品展

廿六日——廿八日 於同校

黒色洋畫展 廿六日——卅日

於銀座近代畫廊

田中佐一郎洋畫 宇野三吾陶器個展 廿六日——卅日 於大阪美術新論社畫廊

一軌社展第三回洋畫展 廿七日——卅日 於神田東京堂

大衆向工藝品競技展覽會 廿九日——四月三日 於日本橋高島屋

四月

東京府美術館開館十週年記念綜合展

一日——廿一日 於東京府美術館

主要展の項参照

前田寛治回顧展(洋畫) 一日——十日 於銀座三共

昭和五年三十六歳を以つて逝いた前田寛治の遺作を其の弟子たる今口憲一が主催して其の代表作を殆ど集め、小さなデッサンから百號以上の大作十數枚に至る迄約百點を展覧した。其の中には未發表のものもあると云ふ。卓越せる才能の所有者であり次から次へと新しい問題の解決に悩んで居た非常な努力家であつた此の作家の遺作展は死後五年を経たにも拘らず猶其の新鮮さを

いつて人を魅了し、多くの作家に教ふる所
多かつた。

南蕪造洋畫個展 一日——七日

於廣島産業獎勵館

藤岡一第二回洋畫個展

於銀座アモレ畫廊

上野山清貢洋畫個展 一日——五日

於新宿櫻製菓畫廊

新時代洋畫展 一日——五日

於銀座近代畫廊

東陶會第七回展(陶器) 一日——五日

於日本橋三越

板谷波山、宮川香山、沼田一雅の大家を
顧問として、東京及其近縣に住する藝術
的なる陶匠の集まりで(會員名は便覧参照)
各々眞摯なる態度を以つて製作した作品を
並べて世に問うた。販賣を目的としない氣
持の好い展覽であつた。陶磁器の外には各
務鏤三が優秀なるクリスタル・カットを、
板谷梅樹がステインドグラスとモザイクの
小品を出して居た。各務鏤三によつて日本
のクリスタル・カットが歐洲の其れと大刀
打ち出来る様になつたのは喜ばしい。東陶
賞は大森光彦に與へられた。

東海美術協會第廿五回展 一日——十四日

於名古屋美術館

漆藝作品展 一日——三日

於高松市池田屋樓上

榎倉省吾洋畫個展 一日——五日

現代美術

現代十大家洋畫展 一日——七日

求龍堂主催

於銀座資生堂

先づ無難に撰ばれた現代洋畫壇十大家の
中小杉放庵が不出品で、展觀せられたのは
次の九點、荒磯(石井柏亭)、裸婦とチータ
ー(梅原龍三郎)、少女(岡田三郎助)、花(川
島理一郎)、裸婦(長谷川昇)、屋島(藤島武
二)、裸婦(滿谷國四郎)、薔薇(山下新太郎)
三寶柑(安井曾太郎)、各々小品ながら力作
であつたが岡田三郎助のみは明治時代の彼
としては決して優れて居ない滯歐作を出し
て居た。藤島武二は近年益々健在其の藝術
を深めて來た。「屋島」は數年前より試みて
居る簡略なる筆使ひにナイフを用ひての單
純化された風景畫で、油繪の特性を好く咀
嚼して東洋的觀照を表現して居た。此れと
共に此の展覽會の双壁を爲したものに安井
曾太郎の「三寶柑」があつた。同じく東洋
的觀照の所産で立體的に深みを以つて描い
てあるものゝ、三つの果實を出来るだけ上
部に位置せしめた構圖は歐風の立體的構成
の美しさを覗つたもので無く、其の對象の
味をしんみりと味はさせる東洋の靜物畫の
美しさを有つたものと云ふべきであつた。

春季青樹社洋畫展 二日——八日

於銀座青樹社

第五回獨立美術展覽會(洋畫)二日——十一日

於福岡日々新聞社

石井柏亭小品展 三日——七日

於銀座三味堂

臺灣美術聯盟第一回展 三日——七日

於臺灣教育會館

全國青年創作副業品展 三日——七日

於日本青年館

新東京百景版畫展 五日——廿日

於吉祥寺驛前ナ、ン

甲斐仁代洋畫個展 六日——十日

於新宿櫻製菓畫廊

未知會第一回洋畫展 六日——九日

於銀座紀伊國屋

日本美術協會第九十七回美術展(彫刻、工藝)

七日——廿一日 於同協會

日本美術協會の第九十七回展は彫刻及工
藝に當てられた。搬入總數五百三十九點の
中入選作品三百十八點、外に無鑑査作品五
十三點と共に合計三百七十二點が陳列せら
れた。又別に參考品として御物を初め高松
宮家御貸下品及び帝室博物館其の他諸名家
秘藏の能衣裳の展觀があつた。

伊太利大理石工藝品展 七日——十四日

於日本橋三越

福田新生洋畫個展 七日——十一日

於大阪美術新論社畫廊

島根縣美術協會洋畫展 七日——十一日

於松江市城山公園興雲閣

高木背水洋畫個展 九日——十三日

於銀座アモレ畫廊

渡邊明家具試作展 九日——十三日

於銀座資生堂

繪更紗展覽會 十日——十四日

於廣島産業獎勵館

圖案人聯盟主催第八回作品展覽會 十日

於京都岡崎美術館

柳川清一朗油繪小品展 十日——廿日

於數寄屋橋協和フルーツパーラー

現代一流藝術家餘技展(洋畫、日本畫)

十一日——廿日 於銀座三越

葛見安次郎洋畫個展 十一日——十四日

於新宿櫻製菓畫廊

小早川秋聲滿洲風物スケッチ展(日本畫)

十二日——十七日 於日本橋高島屋

トアル社洋畫展 十二日——十八日

於神田東京堂

五條會陶藝展 十二日——十五日

於京都岡崎美術館

アニメ第一回洋畫展 十二日——十四日

於銀座紀伊國屋

物故作家洋畫展 十三日——十七日

於大阪中區矢場町東陽ビル

大阪畫廊主催で黒田清輝、淺井忠、岸田

劉生、前田寛治、小出稽重、片多徳郎の作

四十一點を陳列す。

踏青會第一回日本畫展 十三日——十七日

於日本橋高島屋

高島屋美術部が主催して院展同人六名及び帝展系作家四名に村上華岳、小杉放庵を

加へて十二名の會員の(會員名は團體一覽

参照)各人一點の出品による展覧。元來が

商業的目的を主として居る爲か力作は少い

が、何れも一流の作家だけに總じて優れた

作品ではあつた。中に前田青邨の「眞鶴の

沖」は一段と優れて居た。理智的に整理せ

られた其の畫面は好く頼朝七騎落ちの劇的

動きを表現し、様式化された波の描き方も

却つて効果を増して居た。横山大觀の群青

の富士山に金泥を用ひた「曉色」は平凡な

構圖ながらもやはり大觀獨自の境地を見せ

た。富田溪仙の「河鹿鳴く谿」は平常と異

り著しく寫實的に描いたものであつた。國

畫創作協會解散以來公開展への出品を全く

絶つて居た村上華岳の作品二點の出陳は觀

者を歎ばせた。其の中「佛陀」は作者得意

の題材でなつかしく見られ「秋の山」は南

畫風の風景畫で、其の層をなして深み行く

山には秋の美しさがよく味はれた。

藝美社新作邦畫展 十三日——十五日

於神戸三越

第七回秋田美術展 十三日——十四日

於銀座三共

北島淺一洋畫個展 十四日——廿日

於銀座アモレ畫廊

故寺内梧鳳作品展 十四日——十六日

於銀座松坂屋

新興洋家具陳列會 十四日——十七日

於日本橋高島屋

JAN油繪小品展 十四日——十九日

於新宿櫻製菓畫廊

ザンボリーニ洋畫展 十四日——十五日

於銀座青樹社

第六回京都工藝美術展 十五日——十八日

於京都岡崎美術館

搬入點數六百六十三の中二百七十六點入選、外に無鑑査出品二十點、審査員出品十六點、受賞者は左の如くである。

協會賞 中村鵬生

特賞 加藤宗巖、米澤蘇峰、皆川月華、

水内平一郎

選匠賞 田中貞造、村田信續、汐瀬吉藏

松本石亭、淺見五郎助、岸本景

春

クロツキー研究所第五回展 十五日——十九日

於銀座三共

小山敬三個展(洋畫) 十五日——十九日

於銀座資生堂

北支那の旅行に際して描いた作品十五點の展覧。畫材の選擇は從來通り、城壁のマツシブな量感の描出を追求したものが多かつたが従前の比較的生硬な表現の癖が無くなり、畫面に餘裕を生じ、畫趣も潤澤となつて來て居た。

清光會展(日本畫、洋畫) 十五日——十九日

於大阪美術新論社畫廊

記事は五月東京に開催の場合に譲る。

川島理一郎バステルとデッサン個展

十五日——廿四日 於銀座近代畫廊
 商工省第十二回工藝展 十六日——廿五日
 於東京府商工獎勵館

主要展の項参照

青々會第四回日本畫展 十六日——十八日
 於芝東京美術俱樂部

帝展の中堅作家である六人の會員（便覽参照）が各々二曲一雙の力作（外に各々小品一點）を出品した此の展覧は、十年春の日本畫展中最も見應へあり最も樂めるものの一であつた。廣島晃甫の「田舎雨情」（二曲左半雙、展覽會後右半雙を完成す）は寫實が堅實で而も詩情溢るゝ如き優品であつた。之程質實ではないが、同じく詩趣豊かなものに山口蓬春の竹林圖（二曲一雙）があつた。伊東深水の「日照雨」（二曲一雙）は清新さを示したが、特筆すべき出來でなく兒玉希望の「雪中喜鵲」（二曲一雙）はその努力では多とすべきであるが、藝術的には小品「濛雨」の方が優れて居た。

青丹會第三回洋畫展 十六日——十九日
 於銀座紀伊國屋

圖案家協會展覽會 十七日——十八日
 於京都岡崎美術館

北陽會展（綜合） 十九日——廿日
 於日清生命ビル永樂俱樂部

長野市主催長野新興家具木工展
 十九日——廿七日 於日本橋高島屋

松田文蔭洋畫個展 廿日——廿四日
 於新宿櫻製菓畫廊

熊岡美彥洋畫個展 廿日——廿四日
 於京城三越

落合朗風日本畫個展 廿日——廿四日
 於上野松坂屋

萬鐵五郎遺作展（洋畫） 廿一日——廿五日
 於大阪美術新論社畫廊

行人社第七回洋畫展 廿一日——廿九日
 於銀座青樹社

一九四〇年協會展（洋畫） 廿一日——廿五日
 於銀座紀伊國屋

日本バステル畫會第十回展 廿三日——廿九日
 於銀座三越

鈴木信太郎洋畫個展 廿三日——廿五日
 於大阪野村ビル有恒俱樂部

白聖會展（洋畫） 廿四日——廿九日
 於京都岡崎美術館

松本政子滯佛作品展（洋畫） 廿四日——廿七日
 於銀座アモレ畫廊

大阪美藝社主催繪更紗趣味工藝品展
 廿四日——廿八日 於名古屋丸善

末長護洋畫個展 廿五日——卅日
 於新宿櫻製菓畫廊

佐々木永秀個展 廿五日——廿九日
 於銀座三味堂

塚本茂油繪個展 廿五日——卅日
 於新宿櫻製菓畫廊

黑色洋畫展 廿五日——廿九日
 於銀座近代畫廊

藤嶺染試作品展 廿五日——卅日
 於銀座三越

圭林會洋畫小品展 廿五日——廿九日
 於京都四條大丸

バーナード・リーチ、濱田庄司、河井寛次郎
 陶器展 廿五日——廿六日 於大阪高島屋

現代日本民藝展 廿五日——廿八日
 於大阪高島屋

近藤樵仙日本畫個展 廿六日——卅日
 於日本橋高島屋

徳田一衛、中村金作、麻布三郎洋畫展
 廿六日——廿八日 於銀座紀伊國屋

小見寺八山遺作展 廿六日——卅日
 於大阪三越

大倉陶園新作品展 廿六日——五月三日
 於日本橋三越

佐伯祐三遺作展 廿七日——廿九日
 於大阪美術新論社畫廊

第一回辛繪展（洋畫） 廿七日——卅日
 於銀座資生堂

三彩會染織品陳列會 廿七日——五月三日
 於日本橋三越

南都彫技會 廿七日——廿八日
 於大阪大丸

春陽會第十三回洋畫展 廿八日——五月廿日
 於東京府美術館

現代美術

主要展の項参照

國畫會第十回展(洋畫、工藝)

廿八日——五月十七日 於東京府美術館

主要展の項参照

第二回二科技藝展 廿八日——卅日

於神田東京堂

無果會第一回洋畫展 廿八日——卅日

於洗足デパート樓上

第十四回日本南畫院展

廿九日——五月十四日 於東京府美術館

日本畫展としては大規模なものであるが佳品は比較的乏しかった。尤も南畫のみを百四十點集めて全體の程度の高いのを望むのは無理かも知れず、寧ろ此處迄に育てた翠雲の努力を尊ぶべきであるかも知れぬ。翠雲の「芍欄」は流石に味ひ深く、安田半圃の「臥酒」、矢野鐵山の「龍潭飛雨」(二曲一雙)、岸浪百艸居の「露葉霜條」、水田竹圃の「秋嵐」、水越松南の「蠻野聚雨圖」等は佳品として擧げ得る。矢野橋村の「華晨」は六曲一雙の大作であるが大味であつた。

自由學園工藝研究所第三回工藝展覽會

廿九日——五月五日 於日本橋高島屋

五月

第二回香川縣工藝美術綜合展

一日——十日 於高松三越

九皇會一回展(日本畫) 一日——五日

於高島屋

六潮會關西第一回展(日本畫、洋畫)

一日——五日 於大阪三越

早川國彦水彩畫小品展 一日——七日

於新宿櫻製菓畫廊

藤岡昇近作展(洋畫) 一日——七日

於銀座青樹社

神木鷗津南畫展 一日——五日

於日本橋三越

稻花會漆藝展 一日——五日

於日本橋三越

北海道獨立美術作家協會展(洋畫)

一日——三日 於銀座アモレ畫廊

ビーター・アウイン・ブラウン氏スケッチ展

一日——五日 於數寄屋橋日動畫廊

淡交會第九回展(日本畫) 二日——六日

於日本橋三越

種々の意味で現代日本畫の代表的な三名川合玉堂、横山大觀、竹内栖鳳の作品を一室に蒐める此の會は、毎回多くの期待を持たれるものであり、事實此の三家共唯お附合でなく各々力を入れた製作發表の機關として居るので、斯種小展覽會としては他に類の尠い光つたものとなつて居る。然も流石老巧の諸家であれば、籠めた力に觀者を壓迫し窮屈がらせるものではなく、洗練された各人の藝術境はいづれも平明安易に萬人を引入れ樂しませる。

玉堂の「峰の夕」は場中での傑作に推したい。淡々たる描法によく自然の重厚なる奥行と空氣とを捉へた、日本畫には珍しい風景畫と云つてよい。同じ作者の「雨後」

「投網」いづれも冴えた爽かさを持つて居る。大觀は水墨の「杜鵑」「浦風」の風景畫と、極彩色の「八仙花」「山櫻」とを出した。墨畫風景の山も松も獨特の型の繰返しであるが、隅々迄神經が行届いて生氣を失はぬ所は作者の精進を物語つて居る。作者の神經の細かさは、繪具の美しさに陶醉しつゝ描いた「八仙花」に最もよく見られるであらう。栖鳳の「支那風光圖繪」十二景の小品は、スケッチを其の儘描いて即興的であり、固より練達の筆技は夫れ／＼の風趣を躍動させて居る。唯此の行き方では洋畫のスケッチが、これ程技巧的でなくともより眞實感を持つ場合を考へると、矢張り筆技が先に立ち過ぎはせぬかとの憂が無いは云へぬ。

素顔社第五回洋畫展 二日——四日

於銀座紀伊國屋

油繪五人會第二回展 二日——四日

於銀座資生堂

沈爾留彫刻展 二日——六日

於銀座三共ギャラリー

埴土社第一回展(日本畫) 二日——七日

於日本橋白木屋

清水六兵衛還曆記念作陶展 三日——五日

於京都岡崎美術館
福岡縣工業試驗場染色工藝品展覽會
三日——七日 於福岡市玉屋

日本美術協會第九十八回展(書及篆刻)

四日——十三日 於同陳列館

日本美術協會の第九十八回展は書及篆刻に當てられた。搬入總數八百三十一點の中入選四百四十三點。別に無鑑査出品百三十點、合計五百七十三點が陳列された。外に高松宮殿下御貸下品を初め帝室博物館及び諸名家秘藏の古書畫が參考品として陳列された。

臺灣美術協會 四日——十二日

於臺北教育會館

南畫習展 五日——七日

於日本橋高島屋

染木煦寬集南洋民藝展 五日——七日

於銀座アモレ畫廊

新時代洋畫展 六日——十日

於銀座紀伊國屋

清光會第三回展(日本畫、洋畫) 六日——十日

於銀座資生堂

土田麥僊は得意の題材舞妓の外に蓮を描いて、小林古徑の「罌粟」と共に宋の花鳥畫の本格的美しさを狙ふ勉強振りを見せた。安田靉彦は「梅」に光悦の現代化を企て裝飾と寫實の調和を圖らんと努力を見せた。洋畫では梅原龍三郎が國展出品の「櫻島青」と殆ど同じモチーフを同じ形式

で、唯小さく描いた「櫻島朝」を出品して居たが、小品だけに樂にまとまつて、國展出品作よりは一般には親しめられた様である。坂本繁二郎の二點の中ではやはり描き慣れた「馬」の方が優れて居た。安井曾太郎は「少女」及「風景」の二點にその完成せる技術を示したが、殊に前者は油繪の技法を東洋的に生かし而も寫實に徹して居る所、容易に達し難い境地である。油繪の特性を殺して東洋的洋畫を描く事は容易い。併しそれだけならばむしろ日本畫を描くべきで、現代の要求する油繪は斯くの如き油繪の技法を生かしての東洋的洋畫である。

王濟遠個展(東洋畫) 六日——九日

於數寄屋橋日動畫廊

第六回京都工藝美術展覽會 六日——十二日

於日本橋三越

川合修二近作個展(洋畫)

七日——十二日

森芳雄滯佛作品展(洋畫)

七日——十二日

四皓會洋畫展 六日——十日

於日本橋高島屋

藤島武二、滿谷國四郎、岡田三郎助、和田三造の四會員が十號位の作品を各二、三點宛出品した。何れも本格的な洋畫を描く修業をした後の老境の作品故、岡田三郎助の印象派風な細密なる描寫も、他の三人の大まかな筆使ひも、いさゝかの危げも狂ひ

も無く自然の美を味はひ深く描き出して居た。

大智勝觀個展(日本畫) 七日——十二日

於日本橋三越

五月會第四回洋畫展 八日——十二日

於神田東京堂

能勢洋畫塾展 八日——十二日

於銀座アモレ畫廊

桑本一洋個展(日本畫) 八日——九日

於京都四條佐藤梅軒畫廊

商工省第二十二回工藝展 八日——十四日

於京都岡崎美術館

富山縣工藝展 九日——十三日

於上野松坂屋

白潮會洋畫展 九日——十四日

於日本橋白木屋

小城基洋畫展 十日——十五日

於數寄屋橋日動畫廊

長井雲坪遺墨作品展(日本畫) 十日——十一日

於上野公園梅川亭

第二回臺灣彫塑展 十日——十三日

於上野松坂屋

傳抱石書畫篆刻個展 十日——十四日

於銀座松坂屋

山下新太郎個展(洋畫) 十日——十四日

於大阪畫廊

加藤敏子洋畫展 十日——十五日

於大阪阪急百貨店

まだみ會展(工藝) 十日——十四日

藝展

三枝古都、吉田雅子兩女史の織物と木工
於銀座松坂屋

七彩會洋畫展 十一日——十七日
於大阪美術新論社畫廊

作陶會、匠形會作品展(工藝)

名古屋市、瀬戸市、名古屋新聞後援
於日本橋白木屋

中里介山書畫展覽會 十一日——十四日
於日本橋白木屋

川崎繪畫會第十回展 十一日——十二日
於川崎市公會堂

工華社工藝展 十二日——十五日
於銀座資生堂

新作陶磁展 十三日——十五日
於日本橋高島屋

バーナード・リーチ、河井寛次郎、濱田
庄二出品
於數寄屋橋協和フルーツパーラー

柳川清一朗油繪小品展 十三日——廿五日
於數寄屋橋協和フルーツパーラー

清水七太郎洋畫展 十三日——十七日
於銀座アモレ畫廊

野田英夫滯米作品展 十三日——十五日
於銀座青樹社

帝都名家新作繪畫展(日本畫) 十四日——十六日
於東京美術俱樂部

第一回モンパル會洋畫展 十四日——十九日
於日本橋三越

全關西洋畫展 十五日——廿六日

於大阪朝日會館
第三回ねばつち社彫刻展 十五日——十九日

全關西洋畫展も九回を重ねるに至つて實
的に可成向上はして來た。搬入總數千數百
點の中から二百餘點を入選せしめたと云ふ
から比較的嚴選なわけであるが、我國洋畫
の中心が東京にあつて、アマチュアこそ
多けれ關西の洋畫の水準は低いので、會員
二十三名の出品、及今回會員に推薦された
伊藤繼郎、辻愛造の作品を除いては特に見
るべきものは無かつた。會員の作では小磯
良平の「婦人像」がその優れた技術による
正確な描寫を以つて光つて居た。

授賞
會員推薦 伊藤繼郎、辻愛造
無鑑査推薦 中西倪太郎、西村五郎
寶角律子
全關西洋畫協會賞 西阪修、中谷輝
造
獎勵賞 山本秀臣、山口久一
朝日獎勵賞 市野長之助、山内善三
郎、西村千太郎
巴會第二回展(日本畫) 十五日——廿一日
於新宿ほてい屋

明治時代に活躍した會員が多いだけに、
何か新しくやつて見やうと云ふ様な努力は
少しも見られず、何れも平凡な仕事振りで
あつた。町田曲江、矢澤弦月等の作品迄が
格別な勉強振りを示して居なかつたのは寂
しかつた。

河合卯之助作陶展 十五日——十七日
於神戸三越

落合朋風個展(日本畫) 十五日——廿五日
於大阪松坂屋

東潮會展(日本畫) 十六日——廿一日
於横濱野澤屋

富永親徳洋畫展 十六日廿日
於銀座三共

野生會洋畫展 十六日——十九日
於銀座紀伊國屋

泰東書道院主催近畿書畫展 十六日——十九日
於大阪市中央公會堂

菅原安男彫刻個展 十六日——十八日
於大阪朝日ビル

酒田鶴岡聯合會工藝品展 十七日——廿一日
於山形縣酒田市公會堂

飯田實雄個展(洋畫) 十八日——廿一日
於銀座アモレ畫廊

第三回東臺會美術展(綜合展) 十八日——廿日
於奈良會館

岡田七藏個展(洋畫) 十八日——廿二日
於東洋ビル北海道俱樂部

第十四回朝鮮美術展覽會(綜合展) 十九日——
六月八日 於朝鮮總督府舊共進會場

今年より彫塑が復活されて第一部東洋畫
第二部洋畫に對し、第三部に彫塑、工藝が
包含された。審査員の大坂朝日新聞朝鮮版

に發表された批評によれば（五月十五日朝鮮版所載）東洋畫は「總體に於て出來榮は好いが」「多少傳統的のものに捉はれて新しいものに觸れて居ない」憾みがあり、又「期待した程の朝鮮カラーが乏しく」「技術にのみ走り内容の伴はぬものが少くなかつた」と言ふ。（前田青邨、野田九浦談）西洋畫は想像以上に「なかなかしつかりしたもので面白くものが發見され」たが「中央のものと比較すると多少遜色があつた」と言ふ（藤島武二、小杉放庵談）。猶同審査員等は「朝鮮の人のもので朝鮮でなければ出ぬ色彩やタツチを發見して嬉しい。また朝鮮の人が描いたものに優秀なものが多い。しかし一部には自力を過信した亂暴な繪もあつた」と談つて居る。第三部は「今年は進歩が非常に著しく」「一部、二部とは異つて必ずしも中央の影響を受けて居ず、殊に古墳の壁畫を取入れたタイル張りの壁立の如きは帝展にも見ない立派な作品が」あり、「總體に於て三部は著しく活氣を帶びしかも題材、質の點から鮮展らしい特色を發揮して居た」（田邊孝治談）と言ふ。

搬入總數一、一九〇點（第一部一六〇、第二部九一七、第三部一一一）に對し入選總數二九六點、中第一部七四點（無鑑査六點）、第二部一五二點（無鑑査八點）、第三部彫塑十三點、工藝五七點（無鑑査二點）。

陶器祭 十九日——廿三日

現代美術

於上野松坂屋

「陶器まつり」として陶匠大家作品展、現代日本名窯展の二つの展觀が催された。前者には伊東陶山、板谷波山、石野龍山、大樋長左衛門、河井寛次郎、河村靖山、清水六兵衛、澤田宗山、富本憲吉、宮川香山、矢口永壽、十一家の何れも優れた作品が陳べられた。九代目大樋長左衛門の作品を陳べたのは此の展觀に特殊な味を加へて面白かつた。

現代日本名窯展の方には日本各地の有名な窯業地の作品を各窯業地別に纏めて陳列した。大工業的窯業を除外しての日本全國の窯業の現況を一場に見渡す事の出来る面白い試みであつた。其處に見出された窯業日本の藝術的水準の高さは心強く思はれた。

園部晋個展（洋畫） 十九日——廿三日

於大阪美術新論社畫廊

中央美術展（日本畫、洋畫）十九日——卅日

於東京府美術館

中央美術會主催

京都市美術展覽會（綜合展）廿日——六月十三日

於京都岡崎美術館

京都市が主催して京都府居住者並に京都の美術及美術工藝に特に關係ある者より日本畫、洋畫、彫刻、工藝の作品を公募せる綜合展。後記の數字に見られる如く非常な寛選で從て質的には餘り高いものでなかつた。

た。特に彫刻は貧弱で、松田尚之の「憩」、清浦伯爵像、岡本庄三の「女」の外佳品無く、洋畫は之に次いで出來悪く特筆すべきものがなかつた。

日本畫は要するに塾展の綜合とも云ふべきもので大家は殆ど影を見せず、中堅作家又少なくわづかに福田平八郎、桒本一洋、福田恵一、堀井香坡、宇田荻郎、登内微笑等を見しのみ。新進は數が多いが相當の水準に達して居るものは案外少なかつた。別記の受賞作品の外には三谷十絲子の「夜」、谷角日婆春の「あぜみち」が特に優れて居た。

工藝は流石に豊富ではあつたが、當市の工藝に於ける傳統的地位を顧みては、質的に特に優秀であつたとは云へぬ程のものであつた。

搬入總數一、一七三點の中入選七九〇點外に審査員及委員の出品を加へて總出品點數八三九。その内譯は日本畫四六〇點、洋畫二三九點、彫塑一八點、工藝一二二點。

授賞

日本畫

綠章 猪原大華（後庭淺春）、池田榮廣（洋

犬と洋猫）、石島良則（供饌）、西山

英雄（廢船）、土肥蒼樹（春日）、加藤

美代三（このま）、河井健二（五月）、

竹村龍太（風景）、竹内鳴鳳（醉雨）、

中野草雲（植物園新緑）、野添平米（山

現代美術

村遲日)、桑野博利(あさ)、山本若丘(七面鳥)、福田翠光(朝露)、會津勝巳(春)、櫻井孝一(春寒)、菊池隆志(喫茶店の少女)、北澤映月(娘)、水野深艸(遅日)、三輪晃勢(滞船)、三宅風白(徂く春)、衛藤晴村(朝)

洋畫

綠章 今井憲一(椿の春)、石井彌一郎(黄檗山の禪悦堂)、飯田清毅(少女坐像) 錦義一郎(二人の女)、伴庄兵衛(白ひき)、竹内満砂子(静物)、中西侃太郎(マドモワゼルS)、安田謙(聖堂)、榎信太郎(音羽谷龍道)、篠崎貞五郎(初夏)、東坊城光長(高尾溪流)、關口俊吾(紅いドレス)

彫塑

綠章 岡本庄三(女)、吉川常雄(少女首)、田中源三(試作女)、中村三郎(布を持つ女)

美術工藝

紫章 清水正太郎(果實文飾皿) 紅章 小合友之助(染額双馬圖)、堂本五三良(花器烏瓜圖)

綠章

伊東翠壺(繡彩草花文花瓶)、番浦省吾(華文彩漆隅棚)、淺見隆三(彫彩紋花瓶)、岸本景春(刺繡二曲隅屏風海月)

燦木社第十回展(日本畫)

廿日——廿七日

於上野松坂屋

革丙會第十四回展(日本畫)

廿日——廿四日

於日本橋三越

所謂床の間藝術としてではなく、社會的に働きかけるものとして、歴史畫復興の氣運が強くかつて來た現在、革丙會は努力次第では時代に取残される事なく寧ろ時流に乗つて、潑刺たる歴史畫研究團體としての活動が出来さうに思はれるが、出品せられた歴史畫は舊態を脱せずして特に見るべきものがなかつた。唯歴史畫ならざる川崎小虎の「蘭」は水墨淡彩で味深く描かれて居た。

染織展 廿日——廿九日

於商工獎勵館

浩然社第三回展(日本畫)

廿日——廿四日

於新宿三越

黎明會第一回展(洋畫)

廿日——廿四日

於銀座紀伊國屋

ル・マニア刺繡服飾展

廿日——廿五日

於日本橋高島屋

村上華岳個展(日本畫)

廿一日——廿二日

於日清生命ビル永樂俱樂部

今年四月踏青會へ久方振りで二點を出品するに至る迄、舊國畫創作協會解散以來七年間公開展への出品を絶ち、ひたすら精進して來た華岳の、協會解散以來の作品四十餘點の展觀が、其の所藏者等によつて催さ

れた。

勁拔な線で描いた豐滿にして而も幽玄なる菩薩は、華岳といへば直ぐ其を想ひ出す位に彼の得意とする所で、今回の展觀にもさうした優れた佛畫數點が並べられてゐたが、其れよりも觀者を驚かせ歎ぜせたものは南畫の影響の下に彼が新らしく描き初めた風景畫であつた。支那の古名畫に想を得たかと思はれる所もあるが、その基調は寫生であるらしく、量あり深みあるその風景畫は自然の美しさをしつとりと味はせるものであつた。

伊川鷹作個展(洋畫)

廿一日——廿五日

於銀座資生堂

四皓會洋畫展

廿一日——廿三日

於大阪高島屋

日本畫會展

廿二日——六月五日

於東京府美術館

玉堂、桂月、十畝、秀畝等を初め舊帝展東京側の多くの優れた作家の出品があるにも拘らず、それ等は多く小品のみならず、氣のりのしない申譯的作品であり、加ふるに、入選作はより低調で甚だ振はぬ展覽會であつた。中多少とも注目すべきものを舉ぐれば玉堂の「良夜」桂月の「溪山暮靄」小虎の「桃」等で、就中「桃」は克明の寫生と紙質の特徴を利用しての彩色の妙技に見るべきものがあつた。

第七回工人社工藝展

廿二日——廿六日

六篠社第六回展(日本畫)

於日本橋高島屋
廿二日——廿五日
於銀座伊東屋

小川倩葭、小池巖第一回挿繪展

廿二日——廿五日
於銀座伊東屋

ラブラード遺作展

廿二日——六月二日
於東京府美術館

國民美術協會主催

一九三三年物故したラブラードの遺作展
がラブラード夫人の好意によつて歐米に先
じて開かれた。彼の詩趣豊かな藝術の姿は
此の展覧によつて充分窺はれるが、その最
高峰を表はす代表的力作が少くて、故人の
藝術の高さを充分に示し得なかつたのは遺
作展として残念である。

時代タペストリー展

廿二日——六月二日
於東京府美術館

松方幸次郎氏の蒐集中よりフランス及び
フランドルの十七、八世紀の壁掛數點及十
五世紀の壁掛一點が陳列されたが、歐洲綴
織の精巧さと藝術的香氣を示すに足るだけ
の優秀品は見當らなかつた。

日本木彫會

廿二日——卅日
於大阪朝日會館

帝展系の優れた木彫家を會員として居る
だけに多くの佳作が見られた。出品の主な
るものは佐々木大樹「鈴風」、澤田晴廣「詩
友」及「微風」、内藤伸「雄途」、三木宗策「童
子」、「三國慶」、「紅い實」、「雪霽」、森野圓象

「みみづく」等である。

原夏江油繪個展

廿三日——廿六日
於新宿櫻製菓書廊

長谷川三郎洋畫個展

廿三日——廿五日
於大阪ガスビル内大阪學士俱樂部

吉村畫塾々生第一回展(洋畫)

廿三日——廿六日
於銀座アモレ畫廊

森人社同人展(洋畫)

廿三日——廿七日
於神田東京堂

京都名家繪畫展(日本畫)

廿四日——廿六日
於銀座三共

奥瀬英三個展(洋畫)

廿四日——廿八日
於京都商工會議所

鳥取新興民藝品試作展

廿四日——廿七日
於土橋たくみ工藝店

高橋虎之助臺灣寫生展(洋畫)

於數寄屋橋日動畫廊

第十四回石川縣美術工藝展

廿四日——卅日
於金澤市石川縣商品陳列所

岡崎市主催第十四回美術展(日本畫、洋畫)

廿五日——六月三日
於岡崎市圖書館

十年社第一回展(日本畫)

廿五日——廿七日
於銀座紀伊國屋

小絲源太郎近作洋畫展

廿五日——卅日
於日本橋三越

後藤良社中華陽會第三回木彫展

廿五日——廿七日
於銀座三越

野村六郎漆陶展

廿五日——廿七日
於田園調布會館

現代日本手織手染展

廿五日——卅日
於上野松坂屋

岩田藤七作硝子けもの展

廿五日——卅日
於上野松坂屋

同人會第十回表裝美術展

廿六日——六月三日
於東京府美術館

青柿社展

廿六日——卅日
於銀座伊東屋

塊人社第五回彫塑展

廿六日——六月五日
於東京府美術館

同人十二人及少數の一般應募者の展覧。
同人に舊帝展の中堅作家が多いだけに相當
のものは見られたが力作が少ない。同人村
田勝四郎はマツス自體によらず面に表はれ
る明暗によつて表現しやうとして居るが、
「壯ちやんの首」、「神近女史像」等可なり成
功して居た。同人安藤照の作品は溫順い作
風で對象を彫刻的に擱んで居る確實さが好
い。小室達の「伊達政宗公銅像の試作」は
すつかり堅くなつて了つて居て威風は愚か
何の動きも無い。

顔行會第二回洋畫展

廿七日——卅日
於銀座資生堂

黒田重太郎個展(洋畫)

廿七日——卅一日
於數寄屋橋日動畫廊

今村靜齋新作陶磁器展

廿七日——六月二日
於日本橋高島屋

六回會第一華展

廿八日——卅日
於銀座アモレ畫廊

默示社洋畫展 廿八日——卅一日

於神田東京堂

第十回國畫會展(洋畫、版畫、彫刻) 廿八日

——六月五日

於大阪朝日會館

泰西創作版畫展 廿九日——六月二日

於銀座三味堂

フランス繪畫大展覽會

十四日

於日本美術協會

卅日——六月

フランスの現代作家及十九世紀の作家の作品三百點ばかりの展覧である。名前のみは相當の作家を集めたが、その更り現代作家のもの以外には怪しい作品も相當多く、ドラクロアと稱するものは同時代の非常に劣れる作品であり、ルノアールの「赤衣の女」は偽作なる事は明瞭であり、コロートと稱するものも信じられぬ等々。のみならず現代作家以外のものには眞作にしてもブーテンの風景二點以外餘り優れたものは見當らなかつた。

新版畫集團小品展 卅日——卅一日

於神田東京堂

商工省第二十二回工藝展

卅日——六月五日

於長崎市立商工獎勵會

六月

東臺邦畫會第十回小品展

一日——六日

於日本橋白木屋

會長結城素明の外川崎小虎、勝田蕉琴、

矢澤弦月、吉村忠夫、水上泰生等の出品もあつたが、出品點數一一九の中力作と稱すべきもの無く、振はぬ展覧であつた。

横井三浦漆繪展 一日——五日

於數寄屋橋日動畫廊

JAN第二回展(洋畫)

一日——五日

於紀伊國屋

綠人社第二回展洋畫展

一日——五日

於銀座三共

東西大家新作日本畫展

二日——五日

於日本橋三越

塊藝會彫刻工藝展覽會

二日——五日

於名古屋廣小路丸善

伊東深水日本畫個展

四日——七日

於日本橋高島屋

美人畫專門で通して來た深水が自己の藝術のマンネリズムに陥り初めた事を自覺し今迄の藝術を清算し、畫材を美人畫に限らず廣く自然の萬象一般に求めて、新に出發した自由な藝術家としての精進の成果を此の個展に發表した。出品點數二十の中八點迄靜物、風景が占めた。深水の之迄の美人畫は兎角達者に過ぎた傾向があつたが今回の「浴後」など從來とは異つて行き届いた細かい神經を示した。又「靜物」、「霧」、「暮昏」、「湖南早春」などの靜物畫、及風景畫は慣れぬ故もあらうが精魂を打込んで描いて居るだけに美しい觀照の表はれた深く味はへる作品であつた。

子易方洛個展(東洋畫) 四日——五日

於銀座交詢社

佳都美村工藝展 四日——九日

於日本橋高島屋

京郎に於ける最も有力なる工藝團體である佳都美村の同人が、足利時代の故事に據り、「扇流し」を主題として各自意匠をこらして製作した工藝品約百二十點が展覧せられた。

第一美術協會七回展(洋畫、彫刻)

五日——

十九日

於東京府美術館

陳列點數油繪、彫刻合計四百六點。中四十六點は此の會の會員であつた故青山熊治遺作の特別出陳である。相當多數の會員と出品者を擁して居るが、見應へる作品は少く其の中少しく優れて居る人は大部分帝展其の他團體への出品者で、會員自身も此の會を現代洋畫壇の第一線に活躍するものとしては居らぬと思はれる。比較的目に立つ仕事としては、伊藤修次「卓子のある庭」、須田刻太「看護婦」、小久保曉「練習曲」、山田篤「噴泉」、栗原忠二「綠陰」、吉澤廊三郎「綠陰」、鈴木巖「ザクロ」、河邊梅村「のた」、佐藤哲三郎「臥裸婦」、御厨純一「白菊」、濱地清松「牡丹」(以上繪畫)、早乙女龜次「顔」、「或る日のスケッチ」、吉田久繼「立女像」(以上彫刻)等が挙げられよう。中早乙女龜次の作品二點はそのデスピオ風とも云ふべき本格的な彫刻

的表現を以て作者の將來を期待せしむるものであつた。

三春會第二回洋畫展 五日——十四日

於東京府美術館

創生彫刻展 六日——九日

於銀座アモレ畫廊

石川縣工藝獎勵會第十四回美術工藝品展覽會

七日——十二日 於日本橋三越

出品の大部分は漆器及九谷焼磁器であるが金工藝及染色の出品もあつた。漆器及九谷焼が徒にその傳統にのみ囚はれず、新時代の趣好を巧みに採り入れて然も古來の日本美術工藝の高き風格を保つて居るのは好い。

岡田七藏油繪小品展覽會 七日——十日

於數寄屋橋日動畫廊

梶原緋佐子個人展(日本畫) 八日——九日

於京都美術俱樂部

梶の葉會主催

林文塘近作鑑賞會(日本畫) 八日——九日

於京都美術俱樂部

東京表装師組合第十三會表裝展 八日——十日

於東京府美術館

朱葉洋會畫展 九日——十五日

於新宿三越

旺玄社同人小品展(洋畫) 九日——十五日

於大阪美術新論社畫廊

山岳畫展(洋畫) 十日——十三日

於銀座アモレ畫廊

京都昭和工藝協會第七回展 十日——十二日

於東京商工獎勵館

陶磁器に於ては淺見五郎助、澤田宗山の二氏が各二十數點の出品にその優れた腕を見せて居るのが目立つた。稻葉七穂の七寶は面白く見られたが特に力をこめたものらしい二八番の田園風景を表はす寶具はそのねらつたユーモアが過ぎて單に小供を喜ばすやうなものになつて了つて居た。

特別出品の京都市工業研究所の作品は新時代の感覺に満ちて居て、群小工藝家及工業的工藝品製作家を指導するに足る作品であつた。その所長仲井俊雄の特別出品の中桔梗釉の菓子器は美しい出来であつた。陶磁器試驗所はその新しい研究の成果たる骨灰磁器及白雲陶器を十點位づつ出品して居た。新しい材料であるだけに技術的には興味を索いたが意匠には特に見るべきものが無かつた。

在佛平賀龜祐畫伯作品鑑賞會(洋畫) 十一日

——十二日

於東京會館

紅日會第一回日本畫展 十二日——十六日

於日本橋高島屋

建築文化展覽會 十二日——廿日

於日本橋三越

東京市都市美術協會主催

野間仁根洋畫個展 十二日——十九日

於新宿紀伊國屋

桐城社第一回展 十二日——十六日

川端龍子第五回日本畫個展 十三日——十七日

於銀座紀伊國屋

作者が昭和九年末爲せる南洋委任統治領旅行よりの土産であつて、此の作家としては比較的小品の展観であつた。

龍子の日本畫は洋畫出身だけにその表現の立脚する所はやはり洋畫の技法であつて元より本格的な、洗練された線を尙ぶ日本畫の技法は求むべきではない。彼の「日本畫」はその精神、取材の態度、及裝飾化にある。本格的日本畫の眞味を知るものには物足りなく思はせる所があるが、彼の道は新時代の日本畫の進むべき道の一である事は確かであり、その道に於て彼は成功して居る事を此の個展は示した。

出品作中ジャンルとして最も優れて居たのは舟を漕ぐ土人を描いた「熱帯雨」でその水の描寫は出色の出来であつた。モニュメンタルな裝飾的作品としては圓形の「椰子」が優れて居た。湛へた水に夕月を映す大きなシャコ貝を描いた「月を盛る」は異常な効果を持つ取材の面白い佳品であつた。

日本南畫展 十三日——十八日

於大阪朝日會館

蒼原會第八回水彩畫展 十三日——十八日

於神田東京堂

ラブラード回顧展 十三日——十六日

日佛畫堂主催

於大阪松坂屋

漫畫六人展 十四日——十八日

於銀座アモレ畫廊

加藤溪山青瓷展 十八日——廿一日

於日本橋白木屋

世界各國の工藝見本品展

十三日——廿六日

名古屋漆器商組合主催第一回漆藝展覽會 十四日——十八日於名古屋愛知商品陳列所

於大分縣別府公園內殖産館

梅原龍三郎洋畫作品第一回鑑賞會 十四日——十八日

於銀座三味堂

三味堂主催

現代の我が畫壇に獨自の境地を築き上げた梅原龍三郎の、若年よりの作品を年代順に陳べて見ようと云ふ興味ある企ての第一回展である。今回は一九〇九年より一八八

迄の作品十六點が陳べられた。一九〇九年と云へば作者が満二十一歳の時、渡歐第二年目である。其の年の「婦人像」、「這ふ女」には赤を多く使ふ印象派的描法に既にルノ

アールの強き影響を見るが、其の描く態度氣分には多分にロートレツクの要素を見る。此處にルノアール及ロートレツクの異

つた二畫家の影響として表はれたものは、つまり豊醇な自然の美を享受する作者の靜

觀的方面（ルノアール）と、能動的なダイオニサス的、享樂的方面（ロートレツク）の二面である。此の二面は彼の藝術の其の

後の發展にも常に見られる。

一九〇八年以後と云へばフオーブの佛國に於て次第に勢力を得て來た時代である。梅原龍三郎もルノアールの描法よりフオーブの影響を受けて發展した。一九一八年迄の作品が其を示して居る。

第一回陶磁器展覽會 十四日——廿一日

於名古屋東區陶磁器會館

日本陶磁器工業組合聯合會主催

眞隅莊太洋畫個展 十四日——十七日

童林社第三回洋畫展 十九日——廿四日

於福岡縣公會堂

九年會第五回洋畫展 十六日——廿四日

於東京府美術館

斗南社第二回洋畫展 十六日——廿一日

於白木屋

津田青楓草假名と素描畫個展（書、日本畫） 十七日——廿二日

於日本橋高島屋

展觀の點數から云つても、その目錄に作者自ら述べて居る所によつても書を見せるのがその個展の目的であつたらしい。併しその書は良寛の風を學んだものであるが、未だ修業の短いだけに、その清勁の致を得るに至つて居らぬ。

新時代洋畫展 十七日——廿日

於銀座紀伊國屋

瑠爽社第一回日本畫展 十八日——廿二日

於銀座資生堂

伊藤隆作硝子工藝品展 十八日——廿四日

於新宿伊勢丹

沿線會第二回洋畫展 十九日——廿二日

於新宿三越

山樹社新日本畫研究會合同展 十九日——廿三日

於銀座松坂屋

日本畫の手法と材料によつて新時代の「日本畫」を樹立しやうとする山樹社がより若い人々の團體である新日本畫研究會と合同しての展覽會。材料こそ日本畫のそれであり、従つて手法もその材料によつて日本畫的に制約されて居るが、洋畫的手法を非常に多く混用して居る。そして舊來の日本畫の傳統から離れて畫興を索くものは凡て題材にして自由に描かうとして居る。二三の畫家は全然現代の新しい洋畫の傾向を採つて居る。例へば福田豊四郎はシュールレアリズムを日本畫に應用して居るが、之はたしかに日本畫の性質から云つて賢明な策ではある。力の弱さが其の作品を試み以上に出でしめぬ憾はあるが注目すべきものであつた。

鉅起研究會第二回工藝展 十九日——廿三日

於銀座アモレ畫廊

東土會小品彫刻及工藝品展覽會 十九日——廿三日

於銀座アモレ畫廊

伸草社第一回展 廿日——廿四日

於上野松坂屋

鈴木清方日本畫個展 廿日——廿三日

於神田東京堂

於日本橋三越

日清戦争と日露戦争との中間の頃の明治風俗を描いたと云ふ「明治風俗十二ヶ月」の聯作と、之も明治風俗に取材した「蟬」、「今戸橋」、「うづらの女」の三點が出品された。十二ヶ月の中「かるた」(一月)を除いては總て中流階級の生活に取材して居る。明治十一年に而も東京の神田に生れた清方はその頃の「相當なゆとりを持つて居た」(竊木清方、明治十二ヶ月解題、摺影八月號)中流階級の生活を多大の懐しみを以つて想起し、その内的生活に迄深い理解を進めて描いて居る。加ふるに作者の高い趣味と完成せる技巧は洗練せる美を繪に與へて當時を知らざる若き觀者にも懐古の情を起さしめる。

筑前美術會展(日本畫、洋畫、彫刻) 廿一日—廿三日

於銀座松坂屋

今井滋新興洋畫展 廿一日—廿三日

於銀座近代畫廊

日本南畫院第十四回展 廿一日—廿四日

於京都岡崎美術館

川端龍子個展(日本畫) 廿一日—廿二日

於大阪三越

女卿會洋畫小品展 廿一日—廿四日

於大阪美術新論社畫廊

後藤工志水彩遺作展 廿一日—廿三日

於數寄屋橋日動畫廊

藤田嗣治近作洋畫小品展 廿一日—卅一日

於新宿紀伊國屋

今年二月の個展にも出品された支那版畫をバックに描いた支那、滿洲での作品數點、作者得意の線描に淡彩をほどこせる西洋婦人を描くスケッチ數點、日本畫風の猫の素描、明治初期の洋畫の味を窺つて居る水彩畫數點、それに水墨の日本畫數點を加へて全部で五十一點の小品の展觀であつた。最も優れて美しいのはやはり彼の巴里時代に得意とした、洗練された線による西洋婦人のスケッチであつた。興味を牽いたのは「大連支那人飯店」で、水彩を以てその入口をわざと稚拙に描いて、愛すべき小さな穢い料理店の氣分とその周圍の狀況とをよく寫して居た。

藤井浩祐日本畫個展 廿一日—廿三日

於上野松坂屋

アニメ第二回洋畫展 廿一日—廿三日

於銀座紀伊國屋

商工省第二十二回展覽會(工藝) 廿一日—廿七日

於名古屋市立公會堂

平安大家新作日本畫展 廿三日—廿五日

於日本橋東俱樂部

藤岡光影堂主催

濡髮知加志美術工藝展 廿三日—廿八日

於有樂町電氣獎勵館ホール

木村莊八日本畫個展 廿四日—廿七日

於日本橋三越

「中央美術」八月號(二十五號)所載無

記名の木村莊八個展論は正鵠を得たるものと思はれるから左に轉載する。

「木村君の畫に就て毎時感じられるのは才氣煥發と云ふ事である。往くとして可ならざるなしと云ふ柄ではなくて特異の境地に在つて先づ己れを楽しむ人とても謂ふ可きか。さう云ふ風に觀て興味津津たりである。然しそれだけに小味で規模も小さく堂々として人に迫る作は索め難いやうでもある。今回の陳列は十點餘、何れも小點小作で作者の適所を知らしめるに格好のものだつた。「季節花」と題した小點の張交ぜは其一點色紙形の小さなもので水仙、薔、桔梗、畫額その他六種ほどの花を寫生風に畫いたもの、和らかな味もあり色彩も潤麗で親しめるものだつた。「歌三題」は清元の何々、長唄の何々と「歌詞」の一部に相應する唄ひ女の姿態を寫せる堅幅、之れは描寫に破綻あつて他の小點の如き妙味に乏しい。演劇五題は筆者最も得意の壇場らしく、舞臺面の一場景を描破して十分の動態を現はし得てゐる。だが之れ等は總じて版畫的であり挿繪的であつて渾然無碍の境に入り得るには未だ距離があるやうだ。今後の進展に注目したい。特に日本畫を描かうと云ふので其形式や手法に在來の日本畫風にすることは無用ではあるまいかドンナ顔料でもドンナ筆使ひでも筆者獨

自の方法でやつて見せて貰ひ度い。」

綠明莊美術工藝品展覽會 廿四日——廿九日

於日本橋高島屋

藤牧義夫版畫個人展 廿五日——廿七日

於神田東京堂

黑色洋畫展 廿五日——廿九日

於銀座紀伊國屋

岩田藤七新與硝子個展 廿五日——廿九日

於日本橋高島屋

小磯良平洋畫個展 廿七日——卅日

於銀座資生堂

石原求龍堂の主催で近作十二點が展觀された。アカデミックで潤ひの足りぬ難あるとは云へ、其の堅實なる技巧は益々進歩を示し、「婦人座像」「溪流」等力作として注目に値した。

女卿會第二回展(洋) 廿八日——卅日

於銀座アモレ畫廊

川端畫學校日本畫部試作展 廿八日——廿九日

於川端畫學校

佐藤敬滯歐作品展(洋畫) 廿九日——七月四日

於銀座三味堂

磯部雨舟文人畫小品展

於上野公園梅川亭

遊戲三味堂主催

七月

筑紫武門風景畫個展 一日——六日

日本工藝美術會第十回展 一日——七日

於日本橋高島屋

高橋卯八渡滿紀念展(洋畫) 一日——二日

於丸ノ内日本工業俱樂部

海外陶器展觀 一日——二日

於瀬戸陶磁器試驗場

第一回歐洲繪畫模寫展 三日——十八日

於新宿紀伊國屋

平安大家新作日本畫展 四日——五日

於京都市公會堂

藤岡光影堂主催

三重縣工藝協會主催第一會研究作品發表會 五日——七日

於四日市築業會館

子易方洛個展(東洋畫) 六日——十三日

於大阪瓦斯ビル

宮澤喜一郎洋畫個展 七日——十一日

於銀座近代畫廊

安宅安五郎洋畫個展 七日——十三日

於大阪美術新論社畫廊

平林清輝佛畫展 七日——十四日

於日本橋白木屋

日本陶藝協會作品展覽會 八日——十一日

於銀座資生堂

河村蜻山を中心にその弟子達の作る會の第四回展。新進の士の何れも面白い試みをして居る中に、さすが蜻山は群を抜いて光つて居る。馬を描く染付の水指し、品字形の花瓶など特に優れて居た。岡本爲治の作

品五點も愛すべき佳品であつた。岩本克己

の作品は何れも面白い狙ひであるが何か物足りない所があつた。オのみ走つて内容の未だに充實せぬ故である。

文樂人形繪展 九日——十五日

於日本橋高島屋

吉田喜藏「山と溪」パステル展 九日——十五日

於大阪阪急百貨店

尚美堂日本畫展 十日——十二日

於日本橋東美俱樂部

關尚美堂の主催で東西の大家の新作各一點計三十餘點が並べられた。總べて小品であるのみならず力作少く、西村五雲の「葡萄」、西山翠嶂の「夕月」、堂本印象の「水郷の朝」、太田聽雨の「夕星」等を先づ場中の佳作として挙げ得る。

五葉會日本畫展 十五日——十六日

於大阪美術俱樂部

福岡市特選工藝品陳列會 十五日——十九日

於福岡縣產業獎勵館

本郷新氏彫刻と水彩畫展 十六日——廿日

於銀座近代畫廊

小林三季天然記念物作畫展(日本畫) 十七日

於銀座松坂屋

草光信成洋畫個展 十五日——廿一日

於大阪美術新論社畫廊

京都民藝同好會展(工藝) 十九日——廿一日

於京都大丸

古賀春江遺作回顧展(洋畫) 廿日——卅日

於新宿紀伊國屋
〔西村五雲塾長鳥社繪畫展(日本畫)〕 廿日——

廿二日 於大阪三越

五葉會日本畫展 廿二日——廿三日

於京都美術俱樂部

山本鼎近作油繪個展 廿四日——廿八日

於數寄屋橋日動畫廊

黑色洋畫展 廿五日——廿九日

於銀座紀伊國屋

宮坂勝洋畫個展 廿七日——

於京城三越

堀忠義洋畫個展 廿七日——廿九日

於京城三井吳服店

ホドラー作品複製展 廿九日——卅一日

於銀座伊東屋

造型文化協會主催

八月

現代一流諸家第一回素描展 一日——卅日

於新宿紀伊國屋

高間惣七個展(洋畫) 一日——五日

於大阪美術新論社畫廊

洋風版畫創作の會 四日——六日

於中村版畫研究所

第一回三越洋畫展覽會 十四日——廿九日

於日本橋三越

由來百貨店に催される美術展は淡交會、青々會、四皓會、六潮會等の少數の異例を

現代美術

除いては販賣本位のお座なりの作品が並べ

られる事が多い。然るに三越が各派の一流

洋畫家四十四名の作品を集めて催した第一

回三越洋畫展は、今年は帝展の催されぬと

云ふ好機を把まへた爲と、主催者側の意氣

込みも違つたと見えて大作は無いながらも

比較的力作を集め得て見應へあり樂める展

觀であつた。以下目録順(いろは順)に主

立つた作品を述べる。伊原宇三郎の「臥せ

る裸婦」は小品だけに何時もの古典的な構

へをはづしてスケッチ風にくだけた寫實的

な作品(外に風景二點出品)。石井柏亭の

「榛名湖」は調つては居るが其の簡素な筆

致が充分細かい味を出して居ないのが惜し

く、岡田三郎助の「長野郊外」は印象派的

描法を以て初夏の田園の美しさを描き出し

て遺憾無かつた。金山平三は「菊」に何時

もながら冴えた筆技と繊細な神經を示し

た。川島理一郎の夏の「兩國」は花火を描

いて、氣の利いた小品。中村研一は「黒い

扇の女」「海邊の宿」外一點に達者な技巧

を示した。熊岡美彦が「大阪城の朝」外一

點に示した東洋的氣魄は此の場合は歐風の

油繪なる材料をこなして居るので愉快に味

へた。此の作家は往々にして此等二つの要

素の衝突をやるので奇怪な親しみ難いもの

を描く事があるが。山下新太郎の「薔薇」

は克明な寫實に美しい觀照を盛つたもの、

(外に風景二點出品)。油繪の本道を往く純

歐風の佳品であるが、之に對して同じ花を

描いた牧野虎雄の「芍藥」は東洋風な觀照

を現實感の強い油繪の特色を生かしながら

而も東洋風な描法に托したものである。山

本鼎の「瀬戸内海の朝」は澄んだ觀照を澄

んだ筆に托して美しい。兒島善三郎の風景

二點は獨立展出品作と同じく日本畫の平面

化に倣つて、幾つかの面に分解、構成した

ものであるが其の構成的な點に在來の日本

畫と本質的に異なる所がある。

月曜會第五回展(洋畫) 十六日——十八日

於神戸大丸

長谷川利行洋畫小品展 廿日——廿五日

於大阪市大丸畫廊

堂本印象模繪展觀

廿五日——廿七日

於大和信貴山盛福院

夏期洋畫講習會試作展 廿六日——卅日

於銀座紀伊國屋

三岸節子洋畫個展 廿六日——卅日

於大阪美術新論社畫廊

九月

くろも會第一回展(洋畫) 一日——五日

於銀座紀伊國屋

二科會近作洋畫小品展 一日——十五日

於新宿紀伊國屋

二科の會員、會友二十九名の小品約四十點を陳列した。我が洋畫壇の現状を見ると

小品にあつては兎角所謂小品技巧に傾いて氣の利いた畫面を作るに腐心し、自然觀照が疎かになつてゐる事を感じる。此の展覧に於てもそうした缺點が見られた。然し乍ら藤田嗣治の數點、木下義謙の風景（滯歐作）、坂本繁二郎の「ボニー」、向井潤吉の「雪の林」等佳作も少なく無かつた。

第七回青龍社日本畫展 一日——廿八日・

於東京府美術館

主要展の項参照

第九回構造社展（彫刻） 一日——十九日

於東京府美術館

齋藤素巖の大作大楠公銅像の石膏原型が出品された。其の前兩脚を擧げて躍り上つた馬に乗る構想自身は面白いにしても、之とて歐洲には前例があるが、堅く眞直に延び上つた馬の身體には何の動きも無く、脚も固くなつて了つて居た。之と殆ど同じ構想である十八世紀のフランスの彫刻家ファルコネーのピーター大帝像は之と比べて如何に霸氣に満ちて居る事か！後脚を取巻く砂塵は重苦しいが日本式な曲線を用ひんが爲の結果として先づ諒解出来る。正成公自身は先づ無難であるが、全體にやつとの事で作り上げた云ふ感じのするのは繪畫的で非彫刻的な日本人の彫刻家、殊にもレリーフに適した素巖には重荷過ぎた結果であらう。之に反して同じ作者の丹那殉職記念碑はレリーフだけに佳品であつたが此の

作者にしては力作とは云へぬ。桃太郎を題材とする小兒公園裝飾は面白い思ひつきであつた。

同人安永良徳の「征空記念碑」は征空を象徵し得て居るか否かは別として美しいコムボジションであつた。同人荻原安二の作品は氣が利いてやゝもすれば先端に走り過ぎるが作品Aは「商業的作品」を藝術的作品に迄高めて賞讃に價する。同人河村龍興は溫順しい作風で目立たぬが、靜に物を觀照し物の心を把んで居る東洋的な作家である。高橋先生像を初め數ある肖像及び「山好きなりし友の記念碑」は何れも佳作であつた。同人後藤清一の「母子」、「斷片」の二點は小品であるが繊細で溫雅な感覺を以つてせる、幾分浪漫的ではあるが堅實な作品であるから之を大きくしても立派なものにならう。

會員以外で目立つたのは宮地寅彦の活躍である。種々なる様式を用ひて然も何れも相當成功して居る珍らしい才人であるが觀照が荒つほい上に基本的な技巧の修練に缺くる所があり、其が二つの裸體に於て暴露されて居た。精進次第では未來の多い作家である。

構造賞受賞の進藤武松の「哺乳」は堅實な技巧を以つて細かい點に迄神經の行き渡つた寫實である。他の同賞受賞の柚月芳の「流雲」は其の構想に於て、アメリカのボ

ール・マンシップの傑作アーミラリー・スフェアの臺をなす裸女に好く似たものである。マンシップは其の裸女及レデオ・シチーのプロメトイースに於て、今迄の彫刻の概念とは異つた動的な美（過去の運動の表現とは異つた意味で）を與へて新しい彫刻の道を拓いたが、此の「流雲」が其と同じく動的な彫刻で、旋回運動を感じしめる點に於てもマンシップの影響を思はせるものがある。其の影響の有無は今明にし得ぬが、兎もあれ之は日本彫刻界に新時代の感覺を以つて新しい道を拓いたものと云へやう。之を單なる試み以上に成功せしめて居る其の手腕は大きな未來を期待するに充分である。

授賞

構造賞

流雲（未完成） 柚月 芳

哺乳

進藤武松

研究賞

星野健一、古村清志、淺沼俊雄、宮地寅彦

伸更會展（染織美術工藝） 一日——八日

於京都大丸

ビ・ハリハラン作品展（工藝） 一日——五日

於銀座松坂屋

富本憲吉の下に陶藝を研究したと云ふ印度工藝家の作品展。印度人自身の持味を失はないで居る事は貴い事に違ひないが、其が彼の専門とする陶器に於ては日本の感覺と混じた爲か餘り成功して居ない。彼の印

度人の感覚が日本の清楚なる趣味に洗練されて美しく咲いて居るのは其の描更紗である。

二科會第二十三回展(洋畫、彫刻) 三日——

十月四日 於東京府美術館

主要展の項参照

伊藤繼郎個展(洋畫) 三日——五日

於銀座資生堂

新時代洋畫展 六日——十一日

於銀座紀伊國屋

第二十二回日本美術院展(日本畫、彫刻) 七日——十月三日

於東京府美術館

主要展の項参照

多聞洞主催東西大家新作畫展(日本畫) 七日——九日

於銀座資生堂

第二回北信輸出工藝展覽會 七日——十一日

於新潟市商工獎勵館

第十三回金城畫壇展覽會(日本畫、洋畫) 七日——十六日

於金澤石川縣商品陳列所

趣味の服飾工藝品と時代裂の會 九日——十六日

於日本橋高島屋

朱明會洋畫展 九日——十一日

於日本橋三越

新造型美術協會秋季展(洋畫) 十日——十四日

於銀座青樹社

高橋亮洋畫展 十日——十六日

於日本橋白木屋

新藏品展覽會(綜合展) 十日——卅日

於京都岡崎美術館

九州沖繩聯合工藝試作品展 十日——十六日

於熊本市花畑町勸業館

明朗美術展(日本畫) 十一日——廿九日

於東京府美術館

五十點近くの大作が並べられたか、何れも單に畫面を圖案的にまとめ上げたもので何等の自然觀照も表はれて居ず、むしろボスターに近いやうなものさへ可なり見受けられた。それでもさすがに落合朗風は「常夏の國」及び「畫人像」、「道化」外一點に相當突込んだ表現を見せたが、手法、色彩共に生で洗練されて居らぬ。但し前者は壁畫として見て可なり面白いものであった。

蝶羽工藝裝身具展覽會 十二日——十五日

於銀座資生堂

紫蝶會主催

林俊衛洋畫小品展 十三日——十七日

於大阪美術新論社畫廊

新聞挿繪展 十四日——十八日

於名古屋丸善畫廊

新愛知新聞社主催

近畿聯合輸出工藝試作品展覽會 十五日——廿八日

於大阪府立貿易館

片多德郎遺作展(洋畫) 十六日——廿七日

於新宿紀伊國屋

支那民衆展 十七日——廿一日

於銀座鳩居堂

アニメ第三回洋畫展 十八日——廿日

於銀座紀伊國屋

竹器工藝品展 十九日——廿三日

於新宿三越

眞野紀太郎ばら百花水彩展 十九日——廿三日

於日本橋高島屋

京都作陶七名會展 十九日——卅日

於銀座松屋

中野秀人洋畫個展 廿日——廿四日

於數寄屋橋日動畫廊

竹房齋花籠展覽會 廿日——廿七日

於日本橋三越

第九回朝倉彫塑塾展覽會 廿一日——卅日

於東京府美術館

塾主朝倉文夫の作品の外には一の優れた作品も見當らないのは物足りなかつた。唯大河内信秀、大塚辰夫の二作家は素質ある人として將來を期待される。朝倉文夫は多くの肖像を出品したが、中にも「故武藤氏の像」、「寺内總督像」は等身大或は其れ以上の大作で堅實なる寫實的技巧を示して居た。

七鳳會第二回洋畫展 廿一日——廿四日

於銀座三共

第一回彩光會展(洋畫) 廿一日——卅日

於京濱デパート

山陰民藝展 廿二日——廿七日

於神戸三越

坪内節太郎個展(日本畫) 廿二日——廿七日

於大阪朝日ビル

堂本印象筆大和信貴山成福院新襖繪展觀

廿三日——廿四日 於名古屋松坂屋
第七回東京みづゑ會展 廿四日——廿七日 於新宿三越

日氏蒐集洋畫展 廿五日——廿八日 於銀座青樹社

森田勝滯歐作品展(洋畫) 廿五日——廿九日 於銀座資生堂

ガートルード・ポエル女史彫刻素描展 廿五日——廿九日 於日本橋高島屋

飾畫第二回洋畫展 廿六日——卅日 於銀座紀伊國屋

新版畫集團小品展即賣 廿二日——卅日 於淺草松屋

香蘭社新作陶器展 廿七日——卅日 於神戸鯉川筋畫廊

松田修坪南支臺灣寫生第一個展(日本畫) 廿八日——卅日 於日本橋永籬堂

岩松淳洋畫個展 廿八日——卅日 於新宿紀伊國屋

バーナード・リーチ個展(陶磁器) 廿八日——卅日 於土橋たくみ工藝店

岩田藤七グラス展 廿九日——十月五日 於銀座松坂屋

十月

塊人社關西小品彫塑展 一日——四日 於京都大丸

日本美術協會第九十九回展(日本畫) 一日——

廿日 於日本美術協會

日本美術協會の第九十九回展は繪畫展覽會として催された。搬入數二百二十六點の中入選九十一點、外に無鑑査二十五點を加へて計百十六點が陳列された。多くの作品は華麗ではあるが深い自然觀照に缺け、舊時代の型に囚はれて進取の氣の見えぬのは貴い歴史を持ち、畏れ多くも高松宮殿下を總裁に頂く此の會として考ふべき事である。

別に參考品として御物始興作雜畫六種屏風を初め、高松宮御貸下品たる宗雪の草花屏風、帝室博物館、東京美術學校所藏品及諸名家の秘藏品である達派、琳派の作品約七十點が展觀された。

梅原龍三郎作品第二回鑑賞會(洋畫) 一日——五日 於銀座三味堂

六月に催された第一回展に引續いて千九百十八年彼が滿三十歳の時より其以後彼の畫風が確立され其の藝術が次第に深みを加へて來た大成時代の千九百三十三年迄の作品三十六點、及び昭和十年度の作品「熱海」が陳列された。

染織名作展 一日——七日 於上野松坂屋

新興美術家協會展(綜合) 一日——廿日 於東京府美術館

今夏ホクト社及大乘美術會が合同して生れ出した新團體新美術家協會の第一回展であ

る。委員に大内青坡、青圃兄弟、清水多嘉示、玉村方久斗等相當の作家が居るが、一般出品者のレベルは低い。

委員では大内青坡、青圃兄弟の作品が光つて居た。青坡の洋畫「眞珠」、「朝」などブレイクの象徴主義に影響を受け、完成はして居ないが面白い試みと云へる。青圃の彫塑、賞牌の原型も好い出来であつた。

此の會での一番の見ものは、此の會の創立者の一人でありながら第一回展を待たずして三十七歳で死んだ日本美術院同人木村五郎の遺作の陳列であつた。南國の女、北陸の人などを主題にした木彫の人物像には殊に優れた作品が多かつた。之だけ動きのある木彫を作る人は若い作家には少ない。

三越増築完成記念展(日本畫) 一日——八日 於日本橋三越

三越本店増築改築竣工の記念に十月一日より數日間東西大家の日本畫十數點が陳列された。中竹内栖鳳の雪、川合玉堂の月、横山大觀の花よりなる三幅對は珍しいので斯界のみならず一般の評判となつた。

近藤七郎ゴルフ畫展(洋畫) 一日——五日 於銀座青樹社

下郷羊雄洋畫個展 一日——五日 於銀座紀伊國屋

艸兒社美術展覽會(日本畫) 一日——五日 於京都大丸

全早稻田洋畫展 二日——六日

於神田東京堂

西洋骨董品展覽會 二日——七日

於日本橋高島屋

佐伯祐三回顧展(洋畫) 三日——十五日

於三共ギャラリー

昭和三年八月巴里に客死した佐伯祐三の遺作八十八點が銀座畫廊の今口憲一主催の下に陳列された。大正十二年第一回渡佛の時より昭和三年迄の年迄の作品である。彼の第一回滯佛作品がブラマンクの影響下にあるので、(第二回滯佛の作品にあつてはブラマンクを超越して居る)彼は好くブラマンクと比較されるが、彼はブラマンクよりも鋭い神經を有て居たし、深さに於ても優さつて居たやうである。唯視覺的な繪畫的表現の修練に於てはブラマンクの方が秀でて居たと云へるが、其の點は三十二歳で夭折した彼の修業の未だ足りなかつたと見るよりは、張り切つた精神の美しさに溢れて居る彼の第二回滯佛作品が示すやうに、彼の藝術はそうした方面への發展を不必要としたと我々は考へたい。のみならず昭和三年の興奮状態にあるやうな作品を見ると彼が若しより長く生を享けたとしても、そうした方面への修業は既に不可能であつたらうと思はせるものがある。

展覽會數ばかり多くて觀者の魂に呼び掛けて來るだけの作品を見る機會の少くなかつた今年度にあつて觀賞家を最も悦ばせた

催しの一つであつた。

京都自由畫壇名古屋市展(日本畫) 三日——七日

於名古屋美術館

山崎省三洋畫展 四日——七日

於大阪美術新論社畫廊

現代諸大家新作日本畫展 五日——十日

於日本橋白木屋

筑前筑後陶器展 五日——七日

於福岡日日講堂

澤田宗山作陶展 六日——十一日

於大阪三越

平福穂庵、百穂父子遺作展(日本畫) 七日——廿三日

於東京府美術館

百穂の遺作展觀は既に大規模に且用意あるものが行はれた後であるので今回はさして注目すべきものはなかつた。

因より大作に名を成した畫人ではなくして、小品にも精根を打ち込んだ眞箇の畫人であつたから、今回の展觀に大作がないといふことは決して展覽會の價値を墜しめるものではない。然しこの作者の畫生活の轉機を作つた如き記念的作品の見えなかつたことはこの展覽會をして輕からしめたことは否めない。

この展覽會の持つ功勞は寧ろ穂庵作品の蒐集にある。穂庵に至つては、明治三十五年に小展觀が催された以外かくの如き大規模の蒐集を見たことは未だ嘗てなかつた。少數ながら明治以前の作品と、明治十七年

第二回繪畫共進會出品の北海道上人圖、明治二十三年第三回内國勸業博覽會出陳妙技

二等賞受領の乳虎圖等、其の他四條河原夕涼等の大作を混へ、多數の作品を一室に批閱し得たことは、穂庵の明治繪畫史上に於ける位置を新しく考ふるに甚だ役立つものであつた。

會宮一念洋畫個展 七日——十一日

於銀座資生堂

今春の獨立展に目覺しい進境を見せた會宮一念の小品二十四點が陳列された。近代的な纖細な神經を以つて對象を把握し、豁達な筆を以つてフオーブ風に描いて居るが兎角自我を先に出したいフオーブ的作品にあつて之は對象の美を纖細に描き出さんとして居る點に特色がある。

獨立美術協會第五回秋期展(洋畫) 七日——十三日

於銀座青樹社

二十六人の會員が小品を二點づつ出品した。各自其の個性を發揮して描いて居り、何れも相當優れた感覺の所有者であるので面白く見られたが、少しく自由に奔り過ぎた結果が佳品少なく、中に海老原喜之助の「顔」及び會宮一念の「あさがほ」が光つて居た。中山巍の「野外靜物」の面白い觀點と力強い表現、野口彌太郎の「風」の氣の利いた描寫、兒島善三郎の「躑躅咲く庭」等も特筆に價する。

方洛作品展(東洋畫) 七日——九日

三雲祥之助洋畫個展

於丸ノ内日本俱樂部
七日——十一日

中村彝遺作展(洋畫)

於銀座日動畫廊
八日——十二日

今村繁三氏の所藏品を主とする洋畫二十點、パステル一點の陳列。中に大正九年の作である「女」の如き小品ながら名品もあつたが、明治大正を通じて偉大なる洋畫家の一人であつた中村彝の全貌はそれだけの作品では示し得べくも無く、其の一片鱗を示し得るに止つた。

フランス三大家展覽會

九日——十六日

日佛畫堂主催でモオリス・アスラン、シヤルル・ゲラン、ザビエール・ブリカール三人の作品が相當多數(合計二百餘點)、及十九世紀のフランス大家の作品が約四十點並べられた。アスランの陳列品中には今秋二科に出品されたものが多かつた。美麗なるブリカールの作品は一般觀衆の人気を集めたやうである。アスラン、ゲラン、ブリカール等は決して現畫壇の一流の作家ではないとは云へ、又十九世紀の大家の作品中には疑はしきものも見受けられたが、斯く優れた作品を多數將來して展觀する事は我國洋畫家及び一般好事家の爲に益する事大であり、其の點主催者は世間より感謝さるべきであらう。

矢野橋村個展(日本畫)

九日——十三日

於日本橋高島屋

近作二十五點に昨今の精進の跡を示した。南畫にのみならず大和繪の技法、四條派の寫實などをも採り入れての努力を見せたが、幾分筆が立ち過ぎて技法のみ鮮かなる傾向が看取された。

商工省主催第三回輸出工藝品展覽會

十日——十七日

於丸ノ内東京府商工獎勵館

商工省輸出工藝品の第三回展の東京に於ける展觀として開催された。東京に於ける展觀後は大阪及び名古屋に於て開催せられ、出品作品中特に輸出向に優れたものとして選出された九百三十七點は昭和十一年春ニューヨークに於て展觀される豫定である。

出品の種類は陶磁器其の他の窯業製品、漆器、金屬製品、布帛、木竹製品、綜合品及び其の他の工藝品の多岐に亘り、搬入點數三千八百八十九の中入選千二百九十一點、別に各研究所、及び其の他個人の無鑑査出品八百四十二點があつて合計二千百三十三點が陳列せられ、盛況であつた。

第一回、第二回に比べて輸出工藝品としての質は一般に向上して來た事は認められるが決して満足を表し得る成績ではなかつた。

第一の缺點は實用的價値の乏しきもの、

使用目的を充分考慮してないものが可成り多かつた事である。その缺點は例へば進歩

賞受賞の鳥取漆器製作所の漆の洋酒セツトにも見られた。某審査員が指摘せる如く漆器で洋酒を飲む氣に外人がなるかどうか非常に疑問である。ビールを飲むにもガラスの外陶器、石質器は好んで用ひられるが磁器は殆ど用ひられぬ如く、食物殊に嗜好物は器物を選ぶ事を考へねばならぬ。實用にはならぬでも置物としても面白からうとの批評もあつたが、歐米の富裕な家庭に常時飾られてゐる豪華な金、銀、クリスタル・グラス等の食器も饗宴の時には用ひられるものであつて、特別古いものなら兎に角、實用にもならぬ食器を飾る爲に買ふやうな事は歐米人には先づあるまい。輸出向工藝品の製作者は出来るだけ使用目的に合致したものを作り出す事を心掛けると同時に、外人の慣習もよく考慮せねばなるまい。

第二の缺點としては裝飾の爲の裝飾がかなりあつた事で、横濱の辨天通り邊に見られるやうな所謂外國向のごてごてした裝飾は殆ど影を潜めたが、それでも尙餘計な裝飾をつけて實用品たるべきものの價格を徒に高くしたり、質を弱めたり、他の室内調度との調和を害するを恐れしむるやうな模様をつけたりして居るのを見た。製作者はもつと材料の美、構成の美、無地の色の取り合せによる美等に目覺めねばならぬ。歐米

人は精巧な仕事を好む事勿論であるが、日本人と異つて細かい美しさよりは、大まかな美しさ、物全體から受ける美しさを重要視する。此傾向は一般大衆には殊に顯著故大量の輸出工藝品製作には特に考慮を要する。

第三の缺點としては未だ歐米の意匠の模倣品の見られる事である。輸出品は歐米の趣味にとり入らねばならぬ事勿論であるが日本の特性が表はれて居らねば、安價であると云へ、高い關稅障壁を乗り越して發展する事は難しい。それには日本風な模様を現代歐米人の嗜好に合ふやう、リズムミカルな動きのあるものに翻案するのが得策かと思はれる。日本風な模様そのまゝでは初めは一部の人に愛好者を見出さうが、根底に於ける趣味の相違よりして、一般化も永續化も望まれぬ。

その外輸出工藝品に望ましい事は我國獨特の材料と技術の強調である。此の點で往時より漆器の歡迎されるのは周知の事實であるが、彫金の活用も面白いであらうし、ブルノー・タウトの指導の下に群馬縣で行はれて居る竹細工の如きも大いに有望である。

商工省の工藝指導所では我國特殊の技術として編組工藝に力を入れて、竹、あけび、籐などのみならずセロファン、ファイバークコードを併用して編組工藝の試作品を出品

現代美術

して居たが、優れた試みである。

京都の陶磁器試験所では同所の研究の成果たる黄金化合物によらざる安價なる桃花紅色の新顔料「陶試紅」を用ひたる製品を三點出品したが、此の色彩は歐米人には好まらぬ故、此の安價なる新顔料を以てせる作品は輸出品として非常に有望である。又同所の新製品「陶試辰砂」を使用せる磁器も出品せられたが、これ又斯界の爲に慶賀すべき發明品で同研究所の精勵を多とせね

ばならぬ。

一體に歐米には、往時は兎に角、現在では工藝品は美と實用性が二元としてではなく、一元として完全に合致すべきものであるとする思想が一般に行き渡つて居る故、我國工藝家も此の工藝の眞髓に目覺めて、さうした工藝品を製作する事が我國輸出工藝を振興せしむる第一歩である。左に商工省の調査による出品一覽表を示す。

品 種 名	一般出品物		無鑑査出品物		出品物總計	
	搬入數	鑑査合格數	搬入數	陳列數	搬入總數	陳列總數
陶磁器其他 窯業製品	六〇〇點 九六人	二九一點 七五人	一七七點 一六人	一三三點 一五人	七七七點 一二人	四二四點 九〇人
漆 器	七三九 二一	三一六 一四七	五三五 一八	四一八 一七	一二七四 二二九	七三四 一六四
金 屬 製 品	一四三〇〇	一七二	一〇四	一〇四	一五三四	二七五
布帛及同製品	一四二六	一七二	一一四	一七〇	一五四〇	二五六
木 竹 製 品	一五五二 一三九	一二七 五六	一五〇 一六	一九八 一〇	一七〇二 一五五	二二五 六六
其ノ他ノ工藝 品及綜合品	一一四二 一五〇	二〇〇 五七	三九	一九	一一八一 一五九	二一九 六三
計	三、八八九 八〇六	一、二九一 四七九	一、一一九 八五	八四二 七四	五、〇〇八 八九一	二、一三三 五五三

進歩賞、有功賞受賞者

陶磁器其ノ他ノ窯業製品

進歩賞

デザインセット

有功賞

硝子テーブルセット

愛知 日本陶器株式會社

東京 合名會社佐々木硝子店

現代美術

クリスタルステムライ

ティブルセツト

ティブルセツト

漆器

進歩賞

洋酒セツト

有功賞

ビール盆

果實盛

布帛及同製品

進歩賞

花リボン

有功賞

刺繡ハンドバツク

紋レヨナンド

テーブルセンター

金屬製品

進歩賞

灰皿

有功賞

スプーン、フォーク、ナイフ

木竹製品

有功賞

自由動物ライオン狩

綜合品及其他ノ工藝品

進歩賞

木製眞珠鉤

硝子製裝身具

東京 各務鑛三

愛知 名古屋製陶

福岡 東洋陶器株式會社

鳥取 鳥取漆器製作所

山形 八幡清太

福井 古川伊作

東京 津田信吾

東京 野村とし子

京都 京都織物株式會社

京都 山鹿清華

愛知 愛知縣工藝協會

新潟 捧吉右衛門

東京 小島百藏

大阪 善野嘉三

大阪 日本人造眞珠硝子工業組合聯合會

有功賞

アケビ仕事籠

あかね會染織品展

高間惣七色紙展

河合卯之助陶器展

孜々會第一回日本畫展

伸草社第二回展(洋畫、日本畫)

黑色洋畫展

關谷雲崖第一回小品展(日本畫)

東海美術協會洋畫展

六橋杉溪言長南畫展

全國工藝品展覽會

港屋特選手工藝品展

於日本橋三越

於大阪美術新論社畫廊

於日本橋三越

於大阪美術新論社畫廊

於日本橋三越

於日本橋三越

於銀座伊東屋

於神田東京堂

於銀座紀伊國屋

於華族會館

於名古屋鶴前公園美術館

於大阪阪急百貨店

於山田市三重縣商工獎勵館

於銀座資生堂

於日本橋高島屋

於東京府美術館

主要展の項参照

第三部會彫刻展覽會

十五日——十一月十日

於東京府美術館

舊帝展第三部の審査員及び無鑑査級の八

作家が反帝展を標榜して組織した第三部會

の第一回展である。作品の質に於ては舊帝

展の彫塑部その儘で何の新しさも發展も見

られなかつた。而も帝展には落選したらう

と思はれる駄作が一般出品作中であつて此

の展覽會の水準を低くして居た。各會員の

出品作を大體に於て一區劃宛にまとめて陳

列して、個展の集合の形式を採つた事は陳

列方法自身も面白く、又それを可能ならし

むるやう多數の作品を出品した會員の意氣

達と努力は讃むべきであらう。

日本人の感覺は歐米人のそれと異なるのみな

らず、歐風の彫塑を習得して未だ久しから

ざる爲か歐洲の古典的標準から云ふと日本

人の歐風彫刻は一體に水準が低い。歐風刻

彫の多い三部會も好成績ではなかつた。

其處で、木彫を出品し、塑像に於てもギリ

シヤ的な量を基調とする方法を採らず、繪

畫的面による表現を規つた石川確治の作品

(雅子の像)が此の會で最も成功して居た

のは偶然ではない。彼の古風を生かした木

彫「羅浮仙」も面による表現を重要視して居

るし、木彫「川鯉」も寫實的なものである

が、共に量が輕視されて居る。此の傾向を

極端に繪畫的に推し進めたものが屏風「泰

山木」である。木の浮彫に彩色したもので、

昨年の帝展で彫刻か繪畫かと問題になつたものと同じ様式のものである。平面裝飾的な傾向を持つ日本人として此處迄進まねば氣がすまなかつたものかもしれぬ。

會員池田勇八の動物作品は得意の題材だけに難の無い寫實で、中「待命」、「尾花なびく」、「土埃」等は風情豊かな佳品である。「優勝馬」は佳品であるが未だ動きが充分でなかつた。

日名子實三の宗麟像は好い出来であつたが、近頃の國粹主義流行に阿つたやうな、東洋的題材を外部的にむやみに用ひたメダル類は少しくわざとらしい感を與へた。むしろ東洋的精神の表はれて居たのは、作風は洋風であるが小品「李白」である。

小倉右一郎の作品では肖像に好いものがあつたが、「王道樂土の礎」の構想は不器用であつた。

小倉、畑、吉田の諸會員は戦争を主題にした浮彫（主として靖國神社燈籠の爲のもの）を出品して居たが、何れも戦争と云ふ動きの烈しく、意志と感情の激烈な燃焼である題材を浮彫にこなし切れず、不成功に終つて居た。

特選一席の高桑文雄の「投槍」はスポーツマンの男性的肉體美を寫し出して難無きのみならず、其の精神的な意力をも表現しようとして居る點、若年の作としては賞讃に價する。特選二席の三井高義の「ピータ

ー」はマスとマスとの交錯には成功して居るが生命の無い迫力の弱い作品であつた。

この缺點のより明に現れたのは其の大作浮彫の「遊馬の圖」で、レオナルドの馬を眞似たものと思はれるが、其の内容はレオナルドの馬に比ぶべくも無く、にぶい生命力の無い馬であつた。殊に一番左の馬の如き全然生きて居なかつた。

その外一般出品の中で吾人の注意を引いたのは向山峽路の「立女」で、寫實的な其の作は習作の域を脱しないが、對象を立體的に把握し表現する其の彫刻的な感覺と、寫實的な手堅い技法とは將來を期待せしめる。

會員出品百三十點、搬入總數百三十八點の中入選五十點（三十二人）。

特選 第一席 投槍 高桑文雄

第二席 ピーター 三井高義

第三席 軍鶏 川越良

帝展日本畫特選展覽會 十五日—十一月三日 於京都美術館

洋畫十月展 十五日—十九日

於銀座三味堂

三味堂がその陳列場開店一週年記念として石井柏亭、長谷川昇、川島理一郎、梅原龍三郎、安井曾太郎、牧野虎雄、藤田嗣治の七人の小品十二點を並べた。色々な意味で當代の代表的な顔觸れであるだけに各人の十分洗練されたものを樂々と見せて居て

興味が深い。石井柏亭の松花江はいつもの明快ながら時々陥る平板と乾燥無味より救はれてしつとりとした好ましき作、好く地方色も捉へられて居る。長谷川昇の「猫を抱く婦人」は何時もの如く豐潤なる色彩感覺を以つてせる奇巧を衒はざる穩健なる寫實。川島理一郎は「蘭」に生々しき原色の配列を用ひて色彩圖案的な花卉圖を作つた。梅原龍三郎は小裸婦を思ひ切つて赤く描きそれに窓より入る光線の青色を帶びたハイライトを加へた。「桃」は彼としては甚だ濃い淡色調で、背景を生むホワイトで平塗りして稍日本畫的效果を見せた。牧野虎雄は漸く發見した安住の境地に居る。藤田は何時もの調子であるが、小品にも色々細工をし過ぎるせいかすつきりした處が足りなかつた。

第二回秋期青樹社洋畫展 十五日—十九日

於銀座青樹社

青樹社の主催する秋期展觀、出品者はその藝術に於てもその年功に於ても我が洋畫壇の代表的作家十四人。注目すべきものとしては海濱の大風景を粗豪にして而も整理された筆意を以て擲んだ藤島武二の「海」、アカデミツクな技巧の冴えを示す岡田三郎助の「戸隠の眺め」、清澄な筆觸の妙を味はせる金山平三の「鶴原」、綿々たる技巧の餘裕を示した山本鼎の「白菜」等があつた。その他和田三造の「初秋」は倭繪様の洋畫

とも稱すべきか。石井柏亭の「手賀沼」は一見平凡な寫實の中に、地方色の表現に成功して居る佳作。その他、有島生馬、小林萬吾、白瀧幾之助、辻永、藤田嗣治、南薫造等の出陳があつた。

藤川勇造遺作彫刻展 十六日——二十日

於日本橋高島屋

久しく二科にあつて其の彫刻部の指導に盡瘁し、昭和十年五月帝國美術院會員に任命されて其の後の活躍を期待せられたにも拘らず、六月十五日惜しくも急逝した藤川勇造の遺作二十九點が並べられた。高松に建てられた松平伯及若槻男の記念銅像の如き大作を除いては、滞歐作品より昭和十年度の作品二點に至る迄、寡作であつた故人の代表作は殆ど網羅して、其の藝術を鑑賞し、其の發展を辿り評價するには適當の遺作展であつた。

彼は堅實な寫實に據り、又何時も本格的な彫刻道を歩んで居た。彼の藝術は一見其の師たるロダンの藝術と異なるが、ロダンの青銅時代に示された、而して其の後の偉大なる發展の基礎をなした堅實なる寫實をばロダンより學んだものと思はれる。

ロダンの影響の強い「マリー・アントアネット」、「スーザンヌ」、「兎」等滯佛時代の作品は非常に優れたものを見るが、昭和四年以後のものにも佳品多く其等はロダン風なりズミカルな動きを失つた更に、靜的

な量の美しさを持つ地味な寫實的作品である。中にも昭和四年の二科出品作「女浮彫」、昭和七年の「ミスター・ボス」、昭和八年のブロンズの「裸」等は優れて居る。

第四回横濱美術展覽會(日本畫、洋畫) 十六日——二十二日

於横濱櫻木町驛頭興産館

珊々會第二回日本畫展 十六日——二十日

於日本橋高島屋

珊々會は鍋木清方、菊池契月、西村五雲、西山翠嶂、松岡映丘、結城素明(五十音順)の六人の舊帝展系帝國美術院會員を會員とするだけに、帝展無き今秋の日本畫壇の呼びものゝ一となつた格好である。作品もさうした世間の期待に背かぬものが並べられた。鍋木清方は「三代三趣」と題して明治、大正、昭和の美人畫三幅の外、近松門左衛門の老境を描いた「巢林子」を出品。後者は机に倚る巢林子の上部に其の腦裏に動くものとして國姓爺と紙治心中の二場景を描いたもの、清方ならでは出来ぬものではあるが三つの題材が各々挿繪のやうに分れ分れになつて效果の弱いのは巢林子の肖像が他に比して小さ過ぎた爲であらう。菊池契月の「松明牛」は牛の手綱を片手にしやがみながら、片手に炬火を差上げて何物かを熱心に注視する一兵卒を描いたもの。兵卒の緊張した様子も巧みに描れ、其の兵卒の持つ炬火の焰が左になびいて一度び視覚を牛の頭の方に誘導するが、兵卒にそゝが

れた其の牛の目と、はり切つた手綱が再び觀者の注意を兵卒に集中させる。優れた構圖である。西村五雲は鳶の止つた大魚籠に掬網を配した「砂丘」を出品。二尺五寸幅豎幅の力作で好く氣分を表はした堂々たる寫實の作品である。西山翠嶂は「宿鬼」に高雅にして深い自然觀照を示した。整然たる構圖は此の作者らしい氣品を繪に與へて居る。松岡映丘は健康の優れざるにも拘らず、二尺幅の豎幅に「朝日將軍」を描いて意氣壯なる所を見せた。空間の表現、雲煙の描出は一般にも好評であつたやうである。

日本現代版畫展 十六日——十九日

於大阪朝日會館

日本版畫協會主催

東京鑄金會第廿五回展覽會(金工) 十六日——二十一日

於日本橋三越

第十八回朝鮮南畫展 十七日——二十日

於京城商專校内

朝鮮南畫院主催

小川流押繪展 十七日——十九日

於銀座伊東屋

東西大家新作日本畫展 十七日——十八日

於京城美術俱樂部

里見勝藏洋畫個展 十八日——二十四日

於大阪美術新論社畫廊

獨立美術協會第五回秋期展(洋畫) 十八日——二十四日

於名古屋丸善

京都自由畫壇試作展(日本畫) 十九日——二十三日

十三日

於京都岡崎美術館

東都三氏工藝美術展覽會 十九日——二十三日

日

於福岡松居博多織物店

植松彌吉、富樫光成、大野光典三氏出品。

奈良洋畫會展 十九日——二十一日

於奈良奈良會館

八幡義生染織刺繡美術展 二十日——廿三日

於銀座伊東屋

藝術人形の會 二十一日——二十六日

於日本橋三越

日本人形社主催

田村宗吉人形展 二十一日——三十一日

於銀座三越

奈良美術工藝品展 二十一日——二十五日

於大阪三越

翠紅會展覽會(日本畫) 二十一日——二十七日

於上野松坂屋

關西第一回構造社小品展 二十二日——二十三日

四日

於神戸市大丸

青丹會第四回洋畫展 二十二日——二十八日

於銀座青樹社

山下品藏個展(洋畫) 二十二日——二十四日

於銀座資生堂

中川紀元近作展(洋畫) 二十二日——二十六日

日

於銀座三味堂

堂本印象揮毫獻上屏風陳列 二十二日——二十三日

三日

於丸ノ内三菱合資會社

現代大家創案支那緞通展 二十二日——二十三日

七日

於日本橋高島屋

支那緞通の製作及び輸出に従事する佐野

洋行が現代日本の生活と趣味に即した緞通

を作りたいと、日本畫、洋畫の大家二十一

人及び室内裝飾に活躍するレーモンド夫人

に圖案的製作を乞ひ、其に依つて北平に於

て製作したる緞通の展觀である。

成功を思はせたのは東洋的のもので香取

秀眞の團花紋、西洋的のものでは梅原龍三

郎の豹模様、前者は澁い茶の地に支那風の

流麗な線の花模様を黒で所々に置いたもの

澁いながらに冴えた印象を與へ、清澄にし

て然も深淵の落着きを湛えて居る。後者は

作者得意の豹を平面的に圖案化したもの。

而も其が立體的に生きて單なる模様を終ら

ずして強靱な豹の魅力を感じせしめる。我

田三造の「清澄」は其の描く景色自身は好

いにしても、其の一景色を上下對象的に反

復したのは餘りにも平凡な手法であつた。

長谷川昇の「連山模様」は簡單ではあるが

緞通の性質を好く生かし、模様の何たるか

を解する優れた圖案である。岡田三郎助の

寫實的な模様は十九世紀末より今世紀初め

の個人主義文化華やかかなりし頃のフランス

の模様似たもの。現代人の欲求するもの

かどうかは疑はしい。それよりは鶴木清

方の「桐の葉」、川端龍子の「梅霞」など

が案外現代日本人の欲求にびたりと當ては

まるのではないかと思はれた。

日本美術院同人第三回小品展(日本畫、彫刻)

二十三日——二十七日 於上野松坂屋

河井寛次郎新作陶器展 二十三日——二十七日

日 於日本橋高島屋

土と云ふものを生かさうとして居る事、

土の味を出来るだけ自然のまゝに、而も近

代人の感覺を以て洗練して現はして居る事

が此の作品の美點である。

建築展 二十三日——三十日

於丸ノ内蠶絲會館

第七回構圖社廣告美術展 二十四日——二十七日

七日

新作藝術衣裳展覽會 二十四日——二十七日

於日本橋高島屋

野口功造、野口直造作

水谷清個展(洋畫) 二十四日——二十八日

於福岡市西中洲大同生命

銀跡會第一回工藝展 二十四日——二十七日

於銀座伊東屋

眞垣武勝近作洋畫展 二十五日——二十七日

於日本劇場地下一階

奈良美術家聯盟展(洋畫) 二十五日——二十七日

七日

九名會展(日本畫) 二十六日——二十七日

於京都八坂俱樂部

六甲畫塾展(日本畫) 二十六日——二十七日

於博多東中洲明治製菓

讃岐美術協會第七回展 二十六日——二十九日

於高松市三越

會宮一念洋畫個展 二十六日——三十日

於大阪美術新論社畫廊

泰西美術工藝品展覽會 二十六日——三十日

於銀座資生堂

南蠻堂主催

八木岡春山第二回日本畫個展 二十六日——三十一日

於日本橋三越

金澤五友會第十回展(工藝) 二十六日——三十一日

於日本橋三越

臺灣美術展(洋畫) 二十六日——十一月十四日

於臺北臺北教育會館

東光會第四回展 二十七日——十一月十八日

於東京府美術館

會員、會友一同春季展に劣らぬ精進振りを示し、一般出品者も大いに熱のある所を見せた。中で著しい出来栄を示したのは堀田清治で、其の「靴屋」は靴の製作に懸命な老爺を中心として小さき靴屋の夜の店頭を描いたもので、小さき靴屋の生活を内的に把握して遺憾が無い。モンタージュ風に、併し寫實的な描法を用ひて娼婦を描いた「生活」も迫力のあるものであつた。其の取材に於ては大部分がオルグ・グロスの影響が見られる。靜物や風景の美しき繪のみ描いて居ないで、かうした實生活に喰ひ入つた繪もつと描れて好い時代である。

野口謙藏の大作「夕日の家とひまわり」も喜ばしき收穫であつた。橋本八百二は山上に於ける空の美しく壯大なる變化をいろ

いろと劇しく旺盛な筆力で描いて居た。熊岡美彦は力作「支那室裸女」の外六點及びジャンルを出品。支那の風物を詩趣を交へて寫達に描いた。高間惣七は轉向して畫面を理智的に整理し初めたのみならず、「銀座」にはモンタージュさへ試みて居たが、何れも未だ試みを出でぬ。石本秀雄は幾分の轉向を見せたが此の春季展の作品より反つて其の畫格を落したやうである。中尾達は西洋婦人を題材にして對象と正面から取組んだ努力を示したが、がさつで潤ひの無いのが缺點である。その外特記すべき作品は次の如きものであらう。佐藤章「岩内の五月」、平通武男「裝飾作業」、「觀劇」、河原修平「兄の家族」、「三輪孝」、「收穫」、松本富太郎「小六月」、「二點」、家永麒三郎「バナナ賣」。

新會員推薦 小早川篤四郎、水船三洋、園部晋、胡桃澤源一
新會友推薦 平通武男、益山雅衛、正田二郎
無鑑査推薦 大川武司、土肥原三千喜、手島貢、辻利平

授賞

東光賞 岩下三四

M氏獎勵賞 三輪孝、三井正登、岩田淑子

子

K氏獎勵賞 長進、牛島憲之、井上脩、松本富太郎、河原修平

Y氏獎勵賞 家永麒三郎、江藤哲、大崎泰

I氏獎勵賞 大木茂、安達卯正、水澤決
小寺稻泉新作個展(日本畫) 二十七日——二十八日

於名古屋美術俱樂部

福岡美術家聯盟展(綜合展) 二十七日——三十一日

於福岡日々新聞社

尚美展(日本畫) 二十八日——三十一日

於日本橋東美俱樂部

六人會舞臺美術展 二十八日——三十一日

於銀座伊東屋

岸畑久吉作品展(洋畫) 二十九日——三十日

於銀座青樹社

洋畫大家力作展觀 二十九日——三十一日

於京都大丸

伊谷賢藏第二回個展(洋畫) 三十日——三十一日

於京都岡崎美術館

愛知縣出身一流畫家近作展(洋畫) 三十一日——十一月六日

於名古屋丸善

十一月

朗峯畫塾第五回作品展 一日——五日

於銀座松坂屋

天平美術模作展 一日——五日

於銀座松坂屋

天平美術研究會主催

昭和十年商工省輸出工藝展覽會 一日——八日

於大阪府立貿易館

福島美術協會第六回展覽會(洋畫) 一日——

五日

岡崎桃乞油繪個展 一日——五日 於福島市公會堂

第七回名古屋美術展(綜合) 一日——十二日 於銀座資生堂

於名古屋美術館

小林和作洋畫個展 一日——五日

於銀座三味堂

滿蒙土産小品展(洋畫) 一日——五日

於銀座青樹社

福澤一郎、清水登之、鈴木保徳出品

東洋けてもの第二回展 一日——七日

於上野松坂屋

ヨーロッパ時代裂展 一日——七日

於上野松坂屋

座右寶刊行會の主催で、巴里の時代裂商であり蒐集家であるハッサンの蒐集せる歐洲時代裂四六九點が展觀された。内容は十四世紀のもの數點を最古とし、十五世紀のイタリー、スペインの名品、十六、七、八世紀のイタリー、フランス、スペイン、フランダース等の諸種の織物、刺繡及びレースで、十四世紀より十九世紀初頭に至る絢爛たる歐洲織物文化を繰り展げた。これだけ質の揃つたものをこれだけ一堂に集めて見得る機會は歐洲にあつても少く、一般觀衆のみならず専門家をも益する事多大であつたと思はれる。

第一回美術工藝獎勵展覽會 一日——三日

於京都市公會堂

京都陶磁工業組合主催

第一回京都漆藝會展 一日——三日

於京都岡崎美術館

關西新洋畫展 一日——四日

於大阪朝日會館

獨立展關西在住出品者に依つて組織されたもの。

一樹社洋畫展 一日——三日

於京都朝日會館

春陽會の會員及び會友に依つて組織されたもの

時代工藝美術品展 一日——五日

於日本橋高島屋

新時代洋畫展 一日——五日

於銀座紀伊國屋

東京金影會七回展 一日——六日

於日本橋三越

松尾晃華個展(日本畫) 一日——三日

於博多松居博多織物店

仙臺工藝指導所七週年記念展 一日——二日

於仙臺同所

橋本關雪個展(日本畫) 一日——五日

於日本橋三越

横物ばかり十二點を出品、花鳥畫六點、動物を描くもの四點、風景、人物畫各一點である。其の筆力筆技の暢達は賞讃すべきもの。筆が立ち過ぎるとの批評もかなりあつたが、其の「霜樹栗鼠」、「夕露」、「雨後新月」等に表出された情緒の美しさは作者

の自然觀照の鋭さを示して居た。

井南居東西大家新作日本畫展 一日——三日

於東京美術俱樂部

廣島縣工藝協會主催第五回工藝展覽會 一日

於廣島縣產業獎勵館

神戶畫廊開設五週年記念十五大家特作洋畫展 一日——六日 於神戶同所

野口道方布摺版畫展 二日——三日

於成城自治會

鎌倉工藝品展 二日——五日

於橫濱野澤屋

茨木猪之吉山岳畫個展(洋畫) 三日——五日

於銀座八咫家

濱田庄司陶器展 四日——七日

於大阪三越

牧野虎雄洋畫個展 五日——九日

於大阪朝日會館

岩田同和會の主催で牧野虎雄の明治四十年頃の作品より今年度の近作に至る迄、百二十五點を時代順に並べた。次第に東洋的に變化して來た發展の經過は興味深く見られた。

海老原喜之助第三回油繪個展 五日——八日

於銀座日動畫廊

七弦會第五回展(日本畫) 六日——十二日

於日本橋三越

第六回七弦會は今春速水御舟を失つたま六人の會員に依つて開かれた。前田青邨の二點の外は各會員が力作一點を出品し、

現代美術

今秋數多く催された知名作家を集めた小展観の中で、最も日本畫愛好者を喜ばせたものの一つであつた。

鎗木清方は「初冬の花」と題して二曲半双に年増の美女を描いて出品。手慣れた題材で精緻な仕事振りを示し、布局亦妙を得て好評であつた。菊池契月の「太子孝養圖」はデッサンのある立派な線を示したが、未だ童形の太子とは云へ、偉大なる聖徳太子の性格描寫が少しも折り込まれてなく物足らぬ感を起させた。小林古徑の「猫」は玉蜀黍の下に宗達風の猫を描いたもの。今秋の院展の院體風の猫とは違つた美しさを持つては居たが、其と比べて深みに缺けて居た。土田麥僊の「歌妓圖」は在來作者が得意として來た形式美の歌妓圖に比べれば可なり自由な寫實風のものである。前田青邨の「秋深し」は得意の武者繪で手鏡に映る「秋深き」己が姿を眺めて物憶ふ一武人を描いたもの。彼の達者な技巧を理智的に驅使する點は賞識に値し、其の工藝的美は長所でもあるがそれが先に立ち易いのは弱點でもある。この作も工藝的美しさが先に立つて居る。此の事は好く整理された構圖の「鷺」に就ても云へる。安田靫彦は淡彩で「瘡蛙負けるな一茶此處にあり」の句を題材に、土の上に腰下ろして二匹の蛙を眺める「一茶」を俳味を交へて描いたが、其の俳味も十分でなく力作とは云ひ難い。

北海道工業試驗場試作陶器展覽會 六日——

十一日

於日本橋高島屋

現代諸大家新作展(日本畫)

六日——九日

里見勝藏洋畫並宇野三吾陶器展 六日——十日

於大阪船場ビル

漆藝會第十七回展 七日——十三日

於日本橋三越

能勢塾八人展 七日——九日

於銀座三味堂

福井謙三洋畫個展 七日——十六日

於新宿ノブア

野生會第二回展(洋畫) 七日——十一日

於銀座紀伊國屋

諸作家洋畫小品展 七日——十一日

於大阪美術新論社畫廊

川島理一郎第三回個展(洋畫) 八日——十二日

於銀座伊東屋

東京の風景を題材にした一聯の小品を中心にした個展である。騒然とした都會風景殊に夜の盛り場の雜沓を選んで小品に纏めて居た。筆技は巧であるが單なるスケッチに始終して居て、多くを求むべきものではない。

喜多村麥子個展(日本畫) 八日——十日

於名古屋丸善

長屋禎志油繪個展 八日——十日

於名古屋市公會堂

神都木彫會展 八日——十日

於山田市縣立商工獎勵館

三重縣繪畫同人會展 八日——十日

於山田市縣立商工獎勵館

土岡春郊個展(日本畫) 八日——十二日

於福井市會議事堂

兵庫縣美術協會第廿四回展 九日——十一日

於神戸三越

七洋會洋畫展 九日——十四日

於日本橋白木屋

符鐵年氏書畫及び錢瘦鐵氏の篆刻展 九日——十三日

於銀座鳩居堂

大塚巧藝社版書畫展(複製) 九日——十三日

於上野松坂屋

入江令一洋畫個展 九日——十五日

於大阪阪急百貨店

表具商松榮堂創業百卅年記念日本畫展 九日——十一日

於京都美術俱樂部

岡本貞四郎洋畫個展 九日——十一日

於銀座交詢社ビル

瀬戸陶藝綜合展 九日——十五日

於日本橋白木屋

第三回西日本美術展覽會(洋畫、工藝) 十日——十九日

於福岡日日新聞社

松田康一第二回風景油繪展 十日——十四日

於銀座日動畫廊

二科第十二回展 十一日——十八日

於大阪朝日會館

東京廣告美術家俱樂部第一回展 十一日——十七日

於銀座三共

大阪巧藝社第三回新作工藝品展 十二日——

十七日 於大阪松坂屋

矢崎千代ニバステル畫展 十二日——十七日

於大阪大丸

兵庫縣美術家聯盟第十回展 十二日——十四日

於神戸大丸

長瀧鵬繡草木染作品展 十二日——十四日

於神戸鯉川筋畫廊

構造社繪畫展 十三日——廿四日

於東京府美術館

白日莊主催東西大家新作畫展 十三日——十

七日 於日本橋三越

白日莊が主催して東京、京都の日本畫家四十五名の作品を並べた、餘り力作の見えぬ中に、奥村土牛は「鴛鴦」に、兒玉希望は「汀鷺」、「田鶴」の二幅對に中堅作家としての精進の意氣を示した。

日本現代版畫展 十三日——廿四日

於東京府美術館

日米兩國政府後援の下に國際文化振興會及び日本版畫協會の共同主催で昭和十一年一月ニューヨークを初め米國主要都市で開催される、日本現代版畫展覽會への出品作品を、日本版畫協會第四回展と一緒に展覧したものである。會場の都合により會員の作品は第四回出品の爲の新作のみを陳列して、米國開催の際は優秀なる舊作をも追加することである。

「本展覽會の出品内容は日本現代版畫家

の作品を殆ど全部網羅し又參考品として未

だ外國に於て公開される機會を得なかつた

十九世紀後半期の代表的過去作家の作品を

蒐めたものである。即ち過去の作品は北齋

廣重以後の版畫と現代版畫との連絡や關係

を明らかにする意味で選ばれたのであるが

尙ほ更に現代版畫と密接な關係に至れると

ころの、十九世紀前半期の或作品並に十八

世紀の或る系統の作品——主として風景版

畫——を多少加へる事に依つて、今日まで

忘れ勝ちにされて居た浮世繪版畫の或る一

面を展示し、日本近代版畫發展の經路をよ

り完全に示さんと試みたものであり、且つ

又地方的な特種な長崎繪版畫と横濱繪版畫

等の特に加へたのも、夫等が泰西文化と日

本文化交流の上から最も興味ある作品であ

ると考へたからである。」(同展目錄序文)と

云ふ。

現代作家の出品點數三三六

參考品點數三〇九

佐伯米子第一回洋畫個展 十三日——十七日

於銀座資生堂

河合卯之助作陶展 十三日——十七日

於大阪三越

島あふひ個展(洋畫) 十三日——十七日

於大阪美術新論社畫廊

米知會油繪展 十四日——十七日

於日本橋三越

現代大家洋畫展 十二日——二十廿

於大阪淀屋橋三角堂

國井應祥畫展 十四日——十七日

於大阪三越

方水社繪畫展 十五日——十七日

於山田市縣立商工獎勵館

藤岡昇作洋畫展 十五日——十九日

於銀座青樹社

東邦彫塑院展 十五日——二十九日

於東京府美術館

舊帝展に於て審査員たりし經歷ある長谷川榮作、國方林三等九名の作家達が中心となつて、新に組織した彫刻團體の第一回展である。此の團體は新帝展が彫刻を二種に分けて取扱ふことに反對してゐるが、其の他に特別な藝術的主張はなく、大體舊帝展に於ける各人の作風を其の儘存續させてゐる。

難無く一通りに出來上つて居ると云ふ意味で、光つて居るのは北村正信の「浴後」「腰かけた女」の二點、及び小品ではあるが、長谷川榮作の「玄峰老師」等である。赤堀信平の木彫「芭蕉」は小品乍ら俳聖芭蕉の人となりを寫し得て味深い作品であつた。木彫に印象派的な塑像の手法を加味して居るのが成功して居る。大須賀力の裸婦はしつかりした構成を以つて作家の彫刻的感覚の好さを示して居た。此の基本的なもののよりの一段の躍進が期待される。柴田正重のレリーフの肖像は弱いが個別的なもの

を把み出さうとして居る努力が見える。其の他の會員の作では、富岡芳堂の「顯現」、黒田嘉治の「髪」、中島東洋の「巖」等が目立つた。

受賞作品の首席、矩幸成の「春を包む」は優れた構圖であるが、小さな寫實に囚はれて全體の調子を損ねて居るのは惜しい。とは云へ寂しい日本の彫刻界の今年の喜ぶべき收穫の一である。

彫塑時代賞及N氏獎勵賞受賞者

首席 春を包む 矩 幸成

B 胸像 中村 七十

女立像 大嶽 茂樹

セーラーの少女 竹内 延吉

髪 榎山 三穀

女 八柳 恭治

炎 三木 貞雄

新興漆藝展 十五日——二十九日

於東京府美術館

漆工藝社の太齋春夫の發明せる漆膜による漆膜モザイク、漆繪膜、漆寫眞印刷の作品を展観した。漆膜とは各種の漆（生漆、黒漆、梨地漆、色彩漆、金銀色）の任意の厚さの紙狀の膜で、之を小片にしてモザイクを作つて居るが、色彩が豊富に得られ、仕事容易で而も耐久力が強いことは、壁面裝飾等に便利な材料であらう。又此の膜と膜の間に繪畫、模様を描き込んだものが「漆繪膜」で、蒔繪と違つて簡單に、普通

繪具の如く自由に描き得られると言ふ。繪畫其れ自身としては兎に角、建築、工藝に應用し得る可能性は大きい。

この外「聚成染」とて皮革の漆染色の作品も陳列された。

畫觀社日本畫作展 十五日——十七日

於上野松坂屋

ブルノー・タウト指導小工藝品展 十五日——十九日

於日本橋丸善

春陽會小品展 十五日——十九日

於名古屋丸善

川越美術協會第一回美術展覽會 十五日——十七日

於川越高女校

工藝試作品展 十五日——

於岐阜縣高山町西小學校

岐阜縣工藝協會高山町共同主催

第一回大分市工藝品展 十六日——十八日

於大分縣公會堂

猪熊弦一郎個展（洋畫） 十六日——二十日

於銀座日動畫廊

ハンガリー女流畫家展 十六日——二十二日

於銀座三越

藤井外喜雄洋畫展 十六日——二十二日

於大阪阪急百貨店

第一美術協會第六回小品展（洋畫） 十六日——二十一日

於日本橋白木屋

岡常次個展（洋畫） 十八日——二十一日

於銀座紀伊國屋

昭和十年商工省輸出工藝展覽會 十九日——

二十四日 於愛知縣商品陳列所

東京會秋期繪畫展（日本畫） 十九日——二十一日

一日 於東京美術俱樂部

油繪五人會展 十九日——二十二日

於銀座資生堂

信濃風景畫展覽會（洋畫） 十九日——二十二日

於日本橋高島屋

赤艸社第三回洋畫展 十九日——二十三日

於大阪美術新論社畫廊

京都表具業組合展 十九日——二十四日

於大阪大丸

高岡市新作工藝品展 十九日——二十一日

於大阪大丸

高岡市主催

伊藤廉洋畫個展 十九日——二十五日

於鹿兒島市山形屋

陣内松齡滿洲風景畫展 二十日——二十三日

於銀座伊東屋

山岸主計作第二回世界百景版畫展 二十日——二十二日

於名古屋丸善

栃木縣美術協會創立第一回展（洋畫） 二十日——二十四日

於宇都宮市教育會館

第二部會關西展 二十日——十二月一日

於京都岡崎美術館

支那緞通展 二十日——二十四日

於大阪高島屋

飯塚環玗齋花籠展 二十日——二十四日

於日本橋高島屋

「わが意のままに竹を使つて見たい」と

希つて居た此の作家が、年々に竹に親しみを増して行きますと、だん／＼竹の氣持がわかり、時には竹の云ふ事をきいて見たくなりしました。そしてさういふ一切の我を捨て、だんだん竹の命に従つて見たのが今回の作品」(目録序)であると云ふ。素材に従つて其れを生かすと云ふ事は、用途に合致する事と共に工藝の眞髓である。併し素材に使はれて了つてはならぬ。素材に従ひながら然も自己を生かさねばならぬ。竹の命に従つて見ながら、而も其れが「わが意のまゝに竹を使つて」みた事にならねばならぬ。名人飯塚鳳齋の子で幼時より竹に親んで來た琅玕齋の作品は殆ど此の理想に近いものがある。

現代名家新作展(日本畫) 二十日——二十四日

日 於日本橋高島屋

新帝院會員級の作家より十二ヶ月二組の出品を乞うて十五點の出品を見、其の他の作家より二十餘點の出品があつた。力作の無い代りにかなりの佳品が見られた。特筆すべきものは(五十音順)上村松園「春苑」、川端龍子「慶鶴(一月)」、川村曼舟「木曾の時雨(五月)」、木島櫻谷「暮秋(十一月)」、柳原柴峰「初雪」、島田墨仙「義皇上人」、竹内栖鳳「水風清(六月)」、長野草風「京の小徑」、廣島晃甫「秋汀」等である。殊に栖鳳の「水風清」は今年度好收穫の一である。

富本憲吉新作陶磁器展 二十日——二十七日

於上野松坂屋

染附の美しさを體得して而もその美を繪畫的にそして現代的に生かして居る。他の作家の染附は如何に優れて居ても彼の作品のやうな繪畫としての美をこれだけに持つて居ない。彼の染附は工藝的な美を有するばかりでなく、其の描く所は自然の美を深く突込んで把握して居る。

近時は金襴手及び白磁に精進して居るらしく、すつきりした近代的感觉を以てせる金襴手數點、及び磁器そのものゝ美と形態の美を追求せる白磁の壺數點が見られた。

静岡縣美術協會第一回展(綜合) 二十日——二十五日

於静岡市公會堂

新設計室内裝飾展 二十日——二十九日

於日本橋三越

大東會第一回展(日本畫、洋畫) 二十一日——二十九日

於東京府美術館

大東會主催、文部省後援

小、中學校の圖畫教育に携はる教員の畫技向上を計るを目的とする、大東會の主催に依る第一回展で、小、中學校の教員のみを出品者とする。

小、中學校の教員中には畫家として名を成して居る優れ作家も少くないが、さうした人々は餘り出品して居らず、又帝展に數回入選して居るやうな出品者にしても餘り

力を入れて描いて居らぬやうであつた。唯一人力を入れて描き、新しき試みを行つて失敗して居た人に石本秀雄(バレー・ボール)がある。白日下の激しい運動の印象をそのまゝに表はさうとして、強い色彩を交錯させ、眩しいやうな色彩効果をねらつて十分に成功せず、荒つぽいまとまりの無いものになつて了つて居た。

授賞 大東會賞 天井陸三(福井)

美術界賞 祇園降(岡山)、鈴木三

五郎(愛知)

新興美育賞 谷福太郎(大阪)、遠

藤徳一(東京)

K氏獎勵賞 岩下三四(東京)、二

町欽二郎(東京)、森田茂(東京)、

青野馬左奈(大阪)、桂龍雄(大

阪)、田代順七(熊本)

横井禮市洋畫個展 二十一日——二十五日

於銀座青樹社

第二回羊和會彫金展 二十一日——二十七日

於日本橋三越

バル創案圖案團第一回ポスター展 二十一日——二十五日

於銀座明治製菓

げてもの展 二十一日——二十七日

於大阪松坂屋

森野嘉光作陶展 二十一日——二十二日

於大阪有恆俱樂部

第二部會京都展 二十一日——十二月一日

於京都岡崎美術館

佐賀美術協會第十九回美術展(洋畫) 二十一日

日——二十四日

於佐賀市公會堂

東京錦好會展(染織) 二十一日——二十七日

於日本橋三越

白友會第一回展(洋畫) 二十一日——二十五日

於銀座美術工藝社

第一回基督教美術展 二十一日——三十日

於東京基督教青年會館

第四回讃岐工藝品展 二十一日——二十四日

於高松三越

高松工藝協會主催

春光會第二回洋畫展 二十一日——二十三日

於神戸鯉川筋畫廊

青松會第一回展(日本畫) 二十日——二十七日

於大阪松坂屋

金澤工匠會美術工藝品展 二十一日——二十四日

於京城三越

東西十五畫家第一回展(日本畫) 二十一日——二十七日

於大阪松坂屋

青果會第四回展(洋畫) 二十二日——二十六日

於銀座紀伊國屋

日本畫大家新作畫展 二十二日——二十四日

於神戸兵庫美術俱樂部

關西水彩畫展 二十二日——二十四日

於大阪心齋橋丹平ハウス

新美術家協會秋期展 二十三日——二十七日

於銀座三味堂

故塚田稔遺作展 二十三日——二十五日

於銀座三共

白日會小品展(日本畫) 二十三日——二十七日

日

於大阪十合

洋畫五玄會展 二十四日——二十七日

於銀座伊東屋

京都五條會作陶展 二十五日——三十日

於日本橋三越

京都在住、舊帝展系の中堅作家を集めた五條會の發表展で、帝展の無い今年に帝展出品の代りにする意気込みが期待されたが力作の無いのは寂しかった。變つて居たのは河合榮之助の蟬毛釉花瓶でその形はふくらみと鋭さを兼ね具へ、その表面は重厚ながらも牙えを見せた。清水正太郎の染付獅子壁面裝飾は力作ではあつたが難點あり、其れよりも「染付景實文飾皿」が力のこもつた味のある作品であつたが、今春の京都市美術展の出品作と殆ど同じで模様を少しく異にするのみであつた。模様は陶藝の一部を占むるのみに違ひないが物足り無く感ぜしめた。涌波蘇盛の置物「栗鼠」の如きは京都展に出品せしものと同一のもので、作品其のものは面白いが京都展後半年も経過して居る以上、同一作品を出品しないだけの勉強が望ましい。

異國趣味洋風畫展 二十五日——二十八日

於交詢社ビル慶應俱樂部

岩澤庸徳蕨繭染個展 二十六日——三十日

於銀座伊東屋

清水六兵衛個展 二十六日——二十九日

黑色洋畫展 二十七日——十二月一日

於銀座紀伊國屋

沼田一郎個展 二十七日——三十日

於銀座青樹社

栗原忠二洋畫個展 二十七日——二十九日

於大阪淀屋橋三角堂

小室翠雲新作展 二十七日——二十九日

於大阪高島屋

ロボツト洋畫展 二十七日——二十九日

於大阪朝日會館

常岡卯三郎畫展 二十八日——三十日

於大阪ビル

藤井達吉工藝個展 二十八日——三十日

於上野公園梅川

渡邊正一洋畫個展 二十八日——十二月二日

於福岡日日講堂

商業美術展 二十九日——十二月三日

於大阪府貿易館

村山槐多、關根正二遺作洋畫展 二十九日——十二月三日

於銀座三味堂

大阪美藝社繪更紗展 二十九日——十二月四日

於大阪三越

日佛畫堂主催佛蘭西繪畫展 二十九日——十二月五日

於大阪十合

關西畫壇大家日本畫新作展 三十日——十二月三日

於名古屋松坂屋

十二月

會宮一念洋畫個展 一日——三日

長坂春雄洋畫個展 一日——四日

東土會彫塑展 一日——四日

白朝會第二回油繪展 一日——五日

七彩會洋畫展 一日——五日

熊岡美彥洋畫個展 一日——五日

黑田孝子洋畫個展 一日——五日

メキシコ陶器展 一日——七日

三越日本畫展 一日——八日

帝展無き今秋の美術界の寂しさを窺つて八月に所謂帝院派反帝院派を通じての諸洋畫家の展覧を催した三越は、今度は更に大規模に、東西の優れた日本畫家百二十六人より各一點を蒐めて展覧會を催した。百貨店の展觀と見縊つてお座なりの作品を出した作家もあり、中には帝展の代りとは行かぬ迄も相當骨折つて居た作家もあつた。帝展とは違つて大作が無いだけに、價格の點に於ても世間に親しまれ易く、三分の二以上の賣約を見た。

伊東深水の「宵の雪」はその艷麗と達者なる寫實を以て一般の人氣を集めた。橋本關雪の「武陵春色」は輕い作品、西山翠嶂の「葉古詠」も力作とは云へぬが、さすが風格を示して居た。西村五雲の「冬光」は瀟灑にして筆技を賞すべきもの。富田溪仙の「枝垂梅」は若竹と枝垂梅を裝飾的に而も自然の美を鋭く擷んで描いて居た。小川芋錢の「郡峯趨朝」は形こそ小さいが構想の雄大さに於て、又其の味ひの深い運筆に於て此の展覧會での大作に數ふべきものであつた。鍋木清方の「淡雪」は雪中を駕籠で行く美人を描いて面白い構圖を示したが、描寫に何か物足りぬ所があつた。横山大觀の「月照」は月明りの空と松の美は出て居たが海邊の美が忘れられて居た。竹内栖鳳の「落葉」は技巧の達者を見せるのみで極く輕い小品に過ぎなかつた。上村松園の「鴛鴦」は浮世繪の小さな美を超えて古典的な大きな美を有し、山口蓬春の「鶴」は光琳の鶴に想を得たかと思はれるが好くその近代化に成功して居た。松岡映丘の「初瀬」は大和繪の特性を現代の寫實の技法を以つて大きく生かした佳品である。松林桂月の「鳩」は鳩を中心に其の止る柘榴の枝を心ゆく迄にのび／＼と畫面を横ぎらせ、熟した柘榴の實を一つ添えて、うら／＼かな秋の日の自然の美を享樂せしめ、好評であつた。福田平八郎の「雪庭」は作者近年の

傾向である裝飾的作品であるが、其の構想の巧みと艷美さに於て近年の帝展出品に優るとも劣らぬ佳品である。珍らしいのは菅椋彦の出品で「集會亂聲」に老境の洒脫と達者な描き振りを見せた。

其の他特筆すべき作品は左の如くである。池上秀畝「雪後」、川合玉堂「高原の秋」、川端龍子「香山圖」、勝田哲「菊の露」、吉村忠夫「光る御堂」、中村岳陵「渚紋」、矢野橋村「白鶴映雪」、小杉放庵「松下一閑人」、荒木十畝「巢立ち」、廣島晃甫「河霧」、飛田周山「松林曉色圖」等。

諸作家洋畫即賣展 一日——十六日

草芽會第三回工藝展 二日——六日

JAN第三回洋畫展 二日——六日

東京工藝品展 二日——十一日

東陶會第十回記念展 三日——十五日

會場を壓して見えたのはやはり顧問板谷波山の諸作である。「窯變天目茶盃」、「紅磁角番爐」、「彩磁仙桃花瓶」等何れも優れて居た。住時の名作に形を取つた顧問宮川香山の作品は其の種々なる技巧の驅使を賞すべきものである。

各會員何れも各々の個性を發揮して、味

ふべき作品の多い中に、特に異色ある作品を發表したのは小川雄平である。彼は焼物では動物を題材とする置物、就中豹の置物に彫刻家としての天分と焼物の特殊の美の理解を示し、別にラリツク風の鑄型硝子の仕事では「天使魚文彫刻花瓶」の如き面白い作品を示した。後者の仕事に於ては未だ完成の域に遠いが、日本に於て初めて斯うした方面の開拓に志した努力は賞すべきである。

濱田庄司新作陶器展 三日——七日

於銀座鳩居堂

獨立美術第五回秋期展 四日——六日

於京都朝日會館

宮下秀石水彩展 五日——七日

於昭和經濟俱樂部

伊太利マール彫刻展 五日——七日

於大阪松坂屋

綜合美術小品展 五日——七日

於大阪野村ビル有恆俱樂部

工藝家、洋畫家の小品二百點展觀

大島龍雄洋畫個展 五日——十日

於東中野筑紫書房

和光會第二回展(工藝) 五日——十五日

於服部時計店

山下繁雄洋畫個展 六日——八日

於奈良會館

榊原武橋南畫展 六日——八日

於福岡日日新聞社

OBD洋畫展 六日——八日

於大阪丹平ハウス

青山義雄洋畫個展 六日——十日

於京都商工會議所

塊人社大阪第一回展(彫塑) 六日——十一日

於大阪淀屋橋三角堂

蘭交會表裝展 六日——十三日

於日本橋白木屋

朝見香城新作展(日本畫) 七日——八日

於名古屋美術俱樂部

朱葉會小品展(洋畫) 七日——九日

於銀座紀伊國屋

高須點然「三伯」陶器展 七日——九日

於倉吉町有親館

赤松雲嶺個展(日本畫) 八日——十日

於大阪高島屋

木村宗春、泰之漆藝展 八日——十日

於鳥取縣商工獎勵館

內田巖洋畫個展 八日——十二日

於銀座青樹社

歐洲大戰當時ポスター展 八日——十七日

於有樂町電氣獎勵館

旺玄社小品展 九日——十日

於銀座三味堂

東西名家繪畫展(日本畫) 九日——十一日

於日本橋東美俱樂部

田中繁吉洋畫個展 九日——十一日

於若松市三内町濱作

女流四人洋畫展 九日——十二日

出品者 長谷川春子、遠山陽子、佐伯米子、三岸節子

第二回各地手織手染綜合展 九日——十二日

於銀座資生堂

小出卓二小品展(洋畫) 十日——十一日

於大阪野村ビル有恆俱樂部

石川縣特選工藝展 十日——十二日

於金澤市宮市大丸

笹鹿彪洋畫個展 十日——十二日

於大阪堂ビル清交社

留加會第五回洋畫展 十日——十四日

於神田東京堂

林重義近作洋畫展 十一日——十四日

於神戸鯉川筋畫廊

二科入選者展 十一日——十五日

於名古屋丸善

木下五郎洋畫個展 十二日——十四日

於銀座昭和經濟俱樂部

橋本關雪詩書畫の會 十二日——十五日

於大阪大丸

藤島武二、安井曾太郎、梅原龍三郎新作展 十二日——十六日

於大阪十合

野口道方布摺版畫及蠟燭作品展 十二日——十六日

於日本橋白木屋

河村喜太郎個展(陶器) 十三日——十四日

於茅場町清水ビル

中堅作家洋畫展 十三日——十五日

於大阪心齋橋大阪畫廊

出品者 伊藤慶之助、藤堂李三郎、田村孝之介、辻愛造、古家新、齋藤清二郎、清水茂郎

山口縣工業試驗場創立十六周年記念工藝試作品展 十三日—十五日 山口縣工業試驗場
寺内萬治郎洋畫個展 十三日—十七日

近藤浩一路新作展(日本畫) 十三日—十八日 於大阪美術新論社畫廊

大森光彦作陶展 十四日—十五日 於日本橋高島屋

顏行會洋畫小品展 十四日—十六日 於臺灣臺日樓上

川崎元洋畫個展 十四日—十六日 於銀座紀伊國屋

つぼみ會革工藝展 十四日—十八日 於銀座交詢社ビル慶應俱樂部

庫田銳第一回作品發表展 十四日—十八日 於銀座資生堂

向井潤吉豆繪展 十五日—十九日 於銀座青樹社

大八會作品展(洋畫) 十七日—十九日 於銀座三味堂

中山巍、里見勝藏、神谷萬吉等出品 於銀座紀伊國屋

中澤弘光洋畫個展 十七日—二十一日 於數寄屋橋日動畫廊

日本バステル畫會展 十七日—二十二日 於神田東京堂

神津港人洋畫個展 十七日—二十四日

日本壁畫家協會展 十八日—二十三日 於大阪阪急百貨店

於日本橋白木屋

藤田嗣治、寺崎武男を顧問として、新日本壁畫藝術を研究確立せんとする若き畫家の集りの「試作展」と云ふが、試作展とは云へ甚だ情無い首途であつた。之から研究するのではあらうが、會員の作品を見ると壁畫の何たるかがはつきり分つて居ないらしい。壁畫とはモンタージュ風のものや模様化したものと飛んでも無い考へ違ひをしたり、タブローを擴大すれば壁畫になると簡單に考へて居る人が多い。

顧問の藤田嗣治は聖書館の壁畫の寫眞の外何も出して居らず、寺崎武男は聯作釋尊傳外數點を出して居た。

黒田重太郎洋畫個展 十九日—二十一日 於大阪野村ビル有恆俱樂部

アニメ第四回洋畫展 二十日—二十一日 於銀座紀伊國屋

狂樂樹日本畫展 二十日—二十二日 於大阪心齋橋大阪畫廊

趣味の花器百種展覽會 二十日—二十四日 於日本橋高島屋

長谷川春子自作自畫陶器展觀 二十日—二十四日 於西銀座たくみ工藝店

藤島、梅原、安井三氏新作洋畫展 二十日—二十四日 於銀座資生堂

求龍堂主催 於銀座資生堂

毎年一回、向ふ三年開催する此等三人の合同作品展の第一回展であると云ふ。梅原安井の二作家が各一點二十號位の作品を出して居る外、皆六號、八號位の小品であるが、さすがに現洋畫壇最高の地位に立つ人々の作品とて、何れも見應へのあるものばかりであつた。

藤島武二の海景數點と田園風景一點は何時もの大まかな調子で自然の美を描き出して居た。梅原龍三郎の作品では「熱海」が好い出来であつたが、最も注目すべきものは此の作家として新しい題材である建築物を描く「槽」である。彼にとつては建築物も亦空間的構成ではなくて裸體と同じく量である。建築物の持つ量の美を表して遺憾が無い。安井曾太郎は「果物」に於て最も成功して居た。其れはセザンヌの東洋化(此の語の中に平面化と云ふ事も含めて)とも云ふべきもの。風景畫では「紅葉する黃蘗」も好かつたが、其よりも彼の手腕をうかがはせるものは小品「松と睡蓮」である。若き頃の寫實的な「孔雀と女」に既に古典的形式美を表はした此の作家の當然落着く所が此のブラツクに似た(便宜上の形容)風景畫に示されて居る。小品ではあるが今年度の傑作の一に數ふべきであらう。

歲末洋畫即賣展 二十日—三十一日

於銀座青樹社

高木青水小品展(洋畫) 二十一日——二十三日

日 於日本橋日本商工俱樂部

黒田辰秋個展 二十一日——二十五日

於大阪周防町中村屋

豊藤勇洋畫展 二十二日——二十五日

於大阪野村ビル有恆俱樂部

黒色第九回洋畫展 二十二日——二十六日

於銀座紀伊國屋

菊池精二洋畫個展 二十三日——二十五日

於大阪大川町タケオカ

日本民藝品展覽會 二十五日——三十日

於日本橋高島屋

岡田龍雄「街の風景展」 二十五日——三十一日

於日本橋地下鐵ストア

セクシヨンドール洋畫展 二十五日——三十一日

於大阪阪急百貨店

出品者、大阪中之島洋畫研究所出身の二科、獨立、二部展の青年畫家十七名

銀濤社第三回展 二十六日——三十日

於銀座資生堂

展覽會以外の作品

日本畫

横山大觀筆大楠公畫像 今年の楠木正成

公六百年祭の爲、神戸湊川神社奉贊會では横山大觀に大楠公畫像の揮毫を依頼、大觀は昨

夏以來其の經營に精進し、本年一月完成を見た。紙本極彩色、縦六尺五寸横三尺三寸の大幅で鏝下直垂姿で松樹下に寛く正成公を描いたものである。

堂本印象筆信貴山成福院襖繪 堂本印象

は信貴山成福院の貴賓殿寶雲閣襖繪三十餘枚の揮毫を依頼されたが、中二十八枚は三月完成を見、新住職の傳統式の行はれる三月十七日、大阪の篤信者に依つて獻納された。水墨の松、水墨、彩色兩様の花鳥圖で、後世に誇るべき力作である。

島田墨仙筆逍遙博士肖像 島田墨仙は豫

て坪内逍遙博士の肖像を依頼され、博士を生前熱海に訪ひ、製作に専念して居たが、博士の歿後四月中旬完成、早稲田演劇博物館に藏された。圖は双柿舍庭前の梅を背景に庭石に腰掛ける博士の姿を描いたもので、博士夫人の像と二幅對をなすものである。

前田青邨筆「獅子」 御大典記念として

岩崎家より獻上する大屏風五雙の中一雙は前田青邨に依頼されたが、青邨は獅子を畫題と定めて本年正月以來製作に精進し、六月初旬完成、獻上された。縦七尺五寸、横三十尺紙本六曲一雙の大作で、作者自身撒いたと云ふ白金砂子の地に、右半双には雌獅子一頭に子獅子二頭を左半双には雄獅子一頭に子獅子一頭を配したもの。漢及六朝風を骨子とした威容を劃する太い線にはため書きを用ひ、金色の雄獅子には緑の鬘を、白金色の雌獅子には

群青の鬘を配して居る。又金、白金に分けられた子獅子の鬘は赤である。子獅子と戯れる親獅子を描いていさゝかも輕佻に陥らず、雄大なる構想と其れを生かす技巧の冴え、理智的に整理せられた豪華なる色彩効果等は、宮殿を飾る屏風として寔に相應しい傑作であつた。

小村大雲筆「京濱鐵道開通式行幸」 鐵道

省より聖德記念繪畫館に奉納の「京濱鐵道開通式行幸」圖は小村大雲に依つて五月末完成、六月初旬奉納された。圖は明治天皇の車駕の新橋鐵道館に着御の光景を謹寫したものである。

村田丹陵筆「大政奉還」 聖德記念繪畫館

に奉納の「大政奉還」圖は奉納者徳川慶光公の依頼で村田丹陵が揮毫、十月十九日完成した。慶喜公が慶應三年十二月十二日二條城に於て幕府の諸役人を前に大政奉還の意を告げる光景を描いたものである。

堂本印象筆「松鶴佳色」 御大典奉祝の爲

に岩崎家より獻上の屏風五雙の中、最後の一雙は堂本印象に依つて十月初旬完成された。縦七尺五寸、横三十尺絹本六曲一雙の大作で「松鶴佳色」と題し、水墨畫であるが、僅に鶴の丹頂に朱を、松の一部に少しく金泥青泥を用ひて居る。右半双には深山の松竹を左半双には其の松の傍の流に羽を擴げた鶴二羽を大きく描いて、苔蒸した岩石を配して居る。其の雄渾壯麗なる畫趣は後世に誇るべき名作

である。

菅橋彦筆「皇后冊立」 聖徳記念繪畫館へ大阪市より奉納される菅橋彦筆の「皇后冊立」は十二月初旬完成を見た。明治元年十二月二十八日、皇后の御車が京都御所の朔平門を過ぎ、玄暉門を入らせられんとする光景を謹寫した圖である。

堂本印象筆「翺翔開雲」 皇太子殿下御降誕を奉祝する爲、衆議院議員一同より長き邊りへ献上する六曲一雙の大屏風は豫て堂本印象が謹作中であつたが十二月中旬完成、帝國議會開院式當日献上された。極彩色の壯麗なる作品で左半雙に瑞雲たな引く天空を飛翔する二羽の鶴を描き、右半雙には翠に繁る小山を描いて其の背後に清く聳える群青の富士を見せたものである。

洋 畫

藤田嗣治筆「ブラジル珈琲陳列所壁畫」 藤

田嗣治が九年十月完成した銀座聖書館内ブラジル珈琲陳列所の大壁畫は本年初頭公開された。カンバスに油繪具でブラジルの首都リオデジヤネイロの郊外を描いたもので、畫中事中的建築、彫刻、畫家、ギター弾きを描いて、繪畫、彫刻、建築、音樂の諸藝術を象徵して居る。

辻永筆風景畫 東京市借地借家調停委員

現代美術

野々山幸吉氏は交付された委員手當に若干を加へ五百圓を東京地方裁判所に寄附、三宅所長は其によつて繪畫を購入し、民事裁判所内に掲げて野々山氏の篤志を永く傳へやうと、執筆を辻永に依頼したが、本年二月、三尺に六尺の山羊の遊ぶ平和な風景畫が完成し同所調停室に掲げられた。(報知二、四に據る)

京都朝日會館壁畫 本年四月完成した京都朝日會館二階ホールは伊藤藤、川口軌外、林重義の三畫家の壁畫を以て飾られたが、更に同會館の河原町通りに面した三、四、五階を貫く大外壁面にも亦前記三名の作家によつてモンタージュ風に壁畫が描れ、世人の注目を牽いた。

歴代外相の肖像畫 外務省では歴代外務大臣二十三名の肖像額を作製して後世に傳ふる事になり、畫家を銓衡して夫々依頼中であつたが、本年中には左の通り七點の油繪肖像畫が完成した。故井上馨侯(上野精一)、故榎本武揚子(荒井陸男)、石井菊次郎子(中澤弘光)、内田康哉伯(南薫造)、松井慶四郎男(鹿子木孟郎)、幣原喜重郎男(高村眞夫)、芳澤謙吉氏(白瀧幾之助)。

藤田嗣治筆「十合壁畫」 藤田嗣治は大阪に新築された百貨店十合の依頼により十月其の特別食堂にロココ風の構想の、緑の野に遊ぶ婦女子と空を馳る天使を表はした壁畫を描いた。大作ではあるが彼としては極く軽い作品である。

藤田嗣治筆「コロンバン天井畫」 藤田嗣治

は十一月改築された銀座の喫茶店コロンバンのルイ十五世後期風に裝飾された天井に嵌め込む六枚の天井畫を完成した。何れもロココ風な構想を有つたものであるが、彼の線の勝つた畫風は其の構想及び周圍の裝飾から云つて幾分不調和であるが、其の達者な描き振りと本格的な油彩の使用はやはり彼の名に背かぬだけの出来である。

憲政功勞者の肖像畫 第六十七議會に於て可決された尾崎行雄氏以下六名の憲政功勞者表彰の爲、その肖像畫が議院に掲げられる事となつたが、各一對の肖像が十二月初旬完成一枚は各本人に一枚は議院に掲げられる事となつた。揮毫者は次の如くである。尾崎行雄氏(權藤種男)、菅原傳氏(梶原貫五)、大竹貫一氏(安田實)、安達謙藏氏(永地秀太)、望月圭介氏(上野廣一)、濱田國松氏(長尾喜多留、熊岡美彦)。

彫 刻

本山白雲作伊藤公銅像 本山白雲は故伊

藤博文公の高さ十八尺の銅像原型を製作中であつたが二月中旬完成、ブロンズの本像に取掛かる事になつたが、完成後は新議事堂前廣場に建立される豫定である。

故藤川勇造作若槻男銅像 故藤川勇造

作若槻禮次郎男銅像は三月完成、高松市郊外床几山上に建立され、四月三日除幕式が挙げられた。像のみの高さ十七尺、モーニング姿の立像である。

朝倉文夫作故武藤山治銅像

朝倉文夫は

鐘紡の委嘱により故武藤山治の椅子に腰掛けた姿を表はした高さ七尺の銅像を製作、二月完成、武藤記念館に建立された。(八五頁参照)

小室達作伊達政宗銅像

宮城縣聯合青年

團では、今年五月の伊達正宗三百年祭に際して青葉城跡に建立すべく、同縣出身の小室達に政宗の銅像の製作を依頼したが、二月高さ一丈三尺八寸の乗馬姿の原型が完成、ブロンズの仕上げも五月初旬完成して、二十三日盛大な除幕式が舉行された。一丈六尺の臺石には政宗の元服時代、朝鮮征服、支倉六右衛門のローマへの出發、及び政宗の權中納言時代を表はした四枚の浮彫がはめ込まれた。(七頁参照)

齋藤素巖作大楠公銅像

齋藤素巖作大楠

公銅像は一月原型を完成、ブロンズに仕上げ、神戸湊川公園に建立され、五月二十三日六百年祭を機に除幕式が舉行された。像の高さ一丈三尺、砂煙りを立て、勇躍する馬上の勇姿を表はしたものである。(八四頁参照)

小倉右一郎作小泉八雲記念碑

土井晩翠

氏は小泉八雲を愛せる逝ける愛兒の記念として、小倉右一郎に小泉八雲記念像の製作を依

頼、六月末完成して上野帝國圖書館前に建立された。記念碑は臺石に八雲の胸像を表はしたブロンズの浮彫を嵌め込み、その上に裝飾として、大正十五年帝展出品の「蜜」を載せたものである。

朝倉文夫作寺内元帥像

朝鮮總督府施政

二十五周年を記念して總督府内に建立する事となつた寺内初代總督の銅像は、九月朝倉文夫の手で完成、同月末除幕式が舉行された。(八五頁参照)

内藤伸作故岸清一博士銅像

内藤伸作故

岸清一博士の銅像は十月完成松江市に建立された。

長谷川榮作故坪内逍遙博士銅像

長谷

川榮作は松竹と同社幹部俳優の依頼に依り故逍遙博士の半身像を製作、八月原型を完成十月二十八日歌舞伎座中庭で盛大な除幕式が舉行された。

高村光太郎作故高村光雲像

門下生及び

美術界有志によつて計畫せられた故高村光雲の胸像は高村光太郎によつて製作せられ、東京美術學校校庭に建立、十一月十日除幕式が舉行せられた。

靖國神社大燈籠の浮彫

富國徴兵保險會

社より靖國神社へ奉納の高さ四十二尺の大石燈籠一對の八角形の臺石には、十四面の高さ三尺二寸、幅四尺五寸の陸海軍の功績を表徴するブロンズの浮彫を嵌め込む事になり、中三枚を擔當した齋藤素巖の奉天入城、シベリ

ヤ出兵、及び爆彈三勇士は五月初旬完成した。その後畑正吉の天津入城、廣島大本營、理蕃及び、熱河占領の四枚、吉田久繼の黃海海戰、地中海に於ける皇軍の敵兵救助、及び上海市街戰の三枚、小倉右一郎の看護婦班の活動、上海事件の海軍機活動、旅順閉塞、及び三笠艦上の東郷大將の四點も順次に完成して十二月には全部の嵌め込みが終り、十二月二十七日除幕式が舉行された。

建築界概観

近年の日本建築界に於ける最も著しい現象は所謂國際建築型の隆盛である。此處に國際建築型なる語を用ひたが、それは此の語が一般に用ひられて通りが好いからで、此の語は鐵筋或は鐵骨鐵筋コンクリート及び其の他の新時代の構造法を用ふるに當つて、材料、構造に忠實なるを旨とする、虚飾を去つた、合理主義的建築を意味するに過ぎず、各國の氣候風土、風俗習慣を充分考慮に入れるものである事は云ふ迄もない。さう云ふ意味での國際建築型とも云ふべき建築は今年益々盛になつた。

其等に於ては、日本の特殊なる氣候風土に對する工夫が種々講じられて居るが、尙研究を要する状態である。堀口捨己が水戸測候所に於て鐵筋コンクリートの壁體をハインチ迄も薄くし、庇を突出し、床下天井間の通氣穴を作つた事、レイモンドがブラウン氏の住宅に近頃流行のモルタル塗木骨造を用ひず、軸部の乾き易い木造板張大壁造りにして、中空壁の間にアルミニウム箔を挿入した事などは後者は歐米に先例はあるが、今年試みられた日本の特殊な氣候風土への對策の例である。プラン及意匠に於ては、日本の感覺を以て新しき創造をなすに至らずして、歐米の先例を單に日本的にもじつて居るに過ぎないものが残念ながら相當多い。一例を挙げれば、横

濱寶塚劇場の内部の如きは天井の照明にメンデルゾーン作伯林ユニベルズムの其を明に模倣して居るのみならず、舞臺に近い一階の壁面も、後者のパイプオルガンの隠し方に好く似て居る。又他方に於ては新しき合理主義に従ひながら、然も往時の日本の意匠を復活して日本的な新建築を作らうとしたものも多い。其の大きく、顯著な例はなまこ壁を用ひた有樂座である。之に對して舊來の日本の意匠は少しも省みず、新しき材料の驅使と合理性の強調に依つて新時代の日本人の感覺と精神を表現すべく新しき創造を試みた人もある。可否は別として、最も派手に其を試みたものは石川純一郎の新興日本様式と銘打つた京都朝日會館及名古屋の朝日新聞支局である。前者は三、四、五階の大通に面した壁面の殆ど全部に、一つの窓もつけず、其の大外壁面をモントージュ風の壁畫を以て裝飾した。演藝場の一壁をなす其の大壁面に窓をつけぬのは諒解されるが、其を建築的に處理せず繪畫に委せたのは問題とならう。其處に描かれた派手な繪畫は周圍と調和せず多くの人の覺悟する所となつたが、人目を牽いただけに新聞社の廣告を目的としたものとするれば成功と云はねばなるまい。

國際建築型でない新建築の中では垂直線を強調した大阪百貨店十合が目立つた。是等新建築の外には、正金神戸支店、三井銀行名古屋支店等ルネサンス風の莊重なる建物が相當

建てられた。鐵筋コンクリートを用ひながら構造には無關係に、日本建築の様式に従つて瓦葺きの勾配屋根を用ひた建築も例年の如く行はれた。是等は正木記念館、徳川美術館の如く、特別な用途から餘儀無くされたものが多いやうである。此の徳川美術館は、美術館向の採光に不利な日本式瓦葺屋根を用ひながら採光に相當成功して居るのみならず、ペラヘがハーグ博物館に用ひた上部から採光したニッシン様の陳列箱をも巧みに應用してあつて、美術館として成功したものと云へやう。

日本建築のみではない。純正なものではないが古代印度風の大建築鐵筋コンクリートを用ひて建造された。其は四月完成した伊東忠太設計の東京築地本願寺である。日本の佛寺建築は支那傳來の其を日本化したもの故、もう一代遡つて印度様式を採るも可として、(伊東忠太「日本の社寺建築」一六一九)かゝる様式を用ひたものらしい。但し本堂内部は日本の佛寺建築の様式に従ひ、極彩色の華麗な裝飾が施してある。住宅建築にあつては日本建築が勿論最も盛であるが、小部分の改良の外、日本建築に新機軸を出した作品は案外少い。日本風の住宅で、際立つて精練された仕事振りを示した人は吉田五十八である。彼は又吉屋信子邸に於て、日本建築を以て、立禮の洋室を非常に巧みに構成した。其は洋室であり乍ら、日本建築の素材の美、構成の美を遺憾無く表はしたものである。

洋風の住宅建築にあつても、國際建築型の流行が目立つ。元來日本建築が歐米の新建築殊に國際建築型の住宅建築へ影響した所は頗る大きい、その影響下に成立した新建築が日本に逆輸入されるのみで、日本建築の特性美點を生かして新しい生活様式に適合した、日本獨特の新建築を創造した人は多くない。今年に於ける數例を舉ぐれば山口蚊象は北鎌倉某邸に於て、鳥の子張りで漆縁の襖様のドーアを使用し、又、L形に配置された三室を一間半の襖様の吊り込み戸と三尺の開き戸と

を以て仕切り、必要の際其を全部開放するとL型の大廣間となるやうに試みた。障子を開放すれば連續して使用出来る有機的な日本建築のイデーは、既に歐米及日本の新建築に採用されて、その爲に折疊戸或は一間位の引き戸が度々用ひられたが、斯く迄に巧妙にそして徹底して洋風建築に應用された事は初めてであらう。同じ日本建築の有機的で開放的なプランは外人のレイモンドによつて赤星邸に新しい形で展開された。此處では間仕切りは布張りの折疊戸が用ひられた。又日本風の中

庭が、通風を許すが外部からの目を避ける塀に圍まれて巧みに應用された。日本的ではないが、國際建築型の住宅で此の外特記すべきものに土浦龜城の自宅がある。其は諸種の室を平面的にのみならず、立體的にも連續させて、一つの大きな空間にまとめ上げたもので、何れの室にあつても、其の巧みに構成された空間全體を享受する事が出来る。此の建築は乾式構造であるが、乾式構造の流行し初めた事も今年の特筆すべき現象である。

昭和十年度に竣功せる主なる建築物

小建築物と雖も注目すべきものは採録した。住宅は省略した。

建築物名	所在地	設計者	施工者	構造	備考
三井銀行名古屋支店	名古屋市中區新柳町六丁目	會禰中條事務所	竹中工務店	鐵骨鐵筋コンクリート	
新大阪ホテル	大阪市北區中之島三丁目五	大阪土木部建築課	基礎大林組 主體清水組	鐵骨鐵筋コンクリート	地下二階地上八階、延面積二一、五〇一・五平方米
白鳳城	三重縣上野町	渡邊虎一	工事監督 田中兼太郎	基礎鐵筋コンクリート 木骨造	三階、延坪一四二・五坪
京都醍醐寶聚院	京都醍醐寺	大江新太郎 森口三郎 澤篤美	清水組	鐵骨コンクリート	純日本様式 總延坪四二四・五坪
東京地方專賣局廳舎及 本所分工場	東京市本所區業平町				

ライオン齒磨隅田川新工場

東京市本所區厩橋

高輪小學校

東京市芝區二本榎町一丁目

丸ノ内消防署

東京市麴町區大手町

三月

寶塚大劇場複舊工事

兵庫縣寶塚

府中刑務所

東京府北多摩郡府中町

會計檢査院

東京市麴町區三年町

横濱寶塚劇場

横濱市中區住吉町

武藤山治氏記念館

神戸市

九州帝大附屬病院看護婦宿舍

福岡市

四月

湯島聖堂

東京市本郷區湯島

陸軍士官學校生徒舎

京都市中京區河原町

大阪朝日新聞京都支局

京都市中京區河原町

大阪株式取引所

大阪市東區北濱二丁目

水交社

東京市芝區榮町一三

築地本願寺

東京市京橋區築地

六月

有樂座

東京市麴町區有樂町一丁目

東京市建築課

警視廳營繕課

鐵筋コンクリート

竹中工務店

竹中工務店

鐵筋コンクリート

司法省會計課營繕掛

竹中工務店

鐵筋コンクリート

大藏營繕管財局

竹中工務店

鐵筋コンクリート

清水組

清水組

鐵骨鐵筋コンクリート

竹中工務店

竹中工務店

鐵筋コンクリート

九州帝大建築部

竹中工務店

鐵筋コンクリート

文部省建築課

鐵骨鐵筋コンクリート

第一師團經理部

鴻池組

竹中工務店

竹中工務店

鐵骨鐵筋コンクリート

長谷部竹腰設計事務所

大林組

鐵骨鐵筋コンクリート

池田忠治

旗手組

鐵骨鐵筋コンクリート

伊東忠太

旗手組

鐵骨鐵筋コンクリート

阿部美樹志事務所

竹中工務店

鐵骨鐵筋コンクリート

工期三ヶ月

延面積一六、三七〇坪

延面積一三、六四四・二四九平方米

建築面積一、三五四・六八平方米、觀客定員一、四四〇人

地上六階地下一階、一階面積一七八・九四五坪

建坪一、〇二二・六一坪

延坪三、九二四・一七八坪

市場六九一・八坪

延面積一、四〇二・二九坪

延面積一、九六一坪

地下二階地上六階、一階面積一、七二〇平方米、觀客定員一、六二〇人、舞臺幅一六米、長三二米

七月

日本銀行新館

東京市日本橋區本石町

清水組

鐵骨鐵筋コンクリート

建坪五三〇坪、延坪四、六〇八坪、地上六階、地下四階

八月

富山縣廳舍

富山市總曲輪

戸田組

鐵筋コンクリート
一部鐵骨使用延面積一三、四八九・七三四
平方米

輕井澤カソリック教會

長野縣輕井澤

レイモンド

清水組

鐵筋コンクリート

木造

水戸測候所

水戸市鐵砲町

堀口捨己

清水組

鐵筋コンクリート

一部鐵骨使用

九州帝大醫學部法醫學
衛生學、細菌學教室

福岡市九州帝大構内

九州帝大建築課

金子組

鐵筋コンクリート
一部鐵骨使用

九月

大阪齒科醫學專門學校
附屬病院

大阪市東區京橋一丁目

木子七郎建築事
務所

安藤組

鐵筋コンクリート

京都府立第一高女校舎

京都市上京區寺町通り

京都府土木部營
繕課

戸田組

鐵筋コンクリート、一
部鐵骨使用

東京三越新館

東京市日本橋區室町

横河工務所

同上

鐵骨鐵筋コンクリート

總延坪六、五四四坪

十月

京都寶塚劇場

京都市河原町

竹中工務店

同上

鐵骨鐵筋コンクリート

總延坪一、四〇〇坪、觀客
定員一、五二〇名

正木記念館

東京市下谷區上野公園

金澤肅治

小林組

鐵筋コンクリート

日本風瓦葺

百貨店十合

大阪市南區心齋橋筋一丁目

村野藤吾

鐵骨鐵筋コンクリート

鐵骨鐵筋コンクリート

地上八階地下三階、建築延
面積三四、五〇九・三平方米

大東京

東京市四谷區新宿三丁目

櫻石政太郎、山
本富一郎

安室工務店

鐵骨鐵筋コンクリート

觀客定員一、〇六三人

横濱正金銀行神戸支店

神戸市神戸區京町通

櫻井小太郎建築
事務所

竹中工務店

鐵筋コンクリート
一部鐵骨使用延面積二、三三五・七五二坪
地階共三階

十一月

山脇高等女學校

東京市赤坂區丹後町

戸田組

同上

名古屋寶塚劇場

名古屋市中區新柳町

竹中工務店

竹中工務店

鐵筋コンクリート

地階共五階、延面積二、三一九・二三坪

名古屋朝日支局

名古屋市納屋橋々畔

石川純一郎

竹中工務店

鐵骨鐵筋コンクリート

總面積一、四七九・九七坪、地下一階、地上六階、公演場定員一、三〇〇人

京都大丸新館

京都市中京區四條高倉

清水組

同上

鐵筋コンクリート

延坪約二千坪

高野山根本大塔

和歌山縣高野山

武田五一

十二月

鐘紡東京サービス・ステーション

東京市京橋區銀座三丁目

松田軍平

清水組

鐵骨鐵筋コンクリート

森永銀座賣店

東京市京橋區銀座

前川國雄

京城市府民館

京城市府民館

京城市府民館

鐵筋コンクリート一部鐵骨使用

煉瓦建造
建坪五八四坪、延坪一、七〇〇坪、大講堂定員一、八〇〇人

現代美術關係彙報

二月

大口喜六氏の質問

二月八日衆議院豫算委員第二分科會に於て、委員大口喜六氏は帝展改革に關する意見を述べて松田文相の見解に對する質問をなし、文相亦帝展のことに就ては考へてゐるとの答辯をして美術界の注意を牽いた。

三月

日本の茶室を瑞典に寄贈

日瑞協會會長藤原銀次郎氏とスエーデンの實業家ランドグレン氏から、ストックホルムの王立人類學博物館に日本の茶室一棟を寄贈することとなり、植植曹谿氏指導の下に新築中であつたが、完成したので、三月二十日日瑞協會總裁秩父宮殿下並に同妃殿下の台覽を仰いだ上、四月瑞典に送られた。

要塞法牴觸の疑から出品撤回

獨立美術展覽會では、閉會間近になつて吉田宗一氏出品「要塞砲」の陳列を撤回した。之は同會を臨檢した上野憲兵隊員の警告に依つたもので同作品が某要塞地帯を寫生したものらしく思はれ軍機保護法及び要塞地帯法に牴觸する疑

があるとの理由からである。

國立工藝指導所京都誘致の運動

現在官

設の工藝指導所は仙臺に在るのみで、美術都市を以て任ずる京都では豫て之が設置を希望し、關係者間で運動を續けてゐたが、本年議會に於ける質問に端を發して再燃し、大阪に對抗して之を京都に誘致すべく積極的な運動が開始された。即ち三月三十日の市會では商工大臣宛提出の意見書を決議、市會内に促進委員會の設置を見、府、市、商工會議所聯合して其の實現を圖ることとなつた。

東京美術學校卒業生及入學者

東京美術

學校に於ける本年度の卒業生及入學者數は左の通りである。(選料及特別學生を含む)

		卒業生	入學者	應募者
日本畫科	油畫科	一八	二〇	(六三)
	彫刻科	四一	三八	(二五一)
建築科	建築科	一五	一七	(三七)
	工藝科	一〇	七	(二四)
圖案部	彫金部	一〇	一五	(一三三)
	鍛金部	三	六	(九)
鑄金部	鑄金部	四	三	(一四)
	漆工部	五	七	(二〇)
建築科	建築科	八	七	(二七)
	建築科	七	七	(七五)

四月

圖書師範科 二〇 一五 (一二二)
合計 一四一 一四二 (七九五)

東京府美術館の恩人表彰

東京府美術館

では四月一日から開館十週年記念展覽會を開催したが、此の機會に同美術館建設寄附者たる佐藤慶太郎氏の美術界に對する功績を表彰することとなり、二日夕上野精養軒に於て其の式を舉げた。佐藤氏夫妻を主賓に横山府知事を初め歴代知事、正木帝國美術院長、赤間文部省専門學務局長、重だちたる美術家、同美術館評議員、常議員等約五十名出席、横山知事より岡田三郎助氏筆佐藤氏肖像畫を記念品として贈つた。

五月

京都漆藝會創立

京都に於ける漆藝家協

力の機關として「京都漆藝會」は既に昭和九年の春成立を見たが、新に會員も加はり委員等も決定したので、五月一日其の創立が發表された現在會員三十名。

帝國美術院改組發表

政府は帝國美術院

官制及び美術研究所官制制定の件を五月二十八日の定例閣議に付議決定、同日正午文部省は内定せる院長及び會員四十九名の氏名と共に之を發表した。(一八一頁參照)

日本美術院の聲明

日本美術院では五月二十八日谷中の同院に於て緊急協議の結果、同日正午左の聲明書を發表した。

「今回政府當局が時代の進運に鑑み帝國美術院の革新を企て本院の參加協力を求められました、本院は年來在野の一團體として聊か斯道のために力を致して來たのであります、現下日本美術の重大性に深く念ふ所あり美術界が一致協力その革正に當り純正なる藝術の進展を圖るべき好機運なりと確信致しまして、進んで大同に就き敢て微力を竭さんとするものであります。右聲明致します。

昭和十年五月廿八日

日本美術院

追て本院は從來の如く嚴然たる存立を保ち一層斯道のために邁進せんとするものであります。」

六 月

帝國美術院官制公布並職員任命

新に制定された帝國美術院官制は勅令第四百十七號として、六月一日官報を以て公布、即日施行されることとなつた。又之に伴ふ院長、會員以下職員任命は同日附を以て發令、六月三日官報を以て發表された。(便覽二一頁參照)

美術研究所官制公布並職員任命

美術研究所は從來帝國美術院規程に依り其の附屬と

現代美術

して設置されたものであつたが、帝國美術院の改革と同時に別に官制が制定され、勅令第四百十八號として六月一日官報を以て公布、即日施行される事となつた。所長以下の職員も同日附を以て任命された。(便覽三三頁參照)

二科會五會員と訣別

二科會は帝國美術院の改組に就き五月二十一日夜柳橋柳川に臨時總會を開いて協議したが、帝國美術院會員に任命された五會員と他の會員との意見一致せず、同會は右五名と訣別して從來通り帝展不参加の方針を貫くこととなり、六月一日左の聲明書を發表した。

「元本會々員石井柏亭、有島生馬、山下新太郎、安井會太郎、藤川勇造の五氏は今般の帝國美術院改組に際し右會員に推舉せられたところこれを受諾せられたり、依つて本會は發祥以來の盟約に従ひ右五氏と訣別し本會は從來の如き方針を一貫して展覽會を繼續することに決定せり、こゝに右五氏の本會創立以來の勞を多とし名譽會員として推薦することゝせり。

右聲明す

昭和十年六月一日

二科會

雙杉俱樂部の申合

東京在住の日本畫家で舊帝展無鑑査の者の組織する雙杉俱樂部では、六月二日比谷三信ビル東洋軒に於て緊急總會を開き、帝國美術院改組に對して意見

交換の結果舊無鑑査資格の存続を要望することとなり帝國美術院會員を除く俱樂部員の間で「新帝展に於て若し俱樂部員の一人たりとも無鑑査の資格を失ふ如きことあらば、全員結束して新帝展無鑑査の資格を拒絶す」との旨を申合せた。

川島理一郎氏國畫會を脱す

國畫會會員

川島理一郎氏は、帝國美術院の改革に伴ふ混濁せる渦紋の埒外に在つて「藝術に専念したいからとの趣旨で、六月二日聲明表を發表し同會を退會した。

洋畫家十六名の聲明

舊帝展第二部に於て審査員の經歷ある有志十六名は、六月三日午後一時半丸之内明治生命ビル内マールに會合して左の聲明を發表した。

「文部省が採りたる今回の所謂帝展改組なるものは既に政府が認めたる一國の最高美術諮問機關に何等の諮るところもなく全く門外漢が皮相なる政治的見地の下に行ひたる變態的行爲にして措置すべて當を失し遂にそれに信頼をおく能はず、即ち我等は今後何等の條件によるもその經營になる展覽會に我等の製作を出品することなかるべし

右聲明す

昭和十年六月三日

石川寅治、伊原宇三郎、大久保作次郎、

太田 三郎、金山 平三、吉田 博、

田邊 至、辻 永、中村 研一
中野 和高、小林 萬吾、牧野 虎雄
安宅安五郎、阿以田治修、柚木 久太
鈴木千久馬

舊帝展第二部有志の聲明

出品者の中、無鑑査たりし者を主とし特選を得た者をも加へた有志は、六月三日夜新橋花月に會合、前項の十六名より其の聲明の趣旨を説明、一同之に賛し左記の通り六十七名の署名に成る聲明書を發表した。

「今度の帝展改組は些々たる世俗の風評に動かされ、すでに政府が認めたる一國の最高美術諮問機關に何等圖ることなく、一朝にして美術振興に關する實績と歴史とを蹂躪した暴舉と思ひます。

故に私達はいさる信頼を置く能はざる組織の下に開催される展覽會には今後一切私達の製作を出品しない事に致します。

昭和十年六月三日 新橋花月に於て

舊帝展第二部有志 (順序不同)

小林 萬吾、石川 寅治、金山 平三
田邊 至、柚木 久太、太田 三郎
大久保作次郎、寺内萬治郎、阿以田治修、中村研一、辻 永、小絲源太郎
吉田 苞、太田喜二郎、山下 繁雄
緒方 亮平、鬼頭鍋三郎、牧野 虎雄
三田 康、金澤 重治、桑重 儀一
松邨 巽、鈴木 誠、有岡 一郎

吉村 芳松、佐竹徳次郎、高村 眞夫
永地 秀太、白瀧幾之助、清水 良雄
小寺 健吉、跡見 泰、耳野卯三郎
小磯 良平、猪熊弦一郎、中西 利雄
佐藤 敬、北島 淺一、三上 知治
池部 鈞、富田溫一郎、新井 完
佐分 眞、鈴木千久馬、橋本 邦助
五味 清吉、平岡權八郎、有馬さとえ
吉田 博、河井 清一、片岡 銀藏
中野 和高、三宅 克己、奥瀬 英三
加藤 靜兒、赤松 麟作、大野 隆徳
安宅安五郎、權藤 種男、相馬 其一
香田 勝太、矢島 堅土、伊原宇三郎
小柴 錦侍、北 蓮藏、濱地 清松
上野山清眞、以上」

日本木彫會の會合

内藤伸氏を會長とする日本木彫會では六月三日夜下谷綠風莊に於て會合、舊帝展に於て無鑑査たりし者其の他會員三十八名が出席し、帝國美術院改組に對する不滿の意を表して同院會員たる内藤氏の善處を要望した。

塊人社の聲明

舊帝展出品者たりし塑造家の團體塊人社では、六月四日正午より東京府美術館同社展覽會事務所に於て、病臥中の堀江尙志氏を除く同人十一名集合、左の聲明書を發表した。

「我が塊人社は從來帝展に出品し來りたる

も今回改組されたる新帝國美術院發生の經過を見るに措置事毎に妥當を失し美術の獨自性を損すること甚しくその不誠意不純まことに忍び難くその機構又何等の信を措くに足らず依て我々は茲に同院を否認しその展覽會に我々の製作を出品せざることを宣言す

六月四日 塊人社同人

泉谷喜一郎、堀江 尙志、小笠原眞弘
田中 林藏、村田勝四郎、松田 尙之
藤澤 古實、小室 達、河内山賢祐
安藤 照、荒居 徳亮、三澤 寛
以上」(追記あるも之を略す)

彫刻家九名質問書提出

舊帝展第三部に於て審査員の經歷ある有志七名は、六月四日京橋區新富町清豐園に於て協議の結果、文部當局に對する大要左の如き質問書を作製、長谷川、國方、後藤、北村の四氏代表として文部省を訪問の上之を提出した。其の署名は旅行中の雨宮、關野兩氏を加へて九名に成る。

「帝國美術院ノ改組ニ就キ

當局ノ説明ヲ求ムル事項

其 一

舊帝國美術院會員ノ二三人ヲ限り他ノ會員ニハ何等ノ諮問ナク、ノミナラズ日本美術院、二科會其他ノ各國體首腦部ト通ジ、抜打的ニ舊帝國美術院ヲ解消セルハ(中略)暴舉トイフモ過言ナラザルナリ、何故ニ一應

舊帝美會員ノ總會ニ諮リ、公論ニ決セザリシカ、(下略)

其二

(前略)舊帝展會員並ニ同系中堅作家ハ文帝展開設以來三十年ニ近キ間、カ、ル信念ノ下ニ苦節ヲ守リ、渾身ノ努力ヲ捧ゲテヒタスラ美術ノ向上發展ヲ期シ今日ニ及ベルモノニシテ當局ニ於テ此ノ尊ブベキ節操ヲ無視シ、蔽履ノ如ク遇シテカヘリミザルハ甚ダ遺憾トスルトコロナリ、之ニ反シ、且ツテ文帝展ニ反對ノ說ヲ持シ、波瀾ヲ起シテ文帝展ノ進路ヲ阻止スルガ如キ行動サヘ敢テセシ各團體ノ首腦者ヲ、恰モ高德ノ士ニ對スル如ク厚遇セル今回ノ改組ハ、社會一般ニ反逆ヲ獎勵シ變節ヲ當然ノ行爲ト認メシムル結果ヲ生ゼシムルモノナリ、(下略)

其三

二科院展其他各團體ハ且ツテ文帝展ト主義主張ヲ異ニシ、藝術上見解ニ差異アル爲ニ分離シ、(中略)舊新兩會員ニ鑑別審査ヲ受クル事ハ當然其ノ創作態度ニ不純ヲ強イラル、モノニシテ特性ト人格トヲ尊ブ作家ノ藝術的良心ヲ僞ル結果トナリ、舊帝展ニ屬セシ作家ハ新會員ニ鑑別審査ヲ受クル事ヲ絕對ニ排撃セザルベカラザル事態ニ立至ラシメタルモノニシテ當局ニ於ケル責任ノ有無ヲ疑ハザルヲ得ズ

其四

藝術ノ眞ノ向上ハ必ズシモ大同團結ニヨツ

現代美術

テ達成セラルベキモノニ非ズ、(中略)要路ノ人々ハ此ノ際至高至大ノ藝術ハ一個ノ人格ヨリ胚胎スルモノニシテ、科學研究或ハ政治運動ノ如ク、集團的統制ニヨリテ完成セラルベキモノニ非ザル事ノ認識ヲ必要トスルモノナリ

(中略)カ、ル誤レル改組ヲ斷行シ、官廳ノ威力ヲ以テ飽クマデ美術家ノ人格ヲ無視シ壓力ヲ加フル時ハ美術家ノミナラズ、一般民心ヲ不安ナラシメ動搖ニ導クモノニシテコノ點須ラク考察反省アリテ然ルベシ以上四項ニ對シ新美術院ノ總會前ニ於テ吾人等舊帝展系出品者ニ對シ當局ノ責任アル説明ヲ要求ス

昭和拾年六月四日

長谷川榮作、横江 嘉純、吉田 久繼
國方 林三、山根 八春、後藤 良
雨宮 治郎、北村 正信、關野 聖雲

國畫會の聲明

國畫會は六月五日午後六時から虎之門晚翠軒に會合を催し、會員、會友、評議員等二十八名參集、會員梅原龍三郎富本憲吉兩氏より帝國美術院會員の任命を受けた経過を説明し、同會の態度に就き協議した結果左の聲明書を發表した。

「吾國畫會は今回の帝國美術院改組に賛意を表す。吾等は新帝國美術院が展覽會開催のみを主體とせず美術全般の向上發達に力を盡さるべきを期待す。今日具體的事項の

發表を見ざるに行動するは輕舉なりと信ずるが故に來る新美術院會議の決定を俟ちて改めて聲明する處ある可し。國畫會は如何なる場合と雖も存続す。

昭和十年六月五日

國畫會

京都工藝作家有志の陳情 京都在住の工藝家有志約三十名は、六月五日午後一時より四條橋畔矢尾政に會合、深更まで協議の結果左の陳情書を作製し、同志の署名を集めた上七日附文部大臣宛に郵送提出した。

「今回文部省の採りたる帝國美術院改組は當局が美術最高機關に對し何等考慮するところなく實蹟と歴史を無視し專斷敢行せられたるものにして首肯する事能はざる點あり願ふに我京都工藝作家は四部設置以來帝展に對し多年斯業の爲め精進努力し來りたるも今回の改組の如きは寧ろ反帝展派を重視したるやの嫌あり殊に我工藝部は他部に比し會員の數權衡上極めて少數なるは默視し難き次第なり。

此時に當り當局が現状を固執するに於ては我等は是を信賴する能はざるを以て茲に當局の猛省を覓むるものなり。

昭和十年六月七日

京都工藝作家代表

澤田 宗山、伊東 陶山、河村 蜻山
山鹿 清華、宮永 東山

(他五十五名連署)

舊帝展第二部有志の再聲明

龔に帝展不

出品の聲明をした舊帝展第二部有志の中、小林、田邊、大久保、中村、永地、吉田、中野、安宅、石川、柚木、寺内、辻、白瀧、金山、太田、阿以田、小絲、牧野、伊原、清水の諸氏二十名は、六月六日午後九之内マールに會合して左の通り第二次の聲明を發した。

「吾等が執りたる今回の不出品同盟に關し更に一層明確にその眞意を披露するためこの運動が所期する根本の問題を表明し、且將來の措置に關する進言を行つてこれを輿論に問ふは吾等の立場を明かにする上にもまた本邦美術の完全なる進展を期する上にも、この際最も緊急の處置と信ずるが故に茲に下記第二次の聲明をなす。

一、無理解なる當局の手によつて輕々に左右せらるゝが如き現行の帝國美術院官制を改革し飽くまで美術の尊嚴を確保すべき事。

一、帝國美術院は最高美術諮問機關として全く獨立せしむる事。

一、展覽會の開催は帝國美術院自らこれを行はず、すべて民間各團體の經營に委しそれに最善の發達を遂げさせる爲め適當の方法に於て援助の途を講ずる事。以上昭和十年六月六日 舊帝展第二部有志」

旺玄社の聲明

舊帝展に出品してゐた洋畫家の團體旺玄社では六月六日午後六時烏森

の「おりゑ」に會合、同人十數名出席協議の結果左の聲明書を發表した。又同社が首唱となつて舊帝展第二部の一般出品者を糾合し、新帝展反對運動を起すこととなつた。

「私達は今回文部當局の帝院改組なるものに對して一般出品人の立場として絶體に反對いたします。

當局の改組は所謂院積年の情弊打破にありと云ふ、情弊なるものに對する責任は、今回改組の主腦部の者も大いにその責任を感じすべきであります。

而して其の主腦者が自己の非を悟り、公正な心境で改革するならば結構であります、私等は其處に些の反省の痕跡も見ることが出来無いのみでなく、益々情弊の醸出を豫想しなければなりません。かゝる情勢に於て吾々一般出品者は安心して出品出来ないのであります。

尙今回新に會員に迎へられた、在野美術團體の所謂主腦者の人には、今回彼等の信條を無視して帝院に参加した理由は、在野美術團體の發展の爲など、色々の理由はあらうが、彼等の行動には信じられぬ點があります。

此れらの信することの出来ない人々を包含した組織の元に行はるべき展覽會へ出品することは、吾々の潔しとしない所であります。

依つてこゝに不出品を聲明します

六月六日

旺玄社

同人(二十六名署名)

東光會の會合

舊帝展出品の洋畫家團體

東光會では、支那旅行中の熊岡美彦氏を除き齋藤與里、高間惣七其の他の會員諸氏が、六月六日夜巢鴨八千代館に集合協議の結果、輕に反帝展運動に合流せず靜觀することに態度を決めた。

春陽會の聲明

春陽會では六月六日午後

丸之内幸ビル内に足立源一郎、石井鶴三、木村莊八、中川一政氏等委員集合、協議の結果左の聲明書を發した。

「春陽會は帝展をたゞ單に展覽會機關と考へない、帝展の意義はもつと根本的な處にあると考へる。そして將來の美術界になすべき事が多々あらうと思はれる。その點を眼目にして力を致してもらひたい、春陽會から帝院會員に小杉放庵が參與したのもその考へである。従つて現下の官野ともにただ卑近な展覽會開催といふ點だけを廻つて紛亂する情勢には交ることを好まない」

獨立美術協會の會合

六月六日夜西銀座

辰巳家に兒島善三郎、野口彌太郎、中山巍、高島達四郎、鈴木亞夫の五會員會合協議したが、同會は從來の如く帝展に反對し不出品の態度を一貫することに決定した。

平福百穂記念碑の建立

平福百穂の畫塾

白田舍門人一同に依り、百穂の郷里秋田縣仙北郡角館町花場山頂に遺愛の畫筆を埋めて記念碑が建設され、六月七日除幕式が舉行された。碑は高八尺、幅四尺の仙臺石で結城素明氏筆「百穂瘞筆碑」の文を刻み、裏面に門人三十七名の名を記してゐる。

春臺展有志の聲明

岡田三郎助氏の塾展

春臺美術展覽會に屬する有志二十名は、六月七日麻布區網代町同會員内藤氏方に集合して左の聲明を決議し、岡田氏の諒解を求めた上八日正午之を發表した。

「私達春臺美術展覽會有志といたしまして今回の帝院改組の内容及人選に對して信を置くことが出来ません、かゝる組織の下に開かれる展覽會には絶対に出品しないことを此處に聲明いたします。

昭和拾年六月八日 春臺美術展覽會有志」

舊帝展一般洋畫出品者懇談會

旺玄社の

首唱に依り、春臺展、白日會、光風會、第一美術協會、等伽會、上杜會、九年會、銀濤社太平洋畫會等に屬する者其の他二百五十餘名の舊帝展第二部出品者懇談會が、六月九日夜東京府美術館食堂に於て開かれた。交々新帝展反對の意見を述べ協議の結果組織的な反對運動を起すこととなり、各團體から計二十八名の實行委員を選出、此の運動組織を「新帝

院反對同盟」と呼ぶこととし、左の聲明を發表した。

「私達一般展覽會出品者にとつて今回の帝院改組は全く信頼することが出来ず斯る組織の下に開催する展覽會に對して一般出品者同盟を結び過日の花月に於ける先輩の決議に合流して茲に不出品を聲明す

新帝院反對同盟」

光風會の聲明

洋畫團體光風會では六月

十日夜東京會館に會員會友等六十餘名集合、意見交換を行つた結果左の聲明書を發した。又太田三郎、清水良雄、猪熊弦一郎、寺内萬治郎の四氏は代表となつて同夜、同會會員であり帝國美術院會員である中澤弘光、南薰造兩氏を訪問し、右會合の意志を傳へ善處を懇請した。

「今回の帝院改組は、その表示するところと、その實際とに於いて、甚だしき矛盾あり。到底それを肯定する能はず。それに依つて經營せられんとする展覽會に對しても素より亦然り。

おのづから本會は、その舊帝院との永き交渉に於いて、衷情洵に忍び難きものありと云へども、茲に斷然新帝展と絶縁し、今後その展覽會に、本會員及び會友の製作を出品せざることを聲明す。

昭和十年六月十日

光風會」

日本美術協會の決議

日本美術協會では

六月十日午後五時上野同協會に於て第一部委員會を開催、八木岡春山、島崎柳塙、其の他諸氏二十名出席協議の結果、左の決議文を作り翌日理事會が決定した上で協會の要求として文部大臣宛提出すべきことを申合せた。

「一、帝國美術院組織改正に關し我日本美術協會は其趣旨に賛成す

一、日本美術協會第一部委員中より帝國美術院會員として若干名を選任すること

一、無鑑査制度を設くるに於ては日本美術協會第一部委員は帝國美術院無鑑査と同一扱たるべきこと」

日本南畫院の聲明

小室翠雲氏の主宰す

る日本南畫院では六月十一日正午から麴町の同院本部に同人十九名參集、帝國美術院改組に對する同院の態度に就き協議した結果左の聲明書を發した。但し翠雲氏は帝院會員の立場に在る爲には加はらない。

「官展開始以來こゝに三十有餘年その間美術文化の向上に資せし効果少からずと雖も又一方官設展覽會はその統制上不合理の存在なるをさとらざるべからず、官展の開設後須臾にして有力なる諸團體を離脱せしめたる所以のものは蓋し一派一人的なるべき各流派を強ひて官府の力によつて包攝せんとしたる誤りに歸すべきものと云はざるを得ず當局今回改革の趣旨たるや頗る時宜に

適するものありと雖もその方法に至つては過去の過誤を繰り返し新たに争鬭の府を造る如きものあるを以て帝國美術院は速に官設展覽會を廢して美術行政の最高諮問機關となり各派各團體を公平に支持助成してその特長を發揮せしめん事を要望す、以上の趣旨にかなはざる場合は當院同人二十人、院友七十三人は不出品を同盟し、南畫院本來の主義主張に基き藝術の獨自性を發揮する事は勿論、益々團體の結成を強固にする事を誓言するもの也」

東光會の聲明 東光會會員會友等は六月十一日夜旅行中の熊岡氏宅に會合、協議の結果帝國美術院を解消すべしとの意見に到達し翌十二日左の聲明書を發した。

「今回改組されたる新帝國美術院は、其の目的に於て全然失敗に終り、却て我が國美術界を攪亂する強力なる機關化されたるものと認む。斯る機關の存続は、害多くして益なし。依て即時解散すべし。

理由、 今や國事多端の折柄國費を以て經營する帝國美術院の改組は既に其の第一歩に於て失敗を曝露し、我が國美術界を空前の混亂状態に陥らしむ。然も當局に於ては反省する處なく敢て其の非を強行せんとす。吾人は黙止するに忍びず、茲に其の理由を開陳して新帝國美術院の即時解散されんことを要望し併て廣く世論に訴へんとす

るものなり。

一、積弊打破の失敗 舊帝院の主催にかゝる帝展の一部分に弊害を生じたるものとなし、其の矯正を目的に突如改組されたる新帝院は、其の豫期に全然相反し、却て其の弊害を多種多様に複雑化せる事を曝露す。これ失敗の一なり。

二、統制に關する失敗 舊帝院及び帝展の組織形態が一黨一派に偏するを不合理となし、國家的見地より其の統制を計りたる趣旨は一般の認むる處と信ず。然も其の方法を誤り更に一層不統制に拍車をかけたる結果となる。これ失敗の二なり。

附帶希望、國家が帝國美術院の如き機關を設け、美術の向上並に其の普及を計るは當然の義務なりと信ず、隨て吾人は、適當の時期に、美術界の意志を無視せざる方法に於て、帝國美術院の如き機關の再組織を希望す。

昭和十年六月十二日 東光會

太平洋畫會の聲明 洋畫團體太平洋畫會

は六月十二日午前十時から下落合の吉田博氏方に評議員會を開き、協議の結果左の聲明書を發表した

「今回文部當局において企てられたる新帝院改組は全くその方法を誤まり藝術の尊嚴を蹂躪しわが藝術界の秩序を破壊するの輕舉なりと信ず、本會員はかゝる不信なる新

帝院によつて開催さるべき展覽會には斷じて出品せず、右聲明す」

白日會の聲明 洋畫團體白日會では六月十二日夕淺草三州屋に會員十數名會合し、意見交換の上左の聲明書を發表した。

「今回の帝院改組は何等美術に定見と理解なき當局の支配下に於て專斷的に行はれ全く道義を誤り徒に斯界を混亂せしめ其態度に於て美術家全體を侮蔑するの甚だしきものあるは我等の到底忍び得ざる處なり。

我等は速にその支配下を離れて具に美術の尊嚴を保持し萬衆共に信頼し得るの更に新たなる中心機關の創設を期待するものなり。

而て既に當局は所期の目的たる革新綜合統一の實を舉る能はざる事情に直面したる以上斷然茲に新帝院を解消し斯る不安と混亂の状態を一刻も速に收拾善處されんことを要望す。

昭和十年六月十二日 白日會

彫刻家有志の聲明 舊帝展第三部に於て

無鑑査たりし長谷川榮作、小倉右一郎、日名子實三、石川確治、安藤照、北村正信等の諸氏三十五名は、六月十二日夕上野公園梅川亭に會合、協議した結果左の聲明書を發した。

「今回の改組は全然誤まれる措置にしてこれを強行せんか益々我が美術界を攪亂し收

拾すべからざる結果となること明かなり依つて我等は展覽會不開催は勿論新帝國美術院を速かに解散し茲に眞に權威ある美術機關の建設を要望す。

六月十二日

舊帝展三部有志

帝國美術院總會 官制の制定に依つて新な組織を整へた帝國美術院は、最初の會員總會を六月十三日午後東京美術學校會議室に於て開き、同十七日まで五日間に亘つて審議を重ね、院の運用及び事業に關する幾多重要な議事を決定した。(一八三一—一八七頁參照)

新帝院反對同盟の再聲明 舊帝展第二部

一般出品者より成る新帝院反對同盟では、六月十六日夜上野廣小路キヨに於て實行委員三十餘名會合協議し、左の聲明書を發表した。
「本同盟は過日の先輩決議聲明書をあくまで支持し今後の動向進展に一致行動を期しその方針に變更なき事を再び茲に聲明す」

日本美術院の會合

日本美術院では六月

二十日午後谷中の同院に同人、院友、研究會員等百餘名の會合を催し、横山大觀氏より帝國美術院の改組より總會に至る經過を報告同院では同人以下舉つて帝展に参加出品することを申合せた。又毎秋開催しつゝあつた展覽會は、帝展との重複を避ける爲隔年開催することとした。

東邦彫塑院の結成

舊帝展三部に於て

審査員の經歷ある長谷川榮作、國方林三、北村正信、加藤顯清、山根八春、雨宮治郎、關野聖雲、吉田久繼、後藤良の諸氏九名は、六月二十二日左の聲明を發し、新團體「東邦彫塑院」を組織、今秋第一回展覽會を開くことを決した。

「帝國美術院改組の結果、吾人等主義を同じくする者に於ては團結の必要を痛感し、こゝに東邦彫塑院を結成して藝術權威維持と後進の誘掖に盡し、もつて吾人の生命とする創作により主義主張の貫徹を期するものなり」

木村武山氏大日如來堂を建立

木村武山

氏は豫てより兩親の追善供養の爲、郷里茨城縣西茨城郡北山内村字箱田に大日如來堂建立の念願を立て、私財を投じて建設中であつたが此の程竣工、内部には自ら彩管を執つて壁畫を完成した。

七月

構造社の分解

彫塑の外に繪畫部を有する構造社では、彫塑部が新帝展支持の立場を取らんとするに對し繪畫部は反對に傾いた爲

兩部間に意見の阻隔を來し繪畫部會員神津港人氏は六月二十五日脱會するに至つたが、同二十七日彫刻部幹事會を開き「本會は本日限り本會繪畫部を解消す」と決議し、同社は彫刻のみの團體となつた。

然るに繪畫部會員は之を不當とし、七月一日夜新橋の藏前工業會館に會合協議の結果、「繪畫部解消決議拒絶書」を彫刻部に發送して對抗し、今後構造社の主體は繪畫部に在ることを聲明、同名の團體が二種存在することとなつた。

第二部會組織 豫て「不出品同盟」を結び新帝展に反對を聲明しつゝあつた舊帝展第二部無鑑査有志は、帝國美術院總會後方針を考究中であつたが、七月八日夜丸之内マープルに總會を開いて協議した結果、新なる洋畫團體「第二部會」を組織して愈々結束を固め今秋より展覽會を開くことを決定した。此の名稱は舊帝展第二部に因んだもの、其の無鑑査たりし者の中の同志を以て會員とし、展覽會は一般の作品を公募する。斯くして反帝展運動を愈々鞏固に持續することを明確にした。

刀劍展覽會開催決定

帝國美術院總會の

結果刀劍は帝展に於ては受理されぬこととなつたので、大日本刀匠協會では對策を考究中であつたが、文部省とも協議の上、七月十日左の通り独自の刀劍展覽會を開催することを決定した。

一、文部省後援大日本刀匠協會主催にて毎

年刀剣展覧會を開催すること

一、第一回展覧會は今秋十月十日より同末日まで東京府美術館に於て開くこと

一、優秀作品には文部大臣賞を出すこと

一、審査員の選任等に就ては文部省の斡旋に俟つこと

雙杉俱樂部解散

東京在住の舊帝國美術院第一部會員及び舊帝展第一部無鑑査の畫家を以て組織してゐた雙杉俱樂部は、曩に新帝展に對して無鑑査復活の要求を表示してゐたが、七月十日午後日比谷三信ビル東洋軒に臨時總會を開き俱樂部員三十餘名出席意見交換の結果、舊帝國美術院の解消した今日既に俱樂部存続の意義は失はれたものとして、解散することを決定同二十日夜目黒雅叙園で解散式を行つた。昭和五年一月結成以來五年半を経てゐる。

京都工藝界の紛争

京都工藝作家の間に清水六兵衛氏の言動に對して慥らず感情の疎隔を來してゐた者があつたが、最近京都市主催綜合美術展覧會に於ける授賞問題、並に帝國美術院改組に對する清水氏の態度に就き同氏に對する不滿が激化され、七月十日遂に伊東陶山、河村靖山、澤田宗山、宮永東山の四氏は今後清水氏と絶縁する旨の聲明書を發するに至つた。

第三部會組織申合

舊帝展第三部に於て無鑑査たりし作家の中東邦彫塑院に加はらぬ有志は、七月十二日夕上野公園梅川に會合を催し、小倉右一郎、池田勇八、石川確治、吉田久繼、佐々木大樹、小室達、安藤照、畑正吉氏等十一名出席、吉田氏より東邦彫塑院結成の事情を説明したが、同院の運動に慥らず飽く迄新帝展反對に邁進すべしとなし、第二部會の例に依つて同志を糾合し第三部會を組織して反帝展の展覧會を開催するやう努力することを申合せた。

第二部會出品者同盟

舊帝展第二部出品者の新帝院反對同盟では、七月十三日夜上野公園梅川に實行委員會を開催、同盟の名稱を「第二部會出品者同盟」と改稱し第二部會を支持すること、来る二十日一般出品者懇親會を催すこと等を決定した。

此の第二部會一般出品者懇親會は二十日夜東京府美術館食堂に於て開催された。出席者約二百五十名、帝國美術院反對、第二部會支持の氣勢を挙げ、左の決議をした。

「本同盟は第二部會展に對し飽迄もこれを支持しこれに出品すること」

尙當夜は第二部會會員若干名も出席した。

著作權審查會設置

七月十五日から改正著作權法が施行されることとなつたが、之に伴つて著作權審查會が設置された。内務大臣

を會長とし、法律、文藝、美術、音樂、演劇等の關係者を委員としてゐるが、美術に關しては和田東京美術學校長及横山大觀の兩氏が舉げられてゐる。(便覽一五頁參照)

第三部會結成

小倉右一郎、池田勇八、石川確治、吉田久繼、畑正吉、上田直次、開發芳光、日名子實三の諸氏は、七月二十日夕丸之内マールに會合、豫て計畫中の新團體「第三部會」結成を決定左の如く聲明を發し第二部會の運動に合流、今秋より展覧會を開催することとなつた。

「六月十二日の聲明書に基き初志を貫徹せんが爲め茲に第三部會を組織し第三部美術展覧會を開催す」

新興美術家協會組織

方久斗社の玉村方久斗、笹川巴流夫、平川清藏、船崎光治郎、日本美術院の大内青圃、木村五郎、國畫會の清水多嘉示、大乘美術會の大内青坡の諸氏は七月二十日京橋盛京亭に會合、新團體「新興美術家協會」組織を決定した。毎年秋季に展覧會を開催、本年は十月一日より二十日まで東京府美術館に之を開くこととした。從來の方久斗社及び大乘美術會の二團體は此の合同に伴つて自然解消されることとなつた。

東邦彫塑院の會合

東邦彫塑院は豫て長谷川榮作氏外七名を以て結成されたが、新に

二十三名の會員を加へ、七月二十三日夜上野翠松園に會合、協議の結果同院の態度と方針とを左の如く聲明した。

「東邦彫塑院の態度は新帝院支持に立つものです、併し只今の制度のまゝで満足するものでは斷じてありません、例へば無鑑査の問題や隔年制を毎年制にするとか、彫刻二部制を一部制に直すとか色々の缺陷を是正して以て永年育つて來た帝展を最も健全な有意義なものにせねば止まぬ覺悟で進んでゐるものであります。七月二十二日」

津田信夫氏帝國美術院會員任命 過般の總會に於て推薦された津田信夫氏に對し、七月三十日附を以て帝國美術院會員被仰付の發令があつた。

八月

帝展に人形進出の運動 人形を美術工藝として帝展に認めて貰ひたいとの運動が、帝國美術院改組を機會として在京の人形製作家の間に起り、白澤會、甲戌會、日本人形研究會の代表及び是等の會の顧問西澤笛畝氏運署の請願書を六月十二日帝國美術院長宛提出する所があつたが、七月には「人形第四部進出期成會」が組織され、同會では八月七日白澤會の久保佐四郎、日本人形社の平田京陽、甲戌會の野口光彦、其の他の諸氏二十名を實行

委員に擧げ、全國の人形製作者に飛檄して帝展出品を勧誘する等積極的に運動を開始することゝなつた。

前田寛治美術館建設運動 故前田寛治氏の遺作を陳列公開せんとする美術館建設の運動は、豫てより同氏の郷里鳥取縣倉吉地方で期成會を組織し着手中であつたが、最近故人の知友達の間で初志を貫徹する爲積極的な運動を進めることとなり、實行委員は倉吉町に建設地を計畫するなどの準備にとりかゝつた。

新彫塑協會組織 二科會彫塑部の故藤川勇造氏門下なる早川巍一郎、太田三郎、飯島三四二諸氏の三會友以下十二名は、二科展覽會開會を前に、八月二十日午後丸之内マープルに會合し、新に「新彫塑協會」を組織して二科會と訣別し、帝展支持の立場を取ることと決定、聲明をなした。

九月

蒼潤社組織 京都在住の新人を以て任ずる各種の工藝作家に依つて、新たな工藝の團體「蒼潤社」が組織され、九月十日其の宣言書が發表された。同人は染織七名、漆器六名、陶器八名、金工二名の二十三名である。其の宣言を抄出すれば、

「(前略) 若く、力強い、進歩的な有爲の作家をもつて組織する。この集團から、今日及び明日の、新しい工藝のメイン・カレントが生れて来る。われわれは過渡期の工藝家氣質を清算しやう、内面的に工藝の水準を高めやう、(中略) 豫定のコースは、飛躍的な創造である。(下略)」

春陽會の帝展第二部開催試案

春陽會で

は美術界の情勢に鑑みて、帝展第二部開催方法に關する試案を作製、九月十三日關係諸方面に提出した。其の要項は、一定の公認團體を以て綜合展覽會を開き、一般出品に就ては各團體別に鑑査選出すると云ふのである。

帝國美術院諸規則制定

六月の帝國美術

院總會に於て決議された同院の諸規則は、文部大臣の認可を経て正式に制定されたる旨、展覽會規則は九月十三日、其の他は同十四日官報を以て公告された。

國畫院設立

松岡映丘氏が盟主となつて

左記九名の同人と共に新な團體「國畫院」を創立、九月十七日其の宣言、趣旨、規則等が發表された。事業としては研究所の設置、展覽會開催等があり、官設展覽會への出品に就いては同人は何の拘束も受けない。顧問には知名の政治家、軍人、實業家等の名が連ねられてゐる。其の宣言に曰く、

「國畫院設立に際して宣す

我等生を神國に享け、偶々藝術に志せる使命を省み、人生の愉悅と矜持との念深きと共に、斯界の情勢に鑑みて、愈々責務の重きを感じること切なり、乃ち同志盟約し、民族繪畫の傳統に立脚して精進勇躍、以て祖國新興文化の爲に勤仕せんことを誓ふ

昭和十年九月十七日

盟主 松岡 映丘

同人 服部 有恒、山口 蓬春

小村 雪岱、吉田 秋光、穴山 勝堂

岩田 正巳、狩野 光雅、高木保之助

吉村 忠夫（便覽六五頁参照）

工友團組織 京都に於ける各種工藝作家

の研究團體として新に「工友團」が組織された。陶藝、金藝、漆藝、染織繻、竹木の五部に分れ、同人六十八名より成る。

十月

美術公正會設立

岩佐新、垣見泰山、浦崎永錫、藤本韶三の四氏は十月一日「美術公正會」を設立した。其の宣言に曰く、

「我が美術界の狀勢に鑑み、茲に吾等有志相議り、美術界の諸問題を研究し、不偏不黨、その所信の貫徹に努め、以て斯界に寄與せんことを期す

昭和十年十月一日

美術公正會」

會規に依れば「美術行政並に美術に關する諸問題を研究するを以て目的とし、時宜に應じて其主張を行ふもの」で、現在會員は右の四名である。

京都工藝界紛争圓滿解決

清水六兵衛氏に對する不滿から京都工藝作家の間に起つた紛争は京都府當局頗る之を遺憾として和協の途を講じつゝあつたが、十月一日鈴木經濟部長が双方と會見斡旋に努めた結果、左の共同聲明を發し圓滿解決を見るに至つた。

「這般京都市主催美術展覽會工藝品審査に關聯し吾等の間に對立を生ずるに至りたるは深く遺憾とする所にして、これ畢竟相互の間に充分なる理解と意思の疏通を缺きたる結果にして不徳の致す所に他ならずと信ず、今回京都府當局の斡旋に依り隔意なき意見の交換を遂げ心境自ら釋然たるものあり、よつて茲に欣然手を握り一切の私心を去り、和衷協力以て京都工藝界の進展に寄與せん事を期す、右聲明す

昭和十年十月一日

伊東 陶山、河村 蜻山、澤田 宗山
清水六兵衛、宮永東山」

創工社結成

大阪に於ける各種工藝作家の新團體「創工社」が結成され、十月五日左の聲明が發表された。會員は漆藝六名、竹藝四名、鑄金五名、彫金二名、鍍金一名、彫刻

一名、計十九名、外に客員二名がある。

「時の推移は離合集散を已むなくせしむる。曩に無絃社は解散せられ、茲に吾々有志相計り創工社を組織せり。創工社は漫然たる研究の名に基づく作家の團體に非ずして、工藝の進むべき道に確乎たる信念を抱き、唯一途、斯道の爲に邁進せんとす。右聲明す。」（便覽參照）

帝院七會員の友情出品

反帝展の旗幟を掲げた第二部會は十月五日から第一回展覽會の一般出品受付を開始したが、七名の帝國美術院會員、岡田三郎助、藤島武二、和田三造、南薫造、中澤弘光、中村不折、滿谷國四郎の諸氏が、友誼的に同會に出品することゝなつた旨同日發表されて世間を注目を牽いた。之は第二部會の勧誘又は右諸氏等の發意からではなく、同會に出品する一部作家達の懇請から始まつたことで、同會では其の取扱を協議した結果友情出品と稱して特別陳列することとなつたものである。

日本壁畫家協會結成

日本壁畫の向上を計ることを目的として寺崎武男氏を中心とした同志が集り、十月六日銀座ユニオンクラブで「日本壁畫家協會」の結成式が行はれた。

帝院無鑑査資格者決定

六月の總會に於て選出された帝展第一部、第三部及第四部無

鑑査資格者は、規則の制定を俟つて正式に決定し、十月九日官報を以て發表された。

帝國美術院常議員會

十月十一日午前十時より美術研究所に於て最初の常議員會を開催、明年二月に開かるべき帝國美術院第一回展覽會の會期等に就き協議した。

彫刻二科制廢止の運動

帝展の新規則では第三部の彫塑を甲乙の二種に分けたが、此の制度を不合理であるとなし之の廢止を要求する運動が、東邦彫塑院によつて起された。即ち同院では評議員の運署に成る此の趣旨の文書を作製し、十月十一日の帝國美術院常議員會を機會に其の常議員等に配布する一方、關係方面を説いて目的達成の爲に運動することゝなつた。

日本陶藝協會解散

河村蜻山氏を總務とし京都の陶藝家三十二名を會員とする日本陶藝協會は、帝國美術院改組以來會員間に意見の相異を生じてゐたが、此の程遂に解散するに至つた。

實在工藝美術會組織

舊帝展第四部に於いて無鑑査たりし有志、高村豊周、廣川松五郎、山崎覺太郎、吉田源十郎諸氏等十一名は新團體「實在工藝美術會」を組織し、十月二十五日池之端淺の家で發會式を舉げた。來年五月

作品公募の第一回展覽會を開く豫定である。

十一月

正木記念館開館

前東京美術學校校長正木直彦氏が多年我が美術界に盡された功績を記念する爲に、有志の贖金に依り東京美術學校内に建設中であつた正木記念館は、本年七月竣工、爾來内部の設備等を進めてゐたが、十一月一日開館式を舉行した。當日同館建設會より正木氏に之を贈呈、同氏より文部大臣に對し之を國家に獻納する儀式があり、永く東京美術學校に於て陳列館として又集會等の爲に使用されることゝなつた。

高村光雲銅像除幕

東京美術學校内建設委員は有志の贖金を蒐め、故高村光雲翁の胸像を同校々庭に建設、十一月十日其の除幕式が行はれた。像は高村光太郎氏の作に成る。

帝國美術院總會

第二回の帝國美術院會員總會は十一月二十九日午前十時帝國學士院に於て開催、會員補缺推薦、第一回展覽會に關する協議、展覽會參與、無鑑査資格者の選定等をなした。(一八七頁參照)

十二月

春陽會の聲明

春陽會は十二月一日夜田端小杉放庵氏宅に委員會を開催、對帝展態度

を協議した結果、左の聲明を發して反對の意向を明かにした。

「春陽會は新帝展制度に對して再度建議案を提出しました、しかるに今回の發表を見ると本會の理想と反する事になり本會の參加は考へられませんが、春陽會は依然、純粹の在野團體として行動します、しかし會内に帝展に参加するものがあればこれに對して各自の自由にかまします、但しその際は一方に態度を決して貫ひます。」

獨立美術協會の聲明

獨立美術協會は十二月一日午後六時より會員總會を開き、反帝展の態度を決定、左の聲明を發した。

「吾等は現在の帝院機構に對して關心を有せず」

川島理一郎氏帝展參與辭退

曩に國畫會を脱した川島理一郎氏は帝國美術院總會に於て展覽會參與に選ばれたが、十二月一日之を辭退する旨を聲明した。

第二部會聲明

第二部會は帝國美術院總會の結果に對し、十一月三十日夜丸之内マールに委員會を開いて協議する所あつたが、十二月二日夜同所に於て更に會員總會を開催した結果、左の聲明を發して同會員は帝展の待遇を辭退する旨を表明した。

「曩に本會かそれに慊らざりし新帝國美術

院のその總會に於て議決せられたる參與及び各種の待遇に關しては本會々員はその發令に際し之を辭退することを聲明す

十二月二日

第二部會

二科會の聲明

二科會は十二月四日四谷の同會事務所に會員總會を開き態度を協議した結果、帝展の待遇を拒絶する意向を決定し左の聲明を發表した。

「二科會は曩に聲明せる如く帝國美術院改組に對しては絕對に無關係なり、從つて今回發表せられたる諸種の資格に就ては本會會員及び會友に關する限りこれを受諾せざるものとす、右重ねて聲明す」

小杉放庵氏帝院會員辭任

帝國美術院會員小杉放庵氏は、其の主宰する春陽會が反帝展の態度を取るに至つた爲自らの立場に矛盾を生じ、遂に十二月四日帝國美術院長宛辭表を提出、同五日左の文書を春陽會に寄せたので、同會では之を會報として發表した。

「この度私は帝國美術院會員を辭任いたしました、大部分の意味は彼の重要な職分に對する私の不適任の自覺ゆゑであります、丁度春陽會が帝展不出品在野の聲明に及びました、十餘年間所屬の團體と袂を別つてまで自ら不適任と信ずる所に留まり得ず、他の有能の適任者と代るべきだと考へた次第です、然しながら私は元來大綜合展論者

でありました、これゆゑに改組當初の任命を受けたわけですが、今後と雖もこの眞の大綜合展の希望をもちます、將來然るべき機運によつてすべての作家のよき競技場が出現されん事を期待するものです

春陽會々員 小杉 放庵

東邦彫塑院建言

東邦彫塑院は帝國美術院支持を標榜しつゝあるも、當局の處置多く當を失し美術界を混亂に陥らしめてゐるので速かに不備の改善を要するとなし、質問條項を列記した文部大臣宛建言書を作製、十二月九日評議員七名文部省に出頭之を提出した。

舊帝展無鑑査日本畫家の運動

十二月十三日夜目黒雅叙園新館落成披露の宴に、在東京の舊帝展第一部無鑑査たりし畫家多數が招かれたが、席上帝國美術院に對する不滿勃發し交々論議した結果左の決議をなし、目的貫徹の爲に團結して積極的な運動を起すこととなつた。

「一、我々ハ今回ノ新帝展改組ニ對シ慎重熟慮ノ結果舊帝展無鑑査全員ノ復活ヲ要求ス、一、我々ハ前項ノ要求實現ヲ見ザル限り新帝展ニ對シ出品セズ

右決議ス

昭和十年十二月十三日(四十三名連署)

翌十四日實行委員二十二名は文部省を訪ね石丸帝國美術院主事に面會、左の建言書を提

出し交々意見を述べた。

「吾人ハ今回改組セラレタル新帝展ノ機構ニツイテ尙幾多ノ改善ヲ要望シタルニモ拘ラズ爾來日ヲ經ルニ從ヒソノ所期ニ反スル結果ヲ將來シタルヲ遺憾トシ此際ソノ改善ノ一方途トシテ別紙ノ趣旨ヲ建議シ當局ノ深甚ナル考慮ヲ要求スルモノナリ

右池上秀敏以下四拾參名

昭和十年十二月十四日

帝國美術院長清水澄殿(前項決議文添付)」

第一部會結成と運動の繼續

同日右の實行委員等は新橋東洋軒を事務所として會合、此の團體を「第一部會」と名けて左の聲明書を發表し、又帝國美術院會員の歴訪其の他の運動を開始した。

「吾人は帝國美術院改組以來その機構に關し靜かに當局の處置を靜觀し來りしが、展覽會規程その他ことごとく當を失し混亂に混亂遂に止るところを知らず、今にしてこれを改善するに非ずんば事態收拾すべからざるに至らん故にこの際左記の改善を行ふか、然らずんば一時展覽會を開催せざるを可とす

一、舊帝國美術院無鑑査を全部永久無鑑査とす
一、舊帝國美術院外の諸團體に對しても適任者を無鑑査とすべし
一、隔年制を廢し毎年一回開催すべきこと

第一部會

翌十五日よりは京橋際東京美術館に事務所を置いて運動に活躍、十六日夜は神樂坂末よしに集合し、前日來帝國美術院會員等と意見交換せる結果に基いて協議した結果、更に主張を更めて左の聲明書を發表した。

「帝國美術院改組以來紛糾につぐに混亂を重ね遂に收拾すべからざるに至れり、茲に本會は此の事態に鑑み明春の展覽會開催に絶對反對を表明し更に完全なる帝國美術院の再改組を要求す 第一部會」

十七日夜飛田周山、町田曲江、矢澤弦月の三氏は代表となつて西下、翌朝入洛直ちに京都在住の帝國美術院會員、舊帝展第一部無鑑査の作家等を訪問し、第一部會の運動に参加を勸説した。併し京都畫壇は大體明春の帝展出品を目指して、製作に着手して居る畫家も多く結局第一部會への合流は見込がないこととなつた。

山口蓬春氏帝展參與を辭退

山口蓬春氏は十二月十六日帝展參與辭退を表明、左の聲明書を發表した。

「私はこの際自分の畫業的生活に反省を加へる意味にて先づ帝展の參與を辭退致すと同時に他の拘束性ある團體とも訣別して暫らく一個の自由人となり、ひたすら自己の畫生活の醇化に努力致し度く決心致しましたから右聲明致します」

美術公正會の建言

美術公正會では十一月初旬より帝展の改革案を立て、美術界の賛成者を募りつゝあつたが、十二月十八日左記の建言書を文部大臣宛提出した。

「帝國美術院ノ改革以來、動搖セル我が美術界ノ情勢ニ鑑ミ、コレガ安定方策トシテ左記諸項ニ就キ、吾等ノ微意ノ存スル處ヲ諒トセラレ、是レガ實現ノ爲メ御高慮ヲ仰グ度奉存候

一、帝國美術院ノ一事業タル帝國美術院展覽會ヲ文部省ニ移管シ、文部省ノ事業タルシムルコト

而シテ帝國美術院ハ我國美術ノ最高行政ノ府トシ、文部省ノ諮問機關トナスコト

(註略)

一、展覽會ハ各部トモ毎年開催ノコト

(註略)

右建言候也

昭和十年十二月十八日 美術公正會

岩佐 新、垣見 泰山

浦崎 永錫、藤本 韶三

賛成者 (五十三名記名)

文部大臣松田源治閣下」

之に展覽會試案が附加されてゐる。其の要點は、文部省主催の展覽會は毎年春季に開き一般出品で鑑別を経たるものゝみとし、之に授賞をなし又は帝展出品資格を與へる。別に秋季に、會員及び無鑑資格のみの帝國美術院展覽會を開くと云ふにある。

挿繪著作權問題示談成立

中里介山氏作

小説大菩薩峠の挿繪を、筆者石井鶴三氏が無斷で畫集として出版したことに對し、中里氏が石井氏を著作權侵害で告訴した件は、昨年八月以來問題となつて注目を集め、檢事當局でも慎重を期して取調中であつたが、十二月十八日中里氏が告訴を取下げたので示談が成立した。但し之は問題の法律的解決ではない爲に、現在適用さるべき明確な法規を缺く此の種の事件に關しては、依然今後の考究に俟つべき問題として殘されることゝなつた。

東光會の聲明

東光會は十二月二十八日

左の聲明書を發表し、帝展支持の立場を明かにした。

「我々は帝院改組發表當初に於て『再改組』を聲明したるも、當局の容る處とならず、爾來我々は、當局の善處に信賴し、靜觀の態度を採つて今日に及んだ。然る處去る十一月二十九日の帝院總會に於て第二部の組織が發表された。我々はそれに對して不満なしとせざるも、帝展擁護の立場にある本會設立の趣旨に依り、全力を擧げて新帝展擁護を決意し、本會關係者全員こぞつて新帝展に出品する事に決定した。美術の向上と普及に強力な機關である帝展を擁護するは、我々美術家の當然の義務であると信ずるからである。

今後我々は當局を鞭撻し、漸進的改善を計

現代美術

り、以つて帝展を、我が國最高の美術機關
たらしめん事を期す。
右聲明す。

昭和十年十二月二十八日 東 光 會

「物故作家及美術関係者」 ページ (126～130 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.126-130)

Cut for protection of the personal information

古美術

古美術展覽會及展觀

た寶物類を展觀、今回の内定品数は二百三點に及ぶが、其の中八十九點が陳列された。

名作屏風畫特別展覽會

於東京帝室博物館

一日——十五日

近年同館に於ける恆例の如くなつた此の展觀が本年も春季特別展覽會として催された。

出品點數八點であるがいづれも見難き作品であり、中でも前田侯爵家所藏傳周文筆山水圖屏風の如き學界未知の稀品が紹介されたことは欣ばしかつた。年代は足利より徳川初期に及び、漢畫、大和繪及び兩者混淆の諸派に互り、題材亦變化に富むものであつた。

左に展觀品目を掲げる。

山水圖屏風 紙本淡彩六曲一雙傳周文筆

侯爵 前田 利爲氏藏

花鳥圖屏風 紙本淡彩六曲一雙雪舟筆

男爵 大倉喜七郎氏藏

花鳥圖屏風 紙本金地着色六曲一雙狩野元信筆

中村 雅真氏藏

蹴鞠圖屏風 紙本金地着色六曲一雙

根津嘉一郎氏藏

日月山水圖屏風 紙本着色六曲一雙

河内 金 剛 寺 藏

松原圖屏風 紙本金砂子地着色六曲一雙

野村宗達筆 西脇濟三郎氏藏

雪汀水禽圖屏風 紙本着色金銀彩六曲一雙

一月

名刀展覽會

十三日——二十七日

於日本橋高島屋

神咒寺國寶開帳

二十一日

於西宮市外甲山

二月

豐太閣資料展覽會

四日——六日

於名古屋市八重小學校

古代手織木綿展觀

七日——十日

於銀座資生堂

涅槃圖特別陳列

十五日

於奈良帝室博物館

染織美術展覽會

十四日——十五日

於京都美術俱樂部

東洋古陶器展覽會

二十三日——二十五日

於水戸商工會議所

國寶内定寶物類展觀

二十五日

於文部省會議室

國寶保存會決議に依つて國寶に内定され

四月

圓覺寺開山遠諱記念展覽會

一日——七日

於鎌倉國寶館

圓覺寺開山佛光國師六百五十年の遠諱を記念して開催された。出品點數七十五點、繪畫には同寺累代の頂相の名作、虚空藏菩薩像、智吉祥釋迦像、宗淵筆跋陀婆羅像、道安筆鐘馗圖等の國寶、其の他祖師及び同寺關係の文書、題贊を有する畫蹟、遺物、稀觀の語録等が展觀された。

東洋古美術展覽會

二十二日——二十七日

於大阪松坂屋

佛教博覽會

十八日——四月三十日

於名古屋市覺王山

聖德太子奉讃博覽會

十六日——四月三十日

於大阪四天王寺

南鮮古陶展覽會

四日——六日

於大阪堂ビル清交社クラブ

岩永精之氏將來品

狩野山雪筆 細辻伊兵衛氏藏
向此の展覧に因んで四月六日東京科學博物館に於て左の講演が行はれた。

衣裳より見たる元祿の世界 齋藤 隆三氏

名作屏風畫の鑑賞 秋山 光夫氏

大楠公六百年祭記念展覽會 於大阪朝日會館

四日——大阪朝日新聞社主催

妙心寺名寶展覽會 於恩賜京都博物館

七日——二十五日

妙心寺一山の秘庫を搜羅して、本寺の寺基を定め給うた花園天皇の御影から、本坊子院の歴代緇流の頂相、檀越等の多數の肖像、諸師の筆蹟、遺物、古抄本及び各院の一般什物等が出陳され、目錄に依れば三百三十九點の多數に及んだ。其の主要なるものは、繪畫に於ては妙心寺本坊藏の前記御影、虛堂、大應、大燈等諸像、友松筆三酸及寒山拾得圖屏、中達磨左右豐干布袋圖、春浦院藏福富草紙、退藏院藏瓢鮎圖、龍泉庵藏等伯筆猿猴圖、春光院藏傳張平山筆東方朔圖、其の他國寶佛畫類等定評ある遺品を除いて左の諸畫蹟が擧げられる。

松源、運庵和尚像 紙本淡彩變幅

關山國師像 絹本着色 妙心寺本坊藏

豐臣兼九像 同 同

山水圖 紙本淡彩模四面 天授院藏

周德筆竹雀圖 紙本墨畫 退藏院藏

楊月筆渡宋天神圖 同 同

雪溪筆空山和尚像 絹本着色 春浦院藏

同筆 文溪和尚像 同 同

華嚴淨春女像 同 雜華院藏

涼岩受招信女像 同 同

竹洞筆 花鳥圖 絹本墨畫 同

同筆夏山沐雨圖 同 同

無因和尚像 絹本着色 龍安寺藏

以上畫蹟の外、天文十七年の奥書ある

靈雲禪院常住校割 一卷 靈雲院藏

觀應二年の年紀ある

玉鳳院御物目錄 一卷 妙心寺本坊藏

の如き、多くの資料を提供する文書類もあつた。

日本初期洋風版畫展覽會

十日——十五日 於數寄屋橋日動畫廊

御物館藏美術工藝品展覽會於奈良帝室博物館

十三日——五月二日、開館四十周年記念

東京帝室博物館御貸下げの御物及び同館

藏品を奈良に展觀されたもので、繪畫三十

五點、陶磁器九點、金工品十七點、漆藝品

二十三點、計八十四點が陳列された。

歷史と工藝展覽會 於滋賀縣物產陳列所

十三日——二十二日

寶聚院落慶特別展覽會 於醍醐寺寶聚院

十八日——三十日

醍醐寺寶物館「寶聚院」の落慶供養は四

月十八日營まれたが、之を機として同寺秘

寶の特別展觀が行はれた。宸翰、佛像、佛

畫、文書、器物等約六十三點、何れも寺寶

中の逸品であつた。左に繪畫及び彫刻の品目を掲げる。

過去現在因果經一卷 普賢延命菩薩畫像

大日金輪王畫像 焰魔天畫像

阿梨帝母畫像 六字經曼荼羅圖

尊勝曼荼羅圖 阿彌陀三尊畫像

地藏菩薩畫像 渡海文殊畫像

醍醐天皇宸影 五大尊畫像五幅

豐臣秀吉畫像 義演准后畫像

舞樂圖二曲屏一雙 調馬圖六曲屏一雙

法橋宗達

幔幕圖六曲屏生駒等

壽筆半雙

地藏菩薩立像

阿彌陀如來坐像

如意輪觀音半跏像

聖觀音立像

寧樂古美術品展覽會

十九日——二十三日

奈良時代藝術と下手物展覽會 於銀座資生堂

二十二日——二十五日

第二回國寶重要美術品展覽會於東京府美術館

廿四日——五月廿三日、報知新聞社主催

皇太子殿下御降誕を奉祝して報知新聞社

は昨春國寶重要美術品展覽會を開いたが、

今春亦その第二回を催した。國寶重要美術

品中の繪畫を各種各時代に互つて蒐め、昨

春の缺を補ひ新指定の作品を加へて出品點

數三百を超えた。目星しいものには、佛畫

に野山の佛涅槃圖を筆頭として東寺の十二

(以上繪畫)
吉祥天立像
焰魔天半跏像
大日如來坐像
(以上彫刻)

於日本橋高島屋

玉井久次郎氏鑑覽

於銀座資生堂

天及び兩界曼荼羅、龍光院の船中湧現觀音

高山寺の佛眼佛母等の名品を數へ、更に

上杉神社の毘沙門天を稀らしと觀、肖像畫

に普門院の動操像、一乘寺の高僧像、妙法

院の後白河天皇御像、長福寺の花園天皇御

像を擧げ得るが、繪卷足利期水墨畫等には

優品殆ど無く、近世に於ては先づ枿谷家の

大雅蕪村筆十便十宜圖、根津家の光琳筆燕

子花圖屏風等を擧ぐるに止まり、金剛寺の

應舉筆襖繪全部の展觀を稀らしと見る位で

あらう。支那畫に就いても同様で清涼寺の

十六羅漢、金地院、久遠寺の傳微宗筆山水

圖、天龍寺の雲門大師清涼法眼禪師像、南

禪寺の藥山李翱問答圖等を擧げる。

瓜哇將來東洋古陶磁展覽會 於上野松坂屋

二十五日——二十九日

大原氏所藏古書畫展觀 於大原美術館

二十七日——五月二日

如來寺寶物展觀 於福島縣石城郡如來寺

二十八日——三十日

五月

日本陶器と支那唐代金屬品展觀

一日——二十日 於白鶴美術館

伊達家々寶展覽會 於齋藤報恩會館

一日——三十一日

名古屋美術俱樂部創立三十年祝賀紀念展觀

九日——十一日 於名古屋美術俱樂部

肉筆浮世繪展覽會

十一日——二十六日

關西に於ける浮世繪蒐藏家として知られ

た松木、武岡、尼崎、池戸の諸氏を初めて

關西に於ける蒐集を基礎とし、之に少數な

がら關東方面の蒐集を加へた。帝室博物館

の長春筆婦女聞香圖、東京美術學校の春章

筆竹林七研圖、又は福原、梅原、吉川諸家

の舞妓圖の類である。出品數計八十三點。

史學會展觀 於麻布三井集會所

十二日

第三十六回史學會展觀として三井家珍襲

の諸史料が出陳された。點數三十八。特に

美術に關するものに就ては、書には元永本

古今集二卷、船首王後墓志銅板一枚、晉寫

と傳ふる蓮華方等經以下の燉煌出土寫經八

卷、並に大燈國師墨蹟一幅があり、繪には

梁楷筆雪景山水圖一幅、光起筆伊勢物語圖

二卷、傳師宣筆風俗繪卷一卷、聚樂第圖屏

風一隻、柳橋水車圖、並に宗達筆耕作圖各

屏風一雙等を數へた。三井家の藏棄は多く

未だ一般に展閱せられず、此の展觀に依つ

て得る所が尠くなかつた。

高野山靈寶館特別展觀 於高野山靈寶館

十五日——二十一日

友禪齋二百年祭友禪染展覽會

十五日——十九日 於石川縣商品陳列所

神護寺名寶展覽會 於恩賜京都博物館

十九日——三十一日

於恩賜京都博物館

從來屢々各寺院別の特別展觀を行つて來

た同館で、今次は神護寺名寶の特別展觀を

催した。神護寺はその沿革古く寺格の高き

に比して、中途に幾度か荒廢の悲運を閲し

てゐる爲に、その秘寶、資料の如きも豊富

とは云ひ難いが、而も繪畫には兩界曼荼羅

を始めとして、重盛、賴朝、文覺等の肖像

畫、十二天屏風等の優品あり、資料には種

々の古文書より、寺誌として注目すべき神

護寺諸堂記、神護寺略記、神護寺規模殊勝

之條條等あり又神護寺、高山寺繪圖の如き

は、斯種のものとして甚だ有名であり、概

ね寺寶を網羅し盡したかの觀があつた。た

ゞ彫刻の陳列が無かつたことは遺憾であつ

た。

烏居清長浮世繪展覽會 於日本橋高島屋

二十日——二十四日、浮世繪同好會主催

烏居清長歿後百二十一回忌に當る記念と

して催された。肉筆作品十六點、芝居番附

九點、繪本及び挿繪本百四十九點、古版本

三點の外、二百點に近い一枚刷版畫を陳列

し、總計三百五十五點の遺作品を集めた。

清長の作品をこれだけ一堂に展觀したこと

は空前の舉と云ふべく、陳列にも意を用ひ、

彼の研究には絶好の機會を提供されたもの

であつた。

郷土神祇展覽會 於大阪城天主閣

二十日——二十七日

時代錦繡展覽會 於日本美術協會

古 美 術

二十一日——二十五日、山中商會主催
神社史料展覽會 於神戸湊川神社寶物殿

廿四日——廿八日、兵庫縣神職會主催

六 月

東北帝大史學會展觀

於東北帝國大學

一日、二日

東北地方出土古瓦の展觀を兼ねて、雪村作遺品の陳列を催した。古瓦は奈良朝より平安朝に至る寺社其の他のもの數百點を、系統的分類的に配列し、併せて内藤政恒氏の講演があつた。雪村の遺品は左記の五點である。

官 女 圖 (津輕家傳來) 絹本着色

中村富次郎氏藏

竹 雀 圖 紙本水墨

益田 孝氏藏

月夜山水圖 (佐竹家傳來)

秋田 伊勢 傳一氏藏

鷹山水圖

紙本水墨六曲屏一雙

水戸 中村忠兵衛氏藏

神 農 圖

紙本水墨 會津森川善兵衛氏藏

別に多數の寫眞を陳列し、福井利吉郎教授の「東北人雪村」と題する講演があつた。

源氏物語繪卷展觀

於東京帝室博物館

一日——三日

侯爵徳川義親氏所藏源氏物語繪卷は、保存の萬全を期する爲に田中親美氏の手によつて分離改裝され、繪十五紙、詞二十八紙

通計四十三紙を各桐箱に納められることとなり、同時に田中氏の努力に依つて摸本が完成されたので、是等を併せて公開展觀されたのであつた。同繪卷は從來門外不出の秘寶、今後は徳川美術館に收められることとなつたが、原本は容易に鑑賞し得られざる事が豫想され、此の得難き機會を捉へんと集つた人々の爲に空前の難答を呈した。

八 月

東大寺法華堂特別開扉

於東大寺法華堂

十日

高野山靈寶館特別展觀

於高野山靈寶館

十五日——二十一日

九 月

善通寺大師奉讀展覽會

於神戸十合百貨店

九日——十二日

爲恭畫蹟展觀

於知恩院山内信重院

十一日、藤堂祐範氏主催

黃檗山名寶展覽會

於黃檗山萬福寺

二十一日——十月二十日

近衛家藏公遺墨展覽會

於恩賜京都博物館

二十四日——十月四日

豫樂院近衛家藏公が元文元年十月三日歿してより二百年忌に當る爲、公の遺墨及び遺愛品百四十餘點を展觀した。遺墨に國寶

の三時知恩寺阿彌陀經、佛國寺大圓廣慧禪師碑銘、大德寺法華經、同佛說教誡經を始として七歳の幼年より最晩年に至る約百點を蒐め、加ふるに國寶三時知恩寺藏、近衛家藏等の肖像より、流代草書、臺草篆篇等の著書と公の半生の心血を澆けりといふ大唐六典の校訂本、或は法帖の類、遺愛品として近衛家に傳はる國寶御堂關白記、兵範記以下の古文書、古書蹟類及び手澤の文房、茶器等に及んだ。就中公の口授に係り當時の美術史料として缺くべからざる槐記が、現存の諸傳本の殆ど總てを搜出されたことは欣快とする所であつた。

十 月

日本美術協會展覽會特別陳列

一日——二十日

於日本美術協會

同展覽會の恆例とする參考品陳列として光琳派門流の諸作を選んだ。光甫、始興、乾山等より何昂、芳中、以十、宗理、さては今日なほ問題裡に在る宗雪、相説の畫迹より芦舟、長洲、和年といふが如き稀なる作家に及び、なほ伊年印ある諸作品をも加へた。蓋し先年本會の琳派巨匠の展觀と相補うて見るべきものであらう。作品に就いて云へば、未だ廣く紹介せられざるものを主として多少玉石混淆を免れないが、特に始興畫を量質共に最とすべく、就中御物雜

畫屏風は金地雙六曲に方圓種々の型を區して雜畫を交へ描いたもので、尤も彼の手腕を窺ふべきであつた。出品畫六十餘點、會期半にして陳列替が行はれた。

三條實萬・實美兩公遺墨・遺愛品展覽會

五日——十五日

於恩賜京都博物館

桃山時代美術工藝展覽會

於大阪城天守閣

十五日——十一月十五日、大阪市主催

豐公生誕四百年を記念して開催された。

陳列作品は繪畫三十七點、工藝品三點、數に於て多しとしないが、繪畫の中單幅は僅に五點、其餘の大部は六曲屏に非ずば四面一聯の襖繪、宛として桃山時代障屏の大展覽會で、豐公生誕四百年記念の名に背かない。特に聚光院、法然院、普門院、妙蓮寺、良正院、德禪寺等の襖各一聯を出陳した如きは當事者の苦心の程も想察される。而して當代障屏の名品を集めるのが主であつたと思はれるだけ、左記數點の外は、幾度か展開の機會もあり得た多數の名作が集められた。

山樂筆帝鑑圖屏風 六曲一雙

藤村金之助氏藏

松鶴圖屏風 六曲一雙

宮崎半兵衛氏藏

傳永德筆源氏屏風二曲一雙 大林 義雄氏藏

同 雲龍圖屏風六曲一雙 山本 東作氏藏

このうち雲龍圖は畫格甚しく劣つて列品中の凡作、源氏屏風は曾て東京帝室博物館に陳列された桂宮傳來の源氏物語圖六曲屏と

一類の作で、何れも永徳とする傳稱は容易く信じ得ないとしても、其の一種の畫態は桃山繪畫の側面に示唆する所少からぬもの、また松鶴圖は韻致乏しく到底名手の跡なるを想像し得ないが、稍雲谷の筆趣をも交へて仄かに古體を見るあたり類品の多からぬ珍しい一遺品である。帝鑑圖は最近土居次義氏の發見を傳へたもので、山樂正筆と稱する二類の印影を見る。山樂正筆とすることは困難であるが、山樂繪を考へる上に重要な一遺品である。また別館天臨閣には豫て銅御殿の永徳として傳聞してゐた、

伊藤傳右衛門氏寄託の襖六十六枚の大陳列等があるが、大企畫の作ながら凡庸の遺品多く言ふべきでは無い。併し何れにするも在來此の種の大展開の殆ど試られなかつた此の地に、斯くまで多數の佳品が展觀されたことは最も特筆するに足る事であつた。山形縣郷土資料展覽會 於山形縣會議事堂 十七日——二十日

清朝六大家展覽會

十八日——二十二日

於銀座鳩居堂

朝鮮石刻工藝展

二十一日——二十七日

於芝公園五號地角

熱田神宮御遷座祭奉祝古武器鑑賞大會

廿六日——十一月三日 於新愛知新聞講堂

名作屏風繪卷特別展覽

二十六日——十一月十日

於東京帝室博物館

出陳作品は左の通り屏風七點、繪卷四點

であつた。

扇面屏風

二双

南禪寺藏

四季花鳥圖屏風

雪舟筆一雙

利爲氏藏

四季花鳥圖屏風

傳秋月筆一雙

侯爵 前田 利爲氏藏

鷹山水圖屏風

雪村筆一雙

武藤 金太氏藏

四季花鳥圖屏風

松榮筆一雙

池田 成彬氏藏

扇面散屏風

傳宗達筆一雙

原 邦造氏藏

扇面流屏風

同筆

大倉集古館藏

年中行事著座圖卷

傳信實筆一巻

前山 久吉氏藏

因幡堂藥師緣起

一巻

川田 正雄氏藏

山王靈驗記

傳寂濟筆一巻

侯爵 井上 三郎氏藏

星光寺緣起

傳光信筆一巻

子爵 內藤 政光氏藏

屏風の中では秋月及び松榮の兩四季花鳥圖が恐らく多くの史家の間に稍目新しい感を與へたものであらう。前者は容易に其の正筆と考へ得ないにしても秋月研究の一資料として其の價值を見るべく、後者はまた稍別種の意味に於て同様に考へられる。其の他は、雪村を除いてそれらの傳稱を信じ得ないとしても、何れも定評あるもの。繪卷では因幡堂藥師緣起の一巻が興味深く見られた。鎌倉末以上に時代を上げ得ないにしろ、尙人物は生彩を失ひ盡すに至らず、殊に自然描寫に一種の特徴を見る。何より

も其の焼損の甚だしいのが惜まれた。

亞歐堂田善作品展覽

於美術研究所

二十七日——二十八日

美術懇話會の展覧の爲に田善の郷土福島縣須賀川より齎した遺品を、美術研究所が公開展覧したものである。出陳數七十一點、須賀川の諸家藏の田善遺作を主とし、之に田善の家兄崑山、門人田一、田騏の遺品と神戸池長家藏の田善遺作等が加へられた。

十一月

時代工藝美術品展覽會

於日本橋高島屋

一日——五日

鎌倉國寶館繪卷特別陳列

於鎌倉國寶館

一日——七日

左の通り鎌倉古寺所藏の繪卷を集めて展覧した。其の中、長谷寺緣起（弘治三年の奥書あり）を除けば何れも瞞目の機會多く親しき繪卷であるが、斯く一堂に集め全卷を展いて同時に觀覽に供されたことは研究者に幸であつた。

當麻曼茶羅緣起 二卷

光明寺藏

淨土五祖繪傳 一卷

同

頼焼阿彌陀緣起 二卷

光觸寺藏

長谷寺緣起 二卷

長谷寺藏

歐亞古美術展覽會

於日本美術協會

一日——十日

浮世繪肉筆劇畫特別展覽會

於演劇博物館

一日——十日

本阿彌光悅展覽會

於恩賜京都博物館

一日——十五日

光悅の遺墨四十九點、尺牘十三點、遺作品二十九點、參考品十四點、其の他光甫、日允、素庵等の遺品十數點等、通じて百二十點許が出陳された。遺墨のうち下繪を除いて繪畫として數ふべきは左記三點である。和歌散書月秋草圖 八曲小屏一隻

白兔秋草圖扇面 一幅 帝室博物館藏

竹 圖 六曲屏一隻 村山 長舉氏藏

是等の畫蹟が何れも容易に光悅其の人の跡と考へ得ないことは、既に定説のある所で今更めて云ふべくもないが、其の他多數の書蹟に至つても是れこそ紛ふ方なき光悅として品鑑し得るものは寥々として僅に本法寺の法華題目抄、妙蓮寺の立正安國論等を除けば、漸く大原孫三郎氏藏蓮花下繪歌卷斷片がそれかと思はれる程であつた。ただ會期半に至つて團家、益田家の定評ある名品が出品されこゝにこそ遺憾なく光悅の風貌を忍ぶことが出来ると思はせた。

高野山靈寶館特別展觀

於高野山靈寶館

一日——三十日

十三松堂藏品展觀

於東京美術學校

四日——九日、正木記念館開館記念

十一月一日正木記念館開館式が舉行されたのを機會として、同記念館及び隣接する同校陳列館階上に正木直彦氏の蒐藏品を陳

列展觀した。書蹟、繪畫、造象、典籍、兩

印、鏡鑑、几案、古硯、筆墨刀子、書鎮、

香爐、香合、壺、花入、釜爐、水指、水瓶

茶入、茶盤、酒器、鉢皿、雜、總計三百三十三點。

光悅三百年忌記念大茶會

於京都光悅寺

十一日——十三日

支那古美術展覽會

於大阪美術俱樂部

十三日——十五日、山中商會主催

時代能面衣裳展覽會

於日本橋高島屋

十三日——十七日

法恩寺國寶展觀

於埼玉縣入間郡法恩寺

十七日

時代民藝品石燈籠展覽會

於日本美術協會

二十六日——三十日

國華社講演及展觀

於麻布國華社

三十日

朝鮮古美術展覽會

於大阪松坂屋

三十日——十二月五日

十二月

菊池容齋作品畫稿展觀

於美術研究所

二日

大津繪展觀

於大阪三越

七日、五月菰三浦直介氏蒐集

岡部・下村・香取諸氏收藏品陳列

於東京美術學校

九日

菊池惺堂舊藏書畫展覽會

於東京美術俱樂部

十九日——二十一日

東京帝室博物館各月陳列替

特別展観ハ展覽會一覽参照

一月

十六羅漢圖(國寶)

鎌倉

絹本著色
十六幅ノ中

禪林寺

十六羅漢圖

同

絹本著色
十幅ノ中

本館

西行物語繪卷摸本 住吉具慶筆

同

一 卷

同

西行物語繪卷摸本 狩野養信筆

同

同

同

瀟湘八景圖屏風 秀峰筆

足利

一 紙本墨畫
雙畫

同

山水圖屏風 海北友松筆

桃山

一 紙本墨畫
雙畫

同

牧童花鳥圖 狩野探幽筆

徳川

三 紙本墨畫
幅畫

同

福祿壽牡丹芙蓉圖 狩野尚信筆

同

三 絹本淡彩
幅彩

同

維摩花鳥圖 狩野安信筆

同

三 絹本墨畫
幅畫

同

布袋蘆雁芙蓉圖 狩野益信筆

同

三 紙本墨畫
幅畫

同

雜畫卷 天真法親王御筆

同

一 絹本著色
卷色

同

金泥繪色紙帖 歌、傳近衛信尋筆

同

紙本一帖

同

葛梅金銀泥繪 隆達節、傳角倉素庵筆

同

同

同

小松引圖 歌川豐廣筆

同

一 紙本著色
幅色

同

武家道中圖 安藤廣重筆

同

一 絹本著色
幅色

同

富嶽圖 安藤廣重筆

同

同

同

官女羽根遊圖 高嵩谷筆

同

同

同

二月

萬歲圖 宮川長春筆

徳川

一 絹本著色
幅色

本館

乘鶴美人圖 宮川長春筆

同

同

同

羽根突圖 田村水鷗筆

同

一 紙本著色
幅色

同

梅下婦女圖 科混堂筆

同

同

同

双六遊圖 傳梅祐軒勝信筆

同

同

同

山水圖 祇園南海筆

徳川

一 紙本淡彩
幅彩

本館

墨竹圖 池野大雅筆

同

一 紙本墨畫
幅畫

同

墨梅圖 田能村竹田筆

同

一 絹本墨畫
幅畫

同

寒江獨釣圖 僧雲室筆

同

一 紙本墨畫
紙畫

同

蜀棧道圖 橫井金谷筆

同

一 絹本淡彩
幅彩

同

高林秋寺圖 岡田半江筆

同

一 紙本淡彩
幅彩

同

風雨山水圖 帆足杏雨筆

同

一 絹本淡彩
幅彩

同

竹圖 佐竹遂平筆

同

二 絹本淡彩
幅彩

同

十六羅漢圖帖 藤本鐵石筆

同

一 絹本淡彩
幅彩

同

山水人物花鳥畫帖 諸家筆

同

絹本墨畫及
淡彩一帖

同

花鳥圖屏風 僧伏山筆

同

一 絹本著色
雙色

同

四季山水圖屏風

同

一 紙本淡彩
雙彩

同

三月

古美術

八月

養老瀧圖 田中訥言筆

同

淺妻船圖 浮田一蕙筆

同

大江基定讀和歌圖 冷泉爲恭筆

同

公忠歌意圖 同

同

蟬丸圖 同

同

源氏初音胡蝶圖 板谷桂舟筆

同

閑居圖 高久隆古筆

同

花宴雪見圖 守住貫魚筆

同

花鳥雜畫帖 土佐光則筆

同

光格天皇策命使畫卷 冷泉爲恭筆

同

羅漢畫(國寶)

藤原

羅漢畫

同

羅漢畫(國寶)

鎌倉

山水圖屏風 傳雲谷等顏筆

桃山

花鳥圖屏風 曾我二直庵筆

德川

醍醐寺粉本

同

蝦蟇鐵拐圖屏風 曾我蕭白筆

德川

四季花鳥屏風 柴田是真筆

同

墨畫山水襖繪 橋本雅邦筆

明治

絹本著色

清野暢一郎氏

絹本著色

同

絹本著色

本館

絹本著色

清野暢一郎氏

絹本著色

同

絹本著色

本館

絹本著色

同

絹本著色

同

紙本著色

同

紙本著色

同

紙本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

寫生畫卷 狩野探幽筆

德川

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

絹本著色

同

本館

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

九月、十月

德川

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

二紙本著色

本館

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

本館

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

山水圖 野呂介石筆

德川

絹本淡彩幅

本館

山水圖 僧愛石筆

同

紙本墨畫幅

同

車爭圖屏風(國寶) 狩野山樂筆
歌舞妓圖屏風

桃山

紙本著色二曲一隻

九條公爵家

清明上河圖 眞覺題書

支那明

絹本著色卷

同

雲龍圖屏風(國寶) 圓山應舉筆

德川

紙本墨畫金彩六曲一隻

觀智院

山水樓閣人物畫帖 王雲筆

支那清

絹本著色帖

同

牛圖屏風 森徹山筆

同

銀地著色四曲一隻

本館

四季花鳥圖卷 酒井抱一筆

同

絹本著色卷

同

十一月、十二月

地藏菩薩像圖(國寶)

藤原

絹本著色幅

知恩院

不動明王像圖(國寶)

同

同

曼殊院

釋迦如來像圖(國寶)

同

同

神護寺

普賢菩薩像圖

同

同

本館

普賢延命像圖(國寶)

同

同

松尾寺

不動明王像圖(國寶)

同

同

甚目寺

愛染明王像圖(國寶)

同

同

寶善提院

虛空藏菩薩像圖

同

同

本館

竹齋讀書幅 周文筆

足利

紙本淡彩幅

同

山水圖 傳周文筆

同

同

同

破墨山水圖 雪舟筆

同

紙本墨畫幅

同

墨梅圖 雪舟筆

同

同

同

鷺鷥圖 單庵筆

同

同

同

鶉圖 性曉筆

同

紙本淡彩幅

同

花鳥圖 文茶筆

同

紙本著色幅

同

靈昭女圖 圭叱齋筆

同

紙本著色幅

同

渡唐天神像圖

同

紙本著色幅

同

密獸戲畫卷(國寶)

藤原

紙本墨畫四卷/內二卷

高山寺

古美術關係彙報

三月

一月

御物整理の完成

御物調査委員會は大正十三年以降皇室御所藏の圖書、刀劍、美術工藝品及歴史風俗資料等に就て御物に編入すべきものを選定中であつたが、漸く約七千點を決定、勅裁を経て御物臺帳に記入することとなり、明治維新以來の御物整理は漸く完成を告げた。

二月

寺院修築費御下賜

天皇陛下には昭和九年關西大風水害に際し被害を受けた名利竝に皇室と御關係深き寺院に修築費御補助として御内帑金を御下賜遊ばされる旨二十八日御沙汰があつた。右御下賜金拜受の寺院は左の通りである。

〔京都〕妙法院、曼殊院、三寶院、勸修寺、知恩院、東本願寺、西本願寺、興正寺、青蓮院、聖護院、仁和寺、大覺寺、隨心院、佛光寺、雲龍院、三千院、毘沙門堂、實相院、大聖寺、寶鏡寺、清淨華院、靈鑑寺、曼華院、林丘寺、光照院、水藥師寺、廬山寺、靈源寺、〔滋賀〕圓滿院、〔大阪〕四天王寺。

四天王寺の發掘

大阪四天王寺では、去

る一月十七日天沼博士立會の下に昨秋颯風で倒壊した仁王門基壇下の發掘調査を行つた所、略創建當初のものと推定される大鷲尾の破片十三個を發見し學界に貴重な資料を提供したが、三月十一日更に五重塔址より創建當時のものと推定す可き大礎石を發掘した。此は直徑約六尺、厚さ約三尺の自然石の表面を平にしたもので、中央部には塔の中心柱の痕と思はれる直徑三尺七寸五分の圓形輪廓が刻み込まれてある。尙、同礎石の表面に竝ぶ小石の間から純金製素環が發見された。

奈良帝室博物館長更迭

宮内省では此度

未決定の御陵墓、古墳などの考證調査の爲諸陵寮に考證官の制を新設したが、初代考證官に奈良帝室博物館長心得和田軍一氏が任命され、その後任として山口巍氏が奈良帝室博物館長に任ぜられた旨三月廿八日發表された。

四月

帝室博物館の上棟式

東京帝室博物館の

復興工事は、昭和七年末より大林組で基礎及主體工事を施行中であつたが、此の程鐵骨組立を完了したので、徳川家達公を會長とする

帝室博物館復興翼賛會主催の下に、四月一日盛大な上棟式を舉行した。

春日神社寶物館落成

官幣大社春日神社

が豫てより七萬圓の工費を掛けて其の境内に工事中であつた寶物館は、愈々竣成して四月一日開館式を舉げた。今後當社所藏の數多の國寶、什寶を本館に收容一般の觀覽に供することとなつた。

醍醐寺寶聚院の落慶法要

醍醐天皇一千

年御忌奉贊會の記念事業として、昭和六年三月以來醍醐寺の境内に工事中であつた醍醐寺寶聚院寶聚院は、昨年漸く竣成したがその落慶法要が四月十七日盛大に營まれた。尙、之を機として同館内に同寺秘寶の特別展觀が四月末日迄行はれ、國寶、寺寶の宸翰、佛像、佛畫、文書、記錄、器物等約六十三點が出陳された。（觀覽施設の項參照）

正倉院御開封

滿洲國皇帝陛下は四月二

十日奈良市に成らせられ、特に御開扉の正倉院を御覽になつた。

漢樂浪郡治址の發掘

朝鮮平安南道大同

郡大同江面土城里に於ける推定漢樂浪郡治址の第一回の調査が、朝鮮古蹟研究會平壤研究所の事業の一として同所研究員原田淑人氏に依り、四月九日より同月卅日迄行はれた。そ

の結果、幅約四米、長さ約四十米に互り一面に長方形の石材を竝べた歩道の遺址と推定されるもの、及び其の附近に長さ約十米幅約四米を遺存する建築物の遺構の一部を發掘し、その他漢式銅鼎、瓦當、土器、銅鏃等の多數の發掘品に加ふるに「不而左尉」、又「提奚長邦」の文字を押印せる封泥、「樂浪禮官」の瓦當殘片等を發見して學界に幾多重要な資料を提供した。

五月

矢代幸雄氏渡英 東京美術學校教授矢代

幸雄氏は國際文化振興會より派遣されて英國の各大學に日本美術の講演をなす爲、五月二十日シベリア經由で出立した。同氏は平家嚴島納經の摹造品を始め、多數の國寶竝に現代日本畫家の作品の複製を携行し、英國各地で半箇年に互り講演を行ふこととなつた。

日滿文化協會第二回評議員會 日滿文化

協會の第二回評議員會が五月三十一日奉天に於て開催され、日本側からは副會長岡部長景子爵を始め白鳥倉吉、伊東忠太、關野貞、市村瓚次郎、池内宏、原田淑人、濱田耕作、羽田亨氏等の學者が出席し、主として熱河離宮及八大寺の修理具體化の問題等が評議された。尙、一同は六月一日奉天の國立博物館の開館式に列席した。(大朝五・二九に據る)

六月

大和島の庄石舞臺發掘 奈良縣大和島の

庄石舞臺古墳は、昭和八年から九年にかけて京都帝大文學部考古學教室が日本學術振興會の援助により石室の清掃を行つたが、本年度は奈良縣史蹟調査の事業として、濱田耕作博士が主査となり同大學考古學教室が縣と共同で、四月六日より六月二日迄二箇月に互り發掘を行つた所、該古墳が外濠を有する上圓下方墳である確證を發見、貴重な研究資料を學界に提供した。

東照宮橋流失 滋賀縣坂本の國寶建造物

東照宮橋は、豪雨のため遂に六月三十日流失した。

七月

東京帝國大學名譽教授工學博士關野貞氏は

病氣の爲、東京帝大病院島蘭内科に入院治療中の所、二十九日午後九時二十分逝去した。享年六十九。(物故美術家及美術關係者の項參照)

藤原期佛像發見 奈良縣吉野川上郷高原

區福源寺に於て「應徳二年十一月」の胎内墨書銘ある藥師如來坐像(高四尺三寸)と、同時代と見られる觀音菩薩坐像(高三尺三寸)

とが發見された。七月一日吉野郡教育會の依頼で高田十郎氏が同區の「あかすの倉」と呼ばれる寶藏を調査に赴いた際、同寺に立寄つて發見したものである。尙右寶藏には足利時代書寫の大般若經初め足利徳川に互る多數の古文書其の他が秘藏されてゐることである。(大毎七・九に據る)

八月

四天王寺金堂修理竣成 京都帝大教授天

沼俊一博士監督の下に修理中であつた大阪四天王寺金堂は、此程其の補強工事を竣へ、八月三日盛大な落慶法要を行つたが、屋根は蓮瓣模様の赤銅瓦で葺き替へ、又新に鴟尾を取附ける等見違へるやうに美裝された。

嵯峨天皇宸影を獻上 八月十五日歸朝し

た武者小路駐獨大使は、ヒトラ一總統より我が天皇陛下に獻上される「嵯峨天皇宸影」を捧持して歸つた。此の御尊影は巨勢金岡或は小野篁の筆と傳へられ(但し時代は其より遙に下るものと思はれる)、嵯峨大覺寺の寶物であつたが、明治二十九年來朝した現ベルリン國立東洋博物館長キュンメル氏が骨董屋から買取り、爾來同博物館の所藏となつてゐたものである。

九月

樂浪遺跡の發掘

朝鮮古蹟研究會平壤研究所の昭和十年度に於ける漢樂浪郡時代遺跡の發掘事業は、引き続き日本學術振興會の援助金を受けて九月一日より十一月月上旬迄實施された。調査の機構其の他は前年度と異なる所なく、藤田亮策氏の計畫統一の下に小場恒吉氏調査主任となり、昭和六年以降繼續の當代古墳の調査、即ち小場、梅原兩研究員の埴原墳、木柳墳の發掘に加ふるに、前年度新たに原田淑人氏に依りて着手せられ、重要な發見のあつた土城址の發掘が土城調査班(駒井、瀧、田窪、野守の諸氏)に依り續行されたが、木柳墳は盜掘を免れたものであり、その構造と内容とは漢代墓制の研究に新資料を提供、埴原墳は孰れも漢代工藝を徵證する多數の副葬品を殘存して、埴原墳の年代性質の考察上にも重要な示唆を與へた。土城の調査は前回發見の建築遺址の發掘を續け、漢代に於ける建築、土木の究明に一步を進め、尙、樂浪大尹章の文字を押印せる封泥、其の他多數の實用瓦器の類と發掘した。調査を實施せるは左の通りである。

石巖里二五五號墳、同二五七號墳、貞柏里四號墳、南井里五三號墳、道濟里五〇號墳、土城址

原田次郎氏渡米

東京帝國博物館囑託原田次郎氏は、日本古美術紹介を目的として國際文化振興會から派遣され九月五日渡米した

が、約一年の豫定で米國各地の大學に於て講演を行ふ筈である。

英國國際支那美術展に我が國より出品

英國皇帝戴冠二十五週年奉祝の爲、ロイヤルアカデミー主催國際支那美術展覽會が、十一月二十八日より來春三月七日までロンドンに開かれることとなり、同委員會から我が國の所藏家にも参加出品を依頼して來た。之には種々困難な事情があつて一時不可能かと見られたが、其の後日英協會が主となつて外務、文部當局も贊助し、國際文化振興會も協力して参加に努力した結果、皇室よりに特に御物「麟蓋」の御貸下を賜はり、帝室博物館、朝鮮總督府博物館、京都帝國大學、東京美術學校、其の他個人所藏家より合計四十八點の繪畫、彫刻及工藝品等が出品されることとなつた。其の中主要美術品は八點で、其の海外搬出に就ては九月十日重要美術品等調査委員會で可決され、是等の出品は同十五日横濱解纜の靖國丸でロンドンに向け發送された。

ワリーマンハー並溝古墳壁畫の撮影

去る七月下旬、東方文化學院の竹島卓一氏、座右寶刊行會の齋藤菊太郎氏、奉天醫大の黒田源次博士の一行は日滿文化協會より派遣されて、興安嶺の山中ワリーマンハーにある遼時代の皇帝陵墓の壁畫撮影に向つたが、同地には遼の三帝の陵墓が遺存し、其のうち中

陵及西陵は崩壊或は浸水して居るので、東陵内に於て約二箇月を要して約一千枚の寫眞撮影に成功した。一行は更に滿洲國文教部の依頼に依り十月初旬高句麗の舊都安東省通溝(別名輯安縣)に赴き、本年五月伊東伊八氏が發見した舞踊塚、角抵塚の古墳壁畫の撮影を行つた。尙、九月下旬池内宏、濱田耕作の二博士は同月二十三日の朝鮮古蹟保存會の終了後藤田亮策、梅原末治、小場恒吉の諸氏と共に通溝附近の古墳調査に赴いたが、その節羊魚頭に於て又新たに伊東伊八氏に依り文字塚、環紋塚の發見が爲され、更に少し遅れて東崗に於て四神塚が發見されたが、此等は何れも前記撮影隊に依つて撮影された。

十一月

朝鮮の寶物修理

朝鮮總督府では寶物に指定された古建築物の維持修理を行ふことになり、本年度及明年度に於て實施すべきものを決定した。主なるものは左の通りである。

水原滄龍門及附屬城壁、平壤大同門、平壤普通門、無爲寺極樂殿、清平寺極樂殿、益山王宮里石塔、昌林寺三層石塔、獅子頻迅寺石塔、安東東部洞五層壁塔、深源寺普光殿(天朝、朝鮮西北版一・七に據る)

徳川美術館開館

侯爵徳川義親氏の寄附による財團法人尾張徳川黎明會の事業の一と

して、豫てより名古屋市東區徳川町に建設中であつた財団法人尾張徳川黎明會美術館（略稱徳川美術館）が竣成し、十一月十日開館式を挙げた。同館は今後尾張徳川家傳來の數多の什寶美術品を永久に保存すると共に、學者並に一般の研究觀賞に供せんとするものである。尙開館に際し、繪畫、陶磁、漆器、能衣裝、武器、刀劍、文房具等を展觀したが、就中、牧溪筆虎圖、所翁筆雲龍圖、源氏初音の卷時繪調度品等は注目を惹いた。（觀覽施設の項参照）

羅振玉氏湯島聖堂に古銅器を寄贈 滿洲國監察院長羅振玉氏は、今春落成式を挙げた湯島聖堂に對して祝意を表する爲、愛玩の古銅器五個を我が外務省を通じて寄贈した。其の品目は左の通りである。

商父發鼎、商甲父癸、商具會彫紋鼎、商史觚、商彫文單（大朝滿洲版一・一七に據る）

故關野貞博士記念碑除幕式 樂浪文化研究の恩人故關野貞博士の記念碑除幕式が朝鮮大同郡大同江面土城里で舉行された。式場には平壤府尹始め道、府會議員及樂浪研究會、名勝保存會等の樂浪關係者が多數列席、博士の令嗣克氏の手により府尹筆「關野博士永思碑」の除幕を行つた。（京城日報一一・二二に據る）

正倉院曝涼 正倉院の曝涼は十月十八日より十一月十六日迄行はれ、十一月三日から十二日迄の十日間例年の如く有資格者に拜觀を許された。

藤原京の發掘經過 奈良縣高市郡鴨公村

大宮堂附近に於ける推定藤原宮址の發掘は、日本古文化研究所の足立康博士が主査となり本年一月より開始されたが、先づ大宮土壇東方の鴨公小學校々庭の發掘に着手し、三月末日迄に正面七間側面四間の堂址と推定されるものが判明、次に四月初旬大宮土壇の發掘に着手し、七間四間の堂址が判明、暑中更に廻廊址の探究に當つた結果、東方の殿堂の北側面の邊より廻廊が北走し、約十二丈餘の所で西へ折れ、約十五丈の邊に北門址と推定されるものが發見されるに至つた。以上の發掘の結果、此の地を以つて藤原宮址と爲す從來の説は頗る有力なるものとなつた。奈良縣當局は發掘地域附近の史蹟としての重要性に鑑み十一月下旬發掘現場附近の史蹟假指定を行つた。

法隆寺保存工事昭和十年度經過 法隆寺

保存工事は昭和九年より年額約十二萬圓の豫算を以て着手し、十年三月末の第一年度に於て食堂、細殿、東大門の工事を竣へたが、十年度に於ては東院禮堂を七月に、東院鐘樓を八月に竣工し、目下西圓堂及大講堂を十一年に掛けて工事中である。尙、東院禮堂は工事

中に於て前建物の柱根を發掘して大いに學界の問題となり、又其工事に於て多少古の規模に復原された。更に十年度に於て金堂壁畫保存の準備工作として、壁畫十二面の原寸大の撮影を八月より京都便利堂の手に依り行つたが昭和十年度中に全部完了した。

國寶及重要美術品

昭和十年國寶指定

文部省告示第百七十二號 昭和十年四月三十日

種類	品名	員數	所有者住所及氏名
典籍	紙本墨書是法非法經 〔天平十二年三月十五日藤原夫人願經〕 〔元興寺印〕ノ朱印アリ	一卷	東京府東京市錦町區 平河町二丁目 安田善次郎
同上	紙本墨書黑氏梵志經 〔天平十二年三月十五日藤原夫人願經〕 〔元興寺印〕ノ朱印アリ	一卷	同 人
同上	紙本墨書註楞伽經卷第二、第六 〔天平十二年五月一日光明皇后願經〕 〔天平十二年勝寶七年新トアリ〕	二卷	同 人
同上	紙本墨書般若心經 〔天平十二年三月十五日藤原夫人願經〕 〔元興寺印〕ノ朱印アリ	一卷	同 人
同上	紙本墨書增壹阿含經卷第四十九 〔善光ノ朱印アリ〕	一卷	同 人
同上	紙本墨書中心經 〔善光ノ朱印アリ〕	一卷	同 人
同上	紙本墨書瑜伽師地論卷第七十八 〔神護景雲元年九月五日信願經〕 〔法隆寺一切經〕ノ墨印アリ	一卷	同 人
同上	紙本墨書法華經五百弟子受記品	一卷	同 人
同上	紙本墨書四輩經	一卷	同 人
同上	紙本墨書法華經卷第三 〔興二藤原家經トアリ〕	一卷	同 人
同上	紙本墨書金光明最勝王經自卷第三 〔至第五〕	一卷	同 人
同上	紙本墨書根本說一切有部毗奈耶尼陀 那目得伽攝頌 〔大唐景龍四年四月十五日ノ譯場列位アリ〕	一卷	同 人
同上	紙本墨書在家人布薩法卷第七 〔東大寺印〕ノ朱印アリ	一卷	同 人
同上	白描繪料紙墨書金光明經卷第四斷簡	一卷	同 人
同上	金銀泥繪料紙墨書法華經方便品 〔寛永丁卯孟春日昭乘ノ跋アリ〕	一卷	同 人
同上	紙本墨書穀類抄 〔保元元年七月廿五日書寫ノ奥書アリ〕	一卷	同 安田善次郎
同上	紙本墨書兼輔集斷簡	一卷	同 同 人
同上	紙本墨書和歌體十種殘卷	一卷	同 同 人
彫刻	木造胎藏界八葉院曼荼羅刻出籠 〔寶壽藏經〕	一基	同 同 人
繪畫	紙本著色華嚴五十五所繪卷 〔寶壽藏經〕	一幅	同 同 人
刀劍	太刀銘國行	一口	同 二丁目三松方 赤星鐵馬
繪畫	紙本著色三十六歌仙 〔念等〕 〔佐竹家傳來〕	一幅	同 富士見町二丁目 原安三郎
同上	紙本著色三十六歌仙 〔朝忠〕 〔佐竹家傳來〕	一幅	同 下二番町 男爵大倉喜七郎
刀劍	太刀銘正恒	一口	同 元園町二丁目 加藤正治
繪畫	絹本著色蓮池水禽圖 〔德謙〕ノ款印アリ	二幅	同 日本橋區駿河町 三井合名會社
同上	紙本著色三十六歌仙 〔是則〕 〔佐竹家傳來〕	一幅	同 通三丁目 津村重舍
同上	紙本墨畫西湖圖 〔弘治九年閏三月十三日ノ年記アリ〕	一幅	同 芝區白金三丁目 島山一清
典籍	紙本墨書今鏡 〔新世繼〕	二十三帖	同 同 人
書蹟	紙本墨書南楚師說墨蹟 〔至正二年秋〕	一幅	同 同 人
繪畫	絹本著色豐臣秀吉像 〔慶長四年二月十八日承兌ノ賛アリ〕	一幅	同 白金三丁目 侯爵伊達宗彰
同上	紙本著色三十六歌仙 〔家持〕 〔佐竹家傳來〕	一幅	同 青手町 岩原謙三
典籍	紙本墨書文選集注卷第五十六	一卷	同 高輪南町 伯爵渡邊昭
繪畫	絹本著色道宣律師像	一幅	同 男爵 森村市左衛門
彫刻	木造増長天立像	一軀	同 麻布區永坂町 池田成彬
繪畫	紙本著色弘法大師繪傳	一卷	同 同 人
典籍	白描繪料紙墨書金光明經卷第二斷簡	一卷	同 同 人
文書	紙本墨書造東大寺司請經牒 〔天平勝寶七歲四月廿一日〕	一卷	同 廣尾町 小泉策太郎
繪畫	紙本著色三十六歌仙 〔伊勢〕 〔佐竹家傳來〕	一幅	同 飯倉片町 有賀長文

彫 刻

木造阿彌陀如來立像

頭部内面二正嘉三年三月廿四日本造華工
匠永仙ノ銘アリ一軀 東京市赤坂區表町三丁目
高橋 是清

同 上

銅造觀音菩薩立像

一軀 同 青山北町六丁目
石原 俊明

刀 劍

太刀銘一

一口 同 丹後町
子爵 岡部 長景

工 藝

陶製色繪若松文様茶壺野々村仁清作

一口 同 新坂町
山本 糸太郎

刀 劍

太刀銘安家

一口 同 福吉町
黒田 長成

典 籍

紙本墨書文選

卷第二十殘卷
承安二年安倍宗元書寫ノ
奥書アリ廿五卷 同
公爵 九條 道秀

紙本墨書文選

卷第二十斷簡
弘安三年授説ノ奥書アリ

同 上 太刀銘吉平

紙本墨書文選

卷第二十九殘卷
正應二年書寫ノ奥書アリ同 上 太刀銘吉房
附海軍長劍希

紙本墨書文選

卷第一、第二、第三、第四、
第七、第十、第十一、第十二、第
十三、第十四、第十五、第二十
六、第十八、第廿一、第廿二、同 上 絹本著色細川澄元像
永正四年十月吉日周麟ノ賛アリ

紙本墨書文選

卷第二十九殘卷
正應二年書寫ノ奥書アリ同 上 絹本著色桶公快兒圖狩野探幽筆 朱壽木賛
同 寶共二寛文十年ノ年記アリ

紙本墨書文選

卷第二十斷簡
弘安三年授説ノ奥書アリ

同 上 太刀銘吉平

紙本墨書文選

卷第二十斷簡
弘安三年授説ノ奥書アリ

同 上 太刀銘吉平

紙本墨書文選

卷第二十斷簡
弘安三年授説ノ奥書アリ

同 上 太刀銘吉平

紙本墨書文選

卷第二十斷簡
弘安三年授説ノ奥書アリ

同 上 太刀銘吉平

紙本墨書文選

卷第二十斷簡
弘安三年授説ノ奥書アリ

同 上 太刀銘吉平

紙本墨書文選

卷第二十斷簡
弘安三年授説ノ奥書アリ

同 上 太刀銘吉平

紙本墨書文選

卷第二十斷簡
弘安三年授説ノ奥書アリ

同 上 太刀銘吉平

紙本墨書文選

卷第二十斷簡
弘安三年授説ノ奥書アリ

同 上 太刀銘吉平

同 上

螺細木兎鞍

一脊 侯爵 細川 護立

文 書

紙本墨書近江國司解(天平十八年
七月十一日)一幅 東京市雜司ヶ谷町
保坂 潤治

典 籍

紙本墨書大般若經卷第九十五
(池上内親王御願經)
長寛二年相慶修理ノ奥書アリ

一卷 同

同 上

紙本墨書蒙求殘卷
長承三年十二月二十七日僧琳梵ノ奥書アリ

一卷 同

同 上

紙本墨書文選集注卷第十六殘卷

一卷 同

同 上

紙本墨書白氏文集(卷第四十殘卷
(金澤文库本))

一卷 同

文 書

紙本墨書藤原俊成假名消息
紙背二願文アリ

一幅 同

書 蹟

紙本墨書慈圓僧正懷紙

一幅 同

刀 劍

太刀銘鹿慶

一口 同 本郷區渡砂町
小山田 信勝

同 上

太刀銘吉平

一口 同 下谷區東墨門町
本阿彌 光遜

同 上

太刀銘吉房
附海軍長劍希一口 同 谷中清水町
子爵 大河内 正敏

彫 刻

木造地藏菩薩立像
頭部内面二建武元年三月十五日南都大佛師法
源康成ノ銘アリ後内二建武元年ノ記アル結縁
交名記及佛等アリ一軀 同 品川區北品川三丁目
原 邦 造

繪 畫

絹本著色細川澄元像
永正四年十月吉日周麟ノ賛アリ一幅 同 目黒區駒場町
侯爵 前田 利爲

同 上

絹本著色桶公快兒圖狩野探幽筆 朱壽木賛
同 寶共二寛文十年ノ年記アリ

一幅 同

典 籍

紙本墨書
北山抄

十二卷 同 人

卷第一 建治二年校合ノ奥書アリ
 卷第二 瑞裏ニ以松本校合(原基廣)トアリ
 卷第三 傳公任筆
 卷第四 承保三年書寫校合ノ奥書アリ
 卷第五 瑞裏ニ以松本校合トアリ
 卷第六 瑞裏ニ以松本校合了時光トアリ
 卷第七 瑞裏ニ以松本校合了トアリ
 卷第八 承保三年書寫校合ノ奥書アリ
 卷第九 瑞裏ニ以松本校合(後廣)トアリ

同上 紙本墨書毛詩卷第十五、第十八
 卷第十五ニ應安七年二月十七日唐橋在貴ノ奥
 書アリ
 刀 劍 太刀銘助直
 繪 畫 紙本墨畫蘆雁圖(六曲屏
 傳宮本武藏
 工 藝 螺鈿時雨鞍
 一脊 同 人
 一雙 同 松谷 豐次郎
 一口 同 牛込區矢來町
 同 小石川區高田老松町
 同 細川 護立

典籍	紙本墨書政事要略 <small>(卷第十九、第六十、第六十六、第六十</small>
----	--

典籍	紙本墨書一字蓮臺法華經 <small>（如來神力品）</small>	二卷	守屋孝藏	繪畫	紙本著色三十六歌仙 <small>（兼盛）</small>	一幅	京都市堺町通四條東入九立賣中之町土橋嘉兵衛
同上	紙本墨書太上業報因緣經 <small>（教觀出士）</small>	一卷	同 人	典籍	紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集斷簡 <small>（廣澤切）</small>	一幅	同 東山區栗田口町青蓮院
工藝	鐸馬具類 日向西郡原古墳出土	一揃	同 人	同上	紙本墨書伏見天皇宸翰寶篋印陀羅尼經	一卷	同 同
文書	紙本墨書後伏見天皇宸翰御消息 <small>（文保元年八月二日）</small>	一幅	京都市中京區寺町通姉小路 上ル下本能寺前町熊谷直之	文書	紙本墨書光嚴院宸翰御消息 <small>（十一月五日）</small>	一幅	同 同
同上	紙本墨書後伏見天皇宸翰御願文 <small>（元弘元年八月廿六日）</small>	一幅	同 人	典籍	紙本墨書後崇光院御筆新續古今集卷下 <small>（嘉吉三年九月二日御校合ノ奥書アリ）</small>	一帖	同 同
同上	紙本墨書光嚴院宸翰御置文 <small>（康永二年四月十三日）</small>	一幅	同 人	文書	紙本墨書正親町天皇宸翰御消息 <small>（青蓮院宛）</small>	一幅	同 同
同上	紙本墨書崇光院宸翰御消息 <small>（十一月二日）</small>	一幅	同 人	同上	紙本墨書陽光院御筆御消息 <small>（五月十五日青蓮院宛）</small>	一幅	同 同
同上	紙本墨書後光嚴院宸翰御消息 <small>（七月廿九日）</small>	一幅	同 人	同上	紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息 <small>（閏七月十七日青蓮院宛）</small>	一幅	同 同
同上	紙本墨書後光嚴院宸翰御消息 <small>（五通）</small>	一卷	同 人	典籍	紙本墨書後櫻町天皇宸翰心經百九卷 <small>（自明和八年至文化九年）</small>	一卷	同 同
書蹟	紙本墨書後花園天皇宸翰御製詩 <small>（山科三位宛）</small>	一幅	同 人	同上	紙本墨書後櫻町天皇宸翰六字名號 <small>（自明和八年至天明七年）</small>	一卷	同 同
文書	紙本墨書後奈良天皇宸翰御消息	一幅	同 人	同上	紙本墨書涅槃經集解卷第七十二殘卷	一卷	同 同
同上	紙本墨書方廣寺大佛鐘銘清壽筆	一幅	同 人	同上	紙本墨書法華經化城喻品	一卷	同 同
典籍	紙本墨書南海寄歸內法傳卷第二	一卷	同 人	同上	箔散料紙墨書法華經方便品	一卷	同 同
同上	紙本墨書胎藏圖像 <small>（智證大師本）</small>	二卷	同 人	文書	紙本墨書慈圓僧正消息 <small>（殘闕七通）</small>	一帖	同 同
書蹟	紙本墨書傳藤原行成假名消息 <small>（殘闕十二通）</small>	一卷	同 人	文書	紙本墨書別異弘願性戒鈔	一帖	同 同
繪畫	絹本着色兩界曼荼羅圖	二幅	同 下京區九條町教王護國寺	彫刻	木造千手觀音立像 <small>（羅華王院安置）</small>	一千一軀	同 妙法院前創町妙法院
典籍	紙本墨書類聚名義抄	十一帖	同 觀智院	文書	紙本墨書慈圓僧正願文	一卷	同 左京區一乘寺竹ノ内町曼殊院
彫刻	木造聖德太子立像 <small>（湛幸作）</small>	一軀	同 高倉通佛光寺下ル新開町佛光寺	典籍	紙本墨書本朝世紀 <small>（自康保四年五月廿七日）</small>	一卷	同 伏見區日野西大道町田中忠三郎
同上	木造阿彌陀如來立像 <small>（像内ニ元應二年正月廿八日ノ造立文書及ビ了海上入道付包紙アリ）</small>	一軀	同 光園院	彫刻	木造地藏菩薩立像	一軀	同 右京區梅ケ畑神社町地藏堂
同上	木造阿彌陀如來立像	一軀	同 西前町大行寺	典籍	紙本墨書性靈集 <small>（卷第二、第三、第五、第六、第七、第八、第十）</small>	七卷	同 淨土寺西田町内藤乾吉
同上	足精三法眼帳腰ノ銘アリ	一軀	同 大行寺				

典籍	紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 <small>卷第七 各卷二大治元年三月曼印移寫ノ奥書アリ 〔法隆寺聖藏院〕ノ未印アリ</small>	二卷	內藤乾吉	文書	紙本墨書後村上天皇宸翰御願文	一通	大阪府三島郡楠木村
同上	紙本墨書春秋經傳集解殘卷 卷第十三、卷第六、卷廿九、卷第十六、卷廿九 〔紙背二表目、顯文等ノ集四卷〕	四卷	同人	繪畫	紙本著色馬醫草紙 文永四年正月廿六日西阿ノ奥書アリ	一卷	神奈川縣横濱市鶴見區生 麥町河杉ハツ
彫刻	木造金剛力士立像 足利二弘安八年十月法眼慶秀法眼湛口ノ銘アリ	二軀	京都府乙訓郡大原野町 勝持寺	同上	紙本著色馬醫草紙續編 元應元年九月八日ノ自書アリ	一幅	同 鶴見町
繪畫	絹本著色僧形八幡像 <small>昭憲筆 寄遠達箱 寛永十六年三月吉日昭憲寄進ノ墨書アリ</small>	一幅	同 綴喜郡八幡町 石清水八幡宮	文書	紙本墨書觀音堂緣起 <small>昭憲筆 興二元亨元年六月十七日トアリ</small>	一卷	同 總持寺
典籍	紙本墨書法華經常子內親王御筆 卷第八與二元祿二年十二月朔日トアリ	八卷	同 宮	刀劔	太刀銘光忠	一口	兵庫縣武庫郡樺道村
彫刻	木造釋迦如來坐像 玉眼押木ニ正平十六年十二月廿六日開眼、大佛師法鑑院全ノ銘アリ	一軀	同 法園寺	繪畫	紙本淡彩湖山小景慧風寶	一幅	新瀉縣中蒲原郡金津村
典籍	消息料紙墨書法華經 康安元年重興墨書寫ノ奥書アリ	八卷	同 寺	彫刻	銅造阿彌陀如來及兩脇侍立像 中尊ノ蓮花座ニ寶治三年二月八日治綱ノ銘アリ	三軀	埼玉縣比企郡菅谷村
典籍	紙本墨書法華經行清筆	八卷	同 寺	同上	紙本墨書莊嚴菩提心經 〔天平十二年五月一日光明皇后御願經〕	一卷	奈良縣奈良市登大路町
典籍	紙本墨書梵網經上下 貞和三年延清書寫ノ奥書アリ	二卷	同 寺	典籍	紙本墨書入阿毗達磨論卷下 〔中臣之寺ノ朱印アリ〕	一卷	同 中村正格
典籍	紙本墨書文永四年行清奉納目錄並ニ再興文書 〔以上四點釋迦如來像內發見〕	八通	同 寺	同上	紙本墨書法花玄論卷第一 〔元興寺印ノ朱印アリ〕	一卷	同 人
彫刻	木造阿彌陀如來立像	一軀	同 壽德院	同上	紙本墨書大方等大集經卷第九 〔東大寺印ノ朱印アリ〕	一卷	同 人
文書	紙本墨書筑前國守廳宣寫 行清ノ袖割アリ、表裏二機佛アリ 〔建治元年十月廿六日〕 紙本墨書假名消息、詠草、夢記 以上二點阿彌陀如來像內發見	一通	同 院	同上	紙本墨書大般若經卷第九十九 〔藥師寺印、朱印並ニ〔藥師寺金堂〕ノ墨印アリ〕	一卷	同 人
刀劔	短刀銘來國俊	一口	同 與謝郡石川村 末次喬	同上	紙本墨書天王太子辟羅經 〔東大寺印〕	一卷	同 人
工藝	磁製金欄手花鳥文様鉢 底裏ニ「大明嘉靖年製」トアリ	一口	同 人	同上	紙本墨書大毗婆沙論卷第三 〔東大寺印〕並ニ〔松宮內印〕ノ朱印アリ	一卷	同 人
繪畫	紙本著色兒觀音緣起	一卷	同 大坂府大坂市東區今橋三丁 池戸宗三郎	同上	紙本墨書大毗婆沙論卷第七	一卷	同 人
彫刻	木造阿彌陀如來及兩脇侍像	三軀	同 天王寺區元町 四天王寺	同上	紙本墨書長元十年觀世音寺修理 所注進狀	一卷	同 人
工藝	飛青磁花瓶	一口	同 住吉區松崎町 山崎一保	同上	紙本墨書元久二年重源上人勸進狀	一卷	同 人

古美術

本宮御料古神寶類

一、金銀幣殘斷

一、薛繪等

一、梓弓

一、櫻弓

一、雜木弓

一、白葛胡蝶殘斷

一、黑塗矢

一、內二十一隻鐵亡矢

一、鎬矢

一、木造矢

一、細身鐵鏢

一、內七石突亡矢

一、平身鐵鏢

一、內三石突亡矢

一、木鏢

一、銚身

一、銚柄

一、紫檀地銀細筋斷

一、黑漆平文筋斷(柄白紋)

一、黑漆平文筋斷(柄銀打紋)

一、黑漆平文筋斷(柄亡矢)

一、黑漆太刀

一、平緒殘斷

一、組緒殘斷

一、黑漆平文鏡袖(蓋亡矢)

一、黑漆平文根古志形鏡蓋

一、黑漆鏡盤

一、黑漆彩文麻笥

一、黑漆鐵柱

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

一、白葛箔殘斷

工藝

同上

本宮古寶物類

一、金地細毛披形太刀

一、兵庫鎮太刀

一、鎗裝太刀

一、刀身三「助行」下銘アリ

一、柄纏二花押調書、刀身三「貞治四年

一、卯月日」下銘アリ

一、菱作打刀(葉室長宗奉納)

一、附杉箱一合

一、蓋裏ニ「德二年正月廿二日奏納ノ調書アリ

一、梅花皮腰刀

一、三銘柄磨卷劍

一、若宮御料古神寶(保延二年十一月七日藤原賴長獻進)

一、詩繪弓

一、詩繪弓

一、詩繪弓

一、詩繪弓

一、詩繪弓

一、詩繪弓

一、詩繪弓

一、詩繪弓

一、詩繪弓

三十八本

一枚

五本

一口

四口

五口

一口

二筋分

一筋分

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

一口

奈良縣奈良市春日野町

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

春日神社

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

文典書籍

一、平胡録

矢配板二大治六年正月二日ノ墨書アリ

一、水晶鑄矢

一、黑漆磨地鏡 金銅磨俣磨付

一、金銅尖矢

一、黑漆磨地鏡 内一隻亡矢

一、黑漆磨地鏡 内一隻亡矢

紙本墨書文殊師利菩薩像二百五十體

正安四年八月廿三日珍基筆ノ墨書アリ

紙本著色文殊八字曼荼羅

紙本著色種子曼荼羅、文殊圖像、真

言等

紙本墨書文殊菩薩像並二真言

紙本種子曼荼羅、圖像類、陀羅尼、

真言等

紙本墨書諸尊圖像

紙本墨書梵書

永仁元年十月一日尊慈ノ墨書アリ

紙本墨書尊慈願文(正應六年八月廿五日)

紙本墨書金光明最勝王經

紙本墨書成唯識論

紙本墨書法華經

各卷二正安三年長壽書寫ノ墨書アリ

紙本墨書大般若經(自卷第一

以上十二點文殊菩薩像內發見)

紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息

(代見願施)

紙本墨書水鏡上中下

繪畫

絹本著色織田信長像(狩野元秀筆

絹本著色武田信虎像(武田信廉筆

天正二年端午春國ノ寶アリ

太刀銘鑑光

附絲卷太刀柄

短刀銘吉光 名物信濃藤四郎

紙本墨書續古今集卷下

正平六年十二月三日兼好感得ノ墨書アリ

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

(三月十七日)

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

(元弘三年三月十四日)

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

紙本墨書後醍醐天皇宸翰寶劔代論旨

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

一具

奈良縣生駒郡伏見村

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

西大寺

文書 紙本墨書寶治二年遷宮儀式注進狀
(延長元年六月日)

工藝 銅印印文「豐後守印」

同上 隱岐國驛鈴
附光緒天皇御下賜唐櫃(繪付)一合

繪畫 紙本著色 (十便圖池大陸軍
一十宜圖與謝無村軍
宜風圖二明和八年八月寫上アリ)

彫刻 木造淨土曼荼羅刻出龕

刀劍 短刀銘吉光

工藝 銅幣(孔雀文樣)
彌勒寺金堂 承元三年八年五日奉歸法印祐清
寄進ノ銘アリ

文部省告示第百九十四號 昭和十年五月十三日

名稱 構造形式 所有者所在地

多寶千 石造八角經幢
佛石幢 大康拾年歲次甲子拾貳月丙寅朔日建乙丑御日癸酉時建ノ銘アリ
八幡神社 本殿 三間社流造、單根檜皮葺
東照宮 本殿 三間社流造、單根檜皮葺
中ノ坊 本殿 三間社流造、單根檜皮葺
書院 本殿 三間社流造、單根檜皮葺

東照宮 本殿 三間社流造、單根檜皮葺
拜殿 本殿 三間社流造、單根檜皮葺
唐門 一間半唐門、屋根銅板葺
透門 一間半唐門、屋根銅板葺
皮葺 一間半唐門、屋根銅板葺

古美術

一卷 出雲大社

一類 鳥根縣周吉郡磯村

二口 同 億岐有壽人

二帖 山口縣下關市丸山町
析谷音三

一基 福岡縣小倉市砂津
小野德市

一口 同 山門郡城內村
伯崎立花鑑德

一面 大分縣宇佐郡羅館村
北武樹

本殿 三間社流造、屋根銅板
幣殿 三間社流造、屋根銅板
拜殿 三間社流造、屋根銅板

六所神社 本殿 三間社流造、屋根銅板
拜殿 三間社流造、屋根銅板
社殿 三間社流造、屋根銅板

犬山城 本殿 三間社流造、屋根銅板
天守 三間社流造、屋根銅板
穴切大 三間社流造、屋根銅板

金澤城 本殿 三間社流造、屋根銅板
石川門 三間社流造、屋根銅板

尾山神社 本殿 三間社流造、屋根銅板
社殿 三間社流造、屋根銅板

和歌山 本殿 三間社流造、屋根銅板
城山 三間社流造、屋根銅板

天滿神社 本殿 三間社流造、屋根銅板
社殿 三間社流造、屋根銅板
松江城 本殿 三間社流造、屋根銅板
天守 三間社流造、屋根銅板

東照宮 本殿 三間社流造、屋根銅板
拜殿 三間社流造、屋根銅板
唐門 三間社流造、屋根銅板
透門 三間社流造、屋根銅板
皮葺 三間社流造、屋根銅板

古美術

愛知縣岡崎市明大寺町
六所神社 六所神社境内

愛知縣岡崎市明大寺町
六所神社 六所神社境内

愛知縣岡崎市明大寺町
六所神社 六所神社境内

愛知縣岡崎市明大寺町
六所神社 六所神社境内

愛知縣岡崎市明大寺町
六所神社 六所神社境内

愛知縣岡崎市明大寺町
六所神社 六所神社境内

愛知縣岡崎市明大寺町
六所神社 六所神社境内

愛知縣岡崎市明大寺町
六所神社 六所神社境内

古美術

薛繪山水圖書

薛繪螺鈿橘文手宮

薛繪螺鈿葡萄栗鼠文小簞筒

薛繪干鳥文硯宮

聚漆繪竹批杷文瓶子

陶製木ノ葉天目茶碗

薛繪波兔蘆舟文小簞筒

陶製色繪帆掛船置物

陶製燵變天目茶碗

陶製肩衝茶入銘裏面

陶製三彩馬像

聚漆牡丹獅子平文鞍

磁製金欄手唐草文胡蘆餅

磁製五彩八仙圖餅

磁製五彩魚藻文壺共蓋付
大明嘉靖年製ノ銘アリ

磁製三彩八角形餅

陶製春慶茶入銘裏面

考古學資料之部

袈裟襷文銅鐸

袈裟襷文銅鐸

袈裟襷文銅鐸

大阪府南河内郡國分村大字國分茶

白山古墳出土品

銅製青蓋盤龍鏡

鐵製狛犬建治三年ノ銘アリ

銅鏡
山梨縣東八代郡北八代村字竹ノ内勝利塚出土

一箇 東京府東京市赤坂區葵町 大倉集古館

一合 同小石川區關口臺 西脇濟三郎

一箇 同本郷區駒込林町 有尾佐治

一合 同品川區北品川二丁目 山村豐成

一箇 同世田谷區深澤町 長尾欽彌

一合 同葛飾區新宿町三丁目 吉野富雄

一箇 同大阪府大阪市北區銅局町 男爵 藤田平太郎

一箇 同東區伏見町三丁目 戸田彌七

二軀 同泉北郡高石町 錢高久吉

一脊 同奈良縣橿原市鶴見區生交町 前田簾造

一箇 同兵庫縣武庫郡御影町 嘉納治兵衛

一箇 同三重縣河藝郡若松村 伊坂又右衛門

一箇 同東京府東京市赤坂區青山南町六丁目 根津嘉一郎

一箇 同大阪府泉北郡上神谷村 小谷憲一

三面 同南河内郡國分村 國分神社

一軀 同山梨縣宇都宮市馬場町 二荒山神社

一箇 同山梨縣東八代郡北八代村 熊野神社

袈裟襷文銅鐸

一箇 岐阜縣大野郡高山町 平瀬市兵衛

銅製懸佛内四面ニ「弘安元年卯月廿一日云々」
「弘安九年十二月廿二日云々」
「たい」ノ銘アリ

一六面 長野縣北安曇郡社村 神明宮

滑石經

一箇 岩手縣盛岡市大字上田北山 島地默貌

家屋形彌生式土器下部缺失

一箇 鳥取縣氣高郡鹿野町 安富寛兵衛

子持勾玉

一箇 同 同 上

石製鷄尾

一箇 同西伯郡輪鄉村 福樹寺

鳥取縣西伯郡輪鄉村大字大藏福樹寺境内所在

文部省告示第六十一號 昭和十年三月十四日

品 工藝之部 目 員數 所有者住所及氏名

青磁袴腰香爐

一箇 東京府東京市日本橋區通二丁目 川部利吉

鐵製十枚張嚴星兜鉢

一頭 東京府東京市小石川區水道町 三井高修

鐵製四方白三十九間星兜鉢

一頭 同 同 上

宮城縣石巻市住吉町 毛利總七郎

鹿沼郡津島村 遠藤源七

附近貝塚出土品

一箇 同 同 上

骨角製具類

一箇 同 同 上

骨角製具類

一箇 同 同 上

骨角製具類

一箇 同 同 上

骨角製具類

一箇 同 同 上

骨角製具類

一箇 同 同 上

骨角製具類

一箇 同 同 上

骨角製具類

一箇 同 同 上

骨角製具類

一箇 同 同 上

骨角製具類

一箇 同 同 上

文部省告示第百九十一號 昭和十年五月十日

品 繪畫之部 名 員數 所有者住所及氏名

絹本著色飛雪千山圖

一幅 東京府東京市麴町區飯田町三丁目 原嘉道

東京府東京市麴町區飯田町三丁目

絹本着色阿彌陀三尊來迎圖	一幅	東京府東京市麹町二〇〇〇番地	渡邊香崖	絹本着色山水花卉幀八圖	二帖	池戸宗三郎
絹本着色五節句圖酒井抱一筆	五幅	同下二番町	男爵 大倉喜七郎	紙本着色山水花卉幀八圖	一	
丁亥九月吉野日ノ年記アリ				高橋草坪筆天保元年ノ年記アリ		
紙本着色鳥の細道圖野村宗達筆鳥丸	一雙	同麻生市兵衛町一丁目	伯爵 津輕義孝	紙本着色花見鷹狩圖六曲屏	一雙	神奈川縣横濱市中區本牧町
六曲屏				紙本着色山水圖珠光筆	一幅	兵庫縣武庫郡住吉町
絹本着色廬山觀瀑圖石濤筆	一幅	同	住友 寛一	紙本着色玄徳訪孔明圖六曲屏	一雙	同
紙本着色四條河原圖二曲屏	一雙	同島居坂町	男爵 岩崎小彌太	紙本着色秋草圖尾形光琳筆二曲屏	一雙	同
紙本白描建保六年中殿御會繪卷	一卷	同赤坂區福吉町	公爵 九條道秀	絹本着色五字文殊像	一幅	同精道村
紙本着色關羽圖傳圓山應舉筆	一幅	同葵町	大倉集古館	紙本着色觀音圖青木木災筆	一幅	岩手縣盛岡市新盛町
紙本着色公餘探勝	二卷	同小石川區大塚仲町	松平 定晴	天保二年辛卯桂月ノ年記アリ	一幅	池野藤兵衛
紙本着色花鳥圖	一雙	同原町	伯爵 酒井忠正			
紙本着色山水圖	一雙	同關口水道町	井上辰九郎			
紙本金地著色一谷及宇治川合戰圖	一雙	同高田老松町	候爵 細川護立			
傳矢野三郎兵衛筆六曲屏						
紙本墨畫維摩居士圖尾形光琳筆	一幅	同雜司ヶ谷町	保坂潤治			
紙本着色葵圖尾形乾山筆、二曲屏	一雙	同	同			
紙本着色捕鯨圖司馬江漢筆	一卷	同本郷區駒込曙町	鷹見久太郎			
絹本着色夏山雨後圖	一幅	同品川區上大崎五丁目	公爵 三條公輝			
紙本着色山水圖	一幅	同世田谷區深澤四丁目	長尾 欽彌			
紙本着色山水圖	一雙	同澁谷區原宿三丁目	侯爵 池田仲博			
紙本墨畫春江渡舟圖傳牧翁筆	一幅	同澁谷區西ヶ原町	子爵 秋元春朝			
絹本着色歲寒三友白鹿圖山本梅邊筆	一幅	京都市京市上京區小松原北町	福井直子			
壬寅晚秋ノ年記アリ						
絹本着色百春遊鹿圖浦上春琴筆	一幅	同	同			
壬寅古重陽ノ年記アリ						
紙本着色東北院職人歌合繪卷	一卷	同東山區小松町	同			
紙本着色四條河原圖二曲屏	一隻	大坂府大坂市東區豐後町	堂本三之助			
油繪樵夫圖バスチアン、ルバージュ筆	一面	同今橋三丁目	木村 鐸之助			
額面紙本着色風俗圖	六面		池戸宗三郎			

彫 刻 之 部

文 書 典 籍 之 部

紙本墨書源賴朝政道執奏消息

(文治二年四月廿日)

紙本墨書伊勢物語

紙本墨書亭子院歌合

紙本墨書スビリツアル修業鈔譯文
表題ニ御主御苦難之觀念之事トアリ

紙本墨書幼學指南鈔第廿七草木部

紙本墨書太田牛一大かうさまくんのうち

紙本墨書賀茂眞淵萬葉考稿本卷第一
第二寶曆十年ノ奥書アリ

紙本墨書菊池武光施行狀

紙本著色釋教三十六人歌仙圖榮壽撰
(正平十三年九月十七日)

紙本墨書拾遺集

紙本墨書稿本源氏物語玉の小琴第一
(二)

紙本墨書加茂眞淵消息

紙本墨書後拾遺集卷第十斷簡
(中院切) (するかみえ)彩箋墨書三寶繪斷簡
(東大寺切) (ふはおこな)紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集斷簡
(廣澤切) (四首)紙本墨書後陽成天皇宸翰立上御琵琶寸法
慶長七年林鐘廿四日ノ御奥書アリ

紙本墨書傳教大師求法書等

紙本墨書高山日記(安永七年)
正慶二年三月十八日降臨書寫ノ奥書アリ紙本墨書高山日記(安永六年)
天明二、三年紙本墨書徳川家康日筆日課念佛
中ニ慶長十七年七月十三日トアリ

紙本墨書秋生徂徠客問書

紙本墨書ルイス、デイアス金子借用一通
(西曆千六百三十八年)

刀劍之部

短刀銘 二三清綱

短刀銘 兼次

短刀銘 無銘(名物應丁正宗)

短刀銘 岡吉

短刀銘 備前長船佳兼光
建武二年六月日短刀銘 備前長船佳兼光
應安口歲八月日短刀銘 備前長船佳兼光
甲戌

短刀銘 直長

短刀銘 無銘(名物小玉正宗)

短刀銘 正恒

短刀銘 包次

短刀銘 同宗

短刀銘 來國光

短刀銘 石州出羽佳直綱作

短刀銘 定利

短刀銘 無銘 備前縣

短刀銘 正恒

短刀銘 吉用

短刀銘 長光

短刀銘 一

短刀銘 景依

短刀銘 正家磨上光德花押

東京府東京市麹町
區三年町

同永田町二丁目

同河町六丁目二
三松方同芝區芝公園第八
號地

同三田四國町

同四谷區荒木町

同牛込區若松町

同小石川區林町

同下谷區谷中清水

同目黒區上目黒三
丁目

同八丁目

同荏原區小山町

同大森區田園調布
四丁目同澁谷區千駄ヶ谷
一丁目同代々木區ヶ谷町
一五〇四合方

同杉並區圓根町

同京都府京都市上京
區小山花ノ木町同大阪府大阪市天王
寺區上本町八丁目

同大正區泉尾梅野

同神奈川縣足柄下郡
岡府津町同兵庫縣武庫郡本山
村

杉山茂丸

同 上

伊東治正

赤星鐵馬

同 上

同 上

本阿彌猛夫

國藤康太

子爵松平義爲

伯爵戸田氏共

同 上

前川廣吉

子爵大河内正敏

公爵鷹司信輔

子爵松平康春

子爵大久保立

篠原三千郎

公爵徳川家達

同 上

男爵大藏公望

伯爵有馬頼寧

清田政人

黒川福三郎

平塚熊治郎

島田利三郎

河瀬虎三郎

刀大摺上無銘 傳正宗	一口	新潟縣新潟市本町	風間 要吉	鐵製蘆屋松竹梅圖釜	一箇	香取秀次郎
短刀銘 兼友	一口	愛知縣名古屋市中區白樺町一丁目	成瀬 美雄	高彫色繪猿猴捕月圖木瓜形鐵鐔	一箇	清田 清人
太刀銘 行秀	一口	同一宮市七間町	森 傳吉	鐵製蘆屋圖釜(立田釜)	一箇	芳 春院
太刀銘 助真	一口	青森縣北津輕郡鶴田村	澁谷 文男	繡製大日如來像 鍍金裝具共	一幅	狩野 秀峰
太刀銘 一(傳景安)	一口	石川縣金澤市上松原町	大友 佐一	鐵製蘆屋鹿帆船圖真形釜	一箇	大西清左衛門
太刀銘 助守作	一口	富山縣富山市總曲	近郷 重孝	鐵製蜻蛉圖釜	一箇	土橋嘉兵衛
太刀銘 定利	一口	福岡縣福岡市南區院古小島	近郷 獎太郎	銅製重圈清白鏡銘帶アリ	一面	藤井 善助
刀大摺上無銘(傳國俊)	一口	同久留米市篠山町	石橋 德次郎	銅製湯雷文鏡 銘云「銘附アリ」	一箇	小川睦之輔
太刀銘 長光	一口	同久留米市篠山町	同 上	石燈籠 「正喜元年丁巳四月建立之」ノ刻銘アリ	一基	石田治三郎
工藝品之部				銅製龍象文尊 「佳王大前千宗周」等五十	一箇	嘉納治兵衛
鐵製蘆屋櫻菊圖瓶口釜	一箇	東京府東京市麹町區平河町	安田 善次郎	銅製龍象文尊 「銘アリ」	一箇	同 上
鐵製法花牡丹透爐(銅製蓋後補)	一箇	同日本橋區通三丁目	廣田 松繁	銅製龍象文尊 「銘アリ」	一箇	同 上
聚漆大内碗	四碗五組	同芝區高輪南町	公爵 毛利元昭	銅製龍象文尊 「銘アリ」	一箇	同 上
破笠細工柏木木圖料紙宮破笠作	一合	同麻布區市兵衛町	伯爵 津輕義孝	銅製有蓋雷文犧首尊 「佳佳尊ノ銘アリ」	一箇	同 上
陶製瀨戸印花巴文瓶子	一箇	同半田區戸山町	反町 茂作	銅製六風龍文盤	一箇	同 上
薛繪扇散文香宮簞(梶川作)	一箇	同小石川區大塚仲町	子爵 松平定晴	銅製金銀塗渦雲獸文盃	一箇	同 上
陶製黑花牡丹文餅	一箇	同高田區老松町	侯爵 細川護立	銅製金銀塗渦雲文盃	一箇	同 上
陶製色繪櫻紅葉圖鉢仁阿彌作	一箇	同下谷區谷中清水町	子爵 大河内正敏	銅製鳳文量斗 「始建國元年正月」等ノ	一箇	同 上
磁製吳須赤繪花鳥文隅切角盤傳顯川作	一枚	同	同 上	銀製鑲金華文龍池鴛鴦雙魚文洗	一箇	同 上
鐵製蘆屋網地文鳥鷺圖釜	一箇	同大森區南千束町	由井彦太郎	銅製賦彩龍透文方鏡	一面	同 上
磁製銅島色繪野菜圖皿	十枚	同世田谷區深澤町四丁目	長尾 欽彌	銅製賦彩四變透文方鏡	一面	同 上
磁製古九谷色繪樓閣人物圖大皿	一枚	同澁谷區刻澤町	鹽原 又策	銅製鑲金畫文帶四神四獸鏡銘帶アリ	一面	同 上
磁製古九谷色繪山水人物圖大皿	一枚	同	同 上	銅製貼銀靈獸鏡銘帶アリ	一面	同 上
磁製古九谷色繪花鳥圖大皿	一枚	同	同 上	銅製貼銀海獸葡萄文八稜鏡	一面	同 上
磁製法花牡丹文袴腰香爐	一箇	同	同 上	銅製貼銀鑲金麟鳳華文八花鏡	一面	同 上
鐵製蘆屋藤梅圖釜	一箇	同澁谷區刻澤町	香取秀治郎	銅製貼銀鑲金麟鳳華文八花鏡	一面	同 上
鐵製蘆屋真形釜	一箇	同澁谷區刻澤町	同 上			

銅製金銀平脫寶相華雙鳳文鏡

一面 嘉納治兵衛

銅製金銀平脫花枝禽獸文八花鏡

一面 同上

銅製金銀平脫雙鳳文鏡

一面 同上

高彫色繪唐人人物圖木瓜形鐵鐙

一箇 河瀬虎三郎

銘山城國伏見住金家

一箇 同上

鐵製蘆屋洲濱松圖真形釜

一箇 西脇濟三郎

鐵製銅島色繪鶴圖皿

十枚 中野忠太郎

石燈籠富藏寺境内所在

一基 當麻寺

鐵製蘆屋洲濱松圖真形釜(末松山釜)

一箇 伊藤次郎左衛門

鐵製蘆屋梅竹圖常銀真形釜

一箇 同上

鐵製若松圖八角口蒲團釜傳家傳作

一箇 同上

鐵製松梅圖丸釜傳家傳七郎作

一箇 同上

陶製黑花牡丹文鉢

一箇 井上庄七

磁製古九谷色繪花鳥圖手鉢

一箇 二宮喜三

考古學資料之部

銅造懸佛

一面 東京府東京市麻布區廣尾町 小泉策太郎

石器時代土偶

一箇 同牛込區河田町 杉山壽榮男

千葉縣印旛郡白井町大字江原出土

一箇 同上

石器時代土偶

一箇 同上

千葉縣印旛郡白井町大字江原出土

一箇 同上

硬玉製有孔玉器

一箇 同上

岩手縣下閉伊郡刈屋村大字和井内出土

一箇 同上

硬玉製斧

一箇 同上

青森縣西津輕郡館岡村大字龜ヶ岡出土

一箇 同上

石器時代土偶

一箇 同小石川區雜司ヶ谷町 水谷乙次郎

茨城縣稻敷郡大須賀村大字福田出土

一箇 同上

石器時代土偶

一箇 同世田谷區三軒茶屋 有阪鋁藏

北海道室蘭市輪西町出土

一箇 同上

石器時代土偶

一箇 同上

青森縣西津輕郡森田村大字床舞出土

一箇 同上

石器時代人形裝飾附土器

一箇 同上

筑紫熊前角二菊文文アリ

一箇 東京市中野區橋場 關保之助

彩色繪扇熊野速玉神社古神寶

一柄 同上

袈裟文銅鐙

一箇 京都市中京區京洞院通九太町南入三木町 守屋孝藏

傳奈良縣添上郡樺太村出土

一箇 同上

袈裟文銅鐙

一箇 同上

德島縣美馬郡馬場町出土

一箇 同上

袈裟文銅鐙(共出十四箇ノ内)

一箇 同上

滋賀縣野洲郡野洲町大字小篠原出土

一箇 同上

流水文銅鐙

一箇 同上

袈裟文銅鐙

一箇 同上

鐵地金銅張寶珠飾八角座雲珠

一箇 同上

傳群馬縣馬場町出土

一箇 同上

宮崎縣兒湯郡上江村持田古墳出土品

一箇 同上

鐵地金銅張寶珠

一箇 同上

銅製鈴付卵圓形金具

一箇 同上

群馬縣多野郡美九里村大字木郷及子山古墳出土

一箇 同上

滑石製椅子形模造品殘闕

二箇 同上

傳奈良縣磯城郡多武峰村大字多武峰出土

一箇 同上

奈良縣生駒郡富雄村大字大和丸山古墳出土品

一箇 同上

銅製銅形金具

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

滑石製銅形模造品

一箇 同上

銅製二神二獸華文鏡

傳大阪府三島郡安威村大字安威出土

銅製陳是作五神四獸鏡

兵庫縣印南郡北濱村大字牛谷出土

石造時代人面裝飾附土器

茨城縣稻敷郡大須賀村大字福田出土

銅製畫文帶四尊四獸鏡銘帶アリ

長野縣下伊那郡諸丘村御嶽堂百墳出土

鳥取縣東伯郡下北(墳輪與御部修補)

條村古墳出土品(墳輪男子像(殘缺))

鳥取縣東伯郡社村大字國府

銅製帶四神二獸鏡

古墳出土品

銅製二神二獸鏡

石馬

鳥取縣西伯郡宇田川村大字福岡石馬谷所在

裂後釋文銅鐸

鳥取縣日野郡多里村大字新屋出土

山口縣都濃郡下松町宮洲出

銅製王氏作遺虎鏡

土品

銅製二神二獸鏡

銅製獸帶規矩四神鏡殘缺

銘帶アリ

香川縣高松市外石清尾山稻石塚出土

石造五輪塔

「弘安十年丁二〇」ノ銘アリ

石造九重塔

京都府京都市伏見區竹田内畑町

石造九重塔

同久世郡宇治町大字

石造三重塔

「貞和五年己丑二月二十六日一結衆敬白」ノ刻銘アリ

石造三重塔

同南河内郡大津市大字板持

石造十三重塔

「文保三年」ノ刻銘アリ

一面 大阪府三島郡安威村 阿爲神社

一面 兵庫縣印南郡北濱村 蓮教寺

一箇 滋賀縣坂田郡長濱町 下郷共濟會

一面 長野縣下伊那郡諸丘村 開善寺

二箇 鳥取縣(鳥取縣師範學校保管)

三面 鳥取縣東伯郡社村 國分寺

一箇 同西伯郡 宇田川村大字福岡

一箇 同日野郡多里村 木山茂美

四面 山口縣熊毛郡岩田村 國光嘉久治

一面 香川縣高松市七番 上原準一

石造十三重塔

「永仁五年西五月三日比丘道口」ノ刻銘アリ

石造寶篋印塔

「沙彌行心歸寂乾元二年癸卯八月八日」ノ刻銘アリ

石造五輪塔

石造佛頂尊勝陀羅尼幢

石造十三重塔(今十二重ヲ存ス)

「永仁三年六月三日大願主沙彌口」ノ刻銘アリ

石造多寶塔

石造大准提陀羅尼幢

金ノ大定安卯九月四日酉時」ノ刻銘アリ

一基 大阪府南河内郡白木村 同白木村

一基 高貴寺 高貴寺境内

一基 同 上

一基 神奈川縣三浦郡葉山町 慶福院境内

一基 兵庫縣武庫郡御影町 兵庫縣武庫郡御影

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

一基 同 上

文部省告示第二百六十九號

昭和十年八月三日

品 繪畫之部

員數 所有者住所及氏名

絹本墨畫牧牛圖(遺有ノ印アリ)

絹本著色山水圖(式部卿史之印ノ印アリ)

絹本墨畫竹圖(吳興筆)

絹本著色天保九如圖(高橋草坪筆)

絹本著色常盤圖(吳興筆)

絹本著色醉李白圖(渡邊華山筆)

紙本墨畫政黃牛圖(心月ノ寶アリ)

絹本著色陶淵明圖

絹本著色清明上河圖(趙希平筆)

萬曆丁丑冬月朔日ノ年記アリ

絹本墨畫寒山圖

絹本著色硃圖(吳興筆)

絹本著色鷄頭花圖(傳錢舜舉筆)

絹本著色鷄頭花圖(傳錢舜舉筆)

一幅 東京府東京市麹町區上二番町 男爵郷誠之助

三幅 同 上

一幅 同 上

一幅 同 上

一幅 同 上

一幅 同 上

一幅 同 上

一幅 同 上

一卷 同 上

一幅 同 上

一幅 同 上

一幅 同 上

一幅 同 上

木造能面蛇	木造能面山姥 <small>傳祖來作 裏ニツクワカ作(梵字) 泰成氏ノ親銘アリ</small>	木造能面般若 <small>傳德若作</small>	木造能面孫次郎 <small>傳孫次郎作</small>	木造能面孫次郎	銅造阿彌陀如來立像 寶面ニ文永元年中冬ノ銘アリ	文書典籍書蹟之部	紙本墨書古今集卷第十八斷簡 <small>(高野切(おののはるかせ) 傳俊賴筆(甲斐國に)</small>	蠟牋墨書古今集第九斷簡	紙本墨書馮子振(海栗道人)書蹟 <small>紙本墨書シーボルト筆蹟(品面眞希藏文字) 内希藏文字ニ千八百三十五年トアリ</small>	紙本墨書シーボルト處方錄戸塚靜海筆 <small>(石山切(かもとに) 升色紙(うちはへて)</small>	紙本墨書深養父集斷簡	紙本墨書後撰集卷第三斷簡 <small>(鳥丸切(ひととせに)</small>	紙本墨書傳無準師範墨蹟「選佛場」 <small>[普門院]ノ朱印アリ</small>	紙本墨書曾我物語(眞字本) 天文十五年書寫ノ奥書アリ	古文書 第一卷、文永六年十一月廿一日賢靜 第二卷、許可印信以下十六通 第三卷、御文換候云々假名消息以下十六通 第九日願文寫以下八通	彩牋墨書古今集卷第十六斷簡 <small>(傳俊賴筆) (近院大臣)</small>	紙本墨書傳受集第一、第二 建久四年五月廿九日興然書寫ノ奥書アリ	
一面	一面	一面	一面	一面	一軀 三重縣安濃郡藤水村	一幅 東京府東京市麹町 眞元園町一丁目	一幅 同上二番町	一幅 同富士見町二丁目	三册	一幅 同芝區白金今里町	一幅 同藤瀬新一郎	一幅 同上	一幅 同上	一幅 同藤瀬新一郎	十册 同赤坂區一ツ木町	三卷 同四谷區内藤町	一幅 同本郷區駒込東片町	二帖 同駒込西片町
金剛右京上	同	同	同	同	川喜田久太夫	加藤正治	男爵 郷誠之助	久保春海	同	藤瀬新一郎	同	同	同	小泉策太郎	子爵 伊東祐淳	石塚三郎	小島甫	反町茂雄

紙本墨書新撰明詠集上下 寛永十三年鳥丸元廣ノ跋アリ	一帖	反町茂雄
紙本墨書辭家抄	一帖	同上
紙本墨書シーボルト書狀 内一通高良齋宛、一通二宮敬作宛	四通	高 於 菟 三
紙本墨書門弟誓約書案シーボルト筆 一千八百二十九年十二月二十日長崎トアリ	一通	同上
紙本墨書シーボルト筆免許狀高良齋宛 一千八百二十九年十月三十日、同年十二月八日附同譯文二通	二通	同上
紙本墨書蘭文日本疾病誌稿高良齋筆	一册	同上
紙本墨書蘭文天狗爪石稿高良齋筆	一册	同上
紙本墨書齋宮女御集斷簡 （小島切）の、宮にて	一幅	同 品川區北品川三丁目
紙本墨書古今集卷第六斷簡 （荒木切）（きのつらゆき）	一幅	同 原 邦 造
紙本墨書古今集卷第十一斷簡 （筋切）（題不知）	一幅	同上
紙本墨書シーボルト書狀 内おへね宛六通（内一通一千八百六十年七月十五日） 三浦周三宛一通（一千八百六十年四月三日トアリ）	十三通	同 大森區北千束町
紙本墨書シーボルト處方箋	六通	同 上
紙本墨書延喜式卷第十殘卷	一卷	同 武 田 祐 吉
紙本墨書シーボルト筆免許狀岡泰安宛 一千八百二十七年三月二日出島トアリ	一通	同 岡 落 葉
紙本墨書伊勢集斷簡 （石山切）（六月はらへ）	一幅	同 山口 立 洞
紙本墨書伊勢集斷簡 （石山切）（うすなから）	一幅	同上
紙本墨書三寶繪斷簡 （東大寺切）（くひいつみき）	一幅	同上
紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡 （大内切）（意）	一幅	同上
紙本墨書寸松庵色紙（みつね）	一幅	同上
紙本墨書深養父集斷簡 （糸色紙）（はるゆきの）	一幅	同上
紙本墨書後拾遺集卷第十七斷簡 （標切）（修行）	一幅	山口 立 洞
紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡 （多賀切）（遊）	一幅	同上
紙本墨書三寶繪斷簡（東大寺切）（きんを）	一幅	同 里 見 忠 三 郎
紙本墨書永承六年内裏根合斷簡 （二條切）（卷首）	一幅	同 土 橋 嘉 兵 衛
紙本墨書古今和歌集 文應元年七月五日藤原爲家ノ奥書アリ	一帖	同上
紙本墨書萬葉集卷第七斷簡 （元解校本）（武庫河）	一幅	同上
紙本墨書光嚴院御置文 貞和五年九月十五日トアリ	一通	同 中 村 直 勝
紙本墨書光嚴院御消息	一通	同上
紙本墨書後光嚴院御詩懷紙	一通	同上
紙本墨書シーボルト筆蹟（扉面） 各二千八百六十二年十一月十三日江戸赤羽トアリ	二枚	同 今 泉 源 吉
紙本墨書アレキサンダー シーボルト筆蹟（扉面） 各二千八百六十二年十一月十三日江戸トアリ	三枚	同上
紙本墨書伊勢集斷簡 （石山切）（人のこゝろを）	一幅	同 玉 井 久 次 郎
紙本墨書和漢朗詠集斷簡 （修行成筆）（意同題）	一幅	同上
紙本墨書大般若經卷第二百十九 「藥師寺印」朱印「藥師寺金堂」ノ墨印アリ	一卷	同上
紺紙金銀字大般若經卷第五百八十四 （中尊寺經）	一卷	同上
紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集斷簡 （廣澤切）（雜天雲）	一幅	同 竹 内 周 三 郎
紙本墨書織田信長消息（八月十七日） 村井長門守宛	一幅	同上
紙本墨書シーボルト處方箋 一千八百六十七年十月廿四日江戸赤羽トアリ 附同譯文一通	一通	同 赤 澤 乾 一
紙本墨書ドウフ賛富士山圖ルケイ 院寺町	一幅	同 伊 藤 醇

刀劍の部

短刀 銘備前長船景光 正和三年卯月日	一口	北海道札幌市北四條西十二丁目	持田謹也
太刀 銘正恒	一口	東京府東京市麹町區永田町二丁目	伯爵伊東治正
太刀 折返銘正恒	一口		同
太刀 折返銘一	一口		同
刀 無銘傳光忠	一口		同
刀 無銘傳國俊	一口		同
刀 無銘傳則宗	一口	同芝區高輪南町	公爵毛利元昭
刀 銘密備中國住次直 毛利元康ノ所持銘アリ	一口		同
太刀 銘則房	一口	同麻布區狸穴町	侯爵野津鎮之助
太刀 銘則宗	一口	同今井町	男爵三井高公
太刀 銘助真	一口		同
刀 無銘傳光忠	一口		同
太刀 銘備前國長船住長造 嘉元二年三月日	一口		同
短刀 無銘名物日向正宗	一口		同
短刀 無銘名物豐後正宗	一口		同
短刀 無銘名物德善院貞宗	一口		同
太刀 銘備前長船住兼光 應永二年正月日	一口		同
短刀 銘安吉	一口		同
太刀 銘定吉	一口		同
刀 無銘傳光忠	一口	同牛込區若松町	伯爵戸田氏共
太刀 銘守家	一口		同
太刀 銘備前國長船住兼光 (以下切)	一口		同
刀 無銘傳一文字	一口	同小石川區堀籠町	同
太刀 銘備前國助包作	一口	同第六天町	原三右衛門 子爵松平保男
刀 金象嵌銘來國次 太阿(花押)	一口		同
太刀 銘清嗣	一口	同下谷區墨門町	本阿彌光遜

刀銘通利

太刀 銘備前國長船住景光	一口	東京府東京市下谷區墨門町	本阿彌光遜
太刀 銘豐後國行平作	一口	同目黒區上目黒八丁目	同
太刀 無銘傳包平	一口	同荏原區下神明町一丁目	木村重吉
刀 無銘傳菊御作	一口		子爵松平忠正
太刀 無銘傳光忠	一口		同
太刀 銘國宗	一口	同大森區田園調布四丁目	篠原三千郎
太刀 銘長光	一口	同澁谷區豐分町	公爵島津忠承
刀 金象嵌銘本多中務所持 正宗本阿(花押) 名物中務正宗	一口	同千駄ヶ谷一丁目	公爵德川家達
太刀 正宗ト銘アリ名物木下正宗	一口		同
太刀 銘安綱	一口	同二丁目	同
太刀 菊御作	一口		侯爵松平康昌
太刀 銘長光	一口		同
太刀 銘備前國住雲次 裏ニ「建武乙亥十一月」トアリ	一口		同
刀 無銘名物式部正宗	一口	同澁谷區柏木四丁目	伯爵松平直富
太刀 銘長光	一口	同杉並區荻窪二丁目	山之内二郎
太刀 銘長光	一口	同京府京都市上京區今出川町	橋本獨山
短刀 無銘名物佐藤行光	一口	同中京區麩屋町姉小路	岸本貫之助
刀 無銘傳長谷部	一口	同大阪府大阪市天王寺區上本町八丁目	黒川福三郎
太刀 銘守(以下切) 傳守友 建武二年七月日	一口	同大正區泉尾梅町	平塚甚右衛門
太刀 銘備前國長船住兼光	一口	同神奈川縣鎌倉郡鎌倉町	石渡信太郎
太刀 銘備前國長船景光 延文元年十二月日	一口	同兵庫縣武庫郡本山村	河瀬虎三郎
刀 無銘傳來國光	一口	同愛知縣名古屋市中區松重町	伊藤平左衛門
太刀 銘成高	一口	同靜岡縣磐田郡見付町	上村卓一

刀無銘傳國行

太刀銘國宗

太刀 銘備州國分寺住入助國作
元徳九年十一月日

短刀銘來國次

刀無銘傳貞次

太刀銘宗氏

工藝品之部

赤銅魚子地高彫色繪群馬圖小柄

銘宗氏「花押」二本
高彫色繪群馬目貫一具

古九谷色繪青海波文大皿

青磁雲龍貼花盤

陶製黑花牡丹文緋

陶製繡花太白尊

高彫色繪波鯉圖丸形鐵鐙銘安親

高彫象嵌橋杭圖裏安親篆字印鐵鐙

磁製五彩老子圖五花形洗銘大明萬曆年

磁製五彩仙女圖植木鉢

磁製粉彩西洋人物圖聯餅銘乾隆年製ノ

樂燒黑茶碗銘乙御前長次郎作

高彫色繪年禮高松圖撫角形鐵鐙

高彫色繪牡丹獅子圖鐵小柄

高彫色繪牡丹獅子圖緣頭

高彫色繪獅子胡蝶目貫

青磁刺花牡丹文花生

葡萄胡蝶文象嵌瓜形赤銅鐙銘瑞恩明壽

古九谷色繪龜中鶴圖大皿

一口 山形縣西村山郡大谷村

一口 富山縣富山市經曲

一口 同高岡市旅籠町

一口 同高岡市旅籠町

一口 同横田町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

一口 同山縣淺口郡金光町

銅製神獸畫象鏡李氏作寛云々ノ銘アリ

銅製龍虎獸帶鏡池氏作寛云々ノ銘アリ

銅製獸帶鏡呂氏作鏡云々ノ銘アリ

銅製三蛇文鏡

銅製變樣羽狀獸文地四獸方鏡

銅製八弧渦文地鏡

銅製方格四乳葉文鏡千秋萬歲云々ノ銘アリ

銅製狻猊十二支文鏡一永華月淨蓮花發鏡アリ

銅製孔雀文八花鏡

銅製八弧彩畫人物龍文鏡

鐵製金錯渦文鏡

銅製嵌玻璃鑲金華文鏡

銅製貼銀鑲金雙鳳狻猊八稜鏡

銅製鑲金規矩四神鏡

銅製迦陵頻伽八花鏡

銅製銀平脫鳳凰華文八花鏡

銅製銀鑲花禽文鏡

銅製貼銀鑲金雙鳳狻猊八稜鏡

陶製御所丸茶碗(古田高麗)

樂燒黑茶碗銘大黒利休銘七種ノ内

鐵製松山圖釜傳家雄作

薛繪和歌浦圖見臺傳清水九兵衛作

陶製色繪雅香爐仁清作

陶製肩衝茶入(大名物)(傳宗半所持)

青磁彫花文盃

陶製瀬戸釉平丸形水指仁清作

樂燒黑茶碗銘(加賀)ンカウ七種ノ内

薛繪南蠻人圖硯宮

青磁竹花生

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

京都市中京區東洞院通丸太町南入三本木町

傳奈良縣添上郡帶解町古墳出土品
銅製盤龍帶蓋鏡
吾作云々ノ銘アリ
銅製變形七乳文六銚鏡

紙本版畫唐蘭館内圖川原慶賀筆

奈良縣添上郡帶解町大宇山字下品
石製相輪殘闕
其ノ殘闕五十九
附屬金具
附屬金具
附屬金具

奈良縣添上郡帶解町大宇山字下品
石製相輪殘闕
其ノ殘闕五十九
附屬金具
附屬金具
附屬金具

奈良縣添上郡帶解町大宇山字下品
石製相輪殘闕
其ノ殘闕五十九
附屬金具
附屬金具
附屬金具

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖
紙本版畫大坂色子圖

文部省告示第二百八十六號 昭和十年九月四日

品 繪畫之部 名 員數 所有者住所及氏名

紙本版畫王生忠視像
三十八歌仙切 佐竹家傳來
一幅 京都府京都市中京區橋本町 平井仁兵衛

紙本版畫竹林茅屋圖
六曲屏 大阪府大阪市東區淡路町二丁目 水原金兵衛

紙本版畫日月山水圖
六曲屏 同南河內郡天野村 金剛寺

紙本版畫太平記合戰圖
六曲屏 奈良縣大和郡朝和村 飯田眞作

紙本版畫相合傘圖
鳥居清信筆 細判丹繪 一枚 宮崎縣仙臺市大聖寺裏門通 齋藤報恩會

紙本版畫試合圖
鳥居清信筆 細判丹繪 一枚 同 同 上

紙本版畫駒止圖
鳥居清信筆 細判丹繪 一枚 同 同 上

紙本版畫曾我の帶引圖
鳥居清信筆 細判丹繪 一枚 同 同 上

紙本版畫なりひらの大次郎圖
鳥居清信筆 細判丹繪 一枚 同 同 上

紙本版畫若菜圖
鳥居清信筆 細判丹繪 一枚 同 同 上

紙本版畫大坂色子圖
鳥居清信筆 細判丹繪 一枚 同 同 上

紙本版畫編木の音圖
奥村政信筆 大々判長漆繪 一枚 財團法人 齋藤報恩會

紙本版畫しのだのもり圖
奥村政信筆 細判漆繪 一枚 同 上

紙本版畫書物いろいろ圖
西村重長筆 細判漆繪 一枚 同 上

紙本版畫孔雀圖
西村重長筆 細判漆繪 一枚 同 上

紙本版畫京娘圖
廣瀨重信筆 細判漆繪 一枚 同 上

紙本版畫助六圖
奥村政信筆 細判紅繪 一枚 同 上

紙本版畫湯あがり圖
石川豐信筆 細判紅繪 一枚 同 上

紙本版畫鳥追圖
石川豐信筆 大々判紅繪 一枚 同 上

紙本版畫妓樓の酒もり圖
石川豐信筆 大々判紅繪 一枚 同 上

紙本版畫若侍圖
鳥居清信筆 大判細紅繪 一枚 同 上

紙本版畫なごや小山三(坂東彦三郎)圖
鳥居清信筆 細判紅繪 一枚 同 上

紙本版畫なごや小山三(市村龜子)圖
鳥居清信筆 細判紅繪 一枚 同 上

紙本版畫白びょうし圖
鳥居清信筆 細判紅繪 一枚 同 上

紙本版畫竹林七妍圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫とみよしや前圖
中判紅繪 一枚 同 上

紙本版畫見立陶朱公圖
中判紅繪 一枚 同 上

紙本版畫見立三酸圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫遊女に玉づさ圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫螢狩圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫紅葉狩圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫驚娘圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫機織圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫大門屋木戸口圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫大門屋木戸口圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫大門屋木戸口圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫大門屋木戸口圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫大門屋木戸口圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫大門屋木戸口圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫大門屋木戸口圖
中判錦繪 一枚 同 上

紙本版畫綿くり圖 錦不春信筆 中判錦繪

紙本版畫風流七小町清水圖

錦不春信筆 柱繪判錦繪

紙本版畫物草太郎圖

一筆齋文調筆 細繪判錦繪

紙本版畫美人に若衆圖

一筆齋文調筆 細繪判錦繪

紙本版畫かきやおせん圖

一筆齋文調筆 細繪判錦繪

紙本版畫今様藝者風俗たち話圖

磯田湖龍齋筆 問判錦繪

紙本版畫春の書齋圖

磯田湖龍齋筆 中判錦繪

紙本版畫蚊遣圖

磯田湖龍齋筆 中判錦繪

紙本版畫雨中松に鷺圖

磯田湖龍齋筆 中判錦繪

紙本版畫雪中鳥鷺圖

磯田湖龍齋筆 中判錦繪

紙本版畫きぬきぬ圖

磯田湖龍齋筆 柱繪判錦繪

紙本版畫おにご圖

磯田湖龍齋筆 柱繪判錦繪

紙本版畫沙くみ圖

勝川春英筆 細繪判錦繪

紙本版畫鐘建立圖

勝川春英筆 細繪判錦繪

紙本版畫お夏狂亂圖

勝川春英筆 細繪判錦繪

紙本版畫お夏圖

勝川春英筆 細繪判錦繪

紙本版畫小鳥賣圖

勝川春英筆 大判錦繪

紙本版畫寫の葉圖

勝川春英筆 大判錦繪

紙本版畫睨み合圖

勝川春英筆 問判錦繪

紙本版畫旅姿の土圖

歌川豐春筆 細繪判錦繪

紙本版畫浮繪品川の妓樓圖

歌川豐春筆 大々判横錦繪

紙本版畫五郎と五郎丸圖

東洲齋寫景筆 問判錦繪

財團法人
齋藤報恩會

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

紙 本

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

紙本版畫岩井喜代太郎の舞臺姿圖

東洲齋寫景筆 細繪判錦繪

紙本版畫山下金作の舞臺姿圖

東洲齋寫景筆 細繪判錦繪

紙本版畫市川高麗藏の舞臺姿圖

東洲齋寫景筆 雲母地大判錦繪

紙本版畫風龍絨の舞臺姿圖

東洲齋寫景筆 雲母地大判錦繪

紙本版畫げい者お松圖

鳥居清長筆 細繪判錦繪

紙本版畫當世遊里美人合橋中妓圖

鳥居清長筆 大判錦繪

紙本版畫隅田川渡船圖

鳥居清長筆 大判錦繪

紙本版畫六郷川渡船圖

鳥居清長筆 大判錦繪

紙本版畫濱町川岸の涼み圖

鳥居清長筆 大判錦繪

紙本版畫棧橋の涼み圖

鳥居清長筆 柱繪判錦繪

紙本版畫平六をふる藝者圖

鳥居清長筆 柱繪判錦繪

紙本版畫日傘をさす藝者圖

鳥居清長筆 柱繪判錦繪

紙本版畫菖蒲圖

歌川豐春筆 柱繪判錦繪

紙本版畫藤戸の故事圖

喜多川歌麿筆 大判錦繪

紙本版畫婦人相學拾遺かねつけ圖

喜多川歌麿筆 大判錦繪

紙本版畫五律から歌藝者龜吉圖

喜多川歌麿筆 大判錦繪

紙本版畫春興見立狐けん庄屋圖

喜多川歌麿筆 大判錦繪

紙本版畫錦織歌麿形新模様ふみ見圖

喜多川歌麿筆 大判錦繪

紙本版畫紅つけ圖

喜多川歌麿筆 大判錦繪

紙本版畫高名三美人圖

喜多川歌麿筆 雲母地大判錦繪

財團法人
齋藤報恩會

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

紙本版畫高砂圖喜多川歌麿筆	大判錦繪	一枚	財團法人 齋藤報恩會	紙本版畫二階の藝者と仲居圖 簗俊重筆 問判錦繪	一枚	財團法人 齋藤報恩會
紙本版畫山姥に金太郎圖 喜多川歌麿筆	大判長錦繪	一枚	同	紙本版畫磯の五羽鶴圖簗俊重筆 摺物	一枚	同
紙本版畫たかしまや久圖 喜多川歌麿筆 桂繪判錦繪	一枚	一枚	同	紙本版畫夏の宵圖歌川豐廣筆	一枚	同
紙本版畫二葉草七小町圖 喜多川歌麿筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫四條河原夕涼圖 歌川豐廣筆 大判錦繪	一枚	同
紙本版畫兄弟陸敷目出度三幅對圖 喜多川歌麿筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫役者舞臺之委繪やまとや圖 歌川豐國筆 雲母地大判錦繪	一枚	同
紙本版畫參詣の娘圖 勝川春潮筆 桂繪判錦繪	一枚	一枚	同	紙本版畫役者舞臺之委繪たきのや圖 歌川豐國筆 雲母地大判錦繪	一枚	同
紙本版畫參詣戻り圖 勝川春潮筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫勇み男圖 歌川國政筆 大判錦繪	一枚	同
紙本版畫出來秋圖勝川春潮筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫菖蒲草の着物着たる男圖 歌川國政筆 大判錦繪	一枚	同
紙本版畫豐年村圖勝川春潮筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫東錦美人合前髪を粧ふ娘圖 鳥居清榮筆 大判錦繪	一枚	同
紙本版畫女形俳優と藝者に仲居圖 勝川春英、勝川春樹合筆 問判錦繪	一枚	一枚	同	紙本版畫うつぼ猿圖 葛飾北齋筆 橫長判摺物	一枚	同
紙本版畫扇屋うち花扇圖 鳥又齋榮之筆 問判錦繪	一枚	一枚	同	紙本版畫詩歌寫真鏡少年行圖 葛飾北齋筆 大判長繪	一枚	同
紙本版畫花嫁と小娘圖 鳥又齋榮之筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫詩歌寫真鏡雪中行旅圖 葛飾北齋筆 大判長繪	一枚	同
紙本版畫風流六歌仙見立喜撰圖 鳥又齋榮之筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫芙蓉に雀圖 葛飾北齋筆 大判錦繪	一枚	同
紙本版畫鷹匠圖鳥園齋榮筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫あやめに蟲圖 葛飾北齋筆 大判錦繪	一枚	同
紙本版畫廊中美人競若松屋內綠木圖 鳥園齋榮筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫雪景山水圖 簗俊重筆 摺物判錦繪	一枚	同
紙本版畫扇屋花扇他所行圖 鳥園齋榮筆	三枚	三枚	同	紙本版畫富士川雪景圖 一立齋廣重筆 摺物判錦繪	一枚	同
紙本版畫風流五節句上巳の娘圖 鳥園齋榮筆	問判錦繪	一枚	同	紙本版畫白梅に綬帶鳥圖 一立齋廣重筆 大短冊判錦繪	一枚	同
紙本版畫あふきや内華人圖 五郷筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫八重櫻に小鳥圖 一立齋廣重筆 大短冊判錦繪	一枚	同
紙本版畫女房きどりの藝者圖 榮科齋長喜筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫海棠にいんこ圖 一立齋廣重筆 大短冊判錦繪	一枚	同
紙本版畫藝者圖榮科齋長喜筆	大判錦繪	一枚	同	紙本版畫鴛鴦圖 一立齋廣重筆 大短冊判錦繪	一枚	同
紙本版畫當世艶風拾形瀧尾二階圖 北尾政演筆 中判錦繪	一枚	一枚	同			

紙本版畫雪中蘆に鴨圖

一齋廣重筆 大短冊判錦繪

一枚

財団法人
齋藤報恩會

紙本版畫芍藥圖

一齋廣重筆 中短冊判錦繪

一枚

同 上

紙本版畫あやめに翡翠圖

一齋廣重筆 中短冊判錦繪

一枚

同 上

紙本版畫ふとみに鷺圖

一齋廣重筆 中短冊判錦繪

一枚

同 上

紙本版畫藤はかまに撫子圖

一齋廣重筆 中短冊判錦繪

一枚

同 上

紙本版畫江戸近郊八景圖

一齋廣重筆 大判錦繪

八枚

同 上

紙本版畫阿波鳴門の風景圖

一齋廣重筆 三枚短大判錦繪

三枚

同 上

紙本版畫武陽金澤八勝夜景圖

一齋廣重筆 三枚短大判錦繪

三枚

同 上

紙本版畫木曾路の山川圖

一齋廣重筆 三枚短大判錦繪

三枚

同 上

紙本版畫萩に登り鮎圖

一齋廣重筆 中短冊判錦繪

一枚

同 上

紙本版畫なまづ圖

一齋廣重筆 中短冊判錦繪

一枚

同 上

紙本版畫京都御所川岸圖

一齋廣重筆 大判錦繪

一枚

同 上

絹本著色白山權現像

長谷川信春筆 廿六歳筆ノ款アリ

一幅

石川縣能美郡苗代村 同羽昨郡一宮村

絹本著色十二天像

長谷川信春筆 廿六歳筆ノ款アリ

三面

同 正 覺 院

銅造阿彌陀如來及兩脇侍立像

中尊背部正安二年九月日ノ年記製造像結

三軀

千歲縣印旛郡清々井町

木造毘沙門天及脇侍吉祥天立像

中尊像西正應二年六月日造立ノ銘アリ

三軀

同船越村 多 門 院

文書典籍書蹟之部

紙本墨書源氏物語早蕨卷

一帖

東京府東京市小石川區雜司ヶ谷町 保 坂 潤 治

紙本墨書貫之集下斷簡

一幅

同世田谷區深澤町 長 尾 欽 彌

(石山切)おなしとこに)

色紙墨書家集斷簡(針切)(月をなかく)

彩牋墨書大色紙(月やう)

彩牋墨書古今集卷第三斷簡(傳俊頼筆)

首二古今和歌集卷第三トアリ

紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡

(伊豫切)(紅紙)

色紙墨書彩色紙(しらなみの)

紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡

(伊豫切)(箱)

紙本墨書伏見天皇宸翰斷簡

(信濃切)(夜墨)

太刀銘正恒

工藝品之部

刀 劔 之 部

薄肉彫馬師皇圖臘銀小柄銘乘意(花押)

古九谷色繪山歸來尾長島圖臺鉢

古九谷色繪鳳凰圖大皿

古九谷色繪煙草盆

陶製肩衝茶入銘千壽 傳春慶作

古九谷色繪石疊文大皿

銅製鑾文立鳥燈籠アリ

陶製加彩鍾

陶製三彩鶏頭餅

銅製鑾文白銘アリ

銅製鑾文尊銘アリ

藤繪芒圖文庫

繡製阿彌陀三尊像

考古學資料之部

一幅 京都府京都市東山区清水四丁目 水野 猛 男

一幅 大阪府大阪市東區伏見町三丁目 戸 田 彌 七

一幅 同豐能郡池田町 塩 野 義 三 郎

一幅 兵庫縣神戸市須磨區櫻木町三丁目 小 曾 根 貞 松

一幅 愛知縣名古屋市中區區武平町二丁目 伊 藤 傳 七

一幅 同中區南榮名町 加 藤 勝 太 郎

一幅 同御器所町 後 藤 幸 三

一口 東京府東京市赤坂區新町五丁目 内 田 良 平

一本 東京府東京市京橋區木挽町一丁目 小 倉 陽 吉

一箇 同目黒區駒場町 俣 前 田 利 爲

一枚 同澁橋區下落台一丁目 松 永 安 左 衛 門

一箇 同荒川區日暮里町九丁目 長 野 守 敏

一箇 大阪府大阪市東區伏見町三丁目 戸 田 彌 七

一枚 同高麗橋二丁目 加 賀 正 太 郎

一箇 兵庫縣武庫郡御影町 黒 川 幸 七

一箇 同住吉村 財団法人白鷺美術館

一箇 同 上

一箇 滋賀縣神郡北五個莊村 財団法人 藤 井 齊 成 會

一箇 同 上

一合 石川縣金澤市木町一丁目 大 垣 昌 訓

一幅 同鹿島郡西湊村 西 念 寺

名	稱	員數	所有者	所在地	品名	員數	所有者住所及氏名	品名	員數	所有者住所及氏名
石造寶塔		一基	京都府京都市東山区圓山町	京都府京都市東山区圓山町	絹本著色金剛界胎藏界曼荼羅圖	二幅	東京府京都市荒川區日暮里九丁目	渡邊長男		
石造寶篋印塔(阿難塔)		一基	京都府京都市東山区圓山町	京都府京都市東山区圓山町	絹本著色山水書畫帖(兼其昌筆)	一帖	京都府京都市上京區小松原北町	大橋介二郎		
「文永二年乙丑八月八日建之」ノ刻銘アリ		一基	同右京區梅ヶ畑奥殿町	同右京區梅ヶ畑奥殿町	絹本著色八仙圖	二幅	神奈川縣横浜市鶴見區東寺尾町	高野正英		
石造十三重塔		一基	大阪府豐能郡桑野村	大阪府豐能郡桑野村	絹本著色玄奘法師行脚圖	一幅	同右區本牧町	原富太郎		
石造寶篋印塔		一基	同	同	紙本著色妙法蓮華經普賢勸發品	一卷		同		
「正安元年十二月廿五日願主藤原口正」ノ刻銘アリ		一基	同	同	紙本著色地獄草紙	一卷		同		
石造寶塔		一基	神奈川縣鎌倉市鎌倉町	神奈川縣鎌倉市鎌倉町	絹本著色一字金輪像	一幅		同		
「貞和三年十月日願主長田氏女一條生年八十三歲」ノ刻銘アリ		一基	別願寺	別願寺境内	絹本著色小大君像	一幅		同		
石造寶篋印塔		一基	愛知縣海部郡津島町	愛知縣海部郡津島町	絹本著色後鳥羽天皇宸影	一幅		同		
「正安四年壬寅十月日大願主阿村」ノ刻銘アリ		一基	寶壽院	寶壽院境内	附松下文書六卷一幅一帖	一幅		同		
石造寶塔		一基	滋賀縣蒲生郡櫻川村	滋賀縣蒲生郡櫻川村	絹本著色多武峰曼荼羅圖	一幅		同		
石造五輪塔		一基	同	同	源氏物語浮舟之卷白描畫入册子	一册		同		
「嘉元二年甲辰九月五日」ノ刻銘アリ		一基	同	同	紙本著色伊勢物語繪卷	一卷		同		
石造五輪塔		一基	同	同	紙本著色山水圖	一幅		同		
「貞和元年己丑八月廿九日」ノ刻銘アリ		一基	同	同	紙本著色山水圖(横川ノ贊アリ)	一幅		同		
					紙本墨畫維摩像(文清筆)	一幅		同		
					紙本著色四季山水圖(日本禪人等揚ノ記アリ)	四幅		同		
					紙本墨畫蘆雁圖(興悅筆)	二幅		同		
					紙本著色伯牙彈琴圖(野元信筆)	一幅		同		
					紙本墨畫布袋圖(周德筆)	一幅		同		
					紙本著色孔雀立義圖(尾形光琳筆)	一基		同		
					絹本著色宇治拾遺物語繪卷(吉良勝筆)	一卷		同		
					絹本著色十王圖	二幅		同		
					紙本著色四季草花圖(渡邊始興筆)	一雙		同		
					紙本著色歌舞伎圖(傳菱川師宣筆)	一雙		同		
					紙本著色四季日待卷(英一筆)	一卷		同		
					正徳元年冬日ノ自筆追記アリ			同		
					絹本著色普賢十羅刹圖(冷泉爲恭筆)	一幅		同		
					安政二乙卯年八月六日ノ年記アリ			同		
					絹本著色貓圖(傳毛益筆)	一幅		同		

文部省告示第四百二十一號 昭和十年十二月十三日

繪畫之部

紙本著色年中行事著座圖卷

絹本著色愛染明王像

紙本著色曾我物語圖(六曲屏)

紙本著色星光寺緣起繪卷

紙本著色因幡堂藥師緣起繪卷

絹本著色騎獅文殊像

絹本著色騎獅文殊像

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙 (詠七夕言志和歌)	一幅	公許毛利元昭	紙本墨書毛利元就連歌詔巴垂 元龜三年二月書寫ノ奥書アリ	一卷	公許毛利元昭
絹本墨書後水尾天皇宸翰御色紙 (おはれいかに)	一幅	同	色紙墨書萬葉集卷第四斷簡 (梅馬切ノ從傳)	一幅	東京府東京市芝區 高輪南町 伯野渡邊昭
紙本墨書後水尾天皇宸翰御色紙 (吹結)	一幅	同	彩牋墨書古今集卷第四斷簡 (傳後賴朝ノ題不知)	一幅	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙 (詠庭々尋花和歌)	一幅	同	彩牋墨書古今集第十四斷簡 (木阿彌切ノいはりの)	一幅	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰御色紙 (ゆらのとの)	一幅	同	色紙墨書道濟集斷簡 (紙撫切ノまかきの)	一幅	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰御消息 表裏裏ニ「辛未九トアリ」	一幅	同	紙本墨書家集斷簡 (計切ノわかために)	一幅	同
紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙 (詠伴松榮久和歌)	一幅	同	紙本墨書萬葉集卷第十二斷簡 (尼崎切ノ大王之)	一幅	同
紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(尋茶)	一幅	同	紙本墨書新撰朗詠集斷簡(山名切ノ更衣)	一幅	同
紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙(慶賀)	一幅	同	手鑑 二百九十二葉 中ニ傳後賴朝筆古今集切にまかり東大寺切 の維新鳥丸切(まちいつる)中院切(もて おそひ)白河切(ひとにわすられ)アリ 箱ニ住吉具慶ノ由來記アリ	一帖	同
紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙 (詠密祝和歌 詠梅花久芳和歌)	二幅	同	紙本墨書大般若經卷第二百七 「藥師等印」ノ朱印「藥師等金堂」ノ墨印アリ	一卷	同山門前町 松田福一郎
紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙 (詠陽春布德和歌)	一通	同	紺紙金字摩訶僧祇律卷第六(神護寺經)	一卷	同
繪料紙墨書傳伏見天皇宸翰新古今集拔書 三條西實隆ノ跋アリ	一卷	同	紙本墨書眞言儀軌問答	一卷	同
紙本墨書法華經卷第六	一卷	同	紙本墨書立川流儀軌殘卷 正徳五年六月日書寫ノ奥書アリ 紙背正徳二年假名屬	一卷	同
紙本墨書藤原定家筆兵範記斷簡 (自仁安二年七月九日至同廿八日)	一幅	同	紙本墨書古今集卷第一斷簡 (高野切ノ寛平ノ)	一幅	同赤坂區福吉町 俣野黒田長成
紙本墨書西瀧子雲墨蹟二月十日	一幅	同	紙本墨書古今集卷第一斷簡 (高野切ノ寛平ノ)	一幅	同
紙本墨書和漢朗詠集 下卷ニ正徳元年書寫ノ奥書アリ	二卷	同	紙本墨書小大君集(御禮切ノ秋つかた)	一幅	同
紙本著色歌仙切 讀道之	一幅	同	紙本墨書後撰集卷第三斷簡 (白河切ノつねにまで)	一幅	同
紙本墨書豐臣秀吉書狀 即月十二日(天正十一年)毛利輝元宛	一幅	同	大手鑑五百二十五葉 中ニ高野切(いと)多賀切(みる人も)元勝校 本萬葉集切(見繁有)同切(まさらたに)アリ	一帖	同
紙本墨書朝鮮王國書 嘉祿二十年正月日大内義隆宛	一卷	同	手鑑毫戰二百一葉 中ニ高野切(へへ)中院切(後帳の)日野切 (ものおもひ)アリ	一帖	同
短冊手鑑 第一帖傳後字多天皇宸翰(題導以下 三百五十九葉) 第二帖恒朝親王以下三百六十六葉 第三帖足利親王以下三百六十六葉 第四帖淨辨以下三百六十四葉	五帖	同			

刀銘國廣	一口	東京府東京市麻布區今井町	男爵 三井高公
太刀銘備中國	一口	同村木町	伯爵 眞田幸治
太刀銘吉包作	一口	同牛込區市谷河田町	男爵 徳川義恕
太刀銘長光	一口		同上
劔銘和州高市金吾藤貞吉	一口		同上
嘉慶四年巳七月日			
刀無銘傳貞宗	一口		同上
太刀銘助包	一口	矢來町	伯爵 酒井忠克
刀無銘傳國行	一口		同上
短刀銘相模國住人廣光	一口	同小石川區丸山町	子爵 戸澤正己
延文三年十一月日			同上
太刀銘國行	一口	同目黒區駒場町	侯爵 前田利爲
刀金象景銘貞次	一口	同目黒區千駄ヶ谷	同上
名物小清江			
短刀朱銘貞宗	一口	同鎌倉區千駄ヶ谷	公爵 徳川家達
木阿花押			
名物朱判貞宗			
刀銘於南紀重國造之	一口	同中野區本町通六丁目	子爵 土屋正直
太刀銘恒次	一口		同上
短刀銘筑州住人弘	一口	同杉並區馬橋三丁目	竹中次郎
觀應元年八月日			
太刀銘豐後國宿務作	一口	同大坂府大坂市天王寺區上本町八丁目	子爵 秋元春朝
太刀銘安清	一口	同北河内郡枚方町	山田卓爾
刀無銘傳行光	一口	同住吉區阿部野筋三丁目	田中太介
刀無銘傳助直	一口	兵庫縣神戸市美合區鹽通	木村岩五郎
短刀銘國光	一口	同兵庫區貝北山町二丁目	山口重一
刀無銘傳當麻	一口	新潟縣新潟市本町通一番町	風間要吉
刀無銘傳左	一口	奈良縣奈良市雜司町	同
短刀銘左	一口	同奈良縣奈良市雜司町	新納忠之介
刀朱銘義弘	一口	愛知縣名古屋市中區松重町	伊藤平左衛門
木阿花押			
名物松井江			
太刀銘成高	一口	青森縣弘前市鹽分町	那須資豐

太刀銘備前國福興住左兵衛尉長則造
永仁五年十月日

太刀銘國行

太刀銘來國光

工藝品之部

磁製色繪三果圖皿「延寶年製」ノ銘アリ

陶製色繪寶螺香爐野村仁清作

陶製油滴天目茶碗

陶製井戸茶碗銘奈良

陶製春慶茶入銘荒木

薛繪折枝圖螺鈿棧花盆

銅製飛禽走獸狻猊鏡

有玉辟邪云々ノ銘アリ

陶製犬

陶製牛

薛繪柳燕圖鞍
永正十三年十一月ノ銘及伊勢貞泰ノ花押アリ

磁製色繪草花圖大皿傳酒井田柿右衛門作

磁製古九谷色繪牡丹鳥圖平鉢

磁製色銅島桃圖大皿

堆朱牡丹圖鼓箱象谷作

嘉永六年野村親信云々ノ銘アリ

一角製印籠象谷作 保玄仲秋ノ銘アリ

推朱松ケ浦香合象谷作

蒔繪塗料紙箱並硯箱象谷作

嘉永七年ノ銘アリ

螺鈿唐草卅字十字文簞

銅製變樣羽狀獸文地山字鏡

傳安飯倉露無出土

銅製變形三虺文鏡

銅製重圈精白鏡潔精白云々ノ銘アリ

銅製規矩文四神鏡

新興辟邪建明堂云々ノ銘アリ

一口 山形縣酒田市本町 本間光正

一口 石川縣金澤市田丸町 石黒久呂

一口 同山縣岡山市下ノ町 小林種次

一枚 東京府東京市芝區高輪南町 横河民輔

一箇 同藤布區鳥居坂町 男爵 岩崎小彌太

一箇 同赤坂區福吉町 侯爵 黒田長成

一箇 同同 同上

一箇 同同 同上

一枚 同青山南町六丁目 武内金平

一箇 同牛込區戸山町 反町茂作

一箇 同本郷區駒込林町 有尾佐治

一背 同目黒區駒場町 侯爵 前田利爲

一枚 同鎌倉區羽澤町 鹽原又策

一枚 同同 同上

一合 同豊島區駒込四丁目 伯爵 松平頼壽

一箇 同同 同上

三合 同同 同上

一具 同同 同上

一合 同荒川區日暮里九丁目 長野守敏

一面 京府東京市四谷區東調院丸太町下ル三本木町 守屋孝藏

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

一面 同同 同上

銅製七乳獸帶鏡 <small>銘アリ</small>	一面	守屋孝藏
銅製畫文帶神獸鏡 <small>天王日月ノ銘アリ</small>	一面	同
銅製瑞圖八花鏡	一面	同
磁製素三彩龍文花瓶 <small>「大明萬曆年製」ノ銘アリ</small>	一箇	小澤龜三郎
薛繪牡丹唐草菊桐紋散棚	一基	同
薛繪鉛入梅虎溪三笑圖棚	一基	同
薛繪三盛龜甲花菱紋散手宮	一合	同
桐製著色波蛇籠圖亂宮尾形乾山畫	一箇	同
著色畫扇面貼付手宮尾形光琳畫	一合	同
薛繪螺鈿浮線綾文手宮	一合	同
薛繪鉛入樵夫圖硯宮	一合	同
銅製鑲金方格規矩文八乳鏡 <small>製日月云々ノ銘アリ</small>	一面	住友吉左衛門
銅製狻猊鏡 <small>仁壽縣云々ノ銘アリ</small>	一面	同
銅製海獸葡萄鏡	一面	同
銅製銀背鑲金舞鳳狻猊八稜鏡 <small>傳河南省洛陽郊外麟山馬坡出土</small>	一面	同
銅製寶相華文八稜鏡	一面	同
銅製瑞花鸞鴛八稜鏡 <small>鏡面ニ佛像ノ毛彫アリ</small>	一面	同
陶製燈籠萬延年射和萬古窯製ノ銘アリ	一基	三重縣四日市市中
銅製龍鳳雲山文臺敦立旗形ノ銘アリ	一箇	滋賀縣神郡北五箇莊村
銅製鳳蓋匣 <small>山西省李峪出土</small>	一箇	同
銅製轆牛 <small>山西省李峪出土</small>	一箇	同
銅製鑲金鳳鈕能脚盆蓋蓋ニ彩文アリ	一箇	同
銅製龍鑲金文帶銘アリ	一箇	同
薛繪波水車圖雙六盤	一基	和歌山縣和歌山市島崎町

奈良縣古 <small>（金銅鑲佛殘銅金山彦像 野郡金峰<small>（金銅鑲佛殘銅王權氏像 山出土品<small>（銅鑲湖州鏡鏡面ニ鐵王權氏像ノ毛彫アリ</small></small></small>	三面	京都府京都市上京區烏丸通下長者町上ル龍前町	吉田文治
---	----	-----------------------	------

銅製畫文帶神獸鏡 <small>善作明意云々ノ銘アリ</small>	一面	大阪府豐能郡池田町	岸上善五郎
奈良縣 <small>（銅製漢唐飛雀文鏡鏡面ニ鐵王權氏像ノ毛彫アリ</small>	一面	同	同
吉野郡 <small>（銅製龜鳥文鏡鏡面ニ水分姫出上品<small>（銅製雙鳥文五花鏡鏡面ノ毛彫アリ</small></small>	五面	同	同
銅製獸首鏡 <small>延壽七年ノ銘アリ</small>	一面	兵庫縣西宮市般若町	辰馬悅藏
銅製半圓方形文帶神獸鏡 <small>寶曆三年ノ銘アリ</small>	一面	同	同
附、銅製變鏡殘闕一面 <small>傳支那南京郊外出土</small>	一面	銅鏡殘闕一面	同
銅洗 <small>建安二年ノ銘アリ</small>	一箇	同	同
銅洗 <small>永初元年ノ銘アリ</small>	一箇	同	同
銅洗 <small>永元三年ノ銘アリ</small>	一箇	同	同
十八間片白星兜鉢 <small>八幡座唐鹿等後補精圓形鑿孔二箇アリ</small>	一頭	同	同
黑韋威胸白紅白裾二段紅腹卷太袖付 寶帳佩盾家地後補	一領	同	同
小形鐵殘闕胸板一、敍走一、梅柳鳩尾一	一具	同	同
銅製雙鳥花枝鏡 <small>「高麗國金叶道」ノ銘アリ</small>	一面	同	同
銅製半圓方形帶神獸鏡 <small>泰始十年ノ銘アリ</small>	一面	同	同
四神附飾土器 <small>群馬縣勢多郡荒砥村大字西大塚字二兒山出土</small>	一箇	群馬縣勢多郡	荒砥村
銅製十一面觀音像懸佛 <small>裏ニ嘉祿三年二月廿五日奉歸ノ銘アリ</small>	一面	群馬縣勢多郡	窪野泰一郎
銅製弩機木臂附 <small>支那出土</small>	一箇	滋賀縣神郡北五箇莊村	藤井齊成會
銅燈 <small>建初八年ノ銘アリ</small>	一箇	同	同
銅製鳳鈕文薰爐 <small>建平四年ノ銘アリ</small>	一箇	同	同
銅洗 <small>建和元年ノ銘アリ</small>	一箇	同	同
傳福岡 <small>（銅製神人車馬畫象鏡口氏作鏡ノ銘</small>	一面	同	同
郡古墳 <small>（銅製畫文帶神獸鏡銘アリ</small>	一面	同	同
出土品 <small>（銅製殘形四獸鏡</small>	一面	同	同
金銅十一面觀音釋迦聖觀音像懸佛 <small>裏ニ建元元年八月六日奉歸ノ銘アリ</small>	一面	長野縣東筑摩郡坂下村	岩殿寺

國寶修理

國寶保存法第十四條に依り、國寶修理費豫算を以て、昭和十年度（會計年度）に修理を補助するに決定せる國寶寶物並に建造物左の如し。

寶物

昭和十年六月決定（修理補助交付額一、〇〇九圓二五）

品名	員數	所在地	寶物	數量	修理場所	修理後
中觀音左右猿鶴圖	三幅	京都府京都市上京區紫野大德寺町	絹本著色不動明王二童子像	一幅	滋賀縣滋賀郡坂本村	延曆寺
絹本墨書掛幅	一	新湯縣三條市	絹本著色不動明王二童子像	一幅	同大津市石山町	石山寺
木造阿彌陀如來立像	一	同佐渡郡真野村	紙本墨書施入狀	一卷	和歌山縣有田郡田栖川村	施無畏寺
木造藥師如來坐像	一	同畑野村	紙本墨書置文	一卷	同	同
木造十一面觀音立像	二	廣島縣世羅郡甲山町	絹本著色武田信虎夫人像	一幅	山梨縣甲府市愛宕町	長禪寺
木造狛犬	一對	同御調郡八幡村	絹本著色當麻曼茶羅	一幅	秋田縣平鹿郡角間川町	淨蓮寺
木造大日如來坐像	一	三重縣津市	紙本墨書古葉略類聚鈔	四冊	奈良縣奈良市法蓮町	興福院
木造虛空藏菩薩坐像	一	同名賀郡猪田村	紙本墨書阿彌陀佛過料資財帳	一卷	同雜司町	東大寺
木造五大明王像	五	同神戸村	二天王像絹本淡彩掛幅	二幅	同登大路町	興福寺
木造俊乘上人坐像	一	同阿山郡阿波村	絹本著色地藏十王像	一幅	同磯城郡初瀬町	長谷寺
鐵造阿彌陀如來坐像	一	群馬縣世多郡芳賀村	絹本著色春日曼茶羅圖	一幅	同	能滿院
絹本著色十六羅漢像	十六幅	兵庫縣明石郡伊川谷村	絹本著色大威德明王像	一幅	同多武峯村	談山神社
昭和十一年二月決定（修理補助交付額四、九三七圓三二）			御願文紙本墨書	一卷	同吉野郡吉野町	吉水神社
絹本著色十六羅漢像	十六幅	京都府京都市左京區花園妙心寺町	絹本著色東征繪卷	五卷	同生駒郡都跡村	唐招提寺
絹本著色十王像	十幅	同左京區嵯峨	絹本著色釋迦八大菩薩像	一幅	同矢田村	松尾寺
紙本墨書上宮聖德法王帝說	一卷	同東山区林下町	絹本著色佛涅槃圖	一幅	同宇陀郡榛原町	宗祐寺
木造藥師如來立像	一	同綴喜郡八幡町	紫綾金銀泥繪兩界曼茶羅圖	二幅	同高市郡高取町	子島寺
木造釋迦如來坐像	一	同	絹本著色一字金輪曼茶羅圖	一幅	同	南法華寺
木造阿彌陀如來立像	一	同	絹本著色太子繪傳	八幅	同高市村	橘寺
絹本著色佛涅槃圖	一	同	絹本著色當麻曼茶羅緣起	二幅	同北葛城郡當麻村	當麻寺
太刀	一口	愛知縣海部郡津島町	木造西大門勸額	一面	同奈良市雜司町	東大寺
太刀	一口	同額田郡常磐村	木造地藏菩薩立像	一	同登大路町	興福寺
			木造多聞天立像	一	同	同
			木造寺門勸額	一	同法華寺町	海龍王寺
			木造聖觀音立像	一	同	瑞景寺
			木造十一面觀音立像	一	同高御門町	西光院
			木造彌勒菩薩坐像	一	同生駒郡都跡村	藥師寺
			木造帝釋天立像	一	同平城村	秋篠寺
			木造大悲菩薩坐像	一	同都跡村	唐招提寺

古美術

乾漆維摩居士坐像

建遺物

奈良縣奈良市法華寺町

法華寺

妙心寺(伽藍、佛殿、法堂、鐘樓、經藏、勸使門、寢室、小方丈、庫裡)

京都市右京區花園妙心寺町

妙心寺

昭和十年六月決定(修理補助交付額七四、三七九圓六九)

東福寺禪堂

京都市東山区本町通十五丁目

東福寺

玉鳳院四脚門

同左京區南禪寺福地町

玉鳳院

智恩院小方丈附步廊

同林下町

知恩院

知恩院大方丈

同東山区林下町

知恩院

醍醐寺經藏

同伏見區醍醐

醍醐寺

法觀寺塔婆

同八坂上町

法觀寺

玉村八幡宮本殿

群馬縣佐波郡玉村町

玉村八幡

清水堂本堂、西門

同清水一丁目

清水寺

金櫻神社東宮本殿、中宮本殿

山梨縣中巨摩郡宮本村

金櫻神社

高臺寺開山堂、靈屋、表門

同下河原町

高臺寺

御上神社樓門

滋賀縣野州郡三上村

御上神社

六波羅密寺本堂

同鶴橋町

六波羅密寺

筑摩神社本殿

長野縣松本市筑摩

筑摩神社

勸修寺書院

同山科親修寺仁王堂町

勸修寺

瑞龍寺法堂並佛殿總門

同北安曇郡大町

瑞龍寺

東福寺山門附廻廊

同本町十五丁目

東福寺

瑞龍寺法堂並佛殿總門

富山縣高岡市

瑞龍寺

醍醐寺清瀧堂、拜殿、藥師堂

同伏見區醍醐

醍醐寺

愛宕念佛寺本堂

神奈川縣鎌倉郡鎌倉町

愛宕念佛寺

三寶院(庫裡、表書院、宸殿、藏摩堂)

同

三寶院

延曆寺大乘戒壇院堂

靜岡縣濱松市利町

延曆寺

三寶院(庫裡、表書院、宸殿、藏摩堂)

同

三寶院

國法保存法第十四條に依り災害地方被害國寶建造物維持修理の爲、昭和十年度に於て左記の建造物に補助金を交付する事を決定せり。

滋賀縣滋賀郡坂本村

延曆寺

萬福寺(伽藍、佛殿、法堂、祖師堂、齋堂、鐘樓、三門、法堂、東方丈、西方丈)

同宇治郡宇治村

萬福寺

昭和十年六月決定(修理補助交付額一八六、六三四圓八〇)

教王護國寺

京都府京都市下京區九條町

教王護國寺

妙喜庵書院及數寄屋

同乙訓郡大山崎村

妙喜庵

本願寺

同本願寺門前町

本願寺

寶積寺塔婆

同同加佐郡志樂村

寶積寺

大德寺

同同上京區紫野大德寺町

大德寺

金剛院塔婆

同同久世郡佐山村

金剛院

真珠庵通儒院方丈

同同上京區紫野大德寺町

真珠庵

雙栗神社本殿

同宇治治町

雙栗神社

孤篷庵本堂書院及忘荃

同同上京區紫野大德寺町

孤篷庵

宇治上神社社殿、拜殿

同大阪府南河内郡川西村

宇治上神社

大報恩寺本堂

同同上京區紫野大德寺町

大報恩寺

錦織神社本殿

同同陽丘町

錦織神社

仁和寺本堂、塔婆、御影堂、二王門

同同上京區紫野大德寺町

仁和寺

勝靈院塔婆

同同泉南郡上三郷村

勝靈院

真珠庵通儒院方丈

同同上京區紫野大德寺町

真珠庵

意賀美神社本殿

同同兵庫縣加東郡米田村

意賀美神社

孤篷庵本堂書院及忘荃

同同上京區紫野大德寺町

孤篷庵

朝光寺本堂

同同奈良縣生駒郡北俊村

朝光寺

大報恩寺本堂

同同上京區紫野大德寺町

大報恩寺

長弓寺本堂

同同奈良縣生駒郡北俊村

長弓寺

仁和寺本堂、塔婆、御影堂、二王門

同同上京區紫野大德寺町

仁和寺

春日神社着到殿

同同愛知縣額田郡常磐村

春日神社

寶嚴寺觀音堂、附向唐門渡廊
延曆寺大乘戒壇院堂

滋賀縣東淺井郡竹生村 寶嚴寺
同滋賀郡坂本村 延曆寺

紙本墨畫竹林七賢圖 模貼付 十六面 京都府京都市東山区小松町 建仁寺

淨妙寺塔婆

和歌山縣有田郡箕島町 淨妙寺

紙本墨畫花鳥圖 模貼付六壁貼付 八面 同 同 同

松生院本堂

同和歌山市片岡町 松生院

紙本淡彩琴棋書畫圖 模貼付八壁貼付二 十面 同 同 同

天滿神社本殿

同和歌浦 天滿神社

紙本墨畫雲龍圖 模貼付 八面 同 同 同

昭和十一年二月決定(修理補助交付額一、二八九圓六八)
延曆寺大乘戒壇院堂 滋賀縣滋賀郡坂本村 延曆寺

國寶保存法第十四條に依り災害地方被害國寶維持修理の爲昭和十年度に於て左記の寶物に補助金を交付する事を決定せり。

昭和十年六月決定(修理補助交付額五五六圓二〇)

朝鮮寶物古蹟名勝天然記念物保存令ニ依り昭和十年度指定セラレタル寶物及古蹟

左ノ如シ

寶物 五月二十四日指定

開城善竹橋	一基	京畿道開城府元町	槐山彌勒堂里五層石塔	一基	忠清北道槐山郡上宅面彌勒里五六番
玄化寺碑	一基	京畿道開豐郡嶺南面玄化里九〇番	槐山彌勒堂里石佛立像	一基	忠清北道槐山郡上宅面彌勒里五八番
玄化寺址七層石塔	一基	京畿道開豐郡嶺南面玄化里八七番	槐山新豐里磨崖佛座像	二基	忠清北道槐山郡延豐面院豐里山一二四番ノ一
靈通寺址西三層石塔	一基	京畿道開豐郡嶺南面玄化里二一六番	忠州邑內鐵佛座像	一基	忠清北道忠州郡忠州邑榮町一一六番
靈通寺址東三層石塔	一基	京畿道開豐郡嶺南面玄化里二一六番	天興寺址幢竿支柱	一基	忠清南道天安郡聖居面天興里二三四番
靈通寺址大覺國師碑	一基	同	安國寺址石佛立像	三基	忠清南道瑞山郡貞美面壽堂里一〇〇番
靈通寺址五層石塔	一基	同	安國寺址石塔	一基	同
麗州倉里三層石塔	一基	京畿道麗州郡州內面倉里一〇二番ノ一	普願寺址石槽	一個	忠清南道瑞山郡雲山面龍賢里一五〇番
麗州下里三層石塔	一基	京畿道麗州郡州內面下里一七八番ノ二	普願寺址幢竿支柱	一基	忠清南道瑞山郡雲山面龍賢里一〇五番
坡州虎尾里石佛立像	二基	京畿道坡州郡廣灘面龍尾里山八番	普願寺址五層石塔	一基	忠清南道瑞山郡雲山面龍賢里一一九番
三田渡清太宗功德碑	一基	京畿道廣州郡中堡面松坡里一八七番	普願寺法印國師寶乘塔	一基	同
師子頻迅寺石塔	一基	忠清北道堤川郡寒水面松界里二〇三番	普願寺法印國師寶乘塔碑	一基	同
			普光寺重報碑	一基	忠清南道扶餘郡林川面加神里八〇番
			扶餘邑南石佛座像	一基	忠清南道扶餘郡扶餘面東南里九七番
			光州邑西五層石塔	一基	全羅南道光州郡光州邑總岡町一六番ノ二

古 美 術

光州邑東五層石塔	一基	全羅南道光州郡瑞坊面東溪里四四八番
開仙寺址石燈	一基	全羅南道潭陽郡南面鶴仙里五九三番
中興山城三層石塔	一基	全羅南道光陽郡玉龍面雲坪里山二二番ノ二
清道鳳岐洞三層石塔	一基	慶尙北道清道郡豐角鳳面岐洞七一九番ノ四
安東玉洞三層石塔	一基	慶尙北道安東郡安東邑玉洞一五三番
安東泥川洞石佛像	一軀	慶尙北道安東郡安東邑泥川洞山二番
榮州石橋里石佛像	二軀	慶尙北道榮州郡順興面石橋里一六一番
尙州化達里三層石塔	一基	慶尙北道尙州郡沙伐面化達里四二二番
尙州曾村里石刻佛立像	一軀	慶尙北道尙州郡咸昌面曾村里塔洞二五八番ノ二
尙州伏龍里石佛座像	一軀	慶尙北道尙州郡尙州邑伏龍里三五八番
尙州曾村里石佛座像	一軀	慶尙北道尙州郡咸昌面曾村里塔洞二五八番ノ二
掘佛寺址石刻佛像	一群	慶尙北道慶州郡川北面東川里四番
慶州斗笠里磨崖石佛	三軀	慶尙北道慶州郡內南面栗洞里山六〇番
慶州普門里幢竿支柱	一基	慶尙北道慶州郡內東面普門里八五六番
慶州九黃里三層石塔	一基	慶尙北道慶州郡南東面九黃里一〇二田一〇三田
慶州南山里三層石塔	二基	慶尙北道慶州郡南東面南山里二二七番ノ二田二二七番ノ三田
高仙寺址三層石塔	一基	慶尙北道慶州郡內東面暗谷里二〇〇番
鑿藏寺阿彌陀佛造像事蹟 碑頭首及龜趺	二基	慶尙北道慶州郡內東面暗谷里山一番
鑿藏寺址石塔	一基	慶尙北道慶州郡內東面暗谷里山一番
慶州三郎寺址幢竿支柱	一基	慶尙北道慶州郡慶州邑城乾里四二五番伏四二九番田
慶州羅原里五層石塔	一基	慶尙北道慶州郡見谷面羅原里六七二番
淨惠寺址十三層石塔	一基	慶尙北道慶州郡江西面玉山里南川一六五四番
般君寺元景王師碑	一基	慶尙南道陝川郡伽倻面耶川里塔洞六三〇番
月光寺址三層石塔	二基	慶尙南道陝川郡冶爐面月光里三六九番

古

蹟

五月二十四日指定

平壤七層石塔	一基	平安南道平壤府慶上里一五番ノ一堡博物館構內
龍川西門外石幢	一基	平安北道龍川郡東下面社興洞山七番
龍川陀羅尼石塔	一基	平安北道龍川郡東上面東部洞九番
磨雲嶺新羅眞興王巡狩碑	一基	咸鏡南道利原郡東面龍山里七番
水原城郭		京畿道水原郡水原邑、日刺面、臺章面
開城滿月臺		京畿道開城府滿月町
扶餘聖興山城		忠清南道扶餘郡林川面郡司里
扶餘扶蘇山城		忠清南道扶餘郡扶餘面
泉龍寺址		慶尙北道慶州郡內東面九黃里
望德寺址		慶尙北道慶州郡內東面排盤里
四天王寺址		慶尙北道慶州郡內東面排盤里
釜山鎮子城臺		慶尙南道釜山府府九一町
蔚山鶴城		慶尙南道蔚山郡蔚山邑鶴城洞
黃州面遺物包含層		黃海道黃州郡黃州面碧城里
樂浪土城		平安南道大同郡大同江面土城里、助玉里

美術行政

帝國美術院

組織の改革

政府は五月二十八日の定例閣議に於て「帝國美術院官制制定の件」及び「美術研究所官制制定の件」を付議決定し、内定せる院長及び會員四十九名の氏名と共に即日之を發表した。

從來の帝國美術院は、大正八年九月に勅令を以て公布された帝國美術院規程に依つて設置せられ、爾來數回に亙る同規程の改正を経つゝ現在に至つたものであり、又美術研究所は昭和五年六月同規程の改正に依り帝國美術院附屬として設置されたものであつたが、新官制の制定と同時に帝國美術院規程は廢止されることとなつた。此の事は一應組織の改正を行つただけの様に見えるが、實は其の意味する所は從來の帝國美術院を一旦廢止し、總てを新しくして新機構の帝國美術院を創設したことに在るのである。従つて院長、會員及幹事等の舊職員も自然消滅し、全部新に銓衡の上任命されることとなつた。此の新官制は御裁可を仰いだ上勅令として六月一日官報を以て公布され、院長以下職員任命も同日附を以て正式に發令された。(便覽二—二二頁參照)

今次の大改革に就き政府の意圖せる所は、形られた組織を見れば自ら明かであるが、五月二十八日新組織と共に發表された、左の文部大臣談はよく其の決意を示してゐる。

「我が國の美術が年と共に隆盛の域に進みつゝあることは、我が文運伸張の上に於て定に慶賀すべきことである。先年帝國美術院が設置せられ、爾來永きに互つて克く其の功績を擧げ來つたことは固より言ふまでもない。然し社會の底に流るゝ浮華なる風潮は

矢張り美術界に於いても之を免かるゝことが出来なくて、眞に我國美術の眞價を發揮する上に遺憾の點ありしことは、争ひ難き事實である。今や急速なる時代の進展につれて、美術界の實狀は茲に期を劃して更に適正妥當なる新機構を制定し、我が國美術の指導獎勵に關する方針を明確にすることを以て急務として居るのである。即ち政府は茲に見る所あり、熟考審議の末新なる帝國美術院を創設して、眞に健全なる美術の研究と製作とを促進する爲最善の努力を致さんとする次第である。惟ふに國家の施設する帝國美術院は、克く識見閱歷の卓越せる人材を網羅して權威ある學國一致の指導機關となり、依つて以て我が國美術全般の堅實なる發達を裨補しなければならぬ。従つて其の主要なる事業の一たる展覽會に就ても、之が開催の方法、鑑査、審査、授賞、買上等の制度に關しては慎重なる考究を加へて改善し、本秋より第一回展覽會として之を開催せしめんとする豫定である。

尙今回の大改正に關しては正木院長を煩したること多大なるものあり、之が實行に當つては一層同氏の勞に待つもの多く其の留任を要すること切なるを認めたけれども、同氏は此の際陣容を新にするの必要を力説して遂に固辭せられたことは誠に遺憾である。茲に同氏の退任を惜むと共に多年の偉功に對して深く感謝する次第である。」

改革の要點

新制度に於ける帝國美術院が舊に比して改革された點は、官制を舊規程と對照することに依つて明かであるが、今其の要項を記せば左の通りである。

一、目的及事業

舊規程では、帝國美術院は「美術ノ發達ヲ裨補スルヲ以テ目的ト」し、「文部大臣ノ諮詢ニ應シ美術ニ關スル意見ヲ開申ス」るものであつた。又展覽會に就ては特に條項を設けて「定期又ハ臨時ニ美術展覽會ヲ開ク」ことを規定し、審査員の制度

をも定めてあつた。

是等を新官制に於ては簡単に一箇條として「美術ノ發達ニ關スル重要ノ事項ヲ審議ス」るものとし、「美術ノ發達ニ資スル爲展覽會ヲ開催スルコトヲ得」ることとしたのみで、審査員の規定をも廢した。之は少くとも形の上から帝國美術院は審議機關たることを主とする意味を示してゐる。

二、會員の定員 從來は「院長一人及會員三十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス」とされてゐたが、新官制では「會員五十人以内」と改めた。此の會員の増員が後に記す人選と共に、新帝國美術院組織の眼目であつたことは明かである。

尙參考の爲に記せば、舊帝國美術院に於ける會員數は、大正八年設置の時に十五人、同十四年に二十人、昭和三年に二十五人、同五年に三十人と逐次増加され來つたものであつた。

三、其の他 字句の上で「院長及會員ハ美術ニ關シ聲望閑歴卓越スル者ノ中ヨリ」銓衡されることになつてゐたのを「識見閑歴」云々と改めたこと、從來の「幹事」を「主事」と改めたこと、及び「附屬美術研究所」の規定を切り離して別に美術研究所官制を制定したことを等である。

院長及會員の任命

院長、會員其他職員全部が新に任命されたことは前記の通りである。前院長正木直彦氏勇退の後に代つて、樞密顧問官法學博士清水澄氏が新院長に任命された。

會員は前會員二十九名（一名缺員）が總て再び任命され、其の他に二十名を加へて、都合四十九名が六月一日附を以て任命された。固より人選は團體代表等の意味からなされたものでないことは無論であるが、參考の便に資する爲、所屬の會派等に依る區分を以て示せば左の通りである。

第一部（二十名）

（前會員）

西村 五雲	西山 翠峰	川合 玉堂
鏑木 清方	川村 曼舟	竹内 栖鳳
土田 麥僊	松林 桂月	松岡 映丘
小室 翠雲	荒木 十畝	菊池 契月
結城 素明		
富田 溪仙	横山 大觀	安田 靱彦
前田 青邨	小林 古徑	
川端 龍子		
橋本 關雪		

第二部（十四名）

（前會員）

岡田三郎助	和田 英作	和田 三造
中村 不折	中澤 弘光	藤島 武二
滿谷國四郎	南 薰造	
石井 柏亭	山下新太郎	安井曾太郎
有島 生馬		
梅原龍三郎		
小杉 放庵		

第三部（九名）

（前會員）

建昌 大夢	内藤 伸	山崎 朝雲
北村 西望		
佐藤 朝山	平櫛 田中	
藤川 勇造		
齋藤 素巖		
朝倉 文夫（元會員）		

第四部（六名）

（前會員）

板谷 波山	香取 秀眞	赤塚 自得
清水六兵衛		
富本 憲吉		
清水 龜藏		

（其の他）

（國畫會）

（其の他）

尙其の後六月十五日最初の總會開催中に會員藤川勇造氏逝去し、又同總會の推選に基き七月三十日津田信夫氏が會員に任命された。

最初の會員總會

斯くて組織の成立した帝國美術院は、之が運用に關する全般の問題に就き、諸規則の制定其の他を協議すべく、六月十三日より同十七日まで五日間に亘り上野公園内東京美術學校會議室に於て、最初の會員總會を開催した。清水院長以下會員四十六名出席（竹内、松岡、藤川會員缺席）、又此の總會は政府としては改革の意圖を具體化するべき最も重要な會議である爲、文部省より松田大臣を初め、添田政務次官、三邊次官、山耕參與官、赤間専門學務局長等の關係官出席、清水院長議長として多くの重要な議事が進められた。決定された主なる事項は左の通りである。

一、帝國美術院展覽會規則の制定

展覽會規則の制定は其の他の諸規則と共に、各部互選の特別委員十五名（委員長和田英作）に依つて作られた原案に基いて決定された。（便覽二三―二五頁參照）之には舊帝國美術院美術展覽會規程が大體の參考とされたが、それに比して改められた要點は大略左の通りである。

彫塑を二種に分つこと

明確に定義することは困難であるが、今日我が國の彫塑界には、古來の傳統に基く所謂「木彫的」なるものと、明治以降西洋の技法に基く「塑造的」なるものが存在することは事實で、是等を區別して取り扱ひ各々特色を發揮せしむることが、我が彫塑界の健全なる發達に貢獻するであらうとの見解から第三部彫塑を甲種彫刻、乙種塑造の二種に分けた。（第二條）

無鑑査出品の資格

舊帝展に於ける無鑑査出品の資格は一旦全く消滅したのであるから、新に改革の精神に適應すべき制度を設けることとなつた。而して過去に於ける無鑑査激增の弊に鑑み、能ふ

限り少數を選出すべきことを旨とした。會員の外、無鑑査の取扱ひを受くべき者は、

一、帝國美術院展覽會參與

二、帝國美術院賞受賞者

三、帝國美術院に於て指定せられたる者

とした。右の中、展覽會參與は後に記す如く別に定むる規則に依つて選定するもの、帝國美術院賞受賞者は舊帝國美術院に於て授賞せられた者をも含むこととした。又指定せられたる者とは、内規として各部に就き會員數の二倍（第四部のみは三倍）を超えざる數とし其の選出方法を規定した。（第二項）

尙是等の外に過渡期の激變を緩和する趣旨から、附則を設けて舊帝展に於いて無鑑査たりし者全部、並に之に準ずる者として選定された者は、今後二回の展覽會に於ける出品に限り無鑑査出品の取扱ひをなすべき旨を定めた。（第四十條）

出品の大きさ制限

第一部の出品に就き、其の大きさを舊帝展で縦十尺横七尺以内に制限してゐたことは、兎角制限一杯の大きさを競ふ爲畫面劃一の弊を生じ、此の改正に就いては舊帝國美術院でも問題としてゐた所であつた。今回は之を縦十尺横十二尺以内、第三條第二項に依る無鑑査出品に就いては縦十尺横二十五尺以内に迄擴大することとした。即ち夫々六曲屏半雙又は一雙迄を出品し得る自由を許し、幾分でも大きさの束縛を解除して製作に變化を與へんことを圖つたものである。

又第四部の出品に就いても、平面的なものは舊帝展で縦十尺横八尺以内に制限してゐたが、之を縦横各十二尺以内に改めることとした。（第十二條）

審査員及審査

審査員は、展覽會毎に會員外からも任命されることになつてゐた舊帝展の制度を改めて、會員のみを以て之に充てることとした。

又舊帝展では審査に依つて優秀な作品を「特選」することになつ

てゐたが、同様な制度ながら之と區別する爲に、文字を改めて「推奨」することにした。(第二十二、二十三條)

展覽會の名稱 新帝展は第一回より開くこととなるので、名稱の上に於ても舊のものと區別する必要を生じ、從來「帝國美術院美術展覽會」であつたのを改めて、「帝國美術院展覽會」と呼ぶことにした。

刀劍の取扱ひに関する件 舊帝展に於て昭和九年度初めて刀劍の出品を受理して種々の困難を生じた經驗に鑑み、且つ刀劍を美術工藝として取扱ふことには疑もあり反對意見も多いので、今後刀身のみには就いては之を取扱はぬこととし、此の件に關し展覽會規則の解釋を左の如く一定することにした。

「展覽會規則第二條中、第四部美術工藝に於て取扱ふべきものは、美術工藝的外装を施さざる刀劍を含まざるものとす。」

展覽會開催方法 從來とても四部を綜合した帝展を開催するのみに、唯一の會場として使用する東京府美術館は甚だ狹隘を告げてゐたのであるが、新制度に依る展覽會は、舊帝展に参加しなかつた會派等をも含む、全美術界よりの出品を豫想してゐることであり、而も出品の大きさ制限の擴大をもなした爲、各部を同時に併せた展覽會を開くことは甚だ困難であると認められる。而して又帝展は必しも毎年開かれることを必要としないとの意見もある爲、其の開催方法を便宜上、第四部を除く外、各部に就ては隔年に交互の組合せに依ることとなし、左の組合せを以て開催することとした。

第一回 第一部繪畫、第三部甲種彫刻、第四部美術工藝
第二回 第二部繪畫、第三部乙種塑造、第四部美術工藝

二、其の他の諸規則

展覽會規則の外に、帝國美術院の事業運用上に必要なるものとして、左の通りの諸規則を決定した。(便覽二二三頁參照)

帝國美術院議事規則、帝國美術院授賞規則、帝國美術院常議員

規則、帝國美術院顧問規則、帝國美術院展覽會參與規則、明治大正美術史編纂委員會規則、帝國美術院會員推選內規

右の中「顧問規則」及「展覽會參與規則」は新に作つた制度で、其の他の諸規則は大體舊に倣つたものである。今是等の諸規則に依つて定められた内容の要點に就き、多少の説明を必要と認めるものを左に略述する。

常議員 院務に關して院長の諮問に應ずる爲に、各部會員中より互選して置かれるもので、隨時院長の招集に依つて常議員會を開く。其の定員は十一名とし、各部會員數に比例して現在左の如く選出することにした。(常議員規則)

第一部四名、第二部三名、第三部二名、第四部二名

顧問 帝國美術院に特に功勞顯著なる者を顧問として、會員總會の議決を経て院長より委嘱し得ることを定めた。(顧問規則)

展覽會參與 單に展覽會に於て無鑑査の資格を與へるのみではなく、云はば準會員とも見做すべき名譽ある位置として、待遇せんとする趣旨から作られたものである。展覽會に關する事項に就いて院長の諮問に應ずる者と規定した。其の人選は慎重にしてなるべく少數とし、各部に就いて會員と同數を超えざることに制限した。(展覽會參與規則)

明治大正美術史編纂委員會

明治大正美術史編纂の事業は、舊

帝國美術院が朝日新聞社の寄附に基き、昭和七年度以降繼續中のものであつた爲、之を引繼いで其の遂行を圖ることにした。從來之が調査審議の爲に委員會を設け、編纂の實務は附屬美術研究所に専任の編纂員を置いて之に當らせてゐたので、今後も同様な方法を以て事業を進行させることとした。

尙委員長及び委員は後十月十九日附を以て文部省より囑託された。之は從來の人々を重ねて囑託した外に、横山、石井の兩會員を加へたものである。(委員會規則及委員名便覽二二三頁參照)

會員の推選及各部の定員

帝國美術院會員の任命は、官制に依

り文部大臣の奏請に依つてなされるものであるが、補缺の場合院長が總會の選舉に基いて推薦する例とする爲に、會員推薦の内規を作つて慎重なる選舉方法を定めたのである。

又便宜上同内規中に、現在會員數を基準として各部定員を當分の内左の如く定めることとした。

第一部二十人、第二部十四人、第三部九人、第四部七人

三、展覽會開催に關する件

第一回展覽會は今秋開催の原案であつたが、事情に鑑みて延期することとなり、本年度中なるべく時期を遅らせて開くこととした。尙其の期日に就いては其の後十月十一日の常議員會に於いて協議した上、府美術館常議員會の決定に依り確定、十一月二日の官報を以て公告した。之に依つて第一回展覽會は明春二月二十五日（招待日）より三月二十五日迄開催することとなり、又同京都陳列會は四月三日より同二十二日迄開くこととなつた。

四、人事

新に定めた諸規則内規等を適用して左の通りの人事を決定した。

顧問推薦

前帝國美術院長正木直彦氏が、多年我が美術界及び帝國美術院の爲に盡された功績を表彰し且つ感謝する爲、同氏を顧問に推薦することを決議、院長より之を委嘱することとした。

新會員推選

現在の會員は四十九名で定員に對し一名の缺員があり、且つ之は内規に依り第四部として、其の補缺を推選することとなり、選舉を行つた結果津田信夫氏當選、同氏を新會員に推すこととした。

本年度常議員

各部に就き選出、左記十一名に決定した。

第一部

西山 翠嶂 楠木 清方 安田 靱彦

第二部

小室 翠雲 石井 柏亭 有島 生馬 滿谷國四郎

美術行政

第三部 平櫛 田中 建昌 大夢
第四部 香取 秀眞 赤塚 自得

展覽會參與 規則に依り慎重な人選を行つた結果、左記十九名を展覽會參與に推薦することとした。

第一部 十名（定員二十名）

堂本 印象 小川 芋錢 川崎 小虎 上村 松園
中村 岳陵 宇田 荻郎 野田 九浦 山口 蓬春
福田平八郎 木村 武山

第三部 六名（定員九名）

石井 鶴三 長谷川榮作 國方 林三 藤井 浩祐
澤田 晴廣 北村 正信

第四部 三名（定員七名）

六角 紫水 海野 清 佐々木象堂

右の中第三部藤井浩祐氏は次回總會に於て會員に推薦された。

尙第二部に就ては展覽會が、第二回になることであり至急に決定を要せずとの見解から、本總會に於ては、展覽會參與及び其の他の無鑑査資格に就ての選定を行はなかつたものである。

院賞受賞者 嘗て帝國美術院賞を受けた者として、展覽會規則

第三條第二項に依り無鑑査の待遇を受けるのは左の三名と決定した。（第一部を除く）

第三部 安藤 照 横江 嘉純 佐々木大樹

但し次回總會に於て此の三名共展覽會參與に推薦された。

指定された者 展覽會規則第三條第二項に依る無鑑査の指定

は、第二部を除き各部に就いて選出を行つた結果左の通り決定、合計五十四名を指定することとした。

第一部（二十六名）

伊東 深水 池上 秀畝 石崎 光瑤 服部 有恆
徳岡 神泉 小野 竹喬 大智 勝觀 金島 桂華
吉田 秋光 吉村 忠夫 中村大三郎 村上 華岳

美術行政

第三部 (十八名)

橋本 平八 濱田 三郎 堀 進二 大内 青圃

小倉右一郎 渡邊 義知 加藤 顯清 陽 咸二

吉田 三郎 高村光太郎 都賀田勇馬 中野 桂樹

山根 八春 雨宮 治郎 喜多武四郎 三木 宗策

新海 竹藏 關野 聖雲

第四部 (十名)

石田 英一 鹿島 英二 高村 豊周 堆朱 楊成

山鹿 清華 山本 安曇 松田 權六 北原 千鹿

廣川松五郎 杉田 禾堂

右の中、第三部の橋本平八及び陽咸二の兩氏は後逝去した。

第四十條第一號に依る者 舊帝展に於て無鑑査たりし者で、展

覽會規則第四十條第一號に該當する者は第二部を除き左の通り百四

十五名と決つた。

第一部 (九十一名)

伊東 紅雲 伊藤 小坡 板倉 星光 磯田 長秋

今中 素友 池田 遙村 石渡 風古 八田 高谷

畠山 錦成 西澤 笛畝 堀井 香坡 登内 微笑

徳田 隣齋 小川 翠村 尾竹 竹坡 尾竹 國觀

織田 觀潮 大河内夜江 大村 廣陽 大木 豊平

太田 天洋 太田 秋民 荻生 天泉 加藤 英舟

川船 水棹 川北 霞峰 勝田 哲 勝田 蕉琴

上村 松篁 鴨下 晁湖 吉岡 堅二 田畑 秋壽

田中 賴璋 高木保之助 竹原 嘲風 武田 鼓葉

常岡 文龜 根上 富治 永田 春水 植中 直齋

第三部 (三十名)

池田 勇八 石川 確治 羽下 修三 長谷川義起

畑 正吉 橋本 朝秀 新田藤太郎 西村 雅之

富永 朝堂 沼田 一雅 小笠原貞弘 大國 貞藏

岡本金一郎 開發 芳光 吉田 芳明 吉田 久織

中島 東洋 夏目 貞良 上田 直次 松田 尙之

小室 達 後藤 良 安達 貫一 佐崎 霞村

木村 威夫 三國 慶一 三澤 寛 柴田 正重

日名子實三 毛利 教武

第四部 (二十四名)

伊東 陶山 岩田 藤七 磯崎 美亞 石野 龍山

沼田 一雅 小野島知文 大島 如雲 香取 正彦

河井寛次郎 河村 靖山 桂 光春 四谷 正美

龍村 平藏 梅澤 隆眞 山形駒太郎 北崎 北堂

二橋 美衡 船橋 舟珉 澤田 宗山 北原 三佳

宮川 香山 宮永 東山 島野 三秋 森川 紫山

矢野 鐵山 山川 永雅 山川 秀峰 山田 耕雲

山ノ内信一 山口 玲瀧 山下 竹齋 山本 紅雲

山元 春汀 安田 半圃 保間 素堂 前田 荻郎

町田 曲江 松本 姿水 益田 玉城 不動 立山

古谷 一晁 古屋 正壽 福田 惠一 福田 浩湖

小泉 勝爾 小早川秋聲 小村 大雲 小山 榮達

五島 耕畝 幸松 春浦 阿部 春峰 赤松 雲嶺

穴山 勝堂 佐藤 光華 佐野 五風 佐々木尙文

神原 苔山 木村 斯光 菊池 華秋 菊澤 武江

三谷十糸子 三木 翠山 水田 硯山 水上 泰生

宮田 司山 白倉 二峰 庄田 鶴友 東原 方僊

平井 樸仙 平田 松堂 望月 春江 森 白甫

森 月城 森 守明 森村 宜稻

第四十條第二號に依る者 展覧會規則第四十條第二號に依る者として左記の通り選定した。

第一部 (一名)

石川 寒巖

第三部 (十名)

飯島三四二 早川魏一郎 太田 三郎 荻島 安二

笠置 季男 高田 博厚 中野 五一 後藤 清一

寺畑助之丞 清水多嘉示

第四部 (四名)

濱田 庄司 船越 春珉 芹澤 銑介 鈴木 美彦

尙諸規則の制定には文部大臣の認可を要する爲、手續上若干の時日を要し、總會後八月二十二日に至つて正式に制定された。従つて諸規則に依つてなされた以上總ての決議事項は、其の上で正式に決定された譯である。

第二回會員總會

會員補缺推選、展覧會參與及び指定すべき者の選定、第一回展覧會に就き審査員の決定等を議する爲、本年度第二回の會員總會は、十一月二十九日午前十時二十分より上野公園内帝國學士院に於て開催、左の諸項を決定した。

新會員推選 故藤川會員の補缺として、内規に従ひ第三部會員の推選を行つた結果、藤井浩祐氏當選、同氏を推することとした。

展覧 參與 規則に依り入選を行つた結果左の通り十四名を展覧會參與に推薦することとした。

第二部 十一名 (定員十四名)

長谷川 昇 川島理一郎 金山 平三 田邊 至

辻 永 山本 鼎 正宗得三郎 牧野 虎雄

藤田 嗣治 小林 萬吾 坂本繁二郎

第三部 三名 (累計八名、定員九名)

横江 嘉純 安藤 照 佐々木大樹

院賞受賞者 嘗て帝國美術院賞を受けた者として、展覧會規則に依り無鑑査とされる者は、第二部に就き左の二名と決定した。

第二部

指定されたる者 展覧會規則に依り無鑑査とすべき者を第二部に就き選出、左の通り指定することとした。

第二部 (二十六名)

伊原宇三郎 池部 鈞 石井 鶴三 石川 寅治

林 俊衛 碓 伊之助 太田喜二郎 鹿子木孟郎

高間 惣七 曾宮 一念 鍋井 克之 中川 一政

中川 紀元 中野 和高 中山 巍 倉田 白羊

熊谷 守一 小山 敬三 兒島善三郎 寺内萬治郎

足立源一郎 安宅安五郎 齋藤 與里 木村 莊八

三宅 克己 白瀧幾之助

第四十條第一號に依る者 展覧會規則第四十條第一號に該當する者は、第二部に就き左の通りと決つた。

第二部 (五十名)

猪熊弦一郎 橋本 邦助 橋本八百二 富田溫一郎

大野 隆德 大久保作次郎 太田 三郎 奥瀬 英三

加藤 靜兒 河合 新藏 河井 清一 金澤 重治

吉田 苞 吉田 博 吉村 芳松 多々羅義雄

高村 眞夫 相馬 其一 永地 秀太 上野山清貢

桑重 儀一 草光 信成 矢崎千代二 矢島 堅土

山下 繁雄 松岡 壽 松村 巽 小絲源太郎

小磯 良平 小寺 健吉 小柴 錦侍 香田 勝太

五味 清吉 權藤 種男 江藤 純平 阿以田治修

相田 直彦 跡見 泰 有馬さとえ 赤松 麟作

新井 完 佐竹德次郎 北 蓮藏 北島 淺一

柚木 久太 三上 知治 清水 良雄 平岡權八郎

關口 隆嗣 鈴木千久馬
第四十條第二號に依る者 展覽會規則第四十條第二號に依る者
 を第二部に就き左の通り選定した。

第二部 (六十九名)

伊藤慶之助	伊藤 廉	今關 啓司	林 武
林 重義	濱田 葆光	長谷川 潔	東郷 青兒
島海 青兒	大澤鉦一郎	大橋 孝吉	岡田 謙藏
岡本 一平	若山 爲三	柏木 俊一	河野 通勢
川西 英	川口 軌外	片岡 銀藏	吉井 淳二
横堀角次郎	横井 禮市	高岡徳太郎	高昌達四郎
田口 省吾	田中善之助	田村孝之介	辻 愛造
土田 文雄	椿 貞雄	向井 潤吉	野口 謙藏
野口彌太郎	野間 仁根	國枝 金三	黒田重太郎
栗原 信	栗田 雄	國盛 義篤	山下 品藏
山脇 信徳	山崎 省三	松井 正	前川 千帆
小林 和作	小林喜一郎	小林徳三郎	小穴 隆一
遠藤 典太	青山 義雄	有岡 一郎	酒井 亮吉
里見 勝藏	佐分 眞	三田 康	木下 義謙
宮本 三郎	水谷 清	宮坂 勝	宮田 重雄
耳野卯三郎	清水 登之	清水多嘉示	島崎 雞二
平塚 運一	森田 勝	鈴木 誠	鈴木信太郎
鈴木 保徳			

尙右の如く總會に於て展覽會參與以下無鑑査資格者に就て決議を
 なしたが、昭和十年中には正式に發表を見るに至らなかつた。

審査員 第一回展覽會審査員は、第一部及第四部に就ては夫々
 會員全員が之に當り、第三部は木彫を専門とする四名(内藤、山崎
 佐藤、平櫛)の會員が之に當ることとした

附則の解釋 展覽會規則附則第四十條の「今後二回ノ展覽會ニ
 於テ」無鑑査の取扱ひをなすとする意味は、引續き二回限りである

か、隨時二回と解するかに就き疑義があつたが、之は必しも引續き
 二回たることを要せずとする解釋を認めることとした。

美術市場

美術市場に現はれた重要な新、古美術品及其の市價を記録する爲、我國四大美術市場たる東京、大阪、京都、名古屋の各美術俱樂部に於て昭和十年に行はれたる賣立の二千圓以上の高價表を記載する。

昭和十年度新古美術品
賣立高價表（金二千圓以上）

東京美術俱樂部

栗山家賣立 二月二十七日

貫之家之集切 六、六九八
石山切貫之集 二、九八〇

三樂莊、某家賣立 三月十一日

雅邦雨中野渡 二、八八九

舊大名、舊家賣立 三月十八日

清拙墨蹟 二、二九三

梨子地山吹蒔繪香皆具 二、八五〇

伊賀描座水指 三、〇三八

春舉松島二枚折屏風一双 二、四一〇

大觀喜雀 二、八九三
五色緋大袖甲冑 二、二三〇

池澤家、藤澤家賣立 四月九日

杏所宜男清令 二、一八〇

當市某家賣立 四月十五日

雅邦深山遊鹿 二、一九一〇
玉堂驟雨將來 三、三〇〇
靱彦葛蒲 二、〇三九
春草美人讀書 三、二〇〇
栖鳳盛夏 二、九三五

大觀山瞻山雲 三、〇六〇
大觀春秋二枚折屏風 六、五九三
春草月下飛雁 三、六九八
大觀春陽 四、三〇〇

麓山居、某舊家賣立 四月二十二日

夏雄薄肉彫清水寺硯屏 四、〇三八
春草地邊飛鴨 二、六九八
雅邦春江漁舟 二、二九三

某男爵、鈴木、某家賣立 四月二十九日

平目地色紙扇面蒔繪料紙硯 二、一〇〇
秋暉壯丹雌雄孔雀 五、五〇〇

野崎、木村兩家賣立 五月六日

伊賀耳付水指 二、四〇〇

朝鮮唐津釜鉢 二、一〇〇

藤四郎茶入 三、〇〇〇

定家歌書 二、八九〇

瀬戸茶入 二、九九〇

信實三十六歌仙切 二、八九〇

釘彫伊羅保茶碗 二、一〇〇

抱一櫻犬張子三幅對 二、一九三

玉堂漁村淺春 二、五〇〇

蕎麥茶碗 一七、一〇〇

土佐廣周伊勢物語卷 二、二三九

大觀瞻山雲 四、三〇〇

御本御所丸茶碗 三、五一〇

堆朱九恭香合 三、〇〇〇

金地二重莖古金襴 二、一一一

石山切伊勢集 二、三八〇

古畫文殊 二、六九〇

茂三茶碗 四、〇九〇

芦手蒔繪小硯箱 二、一七八

祥瑞染付筒向付五人 三、八〇〇

古畫地藏尊 二、四九〇

鬼熊川茶碗 三、一〇〇

乾山芒繪重箱 三、六〇〇

大觀墨竹二枚折一双 二、〇六〇

古銅經筒 四、一一〇

因陀羅對月雲州藏帖 五、〇〇〇

志野茶碗 五、一〇〇

梨子地吉野蒔繪視箱 八、〇〇〇

住吉物語繪卷 五、一九〇

庸軒四睡茶碗 二、一七一

物祖大觀朝陽 二、五九〇

乾山茄子畫贊 八、九八〇

玉堂春秋山水六枚折 二、八九八

光廣道之記繪入卷 六、九八〇

原田家、偉風堂賣立 五月十三日

白鞘刀名物大西左文字 五、六〇〇

白鞘脇差九郎三郎 三、八〇〇

拵付合口長舟義光 二、二九一

中村、某家賣立 六月十七日

金地風俗繪屏風 二、〇〇〇

大觀春曙秋雨双幅 二、八一〇

大觀着色宇治川之秋 二、八五〇

吉井、舊某家賣立 六月二十四日

半江米法溪山書樓 四、三〇〇

目黒師、井上家賣立 九月三十日

金胎兩部曼荼羅双幅 二、〇〇〇

寒山拾得圖 二、〇〇〇

某伯爵家、徜徉園賣立 十月七日

蛇足重山積雪 七、三九〇

翠雨莊、某家賣立 十月二十一日

竹田春郊觀櫻 七、〇〇〇

若冲梅花錦鷄鳥 六、三五〇

王陽明遊白鹿洞歌 二、〇一六

有賀家賣立 十月二十八日

信實歌仙 八三、九〇〇

行成伊豫切 六、三九八

公任堺色紙 三七、三〇〇

石山切 三、〇〇〇

俊賴朗詠集切 一六、〇〇〇

行成伊豫切 五、一九三

石山切 一六、九〇〇

石山切 三、五〇〇

實朝中院切 五、八五〇

西行白河切 三、一八〇

一休山水畫贊 一三、九八〇

清嚴一行 三、三五九

松花堂布袋探幽壽老 三、一一九

秋月達磨 四、五一〇

乾山白百合畫贊 一〇、八〇〇

光起菊二兔 六、七〇〇

應舉壽老三幅對 二八、八〇〇

素約茸狩 一八、九〇〇

爲恭小松引 二、二〇〇

抱一昔嘶桃太郎三幅對 五、四九〇

定家近代秀歌帖 一七、〇〇〇

山本素軒源氏五十四帖 二、八〇〇

裂手鑑 四、五七〇

如慶木曾物語 二、六九〇

大雅堂飲中八仙卷 三、三〇〇

光琳小袖梅繪二枚折屏風一双 四、六九八

宗達佐野渡二枚屏風半双 五、九九〇

晉羽手茶入 二八、九〇〇

大瓶手茶入 二、六五〇

古刷毛目茶碗 六、八八〇

井戸茶碗 二、四五一

志野茶碗 一二、三九八

薩摩丸壺茶入 三、六〇〇

瀬戸唐津茶碗 七、八五〇

室中手造茶碗 二、八九〇

堆黃虫栖香合 四、〇〇〇

不味公好片輪香合 二、一九三

獨樂柿香合 二、二一〇

交趾福字香合 二、三〇〇

宗和共筒茶杓 二、三〇〇

宗旦共語茶杓 二、二〇〇

籠茶箱 一八、九〇〇

青磁竹節香爐 七、八九一

古銅鸞香爐 二、〇〇〇

七寶孔雀置物 五、〇〇〇

祥瑞獅子摘共蓋香爐 五、二〇〇

染付竹繪水指 二、一〇〇

初代寒雄柏釜

二、一五〇

時代桐蒔繪爐絲

二、六九〇

南京赤繪松竹梅火入

二、八九〇

羽田盆

五、五〇〇

五十嵐道甫扇蒔繪沈箱

三、一一〇

黑地吹寄蒔繪硯箱

三、三一〇

平目地吉野山蒔繪硯箱

三、三〇〇

梨子地花笈蒔繪十種香箱

五、一〇〇

刑部地檜垣梅蒔繪硯箱

三、八八九

抱美作鶴ヶ岡手箱皆具

三、三〇〇

磬石硯

二、五一〇

文房具揃

一、一九〇

柿右衛門草花文様大皿

四、五〇〇

柿右衛門草花文様大皿

三、八〇〇

柿右衛門亂桐輪花鉢

三、六〇〇

朝鮮唐津酒次

二、五八〇

古備前酒次

四、六一〇

金襴手見込菊小鉢

三、三〇〇

古雲鶴端反小鉢

二、六三〇

祥瑞針木八角向付五人

一〇、一〇〇

染付六角耳付鉢

二、六〇〇

染付瓢形菊繪向付五人

二、一六一

寄向付五人

四、〇〇〇

安南酒吞

二、一〇〇

志野四方酒吞

二、四九〇

青山子爵家賣立 十一月十八日

一文字助吉刀

二、六八〇

養川院壽老三幅對

二、九九〇

行成和泉續集切

二、一三九

鎌倉時代蒔繪四方香具

三、八九〇

雅經今城切

六、三九〇

染付菱形獅子蓋香爐

三、三九〇

釘彫伊羅保茶碗

四、八一〇

金地瀧山水蒔繪十種香箱

三、八一〇

遠州一重切花入

一七、〇〇〇

紫裾濃絨具足一領

三、六九五

黑地野馬蒔繪硯箱

二、一八〇

龜甲松橋蒔繪御厨子

二、五一八

東山時代梨子地菊水蒔繪硯箱

一八、〇〇〇

釘彫伊羅保茶碗

二九、一〇〇

磁製法花人物文缸

一二、六九〇

雅純懷紙

二、〇〇〇

釘彫伊羅保四方茶盤

三、二〇〇

國寶鎌倉時代蒔繪面當

一三〇、〇〇〇

寧一山歸牛

四、九八〇

公任芦戸書切

六、五〇〇

梨子地山水蒔繪手箱

三、五〇〇

色繪銅騎馬人物手爐

三、五八〇

宗尊親王如意寶集切

五、三八〇

古金銀貨幣

二、九九〇

行成和泉正集切

三、六〇〇

俊賴古今集切

八、九九〇

時代小裂定家綴子唐物文庫入

三、四九一

唐物青貝樓閣人物香盆

四、一三〇

京山田家賣立 十一月二十七日

乾山秋ノ山畫賛

三〇、〇〇〇

應舉鶴巢籠

一六、八〇〇

景文四季四幅對

二、八九〇

景文壽老三幅對

二、三九〇

清廣不二三幅對

三、〇〇〇

寬齋旭波

八、三〇〇

雅邦老松双鶴

五、三〇〇

古畫柳白鷺六枚折屏風半双

三、一九八

時代浮世繪馬競六枚折屏風

三、七〇〇

金地春夏花鳥六枚折屏風

七、三九八

光信秋草群鷺六枚折屏風一雙

三、一一〇

礮青磁袴腰香爐

一〇、一〇〇

萬曆赤繪小鉢

三、一〇〇

鍋島緞通五枚

二、九〇〇

丸山家、某家賣立 十二月二日

鞘卷太刀相州綱廣

二、三〇〇

菊御作刀

二、三八〇〇

拵付刀磨上無銘

二、七五〇

白鞘刀無銘助包

三、八九八

淺黃地九枚更紗着物

二、五九〇

鞘卷太刀行平

一、一八〇〇

鐵齋高士觀瀑

五、一五一

拵付刀遠近

四、一八〇

鞘卷太刀康光

四、五〇〇

鐵齋讀書醫俗

三、六八〇

一乘作小柄ノ口廿九本外三

二、五九〇

田邊伴正大小鐔取交百十四點

二、三八〇

大雅堂西園雅集
能衣裳四、三〇〇
二、五三八

石森家賣立 十二月九日

廣業唐美人

二、四五六

玉堂、廣業、栖鳳、三幅對

二、〇〇〇

廣業四季山水四幅對

二、二八八

百穗壽山放鶴

三、一八八

大觀日月双幅

二、一一一

廣業長恨歌金地六枚屏風一双

五、〇一八

諸大家十二支置物

三、九〇〇

松寶莊、磯野枕善居賣立

十二月十六日

爲恭双幅

二四、八〇〇

雅邦秋景山水

六二、五〇〇

雅邦靈昭女

二八、九一〇

雅邦松竹不老

一九、〇〇〇

雅邦夏山行路

八、一五九

雅邦驟雨

四、八〇〇

景年春山臘月

四、六五〇

雅邦旭日双鶴

二、二一九

雅邦三星三幅對

二八、九八〇

雅邦長江晴樓

一二、〇〇〇

景年柳鵲鴿

三、三一〇

雅邦維摩

三一、六九八

雅邦柳蔭奔馬

五、六〇〇

雅邦天ノ岩戸

二、八九〇

雅邦夏景山水

五、六九八

雅邦溪村歸牧

二、九八〇

幽谷幡桃海鶴双幅

三、〇五〇

春草溪流初夏

四、〇〇〇

雅邦秋山訪友

六、四九〇

大觀嵯茶屋

二、一六九

雅邦達磨

三、七一〇

寬畝驚

二、三〇〇

大觀紅葉時雨

二、三九三

大觀殘雪

三、一八八

大觀松並木

三、五一〇

廣業青綠春景山水

二、一一〇

雅邦朝暾三幅對

八、九九〇

百穗梅花美人

二、五〇〇

雅邦天台曉色

三、三三八

大觀百舌鳥

三、四三〇

廣業四季山水四幅對

五、八九〇

玉堂高砂双幅

二、八〇〇

松園雪中美人

六、一〇〇

是真貴賤圖双幅

八、〇〇〇

蕪村梅花鳴禽

二、八三八

翡翠共蓋遊環香爐

四、一一九

包美作松島料紙硯箱

二、七九三

平目地源氏模様蒔繪料紙硯箱

二、五〇〇

唐物青貝花鳥大平卓

二、六〇〇

白磁獅子摘遊環香爐

二、三八〇

菊地家、某家賣立 十二月二十三日

大觀中富士三幅對

四、六九〇

進藤家、某家賣立 十二月二十六日

春草曉霧

二、七八九

玉堂月下持衣

三、三八九

京都美術俱樂部

山内家賣立 一月二十一日

景文柳陰漁舟田家歸農双幅

六、〇〇〇

應舉中鹿桔梗三幅對

二、三一〇

來章水中遊鯉橫物

二、六一〇

清暉牡丹蝶尾花鶉双幅

五、五〇〇

寬齋百花昆虫土偶彙集大幅

三、七一〇

棋嶺應舉寫秋雁大幅

二、〇五九

梅逸玉堂富貴大幅

二、八九三

直入青絲歲寒三友

三、六九〇

松花堂福祿壽布袋橫物

二、一三九

玉澤室庵江月三筆夢橫物

四、三九〇

景年老松櫻小禽

四、〇〇〇

景年老松旭雀双幅

二、七〇〇

春學旭日瑞靄大橫物

二、五〇〇

松園花見美人橫物

二、一五九

吳春雨雪中松ノ畫屏風一双

四、五九〇

玉泉雪中芦雁屏風一双

二、二九八

礪青磁袴腰香爐

一〇、五〇〇

梨子地色紙短冊蒔繪料紙硯

三、一三九

白磁獅子摘共蓋遊環香爐
祥瑞山水人物繪三足香爐

五、六一〇
三、一九三

堆朱黃蜀葵彫丸香爐盆

三、九一〇

白磁舟置物

二、三〇〇

古瀬戸飛鳥川手茶入

二、一九八

春正桐時繪平棗

二、五〇〇

圓能齋好老松臺子皆具

二、五一〇

南京赤繪竹林仙人繪火入

三、五九〇

染付金欄手遊鐙杓立

三、一九〇

梅地黑松竹蒔繪家具

三、九一〇

紺裾濃絲威大鎧

三、二〇〇

赤地唐花模様萬曆甃

二、〇〇〇

稻垣家實立 一月十九日

應舉四季四幅對

一二八、〇〇〇

素約傘持美人

二、〇九八

應震水中遊鯉

三、三九八

吳春末廣狩

二、〇〇〇

抱一四幅對

二、五〇〇

清暉拜旭日壽星

二、三九八

東洋松ニ雉竹ニ雞双幅

三、四〇〇

清暉三社三幅對

五、四一〇

景年雪中松林群鹿

六、六〇〇

鐵齋瑤池僊花

四、八三〇

獨山十六羅漢

三、五五〇

蕪村杉山家畫贊

一一二、二〇〇

山陽詠史十二首屏風一双

二、九〇〇

大阪美術俱樂部

臨坂家實立 一月十六日

探幽一本菊安元公林羅山讚

二、一九〇

青磁環耳花入

二、四一〇

吳州赤繪魁鉢五

一一、六〇〇

拵付刀一文字助吉作後藤家作金無垢金具

二、二〇〇

志方家實立 二月十四日

鳳山柏樹猿共箱

二、二三〇

青蕎麥銅器式花瓶

六、九三〇

某家實立 二月二十二日

鳳山柳下美人

三、二一〇

某家實立 四月六日

雅邦神功渡海秀邦箱

二、六〇〇

橫江竹軒藏品實立 六月九日

定家卿小倉色紙

一六、三九〇

清巖橫一行(竹陰)

七、三〇〇

清巖橫一行(仰之)

二、三三九

清巖一行(坐看雲起時)

三、〇九〇

澤庵歌入文橫物

二、三九〇

少庵短冊

三、三八〇

光廣卿短冊

二、五一〇

芭蕉朝顏畫贊橫物

三、一〇〇

蕪村竹林茅屋柳蔭騎路中屏風一双

一三〇、〇〇〇

蕪村春秋山水双幅

三八、九〇〇

蕪村柳蔭漁夫

一一、九一〇

蕪村郭子儀

一五、三五〇

蕪村壽老畫贊

二、六九三

蕪村新綠俳畫

一六、六〇〇

蕪村寒林双馬

八、六〇〇

蕪村松林山水

四、一九三

蕪村山邨會友清溪放棹屏風一双

二〇、〇〇〇

山陽五十鈴川橫物

一〇、〇〇〇

山陽日本樂府第一首詩

二、五八九

山陽桓武陵詠史七絕

六五、〇〇〇

山陽芳野懷古詠史七絕

二八、六〇〇

山陽八幡太郎詠史七絕

一八、九〇〇

山陽水墨山水畫贊

五、一九〇

山陽川中島詠史橫物

八、一〇〇

山陽修史七絕(野史)

八、一九〇

山陽彥根城懷古七絕杏邨湖上望彥根圖双幅

四、一八〇

山陽桂川所見七絕

二、三六〇

山陽琅玕詩七絕

二、七八〇

山陽一行(君子)

三、九三〇

山陽一行(我善)	四、三九〇	清暉中壽老左右松鶴三幅對	五、六九〇	海鼠垂耳花餅	四、九〇〇
山陽萬歲樂詩扇面額	二、二一〇	清暉青楓小禽紅葉鶉雙幅	五、〇〇〇	寧窻管耳花餅	五、七〇〇
山陽四字額	九、四六〇	芳園雨中梅檀五位鶯	四、四三九	海鼠面盤	二、一九〇
山陽草書修史屏風一雙	三三、〇〇〇	芳園浣城	四、〇五〇	青銅共蓋經筒花入	三、一九八
木米淺絳山水	九五、〇〇〇	寬齋春景嵐山雙幅	三、一三〇	南蠻繩簾花入	二、〇〇〇
木米秋江漁艇橫物	五、八九〇	一鳳柿鳥	一六、三一九	古備前花入	二、三、九八〇
竹田秋烟疊嶂	三、八九〇	雙石月下秋草蟲	三、四六〇	宗全手造籠花入	四、八三〇
草坪米法山水	六、五〇〇	模嶺水月鴛鴦	四、二三〇	唐物籠南京玉入花生	八、九九〇
大雅堂岳陽樓	一八、八〇〇	雅邦魚籃觀音	八、九〇〇	青貝樓閣人物中央卓	二、五五〇
菰翁松林瀧山水	二、五九八	景年蘆飛躍鯉魚	二、二五〇	青貝樓閣人物香爐盆	三、三三〇
菰翁秋景山水	五、七四〇	景年臘月鸕鶿	四、一一〇	祥瑞靈芝三ツ足香爐	三、五一〇
菰翁松嶺懸泉	三、一九三	景年櫻花瀑布	五、九一〇	青貝樓閣人物平卓	三、一九〇
半江柳桃山水	二、七一〇	松園吹雪二美人	五、八九〇	仁阿彌道八鬼置物	三、七九〇
梅逸園窓山水橫物	二、五九〇	栖鳳漁村松濤	五、四五〇	仁阿彌道八壽老置物	一三、九三〇
梅逸竹林瀑布	三、一〇〇	景年楊柳翡翠	二、三八〇	鎌倉時代時繪錫緣香合	二、八六〇
竹溪春郊放馬	一三、一〇〇	芳文櫻花群鷗	二、七九〇	吳洲赤繪小丸香合	一三、五〇〇
竹溪嵐峽橫物	一六、三〇〇	景年柳下鷺雛	二、七三九	染付立唄香合	九、三八〇
對山竹莊賞月	二、三九〇	栖鳳雨霽	二、五〇八	染付玉章香合	七、〇〇〇
對山秋景山水	三、〇〇〇	鳳山魯生女	二、三九〇	獨樂平寶珠香合	七、九八〇
應舉中乙女高砂左鉢木右養老三幅對	二四、三〇〇	錢齊康節先生閑居	二、五九〇	祥瑞吉之字立瓜香合	二、〇五〇
應舉水墨夜景山水	四、五一〇	竹邨風前把杯	二、一九〇	織部分銅菊香合	二、二九〇
蘆雪若竹雀	三、二八〇	藍瑛金箋摹古山水帖	五、一五〇	保全金欄手四方香合	二、五一〇
吳春月夜秋景山水	六、七〇〇	木米塲填餘技帖	五、三〇〇	保全染付隅田川香合	二、一〇〇
蘆雪竹蛙	一五、八〇〇	是真十二月短冊帖	二、五九三	青井戸茶盃	三、六〇〇
景文葉櫻螢蟬	四、二一〇	容堂侯四字額	二、一三〇	斗々屋平茶盃	三、四一〇
景文蓬萊山	六、六九〇	伊川院金地桐鳳凰兩面屏風一雙	四、七九〇	釘彫伊羅保茶盃	一一、一一一
景文旭日水邊群鶴老松群鶴雙幅	一一、三〇〇	青磁遊環花生	九、一六六	祥瑞山水筒茶盃	三、五九〇
		青蕎麥靈芝耳花餅	三一、九三〇	黃伊羅保石ハセ茶盃	五、五一〇
		染付梅竹耳付花生	一二、五九三	江岑手造黑茶盃(窓)	二、二一〇

砂御本蘆繪茶盃	二、〇五九	古伊賀香鉢	四、九一〇	有本家寶立	十月二十七日
御本御所丸茶盃	二、三九〇	織部切落手鉢	四、一〇〇	釘彫伊羅保茶銘花緑(松平備前守箱)	
ノンカウ赤茶盃(曉月)	一、〇〇〇	古九谷丸紋見込蘆鷺鉢	七、七〇〇	志野一文字香合	二、六一〇
木米御本立鶴寫茶盃	二、二六〇	保全吳洲赤繪寫花鳥鉢	四、一一〇	仁阿彌道八作乾山字秋草畫鉢	四、二〇〇
保全御本半使寫茶盃	二、七九〇	乾山色繪畫替土器皿(五)	二、一〇〇	山王莊藏品寶立	十一月九日
澤庵和尚共筒茶杓(雲林)	二、四一九	保全青交趾寫唐草鉢	四、三九三	乾山櫻花春草畫讚	二、三、九三〇
江岑共筒茶杓(青葉)	二、六四三	仁阿彌道八櫻透し鉢	三、六九八	竹田稻川舟遊畫讚	一二五、八〇〇
如心齊共筒茶杓(萬歲)	二、二九三	祥瑞詩入瓢形德利(二對)	三、六〇〇	華山湖石睡猫畫讚	九二、一〇〇
薩摩甫五耳付瓢形茶入	一、三九〇	祥瑞山水繪臺鉢	五、五〇〇	華山秋樓雲山半切	三一、五〇〇
ケイカン朱中次	二、九八〇	金網手環珞向付(五)	二、四九〇	蕪村桃林家醉人歸夏日山林瀑布深山紅葉遊行雪晴月樂清四幅對	五三、九〇〇
梨子地籠目吹寄時繪臺	二、八〇〇	染付文字入開扇向付(五)	九、八一〇	蕪村竹林幽隱	一三、三〇〇
織部耳付振出	二、七〇〇	金網手小向付吳洲赤繪小向付(五)	三、一九〇	蕪村風雨寫雨中鴉双幅	一四、四六〇
淨林菊地紋姥口平釜	四、三一〇	古九谷色繪木瓜向付(二十)	九、一一〇	蕪村寒山晚景橫物	一八、九〇〇
唐物脛當炭斗	二、三九〇	吳洲冠手火入(二對)	二、六〇〇	蕪村竹林茅屋畫讚花の香や横物	五、三九三
梨皮俱輪茶鉢	六、三〇〇	繪唐津蘆鳥繪四方火入	二、一〇〇	蕪村淺峰山水	二、三〇〇
染付飛馬煎茶碗	二、八〇〇	某家寶立	六月二十日	蕪村俳諧八仙半切	二、九九〇
染付唐子小煎茶碗	二、〇〇〇	景年四季花鳥四幅對(共箱)	二、一〇〇	蕪村竹林訪友小品	二、八一〇
染付漁樵問答煎茶碗	二、〇〇〇	尾道帆雨軒寶立	十月九日	半江水墨夏谿雨後畫讚	一五、九三〇
木米盧同茶碗	三、八九〇	山陽水墨山水菰翁淺峯山水(双幅)	四、七九〇	山陽一行綠竹	四、一九一
萌黃地金更紗帛紗	四、七〇〇	竹田伴鶴還山	四、五一〇	山陽大和萬歲樂詩	一八、三九〇
秋成手造湯沸木米白泥涼爐	三、六〇〇	竹田甘草畫讚	二、八九〇	華山猛虎	二、八八九
翡翠獅子摘印材(二)	三、五三九			華山梅花書屋畫讚	四、三九〇
鷄血大印材(八)	六、〇〇〇			竹田春山幽溪	四、一〇〇
菩提樹念珠	四、〇〇〇				
南蠻砂張靜海盆	四、六一〇				
存星花鳥四方盆	二、六九〇				
古雲鶴杉成鉢	五、〇〇〇				
青磁端反鉢	三、〇〇〇				
繪高麗菓子鉢	一、三、七〇〇				

草坪梅華書屋	二二、八五〇	許六枯木鳥芭蕉讚	七、一一〇	傳又兵衛金地犬追物屏風一雙	七、六〇〇
梅逸青綠秋景山水	一〇、〇〇〇	弘貫中萬歲樂左桂川右宇治三幅對	二、一〇〇	清暉中富士鹽釜炭燒三幅對	二、六〇〇
梅逸松間流水	一八、九五〇	桂谷中旭左富士右筑波三幅對	三、一九八	清暉中月嵐山高雄三幅對共箱	二、八〇〇
梅逸柳桃黃鳥	一八、四一〇	華山花卉蟲魚畫冊	六〇、〇〇〇	雅邦松林山水共箱	二、二六〇
梅逸蓬萊山	二、六〇〇	木庵三字額第一義	三、九〇〇	春舉旭波双幅	二、一〇〇
梅逸老松雙鶴	六、九〇〇	山陽四字額桃李貯春	三、三一〇	諸名家寄合幅全五冊	五、一九〇
梅逸不老長春	三、七九三	蕪村老爺飼馬柳陰曳馬二枚折一雙	四一、九八九		
竹溪松林煎茗山水橫物	三、三九〇	蕪村竹陰閑居畫讚二枚折	一一、一〇〇	抱一燕子花	一一、一〇〇
竹溪青綠嵐山春景橫物	三〇、〇〇〇	抱一秋草二枚折	八、三〇〇	對山越溪秋雨	五、一〇〇
竹溪青綠富士橫物	二一、〇〇〇	梅逸四季草花屏風一雙	七、五〇〇	抱一枯木鳴皋畫讚	六、〇〇〇
竹溪柳桃山水橫物	二、六〇〇	砧青磁浮牡丹不遊環花生	三〇、〇〇〇	抱一水月都鳥畫讚	二、四〇〇
對山松林山水畫讚	二、二九〇	安南紋手手雲龍花生	四五、六〇〇	竹溪紅楓晴霞	二、五〇〇
秋暉巖上鶴紅梅龜變幅	二、五三〇	乾山色繪秋草透鉢	七二、〇〇〇	直入松竹梅山水畫讚	二、〇五〇
海儼麗夜櫻時雨紅葉雙幅	五、六九〇	萬曆赤繪樹水指	一六、六〇〇	完瑛荒磯鯛	二、四〇〇
應舉真向虎	一〇、六〇〇	南蠻切溜花餅	三、九三〇	四季富嶽四幅對	三、八九〇
應舉遊鮎橫物	五、六九一	唐物青貝樓閣山水人物平卓	七、一九〇	棋嶺菊花群雀	二、〇九三
蘆雪巖上猿猴大幅	四、九三九	唐物青貝鳳凰模樣丸卓	三、三九八	清巖一行	二、二〇〇
蘆雪樹上老猿	二、三九〇	大判取合十五枚天保五兩判托子五枚時繪筆	四三、九三〇	雅邦秋湖歸牧	三、一九九
北齋雪中美人蜀山人讚	三、三九〇	箭添	三、九三〇	松園櫻狩	六、七〇〇
來章高雄紅葉	二、六〇〇	保全色繪交趾重鉢	三、九三〇	松園時雨	二、三九三
文麟月夜櫻	二、三八〇	乾山夕顏繪火入	二、二九〇	松園雪中美人	二、六〇〇
棋嶺永源寺秋色橫物	五、四一〇	祥瑞飄德利山水繪	二、三九〇	在中金地屏風一雙	五、〇〇〇
一休一行墨蹟諸惡	二、一三九	地黑山水時繪文臺硯	二、〇〇〇	住吉廣行金地大內繪中屏風一雙	五、四〇〇
賴政平等院切	三、五九〇	道八座禪狸	二、九三九	來章金地松竹梅鶴屏風一雙	八、五五〇
澤庵一行心隨	四、一〇〇			養川院金地四季花鳥中屏風一雙	四、一九〇
清巖觀ノ字	三、三〇〇			一鳳金地四季花卉中屏風一雙	六、八〇〇
清巖一行天無私	五、〇〇〇			文麟金地七人狸々一雙	四、一九〇
清巖青山綠水双幅	二、七一〇				
清巖一行一滴					

某家賣立 十一月二十六日

田村家賣立 十二月三日

貫魚金地唐子遊一双 二、七〇〇

直入金地老松屏風一双 二、一九〇

景年群鳩中屏風一双 三、〇〇〇

景文金地若松双鶴二枚折 四、〇〇〇

金莊寶石入衛府太刀 三、一三〇

唐物青貝舟人物半月卓 四、一五〇

寧窯靈芝耳花瓶 二、三一〇

保全染付隅田川寫香合 二、三九〇

礪青磁浮牡丹水指 二、四〇〇

仁阿彌道八一重口銀香繪水指 五、五三九

保全交趾寫牡丹平水指 二、八九一

保全吳須赤繪魁鉢 七、一〇〇

某家賣立 十二月七日

清曠漁夫山水 二、八二一

某家賣立 十二月十一日

慶入仁清字兎耳水指玄々齋箱 四、三九一

某家賣立 十二月十五日

清巖太平一曲云々一行 二、一三〇

景年嵐峽春雨共箱 三、八〇〇

景年寒林山水共箱 二、四〇〇

鳳山花見美人共箱 四、三〇〇

鳳山雪中燈籠猿共箱 二、一〇〇

鳳山四季美人四幅對共箱 四、六九〇

鳳山亭和美人 五、二三〇

鳳山達磨美人 二、七〇〇

桑山左近共筒茶杓銘はしのは 二、〇五〇

納戸糸絨大袖鏡 二、六七一

某家賣立 十二月十九日

梅逸老松双鶴悠山岩上龜双幅 三、八〇〇

春草湖邊 二、三六〇

雅邦夏冬山水双幅 二、〇五九

景年月下双鴨共箱 二、三五〇

直入蓬萊仙境竹卮箱 二、五五〇

保全作安南字鉄鉢水指共箱 二、二〇〇

名古屋美術俱樂部

渡邊家、某大家賣立 一月二十日

寬齋松下双鴨 八、〇〇〇

牧野井戸茶碗 一六、〇〇〇

仁清輪花鉢 二、〇〇〇

宗中共筒茶杓 二、三〇〇

交趾柘榴香合 三、〇〇〇

古伊賀花生 二、〇〇〇

黃瀬戸鉦鉢 二、〇〇〇

ノンカウ黒梅繪茶碗 三、〇〇〇

古唐津小服茶碗 二、四〇〇

堅手茶碗 二、二〇〇

村瀨庸庵賣立 二月八日

華山水墨猛虎肉醉 五〇、〇〇〇

竹溪着色草蘆三顧双幅 五、一一一

梅逸水墨瀑布 二、五九〇

寬齋着色蓬萊 一〇、六一〇

景年着色蘆雁金地六枚折 四、七八〇

清金地極彩色草 三、五〇〇

染付桔梗香合 二、七〇〇

交趾笠牛香合 二、九一〇

堀田井戸茶碗 二、三〇〇

遠州共筒茶杓 二、八九一

唐物竹組二重口底四方炭斗 二、一〇〇

時代桑柄火箸灰匙 三、五〇〇

班唐津至鉢 二、二八〇

吳州赤繪魁鉢 一、〇〇〇

朝鮮唐津烏帽子形向附 二、六一九

研出色繪芳野山蔭繪料紙文庫 二、一八〇

梅逸水墨竹溪煮茶 二、〇〇〇

來章着色雲中壽星右竹左若松三幅對 二、五〇〇

保全仁清寫日之出鶴茶碗 四、五〇〇

青地金欄手小鉢 二、三五〇

山内飽霜軒、某家賣立 二月二十一日

蛇足着色魚籃觀音 三、一九〇

松花堂淡彩釋阿耨讚 二、一八〇

石山切伊勢集 三、八一九

行成卿伊豫切

四、三五九

公任卿拾遺集切

三、〇〇〇

石山切貫之集

二、八九〇

光廣卿聚樂懷紙

六、〇〇〇

桃山六曲屏風

二、八〇〇

朝鮮唐津手鉢

一、二、四三〇

志野茶碗

六、五〇〇

利休左判竹中次

二、八五〇

仁清色繪金入龍田川繪茶碗

二、〇〇〇

備前新兵衛茄子茶入久田宗也共筒茶杓

三、九九九

遠州共筒茶杓

二、一一〇

唐軒凡鳥棗

二、〇〇〇

熊川茶碗

六、〇〇〇

古備前矢筈口共蓋水指

四、〇〇〇

染付山水繪芋頭水指

二、一〇〇

織部四方手鉢

二、三五〇

唐津割山叔向附

三、七一〇

染付重扇向附

二、二〇〇

時代梨子地龍田蒔繪硯箱

四、二五〇

時代西ノ屋型燈籠

二、一九〇

時代伽藍石

三、〇〇〇

定家爲家兩筆墨蹟

一、八、九〇〇

古瀬戸肩衝茶入

三、五九九

宗全共筒茶杓

二、八一九

也有畫贊卷

二、二〇〇

寒雉大欠風爐釜

二、〇〇〇

繪唐津筒向附

二、五〇〇

共瀬戸六角酒吞

二、〇〇〇

關戸松下軒寶立 四月五日

熊野懷紙右中辨長房

二、一〇〇

貫之卿寸松庵色紙

四、一、九〇〇

道風朝臣繼色紙

五、六、八〇〇

公任卿大色紙

四、〇〇〇

石山切貫之集

一、五、〇〇〇

行成卿針切

四、五〇〇

行成卿伊豫切

四、〇〇〇

行成卿伊豫切

一、三、一〇〇

定賴：鳥丸切

三、八五〇

俊賴朝臣古今集切

二、九、〇〇〇

俊忠卿歌合切

二、五〇〇

定家卿五首詠草

五、六一九

信實定家卿像

八、一九九

爲家卿歌仙切

四、三八〇

爲家卿本能寺切

二、五〇〇

印月江墨蹟

三、二九〇

寂室禪師入室二大字

三、一九〇

利休歌入文

二、六九〇

松花堂兼好法師畫讚

五、六八〇

定家卿見遊幾帖

三、五〇〇

鎌倉時代蓬萊蒔繪錫緣四方香合

三、八、九〇〇

金馬雀香合

四、一、三九

祥瑞二ツ枕香合

二、六、八〇〇

吳州玉取獅子四方香合

一、〇、〇〇〇

青磁開扇香合

三、九、九一

志野摘香合

七、九一〇

染付横唄香合

七、四〇〇

青貝人物模樣八角香合

二、〇〇〇

時代根來丸香合

三、二九一

光悅松下人物蒔繪平香合

三、五八八

光悅松下人物蒔繪平香合

四、五一〇

瀨戸大津手肩衝茶入

三、九三〇

周防侯御好竹茶器

一、〇、〇〇〇

光悅赤茶碗

一、四、八〇〇

本手蕎麥茶碗

二、一、一九〇

古三島小服茶碗

九、一〇〇

彫三島茶碗

二、四、〇〇〇

本手魚々屋茶碗

五、九、九〇

古井戸茶碗

四、五〇〇

祥瑞捻詩入茶碗

一、〇、三〇〇

玄悅茶碗

三、一五八

黃伊羅保茶碗

三、三八〇

魚々屋平茶碗

二、五一〇

一入赤茶碗

六、四、一〇〇

志野割高臺茶碗

八、四一〇

緋襷玉柏水指

一一、九一〇

祥瑞密柑共蓋水指

六、九、九一

萬曆赤繪榊水指

四、四三〇

古備前旅枕掛花入

二、八〇〇

菊桐蒔繪一重切花入

一、三、一〇〇

長閑堂一重切花入

四、一八〇

時代簾組掛花入

七、四一〇

遠州共筒茶杓

四、八〇〇

唐軒共筒茶杓

六、三、九〇

石州共筒茶杓

三、四、九〇

長閑堂共筒茶杓

三、四、九〇

祥瑞花鳥繪火入	二、八八〇	清百人一首帖	五、〇〇〇	佐橋松風軒、某家賣立	十一月十八日
南蠻打水次藥罐	二、〇八〇	伊羅保茶碗	四、〇〇〇	竹洞着色浪ノ圖	二、〇〇〇
南蠻内藏灰器	四、一一〇	彌平太障子茶碗	二、〇〇〇	仁清口透菓子鉢	二、〇〇〇
唐物竹組平炭斗	三、一九〇	備前耳付花入	二、〇〇〇		
古蘆屋布袋松梅地紋饅口平丸釜	三、三〇〇	志野草花繪香爐	三、八〇〇		
道安形桑柄灰匙	二、五九〇	紅毛藍繪舟人物酒吞	三、五〇〇	關戸松下軒賣立	十二月三日
時代黑柿爐縁	三、〇〇〇	黑地梅松蒔繪料紙文庫	二、〇〇〇		
南蠻砂張青海盆	七、三九〇	仁清口三島茶碗	三、〇〇〇	石山切	二、三、九一〇
澤庵梯子爐縁	二、三九〇	尹部竹耳共蓋水指	四、八〇〇	伊豫切瑩	八、四一〇
青磁鼎形香爐	二、九八〇	吳州赤繪春鉢	四、〇〇〇	道風本阿彌切	七、八一〇
古瀬戸八角硯	二、三九〇			西行小色紙	三、九三〇
瑠璃地金襴手向附	二六、〇〇〇	水谷心地庵、某舊家賣立	四月十五日	行成伊豫切	四、八八〇
志野四方入角鉢	一〇、〇〇〇			行成猿丸集切	四、五〇〇
志野四方入角向附	二五、一〇〇	織部松竹梅手鉢	一二、〇〇〇	戊辰切草	二、五九八
吳州赤繪獅子玉取鉢	二、三、九〇〇	清暉旭波	二、〇〇〇	宗祇大倉色紙	三、八八九
古備前平鉢	九、〇〇〇	仁清色繪武藏野茶碗	二、〇〇〇	無學祖元墨蹟	三、〇〇〇
祥瑞丸紋輪花向附	八、五九一			柯山布袋	三、〇〇〇
能面深井雪月花	五、一九〇	串田家、某家賣立	六月四日	清巖二大字	二、一九〇
松印能面	三、三九〇	北勢某大家、某家賣立	六月十九日	澤庵墨蹟	二、一〇〇
梅印能面	二、五〇〇			松花堂阿房宮卷物	八、一〇〇
龜印能衣裳取合	四、〇九〇	光起三韓退治物語卷物	四、五〇〇	彫三島茶碗	一二、〇〇〇
鶴印能衣裳取合	五、一〇〇	碧雲莊賣立	十月五日	宋胡錄柿香合	七、四一〇
俊成卿住吉切	二、五〇〇	石河家、中區某大家賣立	十月二十六日	正意肩衝茶入	一二、八〇〇
長閑堂狂歌入文	三、五〇〇			青貝唐人形香合	二、〇〇〇
一蕙齋名古曾關	四、〇〇〇			井戸茶碗	八、九八〇
清贖宇治新樹	五、〇〇〇			薩摩茶入	六、〇〇〇
蕪村簡季候書識	二、〇〇〇			鎌倉彫菊水香合	二、二〇〇
平洲青綠山水	二、〇〇〇	竹溪梅花天仙	二、〇〇〇	彫根來菊水香合	三、五〇〇
秋暉牡丹双燕	二、〇〇〇	御胴丸紫濃絲織	二、五〇〇	古伊羅保茶碗	一五、五〇〇

祥瑞山水模樣詩入茶碗	三、五八〇	染付葡萄棚水指	五、〇〇〇
熊川茶碗	二、五〇〇	黃瀬戸胴ノ水指	七、〇〇〇
帶手斗々屋茶碗	二、一〇〇	丹地鶴頭袋裂	三、〇〇〇
朝日茶碗	九、五一〇	袋裂	二、〇〇〇
繪唐津胴ノ茶碗	二八、〇〇〇	紛溜梅蒔繪平棗	三、〇〇〇
遠州共筒茶杓	三、八一〇	乾山春草之繪茶碗	三、〇〇〇
吳州水玉火入	四一、〇〇〇	權十郎歌銘竹一重切花入	二、〇〇〇
青磁牡丹唐草香爐	五、八九〇		
青磁算木香爐	二、一五〇	市内某舊家賣立 十二月二十一日	
唐物青貝布袋四方盆	四、〇〇〇		
南蠻砂張掛合盆	三、二八九	柴山青松軒、某舊家賣立 十二年一月十六日	
礪青磁菊形盃	二六、九一〇		
和蘭陀四方向附	一二、六〇〇	野呂嵩軒、小坂井家、堀田麗聖軒、外某舊	
人形手馬上盆	四、五一〇	家賣立 十一年二月二十六日	
伊賀沓鉢	一六、五〇〇		
織部洲濱手鉢	三、九八〇	岡田松濤庵外某舊家賣立 十二年三月十九日	
黃瀬戸六角酒吞	二、八九〇		
祥瑞角猪口	一〇、〇一〇	梅逸淺絳山水	二、五〇〇
能衣裳	三、〇〇〇	梅逸老檜幽禽	二、三〇〇
能衣裳	二、〇〇〇	粉吹茶碗	二、一〇〇
天平裂	一〇、〇〇〇	雁木胴紐煎茶茶碗	二、四〇〇
清巖一行	四、〇〇〇	赤地金襴手向附	二、二〇〇
探幽中陶淵明三幅對	二、〇〇〇		
芭蕉翁座右銘大短冊	三、〇〇〇		
山陽七絶	二、〇〇〇		
清曠天之橋立	二、五〇〇		
彫三島茶碗	二、二〇〇		
黃瀬戸筒茶碗	二、〇〇〇		
志野茶碗	二、〇〇〇		

昭和十年度美術文獻目錄

凡 例

一、此處に採録する美術文獻は日本帝國に於て昭和十年度に發行せられたる單行本及定期刊行物に掲載せられたるものに限る。

一、東洋古美術文獻目錄は東洋古美術（西方アジアを除く）に關し昭和十年中に發表せられたる文獻及圖録等の主要なるものを收録した。

一、東洋古美術文獻採録の範圍は原則として美術關係のものに限つたが、考古學、歴史地理其他のものに就ても美術關係文獻として重要性あるものは適宜採録した。所採の定期刊行物はその項の初に掲げた通りである。

一、現代美術文獻目錄は東洋古美術關係を除き、現代美術（及美術一般）に關する文獻を單行圖書及主要なる現代美術雜誌に就て調査採録した。別に美術雜誌ならざる綜合雜誌所載の主要なる美術文獻をも適宜採録した。所採の美術雜誌名はその項の初めに掲げた。

一、現代美術雜誌に載せられた東洋古美術に關する文獻は東洋古美術文獻目錄に採録した。

一、西洋美術に關する文獻は便宜上現代美術文獻目錄中に西洋現代美術及其の他外國美術の二項を設けて採録した。

一、建築に關しては、本書本文の凡例に記した範圍に限定した。（竣工建築物報導の記事は、工事概要のみを記したるもの、或は寫眞のみを載せたるものは省略し、紹介批評の記事あるもののみ採録した。）

一、各項目内の配列は單行本にあつては著者名による五十音順、定期刊行物所載文獻にあつては所載雜誌名による五十音順とした。同一雜誌の配列はその發行順である。但し展覽會批評及昭和十年度物故作家評傳は雜誌別に據らずして題目別にまとめた。

現代美術文獻目錄

採録定期刊行物目錄 (五十音順)

ア ト リ エ	二二ノ一——二二	中央美術	一八——二九
浮世繪藝術	四ノ一——二二	圖畫と手工	一九ノ一——二一
漆と工藝	四〇五——四一六	帝國工藝	九ノ一——二二
大阪之工藝	一二ノ一——二一	塔影	一一ノ一——二二
繪畫教習	三ノ一——二一	南畫鑑賞	四ノ一——二二
改校美術	九ノ一——二二	日本建築士	一六ノ一——一七ノ六
經濟往來		汎工藝	一一ノ一——二二
藝術日本		美術育	一〇ノ一——二二
現代美術	一ノ八——二ノ八	美術街	二ノ一——二二
建築雜誌	五九四——六〇七	美術評論	四ノ一——九
建築世界	二九ノ一——二二	美術之國	一一ノ一——二二
工藝		文之	
工藝ニュース	四ノ一——二二	寶雲	三五九——三七〇
國際建築	一一ノ一——二二	みづ	
新建築	一一ノ一——二二	夢殿	
セルパン		洋畫研究	二〇——二八
中央公論			

目次

定期刊行物所載文獻

論文及隨筆

總說	雜誌別五十音順	二〇五頁
日本畫	〃	二〇五頁
洋畫	〃	二〇六頁
彫刻	〃	二〇七頁
建築	〃	二〇七頁
工藝	〃	二〇九頁
版畫	〃	二三頁
圖案	〃	二三頁
技法	〃	二三頁
繪畫	雜誌別五十音順	二三頁
工藝	〃	三四頁
作家論	〃	三四頁
物故作家及美術關係者	人名別五十音順	三六頁
批評論	雜誌別五十音順	三八頁
時評	〃	三八頁
身邊雜記	〃	三九頁
雜	〃	三三頁
明治大正美術	〃	三五頁
外國現代美術	〃	三七頁
其他外國美術	〃	三九頁
展覽會批評	〃	三九頁
主要展覽會	〃	三九頁
國畫會	雜誌別五十音順	三〇頁
春陽會	〃	三〇頁
青龍社	雜誌別五十音順	三〇頁

獨立美術協會	雜誌別五十音順	二三頁
二科會	〃	二三頁
日本美術院	〃	二三頁
雜（各主要展の綜合評を收む）	〃	二三頁
日本畫展覽會	題目別五十音順	二三頁
洋畫展覽會	〃	二三頁
彫刻展覽會	〃	二四頁
工藝展覽會	〃	二四頁
版畫展覽會	〃	二四頁
綜合展覽會	〃	二四頁
美術行政	〃	二四頁
帝展關係（一）	雜誌別五十音順	二四頁
帝展關係（二）	〃	二四頁
法規	〃	二五頁
美術關係施設	〃	二五頁
美術教育	〃	二五頁
單行圖書	〃	二五頁
總說（綜合展圖錄、年鑑、辭典をも含む）	編著者名五十音順	二五頁
日本畫	〃	二五頁
洋畫	〃	二五頁
彫刻	〃	二五頁
建築	〃	二五頁
工藝及圖案	〃	二五頁
版畫	〃	二五頁
外國古美術及近代美術	〃	二五頁
教育	〃	二五頁
雜	〃	二六頁

定期刊行物所載文獻

論文及び隨筆

總説

現代美術を制約するもの	佐波甫	アトリエ	一二ノ八
大衆は美術を所有し得るや	村田耕	同	一二ノ一二
藝術に於ける張り	清水多嘉示	同	同
繪畫と民族精神	松岡映丘	繪畫教習	三ノ一〇
日本精神に歸れ	松田源治	藝術日本	三ノ一
美術と國民精神	石丸優三	同	同
新らしき日本藝術	長谷川三郎	現代美術	二ノ一
藝術美の研究		建築世界	二九ノ四
藝術の輪廻	國稚磨	同	二九ノ一〇
復古主義に付て	柳宗悅	工藝	五一
不易流行	西山翠嶂	塔影	一一ノ六
傳統禮讃	藤田嗣治	同	一一ノ九
日本の美術文化に對する世界人の驚き	岡登貞治	南畫鑑賞	四ノ一二
藝術と民族精神	松岡映丘	日本評論	一〇ノ一一
ビニヨン博士講演美術に於ける日本精神	石川欽一郎	美術	一一ノ九
時代思潮と美術	大口喜六	美術	一〇ノ四
美術家の商品經濟からの解放	長谷川如是閑	同	一〇ノ七
日本美術の精神	大口喜六	同	同
日本美術の變遷	岩佐新	同	一〇ノ九
非常時日本と藝術	石川幸三郎	美之國	一一ノ二
藝術の國土性	神代種亮	同	一一ノ四
我が美術觀	大口喜六	同	一一ノ六

日本畫

現代美術に就ての感想
美術は如何に發展するか

矢代幸雄 美之國 一一ノ九
佐波甫 みづゑ 三六九

堂本印象氏筆信貴山成福院の新襖繪	洛東生	アトリエ	一二ノ四
日本畫に於ける洋風の傾向の問題	川端龍子	アトリエ	一二ノ五
岩崎家獻上屏風「松鶴佳色」を見る	山口蓬春	アトリエ	一二ノ一二
浮世繪の將來への希望	黒川生	アトリエ	同
浮世繪を知りたいが	小島烏水	浮世繪藝術	四ノ一
自然と制作	大口喜六	同	同
堂本印象畫伯の大作襖繪	榊原紫峰	繪畫教習	三ノ一
日本畫と靜物		同	三ノ四
畫人と畫材	山村耕花	同	同
日本畫の傾向	郷倉千毅	同	三ノ五
寫實といふこと	秋山光夫	同	同
支那風光圖繪	矢澤弦月	同	三ノ六
現代人物畫の傾向	芳川起	同	同
日本畫界の新生面	錦木清方	藝術日本	三ノ二
繪畫の使命と日本刀	高原一夫	同	三ノ四
日本畫の獨立	横山大觀	同	三ノ六
歴史畫家一家言	荒木十畝	現代美術	二ノ一
歴史畫についての私見	服部有恒	同	同
歴史畫に就いて	安田靫彦	同	同
歴史畫の更生	大口理夫	同	同
現代畫に對する感想	錦木清方	同	同
花鳥畫の面白味	大口喜六	同	二ノ二
待望の南畫	望月春江	同	二ノ四
友邦印度への贈物	山口玄珠	同	同
日本畫の新しい方向	井上勇	中央美術	一八
	竹内勝太郎	塔影	一一ノ二

日本畫洋畫の辨	石井柏亭	塔影	一一ノ二	堂本印象氏獻上屏風	大山廣光	美術街	二ノ一〇
宗達から受くるもの	バーナード リーチ	同	同	恒例先斗町溫習會舞臺	同	美術評論	二ノ一一
床の間と日本畫	西川一草亭	同	一一ノ三	信貴山の新襖繪	樂濤山人	美術評論	四ノ三
印象氏の信貴山襖繪	神崎憲一	同	一一ノ四	私の寫生	川合玉堂	同	四ノ七
南洋を描く	川端龍子	同	一一ノ六	日本畫壇に於ける人物畫の復興	豐田 豐	美之國	一一ノ一
西洋畫と日本畫	川島理一郎	同	一一ノ七	勅題に因んで現代畫人の鶴圖を 謳ふ	豐田 豐	同	一一ノ二
書道と畫道	工藤壯平	同	同	花鳥畫私見	辻 永	同	一一ノ四
書畫道一致論	今井爽邦	同	同	風景畫私見	池田遙邨	同	同
歴史畫の復興	豐田 豐	同	同	繪畫に現はれた櫻	金井紫雲	同	同
橋本左内先生の肖像	島田墨仙	同	一一ノ九	畫家の生活について	榊原紫峰	同	一一ノ九
藤原時代に美を求めて	吉村忠夫	同	一一ノ一〇	日本精神と日本畫	筑紫春三郎	同	同
繪畫と建築	佐藤功一	同	同	東洋畫構圖法概觀	下店靜市	同	一一ノ一二
日本畫と西洋畫	安井曾太郎	同	一一ノ一一	構圖漫語	山口蓬春	同	同
現代の日本畫	福井利吉郎	同	同				
寫生	中村岳陵	同	同				
心を授けた南畫(回答)	諸 家	南畫鑑賞	四ノ一				
南畫と山水美の心理	大槻憲二	同	四ノ二	日本の油繪に就ての寸言	鈴木保徳	アトリエ	一一ノ一
日本畫家に望む	藤田嗣治	同	同	漆繪の獨立	松岡正雄	同	同
南畫小論二種	金原省吾	同	四ノ三	素描雜感	猪熊弦一郎	同	同
新傳統主義隨想	青木大乗	同	四ノ四	デッサンに就て	清水登之	同	同
文人畫といふもの	木崎好尙	同	四ノ六	洋畫の前途	川路柳虹	同	一一ノ三
南畫様式私見	今泉篤男	同	四ノ五—六	油畫の日本畫	加藤靜兒	同	一一ノ四
余の日本畫と日本畫觀	石井柏亭	同	四ノ八	新日本主義に就て	兒島善三郎	アトリエ	一一ノ五
翠雲畫伯石濤臨畫に就て	同	同	四ノ一〇	現代主義と傳統に就てマチスは 語る	成田重郎	同	一一ノ八
南畫管見	結城素明	同	四ノ一一	メチエーの語義に就て	大森啓助	同	一一ノ九
畫事斷想	水澤澄夫	同	同	再說「日本的なもの」	伊藤 廉	同	同
南畫の表裝・墨の香	小野賢一郎	同	四ノ一二	純粹派繪畫のノート	井澤秋雄	同	同
東洋畫の寫實	小林古徑	美術街	一〇ノ二	視覺的純粹化と繪畫の貧困	柳田慶二	同	一一ノ一二
本年度の新しい人々へ	川崎小虎	美術街	二ノ二	京都朝日ビル外壁畫について	川口軌外	現代美術	二ノ四
印象氏筆信貴山の新襖畫	同	同	二ノ四	繪畫の演劇的	番匠谷英一	同	二ノ五
木村武山氏の大日堂	樂濤山人	同	二ノ一〇				

彫刻

坂本雪鳥	現代美術	二ノ五
村岡景夫	工藝	五六―五七
里見勝藏	塔影	一一ノ一一
川路柳虹	南畫鑑賞	四ノ五一
津田青楓	同	四ノ七
立花高四郎	同	四ノ八
川島理一郎	同	同
牧野虎雄	同	四ノ九
武野貞俊	美術	一〇ノ一
森田龜之助	美術	三
同	同	一〇ノ一
ビツシェール	同	一〇ノ二
伊原宇三郎	同	同
齋藤與里	同	一〇ノ六
梅原龍三郎	同	同
森田龜之助	同	同
高間惣七	同	一〇ノ九
武野貞俊	同	一〇ノ九
昭和九年度 特選作家	美之國	一一
宮坂勝	同	一一ノ一
川路柳虹	同	一一ノ三
木村莊八	同	一一ノ四
須田國太郎	同	三六二
小野里利信	同	三六三
周	同	三六八
同	同	三七〇
外山卯三郎	洋畫研究	二三

建築

安井先生のアトリエ	山口蚊象	アトリエ	一二ノ
アトリエ構成法	岡田哲郎	同	一二ノ四
丸ノ内建築物語	佐藤功一	經濟往來	一〇ノ七
法隆寺伽藍の重修	伊東忠太	藝術日本	三ノ十
建築と彫刻	日名子實三	現代美術	二ノ二
建築と繪畫	今泉篤男	同	同
建築家と畫家	藤田嗣治	同	同
アトリエ建築	岡田哲郎	現代美術	二ノ二
主としてショウウィンドに就て	原弘	同	同
現代建築と屋上庭園	西川友孝	同	同
東京の建築	市浦健	同	同
和洋折衷住宅	堀口捨己	同	同
現代の室内裝飾	藏田周忠	同	同
現代生活と建築	岸田日出刀	同	同
現代の建築に就いて	板垣鷹穂	同	同
獨逸文化研究所	建築雜誌	五九九	同
新大阪ホテル	同	同	同
復興記念横濱博覽會建築物	同	六〇一	同
湯島聖堂	同	同	同
特許局	同	同	同
大東京建築祭懸賞競技當選及佳作圖案	同	同	同
有樂座	同	六〇二	同
會計検査院	同	同	同

府中刑務所	建築雑誌	六〇三	建築時評の必要	酒井 勉	建築世界	二九ノ九
京都醍醐寶樂院	同	同	静岡強震と其の被害	同	同	同
集落計畫(ジードルングス・バウ)	同	同	三つの小商店の設計に添へて	川喜田煉七郎	同	同
大阪株式取引所新市場	同	六〇四	社寺建築と鐵筋コンクリート構造	小林福太郎	同	二九ノ一〇
京都朝日會館	同	同	建築賞を設定せよ	同	同	二九ノ一一
教育塔建築設計懸賞競技當選及佳作圖案	同	同	乾構造再論	金玉 鐘	同	同
白鳳城	同	六〇五	濟生會大阪府病院工事概要	同	同	二九ノ一二
武藤氏記念館	同	同	乾構造論争と乾構築の將來性	川越邦彦	同	同
第九回建築展覽會懸賞競技當選圖案	同	同	工場建築に就いて	石井 桂	同	同
冬季オリンピックの競技施設	建築世界	二九ノ一	材料の重要性和その認識	同	同	同
小博物館の開設に際して	同	二九ノ二	最少限住居	フランツ・シュスター、磯村卓郎譯述	國際建築	一一ノ一
模型に據る郷土家屋の形態綜覽に添へて	同	同	建築の内と外	野村茂治	同	同
四國祖谷の民家模型	同	同	室内とメカニズム	藏田周忠	同	一一ノ二
三つの民家模型に就いて	同	同	「非常時」の建築界	河丸莊助	同	一一ノ三
秋田縣地方民家模型	同	同	現代寢室の考察	ジャン・ボル・サバトウ、石村篤譯	同	一一ノ四
木造陸屋根の住宅	同	同	新建築論	河丸莊助	同	一一ノ四
新主觀主義の時代	同	同	都市構成要素の新組織——新らしい住居單位	ル・コルビュジエ、石村篤譯	同	一一ノ五
警察建築の概観	同	二九ノ三	室壽にかへて(作庭記)	堀口捨巳	同	一一ノ六
住家の種々相	同	二九ノ六	武藏平地の住宅	藏田周忠	同	同
「乾式構造の是非」に就て	同	二九ノ六	建築批判の精神	山本二郎	同	同
穀物倉庫	同	八	京都朝日會館	石川純一	同	一一ノ七
國際見本市と常設展覽場	同	二九ノ七	有樂座の意匠に就て	友田 薰	同	同
新大阪ホテルの設備に就て	同	同	新住宅	市浦 健	同	同
農家研究の態度	同	二九ノ八	仕事場と住居を結んで	山脇 巖	同	一一ノ八
バスターミナル建築	同	九	建築と都市計劃	高橋壽男	同	同
都市の騒音と其の対策	同	二九ノ八				
	船越義務	一二				

我等は何處に居るか？

日本の都市計劃のために

水戸測候所

輕井澤の Catholic Church

二つの問題——吉田鐵郎氏の著
書・レイモンド設計の小寺

「都市計劃」の問題

本年の建築界

川崎守之助邸 A. Raymond 設計

M氏アトリエ 山脇巖設計

住宅の命數

獨乙文化研究所 村野藤吾設計

安井先生のアトリエ

小學校建築を訊く(座談會)

乾式構造「材料と構造」

第二の自宅の建築

海員會館

武藏平地の住宅——福澤邸——

今村邸

第二の小住宅

阿部秀介邸に就て

住居と仕事場

百貨店そごう

京都日本赤十字社病院 武田五

一設計

藝術としての建築

床の間

小學校校舍其他諸建築災害防止
に關する建議マルツェル
ブローヤ
小池新二譯 國際建築

高橋壽男

堀口捨巳

杉山雅則

板垣鷹穂

香川三郎

板垣鷹穂

吉川清作

山口蚊象

高木貞幹
三木茂太

土浦龜城

神戸市營繕課

藏田周忠

土浦龜城

市浦健

同

山脇巖

村野藤吾建
築事務所

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

專門教育に於ける建築と土木
會關博士を中心とする座談

床の間の移動

建築の現代性

名建築論

工 藝

郷土工藝を考へる

多産工藝の壓迫と工藝家

再び正木氏を會頭に迎へて本會
の發展を期す

工藝の方向を語る

會勢の興隆

輸出漆品に就て

漆液の採取と其需給政策

輸出漆器について

日本工藝品の海外發展に對する
提唱滿洲國に對する我が工藝品の輸
出進展策

輸出工藝品振興座設會

商工省輸出工藝展出品に就て

漆器座談會

歴史ある友玉園の過去及將來

東久邇第四師團長宮殿下工藝博
台臨

日本工藝品巴里陳列會狀況

「工藝品——工業化」「工業品——
工業化」を語る會

堀越三郎 日本建築士

宇都宮誠太郎

佐藤功一

伊東忠太

文藝春秋

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一六〇四

一七〇一

一三〇四

一一〇六

一三〇七

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

米國に於ける本邦品の伸張狀況に就て	鹿島増藏	同	一二ノ七	李朝の壺	柳宗悦	工	五五
時代の要求と大阪の陶磁器業	同	同	同	伊萬里の香爐	井關双山	同	同
工藝品の美化に就て	國井喜太郎	同	一二ノ七	流釉の皿	河井寛次郎	同	同
輸出向工藝と雜貨に就て	江藤嘉吉	同	一二ノ八	染付の皿	武内潔真	同	同
歐米に於ける商品の嗜好と需要に就て	岡田友次	同	一二ノ九	鶏記山大鉢	内山省三	同	同
我國業者に呼びかけるビルマと白國の工藝趣味	同	同	同	流釉の壺	水谷良一	同	同
腐蝕工藝とネームプレートの現況	山口禎雄	同	同	日田のせんべい壺	濱田庄司	同	同
漆及漆器に關する調査	同	同	同	朝鮮の木工品	柳宗悦	同	五六
工藝關係特許新案欄(九月分)	同	同	一二ノ一〇	硯を描く	同	同	五八
工藝放送——趣味講座の仁王の話	田中主水	同	同	和紙の美と小川の紙	永松楮堂	同	五九
和田三造氏の歐洲に於ける工藝スケッチ帖を見るの記	伊藤樸堂	同	同	小川の紙と産地の今昔	横川禎三	同	同
米國向工藝品に警報	同	同	一二ノ一一	小川の將來	柳宗悦	同	同
工藝關係特許新案欄(十月分)	同	同	同	地方工藝産業狀況	鹿兒島縣	工藝ニュース	四ノ一
工藝記事二篇	同	同	同	同	青森縣	同	同
樂屋より見たる大阪の工藝表装の話	鹿島増藏	同	同	年頭の辭	一 電気ス	同	同
献上甲冑製作の經過	津田信夫	同	同	東北冷害地方救済副業指導講習會記	國井喜太郎	同	同
琉球の染色	根本徳三郎	同	三ノ一〇	農村と工藝	國井喜太郎	同	同
質の問題	松岡映丘	同	一ノ九	新商品に就て聽く	二 フル	同	同
工製品と其の作者	上村六郎	同	四九—五四	地方工藝産業狀況	廣島縣	同	四ノ二
民藝と農民美術	河井寛次郎	同	五一	地方工藝産業狀況	長野縣	同	四ノ三
筆の活	柳宗悦	同	五一	新商品に就て聽く	三	同	同
日本の工藝に付ての感想	館 稔	同	同	東北工業振興に關する意見	國井喜太郎	同	同
木型に就て	バーナード・リーチ	同	五三	商品調査、調味料容器	靜岡縣	同	同
藍繪の鉢	世良延雄	同	五四	地方工藝産業狀況	三重縣	同	同
	森永重治	同	五五	同	滋賀縣	同	四ノ四
		同		新商品に就て聽く	熊本縣	同	同

昭和十年度事業計畫に就て	國井喜太郎	工藝ニュース	四ノ四	新商品に就て聴く	八	コーヒ	工藝ニュース	四ノ一一
新商品に就て聴く	五	同	四ノ五	本所出陳雜貨工藝品の改善	商工省工藝指導所	同	同	同
意匠資料抄・ランチ・バスケット	同	同	同	地方工藝産業狀況 福岡縣	同	同	同	同
圖録・商工展出品	同	同	同	輸出工藝展出品物圖譜	同	同	同	同
地方工藝産業狀況 福井縣	同	同	同	地方工藝産業狀況 愛媛縣	同	同	同	同
山口縣	同	同	四ノ六	編組工藝品の研究試作について	同	同	同	四ノ一二
香川縣	同	同	同	日用工藝品に於ける新舊對比——	同	同	同	同
鳥取縣	同	同	同	本所記念展より——	同	同	同	同
新商品に就て聴く	六	同	同	市販工藝品の改善進歩に就いて	國井喜太郎	同	同	同
和田三造氏將來の金工品に就て	同	同	同	厨房器具及食器	松本政雄	同	國際建築	一一ノ一
部門別工藝關係技術官會議詳報	同	同	同	椅子の規範原型の研究	商工省工藝指導所	同	同	一一ノ一
今秋の輸出向工藝展出品に就て	同	同	四ノ七	美術と工業	小池新二	同	同	一一ノ八
地方工藝産業狀況 茨木縣	同	同	同	銀座裝飾	小島宗一郎	同	圖畫と手工	一八ノ一三
山形縣	同	同	同	家具の新式について	武田五一	帝國工藝	九ノ一	九ノ一
和田氏將來の木工品に就て	安 藤	同	四ノ八	東北冷害地方救済副業工藝指導講習に就て	齊藤 信治	同	同	九ノ二
一九三七年バリ大博覽會に就て	國井喜太郎	同	四ノ八—九	農村工藝と兎毛皮	井舟靜水	同	同	同
對米輸出工藝に就いて聴く	渡邊久克	同	四ノ八	農民美術に就て	山本 鼎	同	同	同
地方工藝産業狀況 奈良縣	同	同	同	農村美術更生の新氣運	山中省二	同	同	同
山梨縣	同	同	同	巴里へ送つた農藝品	伴野文三郎	同	同	同
佐賀縣	同	同	同	農村工藝と意匠の美化	仲澤辨次郎	同	同	同
島根縣	緒 方	同	四ノ九	今日の農村藝術	藤井達吉	同	同	同
地方工藝産業狀況 富山縣	緒 方	同	同	農村工藝に關する私達の計畫及	上田輝雄	同	同	同
東北六縣經濟部長打合せ報告	國井喜太郎	同	同	タウト教授の指導方法	渡邊 進	同	同	同
本邦工業品の缺陷	同	同	同	八雲の熊彫	井上房一郎	同	同	同
輸出工藝展本所出品物に就て	同	同	四ノ一〇	指導機關として刑務所	中添 修	同	同	同
本所工藝品研究試作の意圖と目標——輸出工藝展出品物に關聯して——	同	同	同	試作品二三に就て	湯川左右	同	同	九ノ三
工業品に於ける美合理化	同	同	同		金子五朔	同	同	同
新商品に就いて聴く	七 本立	同	同					
地方工藝産業狀況 秋田縣	同	同	同					
ミラチイスと高崎木工製作配分組合	同	同	同					

全國工藝關係指導機關一覽表		各地工藝指導當局の試作品		愛育のための子供家具（二つの用途を持つ）		芥川 猛次		汎 工 藝	
各地工藝指導當局の試作品	小太刀虎二 外十一氏	同	九ノ三	我工藝品の生産三十億突破 現代工藝作家への要望 今年の帝展の工藝	同	同	同	同	九ノ一二
徳島縣に於ける工藝	木村 翠	同	同	外狩素心庵	同	同	同	同	一三ノ一
平織緞通の試作と商品化	北島牧夫	同	同	杉田 禾堂	同	同	同	同	同
静岡漆器の輸出向試作品	藤村彦四郎	同	同	霜島正三郎	同	同	同	同	同
昭和八年度本縣輸出向試作品	永田直三	同	同	工業製品の美化に就て	同	同	同	同	同
総合的な試作品に就て	前川 佐一	同	同	大阪府工業獎勵館工業講演會	同	同	同	同	一三ノ二
當所の金胎漆器に就て	澤口 悟一	同	同	爐邊談笑「高村登周氏と語る」	同	同	同	同	同
木竹試作品に就て	安藤廣吉	同	同	北白川偶話	同	同	同	同	一三ノ三
陶磁器試驗所とその試作品	平野耕輔	同	同	「工藝に於ける」實際的新興運動	同	同	同	同	同
試作工藝染色に就て	藤澤廣胖	同	同	名工と故人逸話	同	同	同	同	同
當場試作陶器に就て	秋月 透	同	同	藝術價值と商品價值	同	同	同	同	同
私達の試作品に就て	笠間 與男	同	同	概念の彼方へ	同	同	同	同	同
流線型とは何ぞや	伊村武男	同	九ノ四一六	樂屋より見たる大阪の工藝	同	同	同	同	一三ノ四
流線型時代と工藝	井上彦之助	同	同	時代的新進の漆工藝	同	同	同	同	一三ノ五
流線型の話	野村茂治	同	同	讃岐の工藝に就て	同	同	同	同	同
本所の研究試作に就て	國井喜太郎	同	同	生活と工藝	同	同	同	同	一三ノ七
各地工藝指導當局の試作品	藤岡光長外 四氏	同	同	工藝の一品作に就て 杉田禾堂と語る	同	同	同	同	一三ノ八
日本輸出工藝聯合會外國航路船舶内に本邦工藝品陳列計畫	同	同	九ノ七	漆器の信用と漆の品質に就て	同	同	同	同	同
夏の庭園家具	鈴木太郎	同	九ノ七一八	今日の工藝	同	同	同	同	一ノ二
米國輸出工藝品の原則	渡邊久克	同	同	セメント工藝の發達	同	同	同	同	一ノ一〇
農村に於ける木工藝の經營	木檜 恕一	同	九ノ九	壺禮讃讃	同	同	同	同	二ノ二
農山村の自力更生と工藝	安田 綠造	同	同	日本の工藝美術家	同	同	同	同	二ノ四
工藝知識普及と本會の使命	宮下 孝雄	同	九ノ一〇	國井喜太郎氏の講演をきいて	同	同	同	同	二ノ五
滿洲國皇帝陛下獻上の飾り棚	同	同	同	工藝片々	同	同	同	同	一ノ三
滿洲國勳章	同	同	同	泉崎瀬戸市長におくる	同	同	同	同	一ノ九一
新しき日本製マネキンの紹介	同	同	同	無裝飾の理想を超へよ	同	同	同	同	一ノ一〇
らんぶすたんど（服部時計店展示による）	同	同	九ノ一一		同	同	同	同	一ノ一〇

版 畫

版畫立夏

渡米日本版畫の文化的意義

帝展と現代版畫の問題

現代版畫座談會

現代版畫賣言葉買言葉

わが版畫に寄せて

ポール・ジャクレー氏の版畫

朝鮮の版畫

米國に於ける日本現代版畫展に就て

現代版畫の慧星

畫・彫・摺

三部作に就て

藝術四版畫を推稱す

圖 案

日米商店公募ポスター

圖案と日本畫

技 法

繪 畫

創作漆繪の描き方

萬年青と鷗鷺

美人畫の描法

花鳥畫の描き方

八重椿と目白
繪具の用法

貝と草花

畫習三要

春蘭と雀

美人畫の製作過程

花菖蒲と蜻蛉

鳥の寫生法

菊と竹の新芽

立姿の描き方

朝顔の描き方

スケッチの心得

畫答新講

葡萄の描き方

鶏頭花の描き方

實柘榴と山茶花

線の運用法

壁畫の描き方

畫技論

風景畫構圖のとり方

胡粉と水繪具はどうして溶くか

着衣人物畫の描き方

人體寫生に就て

南畫と其描法

蒔繪畫風と其技法とに就て

版畫の技術

わが技巧論

ウソといふこと

永田春水

繪畫教習

三ノ二

永田春水

同

三ノ二一六

中村岳陵

同

三ノ三

永田春水

同

三ノ四

山川秀峰

同

三ノ四一

永田春水

同

三ノ五

西澤笛畝

同

三ノ五七

永田春水

同

三ノ六

同

同

三ノ七

同

同

三ノ八

小野竹喬

同

同

西澤笛畝

同

三ノ八一

永田春水

同

三ノ九

同

同

三ノ一〇

同

同

三ノ一一

川合玉堂

藝術日本

三ノ一

小杉放庵

同

三ノ二

青山櫻花

同

三ノ九

山口蓬春

同

三ノ一〇

都筑眞琴

同

三ノ一三

中川紀元

同

同

中村不折

同

三ノ一六

矢野橋村

同

同

吉田堯文

汎工藝

一三ノ一

荒井梅吉

美術

一〇ノ一〇

小林古徑

美術評論

四ノ四

形と心

骨法用筆が大切

釋拙を尊ぶ

雄辯と訥辯

直筆と側筆

作畫術の研究

絹と紙

技法の話

鏑木清方

西村五雲

富田溪仙

菊地契月

結城素明

鹽田力藏

速水御舟

鏑木清方

理研と工業研アルマイト

事務用家具の規格

石と其の金屬象嵌に就て

煙草幹根利用喫煙パイプの製作

硝子に付て

代表的な型彫機械

帝國工藝

商工省産業
合理局

海老澤三一

大森 精

益田森治

同

同

同

作家論

工 藝

鐵道工場に於ける漆風呂の設備に就いて

漆の塗膜に對する實驗(一)

染色と灰

青木紺屋の糸染見聞

縹緗塗の施行法と其の效果

銅・眞鍮に施す青銅着色法に就て

アニリン染料に依る木材の着色

挾板付蝶番に就て

事務用卓子及椅子單純化規格の決定に就て

眞鍮の硫化着色の一工夫

材料抄・セルロイド

漆器の製作上に關する注意

安南漆及漆器に就て

解體卓子の試作研究

噴漆塗装方法に就て

木工用膠の接着力比較試験に就て

上田治作

鈴木 毅

椅子の模範原型の研究 木製
仕事研子

清水正雄

同

上村六郎

柳 悦孝

古谷豊吉

政田辰三郎

同

古谷豊吉

松崎福三郎

同

政田辰三郎

同

澤口悟一

同

同

同

同

同

同

工藝ニュース

四ノ一〇

漆と工藝

同

工 藝

同

工藝ニュース

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

四〇五

四一二

五二

五六一五七

四ノ一

同

四ノ二

四ノ三

四ノ四

同

四ノ五

四ノ七

四ノ八

同

同

同

同

同

同

同

安田親彦

安井曾太郎

花鳥畫集を通じて見た榊原紫峰氏

六潮會人の横顔

鏑木清方

齋藤與里

福田平八郎

山口蓬春

正宗得三郎

現代畫家總評

横山大觀論

亥年生れの日本畫家

常岡文龜論

三谷十糸子論

長谷川春子論

太田聽雨論

宮本三郎論

中西利雄論

現代歴史畫家總觀

新しき小室翠雲の誕生

青木大乗氏の人と藝術

横川毅一郎

荒城季夫

黒田重太郎

外二氏

田澤田軒

横川毅一郎

荒城季夫

横川毅一郎

同

荒城季夫

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

アトリエ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一二ノ一

一二ノ二

一二ノ三

同

同

一二ノ五

一二ノ六

一二ノ九

一二ノ一〇

一七ノ一一

一〇ノ七

一ノ九

同

同

同

同

同

同

同

同

同

横山大觀と院展	中山貞夫	同	二ノ六	金島桂華君	豊田 豊	美術街	同
安宅安五郎君	田邊 至	同	二ノ八	中村岳陵君	大山 廣光	同	同
辻君と中村君	森田龜之助	同	同	西澤笛歌君	雄山 亘	同	同
牧野虎雄	山口蓬春	同	同	山口華楊君	豊田 亘	同	同
猪熊君について	長谷川三郎	同	同	畫聖横山大觀	雄山 亘	同	二ノ二
小磯良平の周圍	竹中 郁	同	同	奥村土牛小論	同	同	同
金山平三君	松岡映丘	同	同	望月春江小論	古山 順一	同	同
ナリヤム・モリスと柳宗悅	壽岳文章	工 藝	五〇	上村松篁小論	大山 廣光	同	同
船木と森永のこと	柳 宗悅	同	五二	常岡文龜小論	豊田 豊	同	同
船木君の人と作品	バーナード リーチ	同	同	亥年活躍の華形	同	同	同
二人の場合	河井寛次郎	同	同	青木大乗氏の近榮	同	同	二ノ三
船木森永兩君の製作態度	濱田庄司	同	同	堂本印象氏の近榮	豊田 豊	同	同
畸人か熊谷守一君	山下新太郎	中央美術	一九	新日本畫家青木大乗	大山 廣光	同	二ノ四
前人未發の仕事をなす人	石川 確治	同	同	荒木十畝の人と藝術	古山 順一	同	同
熊谷守一身邊雜記	東郷青兒	同	同	名竹工飯塚琅玕齋	藤森順三	美術評論	四ノ一
熊谷さんの話	田口掬汀	同	二〇	新會員土田麥僊	同	同	同
釣さん漫評	池部 鈞	同	二五	新帝室技藝員を語る	土田 麥僊	同	同
釣さん漫評を讀んで	金原省吾	同	二七	菊池契月論	村雲大樸子	同	同
現在の畫家(川端龍子論)	野間仁根、 柳澤健、深 尾須磨子	同	一一ノ三	橋本關雪論	連水御舟	美之國	一一ノ一
藤田嗣治を觀る	田中宇一郎	塔 影	同	昭和九年特選作家の素描	大藏雄夫	同	同
半錢氏の藝術と嵩谷	廣瀬憲六	同	一一ノ七	彫刻「五特選」素描	長野草風	同	同
清方と莊八	神崎憲一	同	一一ノ一	山村耕花氏の藝術	土田 麥僊	同	同
九州人荒木十畝	同	同	一一ノ二	西山さんと私	石川宰三郎	同	同
播州人松岡映丘	同	同	一一ノ四	現代日本畫家グリンプス	小林源太郎	同	一一ノ二
天才的塑造家沼田一雅論	柴崎風岬	汎 工 藝	一三ノ二	現代日本畫壇の新進作家	辻本和一	同	一一ノ三
工藝人物論「新井謹也君」	同	同	一三ノ八	京都十七作家春虹會の人々	木下義謙	同	同
人物論——松田權六論	同	同	四ノ六	大森啓助論	金井紫雲	同	一一ノ四
南畫院同人を評す	石川宰三郎	南畫鑑賞	二ノ一	紫峰花鳥畫集を見る	竹内勝太郎	同	同
安田靉彦	古山 順一	美術街	同	紫峰畫集の生れるまで	竹内 逸	同	同
堂本印象論	大山 廣光	同	同	紫峰畫と畫集	同	同	同

盟友紫峰君	土田麥僊	美之國	一一ノ四	關野貞博士追悼の辭	佐藤 佐	夢 殿	一四ノ別卷
小室翠雲氏の功績	古川 修	同	一一ノ五	關野貞博士著書並論文抄	同	同	同
日本畫壇新進作家論	豊田 豊	同	一一ノ六	關野先生と滿洲との關係	島田貞彦	同	同
現代挿畫家小誌	山本直一	同	一一ノ一一	謹嚴なりし關野博士	高島米峰	同	同
國畫院の人々	豊田 豊	同	同	關野博士と人格	塚本 靖	同	同
荒木十畝評傳	山本直一	同	一一ノ一二	關野先生を悼む	橋本凝胤	同	同
九草會の人々	同	同	同	關野先生と滿洲、特に高句麗	濱田青陵	同	同
海老原喜之助君を語る	清水登之	みづゑ	三六二	壁畫古墳	村田次郎	同	同
海老原喜之助君	高島達四郎	同	同	關野先生と滿洲古建築學	森口奈良吉	同	同
井上長三郎のこと	田中佐一郎	同	同	關野博士を偲びて	諸鹿央雄	同	同
				故關野博士と朝鮮慶州			

物故作家及美術關係者

大江新太郎追悼	森口三郎	建築世界	二九ノ一一	故高取稚成氏追悼	八木岡春山	美之國	一一ノ三
大江新太郎先生を追憶して	同	同	同	住吉家最後の作家高取稚成	岩田豊磨	美之國	同
木村五郎追悼	大内 青圃	アトリエ	一二ノ九	竹内勝太郎追悼	原田信造	美之國	同
遺されたる義兄達の私語	大内 青圃	同	同	竹内勝太郎君を惜む	須田國太郎	アトリエ	一二ノ九
木村五郎追悼	石井鶴三	同	同	竹内勝太郎の死	榊原紫峰	中央美術	二六
木村五郎君追憶	中島謙吉	同	同	同	同	塔 影	一一ノ八
深川時代の木村君	喜多武四郎	同	同	竹内勝太郎氏を思ふ	桂田榮明	美之國	一一ノ八
木村五郎君追慕	宮本重良	みづゑ	三六七	田中謹左右追悼	清水鍊徳	同	一一ノ一一
關野貞博士追悼	諸 家	建築雜誌	六〇五	故田中謹左右のこと	土屋楠熊追悼	同	同
關野博士を弔ふ	木村貞吉	中央美術	二六	土屋楠熊氏の思ひ出	土屋楠熊追悼	同	同
關野博士略歴	足立 康	夢 殿	一四ノ別卷	坪内逍遙追悼	橋崎宗重	浮世繪藝術	四ノ七
法隆寺に關する關野先生の業績	喜田貞吉	同	同	坪内先生と浮世繪	七戸吉三	同	四ノ四
關野博士と私	木村貞吉	同	同	浮世繪研究史上に於ける坪内先生の位置	小島烏水	同	同
關野先生御業蹟の思ひ出	岸 熊吉	同	同	坪内先生と浮世繪	河竹繁俊	同	同
關野先生と大和の古社寺	小川敬吉	同	同	坪内先生を憶ふ	河竹桐谷	南畫鑑賞	四ノ四
朝鮮に於ける關野博士の偉業	佐藤小吉	同	同	坪内逍遙先生と私	古川北華	同	同
關野先生の追懷	同	同	同	坪内博士の肖像をゑがいて	島田墨仙	同	同
				坪内博士と島田墨仙氏	美術街	二ノ三	

杉原豊一追悼

「惜むべし」杉原豊一君

故杉原豊一君を悼む

故杉原豊一君に手向く

速水御舟追悼

追悼速水御舟氏

畏友速水御舟君

速水御舟氏

速水御舟君の足跡

畏友速水御舟君

速水の横顔

悲しき追憶記

京都時代の速水君

日黒時代の思ひ出

少年の日の速水君

作品を通じた速水君

速水氏の近作二三

江戸つゝ御舟

不取敢の記

速水御舟畫伯略年譜

追憶の先生

速水先生を悼む

御舟を憶ふ

速水御舟語録

速水御舟逝く

速水御舟年譜

噫速水御舟

速水御舟のえらさ

速水御舟の一斷面

御舟雜記

柴崎風岬

大島隆一

廣川松五郎

前田青邨外

六氏

安田靉彦

金原省吾

安田靉彦

小林古徑

吉田幸三郎

速水彌子

内貴清兵衛

長谷川昇

田中咄哉州

菊池契月

西村五雲

高澤初風

神崎憲一

角田清吉

坊坂俊文明

堅山南風

速水御舟

吉田幸三郎

藤森順三

横山大觀外

九氏

諸家

佐藤一英

藤森順三

汎工藝

同

同

同

アトリエ

現代美術

中央美術

塔影

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

美術街

同

同

美術評論

同

同

同

同

同

同

同

一三〇二

同

一三〇四

一二〇五

二〇一

二七

一一〇五

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

二〇五

同

同

同

四〇三

同

同

同

同

同

同

故速水御舟氏追悼

速水御舟の院展出品回顧

修學院村の春

速水御舟の作品

速水御舟追悼文

速水御舟畫伯作品年表、年譜

家系

御舟氏作「赤城路の巻」に就いて

故速水御舟氏の藝術

藤川勇造追悼

郷黨の友として

リユー・ド・テアトルの頃

藤川君の作品

藤川を想ふ

眞面目な制作態度

藤川君との交遊

藤川先生遺作展雜記

藤川勇造氏を悼む

藤川君藝術の特色

友人藤川

藤川君絶作の事

弔歌

悼む

作品年表

故藤川勇造先生の藝術（遺作展に際して）

堀江尙志追悼

樹下石土（故堀江尙志氏のこ

と）

陽成二追悼

横山大觀

安田靉彦

田澤田軒

吉田絃二郎

川路柳虹

諸家

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一〇〇五

一一〇五

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

故陽成二君を想ふ

中野五一

美之國

同

洋畫壇に働く「日本」的傾向の検討

藤田嗣治外
四氏

アトリエ

一二ノ三

批評論

繪畫批評の感

田邊三重松

アトリエ

一二ノ九

美術批評に對する不滿と希望

諸家

同

一二ノ九

美術批評の問題

富永惣一

同

同

一美術批評家の告白

森口多里

同

同

美術批評なるもの

川路柳虹

同

同

澤山の問題の中からたゞ一つを

谷川徹三

同

一二ノ一〇

敬遠された美術批評

山際靖

同

同

美術批評に就て

佐波市

同

同

批評家の立場、作家の立場

鍋木清方

同

同

批評考察

高村真夫

同

同

美術批評に對する不滿と希望

諸家

同

同

美術批評に於ける疑問

今泉篤男

同

一二ノ一一

批評の問題

木村莊八

同

同

批評の立場に就て

川路柳虹

同

同

批評の批評の問題

徳永郁介

同

同

美術批評の辨

荒城季夫

同

一二ノ一二

より廣き批評

常松菅晴

同

同

繪と批評

相馬麓邨

同

同

日本に於ける美術批評の起源

横川毅一郎

同

一九

批評する心

神崎憲一

同

一一ノ二

畫家斷想

水澤澄夫

同

四ノ一一

美術批判の大切な事

清水六兵衛

同

一三ノ一

批評家としての答

荒城季夫

同

一〇ノ九

時評

青年作家綜合團體の提唱

尾川多計

アトリエ

一二ノ一

昭和九年回顧

村雲大樓子

美術評論

四ノ一

實工美術會創立に就て

高村豊周

同

二ノ一〇

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

實工美術會の出現

同

同

同

畫壇漫語

私に對する評論の評論

新興日本畫集團への分析
六潮會—九草會—青々會—山樹

京都畫壇の底流

現日本畫壇の全貌

新興日本畫集團の勃興

國畫院の創立・同院について

昭和十年彫刻界を顧る

本年の洋畫壇と今後の方向

昭和十年の美術界を顧る

昭和十年工藝界を振りかへる

今年的美術界を回顧して

新興美術家協會を語る

同 美術評論

松岡映丘

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

安井曾太郎氏との一問一答

AQUARELIE 雜筆

馬の首・羊の腸

慘な幸福

神戸山の手の話

南總大原の宿

隨想隨感

勞工餘談

蓼科山行

問答師など

滿洲土民と動物

氣に當てられて

畫を賣る

窓邊近事

展覽會・藝術・時代

偶感

雪中製作美談

畫と畫題

滿洲の感覺

飛彈山行

畫房餘談

裝幀雜感

錦木清方畫伯の隨想

蒐集家の言葉

遊於藝

徳島に於ける私と浮世繪

不知火

浮世繪を觀賞しつゝ、米國巡歴五

月間

産業の村を訪ね古佛を探る

吉岡堅二

中西利雄

雨田光平

池部 鈞

小磯良平

鈴木信太郎

宇野浩二

倉田白羊

岸浪百艸居

新海竹藏

鈴木保徳

高島達四郎

中田三也

河合卯之助

長谷川三郎

小島善太郎

古家 新

栗原 信

加納三樂

田邊 至

中川 一政

西村總太郎

伊東深水

鳥居龍藏

小早川 清

鳥居みどり

田中主水

アトリエ

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

身 邊 雜 記

萬年ペンとチビ筆の話

三國志

雪月花

隨感抄

私とタバコ

旅

散髪

雪景

熱河の風物

中野雜記

アトリエの手帖

繪具の感情

畫家の凶作

瓜哇行日誌	翠翁陳人	繪畫教習	一二ノ七一	奥多摩にて	太田聽雨	現代美術	二ノ六
湯の町の工藝を見つゝ	田中主水	同	一二ノ九	秋を迎へて	小林三季	同	同
雪と雪の名畫	兒玉希望	同	三ノ二	鶴(やまどり)	井上恒也	同	同
奥秩父寫生行脚	望月春江	同	三ノ七	秋の女性	太田聽雨	同	二ノ九
畫才と畫格	野田九浦	同	同	臺灣雜感	荒木十畝	同	同
藝術 時間 經濟	野田龜喜	藝術日本	三ノ一三	思ふこと	船木道忠	工 藝	五二
箱根の雨	鍋木清方	現代美術	一ノ九	歩んで來た道	森永重治	同	同
病床雜話	結城素明	同	二ノ一	生命あるアトリエ	藤田嗣治	セルバン	四九
武藏野の春	郷倉千靱	同	二ノ四	滿洲國繪の旅	同	中央公論	五〇ノ八
個展明治風俗のこと	鍋木清方	同	二ノ五	陶器雜感	富本憲吉	同	五〇ノ一二
廣島の夏	神田周三	同	同	朝鮮	黒田重太郎	中央美術	一九
芝居見物	中川一政	同	同	旅するころ	向井潤吉	同	同
芝居は無學の學問なりといふこ	鍋木清方	同	同	航海——面河溪	鈴木亞夫	同	同
市川左團次と尾上菊五郎	松岡映丘	同	同	外遊二十年	藤田嗣治	同	同
文樂のことども	中村研一	同	同	北支旅のおもひで	小山敬三	同	二〇
芝居の人生	恩地孝四郎	同	同	金比羅船を畫いて思ふこと	藤田嗣治	同	同
役者と美術	阪東篁助	同	同	西洋人	中村研一	同	同
畫家と俳優	大山廣光	同	同	臺灣雜感	ヴォークラン	同	同
カザリン・ヘツプバイン	長谷川三郎	同	二ノ五	茶煙榻語	加賀幸三	同	二一
芝居・俳優・藝者・畫家	豊田 豊	同	同	さかなのこと	上野山清貢	同	同
ふるさとの夏	望月春江	同	同	釣と繪との關係	高村眞夫	同	同
佛法僧の話	井上恒也	同	同	望樓の上から	川島理一郎	同	二二
故郷の夏	永田春水	同	同	觀光觀畫一句の事	山口洵江	同	二三
舞臺裝置餘談	小村雪岱	同	同	世界繪行脚漫談	古城江觀	同	同
花環	猪熊弦一郎	同	同	松江二題・尖道湖	野田九浦	同	同
新派悲劇	服部有恒	同	同	明治の美女	勝田 哲	同	二五
山莊清談	小室翠雲	同	二ノ六	滿洲の女と阿片	田口省吾	同	同
露營の夢回顧	益井紫雲	同	同	太加	福田翠光	同	同
チビの死	辻 永	同	同	鷄飼	早川國彦	同	同
大峯行場巡り	岩田正巳	同	同	京都だより	伊藤 廉	同	二六
				香を聞く	河村龍興	同	同

夏の熊野路寫生行	中央美術	同	坊さんの繪に就て	正木直彦	同
エルムの街から	同	同	さんいんの海岸	池田遙村	同
夏と浮世繪	同	同	身邊雜感	齋藤素巖	一一ノ一〇
行旅漫感	同	同	新秋感傷	松本姿水	同
湖水と魚	同	二七	五味子と墨の話	沖野岩三郎	同
裏日本	同	同	好きといふのみ	土師清二	一一ノ一一
云つて見たくなつた事	同	同	私の日課	北村西望	同
出雲の松江	同	二九	歸郷小感	勝田蕉琴	同
自分に言ひ聞かす	同	同	安々園樂々莊閑話	邸田丹陵	同
行儀よく畏る	同	同	偶感二則	石井柏亭	同
吉興講の一日	同	同	神代の古寺	田中宇一郎	同
秋田雜記	同	同	海邊小景	永田春水	同
風の如くに	影	一一ノ一	雪の親不知	人見小華	南畫鑑賞 三ノ二
趁春記(繪と文)	同	同	成田詣で	小室翠雲	四ノ三
京のその頃	同	同	私の南畫の場合	入江たか子	四ノ四
刀劍	同	一一ノ二	副島先生の書	有鳥生馬	四ノ五
雪	同	同	新緑から梅雨へ	黒田鵬心	四ノ六・七七
永福寺雜記	同	一一ノ三	新しさ・深さ・嚴しさ	谷川徹三	同
神武大帝尊像拜寫記	同	同	大島の畫趣	黒田鵬心	四ノ九
神宮壁畫を終りて	同	同	藝苑私語	河野桐谷	四ノ一〇
茶道放談	同	同	高山行	人見少華	一一
放心の表情	同	一一ノ四	蟲干し	小野賢一郎	四ノ一〇
美に就ての雜感	同	同	わかりきつたこと	横越自入	四ノ一一
赤津にて	同	同	思ひ出のまゝに	同	一三ノ七
日本美術雜感	同	同	今朝の思ひこと	諸家	同
畫壇閑話	同	同	或日の日記	柴崎風岬	同
臺灣から	同	一一ノ五	霸氣駄目漫筆	牧ヶ野教信	一一ノ九
その頃の生活	同	同	英領キルバードの風物を探る	佐分眞	一〇ノ一
昔人の櫻の歌句	同	同	畫房雜筆	石黑敬七	同
自らを歌ふ(短歌)	同	同	巴里近郊一泊記	同	同
備後の帝釋峽へ	同	同			
良寛和尚を尋ねて	同	一一ノ九			

猪漫談	金井紫雲	美術	一ノ一	吉例	鍋木清方	美術評論	四ノ一
昭和十年を迎ふ	齋藤與里	同	同	夜會	荒木十畝	同	同
アカデミーの一週間	渡邊浩三	同	一〇ノ二	十國峠を越える	川合玉堂	同	同
瀧不動	廣瀬憲六	同	同	畫壇三題嘯	村雲大樸子	同	四ノ二
岸駒の虎	同	同	一〇ノ四	陋居亦不惡	兒玉希望	同	同
尾道と順波	曾宮一念	同	一〇ノ六	夜叉王のやうに	福田平八郎	同	同
北海道岩内	佐藤章	同	一〇ノ七	日本畫家の生活	福田平八郎	同	同
モデル・畫室	堀田清治	同	同	奧多摩三日	鍋木清方	同	四ノ三
バラオを語る	染木照	同	一〇ノ七	夜會結び再興	安田靉彦	同	四ノ三
雨後	野口謙藏	同	一〇ノ八	雜感	夜雨亭主人	同	四ノ四
胡瓜	渡邊浩三	同	同	武子夫人の片影	村上華岳	同	四ノ七
墨談	中村不折	同	一〇ノ九	追懷(歌)	堅山南風	同	同
季節食慾	須田烈太	同	同	風流漫談	岸浪百艸居	同	四ノ九
語學	宮田重雄	同	同	最近の心境	川合玉堂	同	同
爐邊閑話	塔下草坊	同	一〇ノ一	會場のはなし	小林古徑	同	同
奧秩父	野口謙藏	同	一〇ノ二	聖坂雜話	鍋木清方	美術之國	一一ノ一
奧秩父の山	堀田清治	同	同	自然と人生	菅 楯彦	同	同
純粹	金原省吾	美術街	二ノ一	春蜘蛛	野口謙藏	同	一一ノ二
驚く	中村研一	同	二ノ三	隨筆ざらひ	竹内芳衛	同	同
文畫同族	村雲大樸子	同	二ノ四	延壽太夫の肖像	鍋井克之	同	同
歌澤七夕	伊東深水	同	二ノ七	新春雜稿	長谷川春子	同	同
長興山莊閑話	小室翠雲	同	同	清貧樂の歌	佐 分 眞	同	同
懷郷	太田聽雨	同	二ノ八	菖蒲の湯	山口玄珠	同	同
海の教訓	川合玉堂	同	同	今の私の氣持	金子九平次	同	一一ノ三
釣魚のたのしみ	永田春水	同	二ノ九	會場日參	速水御舟	同	同
話題二つ	鍋木清方	同	二ノ一	坪内逍遙先生と拙畫	川端龍子	同	一一ノ四
かぐや姫のミニアチユア	森 守 明	同	同	藝術と生活に就て―卓上雜筆―	古川 修	同	一一ノ五
籠坂峠	青木大乗	同	同	畫家の名文くらべ(並に小解)	金原省吾	同	同
秋三題	川合玉堂	同	同	枇杷の話	宇野浩二	同	同
ふだんと變らない	小林古徑	美術評論	四ノ一	晩春の旅から	望月春江	同	一一ノ六
					勝田蕉琴	同	同

臺灣の旅	勝田 哲	美之國	一一ノ六	濱名湖一周	石井柏亭	みづゑ	三六七
風	福田豊四郎	同	同	暑中漫筆	佐分 眞	同	同
スケッチ	池田遙邨	同	同	隨筆集	新美術家協 會員	同	三六八
山海關の秋	小山敬三	同	同	滿洲	福澤 一郎	同	同
滿洲國の旅から	小早川秋聲	同	同	京都だより	伊藤 廉	同	三六九
川端龍子氏に物を訊く	小林古徑	同	一一ノ七	見た話聞いた話	瀧川太郎	同	同
馬込の畫室にて	梶原緋佐子	同	一一ノ八	雜			
夏日隨筆	長谷川春子	同	一一ノ八				
會津巡禮	田邊孝次	同	同				
新秋隨想輯	諸 家	同	一一ノ九				
隨想隨筆	宇野浩二	同	一一ノ一〇				
慶州の旅	大河内夜江	同	同				
北邊遊歷雜詠	小杉放庵	同	同				
矢野橋村氏と一問一答	一 記 者	同	一一ノ一				
隨想隨筆(美術壇のぞ記)	宇野浩二	同	同				
思ひよること	鏑木清方	同	同				
日誌抄	中川紀元	同	一一ノ一二	浮世繪版畫美論	野口米次郎	浮世繪藝術	四ノ四
五條會の松茸狩	清水正太郎	同	同	繪畫の社會性と印刷美術の問題	大筆敏夫	同	四ノ八
南滿雜觀(繪と文)	石井柏亭	文藝春秋	一三ノ七	滿洲北支の旅	前田利建	漆と工藝	四一三―四
むだばなし	曾宮 一念	みづゑ	三六〇	瓜哇旅行見學の一端	片岡長信	大阪之工藝	一五
復路シベリア	宮田重雄	同	三六一	風景スケッチのバイロツト	遠藤敦三	繪畫教習	三ノ三―八
サボテンの話	中村研一	同	同	書畫鑑定漫筆	狩野探道	藝術日本	三ノ一―九
春の雜草の美	織田一磨	同	三六二	風趣に富む四季の畫材	近藤浩一路	同	三ノ七
信州遊記	中村善策	同	同	藝術製作慾内觀	高田敏雄	同	三ノ一〇
水の繪	早川國彦	同	同	直觀力を養成せよ	古筆了信	同	同
濟州島素描	鶴田吾郎	同	三六四	水の色と形	川島理一郎	藝術日本	三ノ一六
田舎住ひ	小林和作	同	三六六	座談會でない座談會	直木友次良	現代美術	二ノ六
新緑と白衣の朝鮮を旅して	大野隆徳	同	三六六―三	展覽會一考	鶴田吾郎	同	二ノ九
歐洲とどこどころ	高岡徳太郎	同	三六七	繪卷物の表現と映畫	松岡映丘	同	同
アトリエ便り	三岸節子	同	同	今年度のフランス映畫	矢橋六郎	同	同

トオキイになつてから 茶道を想ふ	鍋木清方	現代美術	二ノ九	石濤と後期印象派 石濤雜感	劉海粟	南畫鑑賞	四ノ九—一
十四年後の日本の印象	柳宗悦	工藝	四九—五四	清朝畫家としての石濤	武者小路實篤	同	四ノ一〇
現代人形の動向に就いて	バーナード リーチ	同	五三	石濤春江の題詩を讀む	長與善郎	同	同
上半期の古美術界概報	西澤笛畝	中央美術	二〇	石濤へのあこがれ	關如來	同	同
下半期の古美術界概況	田澤田軒	同	二六—二七	石濤に就て、疑點二題	長谷川三郎	同	同
神宮繪畫館拜觀謹記	同	同	二九	石濤に就て	河井荃蘆	同	同
庭園寫眞解説	豊田 豊	塔影	一一ノ一	石濤と中國現代畫	中川一政	同	同
林泉雜記	龍居松之助	同	一一ノ三	日本畫に現はれる支那の鳥	黃君璧	同	四ノ一一
大阪大茶會記	小山大月	同	同	石濤「畫語錄」について	内田清之助	同	同
不動明王	外狩素心庵	同	一一ノ五	古畫の偽造と鑑識に就て	金原省吾	同	四ノ一二
畫壇三秀	廣瀬憲六	同	一一ノ六	石濤と石谷	傳抱石	同	同
好き勝手な個展	吉井 勇	同	同	南支遊記	矢野橋村	同	同
個展論	土田麥僊	同	一一ノ八	モザリヤニと歌麿	三森連象	美術	六一ノ一—
個展は難しい	鍋木清方	同	同	野蠻(サヴェージ)	富永次郎	美術	一〇ノ一
個展自辯	村上華岳	同	同	美術風土記 群馬縣の卷	笠原英夫	同	一〇ノ三
個展の收穫	川端龍子	同	同	萬鐵五郎(小説)	金井文彦	同	同
個展雜感	福田平八郎	同	同	漫畫の形式問題	藤田豊吉	同	一〇ノ四
個展を顧みて	岡田三郎助	同	同	森田恒友(小説)	小内山龍	同	一〇ノ六
個展漫筆	伊東深水	同	同	畫商タンギー爺さん(小説)	今井達孝	同	同
一人展私觀	藤井浩祐	同	同	人殺し・女の希望	竹原英夫	同	一〇ノ七
僧畫の眞骨頂	津田青楓	同	一一ノ九	臺灣來遊心得帳	オスカ・ コシユカ	同	一〇ノ八
猿投神社の鑑	神崎憲一	同	一一ノ一〇	浦上玉堂一家	立石鐵臣	同	同
壁畫模寫回顧	荒井寛方	同	同	鯨(小説)	竹原英夫	同	一〇ノ九
金地彩色繪に就て	山下新太郎	同	同	トッキーと畫伯	前川千帆	同	一〇ノ一〇
映畫技法の發展と繪畫	仲本貞一	南畫鑑賞	四ノ一—二	オスカ・ワイルドと日本美術	太田黒克彦	同	一〇ノ一一
東西山水心理の比較	大槻憲二	同	四ノ三	浮世繪と歐洲	水谷竹紫	美術街	二ノ二
繪畫美とトッキー映畫	立花高四郎	同	四ノ五	我備忘	本間久雄	同	二ノ八
現代支那美術家王濟遠氏を迎へ	同	同	四ノ六	聖德記念繪畫館とその壁畫の近	同	同	二ノ一〇
夏の風景と畫題	諸家	同	四ノ八	狀	木村莊八	美之國	一一ノ一
耶馬溪風景の解剖	田村 剛	同	同		森野三郎	同	同

本郷研究所講演を聴く

故片多徳郎君の生涯と藝術

雜感

コンボジションとマチエール
について東京府美術館十週年記念展への
希望

人形盛衰記

柄風畫伯の言葉から

京都美術界のジャーナリスト

木村武山氏建立大日堂を拜む

美術界の新分野(新帝國美術院
會員及有資格者總覽)

諸家のアトリエ風景

挿繪雜感

前田寛治先生の回顧展を開く迄

明治大正美術

遺作展を見て平福百穂氏を憶ふ

繪の裏

前田寛治遺作展

初期日本洋畫展覽會

「扇松さん」浮世繪研究の先蹤者

土岐薫氏蒐集明治初期洋畫展

彦翁思出話

櫻谷畫譜

名畫鑑賞 觀山の名作

山元春舉

美術界鳥瞰圖

美之國 一一ノ二

大隅爲三

中村研一

伊原宇三郎

諸家 一一ノ三

西澤笛畝 同

德美大堂 一一ノ四

丹下登 一一ノ九

鈴木武久 同

同 一一ノ九

桂田榮明 一一ノ一〇

宮本三郎 同

今口憲一 同

同 三六三

川崎小虎 一二ノ一

西田武雄 一一ノ一

同 一二ノ一

高島達四郎 一二ノ五

市田俊夫 同

三村竹清 同

同 四ノ三

三宅彦次郎 同

無憂生 同

吉田秋光 同

村松梢風 同

金井紫雲 同

美術界鬭爭錄

「皇居御造營の頃」の座談會

ジョサイフ・アコンドル博士の生涯
と其の功績

工部省に關係せる外國建築家

美術と共に四十年

百穂遺作展を見る

明治初期の洋畫展

金工覺書抄

山元春舉先生追憶

父、辻華香の回想

景年翁に就て思ふ事

鐵齋先生對話記の一部

米僊先生の半面

父の想ひ出

淺井忠のこと

田村宗五翁の回想

寬齋の作品鑑賞

榎嶺先生追憶小記

明治時代の京都畫壇の人々

後藤貞行の傳

前田寛治回顧展

畫人のおもかげ

吉川靈華回想

或る追憶

願海阿闍梨像に就て

靈華居士と奈良

靈華談數則

思ひ出すまゝ

記念とする京都作

氣の長い靈華君

並木山人 現代美術

中村達太郎 建築雜誌

田中義次 建築世界

同 同

正木直彦 中央公論

川路柳虹 中央美術

石川欽一郎 同

伊藤櫟堂 同

川村曼舟 同

辻 宇佐雄 同

木島櫻谷 同

布施鹿灣 同

永井久晴 同

菊池契月 同

黒田重太郎 同

伊藤快彦 同

外狩素心庵 同

清水六兵衛 同

久保田滿明 同

田口掬汀 同

竹 朗庵 同

三成重敬 同

逸木盛照 同

吉田包春 同

關 保之助 同

淺野長武 同

岡崎和助 同

松林桂月 同

二ノ六

六〇一

二九ノ九

二九ノ一二

五〇ノ七

一八

二〇

二〇一二三

二一

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一畫の前に端座半日	里見忠三郎	鐵齋翁に就ての漫筆	望月信成	塔影	一一ノ六
靈華先生を思ひ出るまゝ	粗山 賢華	四十年前の作家回顧	關 如來	同	一一ノ六
年少時代から	宮本保次	繪畫協會の最盛期	同	同	一一ノ七
靈華禮讃四題	鈴木新吉	寛快・寛政・十畝	添田達嶺	同	一一ノ八
晩年の靈華先生	里見宸藏	橋本雅邦と川端玉章	關 如來	同	一一ノ一〇
吉川君の半面	結城素明	白龍雜攷	本間久雄	南畫鑑賞	四ノ四
靈華の書の事など	吉川松宇	明治時代に於ける文學・洋畫と日本畫	同	同	四ノ一一
吉川靈華藏書目錄	金原省吾	明治初期の奇建築國寶尾山神社樓門	小林福太郎	日本建築士	一六ノ六
謹嚴なる作品	平田弘一	故人名工逸話	柴崎風岬	汎工藝	一三ノ一
讀書人靈華先生	鍋本清方	天覽を賜つた新著	杉山司七	美 育	一一ノ一
吉川君を憶ふ	西村南岳	「小山正太郎先生」	結城素明	同	一一ノ九
穗庵の軍雞を觀て	田口掬汀	勤王畫家菊池容齋の畫論	坂井厚水	美 術	一〇ノ一
平福父子の畫業	伊藤操堂	百穗氏の遺作	辻 永	同	一〇ノ二
廣業慕表の筆者を談る	田口掬汀	片多徳郎の遺作	田澤田軒	同	一〇ノ二
再び平福父子の展觀に就て	西村南岳	久米桂一郎先生の事ども	南 薰 造	同	一〇ノ三
穗庵名畫漫錄	鍋本清方	前田寛治氏個展に就いて	中野和高外	同	一〇ノ五
穗庵小惑	金原省吾	前田寛治氏個展を見て	堀田清治	同	一〇ノ五
穗庵、百穗作品展覽	富木たつ	吉川靈華氏遺作展評	渡邊浩三	同	一〇ノ一
思ひ出雜記	石井柏亭	平福父子展を觀て	古山順一	同	二ノ五
平福穗庵の遺作	結城素明	平福百穗遺作展を觀る	村雲大機子	同	二ノ一〇
平福穗庵に關して	同	平福さんの遺作展	松林桂月	同	四ノ一
穗庵百穗作品展總目錄	久保田米所	帝室技藝員の今昔	渡邊素舟	同	一一ノ一
穗庵作品所見	片多三吉	明治以降物故畫家同忌一覽表	神代種亮	同	一一ノ二
父の遺作の前に立ちて	片多草吉	長塚節の古美術觀	宇野浩二	同	同
百穗氏の藝術	添田達嶺				
百穗氏の生涯	富樫小虎				
菅原白龍翁	添田達嶺				
美術人と俳句	諸 家				
島田雪谷と野口小嶺	添田達嶺				
五號館の昔を語る	同				
堺時代の鐵齋翁	同				
	正木直彦				

日本美術界の現勢

故堀田半古を語る

竹堂先生、栖鳳先生とその時代

父芳文の追憶

桃田先生を想ふ

明治時代七寶繪に就て

前田寛治回顧展を觀る

文帝展の名作を回顧する

文、帝展彫刻受難史

明治大正の名家とその作品

美音の思ひ出

佐伯祐三遺作展について

穂庵百穂父子展

岡倉天心の業績

遺作の陳列を終へて

故久米桂一郎先生遺作展に就て

前田寛治氏回顧展の横顔

前田寛治君のこと

佐伯君の死とその前後

中村彝氏の作品

黒田清輝先生の追憶

父の日記

萬鐵五郎先生の追憶

故大下先生と早世した研究所の畏才

第一美術七回展七號室

佐伯と私

佐伯君の人と藝術

川村清雄論

田澤田軒

川合玉堂外九氏

西村五雲

菊池契月

北野恒富

杉浦冷石

鈴木武久

大藏雄次

鈴木武久

島崎柳塙

外山卯三郎

鈴木武久

野中退藏

片多三吉

片多三吉

三宅克己

三岸節子

中山巍

伊藤廉

曾宮一念

三宅克己

片多草吉

森田勝

赤城泰舒

河越虎之進

曾宮一念

野口彌太郎

外山卯三郎

美之國

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一ノ二

一ノ三

一ノ四

同

同

一ノ五

同

一ノ八

一ノ八

一ノ九

同

同

一ノ一

同

二ノ一

二ノ一

三六〇

三六二

三六三

三六五

同

同

同

同

同

同

同

同

同

前田寛治の五週忌を迎へて

森田恒友論

片多徳郎論

久米桂一郎

三岸好太郎の藝術

新自然主義と佐伯祐三の風景畫

外國現代美術

日本版畫の影響を受けたエミール・オルリツクの版畫

彫刻家ジャコメツチ

計報を聴くアルベール・ベナール

最近アメリカ美術の狀勢

ジャバの美術

海外版畫界の現狀(米國篇)

ポール・ジャクレの版畫

海外版畫界の現狀(佛國)

ノルマンデー號の船内裝飾

ドイツ人、フランス人の嗜好

佛國工藝事情に就て

我國業者に呼びかけるビルマと白國の工藝趣味

白耳義に於ける趣味嗜好に關する調査

歐洲に於ける現代趣味の小工藝品に關する調査

都市計畫の見積

Drancy 訪問

サンフランシスコの橋梁竣工記念博覽會計畫

技術的に見た照明廣告の表現

外山卯三郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

洋畫研究

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

二二

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

歐洲の學校建築	ハワード・ロバートソン	建築世界	二九ノ四—一二	アンドレ・リュルサの小學校をみる	齋藤四郎	國際建築	一一ノ四
世界最大の風力發電所	同	同	二九ノ六	「ル・コルビュジェの第二作品集」を見て	藏田周忠	同	一一ノ五
工場既製型組立建築	同	同	同	Le Corbusier 及び P. Jeanneret 設計の巴里のアパートメントハウス	Howard Robertson 本多修譯	同	同
退策とその自主經濟に關する一管見	同	同	同	H. Poelzig 教授の停年	藏田周忠	同	一一ノ一〇
ドーマ・コムヌイ	河丸莊助	同	二九ノ六一	フランクフルト圖書館懸賞設計競技	チンメルマン	同	一一ノ一一
ブラッセル萬國博覽會	同	同	二九ノ七	新時代の圖書館建築——フランクフルトの懸賞設計に就て	エルンスト・ノイフェルト	同	同
北イタリー Piedmont Serrieres に於ける二つのホテル	同	同	同	イギリスの現代美術	春山行夫	セルバン	四九
張間二八二呎の鐵筋コンクリート造三鉸節アーチ架構	同	同	二九ノ八	フランス造型美術の現状	テリアード	同	同
騒音防止博覽會	同	同	同	ソヴェトの新美術展望	黒田辰男	同	同
ソビエト建築通信	圖師嘉彦	同	同	ベナール	石井柏亭	中央美術	二〇
ハアグの市立博物館	同	同	同	アルベール・ベナールの計	ルネ・ジャン	同	同
エムバイアー水泳競技場の架構	同	同	二九ノ九	ラブラードを語る會	石井柏亭外	同	二二
ソヴェト建築通信	圖師嘉彦	同	二九ノ一一	瑞典の少壯畫家	石井柏亭	同	二三
エチオピア建築畫報	同	同	同	モーリス・アスランのこと	同	同	二六
佛國に於ける衣裳類の意匠流行に就て	田中千代	工藝ニュース	四ノ三	私の知る頃のアスラン	梅原龍三郎	同	同
工藝品に對する歐洲人の嗜好に就て	青山義雄	同	四ノ四	アスラン氏と其藝術	田邊孝次	同	同
獨逸、丁抹に於ける工藝品事情	同	同	四ノ七	モーリス・アスランの人	中村研一	同	同
一九三七年巴里萬國近代藝術工業博覽會の計劃概要	同	同	四ノ八	アスランのこと	山下新太郎	同	同
最近に於ける歐洲工藝界の趨勢と第二回パリ陳列會の情況に就いて	同	同	四ノ九	我南洋の土俗工藝について	石井柏亭	同	二九
瑞典、諾威に於ける工藝品事情	青山義雄	同	同	R. DELAUNAY の新しい壁畫に就て	染木 照	帝國工藝	九ノ三
英領馬來に於ける趣味に就いて	同	同	同	American glass	同	同	九ノ九
ウイリアム・レスケーズ	藏田周忠	國際建築	四ノ一〇	シャルル・シイクリス氏設計の新しいキヤツフエ	同	同	九ノ一〇
ル・コルビュジェの第二作品集	石村 篤	同	一一ノ二	ノルマンディーを工藝的視野より見る	同	同	同
アンドレ・リュルサ	藏田周忠	同	一一ノ四	Adrien Robert の照明具	同	同	九ノ一一

現代英國水彩畫と東洋畫
ラブラードの藝術に於ける南畫
的詩感
歐洲畫界に現はれた「東洋的な
もの」

主題主義の復興

一九三四年後期の歐米新建築紹介

一九三五年前期歐米新建築紹介

彫像の診斷書

ルオー

ルオーの寫實

ラブラードに就いて

巴里畫壇の動向

中華民國畫壇

巴里便り

世界美術の一年

大戰以後のシヤガル

現代中歐の版畫並に版畫家

ピカソと友達

現代イタリーの版畫並に版畫家

ラブラードの藝術

現代フランスの版畫家並に版畫

佛蘭西に於ける展覽會制度

フェルナン・レジェと物の詩

立體主義小史考

此頃の向ふのこと

フォーヴィズムとその繪畫

モイズ・キツスリングの藝術評

モイズ・キツスリングの藝術評

野口駿尾

荒城季夫

外山卯三郎

野口駿尾

神坂三郎

山脇周忠

山脇周忠

大森啓助

伊藤 廉

梅原龍三郎

岡見富雄

林 武

寺島邦之助

松尾邦之助

成田重郎

同

小野忠重

税所 篤二

小野忠重

荒城季夫

小野忠重

大森啓助

成田重郎

井澤秋夫

碓 伊之助

外山卯三郎

同

南畫鑑賞

同

同

同

日本建築士

同

美術

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

四ノ四

四ノ七

同

同

四ノ一二

一六ノ二

一七ノ三

一〇ノ一

一〇ノ二

同

一〇ノ五

一〇ノ六

一〇ノ七

一〇ノ一〇

一一ノ一二

三六〇

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

デュノワイエ・ド・スゴンザツ
クの藝術

外山卯三郎

洋畫研究

二五

其他外國美術

フリーツボ・ブルネレスキ

サン・タントアリスの誘惑

シスレーの手紙

オジロン・ルドンの一生

ドナテルロ

デオット派壁畫の傳統

獨逸マイセン製磁器人形を見る

長濱の曳山を飾る見送りゴブラ

近代建築の父マツキントツ

ヤコブ・マリスに就て

ハリエジヤミの壁畫とモザイク

希臘の結婚風俗

タビスツリーの話

西洋に於ける東洋美術の影響の

影響

ポール・シニヤック回顧

松坂屋に於ける歐洲染織の名品

展覧に際して

デ・サンの語義と其近代的解釋

セガントイニの手紙と書簡

シエナとシエナ派

ポール・セザンヌの禮讚

寫實とセザンヌ

セザンヌとルーヴル

同

同

田中邦三

木村外三

太田三郎

大森啓助

窪田啓二

田中邦三

木村外三

チエニエ

三雲祥之助

鹿島増藏

石井柏亭

内藤秀因

太田三郎

森口多里

黒田重太郎

折田 學

大隅爲三

同

同

同

同

同

同

同

同

同

アトリエ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一二ノ二

同

一二ノ五

一二ノ七

一二ノ八

一二ノ八

一二ノ八

一二ノ九

一二ノ一

一八

同

一九

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

モスーとロダン	エミール・ペ ルハラン	美	一〇ノ三
コローと勳章	渡邊浩三	同	一〇ノ四
モロツコの旅	ドラクロア	同	一〇ノ七
發達史的に觀た近代美術	森田龜之助	同	一〇ノ一
ドガの彫刻	大藏雄夫	美之國	一一ノ二
ゴッソフ・ゼムベルの工 藝論	長廣敏雄	實雲	一五
近代に於ける裸體造型の推移	太田三郎	みづゑ	三五九
セザンヌの水彩と手法的變化	山本正雄	同	三六〇
セザンヌ	同	同	三六一
フニル・デナンド・ホドラーの 藝術	田中泰祐	同	三六一—三
近代生活の畫家ラファエリ	荒城季夫	同	三六一
ゴッギヤンのはなし	大森啓助	同	三六三
續ゴッギヤンのはなし——毒殺 說——	大森啓助	同	三六四
近代の海洋畫家	荒城季夫	同	三六六
クウルベエを描く	中井あい	同	三七七—三 七〇

展覽會批評

主要展覽會

國畫會

國展の工藝	木村和一	アトリエ	一二ノ六
國展洋畫評	伊原宇三郎	同	同
國畫會の繪畫	酒井亮吉	同	同
國展の彫刻	早川巍一郎	同	同
國展感想	武者小路實篤	現代美術	二ノ二
國展入選畫感想	久保守	同	同
國展短評	大藏雄夫	中央美術	二三
國展の彫刻	大藏雄夫	美之國	一一ノ六

國畫展評

國展評

國展洋畫を觀る

國畫會第十回展

春陽會

春陽會一巡

春陽會入選畫評

春陽會々友作品互評

春陽會展評

春陽會寸感

第十三回春陽會一般出品評

春陽會展評

春陽會の版畫

第十三回春陽會新入選評

春陽會第十三回展

青龍社

青龍社展を觀る

青龍社第七回展

青龍社素見

青龍社概觀

青龍社第七回展

青龍社を觀る

青龍社評

第一部會

第二部會展を見る

第二部會評 AとBとの對話

第二部會の新入作品

第二部會を報ずるの書

第二部會展を觀る

林達郎

中村善策

倉田三郎

外山卯三郎

佐分眞

水谷清

春陽會々友

早川國彦

九夏會同人

林達郎

中村善策

石井鶴三

田中善之助

外山卯三郎

直木友次良

神崎憲一

中川紀元

雄山亘

古山順一

田澤田軒

山口玄珠

向井潤吉

田澤田軒

中村研一

伊原宇三郎

森口多里

中山巍

美之國

同

みづゑ

洋畫研究

アトリエ

同

同

現代美術

中央美術

美之國

同

みづゑ

同

同

洋畫研究

同

同

現代美術

塔影

美術街

美術街

同

美之國

同

同

アトリエ

同

同

同

同

同

同

一一ノ六

同

三六四

二三

一二ノ六

同

同

二ノ二

二三

一一ノ六

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

二部會出品畫に就て	伊原宇三郎	現代美術	二ノ八	獨立展評	獨立美術第五回展	栗原 信	みづゑ	三六二
二部會今後の動向	清水良雄	同	同	二科	獨立美術第五回展	外山卯三郎	洋畫研究	二三
二部會鑑査に臨んで	大久保作次郎	同	同	二科新人を抜く		碓伊之助、東郷青兒	アトリエ	一二ノ一〇
二部會出陳作品概観	太田三郎	同	同	二科評		柳 亮	同	同
二部會の目についた作品五六	鈴木千久馬	同	同	二科の批評		神原 泰	同	同
二部會出品作中の好きなものを拾つて	中村研一	同	同	二科を評す		荒城季夫	同	同
二部會出品畫感想	諸 家	同	同	二科合評		九夏會々員	同	同
二部展評に對する總評	内田 巖	同	二ノ九	二科合評		長谷川三郎	現代美術	二ノ六
二部會を觀る	川路柳虹	中央美術	二八	二科評		川路柳虹	中央美術	二七
二部會一般出品評	佐波 甫	美術	一〇ノ一二	二科會評		川口航外、福澤一郎	美術	一〇ノ一〇
二部會を中心とする座談會	中川紀元、兒島善三郎、荒城季夫、宮田重雄	同	同	二科展對話		雄山 亘	美術	二ノ九
二部會展管見	加山四郎	美之國	一一ノ一二	新秋彫刻展概観—二科展		林 達郎	美之國	一一ノ一〇
二部會展評	佐波 甫	同	同	二科展畫評		藤田嗣治	同	同
二部會を觀る	荒城季夫	同	同	個性の芽生あるもの		鈴木武久	同	同
二部會總評	同	みづゑ	三六九	二科の流行色		兒島善三郎	同	同
二部會感想	同	同	同	二科展を覗きて		伊原宇三郎	みづゑ	三六八
二部會展評	鳥海青兒	同	同	二科展洋畫評		水谷 清	同	同
二部會展評	長谷川三郎	同	同	二科繪畫評		林 武	同	同
二部會展評	福澤一郎	同	同	二科展偶感		鍋井克之	同	同
二部會展評	宮本三郎	同	同	二科會第二十回展		外山卯三郎	洋畫研究	二六
獨立美術協會	宮本三郎	アトリエ	一二ノ四	日本美術院		雨田公平	アトリエ	一二ノ一〇
獨立展評	柳 亮	同	同	院展の彫刻		金井紫雲	同	同
獨立の日本主義とエスプリモデルン	同	同	同	速水御舟氏の遺作を見る		小林古徑	同	同
獨立展の感想	今泉篤男	同	同	速水御舟君の遺作		芳川 越	繪畫教習	三ノ一〇
獨立展新人の作を見る	田中忠雄	現代美術	二ノ一	院展と御舟遺作展		川崎小虎	現代美術	二ノ六
獨立美術展を評す	福島繁太郎	圖畫と手工	一九ノ四	速水御舟の遺作展		五島盛寛	塔 影	一一ノ一〇
獨立展合評	伊藤繼郎外五氏	美術	一〇ノ四	日本美術院第二十二回展		神崎憲一	同	同
獨立展斷想	相良徳三	同	同	速水御舟遺作展		安田靉彦	美術	一〇ノ一〇
獨立展批判	荒城季夫	みづゑ	三六二	速水御舟氏の遺作展を見て				

美術文獻目錄

院展を見る	中野和高	美術	一〇ノ一〇	伊東深水個展	N 生	浮世繪藝術	四ノ七
秋の院展、試作展、遠水御舟 遺作展	豊田 豊	美術街	二ノ九	伊東深水個展を觀て	小林源太郎	中央美術	二五
新秋彫刻展概観——院展	雄山 亘	同	同	伊東深水氏個展評	齋田素州	塔影	一一ノ八
院展評 大觀と古徑	藤森順三	美術評論	四ノ八	伊東深水氏個展評	大山廣光	美術街	二ノ六
日本美術院と院展	佐藤一英	同	同	伊東深水氏個展評	鈴木武久	美術評論	四ノ六
院展の入選を觀る	篠原集一郎	美之國	一一ノ一〇	伊東深水氏個展評	鈴木武久	美之國	一一ノ七
院展試作と御舟回顧	川路柳虹	同	同	茨城美術展	五島盛寛	塔影	一一ノ七
雜				大阪女流畫家展	大森富平	同	一一ノ三
國展、春陽會批判座談會	荒城季夫、大 島隆一外四氏	アトリエ	一二ノ六	大阪美術展	同	同	一一ノ四
二科と構造社の彫刻	仲田定之助	同	一二ノ一〇	小川翠村個展	大森富平	同	一一ノ三
院展と青龍社	横川毅一郎	同	同	小川翠村氏個展	同	美術街	二ノ三
院展青龍社を評す	長谷川三郎	同	同	小川翠村氏個展	S 生	美之國	一一ノ三
東臺雜觀(二科、院展、青龍 社)	石井柏亭	中央美術	二七	落合朗風個展			
春陽會展、國畫會展座談	橋本八百二、 大川逞一外二氏	美術	一〇ノ六	落合朗風氏個展	齋田素州	アトリエ	一二ノ六
二科院展構造社の彫刻	志立深爾	同	一〇ノ一〇	落合朗風氏第四回展評	古山順一	塔影	一一ノ六
青龍社と明朗展	藤森順三	美術評論	四ノ八	落合朗風個展	藤森順三	美術街	二ノ五
上野の彫刻を觀て(二科、構 造社、院展)	大藏雄夫	美之國	一一ノ一〇	落合朗風氏個展	篠原集一郎	美術評論	四ノ四
院展・青龍社・明朗展新人を ビックアップする	豊田 豊	同	同	尾上柴舟、荻生天泉讚畫展	齋田素州	美之國	一一ノ六
春陽會と國畫會の版畫	小野忠重	同	同	荻生天泉氏讚畫展	同	塔影	一一ノ二
「美術の秋」批判座談會 (二科、青龍社展評)	造形文化協會 員	みづゑ	三六四 三六八	カ——コの部	美 術 街	美術街	二ノ一

日本畫展覽會

ア——オの部

秋田美術
一餅會展五島盛寛
齋田素州

塔影

一一ノ六
一一ノ七

革丙會

革丙會展

革丙會展評

革丙會第十四回展評

革丙會第十四回展評

梶原緋佐子個展

五島盛寛

塔影

一一ノ七

有面 若

美術街

二ノ六

美之國

美術評論

四ノ五

一一ノ七

祝原緋佐子氏個展	神崎憲一	塔影	一一ノ八	環堵畫塾展	齋田素州	塔影	一一ノ四
梶原緋佐子氏個展評	美之國	一一ノ七	環堵畫塾展	古山順一	美術評論	二ノ三	
角谷二葉堂展	美術街	二ノ一	環堵畫塾展評	田家久	美之國	一一ノ四	
角谷二葉堂新作展	美術評論	四ノ一	北村明道個展	齋田素州	塔影	一一ノ二	
金島桂華個展	大森富平	塔影	北村明道新作畫展	古山順一	美術街	二ノ一	
金島桂華氏個展	神崎憲一	同	北村明道氏個展	藤森順三	美術評論	四ノ一	
金島桂華氏個展評	辻本和一	美之國	北村明道個展評	鈴木武久	同	四ノ九	
鐺木清方個展	鐺木清方氏個展	美術街	北村明道展	鈴木武久	美之國	一一ノ一一	
鐺木清方氏個展	雄山亘	美術街	木村莊八個展	五島盛寛	アトリエ	一一ノ八	
鐺木清方第二回個展評	美術評論	四ノ六	木村莊八氏個展	山本直一	中央美術	二五	
清方氏風俗繪展	美之國	一一ノ四	木村莊八個展	横川毅一郎	美之國	一一ノ八	
川路柳虹讚詩小品畫展	齋田素州	塔影	木村莊八君の個展	美術評論	二ノ三		
川路柳虹氏讚詩小品畫展	美術街	一一ノ三	木村百木個展	美術街	二ノ三		
川路柳虹讚詩畫評展	美術評論	四ノ二	木村百木氏個展	美術評論	四ノ二		
川端龍子個展	直木友次郎	現代美術	木村武山個展	添田達嶺	美術街	一一ノ四	
川端龍子氏の個展を観る	川路柳虹	中央美術	京都名家繪畫展	美術街	二ノ六		
龍子個展	神崎憲一	塔影	九阜會展	アトリエ	一一ノ六		
川端龍子氏個展	同	美術街	九阜會第一回展	中央美術	二三		
川端龍子氏個展評	大山廣光	美術街	九阜會展	五島盛寛	美術街	一一ノ六	
川端龍子氏個展「南洋を描く」を観る	古山順一	同	九阜會第一回展	鈴木武久	美術評論	四ノ五	
川端龍子氏大阪個展	大山廣光	美之國	九阜會展	鈴木武久	美之國	一一ノ六	
川端龍子氏個展	篠原巢一郎	美術評論	九阜會第一回展	神崎憲一	塔影	一一ノ九	
川端龍子第五回個展評	多田信一	アトリエ	九名會展				
環堵畫塾展	中山貞夫	現代美術	九名會展				

九名會展	神崎憲一	塔影	一一ノ一二	小室翠雲氏の個展を観て	鈴木武久	美之國	一一ノ五
劇畫展	鳥居言人	浮世繪藝術	四ノ三	五葉會展	神崎憲一	塔影	一一ノ九
浩然社展	五島盛寛	塔影	一一ノ七	五葉會展批評	樂濤山人	美術街	二ノ八
浩然社展	美之國	美術街	二ノ六	五葉會を見る	藤森順三	美術評論	四ノ七
浩然社第三回展	小幡二堂	美之國	一一ノ七	近藤樵仙個展	五島盛寛	塔影	一一ノ六
第三回浩然社展評	小室翠雲	南畫鑑賞	四ノ三	サ—ソの部			
後素會出品作評				山華社展	富田啓子	塔影	一一ノ五
煌土社展		アトリエ	一二ノ六	瑞々會展	齊田素州	塔影	一一ノ一
煌土社第一回展		中央美術	二三	瑞々會第一回展	神崎憲一	同	一一ノ二
煌土社展	五島盛寛	塔影	一一ノ六	瑞々會第二回展	大山廣光	美術街	二ノ一
九浦塾「煌土社」第一回展		美術街	二ノ六	瑞々會第三回展	雄山 亘	同	二ノ一〇
煌土社第一回展評		美術評論	四ノ五	瑞々會第二回展	藤森順三	美術評論	四ノ九
紅日會展		現代美術	二ノ四	瑞々會安評	帛水生	美之國	一一ノ一
紅日會展覽會寸評	中山貞夫	塔影	一一ノ八	瑞々會を觀る	五島盛寛	塔影	一一ノ七
紅日會	五島盛寛	美術街	二ノ六	燦木社展	遊心居	美術街	二ノ六
紅日會第一回展		美術評論	四ノ六	燦木社展	五島盛寛	塔影	一一ノ二
紅日會第一回展評				第十回燦木社展	大山生	美術街	二ノ一〇
國風畫會展	齊田素州	塔影	一一ノ三	燦木社展	金井紫雲	アトリエ	一二ノ一二
國風畫展評	一記者	美之國	一一ノ二	孜々會展	直木友次良	現代美術	二ノ九
小早川秋聲個展	五島盛寛	塔影	一一ノ五	孜々會第一回展	神崎憲一	塔影	一一ノ一
小林三季個展	添田達嶺	塔影	一一ノ九	第一回孜々會展	齊田素州	同	同
小林三季氏個展	藤森順三	美術評論	四ノ七	七絃會展	神崎憲一	同	同
小林三季氏個展評	美之國	美術街	一一ノ四	七絃會の諸作	古山順一	美術街	二ノ一一
小林三季氏個展評	同	美術街	一一ノ九	七絃會を觀る			
天然記念物の個展について	大山廣光	美術評論	四ノ三	七絃會第五回展			
小室翠雲個展				七絃會第六回展			
小室翠雲氏個展評				七絃會第六回展			
小室翠雲個展評				七絃會第六回展			

七絃會を評す	藤森順三	美術評論	四ノ九	如水遊心畫展	齋田素州	塔影	一一ノ三
七絃會展を觀る	鈴木武久	美之國	一一ノ一二	如水遊心畫展		美術街	二ノ三
自由畫境展(第十四回)	大山廣光	美術街	二ノ一〇	如水遊心畫展評		美術評論	四ノ二
朱北樵子新作小品畫展	同	同	二ノ二	新日本畫研究會展	福田平八郎	アトリエ	一二ノ八
春虹會展				新日本畫展を見る		中央美術	二五
春虹會第一回展評	雄山 亘	アトリエ	一二ノ五	新日本畫展	五島盛寛	塔影	一一ノ八
第一回春虹會展に就いて		美術街	二ノ四	山樹社新日本畫研究會		美術評論	四ノ六
春虹會展評	はくすゐ生	美之國	一一ノ四	山樹社、新日本畫研究會第二回展評	鈴木武久	美之國	一一ノ八
春虹會第一回展評				山樹社、新日本畫研究會展	五島盛寛	塔影	一一ノ一二
尙美堂展				翠紅會第十一回展	同	同	一一ノ八
尙美堂展評				朱雀會	同	同	一一ノ六
尙美堂展評	豐田 豊	アトリエ	一二ノ二	清水會展	齋田素州	同	一一ノ六
尙美堂展評	齊田素州	現代美術	二ノ五	青々會展			
關尙美堂新作畫展	同	塔影	一一ノ二	青々會第四回展	中山貞夫	アトリエ	一二ノ六
關尙美堂展	同	同	一一ノ九	今年の青々會	神崎憲一	現代美術	二ノ二
關尙美堂展	五島盛寛	同	一一ノ一二	青々會展(龍子個展)	雄山 亘	塔影	一一ノ五
尙美堂展	同	美術街	二ノ一	青々會第四回展評	藤森順三	美術街	二ノ五
關尙美堂展一瞥	豐田 豊	同	二ノ七	青々會第四回展評	鈴木武久	美術評論	四ノ四
尙美堂展評	佐藤一英	美術評論	四ノ一	青々會を觀る		美之國	一一ノ六
尙美展覽會	藤森順三	同	四ノ九	青龍社展	多田信一	アトリエ	一二ノ四
異彩ある尙美展	一記者	美之國	一一ノ一	春の青龍社	中山貞夫	現代美術	二ノ一
尙美堂新作展評	同	同	一一ノ四	春の青龍社展	鈴木武久	美之國	一一ノ四
尙美堂展を觀る	同	同	一一ノ一二	春の青龍社展評	藤森順三	美術評論	四ノ三
如月會展				關屋雲崖個展		同	四ノ九
堂本畫塾如月會展	神崎憲一	アトリエ	一二ノ三	草兒社展	神崎憲一	塔影	一一ノ一一
如月會展	大山廣光	塔影	一一ノ三	草兒社第一回展	本田圭二	美之國	一一ノ一一
東丘社如月會展		美術街	二ノ三				
如月會展評		美術評論	四ノ二				
堂本畫塾如月會展評	下店靜市	美之國	一一ノ三				
如水會展							

太白洞展	齊田素州	塔影	一一ノ四	東京會展	齊田素州	塔影	一一ノ二
太白洞展	齊田素州	美術評論	四ノ三	東京會新作畫展	五島盛寬	同	一一ノ七
太白洞展評	S W 生	美之國	一一ノ四	東京會新作展	美術街	二ノ一	
高島屋新作畫展	齊田素州	塔影	一一ノ一	東京會新作繪畫展	雄山 生	美術街	二ノ六
高島屋新作展を觀る	大山廣光	美術街	二ノ一一	東京會新作展	同	美術評論	四ノ一
高橋墨心莊展	齊田素州	塔影	一一ノ三	東京會展評	一記者	同	四ノ五
墨心莊第一回展	美術街	二ノ三		東京會の新作展	美之國	一一ノ一	
高橋墨心莊展評	美術評論	四ノ二		東京會展評	同	一一ノ七	
田中咄哉州個展	神崎憲一	塔影	一一ノ一一	東京美術學校卒業製作展	小泉勝爾	現代美術	二ノ二
田中咄哉州氏個展	大山廣光	美術街	二ノ一〇	東臺邦畫會展	五島盛寬	塔影	一一ノ七
田中咄哉州個展	藤森順三	美術評論	四ノ九	東臺邦畫會展	美術街	二ノ六	
田中咄哉州個展	鈴木武久	美之國	一一ノ一一	東臺邦畫會第十回展評	美術評論	四ノ六	
淡交會展	アトリエ	一一ノ六		第十回東臺邦畫展評	一記者	美之國	一一ノ七
淡交會九回展	中央美術	二三		東潮會展	五島盛寬	塔影	一一ノ七
淡交會展	齊田素州	塔影	一一ノ六	踏青會展	五島盛寬	塔影	一一ノ五
淡交會所見	大山廣光	美術街	二ノ五	踏青會第一回展評	古山順一	美術街	二ノ五
淡交會禮讚	藤森順三	美術評論	四ノ四	踏青會第一回展評	藤森順三	美術評論	四ノ四
淡交會を觀る	石川帛水	美之國	一一ノ六	踏青會展評	鈴木武久	美之國	一一ノ六
淡如會評	美術評論	四ノ一		德岡神泉個展	大森富平	塔影	一一ノ四
津田青楓個展	齊田素州	塔影	一一ノ八	神泉個展	黑川 生	美術街	二ノ四
津田青楓氏個展	中央美術	二五		德岡神泉個展	美術評論	四ノ三	
津田青楓一人展	美之國	一一ノ一		德岡神泉氏個展評	美之國	一一ノ四	
津田青楓氏の個展雜感	M 生	一一ノ一		讀畫會展	多田信一	アトリエ	一二ノ四
帝展特選展	芳川 起	繪畫教習	三ノ一一	讀畫會展	中山貞夫	現代美術	二ノ一
帝展日本畫特選展を觀る	神崎憲一	塔影	一一ノ一一	讀畫會展第廿八回展	齊田素州	塔影	一一ノ四
帝展特選展				讀畫會展			

ナ—ホの部

讀畫會展評

戸田親美堂展

戸田親美堂展

戸田親美堂新作品展

戸田親美堂展評

巴會展

巴會展

第二回巴會展

巴會第二回展評

巴會展を見る

齋田素州

美術評論

四ノ三

第十四回南展開會に臨むで

小室翠雲

南畫鑑賞

四ノ五

齋田素州

美術評論

二ノ三

南畫同人・客員感想

石川幸三郎

同

同

齋田素州

美術評論

四ノ二

南展並に習畫展の新視野について

小室翠雲

同

同

同

四ノ六

齋田素州

美術評論

二ノ六

南畫同人製作感想

加野高夫

同

同

同

二ノ五

N・K 生

美術評論

四ノ五

南畫院第十四回展評

大榎子

美術評論

同

同

四ノ四

N・K 生

美術評論

一ノ七

南畫院第十四回展を觀る

はくす生

同

同

同

一ノ六

日本美術院同人展

直本友次良

現代美術

同

同

二ノ九

第三回美術院同人展

古山順一

美術評論

同

同

二ノ一

永井久晴個展

永井久晴個展

永井久晴個展評

田澤田軒

美術評論

一ノ三

松坂屋院展同人三回展

同

同

同

同

一ノ二

名古屋三展評

杉浦冷石

美術評論

四ノ二

日本美術院試作展

中山貞夫

現代美術

同

同

二ノ一

南畫鑑賞會習畫展

齋田素州

美術評論

一ノ六

美術院試作展を見る

大山廣光

美術評論

同

同

四ノ三

西村塾農鳥社展

神崎憲一

美術評論

一ノ九

日本美術協會展

五島盛寛

美術評論

同

同

一ノ一

西村塾農鳥社第二回展評

黒川 洵

美術評論

二ノ八

日本美術協會第九十九回展

加野高夫

美術評論

同

同

二ノ一〇

日本畫會展

藤森順三

美術評論

四ノ七

日本美術協會展瞥見

金井紫雲

美術評論

同

同

一ノ一

日本畫會展を觀る

直木友次良

現代美術

二ノ四

白日莊展

齋田素州

美術評論

同

同

一ノ一

日本畫會展

齋田素州

美術評論

一ノ七

白日莊新作畫展

古山生

美術評論

同

同

二ノ一

日本畫會展

古山順一

美術評論

二ノ六

東西大家新作品展

加野生

美術評論

同

同

四ノ一

日本畫會展評

鈴木武久

美術評論

一ノ七

白日莊展評

美之國

美術評論

同

同

一ノ二

日本南畫院展

川路柳虹

アトリエ

一二ノ六

橋本關雪個展

中央美術

美術評論

同

同

二九

南畫院の作者

武者小路實篤

塔影

一一ノ六

橋本關雪個展

齊田素州

美術評論

同

同

一一ノ二

南畫院展評

添田達嶺

同

同

橋本關雪氏個展

塔影

美術評論

同

同

一一ノ二

橋本關雪氏個展	雄山亘	美術街	二ノ一	細合秀穀氏個展評	雄山生	美術街	二ノ六
橋本關雪個展	佐藤一英	美術評論	四ノ九	細合秀穀個展評	S W 生	美術評論	四ノ六
橋本關雪氏個展評		美之國	一一ノ一二	細合秀穀氏個展評		美之國	一一ノ七
橋本多聞洞展				本多天城氏の個展評		アトリエ	一二ノ二
橋本多聞洞展	齊田素州	塔影	一一ノ三	Y—Oの部			
多聞洞新作畫展	同	美術街	一一ノ二				
多聞洞東西名家新作展	H 生	美術評論	四ノ二				
多聞洞展		美術評論	四ノ二				
橋本多聞洞展評	佐藤一英	同	四ノ八				
多聞洞展覽會評	一記者	美之國	一一ノ二				
多聞洞展評	神崎憲一	塔影	一一ノ九				
八絃會展							
藤井浩祐個展	藤井浩祐畫展	中央美術	二五				
藤井浩祐氏個展	齊田素州	塔影	一一ノ八				
藤井浩祐氏日本畫展		美之國	一一ノ四				
藤岡光影堂展	神崎憲一	塔影	一一ノ九				
文樂人形繪展		美之國	一一ノ四				
平安大家展評	黑川潤	美術街	二ノ一				
表裝同人會展							
表裝同人會展	五島盛寛	塔影	一一ノ七				
第十回表裝同人展		美術街	二ノ六				
報知新聞主催東北救済新作展	北野竹男	美之國	一一ノ一				
戊辰會							
戊辰會展	多田信一	アトリエ	一二ノ四				
戊辰會第七回展評		現代美術	二ノ一				
戊辰會展	齊田素州	塔影	一一ノ四				
川合玉堂氏と戊辰會	大山廣光	美術街	二ノ三				
第六回戊辰會展	同	同	同				
戊辰會の人々	W H 生	美之國	一一ノ四				
細合秀穀個展							
細合秀穀氏個展	五島盛寛	塔影	一一ノ八				

村上華岳個展	關 如 來	中央美術	二五	朗峯畫塾展	S 生	一一ノ一二
村上華岳氏個展	塔 影	一一ノ八	六條社展	五島盛寛	美之國	一一ノ七
村上華岳氏日本畫作品展	大山廣光	美術街	二ノ六	雜	塔 影	一一ノ七
村上華岳個展	美術評論	四ノ五				
村上華岳氏個展	美之國	一一ノ七				
明治天皇上野行幸六十年記念奉 讃展	一記者	塔 影	一一ノ一二	尙美展と關雪氏個展	多田計一	一二ノ一二
明朗美術展	五島盛寛	塔 影	一一ノ一二	當今個展はやり(深水、龍子、青 邨、清方個展)	豐田 豊	一二ノ四
明朗美術第二回展	五島盛寛	塔 影	一一ノ一〇	山樹社と瑠爽畫社	長谷川三郎	同
明朗美術展	加野高夫	美術街	二ノ九	關雪と晴哉州の個展	豐田 豊	同
明朗展總評	山本直一	美之國	一一ノ一〇	院展試作、春の青龍展、春虹 會、小室翠雲個展——三人評	添田達嶺、 神崎憲一、 齋田素州	塔 影
八木岡泰山個展	篠原集一郎	中央美術	二九	神泉、大虛各個展	神崎憲一	一一ノ四
八木岡泰山氏第二回個展	齋田素州	塔 影	一一ノ一二	讀畫會と春の青龍社	豐田 豊	同
八木岡泰山氏個展	加野高夫	美術街	二ノ一〇	瑠爽畫社と山樹社、新日本畫研 究會	古山順一	美術街
八木岡泰山氏個展	藤森順三	美術評論	四ノ九	七絃會と瑠々會	藤森順三	同
矢野橋村氏個展	美之國	一一ノ一二				美術評論
矢野橋村氏個展	齊田素州	塔 影	一一ノ一二	洋畫展覽會		四ノ一
矢野橋村氏個展	大山廣光	美術街	二ノ一〇	ア——コの部		
矢野橋村氏個展	藤森順三	美術評論	四ノ九			
矢野橋村氏個展	鈴木武久	美之國	一一ノ一一			
橫濱美術協會第四回展	五島盛寛	塔 影	一一ノ一二			
瑠爽畫社展	五島盛寛	塔 影	一一ノ一二			
瑠爽畫社	五島盛寛	塔 影	一一ノ八	青丹會の人々	石井柏亭	中央美術
瑠爽畫社第一回展評	美之國	一一ノ八		アニメ展評	中央美術	二九
朗峯畫塾展	たけひさ	美術評論	四ノ六	アニメ展評	美 術	一一ノ七
朗峯畫塾展	小林源太郎	中央美術	二九	アニメ第一回展を觀て	藤田鶴夫	美之國
朗峯畫塾第五回展	五島盛寛	塔 影	一一ノ一二	「アニメ」展	井上長三郎	みづゑ
第五回朗峯塾展	大山廣光	美術街	二ノ一一	油繪五人會展	福澤一郎	同
朗峯畫塾第五回展	藤森順三	美術評論	四ノ九			アトリエ

油繪五人展	岩佐新	美術	一〇ノ一	旺玄社展覽會評	木村莊八	美之國	一一ノ三
第二回油繪五人會展評	山崎坤象	みづゑ	三六四	流線型旺玄社評	小林猶二郎	同	同
阿部芳文個展評	加藤信也	同	三七〇	旺玄社展評	山崎坤象	みづゑ	三六一
一呵社展				岡崎桃乞個展			
一呵社展				岡崎桃乞個展			
一呵社展評				岡崎桃乞展			
一呵社展所感	小島善太郎	美術	一二ノ八	オサカ・漫畫グルツベ展	岩松淳	中央美術	二九
一軌社展の感想	橋本八百二	みづゑ	一〇ノ八	小山敬三氏個展		美之國	一一ノ二
一樹社第一回展		美術	三六六	小山敬三氏個展		アトリエ	一二ノ六
石井柏亭個展		美之國	一一ノ六	小山敬三氏個展	鈴木武久	美之國	一一ノ六
石井柏亭氏小品展評				小山敬三氏個展評	川島理一郎	みづゑ	三六四
石井柏亭小品集				飾畫展	福澤一郎	同	三六九
石井柏亭氏個展を觀る				辛繪展	池田永一路	美之國	一一ノ六
伊藤繼郎個展	II・I 生	中央美術	一二ノ五	川合修二個展			
伊藤繼郎個展		美之國	一一ノ五	川合修二氏個展			
伊藤繼郎個展	尾川多計	アトリエ	一二ノ一〇	川合修二氏個展	T S 生	アトリエ	一二ノ六
伊藤繼郎個展評		美術	一〇ノ一〇	川合修二個展評		美之國	一一ノ六
岩松淳個展	太平章	みづゑ	三六九	川島理一郎氏個展		みづゑ	三六四
内田巖個展				川島理一郎氏個展	尾川多計	アトリエ	一二ノ一
内田巖氏個展	中村研一	アトリエ	一二ノ一	川島氏の熱河風物展		同	一二ノ六
内田巖個展		中央美術	一九	川島理一郎氏素描展	横川毅一郎	中央美術	二九
内田巖の個展	津田正周	美之國	一一ノ一	川島理一郎個展	岩佐新	美術	一〇ノ一
海老原喜之助個展評		美術	一〇ノ一二	川島理一郎熱河風物展		同	一〇ノ一二
沿線會第二回展		アトリエ	一二ノ八	川島理一郎氏個展評	古山順一	美術	二ノ一一
大森啓助個展				川島理一郎氏個展	曉美郷生	美之國	一一ノ一
大森啓助氏個展		アトリエ	一二ノ三	川島理一郎氏の個展	川島理一郎	同	一一ノ一二
大森啓助滯歐作品展	一木隴二郎	同	同	新しい個展の意味	荒城季夫	同	同
大森啓助氏個展評	益田義信	みづゑ	三六一	川島理一郎氏個展		みづゑ	三五九
大阪新美術家同盟展評	田邊信太郎	同	同	川島理一郎氏個展評		同	三七〇
旺玄社展				川島理一郎氏個展			
旺玄社評	尾川多計	アトリエ	一二ノ三	關西新洋畫會展			
旺玄社展	向井潤吉	美術	一〇ノ三	關西新洋畫會	六條篤	アトリエ	一二ノ一

關西新洋畫會展評	小西清太郎	みづゑ	三五九	光風會展	本間勘成	美之國	一一ノ一二
關西水彩畫協會展評	國枝金三	同	三六四	藝術文化史として見たる光風會	荒城季夫	アトリエ	一二ノ三
北島淺一氏小品展	アトリエ	一二ノ六		光風會と久米桂一郎遺作	石井柏亭	中央美術	二〇
京都洋畫家協會	同	一二ノ一		光風會展評	栗原信	美之國	一〇ノ三
九年會洋畫展評	同	一二ノ八		光風會展覽會評	宮本三郎	美之國	一一ノ三
黑田重太郎個展	中央美術	二五		昭和十年光風會展評	中野和高	みづゑ	三六一
黑田重太郎氏の近業	美之國	一一ノ七		黑色洋畫展	津田青楓	アトリエ	一二ノ五
はじめての個展について	美之國	一一ノ七		黑色洋畫展	同	アトリエ	一二ノ九
くろくも會展	アトリエ	一二ノ一〇		黑色洋畫展	同	同	一二ノ一〇
第一回くろくも展	美術	一〇ノ一〇		第六回黑色洋畫展	尾川多計	同	一二ノ一〇
くろくも會展評	美術	一〇ノ一〇		黑色洋畫展	荒城季夫	美術	一〇ノ五
圭林會展	アトリエ	一二ノ六		黑色洋畫展	長谷川三郎	美之國	一一ノ八
圭林會洋畫小品展	アトリエ	一二ノ六		兒島善三郎個展	橫川毅一郎	アトリエ	一二ノ二
圭林會展を觀る	美術	一〇ノ六		兒島善三郎君個展	Q 生	美之國	一一ノ一
圭林會第一回展評	みづゑ	三六四		兒島善三郎氏の個展			
現代十大家洋畫展	アトリエ	一二ノ五					
現代十大家洋畫展評	美之國	一一ノ五					
十大作家洋畫展評	みづゑ	三六六					
小磯良平氏の個展を見て	中村研一	アトリエ	一二ノ七	佐藤敬個展	佐藤敬個展	美術	一〇ノ八
小絲源太郎個展	美術	一〇ノ七		佐藤敬個展評	佐藤敬氏個展	美之國	一一ノ八
小絲源太郎氏の個展	みづゑ	三六五		佐藤敬君の個展を觀て	猪熊弦一郎	みづゑ	三六六
小絲源太郎氏の個展	洋畫研究	二三		佐伯米子個展評		美之國	一一ノ一二
小林和作氏個展評	みづゑ	三七〇		三春會展			
行人社展	アトリエ	一二ノ六		第二回三春會展		アトリエ	一二ノ八
第七回行人社展	美術	一〇ノ六		三春會展評		美術	一〇ノ八
行人社展評	美之國	一一ノ六		三春會を見て		みづゑ	三六六
第七回行人社油繪展短評	みづゑ	三六四		四皓會展覽會寸評	長谷川三郎	美之國	一一ノ六
構造社繪畫部展	アトリエ	一二ノ三		七洋會展評	不知火光	美之國	一一ノ六
構造社繪畫部試作展	アトリエ	一二ノ三					

第一回七洋會展評	鈴木保徳	アトリエ	一二ノ五	新造型美術展	税所篤二	アトリエ	一二ノ二
七洋會展覽會短評	みづゑ	三七〇		第一回新造型美術展	尾川多計	同	一二ノ一〇
島田福雄君個展	アトリエ	一二ノ六		新造型美術展	福澤一郎	中央美術	一九
清水七太郎氏個展	美術	一〇ノ七		新造型美術展を観る	同	美術	一〇ノ二
下郷羊雄氏個展	みづゑ	三六九		新造型美術展評	海老原喜之助	美之國	一一ノ二
JAN展	アトリエ	一二ノ二		新造型展評	長谷川三郎	みづゑ	三六〇
春臺展	小寺健吉	アトリエ	一二ノ二	新造型美術展	成田重郎	同	三六九
春臺展と片多君の遺作	大山廣光	現代美術	二ノ九	新造型美術の秋季展	辻部政太郎	同	同
第十回春臺美術展小観	中央美術	一九		新日本洋畫協會創立展	石井柏亭	アトリエ	一二ノ四
春臺美術展	猪熊弦一郎	美術	一〇ノ二	新美術家協會展	有島生馬	美術	一〇ノ四
春臺展洋畫評	W 記者	美之國	一一ノ二	新美術家協會展	水谷清	美之國	一一ノ四
春臺展評	能勢龜太郎	みづゑ	三六〇	新美術家協會展評	安井曾太郎	みづゑ	三六二
春臺第十回展評	宮本三郎	アトリエ	一二ノ五	第七回新美術家協會展評	福澤一郎	同	同
上杜會展	中央美術	二二		新美術家協會展	R 生	美之國	一一ノ一
上杜會展	渡邊浩三	美術	一〇ノ五	神保駿三郎氏の個展	相田直彦	みづゑ	三六一
上杜會展	林 武	アトリエ	一二ノ八	水彩展評	素顔社展		
女草會展	美術	一〇ノ八		素顔社第五回展	佐分 眞	アトリエ	一二ノ六
女草會短評	みづゑ	三六六		素顔社展評	外山卯三郎	美術	一〇ノ六
新興美術協會展	アトリエ	一二ノ三		素顔社洋畫展評	同	洋畫研究	二三
新興美術展合評	美之國	一一ノ四		素顔社洋畫展評	酒井亮吉	アトリエ	一二ノ二
第四回新興美術協會展評	島田福雄	美之國	一一ノ四	鈴木信太郎君個展	竹内勝太郎	アトリエ	一二ノ一
第四回新興美術展評	同	みづゑ	三六一	須田國太郎個展	中井正一	みづゑ	三五九
新時代洋畫展		アトリエ	一二ノ三	須田國太郎氏個展	猪熊弦一郎	美術	一〇ノ一
新時代洋畫展		同	一二ノ五	青集會短評	竹中 郁	アトリエ	一二ノ七
新時代洋畫展評		同	一二ノ六	全關西洋畫展		美術	一〇ノ七
新時代洋畫展		同	一二ノ一〇	全關西洋畫展			
新時代洋畫展		美之國	一一ノ一	全關西洋畫展評			

一九四〇年協會展

一九四〇年展

一九四〇年展評

一九四〇年協會展評

一九四〇年協會展評

蒼原會第八回展

曾宮一念個展

第一美術展

第一美術展評

第七回第一美術協會展評

太平洋畫會展

太平洋畫會展

太平洋畫會展批評

高橋亮吉君の歸朝作品展

鶴田吾郎氏個展評

東京みづゑ會展覽會

東光會展

東光會を見て

東光會雜感

東光會展のおぼえ書

東光會短評

東光會寸評

東光會を終つて

東光會展合評

東光會展合評

東光會を觀て

東光會漫評

東光會の印象

東光會を觀て

東光會第四回展に際して

東光會諸氏

幹邊 整

外山卯三郎

同

同

荒城季夫

同

同

小栗橋一郎

國安芳雄

妹尾正彦

小幡二堂

高野眞美

赤城泰舒

田中忠雄

尾川多計

青柳喜兵衛

猪熊弦一郎

荒城季夫

熊岡美彦

橋本八百二外

七氏

東光會々員

石井柏亭

中川紀元

武者小路實篤

窪川稻子

東光會諸氏

同

同

同

同

アトリエ

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

第三回東光會展

東光會展評

東光會展評

東光會第四回展評

東光會展

童朱會を見る

童朱會第一回展評

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

童朱會展

古山順一

尾川多計

松本弘二

佐波 甫

三岸節子

加藤信也

中西利雄

岩佐 新

内田 巖

茨木杉風

尾川多計

W 記者

宮本三郎

小山良修

長谷川三郎

能勢龜太郎

春日部たすく

田邊眞太郎

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

美術

二ノ三

一一ノ二

三六二

三七〇

一二ノ二

三六〇

一〇ノ八

三六六

一〇ノ二

一〇ノ一

三六九

一〇ノ二

一一ノ二

三七〇

一九

一一ノ二

三七〇

一九

一一ノ二

三七〇

一九

一一ノ二

三七〇

一九

一一ノ二

三七〇

一九

一一ノ二

三七〇

一九

一一ノ二

能勢塾展所感	渡邊浩三	美術	一〇ノ六	福澤一郎氏素描展評	アトリエ	一二ノ五
野田英二氏個展評	みづゑ	三六四	福田、野田、關川三氏洋畫展			
野生會展			福田新生、野田信、關川富士	熊谷登久平	美之國	一一ノ四
野生會展評	美術	一〇ノ七	郎三氏洋畫展評	宮本三郎	みづゑ	三六二
野生會展評	同	一〇ノ一二	福田新生、野田信、關川富士			
野生展評	みづゑ	三六五	郎三氏洋畫展	藤岡昇個展		
野生會第二回展を見て	同	三七〇	藤岡昇個展	藤岡昇氏個展評	佐波甫	美之國
ノヴァ展	井澤秋夫	アトリエ	一二ノ二	藤岡昇氏個展評	矢部友衛	みづゑ
NOVA展	富永次郎	美術	一〇ノ二	藤岡昇氏近作展	荒城季夫	同
NOVA展評	一記者	美之國	一一ノ二	藤岡一個展		三七〇
NOVA展を觀る	福澤一郎	みづゑ	三六〇	藤岡一氏個展評	T・S 生	アトリエ
白聖會展				藤岡一氏個展評		美之國
白聖會評				藤田嗣治氏個展		アトリエ
第十三回白聖會展	アトリエ	一二ノ六	北海道獨立作家展	ホドラー作品複製展	同	同
白聖會展評	中央美術	二三			同	一二ノ六
第十三回白聖會展	美術	一〇ノ七				一二ノ九
第十三回白聖會展評	みづゑ	三六四				
白朝會展						
白朝會展	伊原宇三郎	美術	一〇ノ一			
白朝會展の印象	五島盛寛	美之國	一一ノ一	三雲祥之助展所感	小松清	美之國
長谷川春子氏個展評	アトリエ	一二ノ二	三越洋畫展			一一ノ一一
早川國彦個展			第一回三越洋畫展			
早川國彦氏個展	アトリエ	一二ノ六	三越洋畫第一回展	篠原集一郎	アトリエ	一二ノ九
早川國彦氏個展評	美術	一〇一六	三崎六郎、孝雄兩氏の南洋作品展	六條篤	美之國	一一ノ九
早川國彦氏個展	高田力藏	美之國	一〇一六		アトリエ	一二ノ九
早川國彦水彩畫小品展評	酒井亮吉	みづゑ	三六四	水繪十一人展		
原夏江氏同展評	美術	一〇ノ七	水繪十一人展	水繪十一人展評	山中仁太郎	アトリエ
哈爾濱美術協會展(第十三回)	X Y Z	みづゑ	三七〇	未知會展寸評	石井柏亭	みづゑ
東山紗智子個展	兒島善三郎	美之國	一一ノ一二	宮澤喜一個展	内田巖	美術
美術新青年展	三岸節子	みづゑ	三六〇			一〇ノ五
展覽會月評	木村莊八	アトリエ	一二ノ一〇	宮澤喜一氏小品個展		アトリエ

マ——ワの部

宮澤喜一氏洋畫小品展感想

長谷川利行
みづゑ 三六六

宮本三郎個展

石井柏亭
アトリエ 一二〇二

宮本三郎個展

中央美術 一九

宮本三郎個展

田口省吾
美之國 一一〇二

武者小路實篤個展

内田巖
みづゑ 三六〇

武者小路實篤氏の近作

アトリエ 一二〇三

武者小路實篤氏個展

齋田素州
塔影 一一〇三

默示社展を見て

中西利雄
みづゑ 三六五

森田勝之助個展

中村善策
美之國 一一〇一

森田勝之助滞歐作品展

林武
みづゑ 三六九

森田勝之助の個展を評す

同 同

安田謙吉君展評

田中佐一郎
同 同

矢橋六郎個展

長谷川三郎
みづゑ 三六二

山本鼎氏近作個展

アトリエ 一二〇九

楠木久太氏個展

同 一二〇三

洋畫二月展

同 一二〇三

洋畫二月展

荒城季夫
アトリエ 一二〇三

吉田秀吉水彩畫展評

小野忠重
みづゑ 三六一

吉原治良個展

同 三六二

吉原治良氏個人展

東郷青兒
アトリエ 一二〇一

吉原治良氏洋畫個展評

尾川多計
みづゑ 三五九

留加會展

石井柏亭
アトリエ 一二〇三

留加會展

中央美術 一九

脇田和氏個展評

内田巖
みづゑ 三六二

小磯良平、佐藤君兩君の個展

内田巖
アトリエ 一二〇八

展覽會月評

尾川多計
アトリエ 一二〇二

光風會・旺玄社

五島盛寛
美術街 二〇三

彫刻展覽會

朝倉塾展

尾川多計
アトリエ 一二〇二

朝倉塾展と新興美術展

立花四郎
中央美術 二八

朝倉塾展雜感

同 美術街 一〇〇一

朝倉塾展雜感

雄山亘
美術街 二〇九

新秋彫刻展概観——朝倉塾展

大藏雄夫
美之國 一一〇七

地人社と第一美術展の彫刻

同 美術街 二〇九

構造社展

雄山亘
中央美術 二七

構造社展を觀る

雨田光平
美術街 二〇九

新秋彫刻展概観——構造社展

雨田光平
美之國 一一〇一

構造社の彫刻

本郷新
アトリエ 一二〇一

三部會彫展

小倉右一郎
中央美術 二八

三部會展評

大藏雄夫
美之國 一一〇一

第三部會、N・A・S、朝倉塾を觀る

大藏雄夫
美術街 二〇二

東邦彫刻院概観

大藏風明
美之國 一一〇二

東邦彫刻院展を觀る

日本木彫會大阪展内觀

同 美術街 一一〇六

日本木彫會大阪展内觀

本郷新氏彫刻と水彩畫展

アトリエ 一二〇九

本郷新氏彫刻と水彩畫展

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

大藏武夫

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

大藏武夫

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

大藏武夫

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

大藏武夫

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

大藏武夫

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

大藏武夫

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

大藏武夫

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

大藏武夫

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

大藏武夫

大藏武夫
アトリエ 一二〇九

越佐工藝美術會展	美術街	二ノ一	第三回商工省輸出工藝展覽會概況	國井喜太郎	同	四ノ一一
大阪府産業工藝博覽會	大阪之工藝	一二ノ六	輸出工藝出品物に就いての感想	同	同	同
家具展への希望	帝國工藝	九ノ一	商工省輸出工藝展に對する陶磁器出品の傾向に就て	鹿島増藏	帝國工藝	九ノ四一六
河合卯之助氏陶器個展	美術街	二ノ一〇	昭和十年商工省輸出工藝展評	渡邊素舟	同	九ノ一一
河井寛次郎氏陶器個展	同	二ノ九	今年の輸出工藝展の漆器	柴崎風岬	汎工藝	一三ノ九
京都作陶七名會展	美之國	一一ノ一二	商工展(第廿二回)	野生	漆と工藝	四〇八
京都漆藝會展評	同	九ノ一	商工展は何を教へるか	同	工藝ニュース	四〇五
現代日本民藝展	帝國工藝	一三ノ四	第廿二回商工展概況	同	同	同
現代日本民藝展のモデルルーム小惑	汎工藝	一二ノ六	商工展出品本所試作品に就て	同	同	同
民藝展を覗く	アトリエ	一二ノ八	第廿二回商工展鑑査所感	國井喜太郎	同	同
工華社第三回展	同	一二ノ八	商工展出品照明器具に就て	同	同	同
工人社展	アトリエ	一二ノ六	昭和工藝美術展	杵島武雄	美術街	二ノ四
五條會展	同	一二ノ六	白木屋「家具逸品會」の展示室に就て	板谷波山	帝國工藝	九ノ一
五條會作陶展	美術街	二ノ一	瀬戸の陶藝——綜合展	同	美之國	一一ノ一二
五條會顧問還曆記念作陶展	同	二ノ六	蒼曉會展	内田巖、杉浦非水	アトリエ	一二ノ一
漆藝品展覽會(第二回)の成果	漆と工藝	四〇七	蒼曉會展新圖案家集團展	猪熊弦一郎	みづゑ	三五九
支那綬通展	同	一一ノ一二	鏡起研究會展評	同	美術街	二ノ七
支那綬通展を見て	新建築	九ノ一二	東京鑄金會展	雄山亘	美術街	二ノ一
現代大家創案支那綬通展覽會評	帝國工藝	九ノ一	東京鑄金會展	大島陸一	同	二ノ一〇
周圍の工作から見た室内裝飾展の比較	同	一二ノ六	日本工藝美術會展	同	同	二ノ七
自由學園工藝研究所第三回展	アトリエ	一一ノ一	美貌堂岸園山作陶展	同	帝國工藝	九ノ九
朱華會(第三回)染色展評	美之國	一一ノ一	富民協會主催竹村工藝展覽會	同	工藝ニュース	四ノ一二
商業美術展	同	一二ノ二	本所記念展概況(第七回)	同	アトリエ	一二ノ六
商工省輸出工藝展	大阪之工藝	四ノ一一	まだみ會工藝展	同	帝國工藝	九ノ一一
磁器出品の傾向に就て	工藝ニュース	一二	松坂屋國風家具展	同	同	九ノ一
輸出工藝展出品物に對する外人批評	同	同	松坂屋「新國風家具展」の批評	同	同	同
輸出工藝展審査員講評	同	同		同	同	同

松屋「室内装美展」を見る
三越「新設計室内装飾展覧」概評
無絃社展

中村 順 帝國工藝 九ノ一
木 檜 恕一 同

無絃社工藝展評

田澤田 軒 汎 工藝 一三ノ三
柴崎 風 岬 同

無絃社工藝展

鈴木 武 久 美 術 街 二ノ四
美 術 街 二ノ四

横井弘三、三浦久明創作漆繪展評

美 術 街 二ノ一
美 術 街 二ノ一

和光會工藝展

美 術 街 二ノ一
美 術 街 二ノ一

渡邊明氏家具展

美 術 街 二ノ一
美 術 街 二ノ一

祿明莊美工展(第三回)

美 術 街 二ノ一
美 術 街 二ノ一

版畫展覽會

小泉癸巳男創作版畫展
新版畫集團小品展

小野 忠 重 み づ 三六二
同 同 三六五

日本版畫協會展

椅崎 宗 重 浮世繪藝術 四ノ一二
小野 忠 重 み づ 三六〇

日本版畫協會展評

同 同 三六〇

ノエル・ヌエツト氏の東京百景展

綜合展覽會

(第四回)各人社美術展評
京都市美術展

美 術 街 二ノ四
美 術 街 二ノ四

京都市美術展の日本畫

下店 靜 市 アトリエ 一ノ一二
竹内 勝 太郎 同 一二ノ七

京都市展の第二部と第三部

須田 國 太郎 現代美術 二ノ四
同 同 二ノ四

京都市美術展瞥見

神崎 憲 一 塔 影 一一ノ七
同 同 一一ノ七

京都市美術展の工藝
京都畫壇の新進と綜合展

一 記 者 汎 工藝 一三ノ五
豐 田 豐 美 術 街 二ノ六

京都市美術展評

須田 國 太郎 美 術 街 一一ノ七
松田 尚 志 同

新興美術家協會展

五島 盛 寛 塔 影 一一ノ一二
大澤 武 雄 美 術 街 一〇ノ一一

新興美術家協會展評

美 術 街 二ノ一〇
古山 順 一 美 術 街 一一ノ一一

新興美術家協會展

小幡 二 堂 美 術 街 一一ノ一一
同 同 一一ノ一一

新燈社展

中央 美 術 街 二二
豐 田 豐 塔 影 一一ノ四

新燈社の洋畫

美 術 街 二ノ四
北村 種 三 美 術 街 一一ノ四

第十三回新燈社展評

アトリエ 一二ノ八
仲草 社 展 評 一〇ノ八

仲草社第一回展

美 術 街 一一ノ一一
美 術 街 一一ノ一一

仲草社展

美 術 街 一一ノ一一
美 術 街 一一ノ一一

仲草社第一回展評

同 同 三六六
同 同 三七〇

第二回仲草社展を見る

同 同 三六六
同 同 三七〇

清光會展

アトリエ 一二ノ六
清光會 第三回展 美 術 街 二ノ六

第三回清光會展評

美 術 街 四ノ五
清光會 第三回展 美 術 街 四ノ五

清光會斷想

美 術 街 一一ノ六
清光會 第三回展 美 術 街 一一ノ六

大東會第一回展所感

美 術 街 二ノ九
大東會 第一回展所感 美 術 街 二ノ九

筑前展	T S 生	美之國	一一ノ八
中央美術			
中展洋畫部管見	黒田重太郎	中央美術	二三
中展の日本畫を觀る	石田幸太郎	同	同
東京府美術館開館十周年記念展	田澤田軒	アトリエ	一二ノ五
開館記念綜合展を見て感あり		藝術日本	三ノ一一
東京府美術館開館十周年記念綜合美術展覽會讀畫	K・H 生	現代美術	二ノ二
綜合展雄感	添田達嶺	中央美術	二二
東京府美術館の綜合展	志立深爾	塔影	一一ノ五
府美術館記念展	荒城季夫	美術	一〇ノ五
工藝部所感	金井紫雲	美術	一〇ノ五
綜合展と日本主義的藝術其の他	相良徳三	同	同
綜合展の日本畫	中山 巍	同	同
彫刻管見	渡邊浩三	同	同
記念展の日本畫部を觀る	三氏	美術評論	四ノ四
東京府美術館十年記念展を中心とする座談會	藤森順三	美之國	一一ノ五
十周年記念展覽會を見る	石川幸三郎	美術	一一ノ三
現代美術綜合展覽會評	外三氏	美術街	二ノ三
童寶美術展	齋田素州	塔影	一一ノ三
童寶美術展	木下義謙	美術街	二ノ三
二科技藝繪畫彫塑展覽會評	加藤信也	アトリエ	一二ノ二
白日會展		中央美術	一九
白日會展私感	中村節也	美術	一〇ノ二
白日會展覽會評	大藏雄夫	美之國	一一ノ二
白日會の彫刻	篠原集一郎	同	同
白日會の繪畫	中西利雄	みづゑ	三六〇
白日會の水繪			

六潮會展

六潮會に就て思ふ	鍋木清方	アトリエ	一二ノ三
六潮會第四回展	同	同	同
六潮會展の日本畫	齋田素州	塔影	一一ノ三
六潮會大阪展評	神崎憲一	同	一一ノ六
竹田の十春帖と六潮會同人の十春畫冊を見る	田澤田軒	美術	一〇ノ三
第四回六潮會展	大山廣光	美術街	二ノ三
六潮會第四回展	村雲大機子	美術評論	四ノ二
六潮會を觀る	篠原集一郎	美之國	一一ノ三

美術行政

帝國美術院關係 (一改組前)

我無爲而民自化、我好靜而民自正	田澤田軒	アトリエ	一二ノ一
帝展有罪か	柳 亮	同	一二ノ二
帝展改革——即解散	田澤田軒	同	一二ノ五
畫境漫評 帝展は何處へ	中村武平	藝術日本	三ノ八
畫境漫評	同	同	三ノ一〇
瀧博士の「帝展と帝國美術院」を讀みて	結城素明	現代美術	二ノ一
現在帝展の動向に就いて	野田九浦	同	二ノ二
大口喜六氏へ質問	中山貞夫	同	二ノ三
中山貞夫氏への回答	大口喜六	同	同
帝展改組問題議會質問速記録	同	塔影	一一ノ三
帝國美術院について	外狩素心庵	美術	一〇ノ一
帝展を春秋二回に公開する事	齋藤與里	同	同
帝展と帝國美術院	瀧 精一	同	同
帝國美術院及帝展に對する要望	諸 家	同	一〇ノ二

美術院の問題	島田墨仙	現代美術	二ノ四	改組された帝展第四部側面觀	柴崎風岬	汎工藝	一三ノ七
帝院改組問題批判	清水良雄	同	同	帝國美術院の改組	杉山司七	美術	一一ノ七
帝展問題に就いての感想	鳩山一郎	同	同	新帝院の描く波紋	KTKT生	同	一〇ノ七
美術家の良心	中川紀元	同	同	帝國美術院改組に躍つた影を捉ふ	田澤田軒	同	同
第二部會の成立に就いて	牧野虎雄	同	二ノ五	帝院改組問題の文化的意義	金子義男	同	同
帝院改組雜觀	日置龜雄	同	同	帝院改組所感	藤井達吉	同	同
美術界騒動傍觀記	住田正一	同	二ノ六	帝國美術院改革の問題	荒城季夫	同	同
二部會の成立まで	石川寅治	同	二ノ八	新帝展及第二部會等の諸問題	諸家	同	一〇ノ九
第二部會の人々に一言す	田澤田軒	同	同	帝院改組後評	兒島喜久雄	同	一〇ノ一〇
帝國美術院會員總會への注意	中山貞夫	同	二ノ九	藝術家は拮抗する	G K 生	同	一〇ノ一一
松田文相に呈す	清澤 洌	セルバン	五三	帝展第四部は商工省へ移管せよ	田澤田軒	同	同
帝展爭議傍聽記	大宅壯一	同	同	新帝展へ如何に關ふべきか	豊田 豊	美術街	二ノ七
帝國美術院改組の諸問題	黒田重太郎	同	同	新帝展への戦術	大山廣光	同	同
帝展改組の波紋	田邊 至	中央公論	五〇ノ七	新帝展へ志す作家群へ贈る言葉	諸家	同	同
改組案に對する批判	兒島喜久雄	同	同	二回無鑑査の疑義解決	菊池契月	同	二ノ八
反帝展盲動	小杉放庵	中央美術	二四	二回無鑑査に對する希望	柴崎風岬	同	同
硯墨論	田澤田軒	帝國工藝	九ノ七	改組された帝展第四部に對する期待	松岡映丘	美術評論	四ノ七
帝國美術院騒動始末	同	同	二五	時局問題一問一答——國畫院と帝展問題	楠木清方	美術評論	四ノ八
美術界五・二八事件の考察	同	同	同	時局問題一問一答——帝展問題その他	安田靫彦	美之國	一一ノ七
帝國美術院改組顛末（第四部を主眼とする）	齊藤佳三	同	九ノ七—八	用意と理解と純粹な態度	梅原龍三郎	同	同
帝院改組による工藝家の感想	添田達嶺	塔影	一一ノ六	要は畫面の大小ではない	竹内栖鳳	同	同
帝國美術院改組のエルシャイヌンク	小室翠雲	南畫鑑賞	四ノ七	逆境即順境	川合玉堂	同	同
帝展よ何處へ行く	柴崎風岬	汎工藝	一三ノ一	新帝展の前に大觀氏と語る	有島生馬	同	同
帝國美術院改組問題について	田澤田軒	同	同	新帝展の出品に就て	石川幸三郎	同	同
録事——帝國美術院改組問題	諸家	同	一三ノ五	感じた事一つ	河野桐谷	同	同
何故帝展第四部は評判が悪いのか	柴崎風岬	同	同	新帝院の是非を検す	高澤初風	同	同
新帝院に對する工藝作家の言葉	二木成抱	同	同	帝院改組問題	志賀順三	同	同
不意打の帝院改組と工藝	津田信夫	同	同	改組されたる新帝院第一部の構成	同	同	同
官展偏重の思想	同	同	同	新帝院改組と二部	同	同	同
帝國美術院改組漫談	同	同	同		同	同	同

第三部を主題とした改組について

新帝院工芸部の改革について

京都畫壇の大波小波

帝展改組の過程

帝展改組に對する批判

帝院改組究明批判座談會

帝國美術院新官制に對する賛否

聲明書の檢討

北山のほとりより（京都畫壇改組の跡）

新帝展への疑問と國畫院

帝國美術院裏面觀

清水新美術院長

帝展改組問題批判

帝展の改組問題は何を意味するか

大藏雄夫

渡邊素舟

辻本和一

同

足立源一郎

造形文化協會

田澤田軒

同

豐田 豊

同

石川幸三郎

同

茶家保以

同

筑紫春三郎

同

荒城季夫

みづゑ

同

矢部友衛

同

美之國

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一一〇七

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

博物館の辯

斯んな美術館が欲しい

美術教育

鑑賞について

最近に於ける國畫教育の傾向

凶作地と國畫手工

國畫展覽會のこと

東川小學校の特殊手工

福島縣國畫協議會狀況

日本美術の鑑賞及說話

農山村美育の確立

非常時局下の吾等の責務

國畫科の存在を疑ふ

國畫手工展覽會と二つの試演

全國作業科協議會狀況

木工學習の要點

國畫教育の再檢討

兒童の工藝美術

國畫研究授業記録

各國國畫教育の現状

新算術書の繪畫化と小學國畫

ホスター指導の重點

國畫學習に於ける一考察

色盲兒の取扱に就て

子供の手工について

學校教育とセメント工藝

國畫教育研究協議會縱橫記

國畫教育研究協議會傍聴記

國畫教育研究協議會狀況

荒木十畝

佐藤功一

美術街

美之國

二〇二

一一〇二

山崎益哉

トムリンソン

小原 力

長澤菊慈

宮崎 元

作山曉村

赤津隆助

青木實三郎

後藤福次郎

倉田三郎

矢崎好幸

富田馨吾

三苦正雄

岩崎喜久雄

山本 鼎

富岡忠夫

トムリンソン

霜田靜志

岡 悦次

小川俊郎

柴田善太郎

霜田靜志

矢崎好幸

中村亮平

田崎捨三

編輯部

學校美術

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

九〇一

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

法規

再び美術家の著作權に就て

美術眼と警察眼

建築設計の著作權とその著作者の人格權

工藝圖案の著作家權に就いて

旭 正秀

立花高四郎

羽田 實

渡邊素舟

アトリエ

南畫鑑賞

日本建築士

美術街

一二〇二

四〇一二

一六〇五

二〇三

美術關係施設

美術館に於ける陳列品の前に立てる硝子板の問題

建築博物館の提唱

滿洲國立博物館

皇紀二千六百年の記念事業として産業博物館の建設を提唱す

中村清二

石井柏亭

阪谷芳郎

建築雜誌

建築世界

中央美術

帝國工藝

五九七

二九〇三

二五

九〇一

新小學算術書を圖案指導に活用せよ	三田村登四郎	學校美術	九ノ六	國際會議の名實 描畫美育法是非	岡登貞治	學校美術	九ノ一二
兒童の色彩の好み	岩崎喜久雄	同	同	歴史畫教育	後藤福次郎	同	同
小學校圖畫教育の檢討	松田 操	同	同	構成教育に關する覺書	恩地孝四郎	現代美術	二ノ一
圖案と圖案展覽會	安藤 清	同	九ノ七	小學校の圖畫教育を思ふ	常松菅晴	圖畫と手工	一八ノ一三
天平朝像の模倣について	小西美良	同	同	天覽授業の光榮に浴して	淺野秀一	同	同
手工教育の既往と將來	伊藤信一郎	同	同	和歌山縣素描	谷口彌壽雄	同	同
日本代表としての抱懷	岡登、淺野	同	同	南紀圖畫講習會記事	岡田 清	同	一九ノ二
北海道圖畫手工教育家座談錄	吉野	同	同	學校を觀る——泰明小學校の卷	高垣英一	同	同
地方實際家の悩みを語る座談會	諸 家	同	九ノ八	平田先生を迎へて	田中鐵夫	同	同
兒童に如何に夏休を活用させるか?	諸 家	同	同	平田先生を和高女に迎へる	山東正晴	同	同
國際美術教育會議の收穫	諸 家	同	同	師を南紀に迎ふるの記	金成勇夫	同	同
造型美育の再認識	霜田靜志	同	同	大阪府立豊中中學校校友會繪畫部	齋川梧堂	同	同
光の圖案への第一歩	田崎捨三	同	九ノ九	東京市城西區區圖畫講習會記事	岩壁久方	同	一九ノ三
彫刻の大家に接して	山崎正夫	同	同	日本美術の味識	伊藤好太郎	同	同
果して對岸の火災か?	矢間愛雅	同	同	高等學校入試に用器畫を課せよ	寛 敦 良	同	同
圖案指導と教師の修養	後藤福次郎	同	九ノ一〇	故酒井忠一君哀悼記	諸 家	同	同
圖畫指導と興味の問題	武井勝雄	同	同	圖畫科よ甦れ・革新向上を期す	飄々生	同	同
小學校圖畫教育の檢討を讀みて	井戸原文重	同	同	圖畫教育の再檢討	淺野秀一	同	一九ノ四
構成教育より見たる圖畫の一部面	南 萬三	同	同	學校を觀る——横川小學校の卷	同	同	同
第七回國際美育會議に列して	間所はる	同	九ノ一〇—	西海圖畫教育大觀	山下一雄	同	同
後藤氏の說を讀んで	岡登貞治	同	九ノ一一	圖畫科は何處へ行く	大谷阿夫利	同	同
農村美育の擴充と國民教育	松島達太郎	同	同	日本精神講習會に圖畫の登場	仁科悅郎	同	一九ノ五
國際美育會議と日本代表	小西美良	同	同	圖畫教育と美育	岡田 清	同	同
正常な圖畫教育	エス・モン フォルト	同	同	福島縣師範學校中學校圖畫科協 議會記事	淺野秀一	同	同
實驗報告——彼は下手ではない	松田 操	同	九ノ一一—	平に行く	近藤廣記、藤 田魁外四氏	同	一九ノ六
圖畫教室の研究	大田末夫	同	九ノ一二	日本手工教育五十年に際して	平田松堂	同	同
鑑賞教育の方法	山崎壽郎	同	同	學校を觀る——根岸小學校の卷	石野 隆	同	同
圖畫訓導協議會概況	武井勝雄	同	同	中等教員作品展に就て	淺野秀一	同	同
	淺野秀一	同	同		林 繁雄	同	一九ノ七

福島縣立磐城中小學校創立四十周年記念祝賀綜合展の記

近藤廣記

同 同

一九〇七
一九〇七

勞作教育と手工
手工教室の設備

三浦直政

同 同

一九〇一

日本文化と日本の圖畫教育

岡田秀雄

同

一九〇七

現代の手工教育に對する感想

同 家

同 同

同 同

圖畫教育と日本畫

原貫之助

同

一九〇八

日本畫の教授態度

金原省吾

同 美

一九〇一

小樽中學校三科綜合展に就て
或る展覽會

竹田信夫

同

一九〇九

日本精神と圖畫教育

横井隆作

同 同

同 同

圖畫科と日本畫の問題

渡部竹風

同

同

廣島高師に於ける全國作業科研究大會

兼本吾一

同 同

同 同

學校を觀る——京橋小學校の卷
故辰野源太郎氏追悼

淺野秀一

同

同

第九回靜岡縣圖畫教育研究大會

大城鎮雄

同 同

同 同

中學校の問題と圖畫科

諸家

同

一九〇一〇

靜岡縣大會に列して

杉山新樹

同 同

同 同

手工教育と工藝

三浦直政

同

同

岐阜師範美術展覽會

山田新吉

同 同

同 同

手工科設置五十周年記念に際して

田邊孝次

同

一九〇一

靜岡縣直方高女展覽會

土屋常義

同 同

同 同

手工教育界の先覺者

伊藤信一郎

同

同

圖畫か美術か 石野氏の意見を駁す

瀧島初太郎

同 同

一九〇二

手工教育界の功勞者

三尾與喜藏

同

同

福岡縣圖畫教育研究會之記

山口素堂

同 同

同 同

手工科の生育を顧る

松岡正雄

同

同

兒童自身の演出案

長尾豊

同 同

同 同

將來の手工教育

松田義之

同

同

第五回茨城縣圖畫教育研究會記

岡登貞治

同 同

同 同

手工教育三思三省

原義人

同

同

第二回四國圖畫手工教育大會記

宮崎豊

同 同

同 同

手工教育の現狀とその改革

關口曉三郎

同

同

圖畫教室から

谷口國介、藤

同 同

一九〇二

手工藝製作の指導統制

三森連象

同

同

圖畫科か美術科か

伊達考

同 同

一九〇二

農村副業の研究と手工教育

石野隆

同

同

「版」と圖畫教育

小川原哲夫

同 同

一九〇三

日本精神と手工教育

武井勝雄

同

同

或る復命書覺書

武藤完一

同 同

同 同

フランス現行手工科の要目に就いて

淺野秀一

同

同

作業科教師の態度

松田操

同 同

同 同

農村の手工教育

内藤秀因

同

同

鹿兒島縣圖畫工作研究大會概況

乘本吾一

同 同

同 同

手工科を必須科目とせよ

大竹拙三

同

一九〇一

鹿兒島縣圖畫工作研究會參觀記

永原正雄

同 同

同 同

手工に關して思ひつくまゝに

杉山甚一

同

同

川邊紀行 其の一

笠原山翠

同 同

同 同

我工作教育の實際

松山國雄

同

同

同 其の二

矢崎好幸

同 同

同 同

手工科の社會通念

岡田清

同

同

山梨師範六拾周年記念展と二つの試み

黒田弘隆

同 同

同 同

酒井忠一君の思ひ出	小林清太郎	美	一ノ三	第五回山口縣圖畫科研究協議會	曾瀬保	美	一ノ八
酒井忠一君追悼	吉武正巳	同	同	改組第一回三重縣美育研究會	山脇楠英	同	同
酒井忠一君を悼ぶ	瀧久吉	同	一ノ四	我々創立三十周年記念展	谷德藏	同	同
美育に於ける表現と鑑賞	多田銀三	同	同	第七回長野縣圖畫教育研究會	宮原賢三	同	同
幻燈使用鑑賞教授の實際	多取堯	同	同	徳島縣圖畫工作研究協議會	森壽正	同	一一ノ九
創作味に富む小枝人形	谷德藏	同	同	岐阜洋畫講習會概況	赤池悟	同	同
横須賀中學校の作業科を觀る	岡登貞治	同	同	圖案教育の種々相	土屋常議	同	同
第二回京都府美育研究大會概況	石野隆	同	同	福岡縣美育振興會實習會	金子清次	同	同
鹿兒島縣圖畫工作研究會の誕生	南留太郎	同	同	假想の天地	山下一雄	同	一一ノ一〇
圖畫教育上に於ける版畫	笠原松太郎	同	同	生徒制作毛筆畫廣島百景	長尾豊	同	同
用器畫に親しむ	武田由兵衛	同	一一ノ五	暗轉する中學校の圖畫科	市川邦彦	同	一一ノ一一
圖畫教育五箇年計畫の回想	鈴木信一	同	同	工作に生きる	松田操	同	同
十如是と教育者	山東正晴	同	同	福岡縣中等圖畫研究會の出現	佐藤正己	同	同
關東、東海の師範學校を巡る	佐々木正明	同	同	圖畫科への抗議	山下一雄	同	同
作業科工作の實地難	森壽正	同	同	第一回長崎縣圖畫教育研究大會	岡田秀雄	同	同
藝術と教育	赤池悟	同	同	教育圖畫の樹立	小林長太	同	同
現代圖畫教育の力點	石川欽一郎	同	一一ノ五	中學校圖畫科への脅威	長澤菊慈	同	同
農村兒童の色彩觀	細島昇一	同	一一ノ六	圖畫科に於ける構成教育の問題	杉山司七	同	一一ノ一一
福島縣圖畫教育研究協議會記	小川原哲夫	同	同	圖畫教育者よ活眼を開け	鈴木三五郎	同	一一ノ一二
我が校美術部の八箇年	柴田善登	同	同	日本畫指導の實際	山下金治	同	同
和歌山縣美育協會の設立	渡邊武比古	同	同	時勢に鑑み圖畫教育上の日本畫	尾藤武夫	同	同
各地圖畫教育會の飛躍	西博民	同	同	に就て	森山一虎	同	同
圖案學指南	杉山司七	同	同	滿洲便り	河南拓	同	同
科學的な圖畫教育は不可能か	廣川松五郎	同	一一ノ七	福島縣教員展の三日	岩越二郎	同	同
第八回愛知縣圖畫教育研究大會記	岡田秀雄	同	同	美育家の一使命	高橋五郎	同	同
石川縣中等教員展	山本鐵太郎	同	同	展覽會によりて教へられたこと	井口亘	同	同
生活即藝術	花鳥龍雄外	同	同	美育に就て	杉原茂右衛門	同	同
佛像の模作と教育	二氏	同	一一ノ八	美育雜誌	齊藤與里	美	一〇ノ一〇
	松崎健三	同	同	美育	石井柏亭	同	同
	小西美良	同	同		板倉賛治	同	同

單行圖書文獻

總說

日本畫

編著者 書名

發行所

朝日新聞社 東京府美術館開館十周年記念綜合名作展

朝日新聞社

朝日新聞社

第十四回南畫展

大阪朝日新聞社

植田壽藏

藝術史の課題

弘文堂

同

日本畫實習帳

同

芸艸堂出版部

京都府美術館展覽會圖錄

芸艸堂

荒木十畝等著

新南畫講座

資文堂

大西昇

美學及藝術學史

理想社出版部

伊東深水等著

現代美人集

渡邊版畫店

オストワルド著

色彩學概論

色彩補正練習會

同本東洋

青龍社第七回展圖錄

大塚巧藝社

佐藤昌二譯

色彩辭典附色盤帳

不二屋商會

垣見宣修

花鳥風月

芸艸堂

折目俊文夫

略畫辭典

學校美術協會

北原義雄

日本畫技法用語辭典(アトリエ美術大講座日本畫科第六卷)

渡邊版畫店

キユルベ著

美學原論

東京堂

京都博物館

鐵齋先生名畫集

便利堂

藤井縣識

世界新興美術研究

文章閣

小泉勝爾、土岡春郊

鳥類寫生圖譜

鳥類寫生圖譜刊行會

小田謙一

美學と藝術學

日本評論社

小勢小石

七十二侯名花畫帳

巨勢德太郎

島屋政一

印刷美術年鑑(昭和十年度)

大阪出版社

同

花鳥畫の本質

芸艸堂

竹内勝太郎

藝術論

芸艸堂

同

紫峰花鳥畫集

同

朝鮮總督府朝鮮美術展覽會

第十四回朝鮮美術展覽會圖錄

朝鮮總督府朝鮮美術展覽會

水月會事務所

三溪先生周甲畫譜

同

東京府

東京府美術館開館十周年記念現代綜合美術展覽會圖錄

審美書院

高島屋美術部

耕雲花鳥集

同

中村亮平

世界美術要鑑

サイレン社

鷹田其石

日本畫道

健文社

野ばら社

圖畫辭典

野ばら社

德力富吉郎等著

花五十題 第一輯—十輯

中山忠直

ボードレール著

美術評論

ふらんす書房

野澤如洋

如洋畫集 第一

辛木貞夫	市場建築(實用建築講座第四)	東學社	レイモンド	レイモンド作品集	城南書院
北尾春道	近代數寄屋名席聚 現代茶室(數寄屋聚成第十一)	洪洋社			
藏田周忠	現代建築(實用建築講座第一)	東學社			
群馬縣建築協會	小都市に建つカフェー建築	洪洋社			
洪洋社	數寄屋住宅錦舟寮(建築寫真類聚第九期第十一輯)	同	青木良吉	最新高等手藝染色法	大日本文化研究會
同	洋風住宅外觀集(建築寫真類聚第九期第八輯)	同	有坂與太郎	郷土玩具大成 第一卷 東京編	建設社
同	商店建築外觀集(建築寫真類聚第九期第十二輯)	同	磯貝雅敏	丹生會圖錄 第二	内田美術書肆
同	和風牆壁集	同	市田文商店考案	紳衿園展觀圖錄 第七回	芸艸堂
同	モダン小商店設計グラフ第二(建築講成第七)	同	伊藤義次	工藝叢書 室内裝置編	學術出版社
同	欄間集(建築寫真類聚別卷第十輯)	同	同	素晴らしい趣味の室内裝飾	大阪教育圖書出版社
同	數寄屋趣味の料亭(建築寫真類聚第九期第九輯)	同	大阪府工藝協會	大阪府産業工藝博覽會記念誌	大阪府工藝協會
佐野利器、櫻井良雄	建築(現代日本工業全集 二五)	日本評論社	太田直行	島根民藝錄	島根民藝會
清水組	住宅建築圖集	土木建築資料所	荻野司芳	新象苑圖集 第二	内田美術書肆
高木源之助	工場建築(實用建築講座第一)	東學社	小栗吉隆	工藝叢書 木材工藝編	學術出版社
高梨由太郎	現代の建築彫刻(建築寫真類聚第九期第十輯)	洪洋社	桜田紫葉	大圖着尺集 第五	内田美術書肆
竹中工務店	建築寫真集	竹中工務店	金子清次	基本圖案學	共立社
都市美協會	建築の東京	都市美協會	川崎巨泉	最新家具の實用工作法	太陽堂
同	大東京建築祭建築設計競技銀座街共同建築	東學社	河原崎晃洞	おもちゃ畫譜 第十編	川崎末吉
十代田三郎	商店建築	同	桂友會	文花のしほり 下	内田美術書肆
白鳥義三郎	山の住宅	同	桂友俱樂部	寶づくし 上	芸艸堂
報知新聞社	實用建築講座	洪洋社	桂友同機會	夏の染織帶圖案集(桂友同機會第十四輯)	同
宮下桃太郎	實用建築講座	東學社	孝學友彰	染色帯帶圖錄(桂友第廿七回)	同
森永達男	解圖寺院建築雛形	金龍堂	好地武	友人同機會 第十六回	同
吉田正作	これか和洋建築手摺圖案三百三十種	中央工學會	梁集會	六人の村圖錄 第十一回	内田美術書肆
				工藝叢書 工藝材料編	學術出版社
				有職玩具 第三輯十四編	芸艸堂

工藝及圖案

外國古美術及近代美術

新小説社	版畫社	渡邊畫版店	加藤潤二	渡邊畫版店	版畫社	美術社	ジャパントイムス社
阿部七五三吉	佐藤末吉	泉節二	大竹拙三	尋一の圖畫(數へ方全書八)	尋二の圖畫(數へ方全書十七)	尋三の手工(數へ方全書二十七)	生活手工教材と其實踐
每週小學校手工教授精案	配當	尋常小學新圖畫學習指導案					

教 育

教
育

阿部七五三吉	明治圖書株式會社
佐藤末吉	每週小學校手工教授精案 配當
泉節二	尋常小學新圖畫學習指導案
大竹拙三	尋一の圖畫(數へ方全書八)
同	尋二の圖畫(數へ方全書十七)
同	尋三の手工(數へ方全書二十七)
同	生活手工教材と其實踐
學校美術協會	圖畫自習事典
家事技藝教育研究會	手藝教育最新教材集
創文社	學校美術協會 賢文館
南光社	厚生閣

アトリエ社
國民美術協會
座右叢刊行會
同
耕進社
日本漫畫研究會
國民美術協會
中央工學會
富山房
アトリエ社
崇文堂出版部
東邦美術學院
京都市圖畫研究會

- | | | | | | |
|--------------|-----------------------------|---------------|---------------|----------------------------------|---------|
| 加藤不可止 | 國定準據圖書指導體系と指導細目 | 三省堂 | 夏目漱石 | 漱石遺墨集 | 岩波書店 |
| 小堺宇市 | 文燈受圖書科研究者の爲に
常用圖書科研究者の爲に | 大同館 | 長谷川春子 | 滿洲國(畫と文) | 三笠書房 |
| 齊田コト | 小學校に手藝教材並にその指導法
於けるの研究 | 啓文社 | 檜山武夫 | 未完成の畫家 | 檜山昇 |
| 初等教育研究會 | 尋常圖書科教授細目 | 培風館 | 平福百穂 | 竹窗小話 | 古今書院 |
| 鈴木美和治 | 日精神畫教育論と小學圖書 | 聚文社 | 藤田國馨 | 寫生と寫生地 | 上田屋 |
| 中西良男 | 子供繪卷の指導 | 弘道閣 | 松本純三、小倉
正照 | 顏料・繪具及インキ | 共立社 |
| 日本圖書手工協
會 | 圖書教育美術鑑賞資料 | 大日本圖書株式
會社 | 水野廬朝 | 育文畫話 | 巧藝社 |
| 三苦正雄 | 高等小學圖書の解説と其取扱(高一) | 明治圖書株式會
社 | 東京美術學校 | 東京美術學校一覽 | 東京美術學校 |
| 横井曹一 | 尋一の手工(教へ方全書九) | 厚生閣 | 柳宗悅 | 美術と工藝の話 | 童華社 |
| 同 | 尋二の手工(教へ方全書十八) | 同 | 矢部友衛 | 漫畫デッサン論、デッサンに就て
(漫畫研究資料講座第二輯) | 日本漫畫研究會 |
| 同 | 尋三の圖書(教へ方全書二十六) | 同 | 芳川起 | 新帝展問題の解剖 | 二松堂書店 |
| 同 | 尋四の圖書(教へ方全書三十五) | 同 | 和田三造 | 歐米繪の旅 | 童華社 |

雜

- | | | |
|-------|-------------------------|---------|
| 石野隆 | 出品から入選まで | 學校美術教會 |
| 岡本一平 | 漫畫論手引草(漫畫研究資料講座第
三輯) | 日本漫畫研究會 |
| 香取秀眞 | 筆ふいと祭 | 學藝書院 |
| 小室翠雲 | 翠雲爐邊畫談 | 國書刊行會 |
| 高屋肖哲 | 狩野芳崖傳 | 高屋徳次郎 |
| 竹内勝太郎 | 筆隨西歐藝術風物記 | 芸艸堂 |
| 竹之内常吉 | 第十回表裝美術展覽會圖錄 | 同人會 |
| 富田溪仙 | 無用の用 | 人文書院 |
| 豐田豐 | 古畫 | 古今堂 |

東洋古美術文獻目錄

採録定期刊行物目錄(五十音順)

ア トリ エ	二二ノ一——二二
浮世繪藝術	四ノ一——二二
漆と工藝	四〇五——四一六
京都美術青年會誌	一〇、一一
建築雜誌	五九四——六〇七
建築世界	二九ノ一——一二
工藝	四九——五九
考古學	六ノ一——一〇
考古學雜誌	二五ノ一——一二
國學	五三〇——五四一
史學	一三ノ四、一四ノ一——三
史學雜誌	四六ノ一——一二
史蹟と古美術	一四ノ一——五
史蹟と美術	五〇——六一
史蹟名勝天然紀念物	一〇ノ一——一二
史潮	五ノ一——三
史林	二〇ノ一——四
思想	一五二——一六三
書畫骨董雜誌	三一九——三三〇
書藝	五ノ一——九
書道	四ノ一——一二
大正大學學報	一九——二三
大日本窯業協會雜誌	五〇五——五一六
中央美術	一八——二九

美術文獻目錄

茶 わ	四八——五八
塔 影	一一ノ一——一二
陶 磁	七ノ一——六
東方學	京都第五冊副刊 東京第五冊續編
東洋學	二二、二三
東洋美術	二二、二三
ドルメ	四ノ一——一二
な の	一一
南畫鑑賞	四ノ一——一二
日本美術協會報告	三五——三八
美術	一〇ノ一——一二
美術	二ノ一——二
美術	三七——四八
美術	一一ノ一——二
ビ タ	三ノ一——二
佛 教	一一
佛 教	二〇
文 化	二ノ一——二
寶 雲	一一——一五
み ゑ	三五九——三七〇
大 志	二ノ一——二
夢 殿	一一——一五
洋 畫	二〇——二六
歷史	九ノ一——一〇ノ九
歷史	四ノ一——一二
歷史	六五ノ一——六、六六ノ一——六

定期刊行物所載文獻

總説・綜録

國華

書畫同體論と吳畫

瀧精 一 五三五

史蹟と古美術

續醍醐寺の佛畫と佛像

石崎 達二 一五〇四

永觀堂の佛像と佛畫

同 一五〇五

往生極樂院について

同 同

史迹と美術

佛教章像講話 一一三

吉祥 眞雄 五九一六一

中央美術

狛犬と獅子

棚田 曉山 一八

日本に於ける美術批評の起源

横川 毅一郎 一九

塔影

朝鮮古美術史迹巡禮 二一四

下店 靜市 一一〇二三

東洋美術

播州綱干龍門寺

伊豆山善太郎 二一

日本美術品説に就いて

仲田 勝之助 二二

日本美術協會報告

秘佛瞻禮 中、下

田中 萬宗 三五、三六

美術

書畫同源

中村 不折 一〇ノ三

美術研究

石清水八幡宮記録 佛菩薩目錄(公刊)

四一

平等院關係資料(研究資料)

四二

東洋美術研究文獻目錄

四三

嘉祿二年の神護寺諸堂記について

望月 信成 四七

附 高雄山神護寺規模殊勝之條々記のこと

四七

神護寺諸堂記(公刊)
高雄山神護寺規模殊勝之條々(公刊)

四七

文化

新古珍器集

福井利吉郎 二ノ一一

歴史公論

日本の佛教美術

藤懸 靜也 四ノ一一

繪畫

アトリエ

芥子園畫傳の版畫的價值

平塚 運一 一二ノ六

歐西人の芥子園畫傳に就て

岩井 大慧 一二ノ一一

浮世繪藝術

浮世繪版畫出版取締に就いて

藤懸 靜也 四ノ一

山田右衛門作、其他

近藤市太郎 同

歌川國宗の墓

篠崎 四郎 同

浮世繪と江戸花街 一一三

平野 青夜 四ノ一一三

浮世繪より見たる芝居の今昔

津金 巨摩雄 四ノ一

寶曆明和の浮世繪界と鈴木春信

藤懸 靜也 四ノ二

浮世繪師の墓 一、二

大曲 駒村 四ノ二、三

獨樂徒然集 卯親子破笠の傳記資料

木村 拾三 四ノ二

川柳觀浮世繪考

鈴木 仁一 同

寫樂の特異性に就て

光岡 康成 四ノ二、三

喜多川「狂月望」解

檜崎 宗重 四ノ二

歌麿畫「狂月望」解

永見 德太郎 四ノ三

山田右衛門作の檢討

鈴木 仁一 同

末期浮世繪師の肖像

檜崎 宗重 同

喜多川「潮干のつと」や「浮む瀬」

同 同

歌麿畫「潮干のつと」や「浮む瀬」

仲田 勝之助 四ノ四、六、

浮世繪雜考 一一三

近藤市太郎 四ノ四

「山田右衛門作」に就いて永見德太郎に答ふ

同 同

繪馬の藝術

穂積青牛考

清長の藝術

鳥居清長に就て

清長といふ人

鳥居清長の着想と古正本挿繪の價值

中州の繁昌と清長の諸作

松方幸次郎氏藏 清長筆版畫目錄

清長畫繪本目錄

高野辰之氏藏 清長畫芝居番附目錄

初代豊國の浮世繪に就て

歌川國宗の作品

清長研究補訂

古書に於ける版木應用と作者の良心

清長の藝術

清長の性格 一、二

清長と其時代 一—三

北齋と繪本隅田川兩岸一覽

江戸時代唯一の玩具圖錄たる「江都二色」の編者

英一婦豊國と署名せる肉筆畫

相模圖に關する基礎的研究

玩具圖錄江都二色の編者

浮世繪斷片集芳年の一斜面

草雙紙年代記と裨史億說年代記、續浮世繪類考

石燕の芭蕉像

鳥山石燕の扇額

歌麿と母性愛

歌麿の口繪ある辰巳婦言

繪本挿繪より見たる歌麿

版畫藝術としての浮世繪

旭 正秀

島田 筑波

野口米次郎

藤懸 靜也

鳥居 玄人

木村 捨三

鷹見安二郎

檜崎 宗重

外山卯三郎

七戸 吉三

檜崎 宗重

石割松太郎

野口米次郎

井上 和雄

金井 重雄

坂本 喜次

木村 捨三

平塚 義角

近藤市太郎

木村 捨三

出井 祐治

檜崎 宗重

島田 筑波

檜崎 宗重

井上 和雄

木村 捨三

檜崎 宗重

禰氏 祐祥

禰氏 祐祥

四ノ四

同

四ノ五

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

上野公園清水堂の繪馬

歌川國景の再吟味

山本平七郎義信畫の淨瑠璃繪盡に就て

歌川豊廣の風景版畫について

繪畫史書の嚆矢三著と風俗畫の問題

日本切支丹繪畫の研究

東海道名所記の挿繪

浮世繪三題ばなし

文化年間の英山に就いて

末期浮世繪の雙壁葛飾北齋と歌川豊國

上方繪流光齋の一系に就いて

如流と宗之

改造

日本洋畫事始め

恩賜京都博物館講義集

佛菩薩の圖像に就て

本邦南畫の鑑賞に就て

京都美術青年會誌

圓山應舉

國華

襖畫林和靖圖解 男爵三井高公氏藏

傳范安仁筆鯉圖解 男爵團伊能氏藏

勝川春章の肉筆畫に就て 上、下

狩野探幽筆佐久間將監像解 小熊幸一郎藏

圓音筆不動明王圖解 小泉策太郎氏藏

立原杏所筆山莊養鶴圖解 伊藤平藏氏藏

雀離浮圖雙身佛に因む摹倣像の傳播 上下

長沼萬郷肖像畫追記

王石谷筆山口捕魚圖解 山本悌二郎氏藏

傳狩野元信筆樓閣山水圖解 岡崎國臣氏藏

玉林 晴朗

七戸 吉三

木村 捨三

外山卯三郎

檜崎 宗重

近藤市太郎

木村 捨三

井上 和雄

田中庄之輔

鈴木 仁一

石割松太郎

檜崎 宗重

西村 貞

小野 玄妙

内藤 湖南

藤懸 靜也

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

四ノ二

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

美術文獻目錄

笑隱贊山雲圖解	男爵團伊能氏藏	五三二	隨求尊位曼荼羅考	松本 榮一	五三九
渡邊華山筆墨竹圖解	小泉策太郎氏藏	同	宋畫風柳蟬蝶圖解	鈴木正夫氏藏	同
泰西風俗圖屏風解	侯爵細川護立氏藏	同	稚見大師像解	男爵團伊能氏藏	同
弘法大師畫像解	男爵團伊能氏藏	五三三	遮莫筆花鳥圖解	島村鷹衛氏藏	同
傳月臺筆白衣觀音圖解	男爵團伊能氏藏	同	藍瑛筆停琴玩月圖解	鈴木正夫氏藏	同
冷泉爲恭筆吉野山龍田川圖解	三尾邦三氏藏	同	半江筆蘭竹山水圖三幅對解	池戸宗三郎氏藏	同
鄒一桂筆海天初暉圖解	磯村豊太郎氏藏	同	田能村竹田と護國學派	上、中、米澤 嘉園	五四〇、五四一
小西家傳來光琳秋野圖屏風に就て		同	吳春筆雪中常盤圖解	男爵郷誠之助氏藏	五四〇
青木木米筆觀音圖解	池野藤兵衛氏藏	五三四	子庭筆古木竹石圖解	武藤金太氏藏	同
愛染明王圖解	目黒隆見氏藏	同	明兆筆山水圖解	原富太郎氏藏	同
唐岱筆萬松秋思圖解	磯村豊太郎氏藏	同	大雅筆西湖圖關帝祭圖解	田中一馬氏藏	同
椿椿山筆菊花圖解	林屋和作氏藏	同	董其昌山水帖解	大橋介二郎氏藏	五四一
職人繪に就て		同	文殊菩薩圖解	太刀川藤一氏藏	同
建武元の年記ある五髻文殊圖に就て		同	可翁筆寒山圖解	男爵郷誠之助氏藏	同
金剛寺日月山水圖屏風解		五三五	久隅守景筆四季耕作圖解	山川庄太郎氏藏	同
職人繪解	松木善右衛門氏藏	同	渡邊華山筆醉李白圖解	男爵郷誠之助氏藏	同
渡邊華山筆猛虎圖解	加藤六藏氏藏	同	史蹟と古美術		
蘆雪と宮嶋		同	鎌倉時代の似繪と其精神	栗野 秀穂	一五ノ一
稚兒文殊圖解	川口勇次郎氏藏	五三六	圓満院宸殿の風俗畫	木村 捷三	一五ノ三
吳叔明筆秋山蕭寺圖解	鈴木正夫氏藏	同	「醍醐花見圖屏風」を觀て	栗野 秀穂	一五ノ四
壽星圖解	鈴木正夫氏藏	同	禪林寺の三十六歌仙額に就て	同	一五ノ五
誌公變相考		同	史迹と美術		
宋畫早秋夜泊圖並題贊解	鈴木正夫氏藏	五三七	名古屋城上洛殿の探幽畫と知恩院障壁畫	土居 次義	五二、五四
天神緣起意參内圖解	武藤金太氏藏	同	中世繪畫の技法について	七一〇 下店 靜市	五二、五四
與謝蕪村筆柳陰歸路圖竹林茅屋圖解	横江萬次郎氏藏	同	等持院障壁畫と狩野興以	土居 次義	五六
長澤蘆雪筆菊花圖解	保田七兵衛氏藏	同	史 林		
箱根權現緣起繪卷に就て	藤懸 靜也	五三八	眞宗繪系圖雜考	向井 芳彦	二〇ノ一
阿彌陀三尊來迎圖解	橋本辰二郎氏藏	同	書畫骨董雜誌	古川 修	三一九
周文派筆四季山水圖屏風解	侯爵前田利爲氏藏	同	華山とその畫風の變遷		
青木木米筆山水圖解	中野忠太郎氏藏	同			
雲房度呂純陽圖解	武藤金太氏藏	同			

宋人畫冊を觀て	後藤朝太郎	三二八	極東第一の畫	福井利吉郎	一一ノ三
宗達及び光琳門葉の作品	今井 爽邦	三二九	古畫の鑑賞に就て	溝口禎次郎	一一ノ五
渡邊始興とその作品	竹内 梅松	同	華山先生と鄭所南	松林 桂月	同
歌麿のことども	同	三三〇	和光院の不動明王	木村 武山	一一ノ七
書 藝			白隱師弟の繪事	森大 狂	一一ノ九
小野道風畫像について	小原銀之助	五ノ一	畫僧風外	添田 達嶺	同
書 道			香積寺風外禪師	高橋 竹迷	同
隆能源氏繪卷に就いて	相澤 春洋	四ノ九	仙厓の繪について	安達 荒村	同
中央美術			龍泰寺佛乘禪師	高橋 竹迷	同
繪畫に現れたる鶴	金井 紫雲	一八	肥後に於ける雲谷派矢野吉重と其の一門	添田 達嶺	一一ノ一二
一蕙齋研究拾遺	久保田滿明	同	秋田派南蠻繪に就て	竹内 梅松	同
畫人寒葉齋を語る	濱館 貞吉	一九	東洋學報		
寒葉齋畫譜	同	同	玉蟲野子に見えたる山嶽描法の源流	小杉 一雄	二二ノ四
百濟河成に就いて	田中 一松	同	東洋美術		
岸駒と中島棕隱の事	久保田滿明	同	天球院障壁畫の筆者の問題 上	土居 次義	二一
圓山四條派と其技法	結城 素明	二一	三玄院舊藏の長谷川等伯の襖繪	同	二二
我國寫實畫系の發生と其歪曲	小林源太郎	同	住吉神社本地佛五大菩薩粉本に就て	水原 堯榮	同
田善筆濱町川岸圖の解説	田口 掬打	同	來迎藝術の一考察	藤田 寛雅	同
寒葉齋畫蹟漫錄	西村 南岳	二二	―特に圖像の綜合に就て―		
冷泉爲恭遭難の原因に就て	久保田滿明	二二、二六	日本國寶全集		
村山半牧	古川 修	二三	十二天像 西大寺藏		六四
餓鬼草紙と近代土佐派中の覺醒者	吉川 靈華	二四	法華曼荼羅圖 唐招提寺藏		同
摸本の披ひ方	同	同	雪山山水圖 三井合名會社藏		同
俳書に見えたる彭百川	相見 香雨	二七	北條早雲像 早雲寺藏		同
大和繪々卷の繪馬	棚田 曉山	二九	五百羅漢圖 萬福寺藏		同
塔 影			孔雀牡丹圖 圓満院藏		同
鶴畫談片	相見 香雨	一一ノ一	十六羅漢像 來迎寺藏		六五
素人の繪	齊藤 隆三	同	馬郎婦觀音像 侯爵前田利爲氏藏		同
畫僧棟隱の一遺作	平田 六郎	同	佛鬼軍繪卷 十念寺藏		同
畫譜について	尾上 柴舟	一一ノ二	山水圖 公府毛利元昭氏藏		同
畫人宮本武藏	添田 達嶺	同	武田信虎像 大泉寺藏		同

花卉圖屏風	妙心寺藏	六五	畫僧龍泰寺佛乘禪師	高橋 竹迷	四ノ二
五大尊像(降三世明王) 教王護國寺藏		六六	南畫小論二種	金原 省吾	四ノ三
扇面法華經	四天王寺藏	同	池大雅と謝蕪村 一、二	竹内 原風	四ノ三、五
毘沙門天像	上杉神社藏	同	兩點被に就ての考察 支那古名畫鑑賞五	原田 尾山	四ノ三
細川澄元像	侯爵前田利爲氏藏	同	文人畫雜考 一—三	伊勢專一郎	四ノ四—六
猿猴竹林圖屏風	相國寺藏	同	九霞堂漫筆	坂井 犀水	四ノ四
東照宮緣起	東照宮藏	同	南畫樣式私見 一、二	今泉 篤男	四ノ五、六
兩界曼荼羅圖	教王護國寺藏	六七	柳太夫指竹歌	相見 香雨	四ノ五
愛染明王像	金剛峯寺藏	同	書畫禪の黃檗宗と木庵禪師 一、二	高橋 竹迷	四ノ五、七
馬醫草紙	河杉ハツ氏藏	同	文人畫といふもの—竹田、山陽の畫境から—木崎 好尙	古川 北華	四ノ六
馬醫草紙殘缺	同	同	鄭板橋 一—五	森田龜之助	一〇六—
西湖圖	富山一清氏藏	同	帖木兒時代詩集の挿繪	根岸 巖	四ノ七
豐臣秀吉像	侯爵伊達宗彰氏藏	同	日根對山に就て	芹澤 閑	四ノ一、一、
枯木鳴鵲圖	長尾欽彌氏藏	同	歷代名畫記の價值並に其紕謬指摘	大口 理夫	四ノ一、一
五秘密像	武藤金太氏藏	六八	南北山水畫の一面觀	鎌倉芳太郎	四ノ九
不動明王像	光臺院藏	同	黃鼎山水六屏幅に就て	大川 暹一	一〇九、
釋迦十六善神像	南禪寺藏	同	沈石田に關する一考察 一、二	坂井 犀水	四ノ九
直幹中文繪詞	伯爵酒井忠正氏藏	同	德一と其寺々	森 銑三	三五—三八
丹霞燒佛圖	侯爵黑田長成氏藏	同	日本美術協會報告	相見 香雨	三五
夢想國師像	鹿王院藏	同	谷文晁傳の研究 六—九	中島 元英	同
十便十宜圖	榊谷晋三氏藏	同	曾我兵部景種	秋山 光夫	同
南畫鑑賞			三州日記	相見 香雨	三六
東洋の畫論 二六—二九			三州日記の後に	同	同
竹田翁の輪廓 三〇—三三			牧溪玉潤傳新史料	同	同
鶴畫禮讚			古畫希蹟研究 五	同	同
五星廿八宿神形圖卷に就て			松齋梅譜に就ての追記	同	同
畫題辭典稿本 九—二〇			洋人奏樂圖屏風に就いて	近藤市太郎	三七
范寬の皴法 支那古畫鑑賞三、四			奈良法眼鑑貞	蓮實 重康	三八
斗米庵若冲の畫			司馬江漢吉野紀行	同	同
新羅山人					

司馬江漢吉野紀行を紹介す

相見 香雨 三八

美術

八大山人に與へた石濤書簡に就て

永原 織治 一〇ノ一二

美術街

宗教繪卷雜考

下店 靜市 二ノ二

信貴山緣起の考察

同 同 二ノ五

經典繪解の繪卷

同 同 二ノ八

美術研究

法華堂根本曼荼羅

矢代 幸雄 三七

醍醐寺五重塔板繪 (圖版解說)

同 同 同

玉隱英瑠像 明月院藏 (同)

同 同 同

長信筆花下遊樂圖 原邦造氏藏 (同)

同 同 同

光琳筆維摩圖 保阪潤治氏藏 (同)

同 同 同

畫道要訣 牧心翁遺稿 (公刊)

同 同 同

足利義滿と宋元畫

脇本十九郎 三八

前田菊姫の畫像

入田 整三 同

男衾三郎繪詞

梅津 次郎 同

海僊・竹洞・春琴

同 同 同

梅逸筆四季山水圖 侯爵蜂須賀正氏氏舊藏 (圖版解說)

同 同 同

男衾三郎繪詞詞書 (公刊)

同 同 同

住吉鑑定控 一一三 (同)

同 同 同

中世に於ける南都繪所の研究 一一三

森本 義彰 三八、四〇

稚兒觀音緣起

渡邊 一 三九、四一

觀瀾亭の障壁畫

菅沼 貞三 同

所謂信方筆西洋風俗畫に就て

西村 貞 同

梅逸筆櫻圖 侯爵蜂須賀正氏氏舊藏 (圖版解說)

同 同 同

稚兒觀音緣起詞書 (公刊)

同 同 同

山樂繪考

田中 喜作 四〇

傳率翁筆六祖挾擔圖

渡邊 一 同

扇面古寫經 法隆寺藏 (圖版解說)

同 同 同

抱一筆東下り圖 侯爵蜂須賀正氏氏藏 (同)

同 同 同

美術文獻目錄

徽宗摹張萱搗練圖

矢代 幸雄 四一

普賢十羅刹女圖考

豐岡 益人 同

過去現在因果經斷簡 安田善次郎氏藏 (圖版解說)

同 同 同

佛應禪師像 雲巖寺藏 (同)

同 同 同

道安筆臨濟裁松圖 東京美術學校藏 (同)

同 同 同

大雅筆那智灘瀑圖 高田源四郎氏藏 (同)

同 同 同

石圃叢考

梅津 次郎 四二

星曼茶羅 法隆寺藏 (圖版解說)

同 同 同

狩野安信添狀留帳 (公刊)

同 同 同

狩野高信添狀代附外題控 (同)

同 同 同

牧溪畫誌

谷 信一 四三

中世に於ける支那畫の鑑賞の一節

同 同 同

俱舍曼荼羅 東大寺藏 (圖版解說)

同 同 同

楊月筆渡宋天神像 退藏院藏 (同)

同 同 同

豐彦筆觀月圖 大塚稔氏藏 (同)

同 同 同

雲門大師及清涼法眼禪師像 天龍寺藏 (同)

同 同 同

是香坊繪詞について

望月 信成 四四

金地院茶室の襖繪

菅沼 貞三 同

熊斐筆東鑑佳色圖 長谷川治郎兵衛氏藏 (圖版解說)

同 同 同

是香坊繪詞詞書 (公刊)

同 同 同

奈須永丹御添狀控 (同)

同 同 同

文學及び繪卷としての長谷雄雙紙考察

脇本十九郎 四五

款記ある宋元佛畫

渡邊 一 同

琉球歷代畫家譜 上、下 (研究資料)

比嘉 朝健 四四、四八

板繪神像 藥師寺藏 (圖版解說)

同 同 同

長谷雄雙紙詞書 (公刊)

同 同 同

狩野英信鑑定控 (同)

同 同 同

舶載支那畫の性質と價格

谷 信一 四六

中世に於ける支那畫の鑑賞の一節

同 同 同

古印譜に就いて

田中 喜作 同

小野雪見御幸繪詞

梅津 次郎 同

趙琦筆十六羅漢像 法華經寺藏 (圖版解說)

同 同 同

美術文獻目錄

閑林筆鸞圖 村井市平氏藏 (圖版解説)	四六	願愷之試論	堂谷 憲男	二ノ一一
和漢歷代畫師名印泥圖 (覆刊)	同	雪村小記	福井利吉郎	同
文晁筆公餘探勝圖に就いて	菅沼 貞三	實 雲		
平家納經 嚴島神社藏 (圖版解説)	同	田能村竹田	笹川 臨風	一二
傳隆信筆平重盛像 神護寺藏 (同)	同	原田本マリヤ十五玄義圖	濱田 青陵	一三
柴庵筆柳燕・竹鶴鶴圖 古森收藏氏藏 (同)	同	夏珪筆溪山清遠圖に就て	奥村伊九良	一四
近世障壁畫の源流	田中 喜作	平安時代の屏風繪	岩橋小彌太	同
釋迦如來像 神護寺藏 (圖版解説)	同	東寺國寶兩界曼荼羅	高崎 光哲	同
傳雪舟筆耕作圖 大橋新太郎氏藏 (同)	同	雪窓に就いて	島田修二郎	一五
細川昭元夫人像 龍安寺藏 (同)	同	醍醐寺國寶粉本孔雀明王像に就いて	佐和 隆研	同
竹洞筆花鳥圖 雜華院藏 (同)	同	みづゑ		
美之國		版畫としての「名公扇譜」	平塚 運一	三七C
物語繪卷の成立とその展開	下店 靜市	夢 殿		
浮世繪は狭斜の巷のみを寫したのではない	永見徳太郎	法隆寺蓮華圖屏風に就いて	望月 信成	一四
大津繪について	仲田勝之助	洋畫研究		
苦瓜和尚石濤年表	傳 抱 石	葛飾北齋の洋風版畫	外山卯三郎	二〇
名作屏風展覽會出陣屏風について	秋山 光夫	日本に於ける洋風風景畫の起源	同	二四
國寶展出品藤原時代の佛畫	大口 理夫	亞歐堂田善研究の資料	同	二五
ビタカ		歴史公論		
子島曼荼羅の研究 二	吉岡 龍瑛	繪畫の上に現はれた女性	笹川 臨風	四ノ四
帝室博物館藏普賢菩薩像について ―天台止觀の本尊として―	石井 亮薰	繪畫に現れたる妖怪變化	久保田滿明	四ノ八
佛 教		書 蹟		
禪宗と中世の繪畫	谷 信一			
佛教美術				
狩野山樂の帝鑑圖屏風	土居 次義	書 藝		
南北畫派論	青木 正兒	嵯峨天皇宸影に就いて	秋山 光夫	五ノ一
水畫畫四君子の由來	同	隆能源氏繪卷詞書について	飯島 春敬	同
太子勝鬘經御講讃圖	龜田 孜	歷代書家小傳	同	同
―尊智法眼の一資料―	同	本願寺三十六人家集の研究	田中 親美	五ノ二―九
		公任眞蹟「北山抄」に就て	飯島 春敬	五ノ二、四
		金剛般若經開題	野本 白雲	五ノ三

書道

廣川書跋抄譯
金蘭齋
趙子昂の書に就て
元永本古今集に就て
金剛場陀羅尼經
揚守敬平帖記圖字解

支那書道史

王長者墓志稿 寒食詩跋其他

和樣書道史正誤

蘭亭敘中の文字

昭仁寺碑に就て

行成卿と公任卿

御堂關白道長の假名

賈愛仁の造像銘に就て

龍門造像銘について

龍門の書法とその源流

和洋漢字に就ての一考察

源氏物語繪卷の詞書に就いて

藤原佐理の事ども

藤原佐理卿

佐理卿筆と傳ふる書に就て

重道史上の佐理

日本國寶全集

法華經 戸隱神社藏

後白河法皇勅報 公卿九條道秀氏藏

文筆眼心抄 山田長左衛門氏藏

北條時宗書狀 圓覺寺藏

水左記 侯爵前田利爲氏藏

和漢朗詠集 伯爵南部利英氏藏

千手千眼陀羅尼經殘卷 守屋孝藏氏藏

野本 白雲 五ノ三—五
石田直太郎 五ノ四
播磨 龍城 五ノ五
飯島 春敬 五ノ五—九
市島 春城 五ノ七
池田 古日 五ノ八、九

高田 竹山 四ノ一、三、五、六、七、八、一〇—三

西川 寧 四ノ二

尾上 柴舟 四ノ三

高田 忠周 四ノ四

中村 環樹 四ノ五

松下 太虛 四ノ六

神郡 晚秋 同

抱朴 生 四ノ七

中村 不折 四ノ八

西川 寧 同

相澤 春洋 同

尾上 柴舟 四ノ九

同 四ノ一

松下 太虛 同

相澤 春洋 同

神郡 晚秋 同

漆と工藝

唐招提寺鑑眞和上像は夾紵像なり

漆像餘錄 十 美江寺の乾漆佛

考古學 寶善提院址及一二の佛教

考古學雜誌

奈良朝に於ける塑と塼に就て 一、二

長谷寺の金銅版千佛多寶佛塔について 一、二

南山和尚祥勝塔と無縫塔形式

蓮華座に就いて

佛像の丈量に關する一考察

國華

佛像と莊嚴

飛田と極見 能面研究の三

五官王像、俱生神彫像解 小泉策太郎氏藏

黑鬚、天神、阿波男、三日月 能面研究の四 野上豊一郎

興福寺曼荼羅石 足立 康

聖觀音像解 小泉策太郎氏藏

史學雜誌

石川麻呂追福の佛像

史蹟と古美術

神護寺の佛像について

弘法大師板彫像其の他

圓珍傳燈大法師位記 圓城寺藏 六七
手鑑「見ぬ世の友」伯爵酒井忠克氏藏 六八
晚過西湖詩 妙智院藏 同

彫刻

安藤 更生 四〇八

廣瀬 直彦 四一四

柏倉 亮吉 六〇三

吉野 富雄 二五ノ三、四

福山 敏男 同

川勝政太郎 二五ノ三

野間 清六 二五ノ四

小林 剛 二五ノ一二

瀧 精一 五三〇

野上豊一郎 同

五三二

五三三

五三六

五三六

五三六

五三六

五三六

五三六

五三六

五三六

五三六

來迎院の三尊
史迹と美術

四天王寺新發見三尊佛

丹後日置の禪海寺

播磨日吉神社の研究

―祭神の座敷と懸佛―

石佛の沿革 完

八角院及藥園寺安置佛像の年代と傳來

善正寺の日秀尼像と秀次像

史蹟名勝天然紀念物

宮田不動明王石佛と石彫の隆盛期

金剛寺の本尊に就て

書 道

龍門に詣る記

大正大學學報 (創立第拾週年記念特輯號)

佛像造立の起源と大乘佛教

中央美術

鎌倉時代に於ける寫實主義

東洋美術

東大寺伎樂面に就て

日本國寶全集

如意輪觀音像 東大寺藏

技藝天像 秋篠寺藏

藥師如來像 勝持寺藏

藥師如來及脇侍像 瑠璃寺藏

阿彌陀如來像 喜光寺藏

男神像 須々神社藏

慈悲大師像 金剛輪寺藏

觀音菩薩像 石原俊明氏藏

千手觀音像 東大寺藏

藥師如來及兩脇侍像 靈山寺藏

增長天像 池田成彬氏藏

石崎 達二 一五ノ五

新谷 哉々 五〇

永濱 宇平 同

鎌谷木三三 五一

川勝政太郎 同

谷口 便隆 五三

重森 三玲 五五

川勝政太郎 五七

服部清五郎 一〇ノ一二

常盤 大定 四ノ八

望月 信享 同

中井宗太郎 二〇

金森 遼 二一

同 六四

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

二天王像 毘沙門堂藏

聖觀音像 鞍馬寺藏

愛染明王像 妙高寺藏

惟仙和尚像 安樂寺藏

阿闍如來像 地藏院藏

釋迦如來像 地藏院藏

阿彌陀如來及兩脇侍像 四天王寺藏

不動明王像 神童寺藏

多聞天像 橋本關一氏藏

金剛力士像 勝持寺藏

十一面觀音像 觀音堂藏

彌勒佛像 當麻寺藏

如意輪觀音像 室生寺藏

十一面觀音像 光明寺藏

藥師如來及兩脇侍像 影向寺藏

不動明王像 金剛峯寺藏

八大童子像 同

狛犬 高寶布神社藏

寶生如來像 西大寺藏

阿彌陀如來像、釋迦如來像、阿闍如來像 西大寺藏

地藏菩薩像 法隆寺藏

藥師如來像 禪林寺藏

淨土曼荼羅刻出籠 小野徳市氏藏

阿彌陀如來及兩脇侍像 光臺院藏

阿彌陀如來像 成願寺藏

釋迦涅槃像 世尊院藏

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

六五

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

六六

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一〇ノ四

一〇ノ八

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

三七

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

仲津姫像 藥師寺藏 (圖版解說)

三九

十一面觀音像 觀福寺藏 (同)

四〇

鳳凰堂雲中供養佛の研究 上、下

四二、四三

阿彌陀如來像 平等院藏 (圖版解說)

四三

十一面觀音像 松本寺藏 (同)

四四

不動明王像 正智院藏 (同)

四六

日蓮上人像 本門寺藏 (同)

四七

定朝論の序としての康尙傳

四八

―歷世木佛研究の一節として―

同

上杉重房像 明月院藏 (圖版解說)

同

ビタカ

バーミヤン關係文獻一、二

山本智教譯

三ノ四、五

佛教學の諸問題

バルハット彫刻に於ける本生寓話について

千湯 龍祥

同

文化

渤海の佛像

原田 淑人

二ノ一一

寶雲

「西遊記」圖様を彫刻せる畫像石

鳥居 龍藏

一一

彫刻史に於ける天平的なもの的一面と

運實 重康

同

―特に十大弟子及天龍八部衆を中心として―

野間 清六

一五

狂言面の本質とその價值

同

同

大和志

續々古樂面銘文拔書

金森 遼

二ノ一

眼に映りたる奈良諸佛

高田 十郎

二ノ三

大和高原の古佛像と古寫經

同

二ノ一〇

夢殿

法隆寺金堂佛像の銘文に就いて

濱田 耕作

一三

法隆寺の金石文に關する二三の問題

福山 敏男

同

法隆寺金堂坐藥師、釋迦、彌陀三尊光背銘文考

會田 範治

同

法隆寺金堂四天王の銘文に就いて

佐藤 虎雄

同

法隆寺金堂所在銘文私攷

小酒井儀三

一三

法隆寺金堂四天王像の銘文に關する疑

中郷 敏夫

一四

歷史教育

契丹畫像石の圖様に就いて

鳥居 龍藏

一〇ノ四

歷史公論

日本の佛教彫刻に就いて

濱田 青陵

四ノ二

日本佛教彫刻史概説

田邊 孝次

同

佛教概説

柴田 常恵

同

我國に於ける佛教造像の變遷に就いて

石田 茂作

同

鎌倉時代を中心としての鑄佛像

香取 秀眞

同

地方信仰と佛像

魚澄抱五郎

同

郷土研究から見た佛像

柴田 常恵

同

佛像の彫刻法に就いて

野間 清六

同

佛像の觀方

高橋 介夫

同

建築・庭園

建築雜誌

江戸幕府大工頭木原氏に就て

田邊 泰

五九六

桂離宮の建築に就て

川上 邦基

五九九

「中右記」を基線としての法隆寺研究

同

六〇七

圓覺寺建築論

同

同

建築世界

岡崎と御油の民家

木村 義雄

二九ノ三

徳川中期に於ける江戸屋敷地

角田 増造

二九ノ五

江戸時代の陸上交通と關所特に新居關の建築に就いて

木村 美雄

二九ノ七、

會津の古建築

田邊 泰

二九ノ八、

卯建寸考

三田 克彦

二九ノ一〇

考古學

武藏國分寺の伽藍配置に就て 一、二

太田 靜六

二九ノ一一
一二

東大寺東塔檣礎の發見

明山 大華

六ノ三

寶菩提院舊趾及び一二の佛像

柏倉 亮吉

同

考古學雜誌

爲因庵文永銘寶篋印塔と高山寺式形式

川勝政太郎

二五ノ一

宇治浮島十三重石塔銘など(雜錄)

高田 十郎

二五ノ六

奈良時代に於ける興福寺の占地

足立 康

二五ノ七

赤崎塔

川勝政太郎

同

上杉憲方の逆修塔

赤星 直忠

二五ノ

大和興山の寶篋印塔について(雜錄)

佐々木利三

同

國華

黃檗僧木菴の庭園に就いて

外山 英策

五三二

建築美に就て 上、下

伊東 忠太

五三四、
五三六

徳川幕府政治と皇室關係の庭園に就て

外山 英策

五三七

桂宮と桂離宮の庭園に就て

同

五三八―五
四一

史迹と美術

法勝寺八角九重塔雜攷

中郷 敏夫

五一

鎌倉時代に於ける平都婆の石造再興

川勝政太郎

五三

東福寺一條家石塔群

同

五五

播磨に於ける第四類B種心礎に就て 上、中、下

島田 清

五五、五七

四天王寺建立年代駁攷

武藤 和雄

五六

常住寺一名野寺址攷

川井銀之助

五八

朝鮮古建築雜信第一信

杉山 信三

五八、六一

慶雲山清平寺 上、中

同

五九

足立博士に「藤原京」を聴く

川井銀之助

同

再び常住寺一名野寺に就て

足立 康

六〇

當麻寺治水全燒説に就いて

福山 敏夫

同

室生寺の建立

同

史蹟名勝天然紀念物

長谷寺草創雜攷

中郷 敏夫

一〇ノ二

松本城を見る

渡邊 多仲

一〇ノ三

城塞文化史上の大倭觀河村城

橋本徳太郎

一〇ノ三、
五、六、七

藤原宮の位置に就いて

足立 康

一〇ノ四

眞淵の藤原宮位置の説

同

一〇ノ七

滋賀縣史蹟名勝指定庭園に於ける
作庭年代其の他の研討 一、二

重森 三玲

一〇ノ八、九

眞佛報恩塔の調査概報

服部清五郎

一〇ノ八

往生極樂院の建築に就て

川上 邦基

一〇八、一

東大寺の大鐘と鐘樓

足立 康

一〇ノ一一

中央美術

琉球圓覺寺の建築

田邊 泰

二〇

塔影

日本の庭

龍居松之助

一一ノ三

支那と庭園

村松 梢風

同

日本庭園概説

高橋 箒菴

同

造園と繪畫

正木 直彦

同

東方學報

房山雲居寺塔記

長廣 敏雄

京都第五冊
副刊

房山雲居寺石塔記

水野 清一

同

東洋美術

興福寺の建立に關する問題

福山 敏男

二一

四天王寺の建立年代に關する研究

同

同

天竺様の遺構と重源上人

足立 康

二二

四天王寺五重塔檣礎下の遺構と須彌山説

出口 常順

同

佛敎學の諸問題

スマトラの佛敎遺蹟

宇野 圓空

同

寶雲

安樂寺八角四重塔

東伏見邦英

一一

城郭の窓と狭間

日本建築史の諸問題

可無流知 一一四

奈良朝に於ける石山寺の造營 四

造營用木工具の史的展望

飛鳥時代に於ける造山の源流に就いて

木材表面工作の史的手法

小縣游記

池の石組

法然上人行狀繪圖中の住宅

大和志

奈良に於ける七尺一間と平城京内の宅

地割並びに小路の廣さに就いて

塔の高さを測る話

藤原宮の左右兩京

奈良の町割七尺一間定め之事

再び奈良の七尺一間に就て

奈良朝の佐保山陵造營

平城京の所謂外京の區域について

夢殿

法隆寺東院の香木堂に就いて

意匠上より見たる法隆寺伽藍建築

法隆寺金堂の天蓋、須彌座、土壇、裳

層基壇に就て

法隆寺大講堂の平面に就いて

歴史公論

世界建築界に於ける日本の社寺

日本文化史を背景とする社寺建築觀

神佛習合時代の遺蹟

日本社寺建築の知識

社寺の建築美

鳥羽 正雄 一一

岸田日出刀 同

東伏見邦英 一二一五

福山 敏男 一二

藤島亥治郎 一三

小杉 一雄 同

武田 五一 一四

天沼 俊一 同

龍居松之助 同

前田 松韻 一五

田村 吉永 二〇二

足立 康 同

同 二〇三

喜田 貞吉 二〇四

田村 吉永 二〇五

大井重二郎 二〇七

田村 吉永 二〇八

福山 敏男 一三

岸田日出刀 一四

福山 敏男 同

足立 康 同

上田 三平 同

伊藤 忠太 四〇六

藤島亥治郎 同

柴田 常恵 同

田邊 泰 同

岸田日出刀 同

社寺建築の二三

神社の門前より奥殿まで

寺院の門前より奥殿まで

都市美と社寺の林苑

日本社寺名建築解題

國寶建造物修理餘談

日光廟の建築

我國寺院建築上に於ける塔

鳥居の種類

法隆寺論争の経緯

神社國寶建造物府縣別一覽表

寺院國寶建造物府縣別一覽表

歴史地理

榮山寺八角堂の建立年代に關する一推測

福山 敏男 六五ノ五

工藝

アトリエ

マザラン公爵家の蒔繪櫥

漆と工藝

漆畫の復興

漆畫雜話

桃山屏風と高臺寺蒔繪

蒔繪の沿革

螺鈿名鞍記

恩賜京都博物館講演集

蒔繪發達の考察

京都美術青年會誌

茶の湯釜概説

淨雪筆寫釜の圖卷

赤堀又次郎 四ノ六

小倉 強 同

稻村 垣元 同

本郷 高德 同

本村 貞吉 同

服部 勝吉 同

小林福太郎 同

關根 龍雄 同

森 貞成 同

櫻木 史郎 同

雄山閣編輯部 同

同 同

山田智三郎 一二ノ四

吉野 富雄 四〇六

同 四〇九

同 四一一

同 四一五

同 四一六

迎田 秋悦 一二

大西 淨長 一〇

同 同

釜師由緒
附名物釜所持の名寄

一〇

名物釜

同

茶の湯釜名目考

同

釜を作る

同

工 藝

琉球の染色 一、二

上村 六郎
四九、五四

染色論議

芹澤、柳、水谷

四九

樂浪彩伎略解

柳 宗悦

五七

考 古 學

近江龍王寺鐘

坪井 良平

六ノ一

大和國新藥師寺鐘

同

六ノ四

紀伊泉福寺鐘

同

六ノ五

多鈕細文鏡の諸型式

森本 六爾

六ノ七

經河赤峯出土の一古鏡について

水野 清一

六ノ八

霞岐出土の一古鏡

梅原 末治

同

考 古 學 雜 誌

尾道淨土寺の鎗金經箱に就いて

吉野 富雄

二五ノ九

國 華

仁清作色繪瓔珞文様花瓶解 仁和寺藏

五三〇

扇面散文様蒔繪手箱解 男爵園伊能氏藏

五三一

野村仁清作色繪雄形香爐解 山川庄太郎氏藏

五三七

緇阿彌陀三尊圖解 西念寺藏

五四〇

史 迹 と 美 術

常陸が生んだ鑄物師 二

服部清五郎

五〇

古鏡研究の栗 一六一一九

佐藤 虎雄

五一、五五、
五八、六〇

發見された古田織部の文獻

中野 楚溪

五九

丹波船城村御面塚發見古鏡並懸佛

太田 陸郎

六一

史 林

滿洲國熱河建平縣發見の古銀銅面

島田 貞彦

二〇ノ一、
二〇ノ二、

支那の青銅器時代に就いて 中、下

梅原 末治

四

思 想

根附

樂浪の彩繪漆篋

長島 喜三

一五二

漆器

濱田 青陵

一五五

書 畫 骨 董 雜 誌

名陶工長次郎 七一六

長島 喜三

同

古陶器觀の傾向

平木 清光

三九一、三三三、
三四一、三六

支那工藝の重厚性に就いて

鹽田 力藏

三二〇

陶祖春慶に就いて

後藤朝太郎

三二一

彫金工の順位 一一六

吉備 外史

同

大日本窯業協會雜誌

桑原 雙蛙

三三一、三三五、
三七一、三九

陶 說

太田 能壽

五一一

中 央 美 術

支那古銅器を語る

加賀 幸三

二五

茶 わ ん

宇治の獻上茶壺

前田幾千代

四八

小杉燒の研究概要

郷倉 千靱

同

男山燒

石村賢次郎

同

萩燒を見て

小森 忍

同

我工藝史に於ける陶磁の地位

石割松太郎

同

松ヶ谷燒(肥前小城)

吉田 堯文

同

松繪の弓野燒

許斐友次郎

同

肥前廢窯に關する一疑問

金原 京一

同

常滑燒陶工傳

寺内 信一

同

筑前の宗七燒

柴山 不言

同

瑞芝燒

許斐友次郎

四九

梁瀬燒と五郎燒

石村賢次郎

同

瀬戸助の研究

太田 和堂

同

曾我部松亭

同

同

丸山燒私見	杉並 散人	四九	朝鮮古陶磁解説「陶片」の抜き書 四、五	故原文治郎	五五、五六
正院燒小考	酒井 達郎	同	小杉燒の影響と其模倣	郷倉 千靱	五五
唐津燒 五	金原 京一	同	伊郭陶雜記	吉備 外史	同
白頭冢的譚	山澤散木庵	同	茶碗の變遷	木下 桂風	同
藤四郎の茶入	中尾 萬三	五〇	筑後の陶器に就て	淺野 陽吉	五六
童女の酒波み	山村 耕花	同	井田已齋(吉六)を語る	山崎 徳吉	同
郡中十錦に就て	淺井 正	同	高麗燒	前田 青郎	同
土肥二三	森 銃三	同	山口縣の陶磁に就て	小川 五郎	同
筑前の高取燒	許斐友次郎	同	茶入考	蟻川 第一	同
遠州と薩摩茶入	前田幾千代	同	白岩瀬戸山の新資料	渡邊 爲吉	同
古今里の貿易	金原 京一	同	砂文字奇譚	杉浦 冷石	同
越中の陶窯と燒物 一、二	山本 久作	四九、五〇	丹波と信樂燒	大村 正夫	同
砥部燒に就て	酒井八四郎	五〇	支那の古陶磁	中尾 萬三	五七
甚兵衛燒	石村賢次郎	五一	宋代の陶磁	尾崎 洵盛	同
出雲陶窯の倉崎權兵衛其他	桑原羊次郎	同	汝窯を中心に	故原文治郎	同
小杉燒事考 一—四	郷倉 千靱	五〇—五二	秀吉と宗湛	小野賢一郎	同
宋の陶磁について	黒崎 十郎	五一	茶碗考	栗田有聲庵	同
珠鹿抄 九、十	樂之軒生	五一、五三	直川燒	石村賢次郎	同
七寶供養	杉浦 冷石	五一	古織部の角鉢	下島 空谷	同
茶器をつくる	本野 白陶	五二	加賀陶磁考	松本佐太郎	同
權兵衛勤功書 一—三	小野賢一郎	五二—五四	小杉燒盛衰記 上	郷倉 千靱	同
布志名燒	桑原羊次郎	五二	千倉石	鹽田 力藏	五八
薩摩とところどころ	前田幾千代	同	相馬燒雜考	前田幾千代	同
「陶片」の抜き書一、二	故原文治郎	五一、五二	朝鮮古陶磁解説三「陶片」の抜き書六	ベルナムド ラツカム述 故原文治郎 譯	同
再び肥前小城松ヶ谷燒に就て	馬渡八太郎	五二	塔 影	吉田 堯文	一一ノ七
高取燒の趣味と研究 一—三	奥村次八郎	五三—五五	元祿頃の袖文様	同	同
盃の家	寺田 半月	五三	陶 磁	宮本 謙吾	七ノ一
陳元賛と元賛燒	黒崎 十郎	同	古九谷史實の研究 新資料を基礎として	奥平 武彦	七ノ二
支那古陶磁解説「陶片」の抜き書三	故原文治郎	同	司號を刻める三島	聽鐘窟主人	同
初代乾山と伊八乾山	山崎 徳吉	五五	三島雜筆	同	同
陶工から見た青磁	陶 五 呂	同			

務安出土三島考	山田萬吉郎	七ノ二	銀鏡 附水晶玉四顆 興福寺藏	六六
唐本草の定州白磁とあるを變更したる事に就ての考察	中尾 萬三	七ノ三	佛具 室生寺藏	同
定窯雜考	小山富士夫	同	銅鏡 三佛寺藏	六七
江戸の乾山窯に就て	内藤 堯寶	七ノ四	時雨鞍 侯爵細川護立氏藏	同
魁翠園燒	松平 義明	同	磐 北武樹氏藏	六八
三浦乾也	石井 柏亭	同	蒔繪調度 高臺寺藏	同
深川時代の乾也	石渡 敏一	同	日本美術協會報告	
江戸萬古の窯跡	川喜田久太夫	同	笹工藝術と破笠 下一、二	相見 香雨 三六、三七
井田吉六	鈴木 善夫	同	美術街	下店 靜市 一〇、一二
武藏諸窯	陳 萬里	七ノ五	美術研究	
第二回龍泉青瓷古窯調査報告	松村 雄藏	同	近時所見の蟠螭禽獸文鐸に就いて	梅原 末治 四四
龍泉青瓷の銘款	陳 萬里	同	古九谷色繪花鳥文大平鉢 鹽原又策氏藏 (圖版解說)	同
龍泉訪古記	松村 雄藏	同	能作生塔 長福寺藏 (圖版解說)	田中 親美 四六
西湖陶話	上田恭輔氏	同	平家納經の技法に就いて	白畑 よし 四七
茶碗隨筆	外四十七氏	七ノ六	勸修寺繡帳の技法に就いて	四八
東洋美術			大和志	
日本磁器の創業	鹽田 力藏	二一	橘寺境内發見の古窯址について	島本 一 二ノ二
法隆寺金堂壁畫と同時代の繡帳について	加藤 泰	同	久米寺附近の窯	森田常治郎 二ノ四
漢時代の着彩人物畫 (樂浪出土の彩篋について)	下店 靜市	同	大和の古鐘	高田 十郎 二ノ七、九
古製姿の研究	上村 六郎	二二	夢 殿	
な の か			天壽國曼荼羅銘文考	會田 範治 一三
足利八雲神社の神鏡	丸山 瓦全	一二	玉蟲厨子に見えたる文様の源流 ——分立流雲文に就て——	小杉 一雄 一四
護國寺觀音堂の壇鏡	香取 秀眞	同	漆と工藝	
經塚出土の鐵磬	都 巽生	同	支那上代の構成文様	渡邊 素舟 四一〇
日本國寶全集			恩賜京都博物館講演集	
石燈籠 榮山寺藏		六四	繪畫に現れたる女子の服飾	猪熊 淺磨 一二
飛青磁花瓶 侯爵黒田長成氏藏		同		
天蓋 平等院藏		六五		
金襴手花鳥文様鉢 末次喬氏藏		同		

硯綜考	比木 喬	五八
武州紙類末	水谷 良一	五九
古代紙に付て	宮田 三郎	同
紙漉と紙座	遠藤 元男	同
武藏紙の誕生	山口 泉	同
化政天保度 武州紙訴訟文書に於ける	水谷 良一	同
小川の紙と産地の今昔	横川 禎三	同
徳川時代 紙文獻解題に於ける	比木 喬	同
史迹と美術	今井 啓一	五五、五八
神像の風俗的考察 六、終	根岸 嚴	三二七
書畫骨董雜誌	後藤朝太郎	四ノ一一、一二
江戸時代の特殊藝術	棚田 曉山	二五
支那の文房具を訪ねて	相澤 春洋	五五
中央美術	棚田 曉山	一一ノ九
猿投神社の大鑑	大澤 忍	二〇
茶わん	松村 武雄	一三
硯の話	末永 雅雄	二ノ三
美之國	鈴木 一	四ノ一一
御嶽の鑑と大之島の鑑		
佛教美術		
紙の研究に關する一つの提案		
寶 雲		
上代文化と櫛		
大和志		
奈良時代の武器と武裝		
歴史公論		
圀に就いて		

其 他 (考古學、金石、歴史關係)

考古學

彩色寶篋印石塔	藤澤 一夫	六ノ一
南鮮小鹿島發見の多鈕細線文鏡其他	榎本 龜生	六ノ三
伊豫奈良原神社經塚	鶴久森經峯	六ノ七
醍醐菩提寺寶篋印塔と其裝飾手法	川勝政太郎	同
銅釧、銅鐙と銅鐸との關係について	中山平次郎	六ノ九
考古學雜誌		
伊豫奈良原神社境内經塚	玉田榮二郎	二五ノ一
小豆島の銅鐸	寺田 貞次	二五ノ三
佐賀縣久保泉村西原裝飾古墳調査概報	七田 忠志	二五ノ四
播州極樂寺瓦經塚並に遺物に就いての考察	鎌谷木三次	同
横濱市磯子區室ノ木古墳調査記	石野 瑛	二五ノ六
信濃國小縣郡武石村金石文一、二	小山 眞夫	二五ノ六、七、四
但馬樂音寺一佛一字經瓦	太田 隆郎	二五ノ六
長門國三隅村の經塚遺物	山本 博	二五ノ六、一七
大和島ノ庄石舞臺古墳の第二回調査に就いて	濱田 耕作	二五ノ八
西都原發掘の一輪船 一、二	後藤 守一	二五ノ八、九
鎌倉小學校庭發掘の古錢調査報告	入田 整三	二五ノ九
筑前鞍手郡都市八幡の經筒	田中 幸夫	二五ノ九
附一筑前宗像郡發見の經瓦	相川 龍雄	二五ノ一〇
上野國金石文	服部清五郎	二五ノ一〇
源義助板碑否定論者に應ふ 一、二	大場 磐雄	二五ノ一二
赤城山神蹟考 一、二	内藤 政恒	二五ノ一二
磐城國五箇村借宿の遺蹟物に就いて	中郷 敏夫	二五ノ一二
西白河郡西大寺の占地		

史學雜誌

豊浦寺の創立に關する研究

福山 敏男 四六ノ一二

史迹と美術

南滋賀出土方形瓦の文様について

佐竹 純耳 五一

尼崎市如來院嘉曆供養碑

太田 隆郎 五四

史蹟名勝天然紀念物

大阪四天王寺銘瓦の一、二に就いて

大脇 正一 一〇ノ二

大野板碑大觀

白金 修文 一〇ノ六

伊豫奈良原神社境内經塚調査報告
上中下

鶴久森經峰 七、九

史 林

伊勢國の經塚

佐藤 虎雄 二〇ノ一

東方學報

石經山雲居寺と石刻大藏經

塚本 善隆 京都第五冊
副刊

房山雲居寺石浮屠記銘考

小川 茂樹 同

房山雲居寺碑目

同 同

房山雲居寺碑文選錄

同 同

西域雲居禪林志附圖
西域寺道程圖
石經山洞窟圖

解說 森 鹿三 同

法源寺考

中田源次郎 東京第五冊
續篇

東洋美術

法園寺本章體内より發見の經卷等に就て

北川 智彙 二一

正倉院の犀角

大澤 忍 同

ドルメン

銅鐸についての二三

後藤 守一 六

日本民族

上代古墳の研究について

梅原 末治

朝鮮に於ける考古學的調査研究と日本
考古學

濱田 耕作

日本考古學と支那六朝時代の遺物

原田 淑人

ピタカ

本生經文學參考資料
特に圖像と其の典據に就て
佛教學の諸問題

小野 玄妙 三ノ四

五台山と文殊菩薩

神林 隆淨

我國發見の塼佛に就いて

石田 茂作

文 化

東北地方に於ける古瓦の特色に就いて

内藤 政恒 二ノ三

寶 雲

四天王寺出土の飛鳥期瓦に就て

出口 常順 一二

大和志

不退寺に關する資料

田村 吉永 二ノ一

見落され易き吉野山の銘文

高田 十郎 二ノ四

最古銘のいろいろ

同 二ノ五

中宮寺中興信如尼開基の正法寺に就て

田村 吉永 二ノ六

飛鳥川とその流域

島本 一 同

當麻寺講堂棟木其他の銘文

田村 吉永 二ノ九

再び奈良朝に於ける寫經所に就いて

福山 敏男 同

寶篋印塔の起源

三輪善之助 同

其後知得たる大和の古鐘

高田 十郎 二ノ一〇

飛鳥奈良の佛教

橋本 凝胤 同

大和に於ける鐵板出土遺跡

島本 一 二ノ一一

新堂寺の合葬陶棺

末永 雅雄 同

夢 殿

日本紀に見ゆる法隆寺

喜田 貞吉 一三

法王帝説上に顯れたる法隆寺

會田 範治 同

法隆寺金石文集

高田 十郎 同

瑜祇塔私考

橋本 凝胤 一四

法隆寺と播磨鵲莊に就いて

魚澄惣五郎 同

歴史教育

細文地丁字鏡放釋

近藤 英雄 六

歴史公論

五銖錢私考 下

中村 不折 四ノ二

單行圖書文獻

總說・綜錄

編著者 書名

相澤 善三 鎌倉社寺めぐり

天沼 俊一 四天王寺圖錄

伊藤 一郎 竹軒藏品展觀圖錄

恩賜京都博物館 神護寺名寶展圖錄

同 妙心寺名寶圖錄

同 恩賜京都博物館講演集 第十二號

黒板 勝美 國寶建造物寶物目錄

同 (追加)

史學會 第三十六回史學會大會

澁川 敬應 佛教美術と合掌の理解

關野 貞 遼金時代の建築と其佛像 (東方文化學院東京研究所研究報告)

竹島 卓一 華頂聚寶

知恩院 Handbook of Japanese Art

津田 敬武 正倉院御物圖錄 八

帝室博物館 當麻寺大鏡

東京美術學校 觀世音寺大鏡

同 雲州公御藏帳

戸田 彌七 四天王寺と美術 (大阪郷土史叢書)

新納忠之介 佛像と鏡鑑

發行所

鎌倉 鎌倉同人會

大阪 四天王寺

大阪 竹軒藏品圖錄刊行會

京都 芸艸堂

同 小林寫真製版所

同 恩賜京都博物館

岩波書店

同

史學會

京都西本願寺

佛青本部

東方文化學院

東京研究所

京都 知恩院

三省堂

帝室博物館

大塚巧藝社

同 大阪式立庵文庫

大阪 湯川弘文館

美術文獻目錄

日本美術資料刊行會

日本美術史資料

飛鳥時代、正倉院、奈良時代前後期
平安時代前期、平安時代後期上

奈良 飛鳥園

福田 無染

鑑識上より見たる
日本佛教美術の研究

森江書店

正木 直彦

十三松堂觀摩錄

正木直彦

文部省

日本國寶全集 自六十四輯
至六十八輯

日本國寶全集刊行會

文部省宗教局

國寶略説 昭和九年度

文部省宗教局

矢代 幸雄

世界に於ける日 (第五十四回)
本美術の位置 (啓明會講演集)

啓明會

繪畫

淡川 庚一

僧仙厓の繪畫 近世の禪畫を中心
にして

大阪 高尾彦四郎

逸木 盛照

冷泉爲恭 爲恭と願悔の生涯

中外出版株式會社

井上 功

金刀比羅宮應舉畫集

香川金刀比羅宮
社務所

奧田 慈應

扇面古寫經

大阪 四天王寺

尾崎 久彌

三つの繪卷

名古屋 觀音瞻仰會

恩賜京都博物館

肉筆浮世繪聚

京都 芸艸堂

同

光悅遺芳

京都 便利堂

上村 益郎

古今浮世繪撰集

古今浮世繪撰集
刊行會

河井荃廬等

支那南畫大成 第一卷

興文社

同

支那南畫大成 第二卷

帝國地方行政學會

木崎 好尙

田能村竹田全集 第二竹田詩詞全集

京都 藤井佐兵衛

吉祥 眞雄

曼荼羅圖説

田能村竹田先生
百年祭協賛會

黒川 健士

竹田先生名畫譜

一心社

小泉 準一

浮世繪大觀

小杉 放庵解
公田連太郎譯

全譯芥子園畫傳

アトリエ社

第一冊 總說 第二冊 樹譜
第三冊 山石譜 第四冊 人物屋宇譜
第五冊 梅譜 第六冊 竹譜
第七冊 草蟲花卉圖 上
第八冊 草蟲花卉圖 下
第十一冊 草蟲花卉圖 上

古大津繪集

五月庵寫眞製版所

五月庵
審美書院雪中庵風雪 近江八景
東山水墨畫集 五—八
書畫の蒐集と鑑定

審美書院

聚樂社

牧溪玉潤名物瀟湘八景の傳來と考察

聚樂社

添田 達嶺

日本畫道 (東洋藝術)

好日書院

高木 文

加能畫人集成

健文社

鷹田 其石

安山桃山時代の繪畫 (岩波講座)

金澤金澤文化協會

玉井 敬泉

畫本蟲撰

岩波書店

田中 豐藏

名作屏風繪畫展覽會圖錄
(帝國博物館圖錄第四期第五輯)

巧藝社

巧藝社

中外出版株式會社

京都便利堂

帝室博物館

國寶法然上人行狀圖

京都政經書院

藤堂 祐範

日本佛教繪畫史 飛鳥編奈良朝
前期篇

東京美術工藝社

江藤 澁英

浮世繪名畫集

美術懇話會

外狩素心庵

報知新聞社

朝日書房

中山 幸夫

國寶重要繪畫展覽會圖錄

大岡山書店

美術研究所

提要源氏物語繪卷

三笠書房

報知新聞社

古版小說挿畫史

岩波書店

物集 高見

芥子園畫傳 山水編

同

水谷 弓彦

室町時代の繪畫 (岩波講座)

同

森田 但山

同

同

脇本十九郎

同

同

書 蹟

縣 治郎

賀歌五首

尙古會

伊木 壽一

日本書道の變遷 (岩波講座)

岩波書店

育德財團

惠慶集 (尊經閣叢刊)

育德財團

同

三寶繪 (同)

同

飯島 茂

硯墨新語

雄山閣

奧山 錦洞

日本書道史

啓文社

尾上 八郎

和樣書道史

平凡社

恩賜京都博物館

豫樂院遺墨

京都小林寫眞製版所

かな名蹟全集

かな名蹟全集

武田墨彩堂

かな名蹟全集

第一 藤原佐理筆 筋切三
第二 藤原行成筆 和漢朗詠集一
第三 藤原行成筆 桂本萬葉集一
第四 藤原行成筆 寸松庵色紙集
第五 藤原行成筆 關本萬葉集
第六 藤原行成筆 金澤本萬葉集

河井 荃廬

支那名家墨寶 第二冊

晚翠軒

西川 吉陽

藤原行成書 十五夜帖 複製

京都鳩居堂

鳩居 堂

假名書道概說

兵庫一樂書道院

桑田 明

假名名跡集成
第一傳藤原俊成筆昭和切

興文社

興文社

名碑帖選

同

同

第三 顏真卿全集 第二
第六 北魏集
第八 趙子昂集
第九 虞世南全集
第十 唐太宗全集

同

後藤朝太郎

俳人眞蹟全集 九天明時代下

輪墨同好會

志田 素琴

五體法書

平凡社

七條 愷

篆隸文體

西東書房

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

書畫協會

長谷寺緣起文 複製

大日本寫經會

寫經軌範 國寶因果經

武田 基一

傳藤原公任筆藍紙萬葉集

中央書道協會

展大古法帖 十一蘇使君之墓誌銘上

中村丙午郎

梅道人墨竹譜草書

同

詩卷尺牘 董其昌書 複製

同

詩卷 文三橋草書 複製

同

草書詩卷 王鐸書

中村 不折

法帖書論集 九漢碑之研究 附蔡邕考

寧樂書道會

昭和新選 碑法帖大觀 附蘭亭二種

同

興福寺斷碑 附蘭亭二種

同

漢蕩陰會張遷碑 附枯樹賦

同

孟法師碑 附枯樹賦

同

王右軍草書帖

同

周宣王石鼓文

同

大唐三藏聖教序

原田 悟郎

行成卿筆本能寺切

同

和漢抄

同

弘法大師真蹟全集

同

三 金剛般若經開題

松岡 潤吉

五 三十帖策子 第二卷

三浦 良吉

一三 即身成佛品

吉岡 貞雄

弘法大師筆 飛白 複製

吉岡 貞雄

黃蘗山聯額集

吉岡 貞雄

赤城和漢名蹟叢書

吉岡 貞雄

歐陽詞 九成宮醴泉銘上

吉岡 貞雄

書學講話

石崎 達二

書學講話

北村 直躬

書學講話

逸見 梅榮

書學講話

石崎 達二

書學講話

書畫協會

大日本寫經會

武田 墨彩堂

岡崎 中央書道協會

岡崎 中央書道協會

孔固亭真蹟

同

法書刊行會

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

藝苑巡禮社

寶城坊の藥師三尊

帝室博物館

日本古樂面

同

日本古樂面目錄

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

藝苑巡禮社

聚樂社

帝室博物館

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

彫刻

工藝

建築及庭園

エール大學會	日本文化圖録	エール大學會	日本古文化研究所	近畿地方古墳墓の調査	日本古文化研究所
大阪府	大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 六 天野行宮(金剛寺古紀)	大阪府	野守健 榎本龜次郎 神田惣藏	昭和五年度古蹟調査報告 (1、大同江面格野里古墳) 昭和二年度古蹟調査報告 (2、宋山里古墳) 昭和六年度古蹟調査報告 (1、慶州皇南里82號墳83號墳) 中央亞細亞の文化 (岩波講座) (東洋思潮) 日本原始文化 (岩波講座) (日本歴史) 日本文化の源泉 (岩波講座) (東洋思潮) 滿蒙の文化(同) 佛敎の諸問題 年記念會 堀井甚一郎 平凡社 松本信廣	朝鮮總督府
小場恒吉 榎本龜次郎	樂浪王光墓(古蹟調査報告2)	朝鮮古蹟研究會	同	同	同
上村六郎	日本上代染草考	大岡山書店	同	同	同
郭沫若	兩周金文辭大系攷釋	文求堂	羽田享	同	同
京都帝國大學 文學部	京都帝國大學考古圖録 續編 文學部陳列館	京都帝國大學文學部	同	同	同
京都府	京都府の史蹟名勝天然紀念物	京都府	原田淑人	同	同
熊田葦城	日本史蹟大系	平凡社	同	同	同
黑板勝美	眞福寺善本目錄	名古屋眞福寺	同	同	同
島根縣	島根縣史蹟名勝天然紀念物調査報告	島根縣	同	同	同
末永雅雄	富民協會農 本山考古室目錄 業博物館	岡書院	同	同	同
關靖	金澤文庫叢書 金澤文庫本圖録上	巖松堂	同	同	同
關野貞 野守健	朝鮮古蹟圖譜 十五	朝鮮總督府	同	同	同
高田十郎	法隆寺金石文集	奈良鶴谷郷會	同	同	同
東京人類學會	日本民族	岩波書店	同	同	同
東京帝國大學 文學部	東京帝國大學文學部考古圖編第九輯 考古學研究室蒐集品	美術工藝會	同	同	同
東京府	東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告	東京府	同	同	同
東京文化學院 東京研究所	東洋史研究文獻類目	東京文化學院 東京研究所	同	同	同
東北帝國大學 文學部	十周年記念 史學文學論集	岩波書店	同	同	同
中山久四郎	東洋史辭典	雄山閣	同	同	同
奈良縣	奈良縣史蹟名勝天然紀念物 調査報告 十三	奈良縣	同	同	同
新潟縣	新潟縣史蹟名勝天然紀念物 調査報告 第五輯	新潟縣	同	同	同
仁科義男	甲斐の考古 東八代郡右左口村 豐富村 西八代郡大塚村古墳郡の調査	山梨 甲斐上代文化研究所	同	同	同

插

繪

牧野虎雄



十春畫冊(六湖會)

山口蓬春



中村岳陵



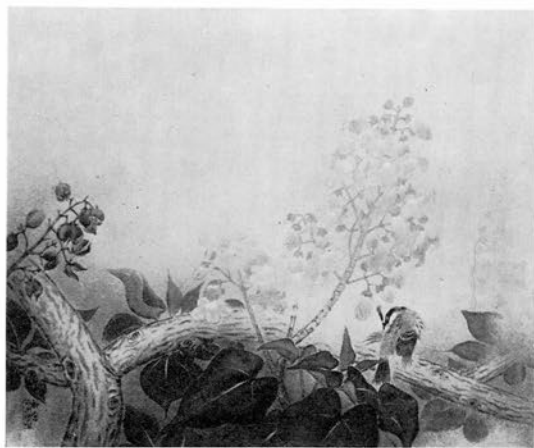
葉山堂真賞

六湖會同人合作

閑寂(讀畫會)池上秀畝



五月雨(讀畫會)荒木十畝





炬燵（日本美術院）片岡球子

大塚巧藝社寫真



竹聲（日本美術院）中村岳陵

大塚巧藝社寫真



長沙散步（日本美術院）小川芋銭

大塚巧藝社寫真



毛拔形（日本美術院）前田青邨

大塚巧藝社寫真



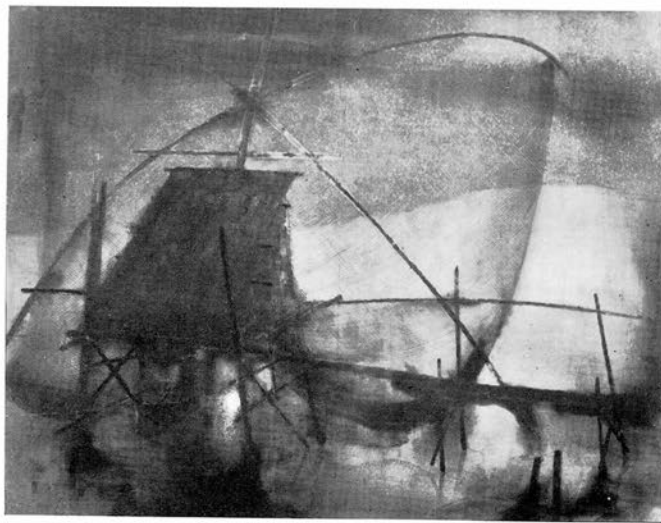
梅 (日本美術院) 小林古徑

大塚巧藝社寫眞



眞寫社藝巧塚大

觀大山横 (院術美本日) 月の浦五



眞寫社藝巧塚大

雄網邊渡 (社龍青) 漁夜



眞寫社藝巧塚大

枝美富口谷 (社龍青) 帶



浪 戲(青龍社) 川端龍子

大塚巧藝社寫真



真寫堂山葵

鳳栖竹(會虹春)邊 爐



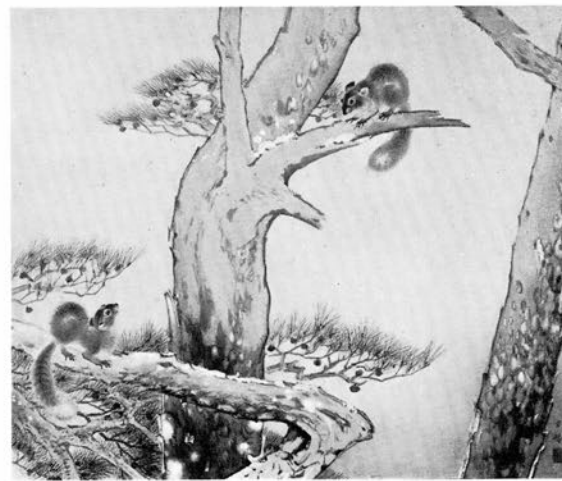
舞妓圖(春虹會) 土田麥僊

葉山堂寫真



雨餘(個人展) 小室翠雲

葉山堂寫真



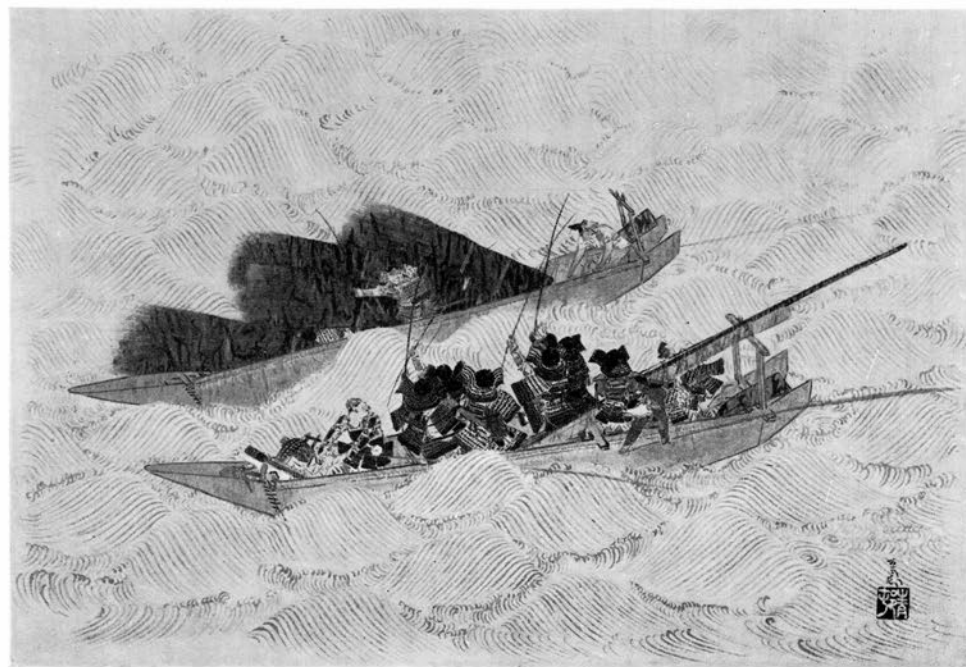
晴靄(春虹會) 西山翠嶂

葉山堂寫真

河鹿鳴く谿（踏青會） 富田溪仙



大塚巧藝社寫眞



眞寫社藝巧塚大

眞鶴沖（踏青會）前田青邨

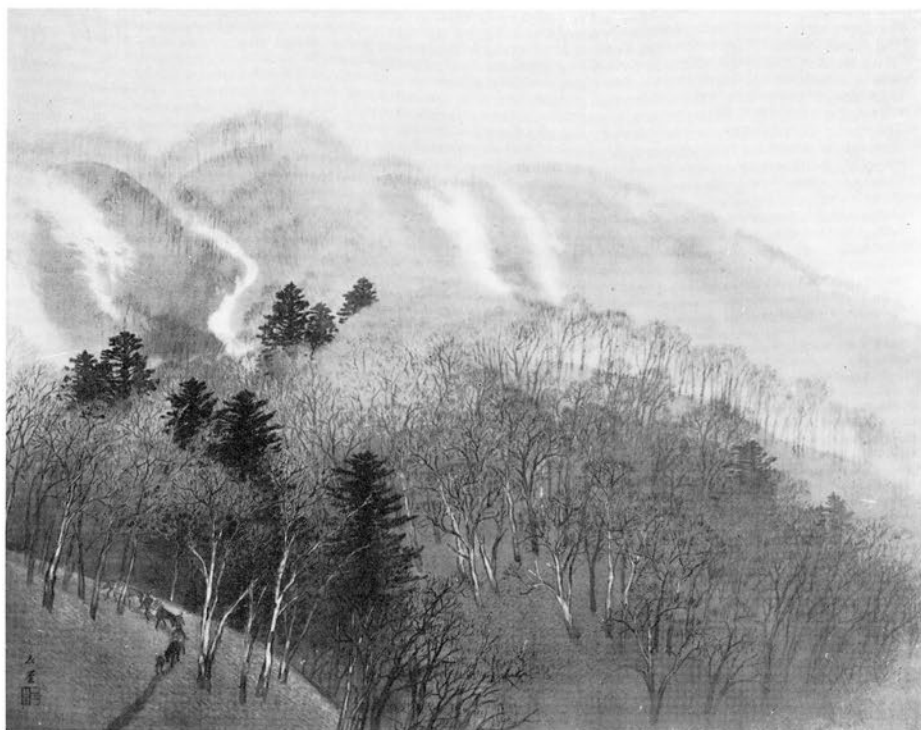




市見島廣



(會々青) 情雨舍田



眞寫社藝巧塚大

堂玉合川 (會交淡) 夕の峰



春蓬口山



(會々青) 圖の林竹



投網(淡交會) 川合玉堂

大塚巧藝社寫真



浦風(淡交會) 横山大觀

大塚巧藝社寫真



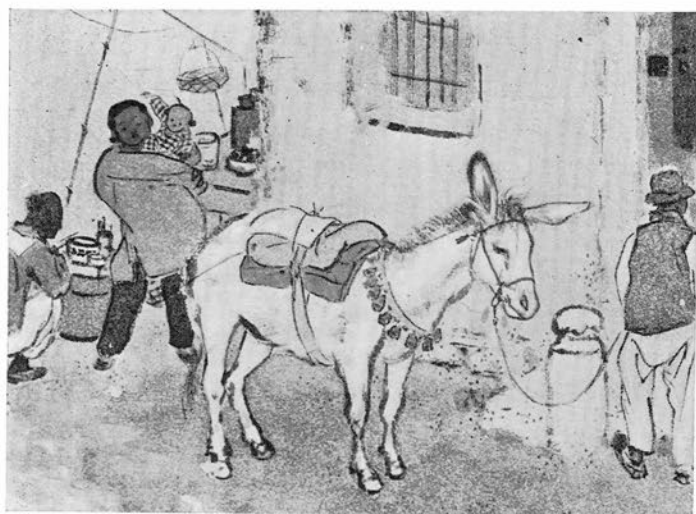
大同古寺（淡交會）竹內栖鳳

大塚巧藝社寫真



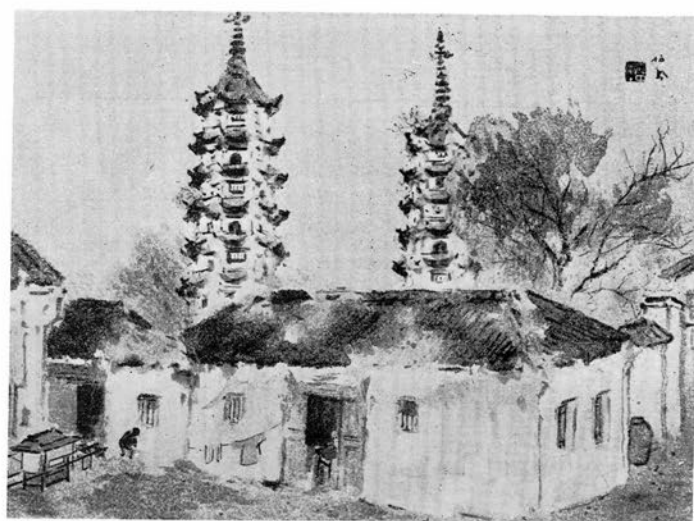
濟南城外（淡交會）竹內栖鳳

大塚巧藝社寫真



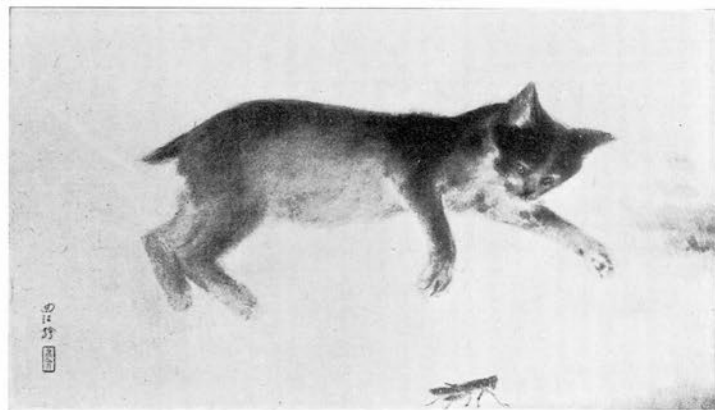
蘇州街頭（淡交會）竹內栖鳳

大塚巧藝社寫真



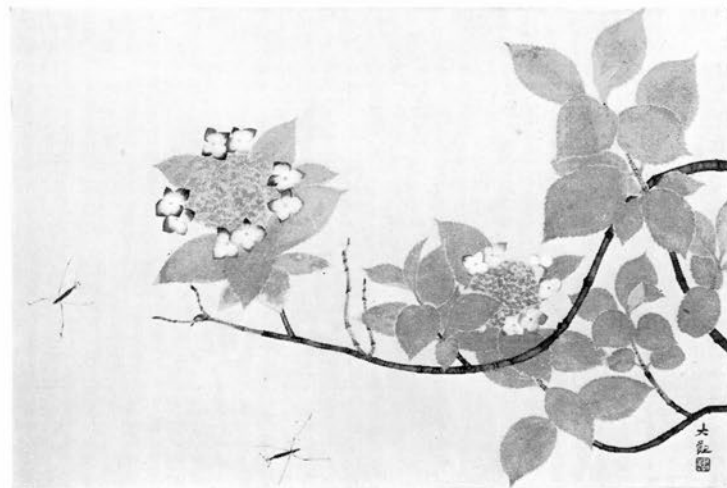
蘇州雙塔（淡交會）竹內栖鳳

大塚巧藝社寫真



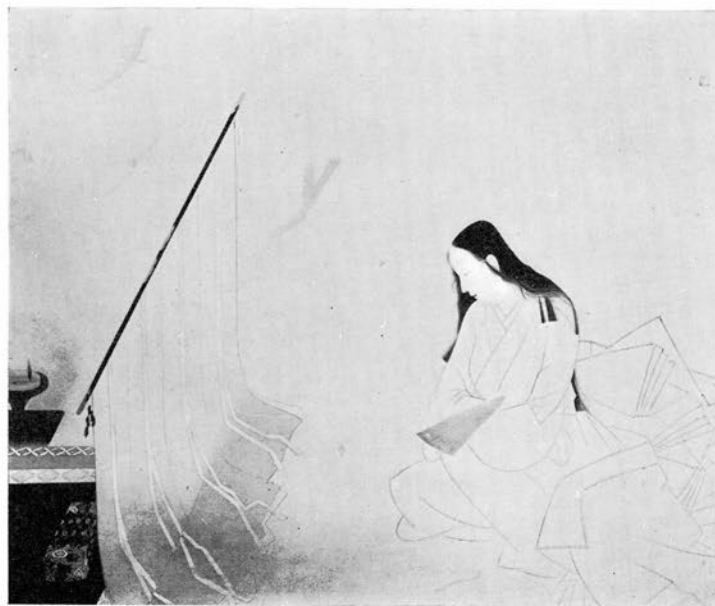
真寫堂山葵

江曲田町(會巴)猫

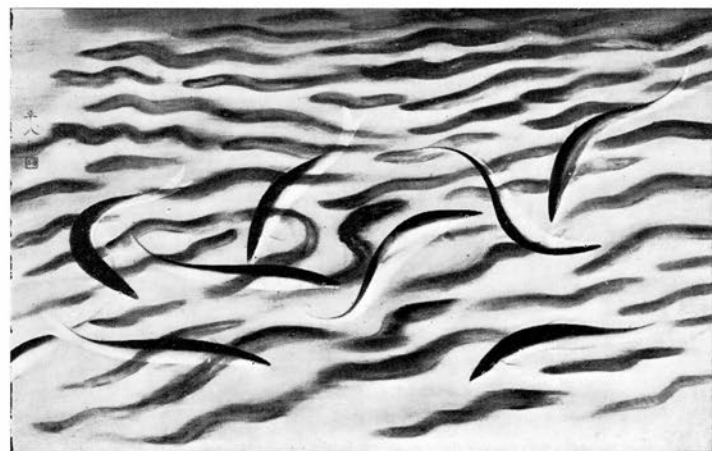


眞寫社藝巧塚大

觀大山横(會交淡)花仙八



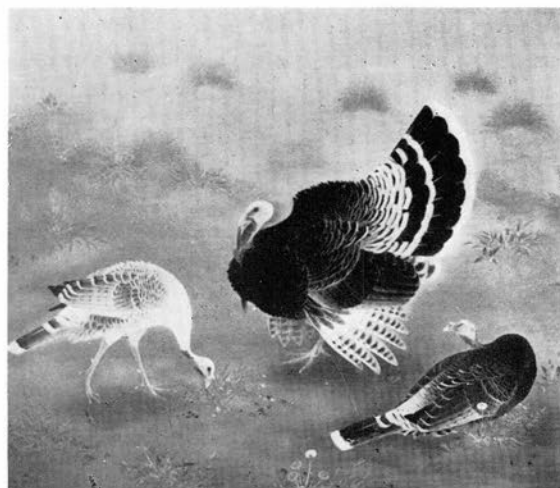
葵上(京都市美術展) 寒本一洋



郎八平田福(展術美市都京) 鮎



遅日 (京都市美術展) 水野深艸



七頭鳥 (京都市美術展) 山本倉丘



良夜 (日本畫會展) 川合玉堂

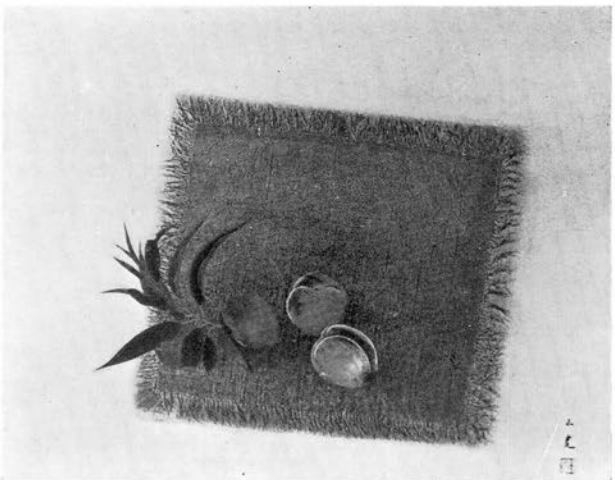
雲神堂寫真



溪山暮靄 (日本畫會展) 松林桂月

雲神堂寫真

桃（日本畫會展）川崎小虎



芸聲堂寫真
三七三

浴後（個人展）伊東深水



古金堂寫真

靜物（個人展）伊東深水



古金堂寫真

湘南早春（個人展）伊東深水

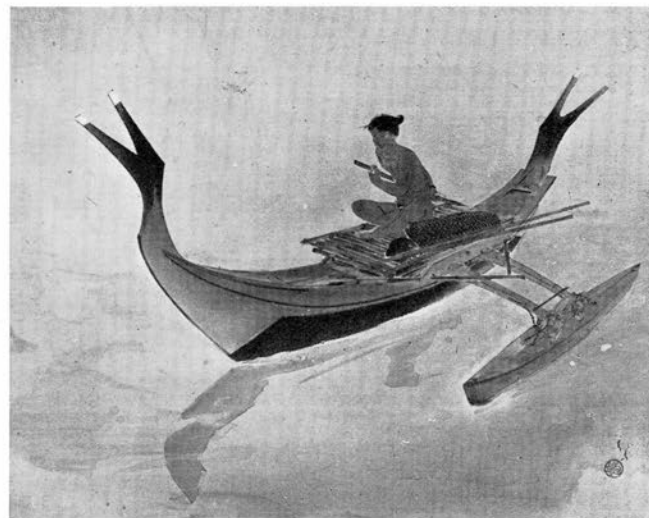


古金堂寫真



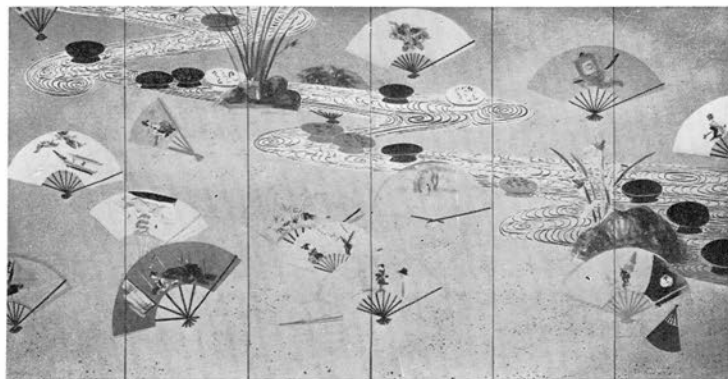
椰子 (個人展) 川端龍子

大塚巧藝社寫真



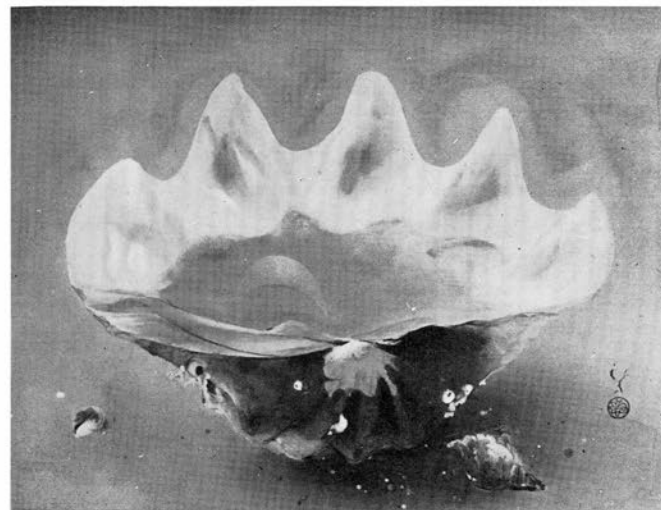
熱帯雨 (個人展) 川端龍子

大塚巧藝社寫真



眞寫堂山葉

八莊村木 (展畫本日) 風屏枝竹



月を盛る (個人展) 川端龍子

大塚巧藝社寫真

明治風俗十二月(個展) 錦木清方

梅屋敷(二月)

葉山堂寫真



菖蒲湯(五月)



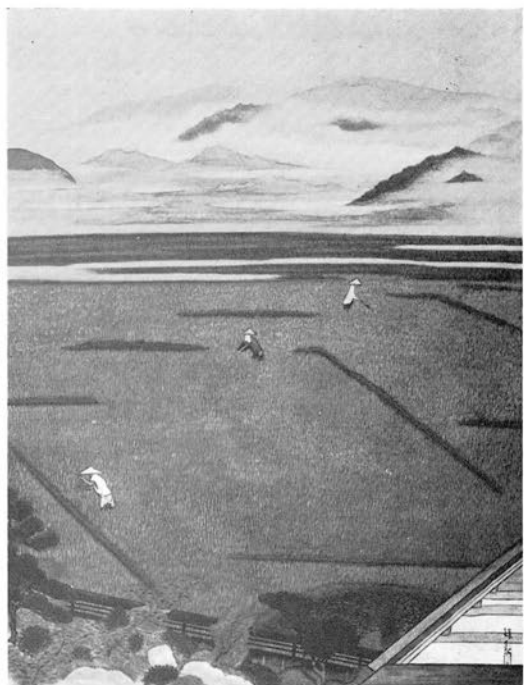
蚊燈籠(七月)



長夜(十月)



青田(日本美術院) 大智勝観

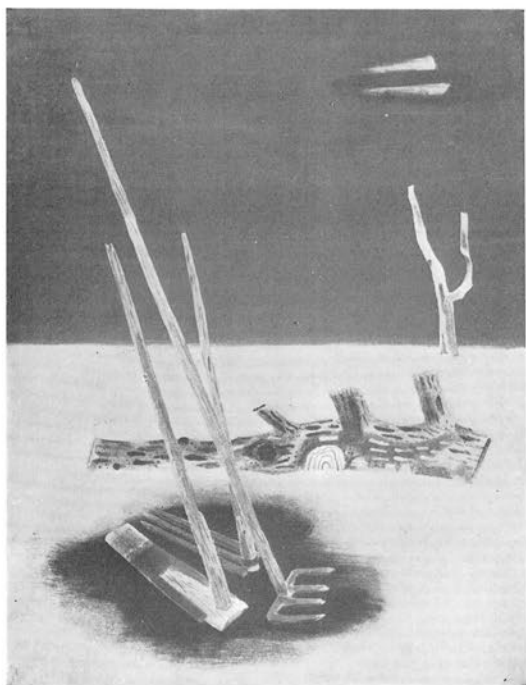


大塚巧蔵社寫眞

歌三題ノ内(空ほのぐらしのゝめ)(個展) 木村莊八



葉山堂寫眞



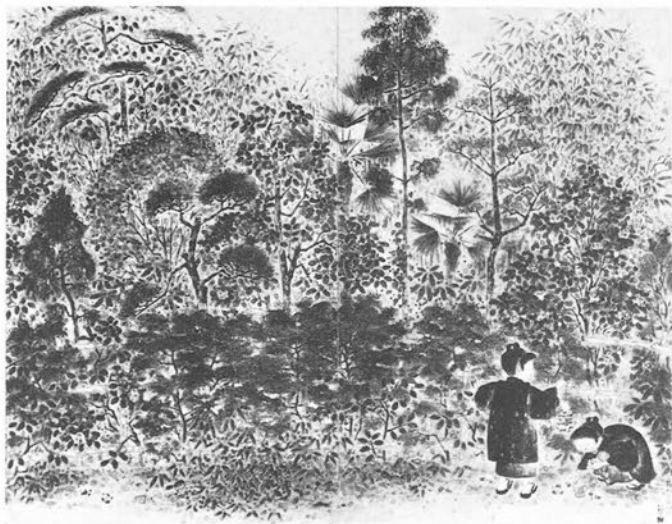
眞寫井村

郎四豊田福(社樹山)壑開



眞寫井村

夫稚關井(會究研畫本口新)場し壊り取



落椿（日本美術院）安孫子萩聲

大塚巧藝社寫真



二少女（日本美術院）中村貞以

大塚巧藝社寫真



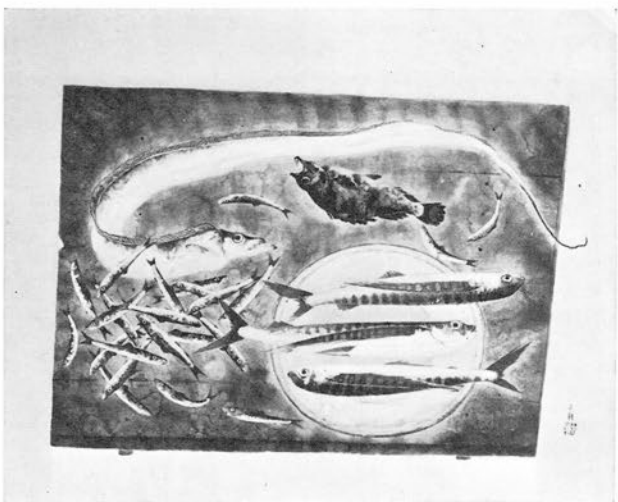
涼音（日本美術院）加藤晨明

大塚巧藝社寫真



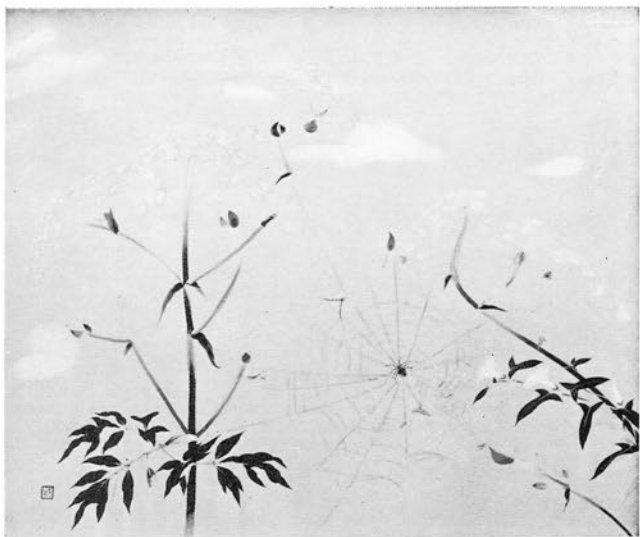
武藏野（日本美術院）柿沼宗居

大塚巧藝社寫真



魚類圖（日本美術院）鈴木三朝

大塚巧藝社寫真



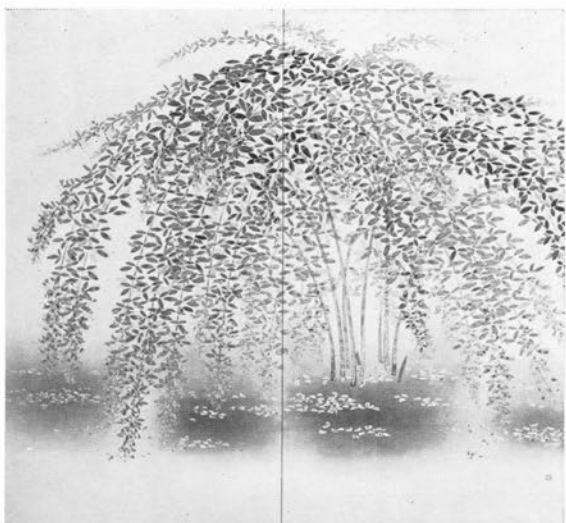
高原新秋（日本美術院）郷倉千靱

大塚巧藝社寫真



山葵澤（日本美術院）田中案山子

大塚巧藝社寫真



萩（日本美術院）櫻村白圭

大塚巧藝社寫真

高麗の舊都（日本美術院） 小島一谿



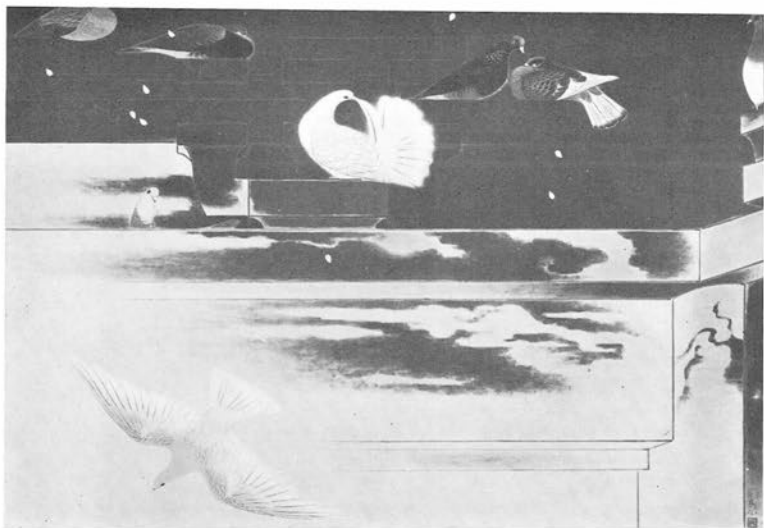
秋（日本美術院） 中村岳陵

大塚巧藝社寫眞



夕 映（日本美術院） 鈴木鳥心

大塚巧藝社寫眞



松の林（日本美術院） 上田睦草

大塚巧藝社寫眞





飛泉（日本美術院）横山大観



落飾（日本美術院）筆谷等觀

大塚巧藝社寫真

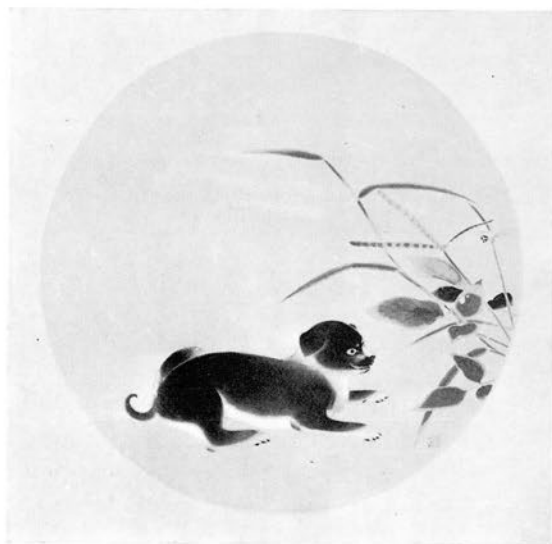


風雪（日本美術院）酒井三良

大塚巧藝社寫真



富恒野比 (院術美本日) 花



眞寫社藝巧塚大 風南山堅 (院術美本日) 子 狗



眞寫社藝巧塚大 半土村奥 (院術美本日) 邊 野

食堂作法(一)

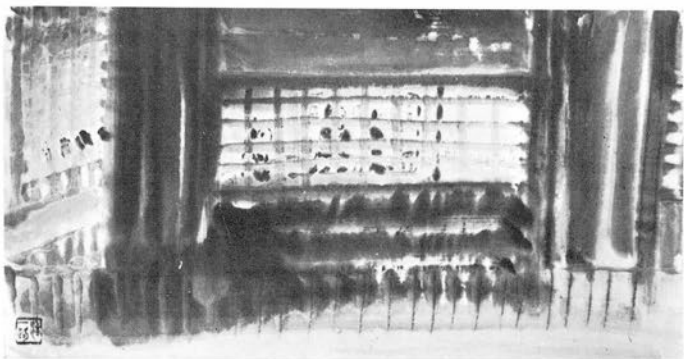


御水取八題(日本美術院) 近藤浩一路

食堂作法(二)



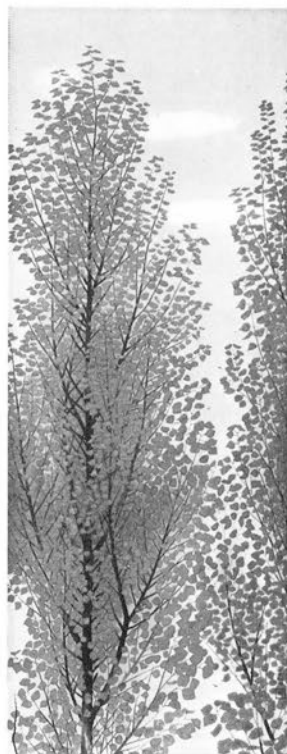
六時行道(七)



晨朝下堂(八)



大塚巧藝社寫真



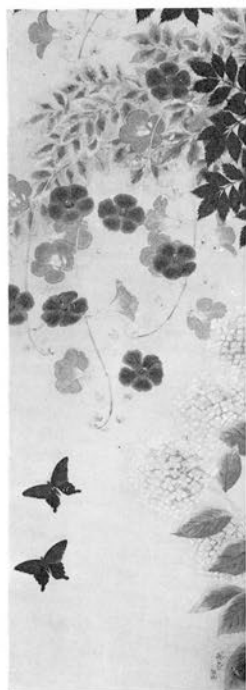
ボブラの秋(日本美術院) 長野草風

大塚巧藝社寫真



市(日本美術院) 小川千穂

大塚巧藝社寫真



花 (日本美術院) 富取風堂

大塚巧藝社寫真



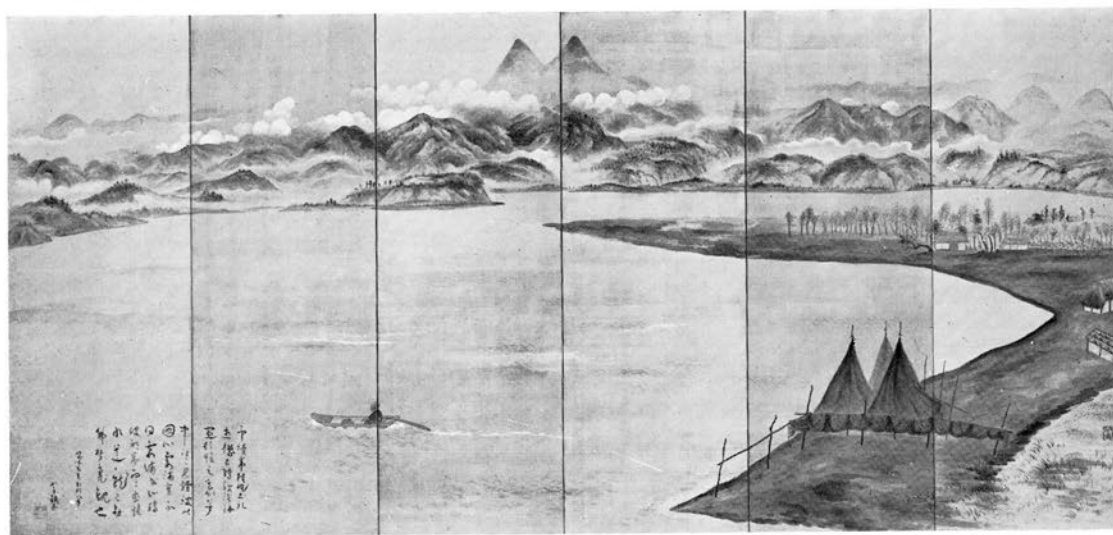
少女 (日本美術院) 山村耕花

大塚巧藝社寫真



百合 (日本美術院) 橋本永邦

大塚巧藝社寫真



小川銭 (日本美術院) 河内清斎



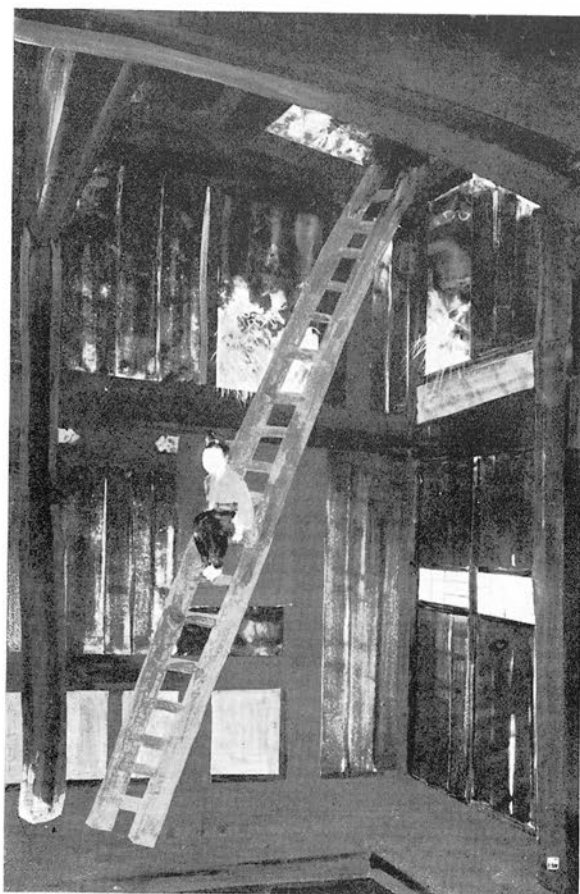
大塚巧藝社寫眞

朝の苑花 上田三郎 (日本美術院)



日蓮 (日本美術院) 木村武山

大塚巧藝社寫眞



飛騨山居 (納居) (青龍社) 加納三樂

大塚巧藝社寫眞



華嚴 (日本美術院) 眞道黎明

大塚巧藝社寫眞



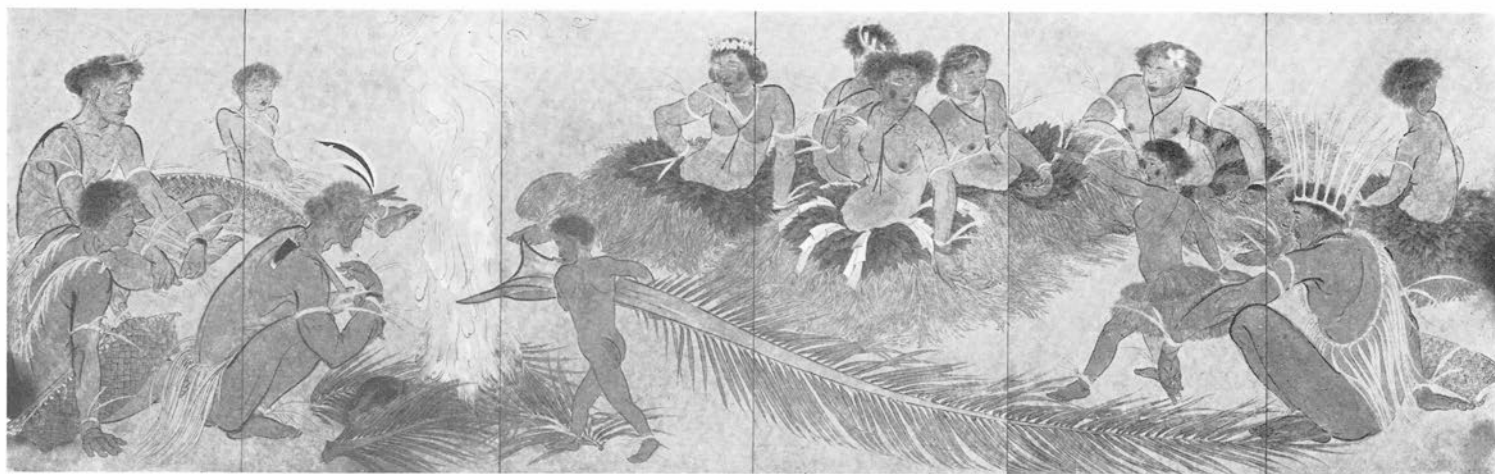
粧ふ人々（青龍社）谷口富美枝

大塚巧藝社寫眞



白
日（日本美術院）小林古徑

大塚巧藝社寫眞



大塚巧藝社寫眞

子龍端川 (社龍青) 火篝の子柳



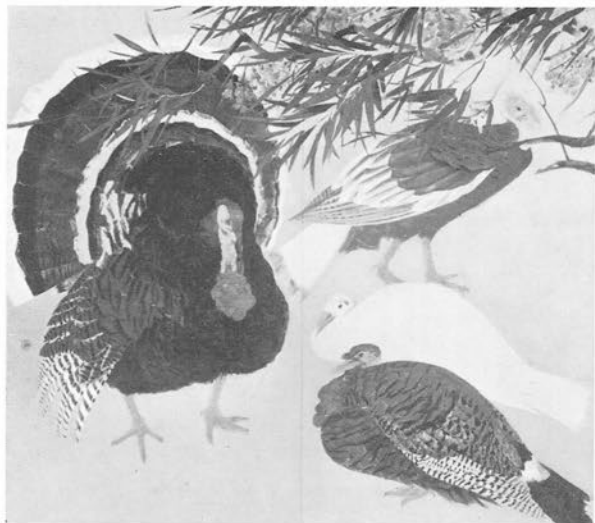
塔影(青龍社) 渡邊綱雄

大塚巧藝社寫眞



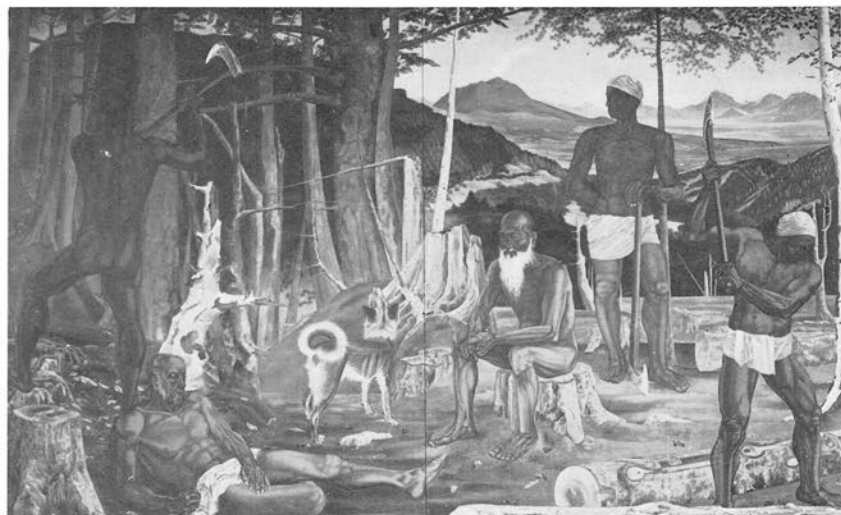
牧婦(青龍社) 柴田安子

大塚巧藝社寫眞



華禽(青龍社) 木村鹿之助

大塚巧藝社寫真



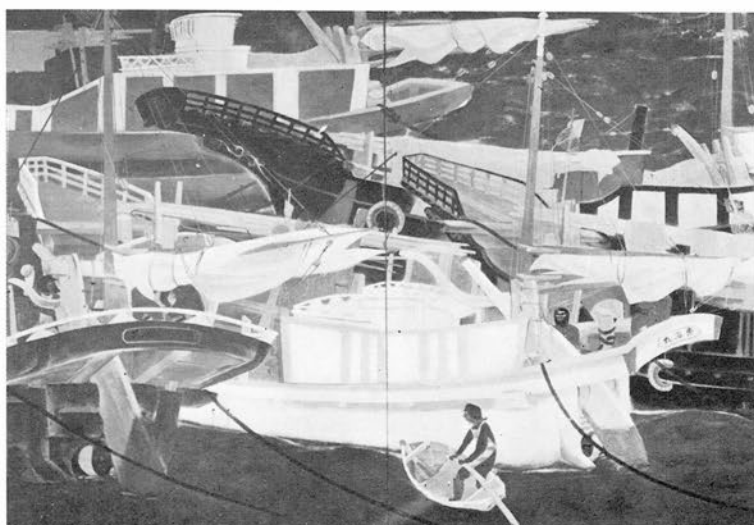
漁夫(青龍社) 杉本哲郎

大塚巧藝社寫真



飛驒山居(竜) (青龍社) 加納三樂

大塚巧藝社寫真



漁港(青龍社) 坂口一草

大塚巧藝社寫真



千代の翠（青龍社） 安西啓明

大塚巧藝社寫真

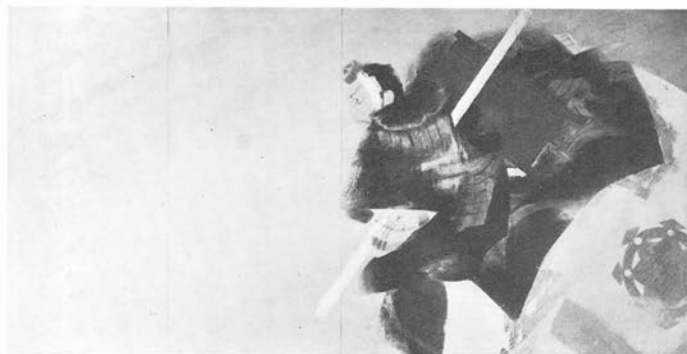


炎庭想雪圖（左）（青龍社） 川端龍子

大塚巧藝社寫真



同上（右）



大塚巧藝社寫眞

安宅 (青龍社) 山崎豊



村井寫眞

常夏の國 (朗明展) 落合朗風



福岡青嵐 (青龍社) 童子丁丙

眞寫社巧藝大



村井寫眞

常夏の國 (朗明展) 落合朗風



ぶどう（尙美展）西村五雲

葉山堂寫眞



夕星（尙美展）太田聽雨

葉山堂寫眞



燕（尙美展）山口蓬春

葉山堂寫眞
蓬春



眞寫堂山葉

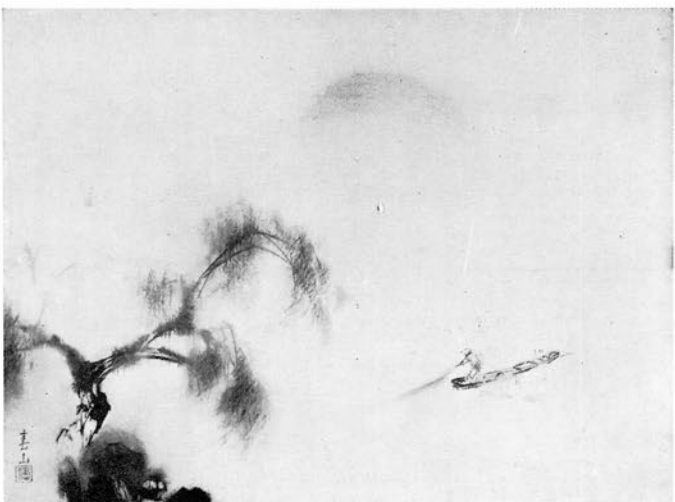
・峰紫原榊（展美尙）鴿 鴿

巢林子(個展) 鍋木清方



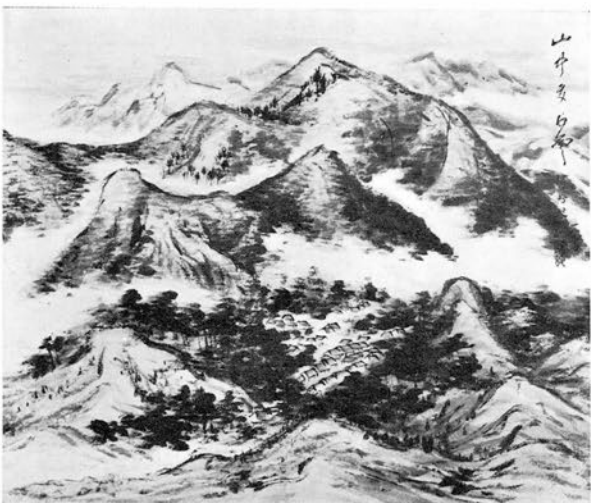
大塚巧藝社寫真

細雨蕭々(個展) 八木岡泰山



葉山堂寫真

山驛(個展) 矢野橋村



大塚巧藝社寫真

早春(個展) 矢野橋村



大塚巧藝社寫真



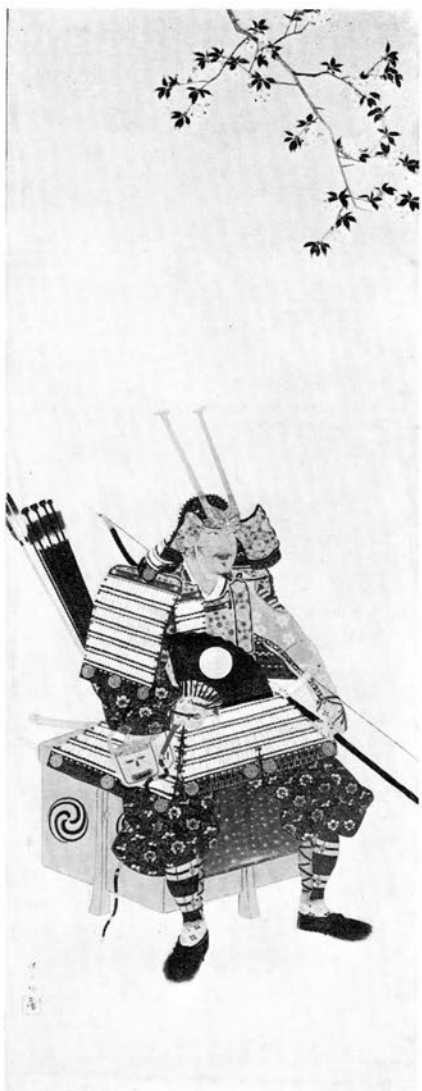
初秋の船（瑠々會） 結城素明

大塚巧藝社寫眞



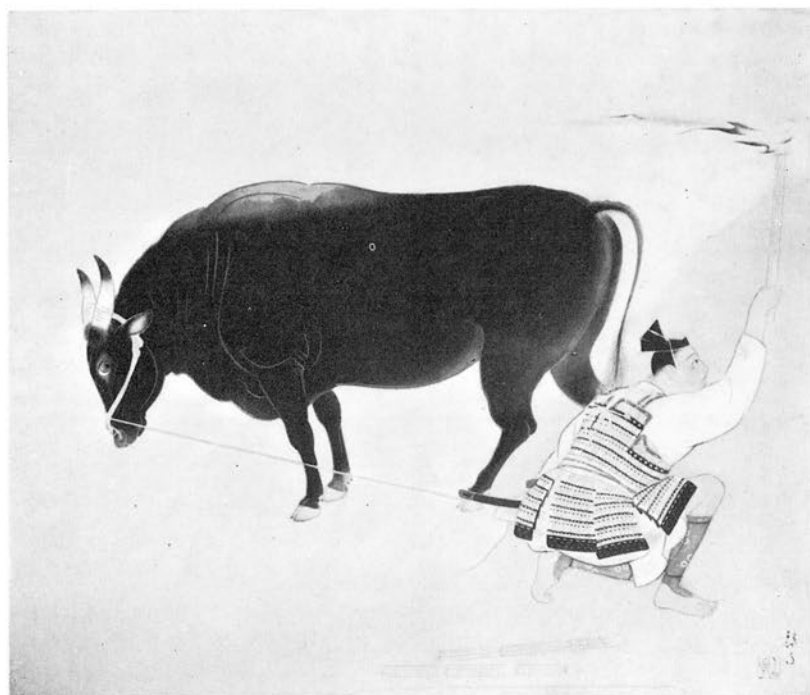
砂 丘（瑠々會） 西村五雲

大塚巧藝社寫眞



朝日將軍（瑠々會） 松岡映丘

大塚巧藝社寫眞



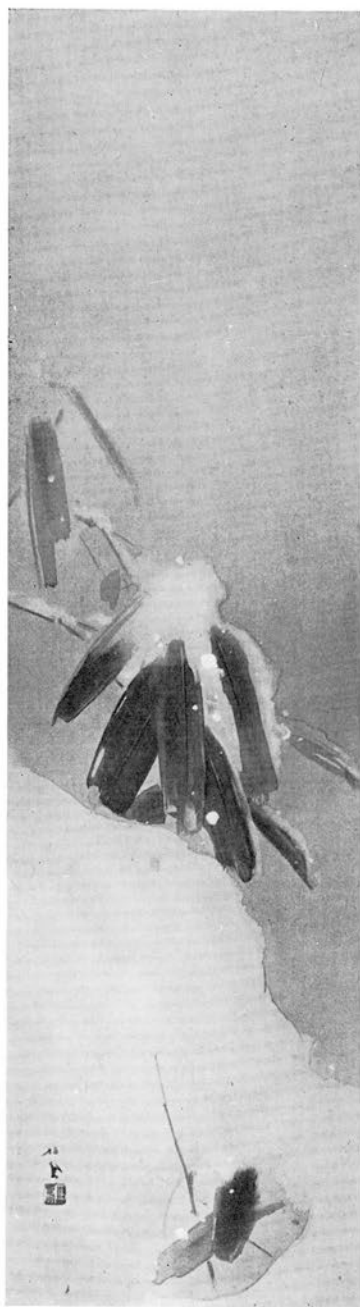
松明牛（珊々會）菊池契月

大塚巧藝社寫眞



宿 鳧（珊々會）西山翠嶂

大塚巧藝社寫眞



鳳栖内竹



堂玉合川



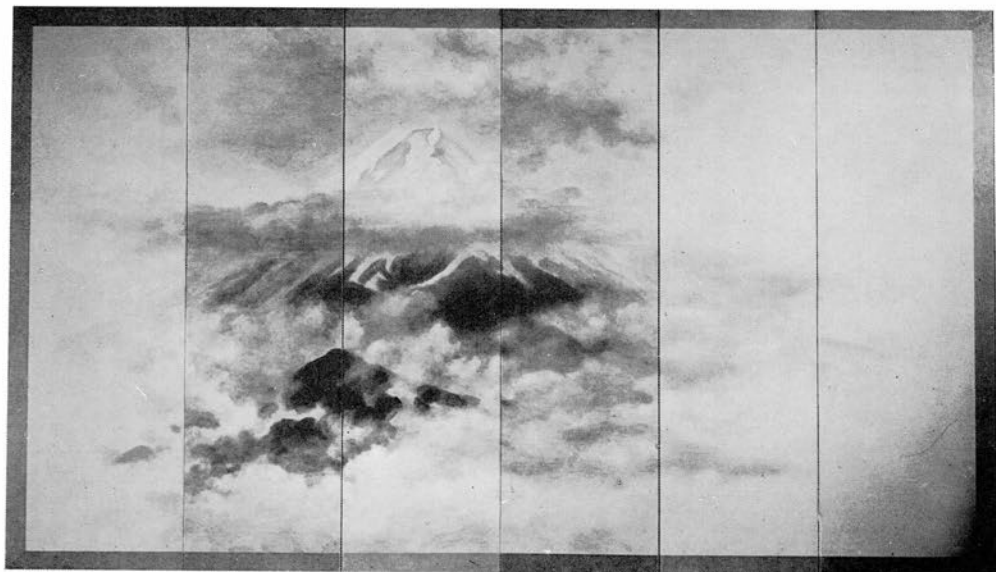
觀大山横

眞寫堂山葉

(觀展念記成完樂増越三) 對幅三花月雪

富 嶽(個展) 近藤浩一路

大塚巧藝社寫真



陽光(個展) 近藤浩一路

大塚巧藝社寫真



山田梅雨(個展) 近藤浩一路

大塚巧藝社寫真





霜樹栗鼠(個展)橋本關雪

葉山堂寫真



眞寫堂山葉

雪關木橋(展個)月新後雨



眞寫堂山葉

雪關木橋(展個)露夕

汀鷺田鶴（白荘東西新作展） 兒玉希望

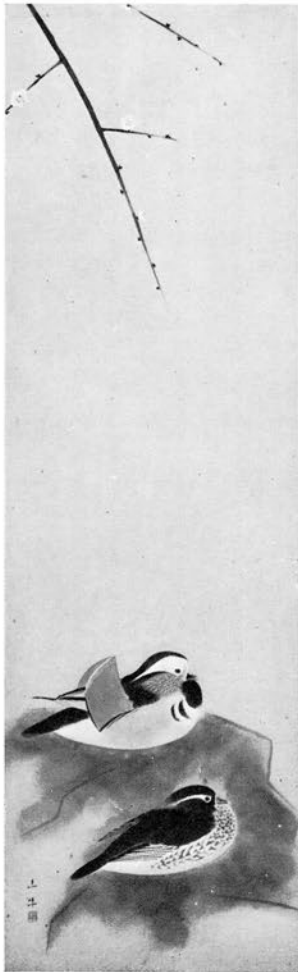


葉山堂寫真



鷺 畫（白荘東西新作展） 奥村土牛

葉山堂寫真



一茶（七絃會） 安田靫彦

大塚巧藝社寫真



初冬の花（七絃會） 鍋木清方

大塚巧藝社寫真

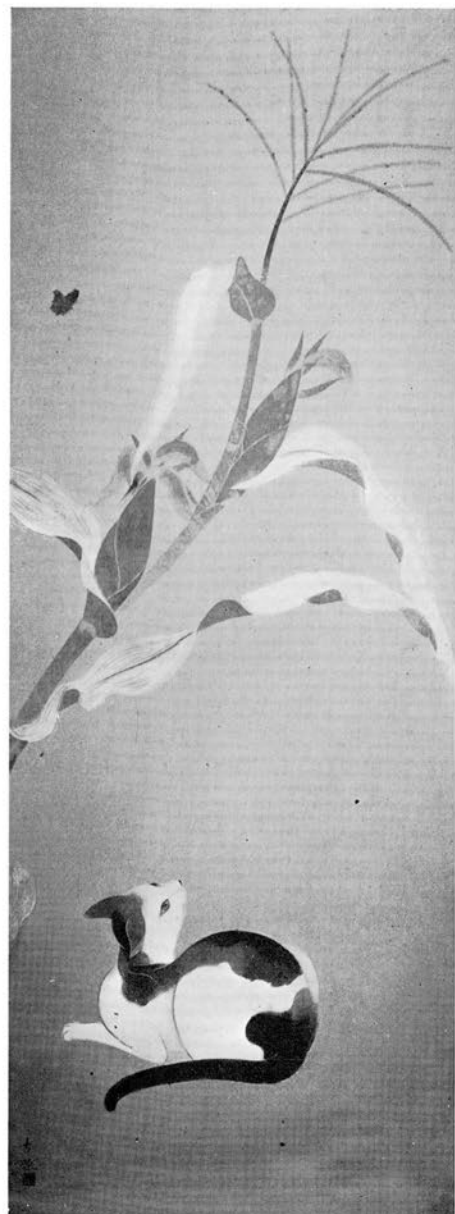


歌妓圖（七絃會） 土田麥僊

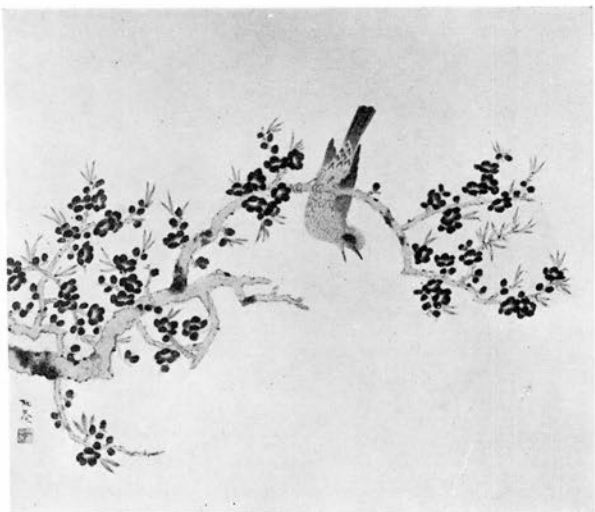


大塚巧藝社寫真

猫（七絃會） 小林古徑

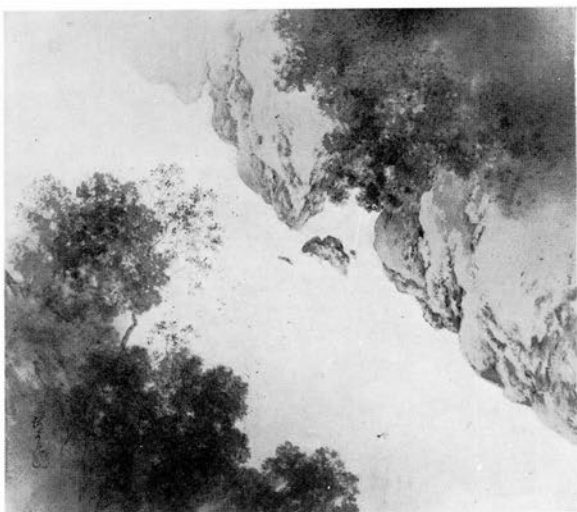


大塚巧藝社寫真



春朝小景（現代名家新作畫展）小杉放庵

大塚巧藝社寫真



暮秋（十一月）（現代名家新作畫展）木島櫻谷

大塚巧藝社寫真



夕霧（現代名家新作畫展）大智勝觀

大塚巧藝社寫真



秋深し（七絃會）前田青郎

大塚巧藝社寫真



大塚巧藝社寫真

水風清（現代名家畫展）竹內栖鳳



後赤壁（現代名家新作畫展）中村不折

大塚巧藝社寫真



春苑（現代名家新作畫展）上村松園

大塚巧藝社寫真



大塚巧藝社寫眞

京の小路 (現代名家新畫展) 長野草 風



雨後の月(八月)(現代名家新畫展) 橋本關雪



太子孝養圖(七絃會) 菊地契月

大塚巧藝社寫眞

大塚巧藝社寫眞



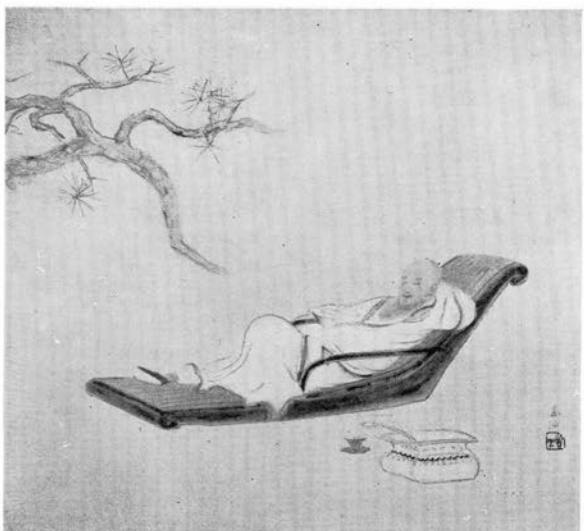
山茶花（現代名家新作畫展） 溝上遊龜 大塚巧藝社寫真



牡丹菖蒲（五月）（現代名家新作畫展） 富田溪仙 大塚巧藝社寫真



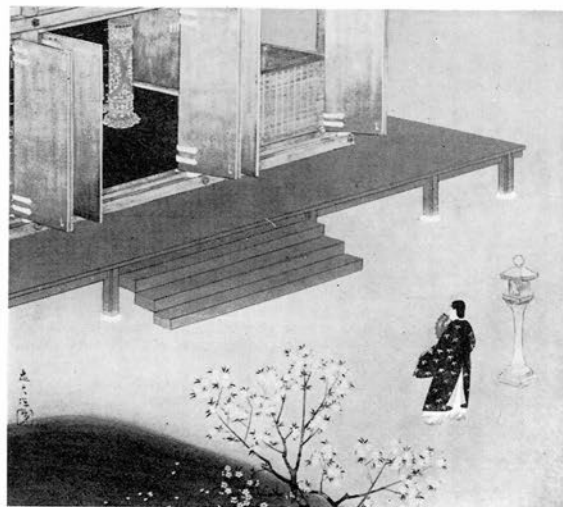
初雪（現代名家新作畫展） 榊原紫峰 大塚巧藝社寫真



羲皇上人（現代名家新作畫展） 島田墨仙 大塚巧藝社寫真



集會亂聲（三越日本畫展）菅 楯彦 大塚巧藝社寫真



光る御堂（三越日本畫展）吉村 忠夫 大塚巧藝社寫真



眞寫社藝巧塚大

月桂林松（展畫本日越三）鳩



鳥立ち (三越日本畫展) 荒木十畝

大塚巧藝社寫真



河霧 (三越日本畫展) 廣島昆市

大塚巧藝社寫真



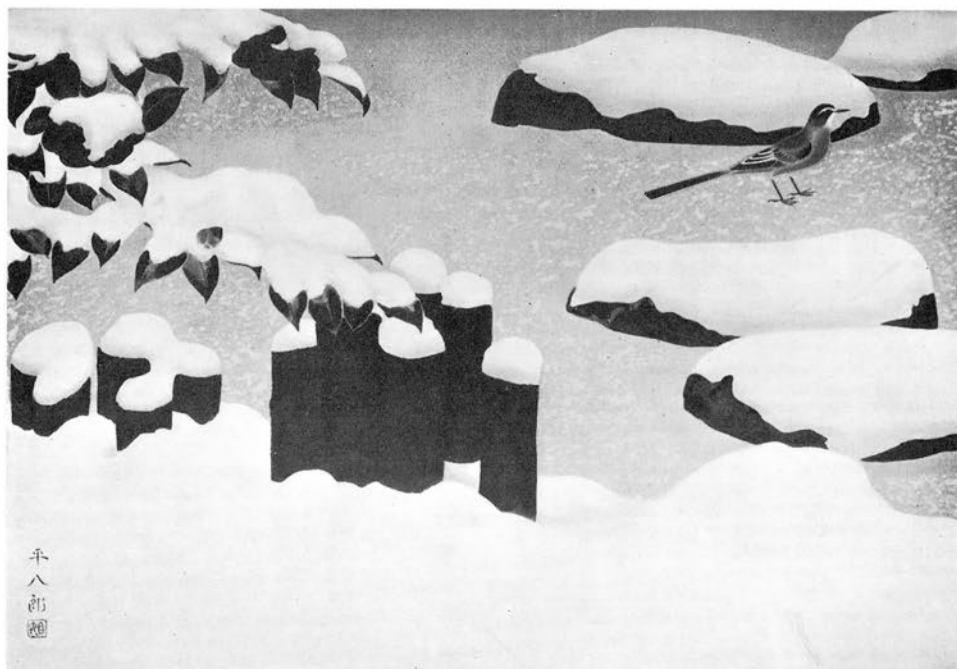
三津濱旅信 (三越日本畫展) 福田豊四郎

大塚巧藝社寫真



高原の秋 (三越日本畫展) 川合玉堂

大塚巧藝社寫真



雪 (三越日本畫展) 福田平八郎

大塚巧藝社寫真



鵞 (三越日本畫展) 上村松園

大塚巧藝社寫真



枯木寒泉（三越日本畫展）小野竹齋

大塚巧藝社寫眞



枝垂梅（三越日本畫展）富田溪仙

大塚巧藝社寫眞



しぐれ（三越日本畫展）川村曼舟

大塚巧藝社寫眞



眞鶴（三越日本畫展）山口蓬春

大塚巧藝社寫眞

葉古詠（三越日本畫展）西山翠嶂

大塚巧藝社寫真



箏篋の音（三越日本畫展）荒井寛方

大塚巧藝社寫真



秘曲（三越日本畫展）案本一洋

大塚巧藝社寫真



冬光（三越日本畫展）西村五雲

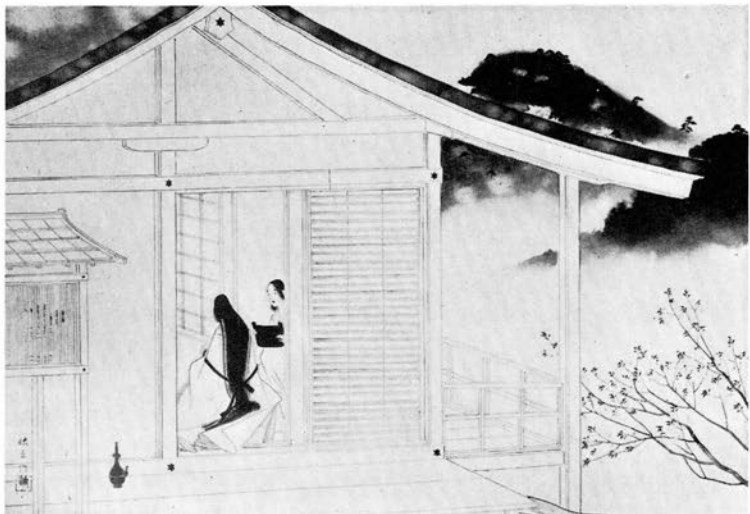
大塚巧藝社寫真





竹落葉（三越日本畫展）竹内栖鳳

大塚巧藝社寫真



初瀬（三越日本畫展）松岡映丘

大塚巧藝社寫真



菊の露（三越日本畫展）勝田哲

大塚巧藝社寫真



宵の雪（三越日本畫展）伊東深水

大塚巧藝社寫真



淡雪（三越日本畫展） 鍋木清方

大塚巧藝社寫真



雪後（三越日本畫展） 池上秀畝

大塚巧藝社寫真



勝果（三越日本畫展） 安田半圃

大塚巧藝社寫真



武陵春色（三越日本畫展） 橋本關雪

大塚巧藝社寫真



華に暮る (三越日本畫展) 穴山勝堂 大塚巧藝社寫眞



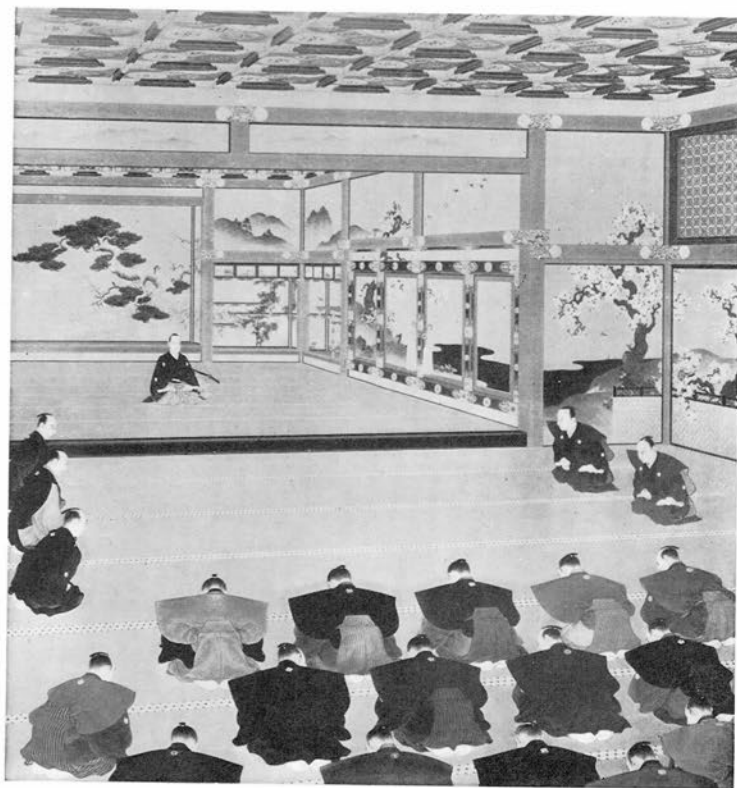
月明 (三越日本畫展) 横山大観 大塚巧藝社寫眞



霜霽 (三越日本畫展) 結城素明 大塚巧藝社寫眞



群峯趨朝 (三越日本畫展) 小川芋銭 大塚巧藝社寫眞



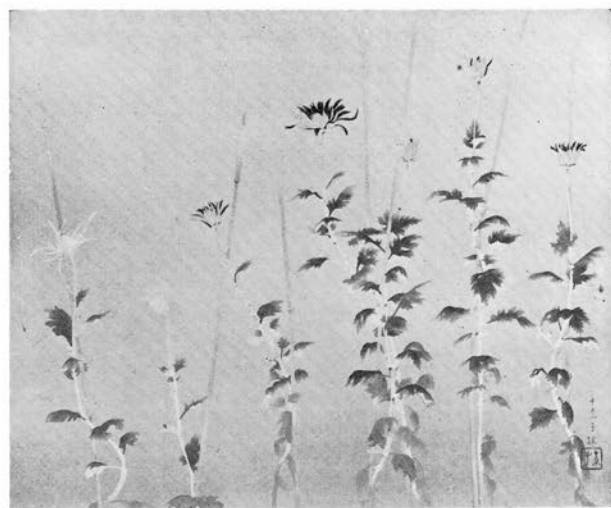
納奉光慶川徳公

陵丹田 郎 (館畫繪念記徳聖) 還 奉 政 大



納奉市坂大

彦 桶 菅 (館畫繪念記徳聖) 立 冊 后 皇



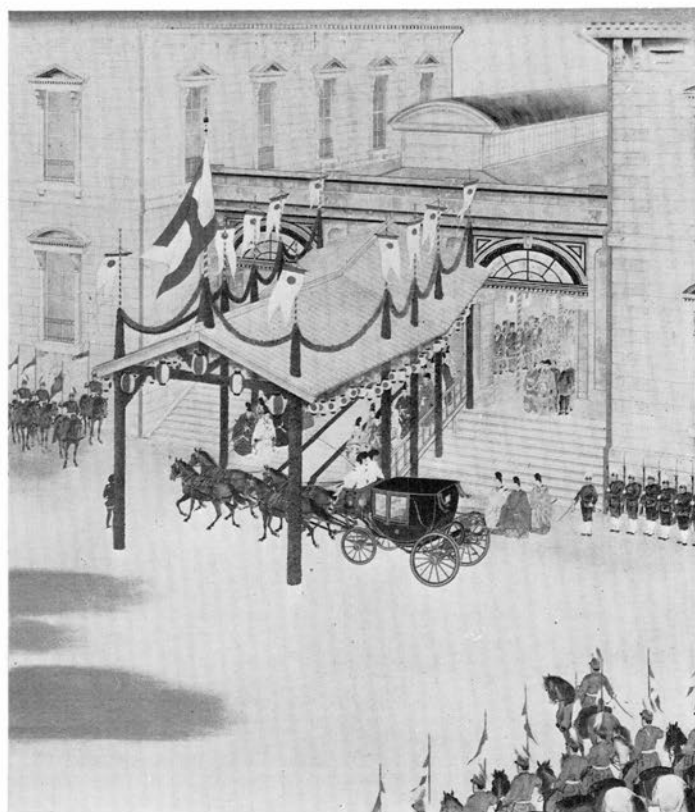
江戸菊（三越日本畫展）三谷十糸子

大塚巧藝社寫真



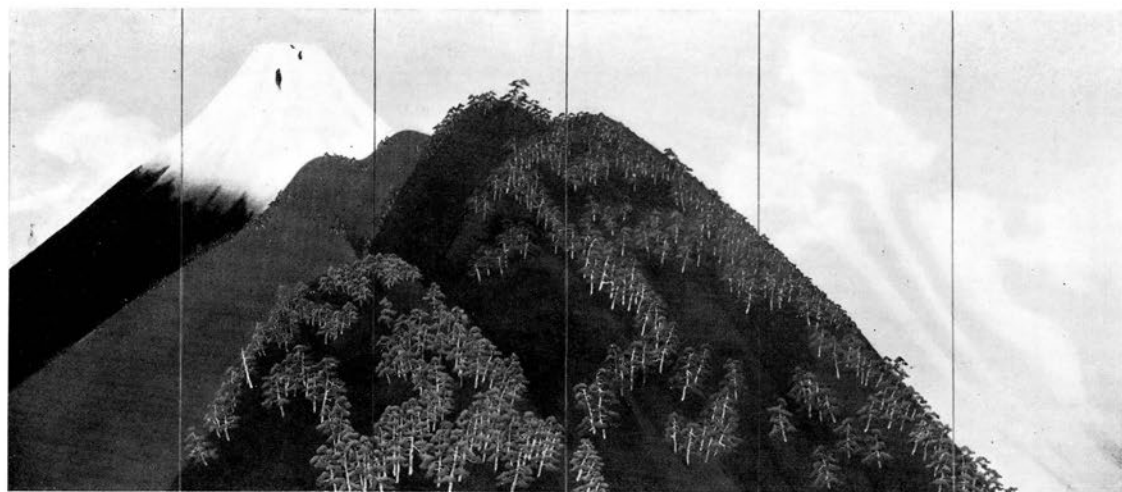
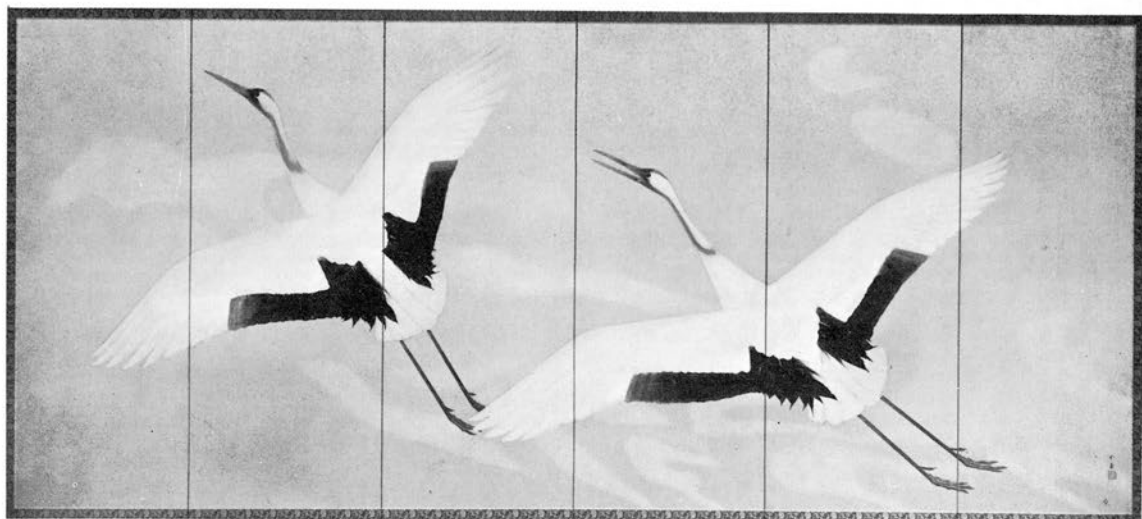
渚紋（三越日本畫展）中村岳陵

大塚巧藝社寫真



納奉省道鐵

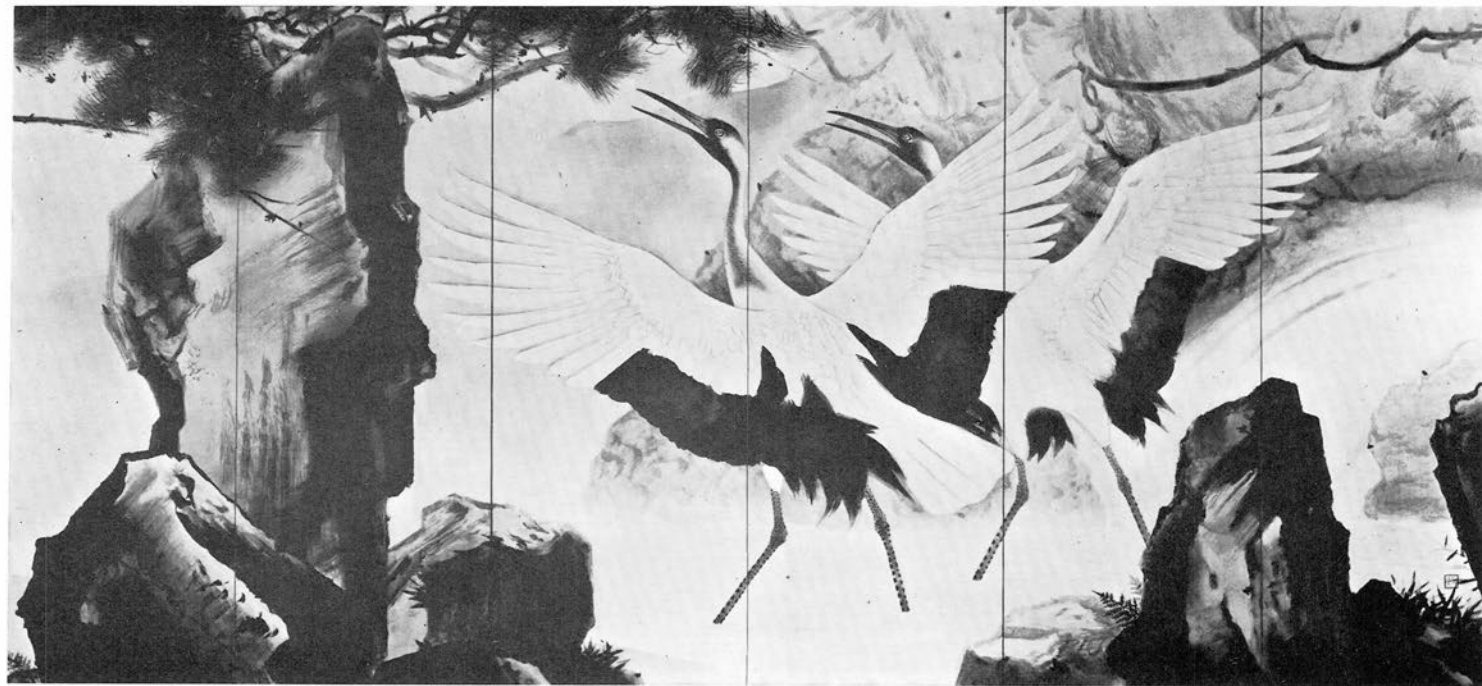
雲大村小（館畫繪念記德聖）幸行式行開道鐵濱京



象印本堂 風屏上献員議院議衆祝奉誕御下殿子太皇 雲開翔翺

(右) 圖下

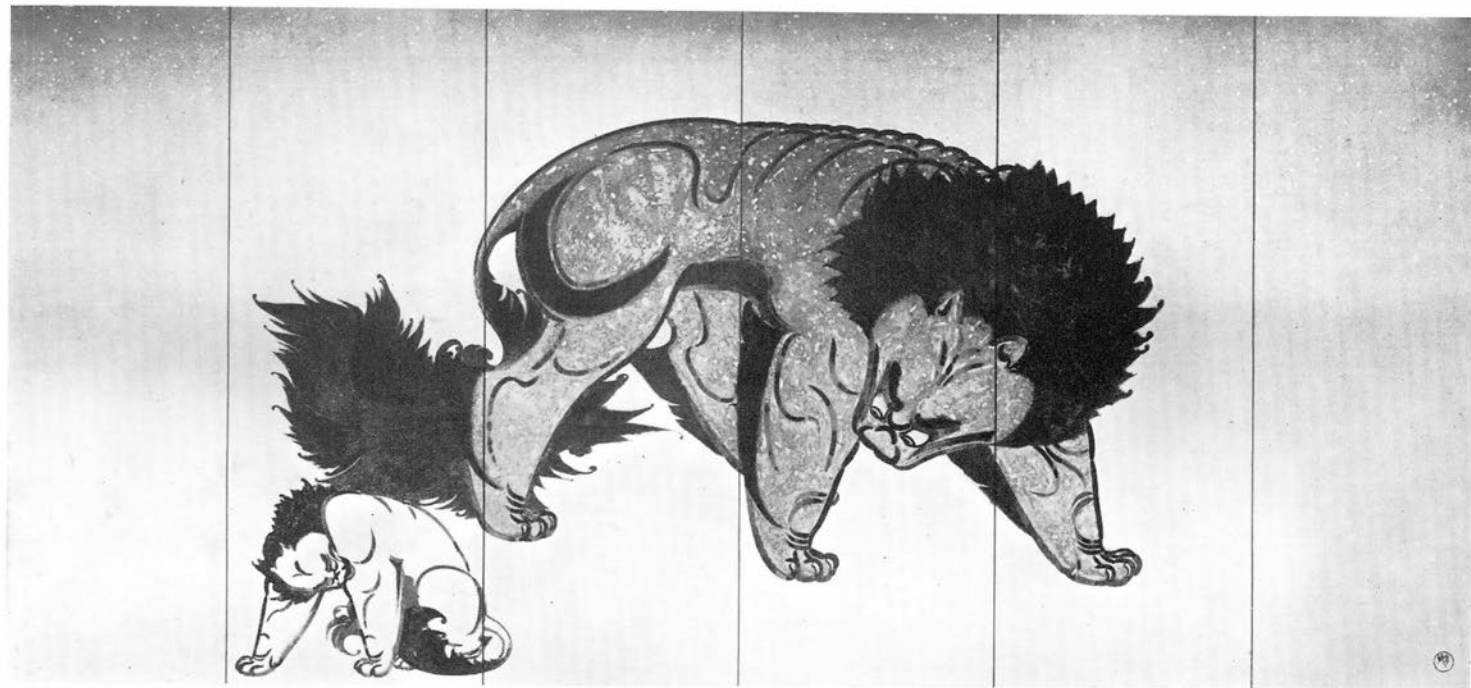
(左) 圖上



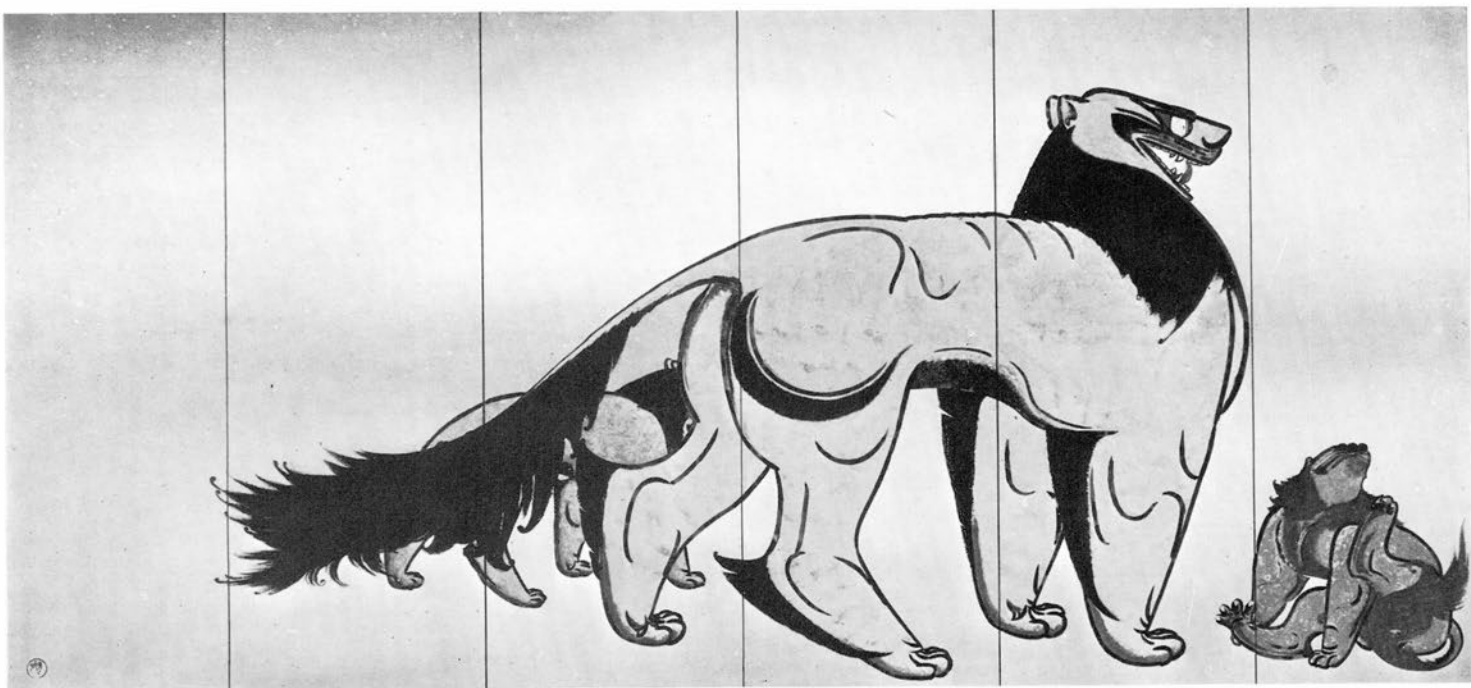
象印本堂(左)風屏上献家爵男崎岩祝奉位御陛下上聖 色佳鶴松



象印本堂(右)風屏上献家爵男崎岩祝奉位即御下陸上聖 色佳鶴松



狮子 子 聖上陛下御即位祝岩崎男爵献屏風 (左) 前田青邨



邨 青 田 前 (右) 風 屏 上 獻 家 爵 男 崎 岩 祝 奉 位 卽 御 下 陛 上 聖 子 獅



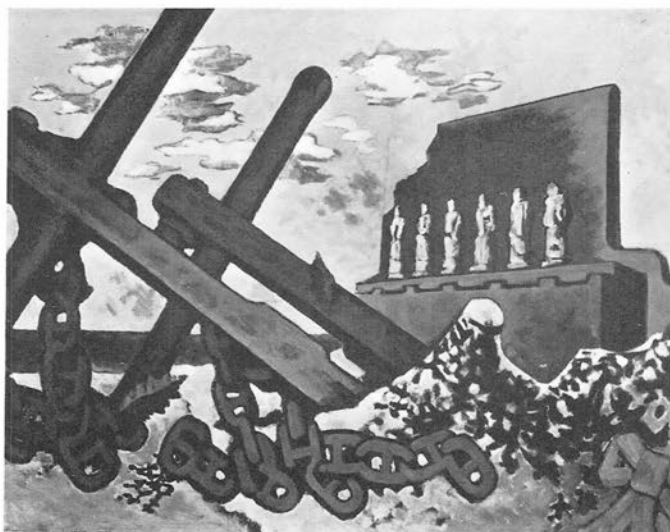
横臥 (白日會) 野口良一 呂

葉山堂寫真



秋近き海 (白日會) 中澤弘光

葉山堂寫真



海の忠魂碑 (新造型展) 長谷川善四郎



線路工夫 (白日會) 池部鈞

葉山堂寫真



眞島堂山梨

治清田堀（會光東）峰の雪



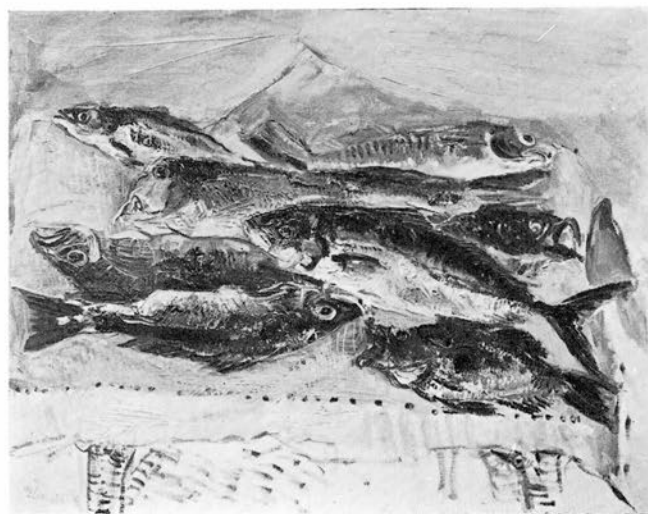
眞島堂山梨

三浩邊渡（會光東）物靜



眞島堂山梨

里與藤齋（會光東）景風紀南



眞清山野上（社玄旺）物靜魚



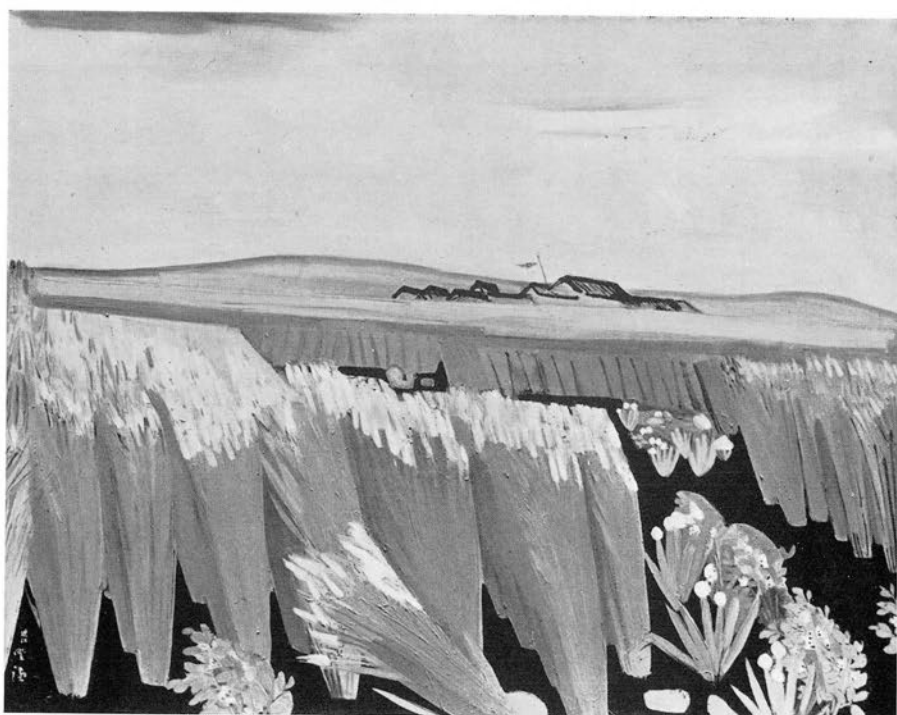
眞寫國靜木高

治嗣田藤 (展個) 船 和



眞寫國靜木高

治嗣田藤 (展個) 人那支



眞寫堂山葉

藏謙口野 (會光東) 景 風 月 五

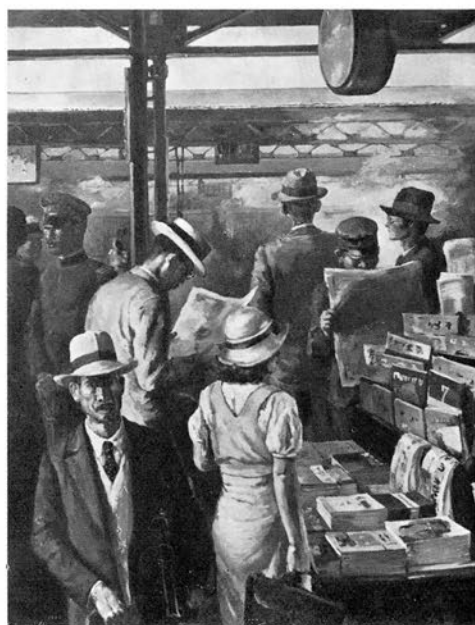


海 (會光東) 八百八木橋

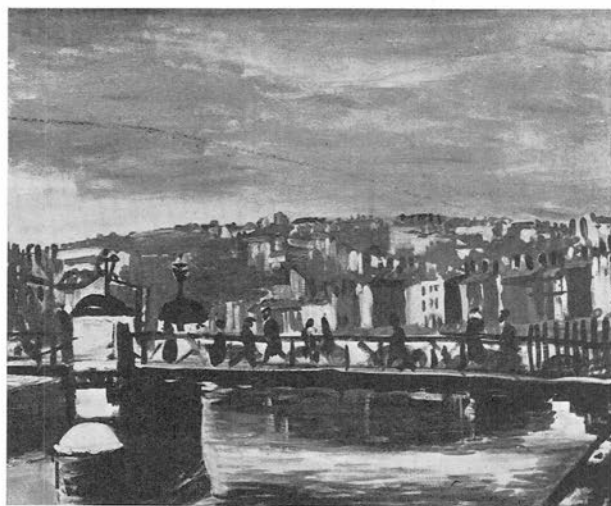


真喜堂山葉

男武通平 (會光東) 內室



郎三崎尼 (社玄旺) 場車停



真葛井村

郎太彌口野 (展立獨) 橋のシヨリ



真葛井村

郎三善島兒 (展立獨) 春つのは庭



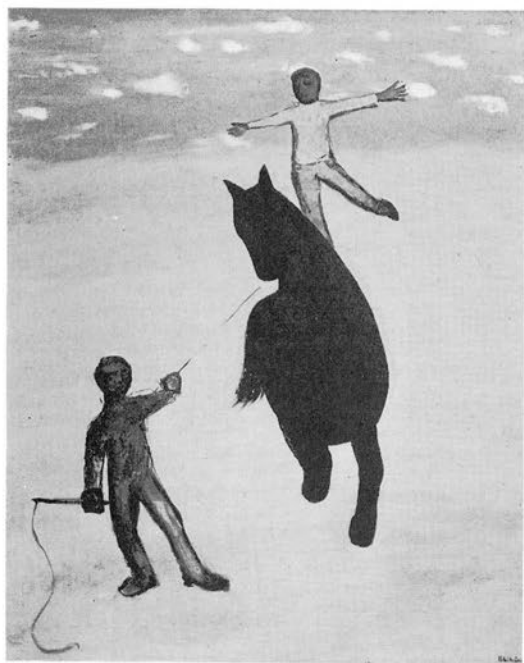
真葛井村

義重 林 (展立獨) 霽秋 嶺山



真葛井山

彦美岡熊 (會光東) 影雲嶽群



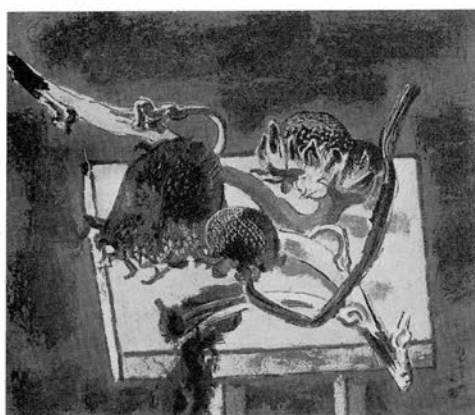
眞寫井村

助之喜原老海（展立獨）馬 曲



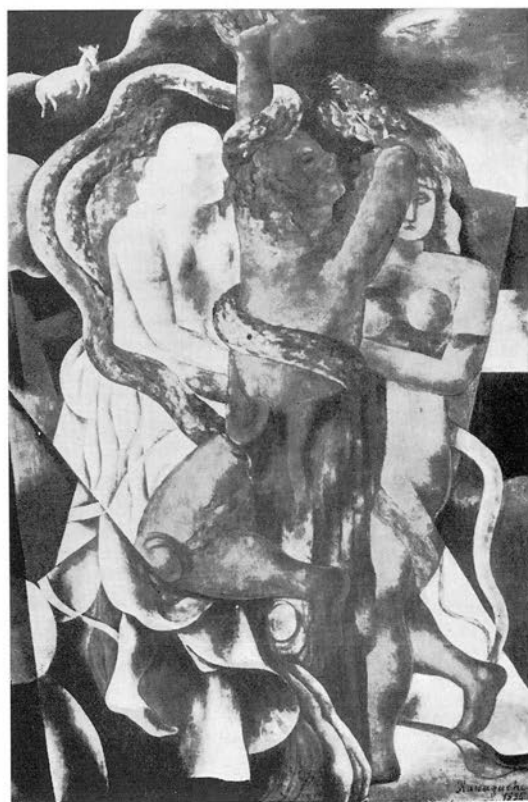
眞寫井村

巍山中（展立獨）菜 蔬



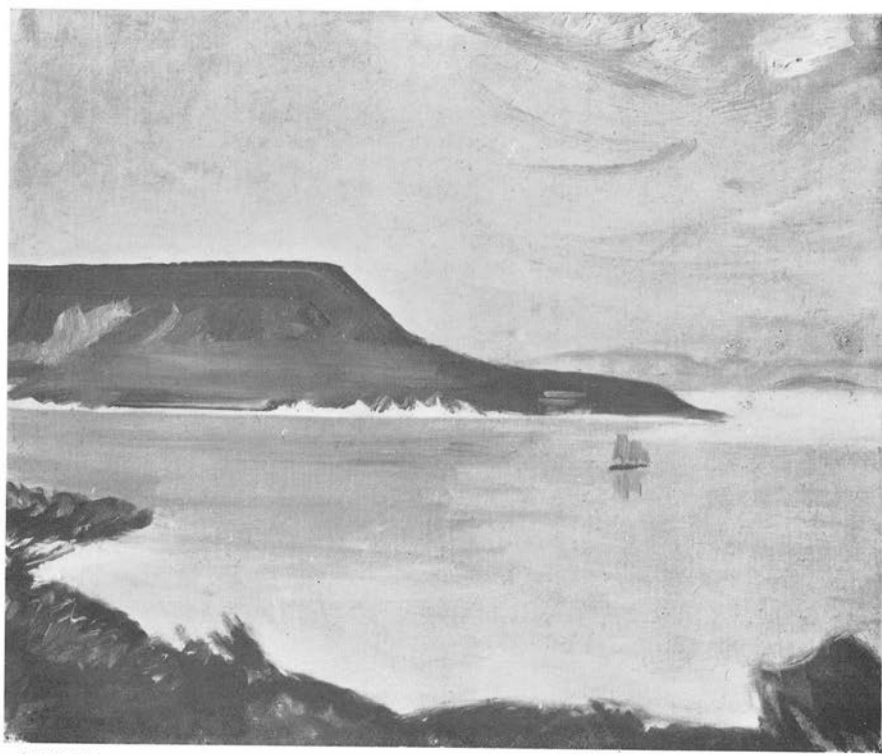
眞寫井村

念一宮會（展立獨）物静子種



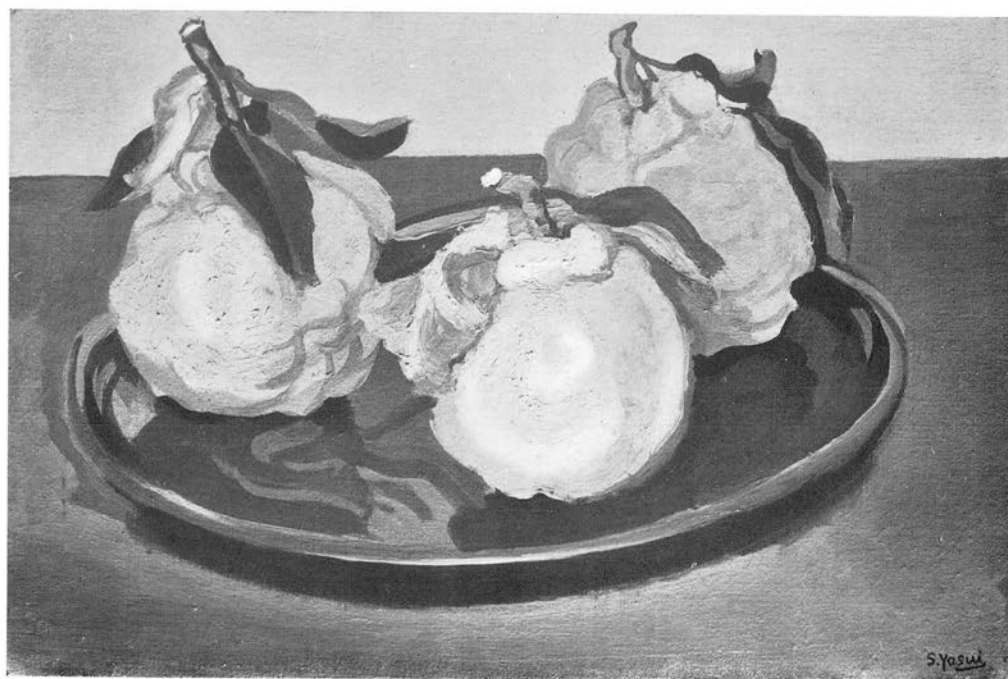
眞寫井村

外軌口川（展立獨）題 無



眞寫堂龍永

二武島藤(家大十)島屋



眞寫堂龍永

郎太曾井安(家大十)柑寶三



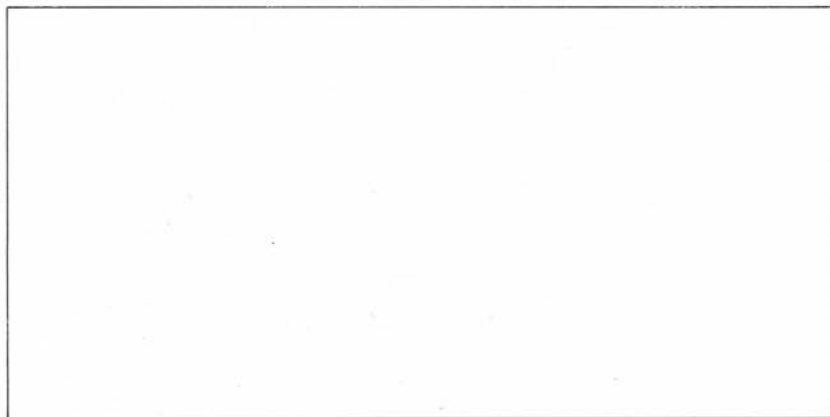
眞寫井村

作和林小(展立獨)雨照日



會同眞寫

羊白田倉(會陽泰)火きた



眞寫井村

康・藤伊(展立獨)(川野熊)霧雨



會同眞寫

八莊村木(會陽泰)作習驛宿新



會同眞寫 昇 川谷長 (會陽春) ルデモ



會同眞寫 郎一源立足 (會陽春) 根尾録西



會同眞寫 三鶴井石 (會陽春) 風屏面扇花艸女婦



會同眞寫 勝 田 森 (會陽春) 女の袋手い黒



會同眞寫 兒青海鳥 (會陽春) 邊 海



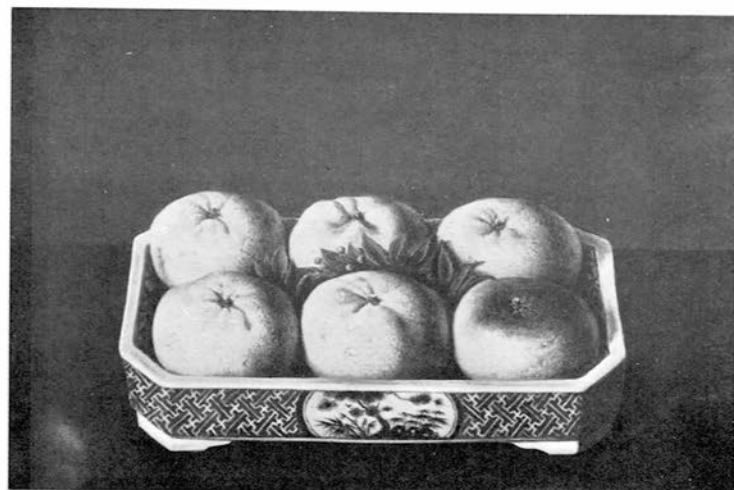
眞寫社原桃

造愛辻 (會畫國) 崎 菱



眞寫本坂

藏品下山 (會畫國) 泰岳駒斐甲



眞寫社原桃

雄貞椿 (會畫國) 圖之柑蜜夏



眞寫社原桃

英 西川 (會畫國) 物靜內室



眞島社源桃

郎三龍原梅 (展國) 赤島櫻



眞島社源桃

郎一理島川 (會畫國) 森



眞島社源桃

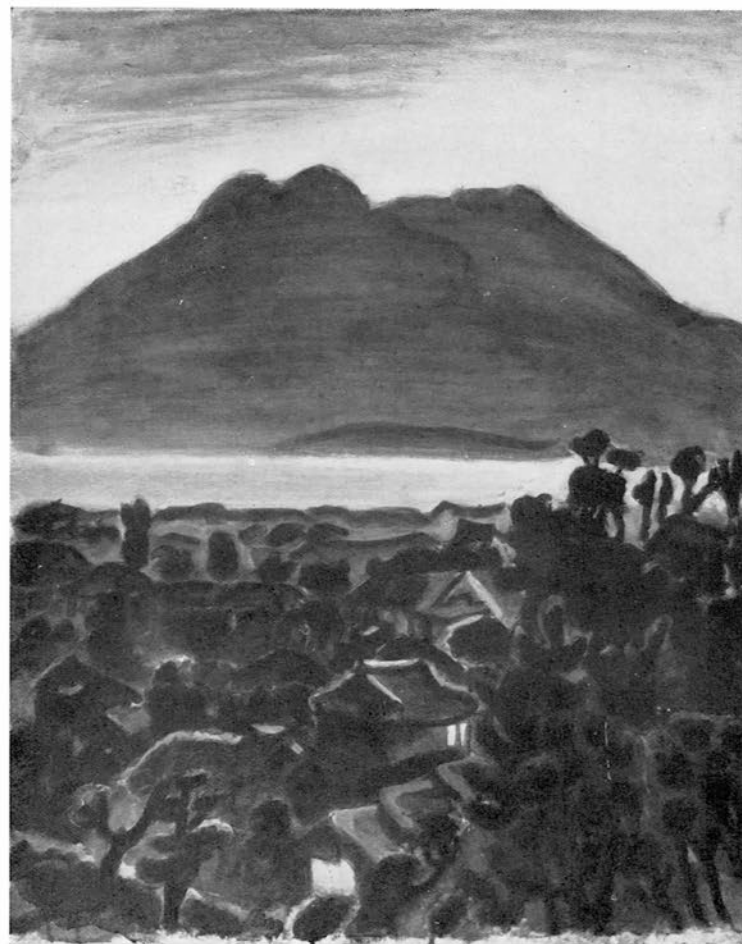
三哲藤佐 (會畫國) 苦



信樂 (京都美術展) 須田國太郎



新緑の森 (京都美術展) 鹿本子孟郎

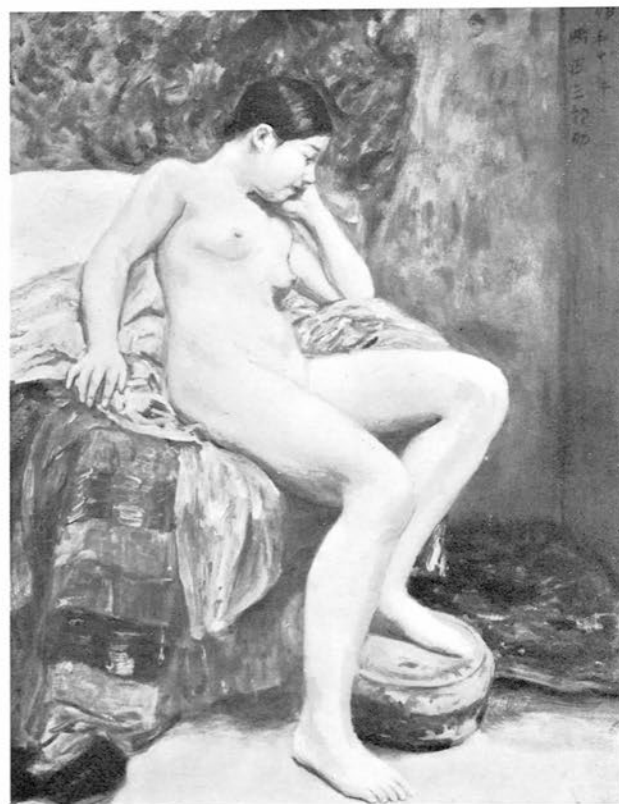


桃源社真

櫻島朝 (清光會) 梅原龍三郎



郎太曾井安 (會光清) 女 少



真寫社藝巧塚大

助郎三田岡 (會靖四) 婦 裸

海（四皓會） 藤島武二

大塚巧藝社寫真



杏の花（四皓會） 和田三造

大塚巧藝社寫真



榛名湖（四皓會） 滿谷國四郎

大塚巧藝社寫真



眠れる女（個展） 藤田剛治

村井寫真





會同眞寫

村梅邊河（展術美一第）たの



眞寫堂龍求

平良磯小（展個）像坐人婦



眞寫井村

治嗣田藤（展個）店飯人那支連大



三敬由小（展個）城長里萬



薔薇（三越洋畫展）南 薫 造

葉山堂寫真



眞寫堂龍永

平良磯小（展個）景 風



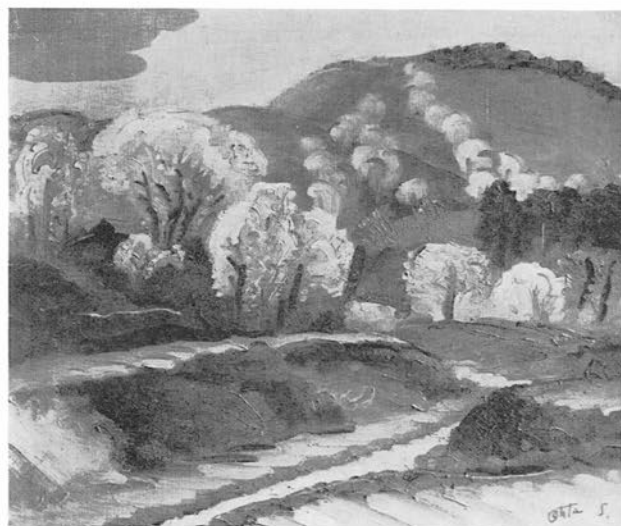
眞寫堂山葉

郎太新下山（展畫洋越三）薔 薇



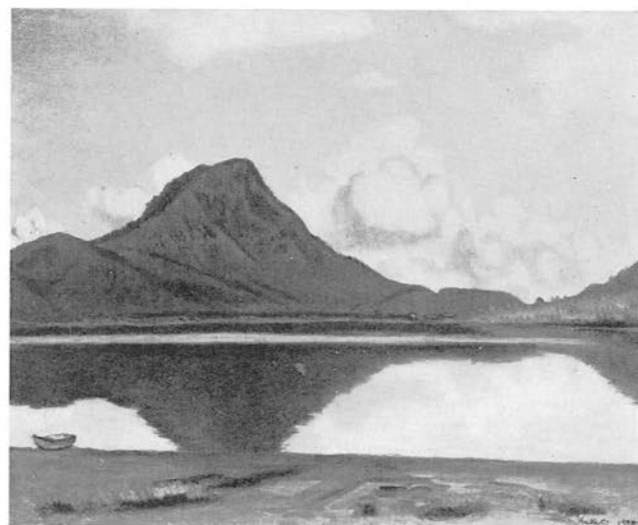
裸婦（三越洋畫展）阿以田 治 修

葉山堂寫真



春光（三越洋畫展）太田三郎

葉山堂寫真



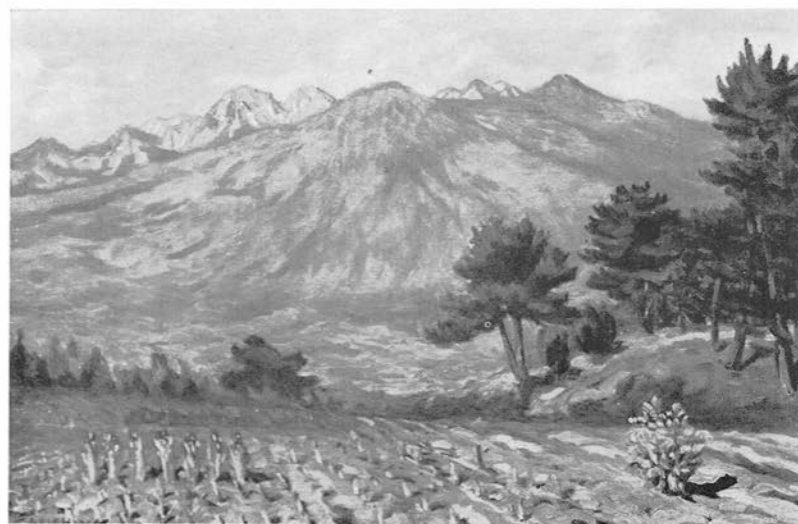
榛名湖（三越洋畫展）石井柏亭

葉山堂寫真



筑波山葉山寫真

夏富士（三越洋畫展）正宗三郎



葉山堂寫真

晚春の八ツ嶽（三越洋畫展）有馬生馬



眞寫堂山葉 作 英 田 和 (展畫洋越三) 花 の 閑



眞寫堂山葉 郎 五 安 宅 安 (展畫洋越三) ら ば



眞寫堂山葉 雄 虎 野 牧 (展畫洋越三) 藥 芍



眞寫堂山葉 馬 久 千 木 鈴 (展畫洋越三) ヤ リ ズ



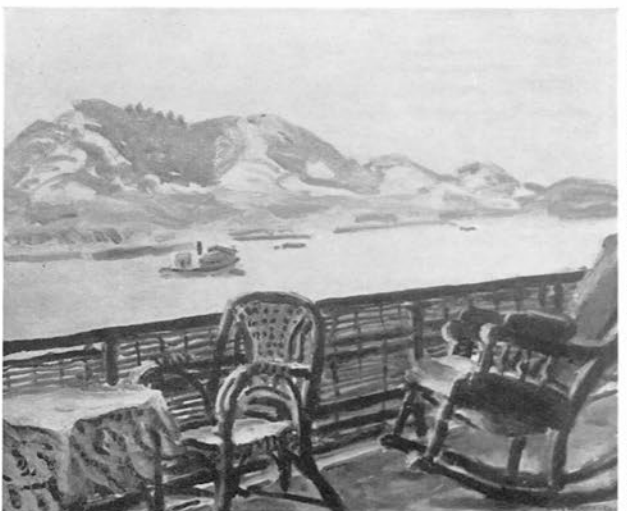
長野郊外（三越洋畫展）岡田三郎助

葉山堂寫真



臥せる裸婦（三越洋畫展）伊原宇三郎

葉山堂寫真



海邊の宿（三越洋畫展）中村研一

葉山堂寫真



大阪城の朝（三越洋畫展）熊岡美彦

葉山堂寫真



三笠の月(二科) 鍋井克之

葉山堂寫真



天の橋立の雪(二科) 鍋井克之

葉山堂寫真



吉野山の櫻(二科) 鍋井克之

葉山堂寫真



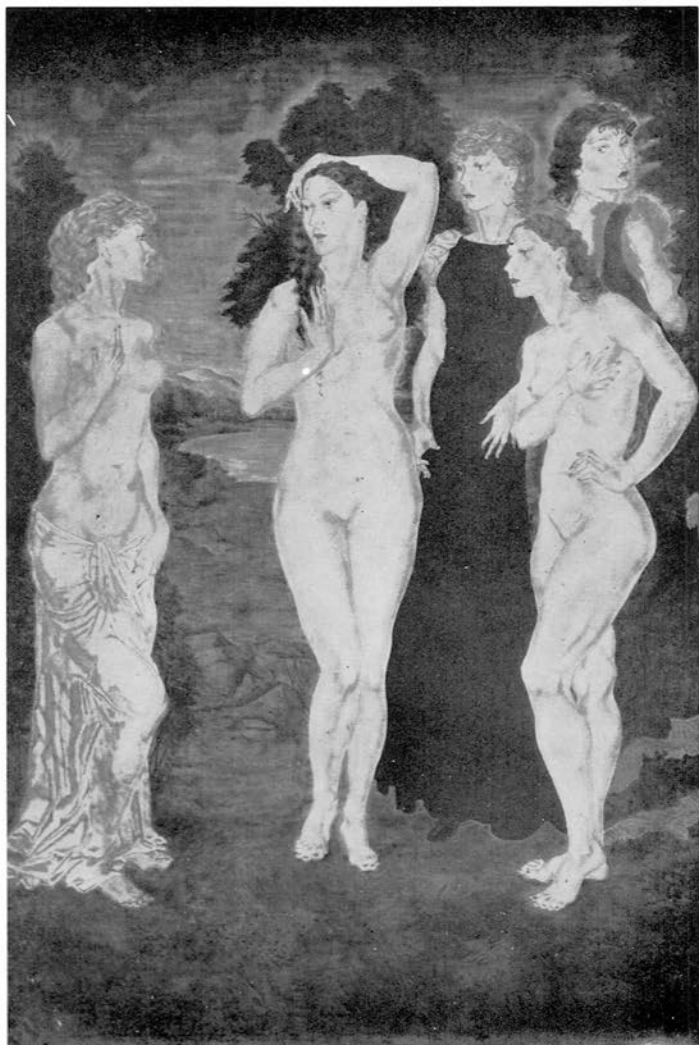
眞寫堂山葉 吾省口田 (科二) 席物見



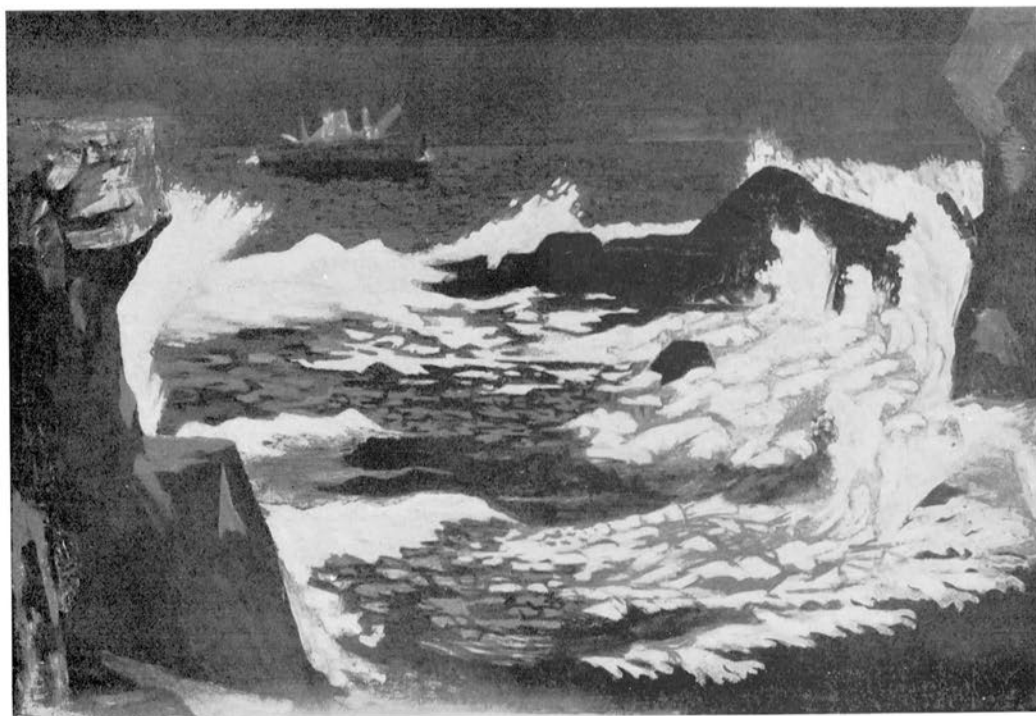
吉潤井向 (科二) B作習子踊
眞寫堂山葉



雄虎宅安(科二)鏡手



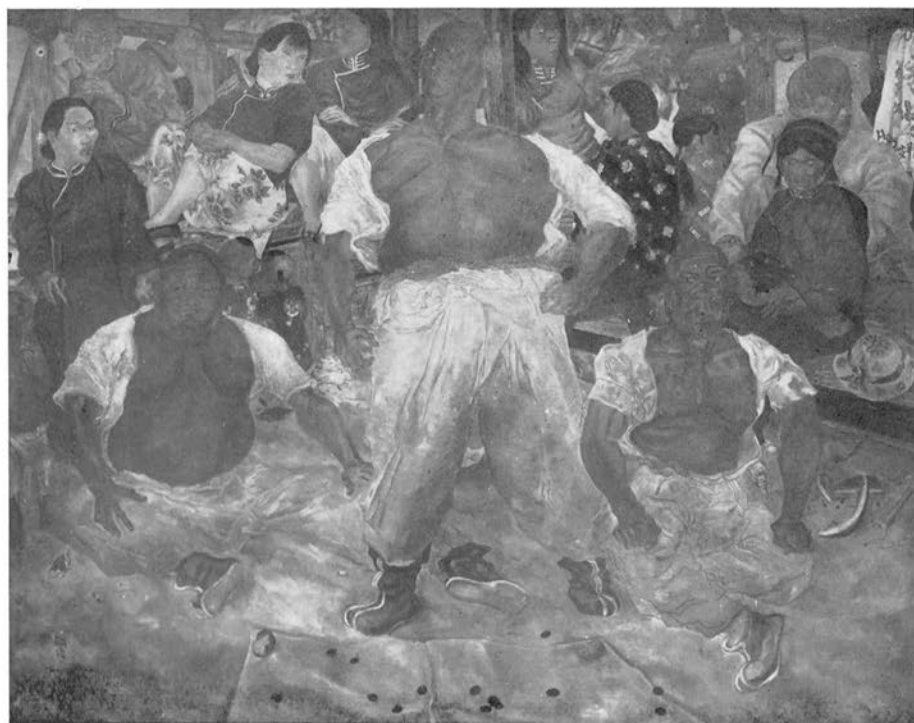
治嗣田藤(科二)女人五



海(二科) 服部正一郎



晚夏交響樂(二科) 野間仁根



北平の力士(二科) 藤田嗣治



Y夫人の肖像(二科) 藤田嗣治



婦女三容（二科） 宮本三郎



眞島堂山葉

兒青郷東（科二）光月



眞島堂山葉

兒青郷東（科二）袋手



坐像(二科) 高岡徳太郎

葉山堂寫真



おはなし(二科) 岡田謙三

葉山堂寫真



七夕(二科) 錦義一郎

葉山堂寫真



うちわ(二科) 島崎鶴二

葉山堂寫真



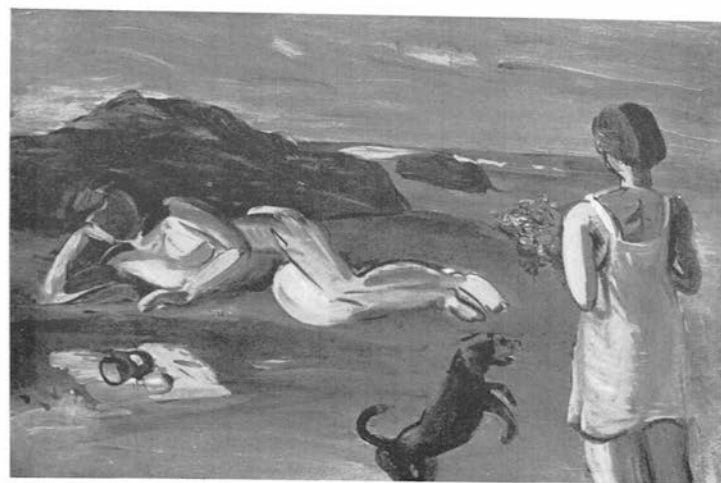
眞寫堂山葉

一義岸峰 (科二) 説 の 水



眞寫堂山葉

郎二繁木坂 (科二) 馬 仔 二



眞寫堂山葉

元紀川中 (科二) 題 無



眞寫堂山葉

郎太重田黒 (科二) 秋立上卓



真寫堂山葉

吾省口田（科二）（一）圖之飲吸片阿



真寫堂山葉

二卓出小（科二）船 漁



カリン（二科）正宗得三郎

葉山堂寫真



室より（二科）礒伊之助

葉山堂寫真



眞寫井村

助之喜原老海（展立獨）顔



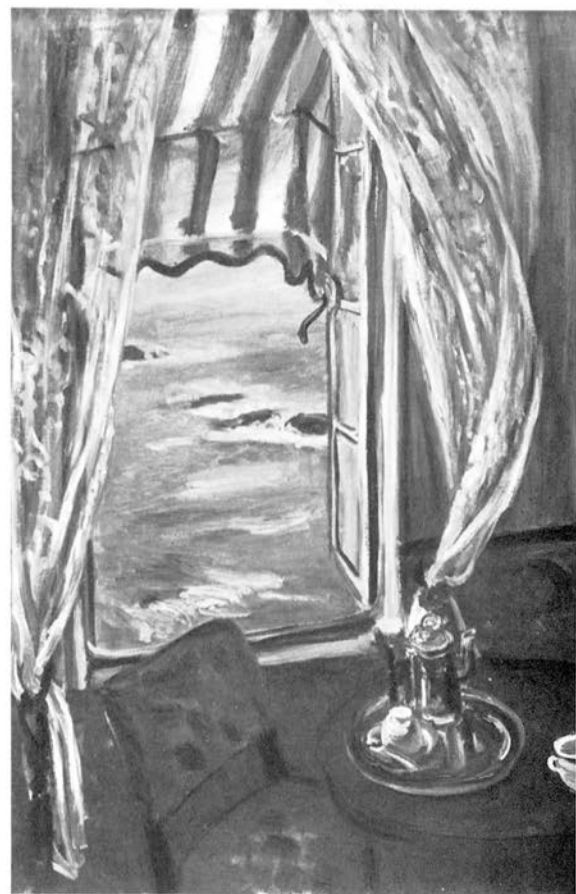
眞寫井村

巍山中（展立獨）物靜外野



眞寫井村

彦正尾妹（展立獨）女少る賣を魚



眞寫堂山栗

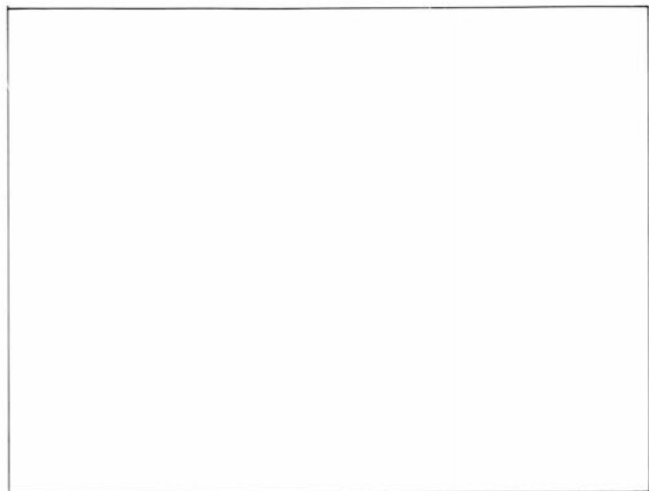
新家古（科二）風海



海（個展）曾宮一念



熱海（第二回鑑賞會）梅原龍三郎



瓜類（獨立展）伊藤康

村井寫眞



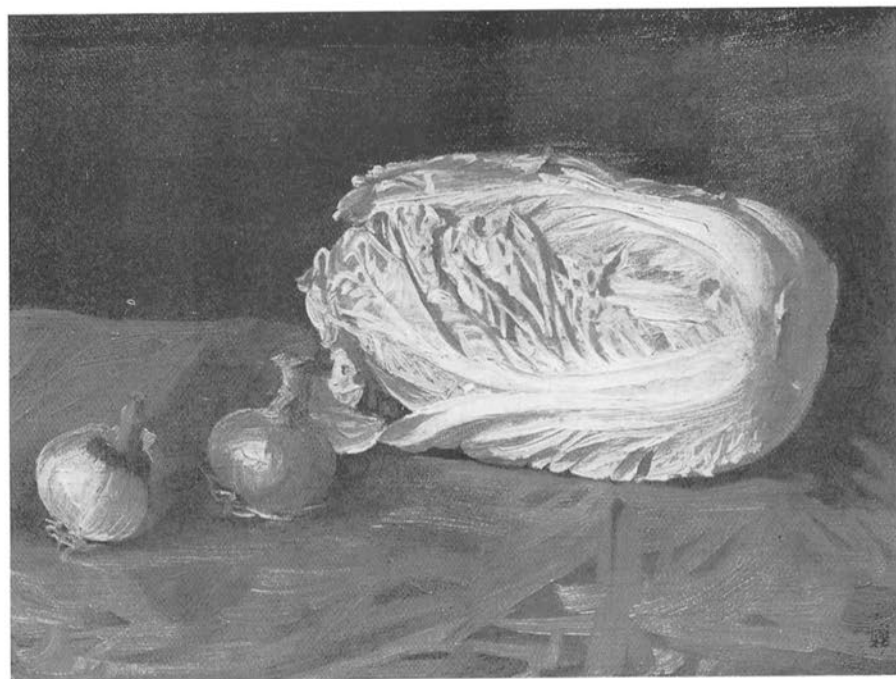
あまりゝす（獨立展）曾宮一念

村井寫眞



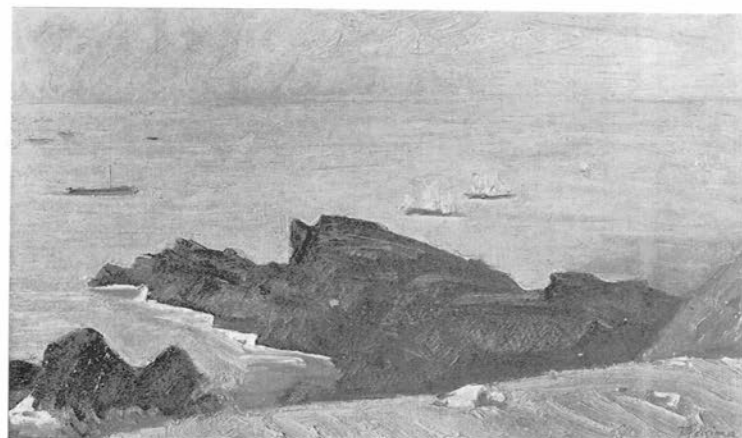
八ツ岳 (青樹社秋期展) 山下新太郎

青樹社寫真



白 菜 (青樹社秋期展) 山本鼎

青樹社寫真



眞寫社樹青

二 武島 藤 (展期秋社樹青) 海



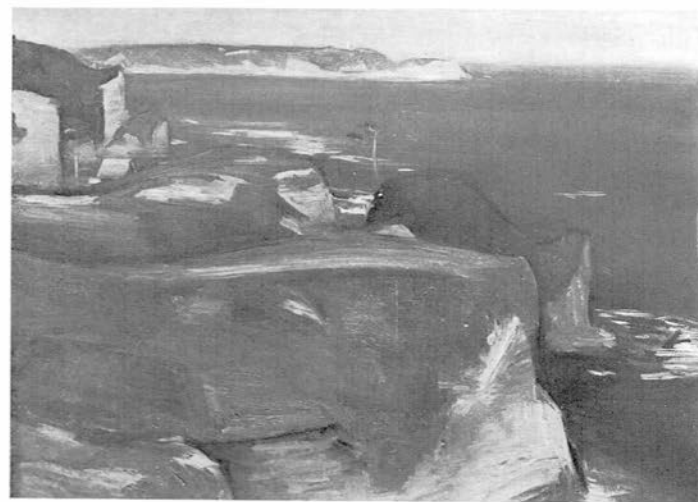
手賀沼 (青樹社秋期展) 石井 柏亭

青樹社寫眞



眞寫社樹青

助 郎 三 田 岡 (展季秋社樹青) め 眺 の 隠 戸



眞寫社樹青

三 平 山 金 (展期秋社樹青) 原 鶴



真寫堂山葉

彦美岡熊（會光東）女裸室那支



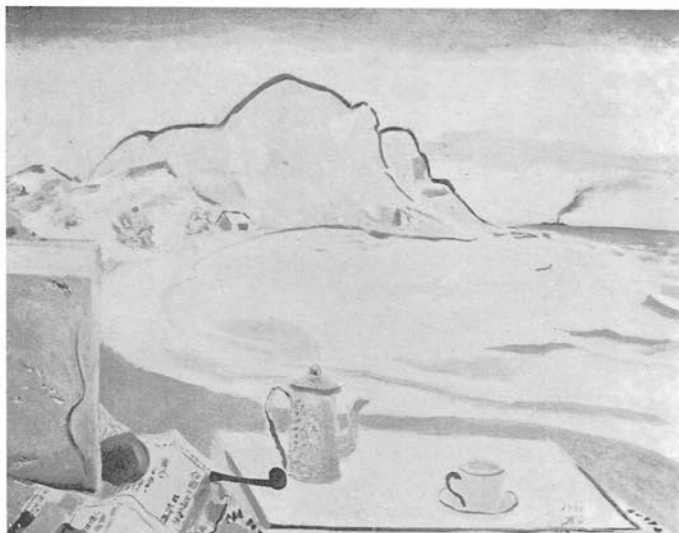
真寫堂山葉

二百八本橋（會光東）海 雲



真寫堂山葉

治清田堀（會光東）屋 靴



岬の見える静物（東光會）高間惣七

葉山堂寫真



花（東光會）齋藤與里

葉山堂寫真



搾乳（東光會）井上脩

葉山堂寫真



横塘の亭子橋（東光會）熊岡美彦

葉山堂寫真



眞島堂山葉

藏謙日野（會光東）りはまひと家の日夕



眞島堂山葉

達尾中（會光東）蔭樹



眞島堂山葉

七惣間高（會光東）座銀



眞寫堂山葉

作 清山遠 (會部二) てへ越を丘



眞寫堂山葉

修治田以阿 (會部二) 茹 蔀



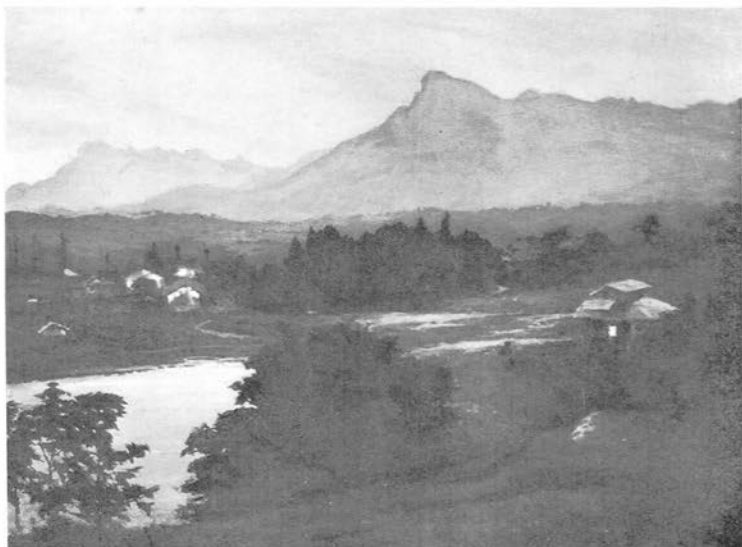
平良磯小 (會部二) 女の髮本日

芦の湖（二部會）中村不折



葉山堂寫真

妙義山（二部會）三宅克己



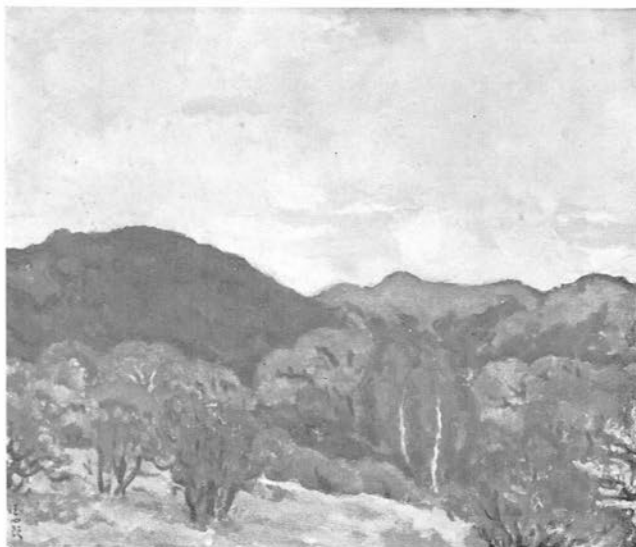
葉山堂寫真

神戸港の朝陽（二部會）藤島武二



葉山堂寫真

赤城の新緑（二部會）滿谷國四郎



葉山堂寫真



若葉の伊豆(二部會) 辻 永

葉山堂寫眞



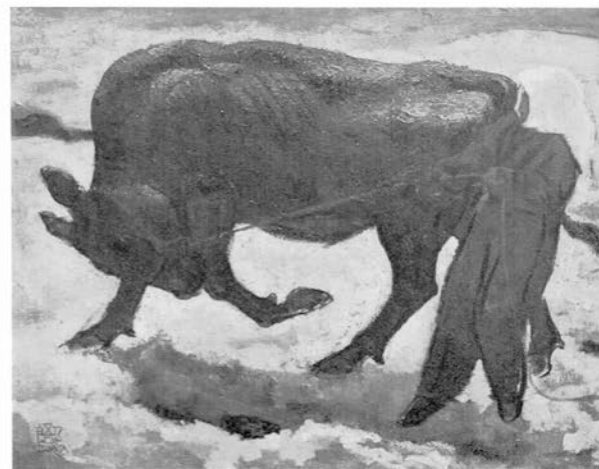
眞寫堂山葉

吾萬林小(會部二) 波るたせ寄



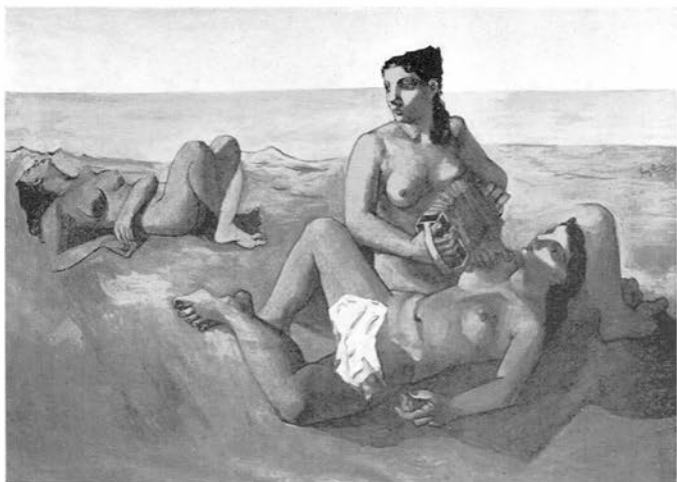
子供達(二部會) 内田 巖

葉山堂寫眞



玄 牛(二部會) 鶴田 吾郎

葉山堂寫眞



海邊裸婦（二部會）佐藤 敬

葉山堂寫真

瀬戸内海（二部會）中村 研一

葉山堂寫真



婦人帽子店（二部會）中西利雄

葉山堂寫真



海と女（二部會）猪熊弦一郎

葉山堂寫真





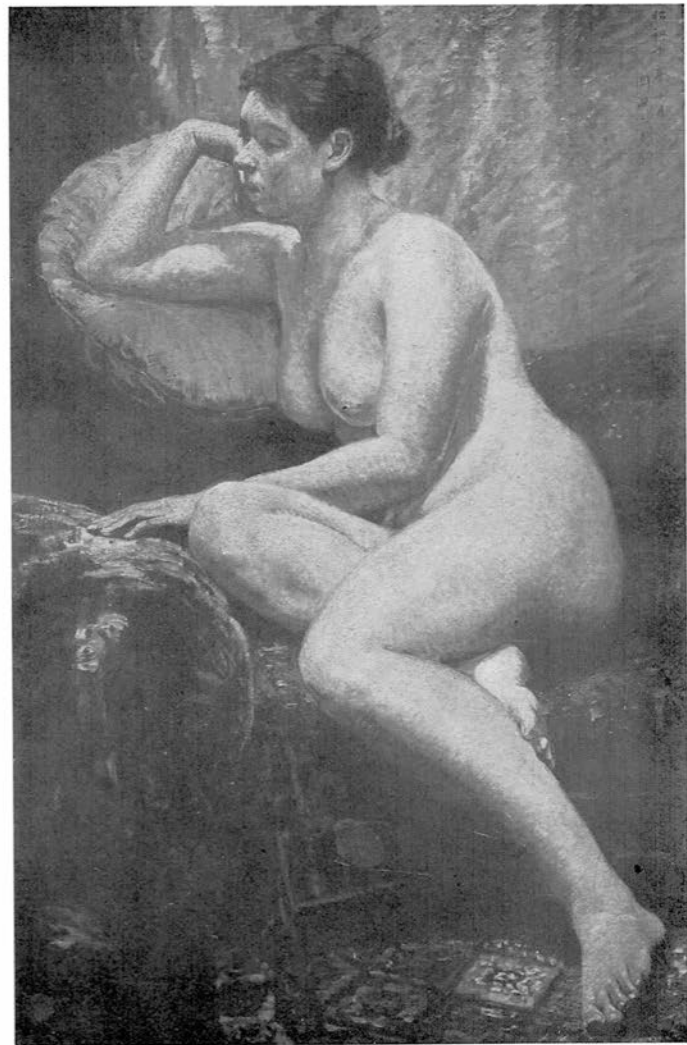
葉山堂寫真

伊勢正義 (會部二) 集



樹下 (二部會) 權藤種男

葉山堂寫真



裸婦 (二部會) 岡田三郎助

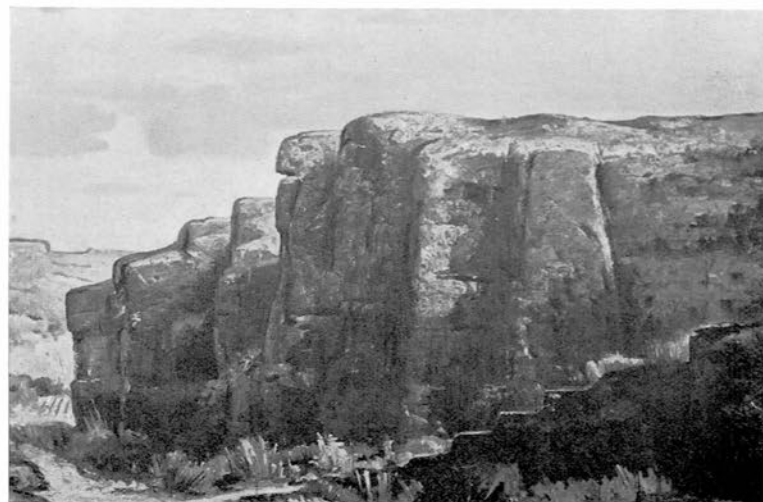


浴衣(二部會) 寺内萬治郎



教會の人(二部會) 三田 康

葉山堂寫真



峯(二部會) 會員辰雄

葉山堂寫真



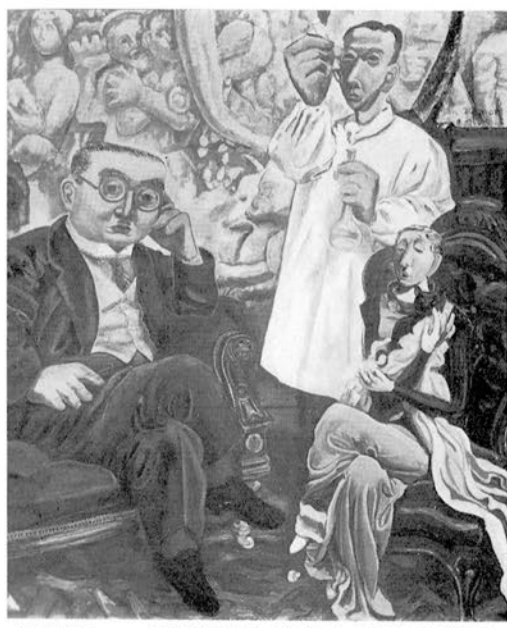
眞島堂山葉 造 薫 南（會部二）女 少



眞島堂山葉 造 三 田 和（會部二）内 の 室 畫



眞島堂山葉 郎 三 田 太（會部二）ちた娘の州房



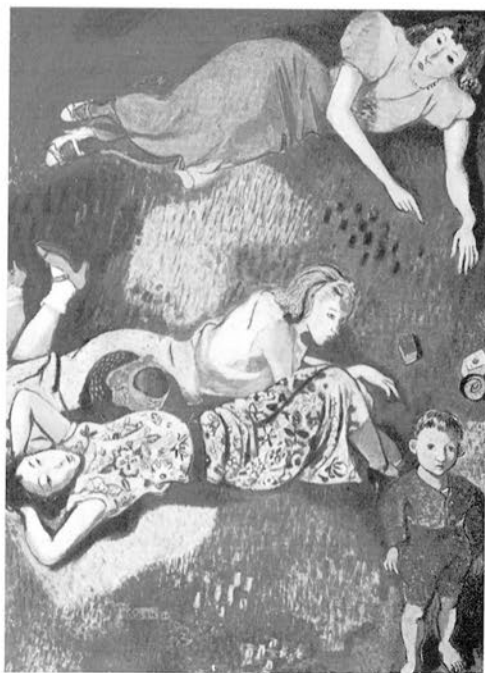
眞島堂山葉 門衛右閑井朝（會部二）族家其と者學古考



明
貌（二部會）伊原宇三郎



眞寫堂山葉 平純藤江（會部二）娘のヤシロ



ピクニック（二部會）脇田和

葉山堂寫眞



均部池(會部二)景 酸



三平山金(會部二)光 春



眞寫堂山葵

郎三鍋頭鬼（會部二）後 午



至 邊 田（會部二）像 女 少



小 禽 (二部) 白瀧之助



野々山氏寄贈 東京市民裁判所々藏風景畫 辻 永



銀座聖書館内ブラジル珈琲陳列所壁畫（其一） 藤田嗣治



同上（其二）



治 嗣 田 藤 (三共) 畫壁所列陳珮珈ルジラブ内館書聖座銀



眞寫社藝巧塚大

郎太曾井安 (展催主堂龍求) 蓮 睡 と 松



伊能忠敬先生像（國畫會）清水多嘉示

桃源社寫真



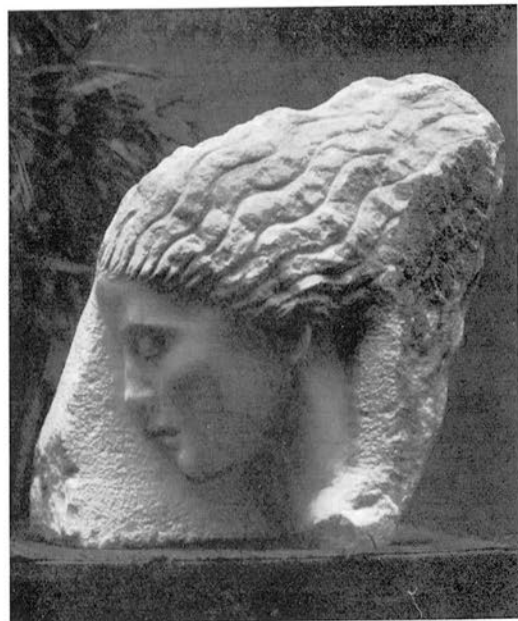
裸婦立像（日本美術院）山本豊市

大塚巧藝社寫真



ロマン・ローラン夫人像（國畫會）高田博厚

桃源社寫真



プロフィール（日本美術院）武井直也

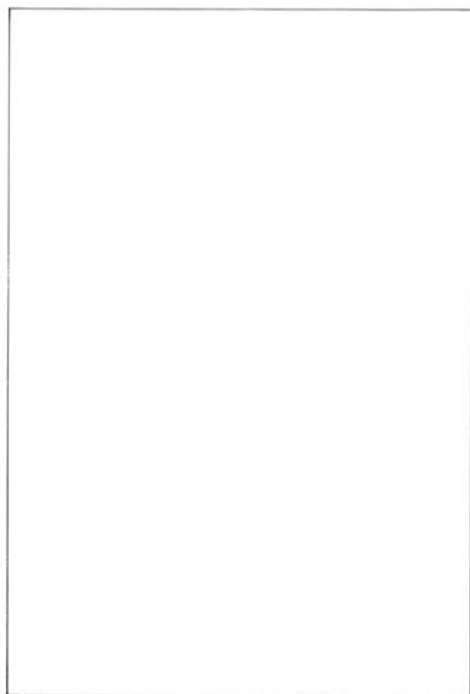
大塚巧藝社寫真



顔（第一美術展）早乙女龜次



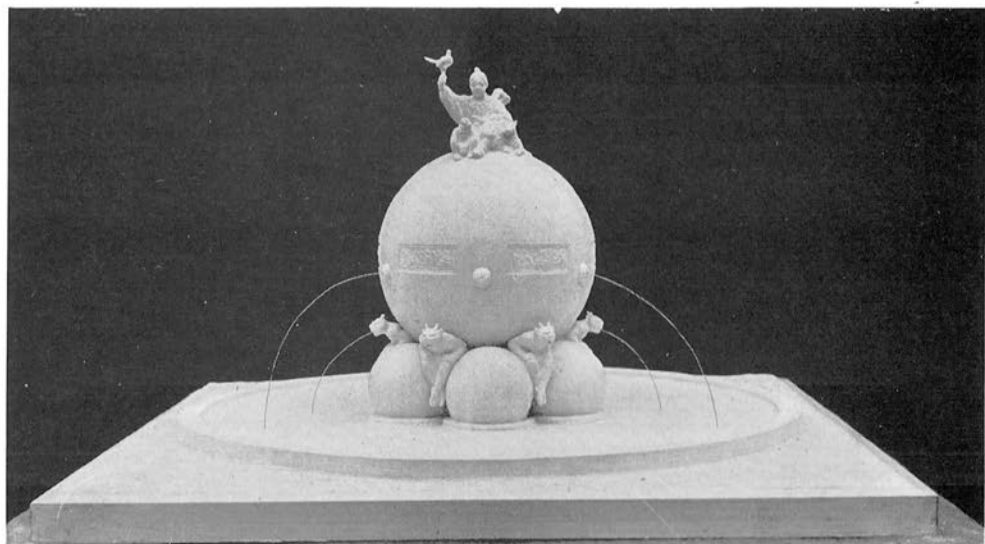
照 藤 安（社人地）二 第 像 胸



郎四勝田村（社人地）首のんやち壯



之 尙 田 松（展術美市都京）憩



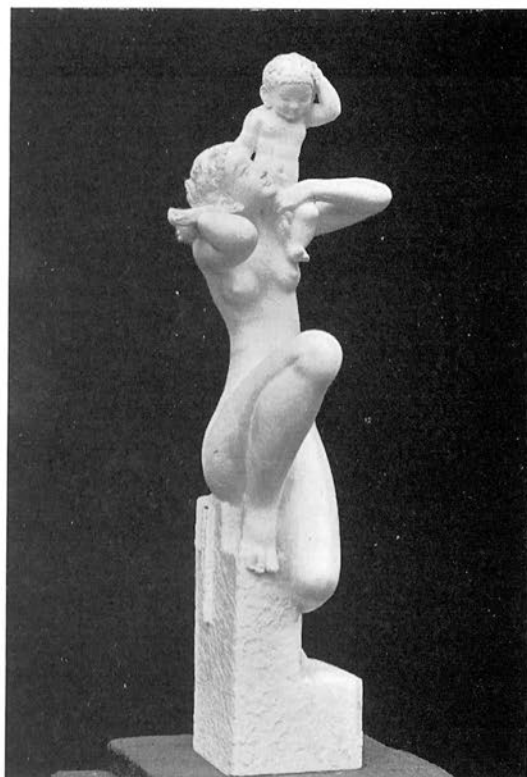
真島本野

巖素藤齋（社造構）飾裝園公兒小



真島本野

一清藤後（社造構）片斷



真島本野

一清藤後（社造構）子母



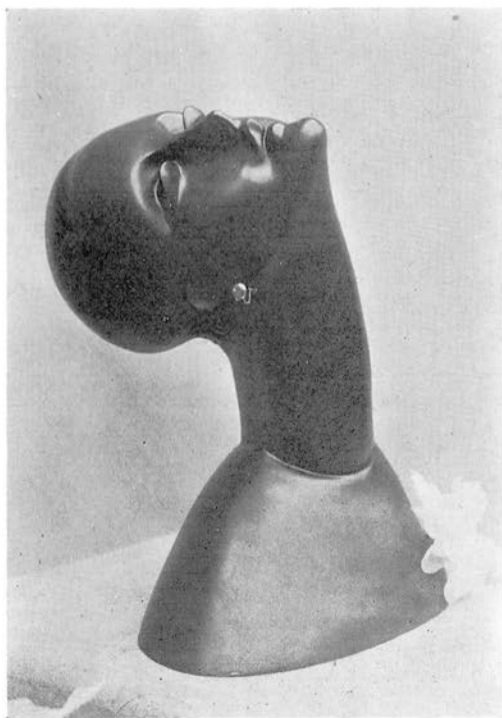
征空記念塔（構造社）安永良徳

野本喜貞



流雲（構造社）柚月芳

野本喜貞



作品A（構造社）荻島安二

野本喜貞



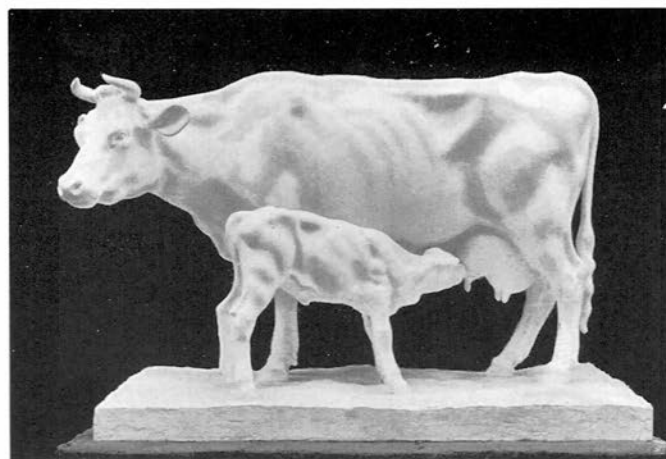
高橋正雄先生（構造社）河村龍興

野本喜貞



眞寫本野

巖索藤齋（社造構）像公補大



眞寫本野

松武藤進（社造構）乳哺



徳良永安（社造構）型原ルダメ技競上水際園米日



眞寫堂山葉

郎次外村松（科二）川の天

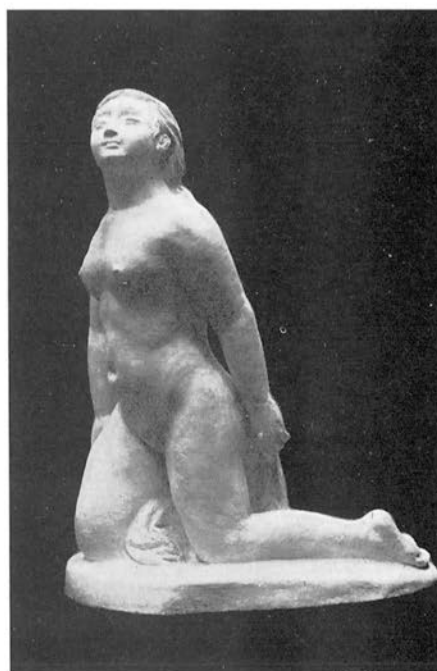


國土を護る（部分習作）日本刀（二科）渡邊義知

葉山堂寫眞



眞寫堂山葉 知義邊渡空（分部）る護を土國



婦人裸像（院展）大内青圃

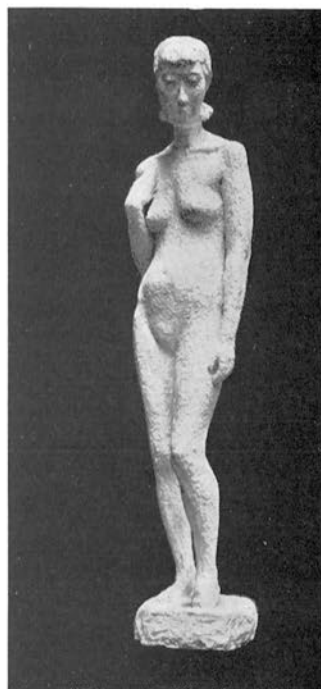
大塚巧藝社寫眞



桃太郎(二科) 松村外次郎

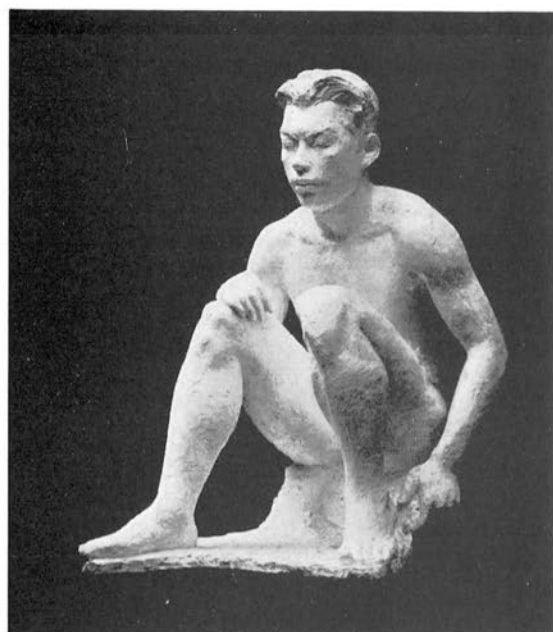


石工(院展) 中村直人



少女裸形(院展) 辻汎吉

大塚巧藝社寫真



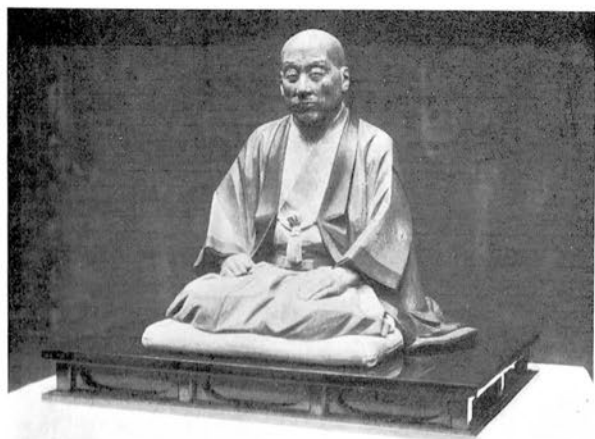
大塚巧藝社寫真

遊佐蓮手像(院展) 山本豊市



大塚巧藝社寫真

若き男(院展) 石井鶴三



眞寫社藝巧塚大

中田 樺平 (展院) 像 氏 澤 辰



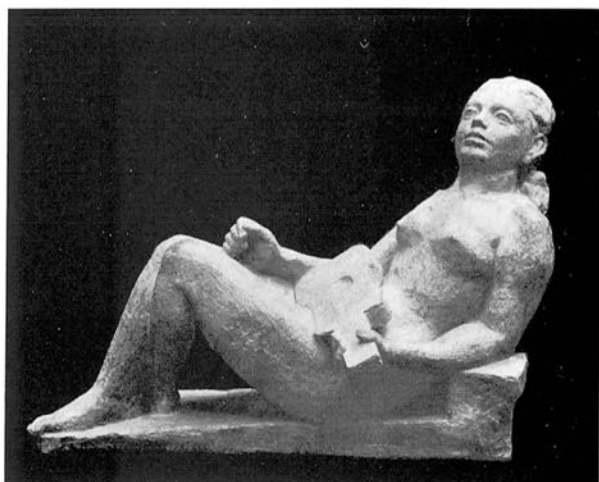
眞寫堂山葉

夫 辰 塚 大 (塾倉朝) 線 平 水



眞寫社藝巧塚大

也 直 井 武 (展院) 子 M



眞寫堂山葉

男 季 置 笠 (科二) 女 っ 持 を 器 樂



赤ぼんち（新興美術家展） 故木村五郎

同展記録 39



門野重九郎氏像（三部會） 小倉右一郎

葉山堂寫真



眞寫堂山葉

義高井三（會部三）ータービ



眞寫堂山葉

吉正 炯（會部三）月 望



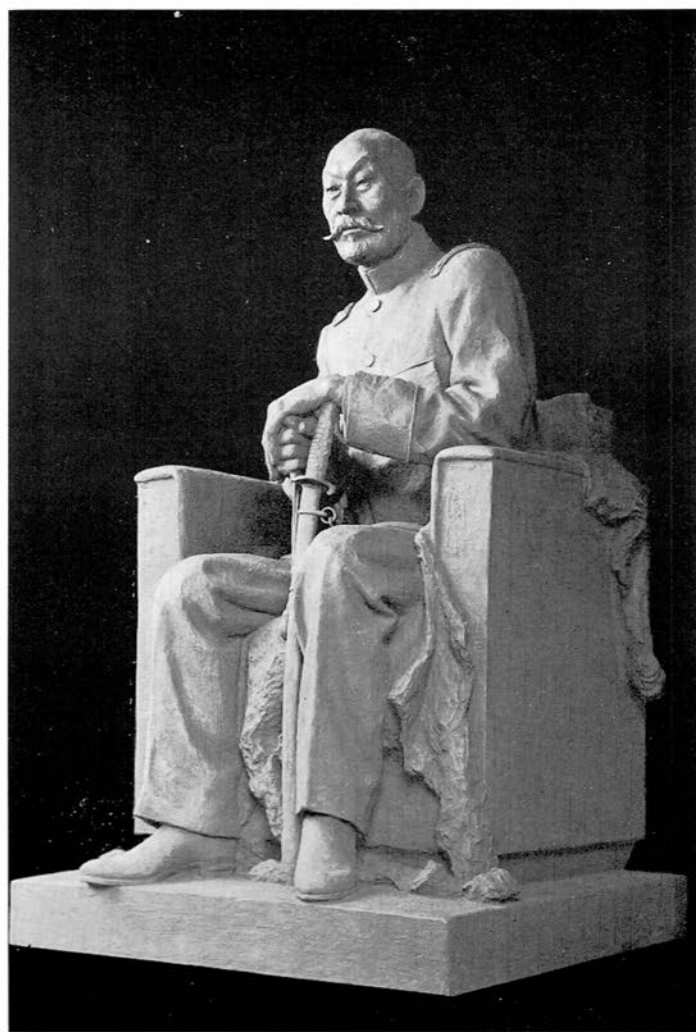
眞寫堂山葉

八勇田池（會部三）花 尾



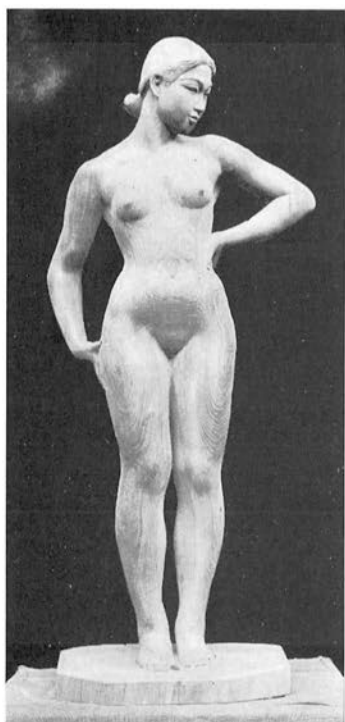
眞寫堂山葉

八勇田池（會部三）馬勝優



眞寫堂山葉

夫文倉朝（塾倉朝）像督總內寺



地の動き(三部會) 開發芳光

葉山堂寫真



羅浮仙(三部會) 石川確治

葉山堂寫真



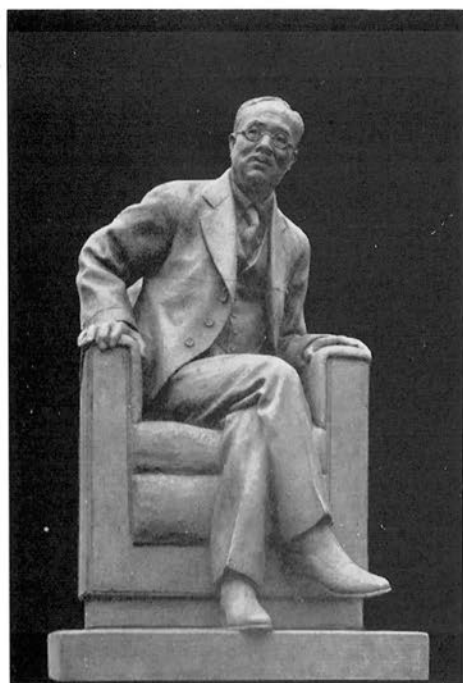
亂舞(三部會) 吉田久繼

葉山堂寫真



投槍(三部會) 高桑文雄

葉山堂寫真



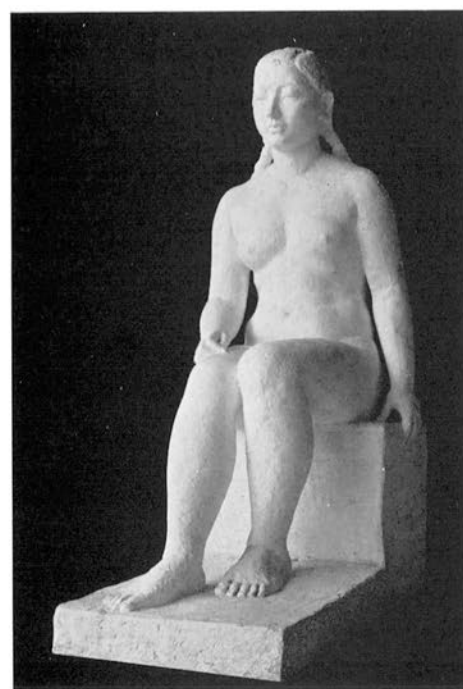
武藤氏の像（朝倉塾）朝倉文夫

葉山堂寫真



宗麟像（三部會）日名子實三

葉山堂寫真



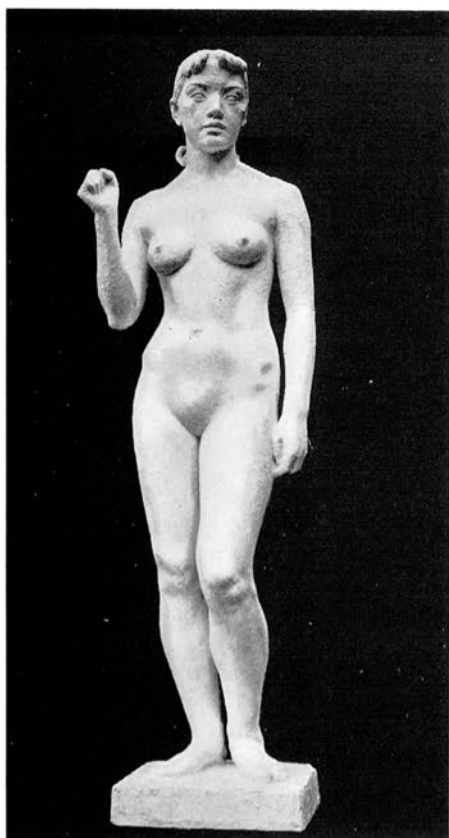
習作二（朝倉塾）大河内信秀

葉山堂寫真



雅子之像（三部會）石川確治

葉山堂寫真



裸婦（東邦彫塑院）大須賀力

葉山堂寫真



立女（第三部會）向山峽路

葉山堂寫真



顯現（東邦彫塑院）富岡芳堂

葉山堂寫真



春を包む 東邦彫塑院 矩幸成

葉山堂寫真

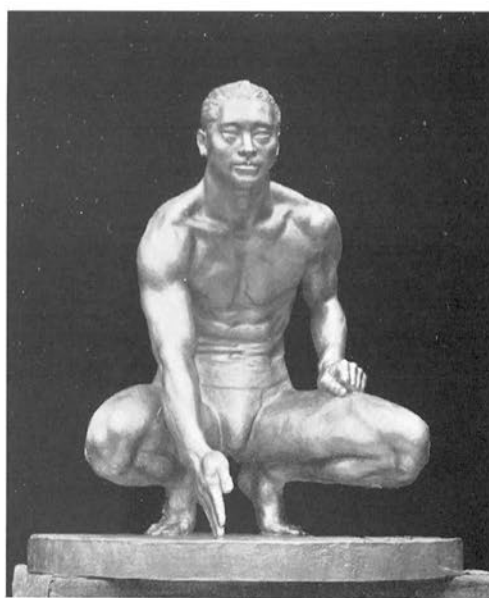


古延内竹 (院塑彫邦東) 女少のーラーセ
眞寫堂山葉



眞寫堂山葉

十七村中 (院塑彫邦東) 像 胸



眞寫堂山葉

郎治宮雨 (院塑彫邦東) 容 從

鶏 (東邦彫塑院) 富永朝堂



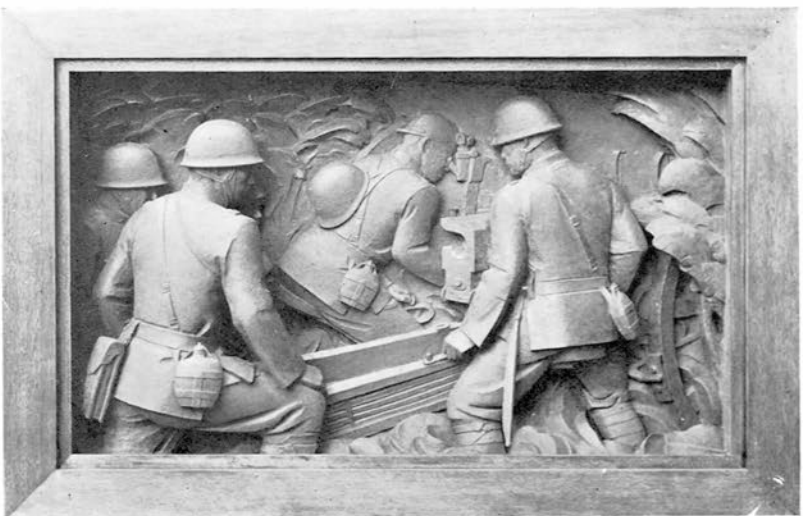
葉山堂寫真

芭蕉 (東邦彫塑院) 赤堀信平



葉山堂寫真

陸軍 (砲兵) (東邦彫塑院) 一色五郎 葉山堂寫真



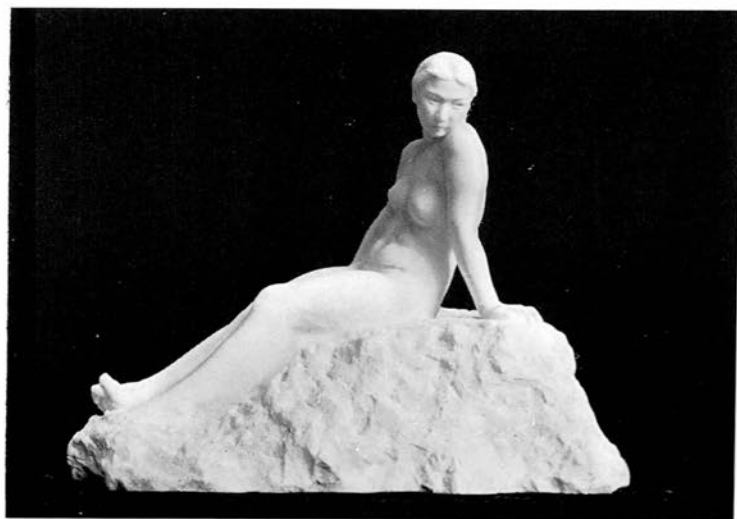
玄峰老師 (東邦彫塑院) 長谷川英作



葉山堂寫真



逍遙博士像 長谷川榮作



腰かけた女（東邦彫像院）北村正信

栗山堂寫真

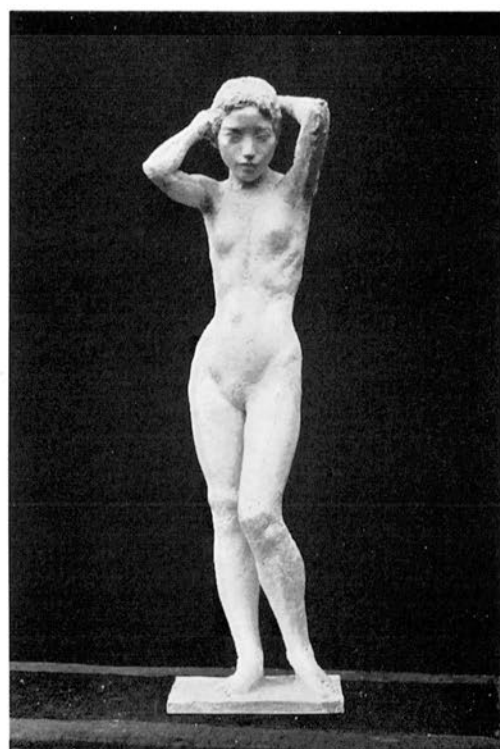


郎太光村高（校學術美京東）像雲光村高



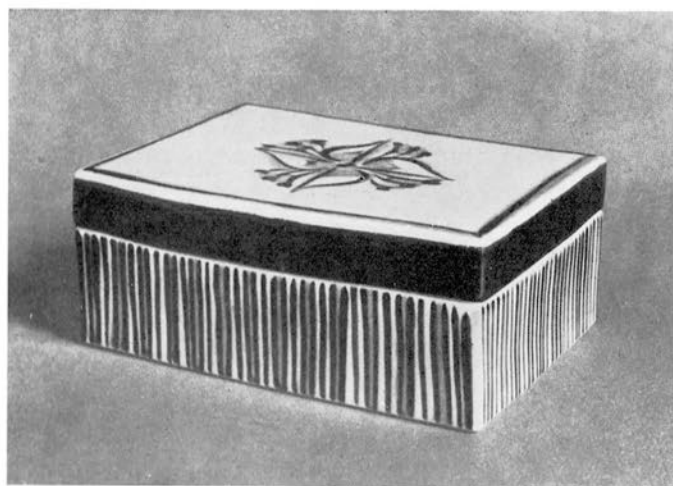
若槻禮次郎男銅像（香川縣高松市）故藤川勇造

伊達政宗銅像（仙臺市青葉城址）小室達



習作（髪）（東邦彫塑院）黒田嘉治

葉山堂寫真



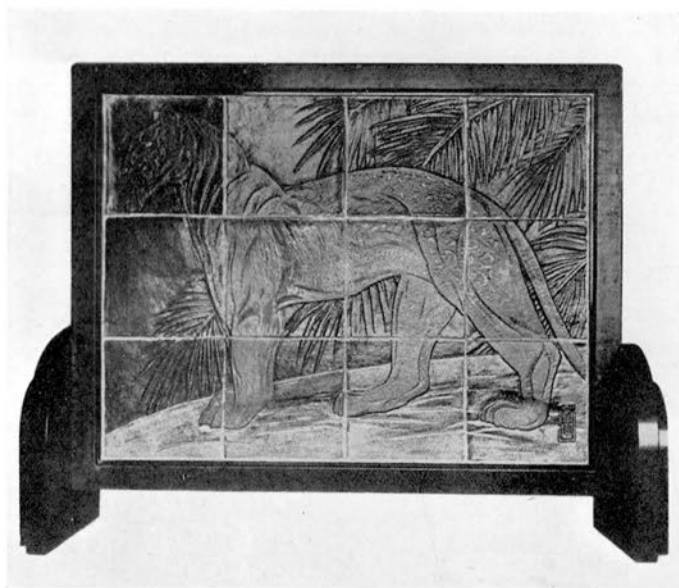
リ口録目展同

吉 憲 本 富 (展品作家大匠陶) 様 模 葉 箱 陶



信 樂 花 生 (個 展) 魯 山 人

同 展 目 録 リ



リ口録目展同

山 宗 田 澤 (展品作家大匠陶) 立 衝 豹



袋 形 花 生 (陶 匠 大 家 作 品 展) 大 樋 長 左 衛 門

同 展 目 録 リ



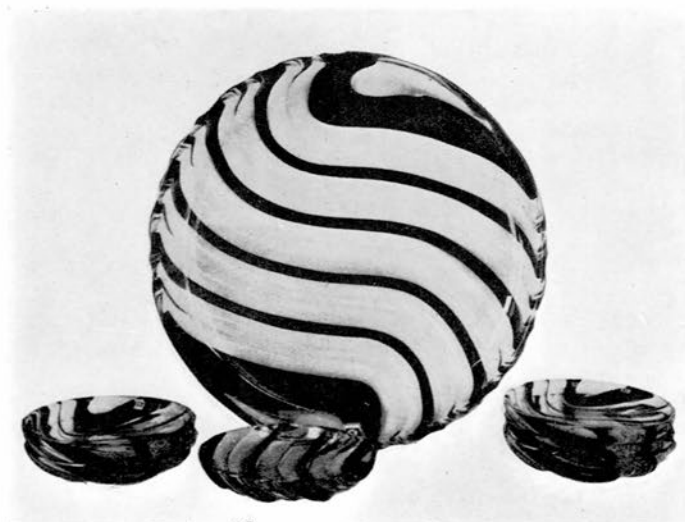
同展圖録ヨリ

鬼小八 堀野 信 之 蔵 治
(展藝工省工商) 箱小キジカウヨシバ魚



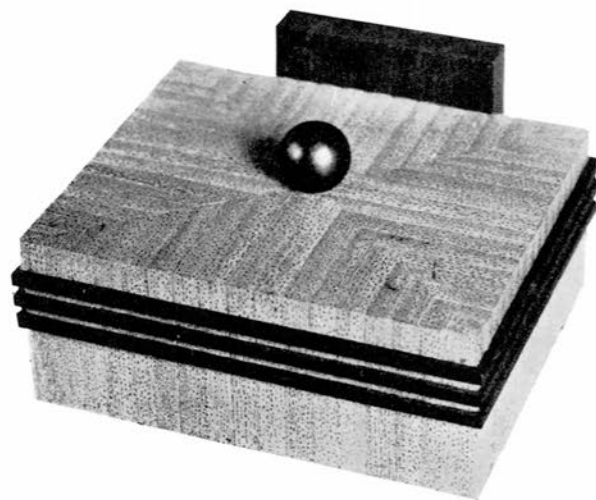
リヨ録圖展同

夫雅尾虎 (展藝工省工商) 器子葉



リヨ録圖展同

郎次傳上河 (展藝工省工商) トツセ物果子切線流



リヨ録圖展同

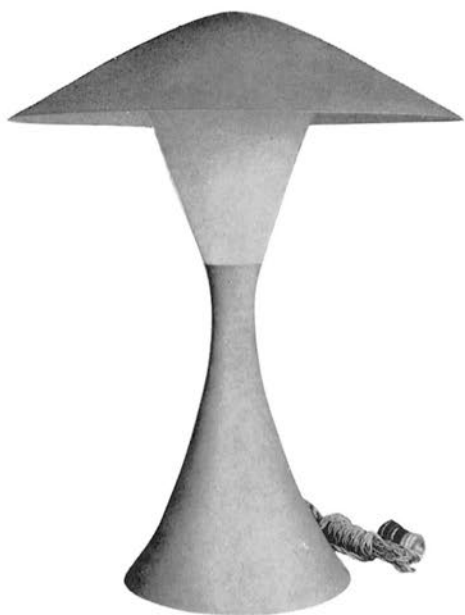
郎太得木青 (展藝工省工商) 莒 真

草花紋花瓶（商工省工藝展） 澤田宗山



同展圖録ヨリ

電気スタンド（商工省工藝展） 國井喜太郎

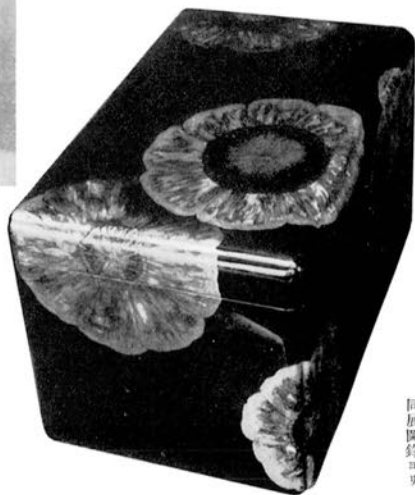


同展圖録ヨリ



平雄川小（會陶東）物置豹

花紋チラン手箱（商工省工藝展） 加藤俊治



同展圖録ヨリ



硝子花瓶（商工省工藝展）各務 謙三

同展目録ヨリ



硝子吸込花瓶 ブドウ（商工省工藝展）宮代 健三

同展目録ヨリ



リロ録圖展同

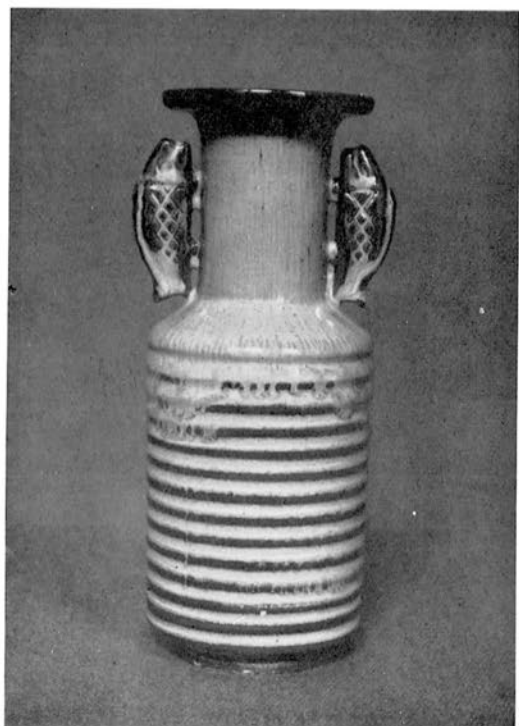
爐自木山（展藝工省工商）瓶花銅鑄



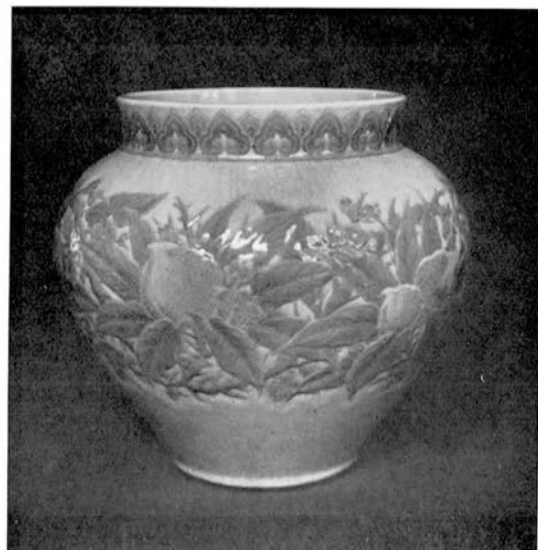
リロ録目展同 郎次寛井河（展個）瓷 青



リロ録目展同 助之卯合河（展個）爐香繪赤鈕禽



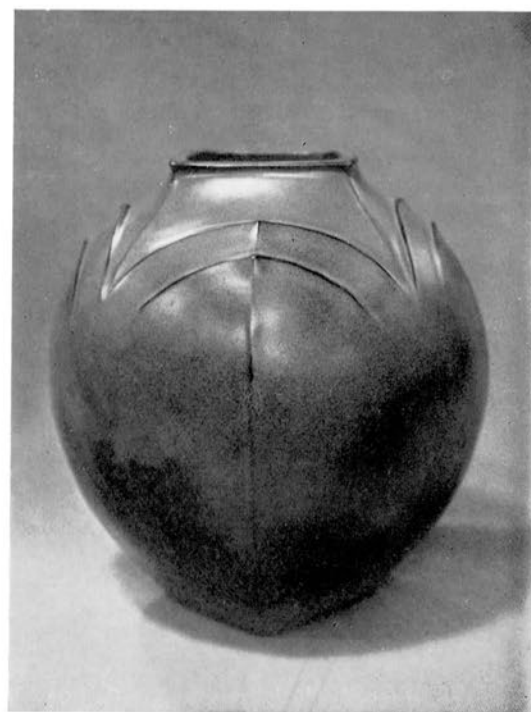
謙原之宮（會陶東）生輪一耳魚双



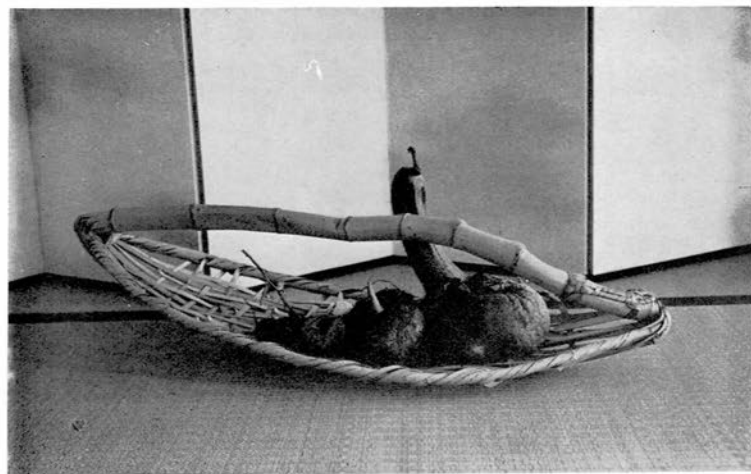
山波谷板（會陶東）瓶花文桃仙磁彩



吉憲本富（展個）磁白



助之榮合河（會條五）瓶花釉毛輝



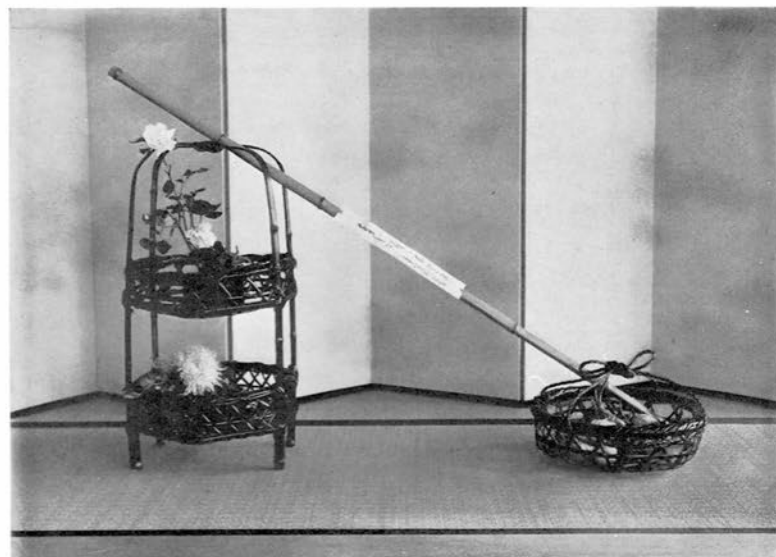
飯環瑠瑠齋 (個展)



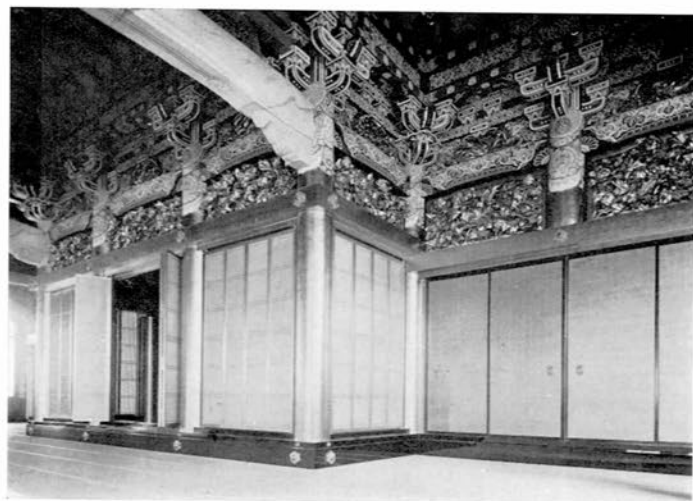
染付羊齒 (個展) 富本憲吉



染付果實文飾皿 (五條會) 清水正太郎



(個展) 飯環瑠瑠齋



眞島昇世築建

部内 寺願本西地築京東



眞島昇世築建

寺願本西地築京東 計設太忠東伊



眞島昇世築建

塔大木根山野高



眞寫所務事江大

院藥寶寺醐醍都京 計設郎太新江大



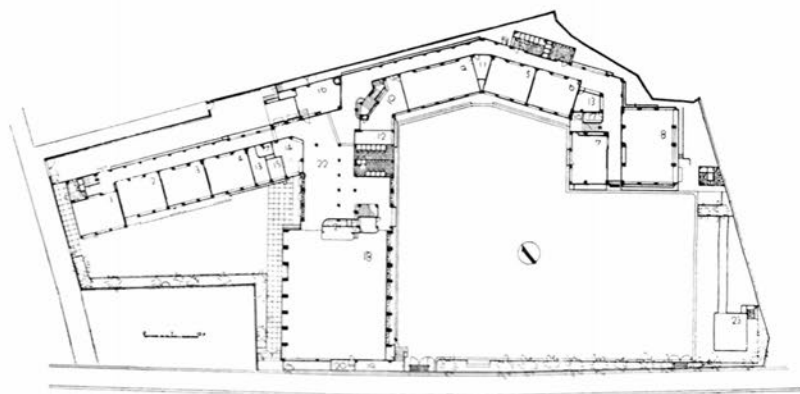
眞寫界世築建

《面側南》校學小常尋臺輪高京東 計設課築建所役市京東



眞寫所務事江大

庫倉上同



載轉リロ號四卷九二界世築建 シラブ校學小常尋臺輪高

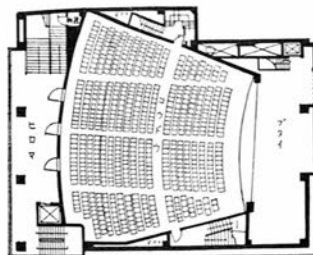


大阪府立中央体育館 設計事務所腰竹部谷長



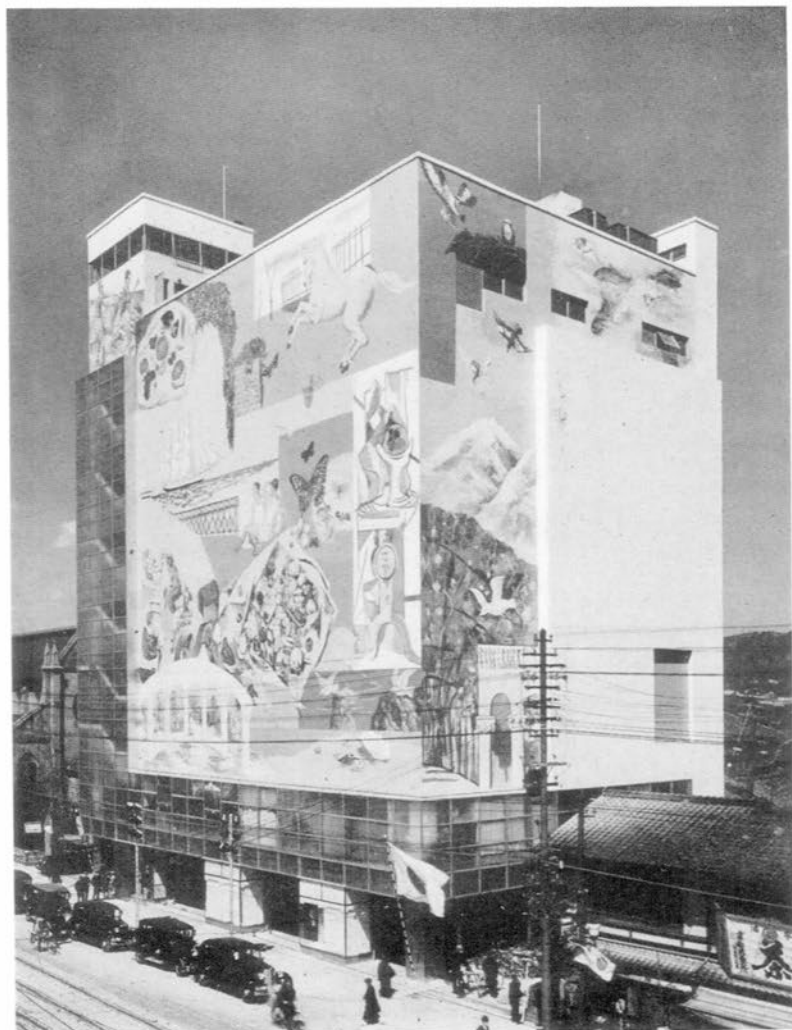
2階平面図

東京都西區四〇六番地リコビル



3階平面図

東京都新宿区西一丁目一番地ラブリコビル 設計 純川一郎

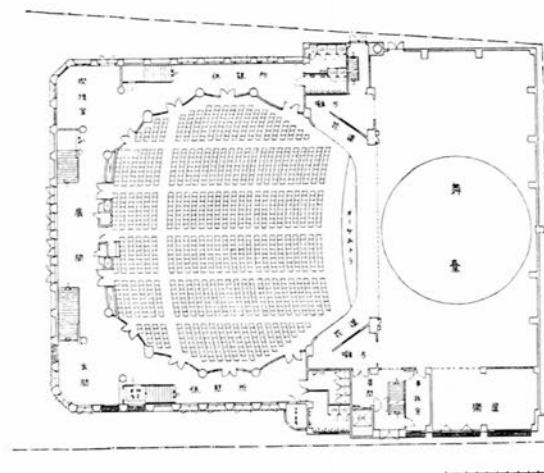


佐藤三辰写真

石川純一郎設計 朝日新聞東京支局

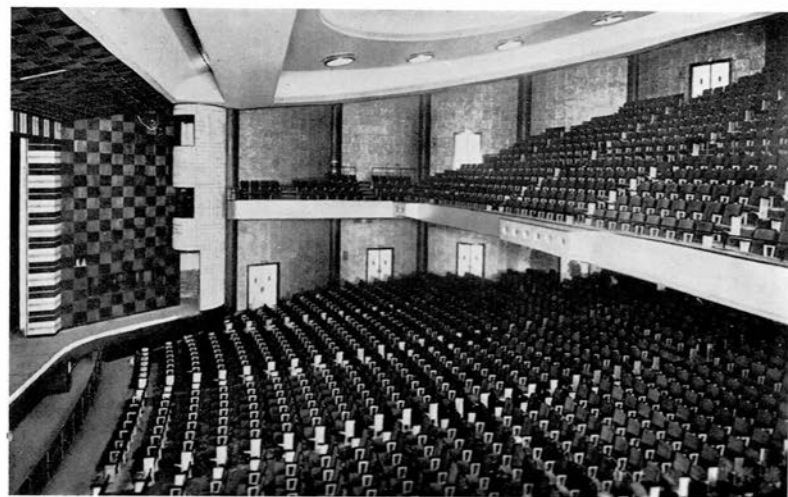


阿部美樹志事務所設計 東京有樂座

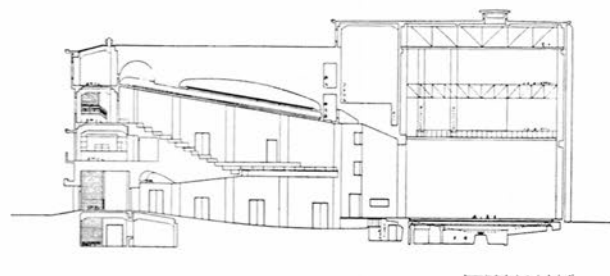


載轉リヨ號二〇六誌雜築建

圖面平階一座樂有京東



同上
内部

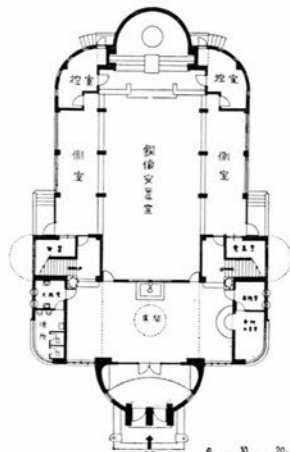
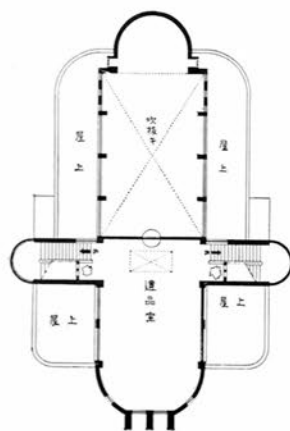


載轉リヨ號二〇六誌雜築建

圖面斷縱座樂有京東



竹中工務店設計
神戸武藤氏記念館



不
面
圖

神戸武藤氏記念館平面圖

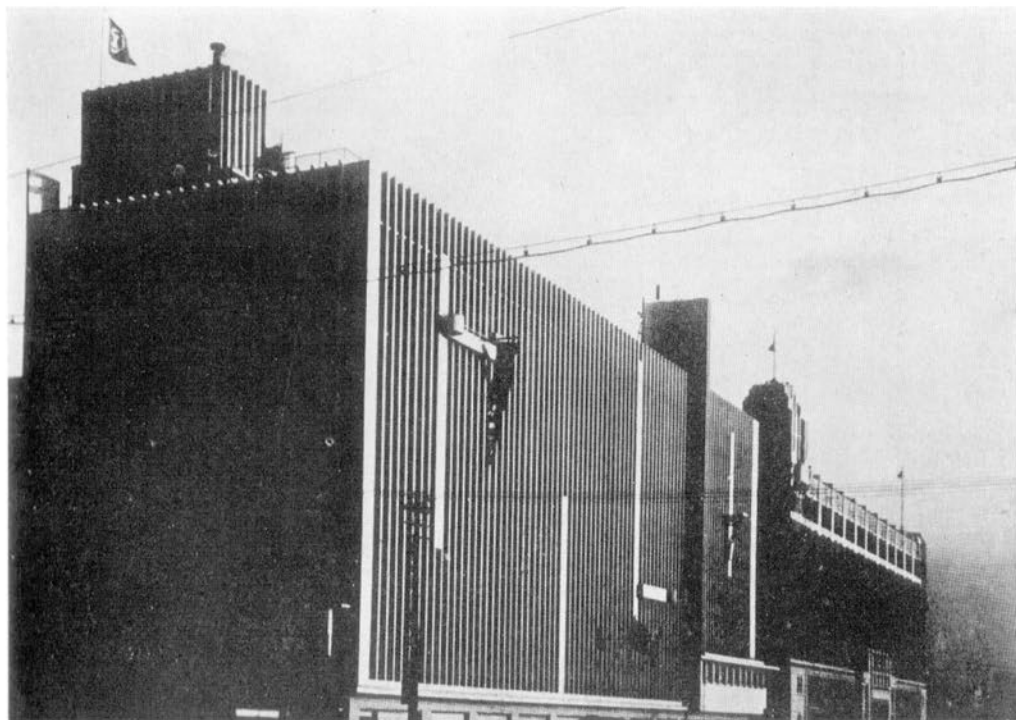
建築雜誌六〇五號ヨリ轉載



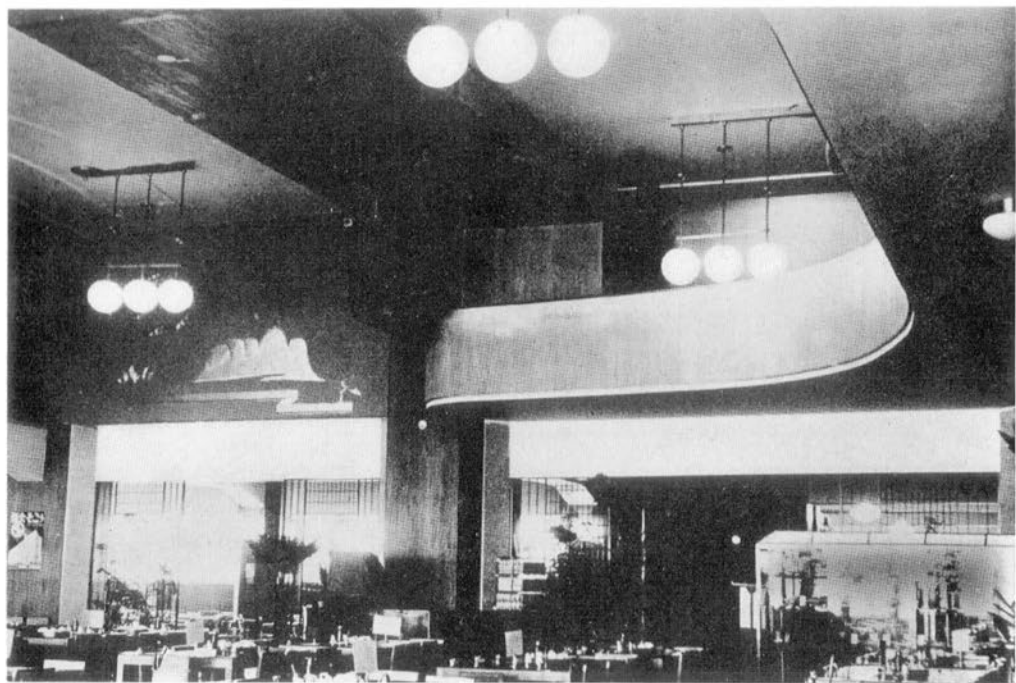
眞寫所務工河横

ルーホ光探央中店本越三京東 計設所務工河横

大阪十合百貨店（御堂筋概観） 村野藤吾設計



同上 食堂





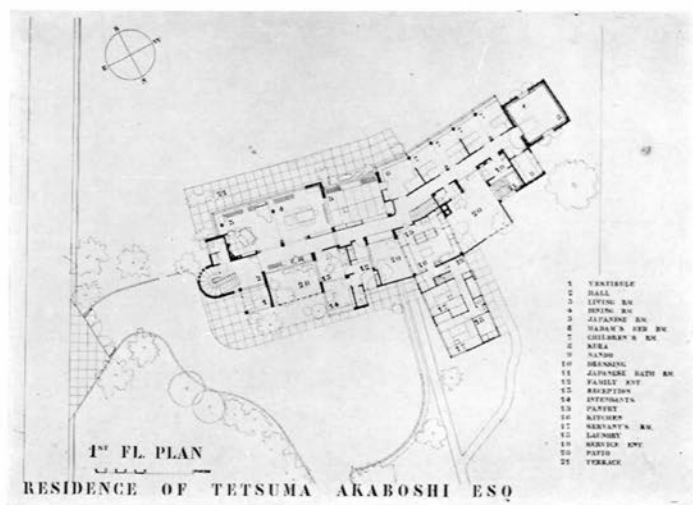
アントニン・レイモンド設計
東京赤星邸



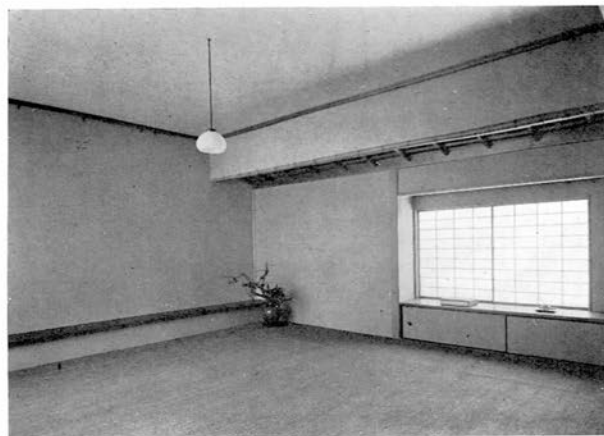
京都市營繕課設計
京都市民館



東京赤星邸内部

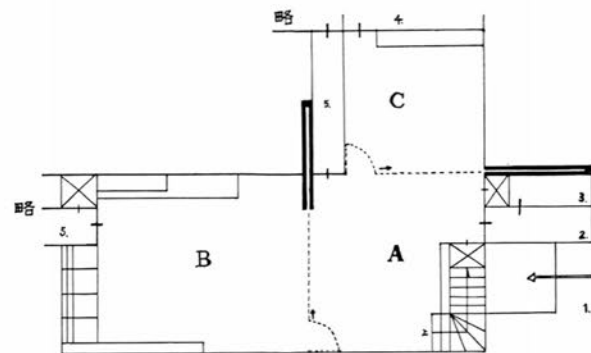


東京赤星邸一階プラン



眞島界世築建

室畫氏某京東 計設八十五田吉



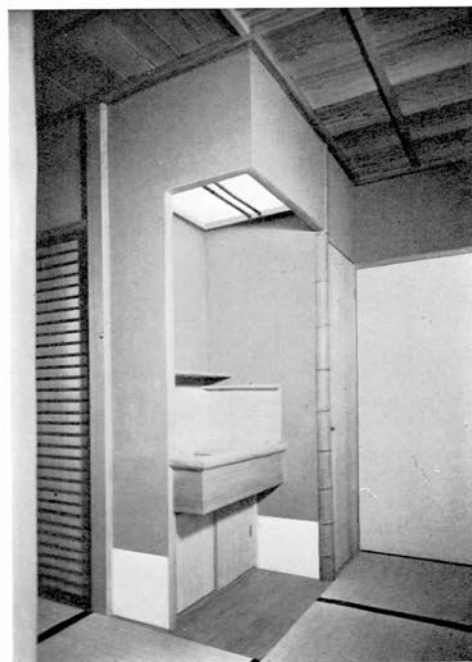
L型室内平面

間間堂
A, B, C
広居食

4 間所下
1, 2, 3, 4, 5
* 洗面台



山口蚊象設計 北鎌倉某邸内部



上圖 左下圖 L 型室内プラン略圖
左圖 東京某氏畫室筆洗場

建築世界眞



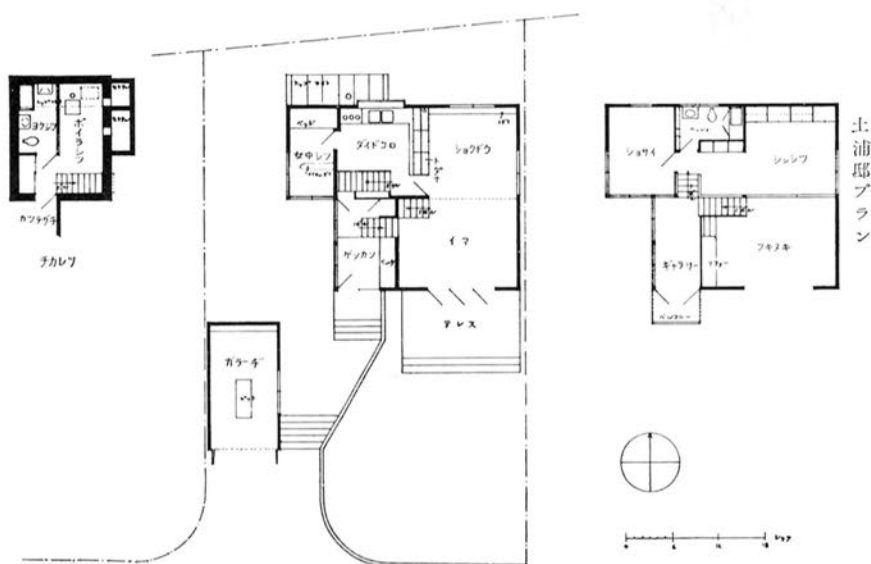
眞寫築建際國

間居邸浦土



眞寫築建際國

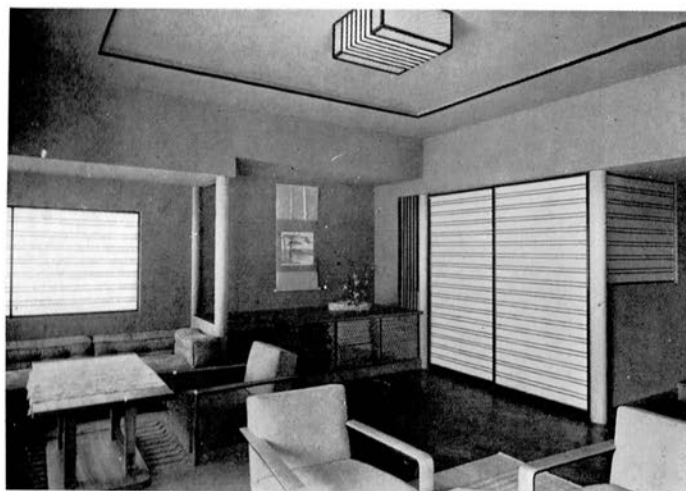
邸氏同京東 計設城龜浦土





眞寫界世築建

(庭前) 邸田岡京東 計設八十五田吉



眞寫界世築建

(間接應) 邸屋吉京東 計設八十五田吉



眞寫界世築建

(室接應) 邸田前京東 計設郎太要根關

便

覽

美術關係 法規一覽

國寶保存

國寶保存法

昭和四年三月二十八日
法律第十七號

第一條 建造物、寶物其ノ他ノ物件ニシテ特ニ歴史ノ證據又ハ美術ノ模範ト爲ルベキモノハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ之ヲ國寶トシテ指定スルコトヲ得

第二條 主務大臣前條ノ規定ニ依ル指定ヲ爲シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

第三條 國寶ハ之ヲ輸出又ハ移出スルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第四條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ主務大臣ノ許可ヲ受ケベシ但シ維持修理ヲ爲スハ此ノ限ニ在ラズ

第五條 主務大臣前二條ノ規定ニ依ル許可ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ

第六條 國寶ノ所有者ニ付變更アリタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ所有者ヨリ主務大臣ニ届出ヲ爲ス

ベシ國寶滅失又ハ毀損シタルトキモ亦同ジ

第七條 國寶ノ所有者ハ主務大臣ノ命令ニ依リ一年ノ期間ヲ限リ帝室、官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ其ノ國寶ヲ出陳スル義務アルモノトス但シ祭祀法用又ハ公務執行ノ爲必要アルトキ其ノ他已ムコトヲ得ザル事由アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第八條 前條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ出陳シタル者ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ補給金ヲ交付ス

第九條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶其ノ出陳中滅失又ハ毀損シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ其ノ所有者ニ對シ通常生ズベキ損害ヲ補償ス但シ不可抗力ニ因リタル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第十條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ニ付其ノ出陳中所有者ノ變更アリタルトキハ新所有者ハ當該國寶ニ關シ本法ノ規定スル舊

所有者ノ權利義務ヲ承繼ス

第十一條 公益上其ノ他特殊ノ事由ニ依リ必要アルトキハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ國寶ノ指定解除ヲ爲スコトヲ得

第十二條 神社又ハ寺院(佛堂ヲ含ム以下同ジ)ノ所有ニ屬スル國寶ハ神社ニ在リテハ神職(官國幣社ニ在リテハ宮司、府縣郷社ニ在リテハ社司、村社以下ニ在リテハ社掌)、寺院ニ在リテハ住職(佛堂ニ在リテハ受持僧侶)之ヲ管理ス但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ別ニ管理者ヲ定ムルコトヲ得

第十三條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ハ之ヲ處分シ、擔保ニ供シ又ハ差押フルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ處分シ又ハ擔保ニ供スルハ此ノ限ニ在ラズ

第十四條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ維持修理スルコト能ハザルトキハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ之ニ對シ補助金ヲ交付スルコトヲ得

第十五條 補助金ハ豫算額ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ精算ノ上剩餘アルトキハ之ヲ還付セシムルコトヲ得

第十六條 補助金及補給金トシテ國庫ヨリ支出スベキ金額ハ毎年度十五萬圓以上二十萬圓以下トス

第十七條 國寶保存會ノ組織及權限ニ關スル事項ハ本法ニ規定スルモノノ外勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ關シテハ勅令ヲ以テ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

第二十條 主務大臣ノ許可ナクシテ國寶ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二千萬圓以下ノ罰金ニ處ス

美術關係法規

第二十一條 國寶ヲ損壞、毀棄又ハ隠匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ國寶自己ノ所有ニ係ルトキハ二年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第二十二條 第四條ノ規定ニ違反シ許可ヲ受ケベキ者之ヲ受ケズシテ國寶ノ現狀ヲ變更シタルトキハ五百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十三條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十四條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ノ管理者又ハ神社若ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理者怠慢ニ因リ其ノ管理スル國寶ヲ減失又ハ毀損スルニ至ラシメタルトキハ五百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十五條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ本法ニ規定スル過料ニ付之ヲ準用ス

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和四年勅令第二百九號ヲ以テ同年七月一日ヨリ施行)

古社寺保存法ハ之ヲ廢止ス

古社寺保存法ニ依リテ特別保護建造物又ハ國寶ノ資格アルモノト定メラレタル物件ハ之ヲ本法ニ依リテ國寶トシテ指定セラレタル物件ト看做ス

古社寺保存法ニ依リテ下付シタル保存金ハ之ヲ本法ニ依リテ交付シタル補助金ト看做ス

國寶保存法施行令

昭和四年六月二十九日
勅令 第二百十號

第一條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ出陳セシメタルトキハ當該博物館又ハ美術館ノ長、當該博物館又ハ美術館ノ長故障アルトキハ當該職制ノ定ムル所ニ依リ其ノ職務ヲ代理スル者ニ於テ出陳國寶ヲ管理ス

前項ノ管理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス

第二條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ博物館又ハ美術館ニ出陳シタル國寶ノ出陳ニ要スル荷造運搬費等ハ當該博物館又ハ美術館ニ於テ負擔スルモノトス返送ニ要スル荷造運搬費等亦同ジ

第三條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケタル國寶ノ維持修理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス

文部大臣ハ前項ニ規定スル權限ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

第四條 文部大臣國ノ所有ニ屬スル物件ヲ國寶トシテ指定シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所管大臣ニ通知スベシ國ノ所有ニ屬スル國寶ノ指定解除ヲ爲シタルトキモ亦同ジ

第五條 國ガ其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分シ、輸出若ハ移出シ又ハ其ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所管大臣ニ於テ文部大臣ノ同意ヲ得ベシ

第六條 文部大臣前條ノ規定ニ依ル同意ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ

第七條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ付減失、毀損又ハ管理換アリタルトキハ其ノ旨ヲ所管大臣ヨリ文部大臣ニ通知スベシ國ガ國寶ヲ取得シタルトキ亦同ジ

附 則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)

明治三十年勅令第四百十六號ハ之ヲ廢止ス

國寶保存法施行規則

昭和四年六月二十九日
文部省令第三十七號

第一條 文部省ニ國寶臺帳ヲ備ヘ國寶ヲ登錄ス

第二條 國寶臺帳ニハ左ノ事項ヲ記載シ寫眞ヲ添付ス
建造物ノ類ニ付テハ

一 名稱及所在地

二 所有者ノ氏名(名稱)及住所

三 員數

四 構造及形式

五 大サ

六 創建及沿革

七 其ノ他參考トナルベキ事項

寶物ノ類ニ付テハ

一 名稱

二 所有者ノ氏名(名稱)及住所

三 種類

四 員數

五 品質

六 形狀

七 法量

八 作者及傳來

九 其ノ他參考トナルベキ事項

第三條 國寶ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由竝ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 輸出又ハ移出ノ期間

三 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地

四 荷造運搬ノ方法

五 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

六 保險ノ方法

七 摸寫模造等ニ關スル約束アラ

バ之ニ關スル事項

第四條 國寶ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ遲滯ナク文部大臣ニ届出ツベシ

第五條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數
二 現狀ノ變更ニ關スル設計仕様、計畫圖並ニ工事擔當者ノ氏名(名稱)

三 建造物ノ類ニシテ位置ノ變更ヲ生ズル場合ニ在リテハ其ノ移轉先
四 著手ノ時期及竣成期限

第六條 國寶ノ現狀變更ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ノ現狀變更ヲ竣リタルトキハ實施仕様書、寫眞並ニ圖面ヲ添ヘ遲滯ナク文部大臣ニ届出ツベシ

第七條 國寶ノ所有者其ノ氏名(名稱)又ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ツベシ

國寶ヲ取得シタル者ハ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ツ

ベシ

國寶滅失又ハ毀損シタルトキハ國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ出陳中ニ係ル場合ヲ除クノ外所有者ヨリ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ滅失又ハ毀損ノ事實ヲ知リタル日ヨリ五日內ニ文部大臣ニ届出ツベシ

第八條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ヲ受領シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ所有者ニ受領證書ヲ交付シ返付スルトキハ之ト引換フベシ

第九條 前條ノ國寶ヲ受領又ハ返付シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ都度文部大臣ニ報告スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十條 第八條ノ國寶滅失又ハ毀損シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ直ニ文部大臣ニ報告シ且所有者ニ通知スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十一條 國寶保存法第八條ノ規定ニ依リテ支給スベキ補給金ハ國寶一件ニ付一年六圓以上百圓以下トシ文部大臣ニ於テ出陳ヲ命ズル都

度之ヲ定ム

前項ノ補給金ノ支給ニ付テハ月割ヲ以テ計算シ一月ニ滿タザル日數ハ之ヲ一月ト看做ス

第十二條 國寶保存法第九條ノ規定ニ依ル補償ヲ受ケントスルトキ滅失又ハ毀損シタル國寶ノ所有者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ遲滯ナク文部大臣ニ申請スベシ

一 國寶ノ名稱及員數
二 國寶ヲ出陳シタル博物館又ハ美術館ノ名稱及所在地
三 滅失又ハ毀損スルニ至リタル事由並ニ毀損ニ付テハ其ノ程度

第十三條 國寶ノ指定解除アリタルトキハ國寶臺帳ヨリ當該國寶ノ登錄ヲ抹消ス

第十四條 國寶保存法第十二條但書ノ規定ニ依リテ別ニ管理者ヲ定メントスルトキハ當該神職又ハ住職(佛堂ニ在リテハ受持僧侶)ニ於テ其ノ事由ヲ具シ新ニ管理者ト爲ルベキ者ト連署ノ上文部大臣ニ申請スベシ

第十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ
一 國寶ノ名稱及員數

二 處分ノ方法

三 對價、報酬又ハ之ニ準ズベキモノ
四 處分ノ相手方ノ氏名(名稱)及住所

五 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項
第十六條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ擔保ニ供セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數
二 擔保ノ期間
三 擔保權者ノ氏名(名稱)及住所
四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十七條 國寶ヲ擔保ニ供スル許可ヲ受ケタル神社又ハ寺院當該國寶ヲ擔保ニ供シ又ハ擔保契約ヲ解除シタルトキハ遲滯ナク文部大臣ニ届出ツベシ

第十八條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ
一 維持修理スベキ國寶ノ名稱及員數
二 維持修理ニ要スル工費豫算、設計仕様並ニ計畫圖及寫眞
三 著手ノ時期及竣成期限

美術關係法規

四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十九條 國寶ノ維持修理費ニ對シ國庫ヨリ補助金ヲ交付スル場合ニ於テハ當該國寶ノ所有者ハ少クトモ維持修理費總額ノ百分ノ五十ヲ負擔スベキモノトス但シ特別ノ事情アルモノニ限り其ノ負擔ヲ輕減スルコトヲ得

第二十條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ管理方法ヲ定メ地方長官ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セノトスルトキ亦同ジ

第二十一條 補助金ノ交付後ニ於テ設計仕様又ハ著手ノ時期若ハ竣成期限ノ變更ヲ要スルトキハ其ノ事由及變更設計仕様並ニ計畫圖ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ

文部大臣必要ト認ムルトキハ前項ノ規定ニ拘ラズ設計仕様ノ變更ヲ命ズル事ヲ得

第二十二條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ國寶ノ維持修理費リタルトキヨリ二月内ニ實施仕様書、寫眞、圖面並ニ精算書ヲ添ヘ文部大臣ニ届出ツベシ

第二十三條 本令ノ規定若ハ補助金交付ノ條件ニ違反シ又ハ補助金交付ノ目的ヲ遂行スルコト能ハズト認ムルトキハ文部大臣ハ補助金ノ全部又ハ一部ノ返還ヲ命ズルコトヲ得

第二十四條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理不適當ニシテ滅失又ハ毀損ノ虞アリト認ムルトキハ文部大臣ハ其ノ管理方法ヲ指定スルコトヲ得

第二十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ博物館、美術館又ハ之ニ準ズベキ場所ニ出陳シ其ノ他當該神社又ハ寺院外ニ搬出セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數
二 搬出ノ期間
三 搬出先ノ場所及其ノ所在地
四 荷造運搬ノ方法
五 搬出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第二十六條 前條ノ規定ニ依リテ許可ヲ受ケタル神社又ハ寺院當該國寶再ビ當該神社又ハ寺院内ニ搬入シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ツベシ

第二十七條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ模寫模造シ又ハ模寫模造ヲ承認セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 模寫模造ノ期間
三 模寫模造ノ方法
四 模寫模造ニ從事スル者ノ氏名及住所

第二十八條 國寶ノ維持修理、現狀變更等ノ場合ニ於テ佛像、經文、器物、銘文、棟札、埋藏物ノ類ヲ發見シタルトキハ當該國寶ノ所有者ヨリ其ノ實況ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ届出ツベシ

第二十九條 本令ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體ヨリ文部大臣ニ差出ス書類ハ地方長官ヲ經由スベシ第十八條、第二十一條及第二十二條ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體以外ノモノヨリ文部大臣ニ差出ス書類ニ付亦同ジ

附 則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）
古社寺保存法施行細則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會官制

昭和四年六月二十九日
勅令第二百一十一號

第一條 國寶保存會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ國寶保存法第一條、第五條、第十一條、第十三條及第十四條ニ規定スル事項其ノ他國寶保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

事項ヲ調査審議ス
國寶保存會ハ國寶保存ニ關スル事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 國寶保存會ハ會長一人、副會長一人及委員三十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、副會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス
副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

會長及副會長共ニ事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長及副會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 國寶保存會ニ常務委員會ヲ置ク國寶保存會ノ委任ヲ受ケ其ノ權限ニ屬スル事項ノ一部ヲ處理ス
常務委員會ハ國寶保存會ノ會長及副會長並ニ國寶保存會ノ委員ニシテ文部大臣ノ指名シタル者十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第七條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ

國寶保存會ノ要求アルトキハ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第八條 國寶保存會ノ議事ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 國寶保存會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長及副會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第十條 國寶保存會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)
古社寺保存會規則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會職員

會長 細川 護立
委員 三矢 宮松
溝口 禎次郎
辻 善之助
濱田 耕作
福井 利吉郎
奥田 誠一
德富 猪一郎
田中 豐藏
伊東 忠太
塚本 靖

香取秀治郎

山田準次郎

荻野仲三郎

子 大河内正敏

藤懸 靜也

杉 榮三郎

武田 五一

山田 孝雄

和田 英松

三上 參次

瀧 精一

館 哲二

黒板 勝美

高田 休廣

神津 伯

柴沼 直

阪谷良之進

丸尾彰三郎

臨時委員 幹事

重要美術品等保存

重要美術品等ノ保存ニ 關スル法律

關スル法律

昭和八年四月一日
法律第四十三號

第一條 歷史上又ハ美術上特ニ重要ナル價值アリト認メラルル物件

(國寶ヲ除ク)ヲ輸出又ハ移出セン
トスル者ハ主務大臣ノ許可ヲ受ク
ベシ但シ現存者ノ製作ニ係ルモノ、
製作後五十年ヲ經ザルモノ及

輸入後一年ヲ經ザルモノハ此ノ限
ニ在ラズ

第二條 前條ノ規定ニ依リ其ノ輸出
又ハ移出ニ付許可ヲ要スル物件ハ
主務大臣之ヲ認定シ其ノ旨ヲ官報
ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者
ニ通知スベシ

前項ノ規定ニ依リ認定ノ告示アリ
タルトキハ賣買、交換又ハ贈與ノ
目的ヲ以テ當該物件ノ寄託ヲ受ケ
タル占有者ハ其ノ認定アリタルコ
トヲ知リタルモノト推定ス

第三條 主務大臣第一條ノ規定ニ依
リ許可ノ申請アリタル場合ニ於テ
許可ヲ爲サザルトキハ許可申請ノ
日ヨリ一年ヨリ長カラザル期間内
ニ當該物件ヲ國寶保存法第一條ノ
規定ニ依リテ國寶トシテ指定シ又
ハ前條ノ規定ニ依リ認定ヲ取消ス
ベシ

第四條 認定、其ノ取消及第二條ノ
規定ニ依リ認定物件ノ所有者ニ付
變更アリタル場合ノ届出ニ關スル
事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 主務大臣ノ許可ナクシテ第
二條ノ規定ニ依リ認定物件ヲ輸出
又ハ移出シタル者ハ三年以下ノ懲
役若ハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ
處ス

附 則
本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

重要美術品等ノ保存ニ 關スル法律施行規則

昭和八年四月一日
文部省令第十號

第一條 昭和八年法律第四十三號
(以下單ニ法ト稱ス)第二條ノ規定
ニ依リ認定ヲ爲ス物件概ネ左ノ如
シ

一 繪畫

二 彫刻

三 建造物

四 文書

五 典籍

六 書蹟

七 刀劍

八 工藝品

九 考古學資料

第二條 重要美術品等ノ所有者、管
理者又ハ占有者ハ當該吏員ノ請求
アリタルトキハ法第二條ノ規定ニ
依リ認定(以下單ニ認定ト稱ス)ノ
前後ヲ問ハズ當該物件及其ノ調査
ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ムコ
トヲ得ズ但シ正當ノ事由アル場合
ハ此ノ限ニ在ラズ

第三條 重要美術品等ニ付認定ヲ受
ケントスル者ハ左ノ事項ヲ具シ現
狀ノ寫眞ヲ添付シテ文部大臣ニ申
請スベシ

一 名稱

二 所有者ノ氏名(名稱)及住所

三 種類

四 員數

五 品質

六 形狀

七 法量

八 作者及傳來

前項ノ申請アリタル場合ニ於テ必要アルトキハ文部大臣ハ當該物件ヲ文部省ニ提出セシムルコトヲ得

第四條 法第二條ノ規定ニ依ル認定物件(以下單ニ認定物件ト稱ス)ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有

者ニ於テ其ノ事由竝ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 認定物件ノ名稱及員數

二 輸出又ハ移出ノ期間

三 輸出又ハ移出港

四 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地

五 荷造運搬ノ方法

六 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第五條 認定物件ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受ケタル者當該物件ヲ持還

リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ツベシ

第六條 認定物件ノ所有者其ノ氏名(名稱)又ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ツベシ

認定物件ヲ取得シタル者ハ當該物件ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ツベシ

認定物件滅失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シキ現狀變更アリタルトキハ所有

者ヨリ其ノ事由、實況竝ニ認定物件ノ名稱及員數ヲ具シ滅失、毀損又ハ現狀變更ノ事實ヲ知りタル日ヨリ五日內ニ文部大臣ニ届出ツベシ

第七條 認定物件ガ國寶保存法第一條ノ規定ニ依リ國寶トシテ指定セラレタルトキハ其ノ認定ハ取消サレタルモノト看做ス

法第三條ノ規定ニ依ル認定取消ノ外認定物件滅失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シキ現狀變更アリタルトキ其ノ他正當ノ事由アルトキハ文部大臣其ノ認定ヲ取消スコトヲ得

前二項ノ規定ニ依ル認定取消アリタルトキハ其旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

第八條 第二條ノ規定ニ違反シ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ミタル者ハ拘留又ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第九條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

附 則

本令ハ昭和八年法律第四十三號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

重要美術品等調査委員會規程

重要美術品等調査委員會規程

會規程

昭和八年四月十一日
文部省訓令第九號

第一條 重要美術品等調査委員會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ重要美術品等ノ保存ニ關スル法律(以下單ニ法ト稱ス)第一條ノ規定ニ依ル輸出及移出ノ許可竝ニ法第二條ノ規定ニ依ル認定(以下單ニ認定ト稱ス)及其ノ取消ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條 重要美術品等調査委員會ハ會長一人及委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣之ヲ依屬シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ文部

省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 重要美術品等調査委員會ノ議事ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 重要美術品等調査委員會ニ幹事若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 重要美術品等調査委員會ニ書記若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第十條 文部大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ會長、委員、臨時委員又ハ其ノ他ノ者ヲシテ認定及其ノ取消其ノ他重要美術品等ニ關スル調査ヲ爲サシムルコトヲ得

重要美術品等調査委員會職員

會長 瀧 精一
委員 伊東 忠太
子大河内正敏
三矢 宮松
黒板 勝美
濱田 耕作
和田 英松
荻野仲三郎

井上 清

溝口 禎次郎

奥田 誠一

原田 淑人

藤懸 靜也

神津 伯

香取秀治郎

佐々木信綱

阪谷良之進

文部省國寶調査官

丸尾彰三郎

關 保之助

和田 英作

梅原 末治

天沼 俊一

幹事

文部書記官

柴沼 直

史蹟名勝天然紀念物保存

史蹟名勝天然紀念物保

存法

大正八年四月十日
法律第四十四號

第一條 本法ヲ適用スヘキ史蹟名勝

天然紀念物ハ内務大臣ノヲ指定ス

前項ノ指定以前ニ於テ必要アルト

キハ地方長官ハ假ニ之ヲ指定スル

コトヲ得

第二條 史蹟名勝天然紀念物ノ調査

ニ關シ必要アルトキハ指定ノ前後

美術關係法規

ノ撤去其ノ他調査ニ必要ナル行爲
ヲ爲スコトヲ得

第三條 史蹟名勝天然紀念物ニ關シ

其ノ現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ

影響ヲ及ホスヘキ行爲ヲ爲サムト

スルトキハ地方長官ノ許可ヲ受ク

ヘシ

第四條 内務大臣ハ史蹟名勝天然紀

念物ノ保存ニ關シ地域ヲ定メテ一

定ノ行爲ヲ禁止若ハ制限シ又ハ必

要ナル施設ヲ命スルコトヲ得

前項ノ命令若ハ處分又ハ第二條ノ

規定ニ依ル行爲ノ爲損害ヲ被リタ

ル私人ニ對シテハ命令ノ定ムル所

ニ依リ政府ノ補償ス

第五條 内務大臣ハ地方公共團體ヲ

指定シテ史蹟名勝天然紀念物ノ管

理ヲ爲サシムルコトヲ得

前項ノ管理ニ要スル費用ハ當該公

共團體ノ負擔トス

國庫ハ前項ノ費用ニ對シ其ノ一部

ヲ補助スルコトヲ得

第六條 第三條ノ規定ニ違反シ又ハ

第四條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ

違反シタル者ハ六月以下ノ禁錮若

ハ拘留又ハ百圓以下ノ罰金若ハ科

料ニ處ス

附 則

本法施行ニ關シ必要ナル事項ハ命令

ヲ以テ之ヲ定ム

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定

ム(大正八年五月勅令第二百六十一號ヲ以テ同
年六月一日ヨリ施行)

古社寺保存法第十九條ハ本法施行ノ

日ヨリ之ヲ廢止ス

史蹟名勝天然紀念物保

存法施行令

大正八年十二月二十九日
勅令第四百九十九號

第一條 當該吏員史蹟名勝天然紀念

物保存法第二條ノ規定ニ依ル行爲

ヲ爲サムトスルトキハ少クトモ三

日前ニ關係土地物件ノ所有者及占

有者ニ其ノ旨ヲ通知スヘシ

史蹟名勝天然紀念物保存法第二條

ノ規定ニ依ル行爲ヲ爲ス當該吏員

ハ其ノ證據ヲ攜帶シ關係者ノ請求

アリタルトキハ之ヲ示スヘシ

日出前又ハ日没後ニ於テハ占有者

ノ承諾アルニ非サレハ史蹟名勝天

然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依

リ邸内ニ立入ルコトヲ得ス

第二條 行政廳史蹟名勝天然紀念物

保存法第三條ニ規定スル行爲ヲ爲

サムトスルトキハ地方長官ノ承認

ヲ受クヘシ

第三條 史蹟名勝天然紀念物保存法

第二條ノ規定ニ依リ古墳ヲ發掘ス

ル場合ニ於テハ當該吏員ハ地方長

官ヲ經由シ文部大臣ノ認可ヲ受ク

ヘシ

史蹟名勝天然紀念物保存法第三條

又ハ前條ノ規定ニ依リ古墳ヲ發掘

セムトスル場合ニ於テ地方長官許

可又ハ承認ヲ與フルトキハ文部大

臣ノ認可ヲ受クヘシ

前二項ノ規定ニ依リ文部大臣認可

ヲ爲ス場合ニ於テハ豫メ宮内大臣

ニ協議スヘシ

第四條 史蹟名勝天然紀念物保存法

第四條第二項ノ規定ニ依ル補償ハ

通常生スヘキ損害ニ限り之ヲ爲ス

前項ノ補償ノ額ハ地方長官ト損害

ヲ被リタル私人トノ協議ニ依リ之

ヲ定ム協議調ハサルトキハ文部大

臣鑑定人ノ意見ヲ徵シ之ヲ決定ス

ヘシ

前項ノ規定ニ依ル決定ニ不服アル

者ハ文部大臣ニ訴願スルコトヲ得

第五條 史蹟名勝天然紀念物ニシテ

國有地ニ屬スルモノハ文部大臣之

ヲ管理ス但シ官用地又ハ國有林ニ

屬スルモノニ付テハ主管ノ大臣ト

文部大臣ト協議シテ其ノ管理大臣

ヲ定ム

第六條 文部大臣ハ史蹟名勝天然紀

念物ニシテ國有ニ屬スルモノヨリ

生スル收益ヲ管理ノ費用ヲ負擔ス

ル地方公共團體ノ所得ト爲スコト

ヲ得

第七條 史蹟名勝天然紀念物ノ管理

ノ費用ヲ負擔スル地方公共團體ハ

其ノ管理スル史蹟名勝天然紀念物ニ付觀覽料ヲ徵收スルコトヲ得

附則

本令ハ大正九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物保存法施行規則

大正八年十二月二十九日
內務省令第二十七號

第一條 文部大臣史蹟名勝天然紀念物ノ指定ヲ爲シ又ハ其ノ指定ヲ解除シタルトキハ官報ヲ以テ之ヲ告示シ地方長官假指定ヲ爲シ又ハ其ノ假指定ヲ解除シタルトキ亦同シ但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認メタルトキハ告示セサルコトヲ得

第二條 史蹟名勝天然紀念物保存法第四條第一項ノ禁止若ハ制限ヲ爲シタルトキハ官報ヲ以テ之ヲ告示ス但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認メタルトキハ告示セサルコトヲ得

第三條 史蹟名勝天然紀念物ノ所有者、管理者又ハ占有者ニ變更アリタルトキハ十日以内ニ新ナル所有者、管理者又ハ占有者ヨリ之ヲ地方長官ニ申告スヘシ

史蹟名勝天然紀念物ノ所有者、管理者又ハ占有者其ノ住所氏名ヲ變更シタルトキハ十日以内ニ之ヲ地方長官ニ申告スヘシ

更シタルトキハ十日以内ニ之ヲ地方長官ニ申告スヘシ

第四條 土地ノ所有者、管理者又ハ占有者古墳又ハ舊蹟ト認ムヘキモノヲ發見シタルトキハ其ノ現狀ヲ變更スルコトナク發見ノ日ヨリ十日以内ニ左ノ事項ヲ具シテ地方長官ニ申告スヘシ

一 發見ノ年月日
二 所在地
三 現狀

第五條 文部省ニ史蹟名勝天然紀念物ノ臺帳ヲ備フ

第六條 第三條及第四條ノ規定ニ違反シタル者ハ二十圓以下ノ科料ニ處ス

附則

本則ハ大正九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物調査委員會規程

昭和八年四月十一日
文部省訓令第十號

第一條 史蹟名勝天然紀念物調査委員會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條 史蹟名勝天然紀念物調査委員會ハ會長一人及委員二十人以上以内ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣之ヲ依嘱シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス
會長事故アリタルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 史蹟名勝天然紀念物調査委員會ノ議事ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 史蹟名勝天然紀念物調査委員會ニ幹事若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 史蹟名勝天然紀念物調査委員會ニ書記若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ
書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第十條 文部大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ會長、委員、臨時委員又ハ其ノ他ノ者ヲシテ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關スル調査ヲ爲サシムルコトヲ得

ハ其ノ他ノ者ヲシテ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關スル調査ヲ爲サシムルコトヲ得

史蹟名勝天然紀念物調査委員會職員

會長 三上 參次
委員 龍居松之助
平泉 澄
辻村 太郎
國府 種徳
鍋木外岐雄
三好 學
宮地 直一
中野 治房
脇水鐵五郎
渡部 信
黒板 勝美
荻野伸三郎
貴島 圭三
内田清之助
和田 英作
柴沼 直

幹事 文部書記官
農林技師
宮内省圖書頭
萩野伸三郎
貴島 圭三
内田清之助
和田 英作
柴沼 直

朝鮮寶物古蹟名勝天然紀念物保存

朝鮮寶物古蹟名勝天然紀念物保存令

昭和八年八月九日
制 令 第六號

第一條 建造物、典籍、書蹟、繪畫、

彫刻、工藝品其ノ他ノ物件ニシテ
特ニ歴史ノ證徴又ハ美術ノ模範ト
爲ルベキモノハ朝鮮總督之ヲ寶物
トシテ指定スルコトヲ得

貝塚古墳寺址城址窯址其ノ他ノ遺
蹟、景勝ノ地又ハ動物植物地質礦
物其ノ他學術研究ノ資料ト爲ルベ
キ物ニシテ保存ノ必要アリト認ム
ルモノハ朝鮮總督之ヲ古蹟、名勝
又ハ天然記念物トシテ指定スルコ
トヲ得

第二條 朝鮮總督前條ノ指定ヲ爲サ
ントスルトキハ朝鮮總督府寶物古
蹟名勝天然記念物保存會（以下單
ニ保存會ト稱ス）ニ諮問スベシ
前條ノ指定以前ニ於テ急施ヲ要シ
保存會ニ諮問スル暇ナシト認ムル
トキハ朝鮮總督ハ假ニ指定スルコ
トヲ得

第三條 朝鮮總督ハ寶物、古蹟、名
勝又ハ天然記念物ニ關スル調査ヲ
爲ス爲必要アリト認ムルトキハ當
該官吏ヲシテ必要ナル場所ニ立入
リ、調査ニ必要ナル物件ノ提供ヲ
求メ、測量調査ヲ爲シ又ハ土地ノ
發掘、障礙物ノ變更除却其ノ他調
査ニ必要ナル行爲ヲ爲サシムルコ
トヲ得此ノ場合ニ於テハ當該官吏
ハ其ノ身分ヲ證明スベキ證票ヲ携
帶スベシ

第四條 寶物ハ之ヲ輸出又ハ移出ス
ルコトヲ得ズ但シ朝鮮總督ノ許可
ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

朝鮮總督前項ノ許可ヲ爲サントス
ルトキハ保存會ニ諮問スベシ

第五條 寶物、古蹟、名勝又ハ天然
記念物ニ關シ其ノ現狀ヲ變更シ又
ハ其ノ保存ニ影響ヲ及ボスベキ行
爲ヲ爲サントスルトキハ朝鮮總督
ノ許可ヲ受ケベシ

第六條 朝鮮總督ハ寶物、古蹟、名
勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關シ必
要アリト認ムルトキハ一定ノ行爲
ヲ禁止若ハ制限シ又ハ必要ナル施
設ヲ命ズルコトヲ得

前項ノ施設ニ要スル費用ニ對シテ
ハ國庫ヨリ豫算ノ範圍内ニ於テ其
ノ一部ヲ補助スルコトヲ得

第七條 朝鮮總督第五條ノ規定ニ依
ル許可又ハ前條第一項ノ規定ニ依
ル命令ヲ爲サントスルトキハ保存
會ニ諮問スベシ但シ輕易ナル事項
ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第八條 寶物ノ所有者ニ付變更アリ
タルトキハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ
依リ所有者ヨリ之ヲ朝鮮總督ニ届
出ツベシ寶物滅失又ハ毀損シタル
トキ亦同ジ

第九條 寶物ノ所有者ハ朝鮮總督ノ
命令ニ依リ一年内ノ期間ヲ限リ李
王家、官立又ハ公立ノ博物館又ハ

美術館ニ其ノ寶物ヲ出陳スル義務
アルモノトス但シ祭祀法用又ハ公
務執行ノ爲必爲アルトキ其ノ他已
ムコトヲ得ザル事由アルトキハ此
ノ限ニ在ラズ

第十條 前條ノ規定ニ依リ寶物ヲ出
陳シタル者ニ對シテハ朝鮮總督ノ
定ムル所ニ依リ國庫ヨリ補給金ヲ
交付スルコトヲ得

第十一條 第三條ノ規定ニ依リ行爲
若ハ第六條第一項ノ規定ニ依ル命
令ノ爲損害ヲ被リタル者アルトキ
又ハ第九條ノ規定ニ依リテ出陳シ
タル寶物其ノ出陳中不可抗力ニ因
ルニ非ズシテ滅失若ハ毀損シタル
トキハ朝鮮總督ハ其ノ定ムル所ニ
依リ損害ヲ補償スルコトヲ得

第十二條 第九條ノ規定ニ依リテ出
陳シタル寶物ニ付其ノ出陳中所有
者ノ變更アリタルトキハ新所有者
ハ當該寶物ニ關シ本令ニ規定スル
舊所有者ノ權利義務ヲ承繼ス

第十三條 朝鮮總督ハ地方公共團體
ヲ指定シテ寶物、古蹟、名勝又ハ
天然記念物ノ管理ヲ爲サシムルコ
トヲ得

前項ノ管理ニ要スル費用ハ當該公
共團體ノ負擔トス

前項ノ費用ニ對シテハ國庫ヨリ豫
算ノ範圍内ニ於テ其ノ一部ヲ補助
スルコトヲ得

第十四條 公益上其ノ他特殊ノ事由
ニ依リ必要アリト認ムルトキハ朝
鮮總督ハ保存會ニ諮問シ寶物、古
蹟、名勝又ハ天然記念物ノ指定ノ
解除ヲ爲スコトヲ得

第十五條 朝鮮總督第一條若ハ第二
條第二項ノ規定ニ依リ指定ヲ爲シ
又ハ前條ノ規定ニ依リ指定ノ解除
ヲ爲シタルトキハ其ノ定ムル所ニ
依リ之ヲ告示シ且當該物件又ハ土
地ノ所有者、管理者又ハ占有者ニ
通知スベシ但シ指定セラレタル物
ノ保存上必要ト認ムルトキハ告示
セザルコトヲ得

第十六條 朝鮮總督ハ國ノ所有ニ屬
スル寶物、古蹟、名勝又ハ天然記
念物ニ關シ別段ノ定ヲ爲スコトヲ
得

第十七條 寺刹ノ所有ニ屬スル寶物
ハ之ヲ差押フルコトヲ得ズ

前項ノ寶物ノ管理ニ關スル事項ハ
朝鮮總督之ヲ定ム

第十八條 貝塚、古墳、寺址、城址、
窯址其ノ他ノ遺蹟ト認ムベキモノ
ハ朝鮮總督ノ許可ヲ受クルニ非ザ
レバ發掘其ノ他現狀ヲ變更スルコ
トヲ得ズ

前項ノ遺蹟ト認ムベキモノヲ發見
シタル者ハ直ニ其ノ旨ヲ朝鮮總督
ニ届出ツベシ

第十九條 朝鮮總督ハ本令ニ規定ス

美術關係法規

ル其ノ職權ノ一部ヲ道知事ニ委任スルコトヲ得

第二十條 朝鮮總督ノ許可ナクシテ寶物ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 寶物ヲ損壞、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ寶物自己ノ所有ニ係ルトキハ二年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第二十二條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

一 許可ヲ受ケズシテ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ニ關シ其ノ現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ影響ヲ及ボスベキ行爲ヲ爲シタル者

二 第六條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者

三 第十八條第一項ノ規定ニ違反シタル者

四 第五條若ハ第十八條第一項ノ規定ニ違反シ又ハ第六條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シテ得タル物件ヲ讓受ケタル者

第二十三條 第三條ノ規定ニ依ル當

該官吏ノ職務執行ヲ拒ミ妨ゲ若ハ忌避シ、調査ニ必要ナル物件ノ提供ヲ爲サズ又ハ調査ニ必要ナル物件ニシテ虚偽ナルモノヲ提供シタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

附 則

本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

朝鮮總督府寶物古蹟名勝

天然記念物保存會官制

昭和八年八月八日
勅令第二百二十四號

第一條 朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然記念物保存會ハ朝鮮總督ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

保存會ハ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關スル事項ニ付朝鮮總督ニ建議スルコトヲ得

第二條 保存會ハ會長一人及委員四十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長ハ朝鮮總督府政務總監ヲ以テ之ニ充ツ

委員及臨時委員ハ朝鮮總督ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ總理ス

第五條 保存會ノ議事ニ關スル規則ハ朝鮮總督之ヲ定ム

第六條 保存會ニ幹事ヲ置ク朝鮮總督ノ奏請ニ依リ朝鮮總督府高等官ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第七條 保存會ニ書記ヲ置ク朝鮮總督府判任官ノ中ヨリ朝鮮總督之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則

本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然記念物保存會職員

會長 政務總監 今井田清徳

黒板 勝美 池内 宏

鍋木外岐雄 藤島亥次郎

原田 淑人 濱田 耕作

天沼 俊一 梅原 末治

拓務書記官 今吉 敏雄

内務局長 牛島 省三

財務局長 林 繁藏

殖産局長 穂積眞六郎

學務局長 渡邊豐日子

農林局長 矢島 杉造

警務局長 池田 清

總督府事務官 榎居 俊一

同 兒島 高信

同 嚴 昌 變

總督府技師 立岩 巖

中樞院參議 柳 正 秀

鐵道局長 吉田 浩

田中 豐藏

藤田 亮策

森 爲 三

植木 秀幹

三好 學

小田 省五

李 能 和

鮎貝房之進

小場 恒吉

金 容 鎮

崔 南 善

嚴 昌 變

著作權保護

著作權法

明治三十二年三月四日
法律第三十九號

第一章 著作權者ノ權利

第二章 出版權

第三章 偽作

第四章 罰則

第五章 附則

著作權法

第一章 著作權ノ權利

第一條 文書演述圖畫建築彫刻模型

寫眞演奏歌唱其ノ他文藝學術若ハ美術(音樂ヲ含ム以下之ニ同ジ)ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ヲ複製スルノ權利ヲ專有ス

文藝學術ノ著作權ハ翻譯權ヲ包含シ各種ノ脚本及樂譜ノ著作權ハ興行權ヲ包含ス

第二條 著作權ハ其ノ全部又ハ一部ヲ讓渡スコトヲ得

第三條 發行又ハ興行シタル著作物ノ著作權ハ著作權ノ生存間及其ノ死後三十年間繼續ス

數人ノ合著作ニ係ル著作物ノ著作權ハ最終ニ死亡シタル者ノ死後三十年間繼續ス

第四條 著作權ノ死後發行又ハ興行シタル著作物ノ著作權ハ發行又ハ興行ノ時ヨリ三十年間繼續ス

第五條 無名又ハ變名著作物ノ著作權ハ發行又ハ興行ノトキヨリ三十年間繼續ス但シ其ノ期間内ニ著作者其ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルトキ

ハ第三條ノ規定ニ從フ

第六條 官公衙學校社寺協會會社其ノ他團體ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ發行又ハ興行シタル著作物ノ著作權ハ發行又ハ興行ノトキヨリ三十年間繼續ス

第七條 著作權者原著物發行ノトキヨリ十年内ニ其ノ翻譯權ヲ發行セサルトキハ其ノ翻譯權ハ消滅ス前項ノ期間内ニ著作權者其ノ保護ヲ受ケントスル國語ノ翻譯權ヲ發行シタルトキハ其ノ國語ノ翻譯權ハ消滅セス

第八條 冊號ヲ逐ヒ順次ニ發行スル著作物ニ關シテハ前四條ノ期間ハ每冊若ハ每號發行ノトキヨリ起算ス一部分ツツヲ漸次ニ發行シ全部完成スル著作物ニ關シテハ前四條ノ期間ハ最終部分ノ發行ノトキヨリ起算ス但シ三年ヲ經過シ仍繼續ノ部分ヲ發行セサルトキハ既ニ發行シタル部分ヲ以テ最終ノモノト看做ス

第九條 前六條ノ場合ニ於テ著作權ノ期間ヲ計算スルニハ著作物死亡ノ年又ハ著作權者ヲ發行又ハ興行シタル年ノ翌年ヨリ起算ス

第十條 相續人ナキ場合ニ於テ著作權ハ消滅ス

第十一條 左ニ記載シタルモノハ著作權ノ目的物ト爲ルコトヲ得ス

一 法律命令及官公文書
二 新聞紙又ハ雜誌ニ掲載シタル雜報及時事ヲ報道スル記事
三 公開セル裁判所ノ議會並政談集會ニ於テ爲シタル演述

第十二條 無名又ハ變名著作物ノ發行又ハ興行者ハ著作權者ニ屬スル權利ヲ保全スルコトヲ得但シ著作權者ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 數人ノ合著作ニ係ル著作物ノ著作權ハ各著作權者ノ共有ニ屬ス各著作權者ノ分擔シタル部分明瞭ナル場合ニ於テ著作權者中ニ其ノ發行又ハ興行ヲ拒ム者アルトキハ他ノ著作權者ハ其ノ者ニ賠償シテ其ノ持分ヲ取得スルコトヲ得但シ反對ノ契約アルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十四條 數多ノ著作物ヲ適法ニ編輯シタル者ハ著作權者ト看做シ其ノ編輯物全部ニ付テノ著作權ヲ有ス但シ各部ノ著作權ハ其ノ著作權者ニ屬ス

第十五條 著作權ノ相續讓渡及質入ハ其ノ登錄ヲ受タルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

無名又ハ變名著作物ノ著作權ハ現ニ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ實名ノ登錄ヲ受タルコトヲ得

著作權者ハ現ニ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ著作權ヲ有スル年月日ノ登錄ヲ受タルコトヲ得

第十六條 登錄ハ行政廳之ヲ行フ登錄ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十七條 未タ發行又ハ興行セサル著作物ノ原本及其ノ著作權ハ債權者ノ爲ニ差押ヲ受シルコトナシ但シ著作權者ニ於テ承諾ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十八條 他人ノ著作物ヲ發行又ハ興行スル場合ニ於テハ著作權者ノ生存中ハ著作權者ガ現ニ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ同意ナクシテ著作權者ノ氏名稱號ヲ變更若ハ隱匿シ又ハ其ノ著作權ニ改竄其

本條第二項ノ場合ニ於テハ發行又ハ興行ヲ拒ミタル著作權者ノ意ニ反シテ其ノ氏名ヲ其ノ著作權ニ掲ク

作權ノ目的物ト爲ルコトヲ得ス

一 法律命令及官公文書
二 新聞紙又ハ雜誌ニ掲載シタル雜報及時事ヲ報道スル記事
三 公開セル裁判所ノ議會並政談集會ニ於テ爲シタル演述

第十二條 無名又ハ變名著作物ノ發行又ハ興行者ハ著作權者ニ屬スル權利ヲ保全スルコトヲ得但シ著作權者ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 數人ノ合著作ニ係ル著作物ノ著作權ハ各著作權者ノ共有ニ屬ス各著作權者ノ分擔シタル部分明瞭ナル場合ニ於テ著作權者中ニ其ノ發行又ハ興行ヲ拒ム者アルトキハ他ノ著作權者ハ其ノ者ニ賠償シテ其ノ持分ヲ取得スルコトヲ得但シ反對ノ契約アルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十四條 數多ノ著作物ヲ適法ニ編輯シタル者ハ著作權者ト看做シ其ノ編輯物全部ニ付テノ著作權ヲ有ス但シ各部ノ著作權ハ其ノ著作權者ニ屬ス

第十五條 著作權ノ相續讓渡及質入ハ其ノ登錄ヲ受タルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

無名又ハ變名著作物ノ著作權ハ現ニ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ實名ノ登錄ヲ受タルコトヲ得

著作權者ハ現ニ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ著作權ヲ有スル年月日ノ登錄ヲ受タルコトヲ得

第十六條 登錄ハ行政廳之ヲ行フ登錄ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十七條 未タ發行又ハ興行セサル著作物ノ原本及其ノ著作權ハ債權者ノ爲ニ差押ヲ受シルコトナシ但シ著作權者ニ於テ承諾ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十八條 他人ノ著作物ヲ發行又ハ興行スル場合ニ於テハ著作權者ノ生存中ハ著作權者ガ現ニ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ同意ナクシテ著作權者ノ氏名稱號ヲ變更若ハ隱匿シ又ハ其ノ著作權ニ改竄其

本條第二項ノ場合ニ於テハ發行又ハ興行ヲ拒ミタル著作權者ノ意ニ反シテ其ノ氏名ヲ其ノ著作權ニ掲ク

作權ノ目的物ト爲ルコトヲ得ス

一 法律命令及官公文書
二 新聞紙又ハ雜誌ニ掲載シタル雜報及時事ヲ報道スル記事
三 公開セル裁判所ノ議會並政談集會ニ於テ爲シタル演述

第十二條 無名又ハ變名著作物ノ發行又ハ興行者ハ著作權者ニ屬スル權利ヲ保全スルコトヲ得但シ著作權者ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

ノ他ノ變更ヲ加ヘ若ハ其ノ題號ヲ改ムルコトヲ得ズ

他人ノ著作物ヲ發行又ハ興行スル場合ニ於テハ著作ノ死後ハ著作權ノ消滅シタル後ト雖モ其ノ著作物ニ改竄其ノ他ノ變更ヲ加ヘテ著作ノ意ヲ害シ又ハ其ノ題號ヲ改メ若ハ著作ノ氏名稱號ヲ變更若ハ隱匿スルコトヲ得ズ

前二項ノ規定ハ第二十條、第二十二條ノ二、第二十二條ノ五第二項、第二十七條第一項第二項、第三十條第一項第二號乃至第九號ノ場合ニ於テモ之ヲ適用ス

第十九條 原著物ニ調點、傍訓、句讀、批評、註解、附錄、圖畫ヲ加ヘ又ハ其ノ他ノ修正増減ヲ爲シ若ハ翻案シタルカ爲新ニ著作權ヲ生スルコトナシ但シ新著作物ト看做サルヘキモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十條 新聞紙又ハ雜誌ニ掲載シタル政治上ノ時事問題ヲ論議シタル記事(學術上ノ著作物ヲ除ク)ハ特ニ轉載ヲ禁ズル旨ノ明記ナキトキハ其ノ出所ヲ明示シテ之ヲ他ノ新聞紙又ハ雜誌ニ轉載スル事ヲ得

第二十二條ノ二 時事問題ニ付テノ公開演述ハ著作ノ氏名、演述ノ時及場所ヲ明示シテ之ヲ新聞紙又ハ雜誌ニ掲載スルコトヲ得但シ同一

著作ノ演述ヲ蒐輯スル場合ハ其ノ著作ノ許諾ヲ受クルコトヲ要ス

第二十一條 翻譯者ハ著作ト看做シ本法ノ保護ヲ享有ス但シ原著者ノ權利ハ之カ爲ニ妨ケラルルコトナシ

第二十二條 原著者ト異リタル技術ニ依リ適法ニ美術上ノ著作物ヲ複製シタル者ハ著作ト看做シ本法ノ保護ヲ享有ス

第二十二條ノ二 文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ヲ活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ複製(脚色シテ映畫ト爲ス場合ヲ含ム)シ及興行スルノ權利ヲ包含ス

第二十二條ノ三 活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物ノ著作權ハ文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權トシテ本法ノ保護ヲ享有ス其ノ保護ノ期間ニ付テハ獨創性ヲ有スルモノニ在リテハ第三條乃至第六條及第九條ノ規定ヲ適用シ之ヲ缺クモノニ在リテハ第二十三條ノ規定ヲ適用ス

第二十二條ノ四 他人ノ著作物ヲ活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ複製(脚色シテ映畫ト爲ス場合ヲ含ム)シタル者ハ著作ト看做

シ本法ノ保護ヲ享有ス但シ原著者ノ權利ハ之ガ爲ニ妨ケラルルコトナシ

第二十二條ノ五 文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ノ無線電話ニ依リ放送ヲ許諾スルノ權利ヲ包含ス

無線電信法及之ニ基キ發スル命令ニ依リ主務大臣ノ許可ヲ受ケタル放送無線電話施設者ハ既ニ發行又ハ興行シタル他人ノ著作物ヲ放送セントスルトキハ著作權者ト協議ヲ爲スコトヲ要ス協議調ハザルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣ノ定ムル相當ノ償金ヲ支拂ヒ其ノ著作物ヲ放送スルコトヲ得

前項ノ償金ノ額ニ付異議アル者ハ民事裁判所ニ出訴スル事ヲ得

第二十二條ノ六 文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ヲ音ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ寫調シ及其ノ機器ニ依リ興行スルノ權利ヲ包含ス

第二十二條ノ七 音ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ他人ノ著作物ヲ適法ニ寫調シタル者ハ著作ト看做シ其ノ機器ニ付テノミ著作權ヲ有ス

第二十三條 寫眞著作權ハ十年間繼續ス

前項ノ期間ハ其ノ著作物ヲ始メテ發行シタル年ノ翌年ヨリ起算ス若シ發行セザルトキハ種板ヲ製作シタル年ノ翌年ヨリ起算ス

寫眞術ニ依リ適法ニ美術上ノ著作物ヲ複製シタル者ハ原著物ノ著作權ト同一ノ期間内本法ノ保護ヲ享有ス但シ當事者間ニ契約アルトキハ其ノ契約ノ制限ニ從フ

第二十四條 文藝學術ノ著作物中ニ挿入シタル寫眞ニシテ特ニ其ノ著作物ノ爲ニ著作シ又ハ著作セシメタルモノナルトキハ其ノ著作權ハ文藝學術ノ著作物ノ著作權ニ屬シ其ノ著作權ト同一ノ期間内繼續ス

第二十五條 他人ノ囑託ニ依リ著作シタル寫眞肖像ノ著作權ハ其ノ囑託者ニ屬ス

第二十六條 寫眞ニ關スル規定ハ寫眞術ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物ニ適用ス

第二十七條 著作權者ノ不明ナル著作物ニシテ未タ發行又ハ興行セザルモノハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ發行又ハ興行スルコトヲ得

著作權者ノ居所不明ナル場合其ノ他命令ノ定ムル事由ニ因リ著作權者ト協議スルコト能ハザルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣ノ定ムル相當ノ償金ヲ供託シテ其ノ著作物ヲ發行又ハ興行スルコトヲ

得

前項ノ償金ノ額ニ付異議アル者ハ民事裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十八條 外國人ノ著作權ニ付テハ條約ニ別段ノ規定アルモノヲ除ク外本法ノ規定ヲ適用ス但シ著作權保護ニ關シ條約ニ規定ナキ場合ニハ帝國ニ於テ始メテ其ノ著作物ヲ發行シタル者ニ限り本法ノ保護ヲ享有ス

第二章 出版權

第二十八條ノ二 著作權者ハ其ノ著作物ヲ文書又ハ圖畫トシテ出版スルコトヲ引受クル者ニ對シ出版權ヲ設定スルコトヲ得

第二十八條ノ三 出版權者ハ設定行爲ノ定ムル所ニ依リ出版權ノ目的タル著作物ヲ原作ノ儘印刷術其ノ他ノ機械的又ハ化學的方法ニ依リ文書又ハ圖畫トシテ複製シ之ヲ發賣頒布スルノ權利ヲ專有ス但シ著作權者タル著作物ノ死亡シタルトキ又ハ設定行爲ニ別段ノ定ナキ場合ニ於テ出版權ノ設定アリタル後三年ヲ經過シタルトキハ著作權者ハ著作物ヲ全集其ノ他ノ編輯物ニ輯録シ又ハ全集其ノ他ノ編輯物ノ一部ヲ分離シテ別途ニ之ヲ出版スルコトヲ妨ゲズ

第二十八條ノ四 出版權ハ設定行爲ニ別段ノ定ナキトキハ其ノ設定ア

リタルトキヨリ三年間存続ス

第二十八條ノ五 出版權者ハ出版權ノ設定アリタルトキヨリ三月以內ニ著作物ヲ出版スルノ義務ヲ負フ

但シ設定行爲ニ別段ノ定アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

出版權者カ前項ノ義務ニ違反シタルトキハ著作權者ハ出版權ノ消滅ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條ノ六 出版權者ハ著作物ヲ繼續シテ出版スルノ義務ヲ負フ但シ設定行爲ニ別段ノ定アルトキハ此ノ限ニアラズ

出版權者ガ前項ノ義務ニ違反シタルトキハ著作權者ハ三月以上ノ期間ヲ定メテ其ノ履行ヲ催告シ其ノ期間內ニ履行ナキトキハ出版權ノ消滅ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條ノ七 著作權者ハ出版權者ガ著作物ノ各版ノ複製ヲ完了スルニ至ル迄其ノ著作物ニ正當ノ範圍內ニ於テ修正増減ヲ加フルコトヲ得

出版權者ガ著作物ヲ再版スル場合ニ於テハ其ノ都度豫メ著作權者ニ其ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第二十八條ノ八 著作權者ハ其ノ著作物ノ出版ヲ廢絶スル爲何時ニテモ損害ヲ賠償シテ出版權ノ消滅ヲ請求スル事ヲ得

第二十八條ノ九 出版權ハ著作權者

ノ同意ヲ得テ其ノ讓渡又ハ質入ヲ爲スコトヲ得

第二十八條ノ十 出版權ノ得喪、變更及質入ハ其ノ登錄ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ズ

第十六條ノ規定ハ出版權ノ登錄ニ付之ヲ準用ス

第二十八條ノ十一 出版權ノ侵害ニ付テハ本法中第三十四條及第三十六條ノ二ノ規定ヲ除クノ外僞作ニ關スル規定ヲ準用ス

第三章 僞作

第二十九條 著作權ヲ侵害シタル者ハ僞作者トシ本法ニ規定シタルモノノ外民法第三編第五章ノ規程ニ從ヒ之ニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スルノ責ニ任ス

第三十條 既ニ發行シタル著作物ヲ左ノ方法ニ依リ複製スルハ僞作ト看做サス

第一 發行スルノ意思ナク且器械的又ハ化學的方法ニ依ラスシテ複製スルコト

第二 自己ノ著作物中ニ正當ノ範圍內ニ於テ節録引用スルコト

第三 普通教育上ノ修身書及讀本ノ目的ニ供スル爲ニ正當ノ範圍內ニ於テ拔萃編輯スルコト

第四 文藝學術ノ著作物ノ文句ヲ自己ノ著作シタル脚本ニ挿入シ

又ハ樂譜ニ充用スルコト

第五 文藝學術ノ著作物ヲ説明スルノ材料トシテ美術上ノ著作物ヲ挿入シ又ハ美術上ノ著作物ヲ説明スルノ材料トシテ文藝學術ノ著作物ヲ挿入スルコト

第六 圖畫ヲ彫刻物模型ニ作リ又ハ彫刻物模型ヲ圖畫ニ作ルコト

第七 脚本又ハ樂譜ヲ收益ヲ目的トセズ且出演者ガ報酬ヲ受ケザル興行ノ用ニ供シ又ハ其ノ興行ヲ放送スルコト

第八 音ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ著作物ノ適法ニ寫調セラレタルモノヲ興行又ハ放送ノ用ニ供スルコト

第九 專ラ官廳ノ用ニ供スル爲複製スルコト

本條ノ場合ニ於テハ其ノ出所ヲ明示スルコトヲ要ス

第三十一條 帝國ニ於テ發賣頒布スルノ目的ヲ以テ僞著作物ヲ輸入スル者ハ僞作者ト看做ス

第三十二條 練習用ノ爲ニ著作シタル問題ノ解答書ヲ發行スル者ハ僞作者ト看做ス

第三十三條 善意ニシテ且過失ナク僞作ヲ爲シテ利益ヲ受ケ之カ爲ニ他人ニ損失ヲ及ボシタル者ハ其ノ利益ノ存スル限度ニ於テ之ヲ返還スル義務ヲ負フ

第三十四條 數人ノ合著作ニ係ル著作物ノ著作權者ハ偽作ニ對シ他ノ著作權者ノ同意ナクシテ告訴ヲ爲シ及自己ノ持分ニ對スル損害ノ賠償ヲ請求シ又ハ自己ノ持分ニ應シテ前條ノ利益ノ返還ヲ請求スルコトヲ得

第三十五條 偽作ニ對シ民事ノ訴訟ヲ提起スル場合ニ於テハ既ニ發行シタル著作物ニ於テ其ノ著作權者トシテ氏名ヲ掲ケタル者ヲ以テ其ノ著作權者ト推定ス

無名又ハ變名著作物ニ於テハ其ノ著作權者ニ發行權者トシテ氏名ヲ掲ケタル者ヲ以テ其ノ發行權者ト推定ス未タ發行セサル脚本、樂譜及活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物ノ發行ニ關シテハ其ノ興行ニ著作權者トシテ氏名ヲ顯ハシタル者ヲ以テ其ノ著作權者ト推定ス

著作權者ノ氏名ヲ顯ハササルトキハ其ノ興行權者ヲ以テ其ノ著作權者ト推定ス

第十五條第三項ノ規定ニ依リ著作年月日ノ登錄ヲ受ケタル著作物ニ在リテハ其ノ年月日ヲ以テ著作ノ年月日ト推定ス

第三十六條 偽作ニ關シ民事ノ出訴又ハ刑事ノ起訴アリタルトキハ裁判所ハ原告又ハ告訴人ノ申請ニ依

リ保證ヲ立テシメ又ハ立テシメスシテ假ニ偽作ノ疑アル著作物ノ發賣頒布ヲ差止め若ハ之ヲ差押ヘ又ハ其ノ興行ヲ差止めルコトヲ得前項ノ場合ニ於テ偽作ニ非サル旨ノ判決確定シタルトキハ申請者ハ差止又ハ差押ヨリ生シタル損害ヲ賠償スルノ責ニ任ス

第三十六條ノ二 第十八條ノ規定ニ違反シタル行爲ヲ爲シタル者ニ對シテハ著作權者ハ著作權者タルコトヲ確保シ又ハ訂正其ノ他其ノ聲望名譽ヲ回復スルニ適當ナル處分ヲ請求シ及民法第三編第五章ノ規程ニ從ヒ損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得

第十八條ノ規定ニ違反シタル行爲ヲ爲シタル者ニ對シテハ著作權者ノ死後ニ於テハ著作權者ノ親族ニ於テ其ノ著作權者タルコトヲ確保シ又ハ訂正其ノ他其ノ聲望名譽ヲ回復スルニ適當ナル處分ヲ請求スルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依リ民事ノ訴訟ニ付テハ前二條ノ規定ヲ準用ス

第三十六條ノ三 本法ノ規定ニ依リ登錄、第二十二條ノ五第二項若ハ第二十七條第二項ノ規定ニ依リ賞金ノ額又ハ著作ニ關スル一般的事項ニ付主務大臣ノ諮問ニ應ジ又ハ此等ノ事項ニ付調査審議スル爲著

作權審查會ヲ置ク
著作權審查會ノ組織ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四章 罰則

第三十七條 偽作ヲ爲シタル者及情ヲ知テ偽作物ヲ發賣シ又ハ頒布シタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十八條 第十八條ノ規定ニ違反シタル者ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十九條 第二十條、第二十條ノ二及第三十條第二項ノ規定ニ違反シ出所ヲ明示セスシテ複製シタル者並第十三條第四項ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十條 著作權者ニ非サル者ノ氏名稱號ヲ附シテ著作權者ヲ發行シタル者ハ三十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十一條 (削除)

第四十二條 虛偽ノ登錄ヲ受ケタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十三條 著作物及專ラ偽作ノ用ニ供シタル器械器具ハ偽作者、印刷者、發賣者及頒布者ノ所有ニ在ル場合ニ限り之ヲ沒收ス

第四十四條 本章ニ規定シタル罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス但シ第三十八條ノ場合ニ於テ著作權者ノ死亡シタルトキ並第四十條乃

至第四十二條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第四十五條 本章ノ罪ニ對スル公訴ノ時効ハ二年ヲ經過スルニ因リテ完成ス

第五章 附則

第四十六條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム (明治三十二年六月二十八日勅令第三百十三號ヲ以テ同年七月十五日ヨリ施行)

明治二十六年法律第十六號版權法明治二十年勅令第七十八號脚本樂譜條例明治二十年勅令第七十九號寫眞版權條例ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十七條 本法施行前ニ著作權ノ消滅セサル著作物ハ本法施行ノ日ヨリ本法ノ保護ヲ享有ス

第四十八條 本法施行前偽作ト認メラレサリシ複製物ニシテ既ニ複製モノハ之ヲ完成シテ發賣頒布スルコトヲ得

前項ノ複製ノ用ニ供シタル器械器具ノ現存スルトキハ本法施行後五年間仍其ノ複製ノ爲之ヲ使用スルコトヲ得

第四十九條 本法施行前翻譯シ又ハ翻譯ニ著手シ其ノ當時ニ於テ偽作ト認メラレサリシモノハ之ヲ完成シテ發賣頒布スルコトヲ得

但シ其ノ翻譯物ハ本法施行後七年
内ニ發行スルコトヲ要ス

前項ノ翻譯物ハ發行後五年間仍之
ヲ複製スルコトヲ得

第五十條 本法施行前既ニ興行シ若
ハ興行ニ著手シ其ノ當時ニ於テ偽
作ト認メラレサリシモノハ本法施
行後五年間仍之ヲ興行スルコトヲ
得

第五十一條 第四十八條乃至第二十
條ノ場合ニ於テハ命令ノ定ムル手
續ヲ履行スルニ非サレハ其ノ複製
物ヲ發賣頒布シ又ハ興行スルコト
ヲ得ス

附 則

(昭和九年法律第四十八號)

本法施行ノ期日ハ各規定ニ付勅令ヲ
以テ之ヲ定ム(昭和十年勅令第百八十九號
ヲ以テ同年七月十五日ヨリ施行)

登録稅法第十條第四號ノ二ノ次ニ左
ノ四號ヲ加フ

四ノ三 滯納處分以外ノ原因ニ因
ル第一號及第二號ノ權利
ノ處分ノ制限
債權金額 千分ノ四

四ノ四 著作年月日ノ登録

抹消シタル登録ノ回復
每一件 金一圓

四ノ五 抹消シタル登録ノ回復
每一件 金五十錢

美術關係法規

每一件 金五十錢

同法ニ左ノ一條ヲ加フ

第十條ノ二 出版權ニ關シ登録ヲ受
クルトキハ左ノ區別ニ從ヒ登録稅
ヲ納ムベシ

一 出版權ノ設定 每一件 金十圓

二 出版權ノ移轉 每一件 金一圓

三 出版權ヲ目的トスル質權ノ設
定 每一件 金五圓

四 前號ノ權利ノ移轉 債權金額千分ノ五・五

相續 每一件 金五十錢

五 信託ノ登録 每一件 金一圓

六 滯納處分以外ノ原因ニ因ル第
一號乃至第三號ノ權利ノ處分ノ
制限 債權金額 千分ノ四

七 抹消シタル登録ノ回復

八 假登録 每一件 金五十錢

九 登録ノ更正、變更又ハ抹消
每一件 金二十錢

(備考) 昭和六年法律第六十四號
ハ昭和六年八月一日ヨリ之ヲ施行
ス

著作權審查會官制

昭和十年七月八日
勅令第百九十一號

第一條 著作權審查會ハ內務大臣ノ
監督ニ屬シ著作權法ノ規定ニ依ル
登録、同法第二十二條ノ五第二項
若ハ第二十七條第二項ノ規定ニ依
ル償金ノ額又ハ著作ニ關スル一般
的事項ニ付內務大臣ノ諮問ニ應ジ
又ハ此等ノ事項ニ付調査審議ス

第二條 審查會ハ會長一人及委員二
十五人以內ヲ以テ之ヲ組織ス
前項委員ノ外必要アルトキハ臨時
委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長ハ內務大臣ヲ以テ之ニ
充ツ

第四條 委員及臨時委員ハ內務大臣
ノ奏請ニ依リ關係各廳高等官及學
識經驗アル者ノ中ヨリ內閣ニ於テ
之ヲ命ズ

委員ノ任期ハ二年トス但シ特別ノ
事由アル場合ニ於テハ任期中之ヲ
解任スルコトヲ妨ゲズ

第五條 會長ハ會務ヲ總理ス
會長事故アルトキハ內務大臣ノ指
名スル委員其ノ職務ヲ代理ス

第六條 審查會ニ幹事ヲ置ク內務大
臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命
ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整
理ス

第七條 審查會ニ書記ヲ置ク內務大

臣之ヲ命ズ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶
務ニ從事ス

附 則

本令ハ昭和十年七月十五日ヨリ之ヲ
施行ス

著作權審查會委員

外務省條約局長 栗山 茂
內務省警保局長 唐澤 俊樹
司法省民事局長 大森 洪太
文部省專門學務局長 赤間 信義
東京美術學校校長 和田 英作
東京音樂學校校長 乘杉 嘉壽
東京音樂學校校長 水野鍊太郎
男穂積 重遠
横山 秀麿
子近衛 秀麿
濱尾 四郎
増田 義一
犬養 健
德田 末雄
小野賢一郎
山田 耕作
山本 勇造
小林 一三
阿南 正茂
城戸 四郎
菊池 寛
目黒 甚七
島崎 春樹

改正ベルヌ條約

昭和六年七月十七日
條約第四號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ昭和三年六月二日「ローマ」ニ於テ帝國全權委員ガ關係各國全權委員ト共ニ署名シタル千九百八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和六年七月十七日

内閣總理大臣男爵若槻禮次郎

外務大臣男爵幣原喜重郎

内務大臣 安達 謙藏

條約第四號

千九百八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ文學的及美術的著作物保護ニ關スル「ベルヌ」條約
獨逸國大統領、埃地利共和國聯邦大統領、白耳義國皇帝陛下、「ブラジル」合衆國大統領、「ブルガリア」國皇帝陛下、「丁抹國皇帝陛下、西班牙國皇帝陛下、「エストニア」共和國大統領、「フインランド」共和國大統領、佛蘭西共和國大統領、「グレ

ート、ブリテン」、「アイルランド」及「グレート、ブリテン」海外領土皇帝印度皇帝陛下、希臘共和國大統領、「ハンガリー」國執政殿下、伊太利國皇帝陛下、日本國皇帝陛下、「ルクセンブルグ」國大公殿下、「モロッコ」國皇帝陛下、「モナコ」國公殿下、諾威國皇帝陛下、和蘭國皇帝陛下、「ポーランド」國及「ダンテツヒ」自由市ノ名ニ於ケル「ポーランド」共和國大統領、「ポルトガル」共和國大統領、「ルーマニア」國皇帝陛下、瑞典國皇帝陛下、瑞西聯邦政府、「シリア」國及「グレート、レバノン」國、「チエツコスロヴァキヤ」共和國大統領、「テュニス」國公殿下ハ文學的及美術的著作物ニ關シ著作ノ權利ヲ能ク限リ有效且均等ノ方法ヲ以テ保護センコトヲ均シク希望シ千九百八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ署名セラレタル條約ヲ改正シ且補足スルコトニ決シ之ガ爲各左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ（全權委員氏名省略）

各全權委員ハ之ガ正當ナル委任ヲ受ケ左ノ如ク協定セリ
第一條
本條約ノ適用セラルル國ハ文學的及美術的著作物ニ關スル著作ノ權利ノ保護ノ爲同盟ヲ組織ス

第二條

(一) 「文學的及美術的著作物」ナル用語ハ表現ノ方法又ハ形式ノ如何ヲ問ハズ書籍、小冊子及其ノ他ノ文書、講演、演說、說教及其ノ他

同性質ノ著作物、演劇脚本、樂譜ノ演劇脚本、演出ガ文書其ノ他ノ方法ヲ以テ定メラレタル舞譜及無言劇、歌詞入り又ハ歌詞ナシノ樂譜、素描、繪畫、建築、彫刻、銅版及石版ノ著作物、圖解及地圖、地理學、地形學、建築學又ハ科學ニ關スル圖面、略圖及模型ノ如キ文藝、學術及美術ノ範圍ニ屬スル一切ノ製作物ヲ包含ス

(二) 翻譯、翻案、編曲及其ノ他文學的又ハ美術的著作物ノ變形複製物並ニ異リタル著作物ノ編輯物ハ原作物ノ著作ノ權利ヲ害セザル範圍ニ於テ原著作物トシテ保護セラルベキモノトス
(三) 同盟國ハ前記著作物ノ保護ヲ確保スベキ義務ヲ有ス
(四) 工業ニ應用セラレタル美術的著作物ハ各國ノ國內法ノ認ムル限り保護セラルベキモノトス

第二條ノ二

(一) 政治演說及裁判所ニ於ケル辯論中ニ爲サレタル演說ヲ前條ニ定ムル保護ヨリ一部又ハ全部排除スルノ權能ハ同盟各國ノ國內法ニ留保セラル

(二) 講演、演說、說教及其ノ他同性質ノ著作物ヲ新聞紙雜誌ニ複製スルコトヲ得ル條件ヲ規定スルノ權能モ亦同盟各國ノ國內法ニ留保セラル尤モ前記著作物ヲ編輯物ト爲スノ權利ハ著作ノ限リ之ヲ有スベシ

第三條
本條約ハ眞實の著作物及寫眞術ト類似ノ方法ヲ以テ作リタル著作物ニ之ヲ適用ス同盟國ハ之ガ保護ヲ確保スベキ義務ヲ有ス

第四條
(一) 同盟ノ一國ニ屬スル著作人ハ公ニセザル又ハ同盟ノ一國ニ於テ初テ公ニシタル著作物ニ關シ著作物ノ本國以外ノ國ニ於テ、其ノ國法ガ內國民ニ現ニ許與シ又ハ將來許與スベキ權利及本條約ニ依リ特ニ許與セラレタル權利ヲ享有ス

(二) 右權利ノ享有及行使ハ何等方式ノ履行ヲ要セズ其ノ享有及行使ハ著作物ノ本國ニ於ケル保護ノ存在ニ係ルコトナシ從テ本條約ノ規定ノ外保護ノ範圍及著作ノ權利保全ノ爲右著作人ニ保障セラレタル救済ノ方法ハ保護ノ要求セララル

(三) 國ノ法律ニ專ラ依ルベキモノトス公ニセザル著作物ニ關シテハ著作人ノ屬スル國ヲ以テ著作物ノ本國トシ公ニシタル著作物ニ關シテ

- ハ第一發行ノ國ヲ以テ本國トシ同盟ノ數國ニ於テ同時ニ公ニシタル著作物ニ關シテハ右諸國ノ中其ノ國法ノ許與スル保護ノ期間最短キ國ヲ以テ其ノ本國トス同盟ニ屬セザル一國ト同盟ノ一國トニ於テ同時ニ公ニシタル著作物ニ關シテハ同盟國ノミヲ以テ本國トス
- (四) 「公ニシタル著作物」トハ本條約ノ意義ニ於テハ刊行シタル著作物ヲ謂フ演劇脚本又ハ樂譜入演劇脚本ノ上演音樂的著作物ノ演奏、美術的著作物ノ展覽及建築的著作物ノ建設ハ公ニスルノ意味ニ非ザルモノトス
- 第五條 同盟ノ一國ニ屬スル者ニシテ同盟ノ他ノ一國ニ於テ初テ其ノ著作物ヲ公ニシタルモノハ其ノ國ニ於テ内國著作物ト同一ノ權利ヲ有ス
- 第六條 (一) 同盟ノ一國ニ屬セザル著作物ニシテ同盟ノ一國ニ於テ初テ其ノ著作物ヲ公ニシタルモノハ其ノ國ニ於テハ内國著作物ト同一ノ權利ヲ享有シ同盟ノ他ノ諸國ニ於テハ本條約ノ許與スル權利ヲ享有ス
- (二) 尤モ同盟ニ屬セザル國ガ同盟ノ一國ニ屬スル著作物ノ著作物ニ對シ充分ノ保護ヲ與ヘザルトキハ該同盟國ハ著作物ノ第一發行ノ當時

- 該非同盟國ニ屬シ且同盟ノ一國ニ於テ現實ノ住所ヲ有セザル著作物ノ右著作物ノ保護ヲ制限スルコトヲ得ベシ
- (三) 前項ニ基キ規定セラレタル如何ナル制限モ著作物ガ右制限ノ實施前同盟ノ一國ニ於テ公ニシタル著作物ニ關シ既ニ取得シタル權利ヲ妨グルコトナカルベシ
- (四) 本條ニ基キ著作物ノ權利ノ保護ヲ制限スベキ同盟國ハ右保護ノ制限ヲ受クベキ國及該國ニ屬スル著作物ノ權利ニ加フル制限ヲ示セル宣言書ヲ以テ其ノ旨ヲ瑞西聯邦政府ニ通告スベシ瑞西聯邦政府ハ直ニ右ノ事實ヲ同盟ノ一切ノ國ニ通知スベシ
- 第六條ノ二 (一) 著作物ノ財產的權利ニ係ルコトナク且該權利ノ移轉後ト雖モ著作物ハ著作物ノ創作タルコトヲ主張スルノ權利及右著作物ノ改竄、截除又ハ其ノ他ノ變更ニシテ著作物ノ名譽又ハ聲望ヲ害スルコトアルベキモノニ對シテ異議ヲ述ブルノ權利ヲ保有ス
- (二) 右權利行使ノ條件ヲ定ムルコトハ同盟國ノ國內法ニ留保セラルル權利保全ノ爲ニスル救済ノ方法ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依ルベキモノトス

- 第七條 (一) 本條約ニ依リ許與セラルル保護ノ期間ハ著作物ノ生存間及其ノ死後五十年トス
- (二) 尤モ前項ノ期間ガ同盟ノ一切ノ國ニ依リ等シク採用セラレザル場合ニ於テハ保護ノ期間ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依ルベキ且著作物ノ本國ニ於テ定メラレタル期間ヲ超過スルコトヲ得ザルベシ從テ同盟國ハ其ノ國內法ニ合致スル範圍内ニ非ザレバ前項ノ規定ヲ適用スルヲ要セザルベシ
- (三) 寫眞的著作物及寫眞術ト類似ノ方法ヲ以テ作リタル著作物、遺著、無名又ハ變名著作物ニ關シテハ保護ノ期間ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依ルモノトス但シ著作物ノ本國ニ於テ定メラレタル期間ヲ超過スルコトヲ得ズ
- 第七條ノ二 (一) 著作物ノ合著作物ノ共有ニ屬スル著作物ノ權利ノ期間ハ合著作物中最終ノ生存者ノ死亡ノ日ニ依リテ計算セラル
- (二) 第一項ニ定ムル保護ノ期間ヨリ短キ保護ノ期間ヲ許與スル國ニ屬スル者ハ同盟ノ他ノ諸國ニ於テ之ヨリ長キ期間ノ保護ヲ要求スルコトヲ得ズ
- (三) 如何ナル場合ニ於テモ保護ノ期

- 間ハ合著作物中最終ノ生存者ノ死亡前ニ滿了スルコトヲ得ザルベシ
- 第八條 公ニセザル著作物ノ著作物ニシテ同盟ノ一國ニ屬スルモノ及同盟ノ一國ニ於テ初テ公ニシタル著作物ノ著作物ハ原著作物ニ關スル權利ノ全存續期間中同盟ノ他ノ諸國ニ於テ其ノ著作物ノ翻譯ヲ爲シ又ハ之ヲ許諾スルノ特權ヲ享有ス
- 第九條 (一) 同盟ノ一國ノ新聞紙又ハ定期編輯物中ニ於テ公ニシタル新聞小説、讀物及其ノ他題材ノ如何ヲ問ハズ文藝、學術又ハ美術ノ一切ノ著作物ハ著作物ノ承諾アルニ非ザレバ他國ニ於テ之ヲ複製スルコトヲ得ズ
- (二) 經濟上、政治上又ハ宗教上ノ時事問題ヲ論議シタル記事ハ其ノ轉載が明白ニ留保セラレザルトキハ新聞紙雜誌ニ之ヲ轉載スルコトヲ得但シ其ノ出所ハ常ニ之ヲ明瞭ニ示スコトヲ要ス此ノ義務ノ制裁ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム
- (三) 本條約ノ保護ハ時事ノ記事又ハ單ニ新聞紙雜誌ノ報道ニ過ギザル雜誌ニハ之ヲ適用セズ
- 第十條 教科用ニ供シ若ハ學術的ノ性質ヲ有

スル刊行物ノ爲又ハ節用編輯ノ爲ニ文學的又ハ美術的著作物ヲ適法ニ引用スルノ權能ニ關シテハ同盟國ノ法律及同盟國間ニ現存シ又ハ將來締結スベキ特別ノ取極ノ定ムル所ニ依ル

第十一條

(一) 本條約ノ規定ハ公ニシタルモノト否ト問ハズ演劇脚本又ハ樂譜入演劇脚本ノ公ノ上演及音樂的著作物ノ公ノ演奏ニ之ヲ適用ス

(二) 演劇脚本又ハ樂譜入演劇脚本ノ著作ハ原著著作物ニ關スル其ノ權利ノ存續期間内ハ其ノ翻譯物ノ許諾ナキ公ノ上演ニ對シテ保護セラ

(三) 本條ノ保護ヲ享有スルガ爲ニハ著作ハ其ノ著作物ヲ公ニスルニ際シ其ノ公ノ上演又ハ公ノ演奏ヲ禁止スルコトヲ要セス

第十一條ノ二

(一) 文學的及美術的著作物ノ著作ハ其ノ著作物ヲ無線放送ニ依リテ公衆ニ傳フルコトヲ許諾スルノ特權ヲ享有ス

(二) 前項ニ掲グル權利ヲ行使スルノ條件ハ同盟國ノ國內法ノ規定スル所ニ依ル但シ右條件ハ之ヲ規定セル國ニ於テノミ效力ヲ有スベシ右條件ハ如何ナル場合ニ於テモ著作

正ナル補償ヲ受クル著作ノ權利ヲモ害スルコトヲ得ザルベシ

第十二條

翻案、編曲及小説、讀物又ハ詩歌ト演劇脚本トノ相互ノ變作等ノ如キ文學的又ハ美術的著作物ノ許諾ナキ間接ノ轉用ガ同一ノ形態又ハ他ノ形態ニ於ケル右著作物ノ複製ニシテ主要ナルザル變更、増補又ハ省略ヲ爲シ且新ナル原著著作物タル性質ヲ具備セザルモノニ過ギザルトキハ本條約ヲ適用スベキ不法複製中ニ之ヲ特ニ包含スルモノトス

第十三條

(一) 音樂的著作物ノ著作ハ左ノ事項ヲ許諾スルノ特權ヲ有ス

(二) 一 音樂的著作物ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ右著作物ヲ寫調スルコト

二 前號ノ機器ヲ以テ右著作物ヲ公ニ演奏スルコト

(三) 本條ノ適用ニ關スル留保及條件ハ各國ニ關スル限リ其ノ國ノ國內法ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得ベシ但シ此ノ種ノ留保及條件ハ之ヲ規定セル國ニ於テノミ效力ヲ有スベシ

同日以後ニ同盟ニ加盟シ又ハ將來加盟スルコトアルベキ國ニ付テハ其ノ加盟ノ日前其ノ國ニ於テ適法ニ機械的器具ニ寫調セラレタル著作物ニハ之ヲ適用セス

(四) 本條第二項及第三項ニ基キ作成セラレタル寫調ニシテ右寫調ガ適法ニ非ザル國ニ利害關係人ノ許諾ナクシテ輸入セラレタルモノハ其ノ國ニ於テ之ヲ差押フルコトヲ得ベシ

第十四條

(一) 文學的、學術的又ハ美術的著作物ノ著作ハ其ノ著作物ノ活動寫眞術ニ依ル複製、翻案及公ノ上映ヲ許諾スルノ特權ヲ有ス

(二) 活動寫眞的製作物ハ著作ガ著作物ニ獨創的性質ヲ與ヘタルトキハ文學的又ハ美術的著作物トシテ保護セラル若シ此ノ性質ヲ缺クトキハ活動寫眞的製作物ハ寫眞的著作物ノ保護ヲ享有ス

(三) 活動寫眞的製作物ハ複製又ハ翻案セラレタル著作物ノ著作ノ權利ヲ害セザル範圍内ニ於テ一ノ原著著作物トシテ保護セラルベキモノトス

(四) 前諸規定ハ活動寫眞術ト類似ノ他ノ一切ノ方法ヲ以テ作リタル複製物又ハ製作物ニ之ヲ適用ス

第十五條

(一) 本條約ニ依リ保護セラルル著作物ノ著作ガ反對ノ證據アル迄眞正ノ著作ト看做サレ從テ同盟ノ諸國ノ裁判所ニ於テ偽作者ニ對シテ訴訟ノ提起ヲ許容セラルルガ爲ニハ其ノ名ガ通例ノ方法ニ依リ其ノ著作物ニ表示セラルルヲ以テ足ル

(二) 無名又ハ變名著作物ニ關シテハ發行者ニシテ其ノ名ガ著作物ニ表示セラレタルモノニ於テ著作者ニ屬スル權利ヲ保全スルノ權能ヲ有ス右發行者ハ他ノ證據ヲ要セスシテ無名又ハ變名著作者ノ承繼人ト認メラルベキモノトス

第十六條

(一) 一切ノ偽著作物ハ原著著作物ガ法律上ノ保護ヲ享有スル同盟國ノ權限アル機關ニ於テ之ヲ差押フルコトヲ得

(二) 右同盟國ニ於テハ著作物ガ保護セラレザルカ又ハ保護ノ止ミタル國ヨリ來ル複製物ヲモ差押フルコトヲ得

(三) 差押ハ各國ノ國內法ニ從ヒ之ヲ行フ

第十七條

本條約ノ規定ハ一切ノ著作物又ハ製作物ノ頒布、上演、展覽ヲ國內ノ立法又ハ警察上ノ措置ニ依リ許可シ、取締リ、禁止スルノ同盟各國ノ政府

取締リ、禁止スルノ同盟各國ノ政府

取締リ、禁止スルノ同盟各國ノ政府

ニ屬スル權利ヲ何等害スルコトナシ該權利ハ權限アル機關之ヲ行使スベシ

第十八條

(一) 本條約ハ本條約實施ノ際其ノ本國ニ於テ保護ノ期間ノ滿了ニ依リ既ニ公有ニ屬シタルモノニ非ザル

一切ノ著作物ニ之ヲ適用ス

(二) 尤モ著作物ガ從前認メラレタル保護ノ期間ノ滿了ニ依リ保護ノ要求セラルル國ニ於テ公有ニ屬シタルトキハ其ノ著作物ハ其ノ國ニ於テ新ニ保護セラレザルベシ

(三) 右原則ノ適用ハ之ニ關シ同盟國間ニ現存シ又ハ將來締結スベキ特別條約ノ規定ニ從フベキモノトス此ノ種ノ規定ノ存在セザルトキハ各國ハ各自國ニ關シ右原則ノ適用ニ關スル方法ヲ定ムベシ

(四) 前諸規定ハ同盟ニ新ニ加盟アリタル場合及保護ガ第七條ノ適用又ハ留保ノ拋棄ニ依リ擴張セラルベキ場合ニモ亦之ヲ適用ス

第十九條

本條約ノ規定ハ同盟ノ一國ノ法律ニ依リ一般ニ外國人ノ爲ニ定メラルベキ一層寬大ナル規定ノ適用ヲ求ムルコトヲ妨ゲズ

第二十條

同盟國政府ハ特別ノ取極ガ同盟ニ依リ付與セラレタル權利ヨリ廣大ナル

權利ヲ著作ニ付與スベキ限リ又ハ本條約ニ牴觸セザル他ノ規定ヲ包含スベキ限リ各國相互間ニ右取極ヲ締結スルノ權利ヲ留保ス現存ノ取極ノ規定ニシテ右條件ト合致スルモノハ引續キ適用アルモノトス

(一) 「文學的及美術的著作物保護國際同盟事務局」ナル名稱ノ下ニ設立セラレタル國際事務局ハ之ヲ維持ス

(二) 右事務局ハ瑞西聯邦政府ノ管理ノ下ニ之ヲ置ク瑞西聯邦政府ハ其ノ組織ヲ定メ且其ノ事務ヲ監督ス事務局ノ公用語ハ佛蘭西語トス

(三) 國際事務局ハ文學的及美術的著作物ニ付テノ著作權ノ權利ノ保護ニ關スル各種ノ報告ヲ蒐集シ之ヲ編纂發行ス事務局ハ同盟共同ノ利益ニ關スル事項ヲ講究シ且諸政府ヨリ受領シタル書類ニ依リ同盟ノ目的ニ關スル諸問題ニ付佛蘭西語ヲ以テ定期刊行物ヲ編纂ス同盟國政府ハ經驗上必要ト認メラルベキ場合ニ於テハ合意ヲ以テ事務局ガ一又ハ二以上ノ他ノ國語ヲ以テ別版ヲ發行スルコトヲ許ススルノ權利ヲ留保ス

(二) 國際事務局ハ文學的及美術的著作物ノ保護ニ關スル問題ニ付何時

ニテモ同盟國ノ請求ニ應ジ其ノ必要トスルコトアルベキ特殊報告ヲ與フルコトヲ要ス

(三) 國際事務局局長ハ其ノ所管事務ニ付年報ヲ作成シ之ヲ一切ノ同盟國ニ送付ス

(一) 國際事務局ノ經費ハ同盟國共同シテ之ヲ負擔ス右經費ハ新ナル議定アル迄ハ年額十二萬瑞西「フランド」ヲ超過スルコトヲ得ザルベシ右額ハ必要ナル場合ニ於テハ第二十四條ニ掲グル會議ノ一ノ全會一致ノ決議ニ依リ之ヲ増加スルコトヲ得ベシ

(二) 右經費總額ニ對シ各國ノ釐出割合ヲ定ムル爲同盟國及將來同盟ニ加入スル國ヲ六等ニ區分シ各等ノ釐出スベキ單位ノ簡數ノ比例ヲ定ムルコト左ノ如シ

(三) 第一等 二十五單位
第二等 二十單位
第三等 十五單位
第四等 十單位
第五等 五單位
第六等 三單位
右系數ニ各等ノ國數ヲ乘ジ之ニ依リ得タル積ノ和ヲ單位數トシ之ヲ以テ費用總額ヲ除スベシ其ノ商ハ一單位ノ費用額ヲ示スモノトス各國ハ其ノ加盟ノ際前記等級中

其ノ列セラレシコトヲ求ムルモノヲ聲明スベシ尤モ爾後何時ニテモ他ノ等級ニ列セラレシコトヲ欲スル旨ヲ聲明スルコトヲ得ベシ

(五) 瑞西兩國政府ハ事務局ノ豫算ヲ調製シ及其ノ支出ヲ監督シ、必要ナル立替ヲ爲シ且他ノ一切ノ同盟國政府ニ送付スベキ毎年度ノ出納計算書ヲ作成ス

(一) 本條約ハ同盟制度ヲ完全ナラシムベキ改良ヲ加ヘンガ爲之ニ改正ヲ加フルコトヲ得

(二) 右ノ如キ問題及他ノ點ニ付同盟ノ發達ニ關係アル問題ハ同盟國ニ於テ順次開設スベキ會議ニ於テ該同盟國ノ委員之ヲ審議ス會議ヲ開設スベキ國ノ政府ハ國際事務局ノ協力ヲ得テ會議ノ準備ヲ爲ス事務局局長ハ會議ノ議事ニ列席シ且討論ニ參加スト雖モ議決ニ加ハラズ

(三) 本條約ノ如何ナル變更モ同盟ヲ組成スル各國一致ノ合意ヲ得ルニ非ザレバ同盟ニ對シテ效力ナキモノトス

(一) 第二十五條 同盟ニ屬セザル國ニシテ本條約ノ目的トスル權利ノ法律上ノ保護ヲ確保スルモノハ其ノ請求ニ依リ加盟スルコトヲ得

(二) 右加盟ハ書面ヲ以テ瑞西聯邦政府ニ之ヲ通告スベク該政府ハ之ヲ他ノ同盟國ニ通告スベシ

(三) 右加盟ハ當然本條約ニ規定セル一切ノ條款ヘノ加入及本條約ニ規定セル一切ノ利益ノ享受ヲ伴ヒ且瑞西聯邦政府ガ他ノ同盟國ニ通告シタル後一月ニシテ其ノ效力ヲ生ズベシ但シ加入スル國ニ依リ後ノ日ガ指定セラレタルトキハ此ノ限ニ在ラズ尤モ右加盟ハ加入スル國ガ少クトモ一時翻譯ニ關シ第八條ニ代フルニ千八百九十六年「パリ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年ノ同盟條約第五條ノ規定ヲ以テスルコトヲ欲スル旨ノ表示ヲ包含スルコトヲ得ベシ該規定ハ當該國ノ一又ハ二以上ノ國語ニ翻譯スル場合ノミニ關スルモノト當然了解ス

第二十六條

(一) 同盟各國ハ本條約ガ其ノ殖民地保護領、委任統治地域、其ノ主權若ハ權力ノ下ニ在ル他ノ一切ノ地域又ハ宗主權ノ下ニ在ル一切ノ地域ノ全部又ハ一部ニ適用セラルル旨ヲ瑞西聯邦政府ニ何時ニテモ書面ヲ以テ通告スルコトヲ得ベク之ニ依リ本條約ハ通告中ニ掲ゲラレタル一切ノ地域ニ適用セラルベシ右通告ナキトキハ本條約ハ右地域

(二) 適用セラレザルベシ
同盟各國ハ本條約ガ前項ニ定ムル通告ノ目的ト爲リタル地域ノ全部又ハ一部ニ對シ適用セラレザルニ至ル旨ヲ瑞西聯邦政府ニ何時ニテモ書面ヲ以テ通告スルコトヲ得ベク本條約ハ瑞西聯邦政府ニ宛テラレタル通告ノ受領後十二月ニシテ右通告中ニ掲ゲラレタル地域ニ於テ適用セラレザルニ至ルベシ

(三) 本條第一項及第二項ノ規定ニ從ヒ瑞西聯邦政府ニ對シテ爲サレタル一切ノ通告ハ之ヲ該政府ヨリ一切ノ同盟國ニ通知スベシ

第二十七條

(一) 本條約ハ同盟國相互ノ關係ニ於テハ千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約及順次之ヲ改正シタル諸條規ニ代ルベシ從前實施セラレタル諸條規ハ本條約ヲ批准セザルベキ國トノ關係ニ於テハ其ノ適用ヲ保持スベシ

(二) 本條約ニ署名シタル國ハ從前爲シタル留保ノ利益ヲ引續キ保持スルコトヲ得ベシ但シ批准書寄託ノ際其ノ旨ノ宣言ヲ爲スコトヲ條件トス

(三) 現ニ同盟ニ屬スル國ニシテ本條約ニ署名セザルベキモノハ何時ニテモ本條約ニ加入スルコトヲ得ベシ此ノ場合ニ於テハ該國ハ前項ノ

規定ノ利益ヲ享有スルコトヲ得ベシ

第二十八條

(一) 本條約ハ批准セラルベク其ノ批准書ハ遲クトモ千九百三十一年七月一日迄ニ「ローマ」ニ於テ寄託セラルベシ

(二) 本條約ハ之ヲ批准シタル同盟國間ニ於テハ右期日後一月ニシテ實施セラルベシ但シ右期日前ニ於テ本條約ガ少クトモ同盟ノ六國ニ依リ批准セラレタルトキハ本條約ハ右同盟國間ニ於テハ第六ノ批准書ノ寄託ガ瑞西聯邦政府ニ依リテ右同盟國ニ通告セラレタル後一月ニシテ及爾後批准スベキ同盟國ニ對シテハ各其ノ批准ノ通告後一月ニシテ實施セラルベシ

(三) 同盟ニ屬セザル國ハ千九百三十一年八月一日迄ハ千九百八十八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ署名セラレタル條約又ハ本條約ニ加入スルコトニ依リテ同盟ニ加盟スルコトヲ得ベシ千九百三十一年八月一日後ニ於テハ該國ハ本條約ニ加入スルコトヲ得ベシ

第二十九條

(一) 本條約ハ其ノ廢棄ノ通告ノ爲サレタル日ヨリ一年ヲ經過スル迄ハ無期限ニ引續キ實施セラルベシ

(二) 右廢棄ノ通告ハ瑞西聯邦政府ニ

之ヲ爲スベシ右廢棄ノ通告ハ之ヲ爲シタル國ニ對シテノ其ノ效力ヲ生ズベク本條約ハ同盟ノ他ノ諸國ニ對シテハ其ノ效力ヲ存續スルモノトス

第三十條

(一) 本條約第七條第一項ニ定ムル五十年ノ保護ノ期間ヲ自國ノ法律ニ採用スル國ハ之ヲ瑞西聯邦政府ニ書面ヲ以テ通告スベク該政府ハ直ニ之ヲ同盟ノ他ノ一切ノ諸國ニ通知スベシ

(二) 第二十五條及第二十七條ニ依リ爲シ又ハ維持シタル留保ヲ拋棄スル國ニ付亦前項ニ同ジ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名セリ(委員氏名省略)

附 外務省告示

昭和六年七月十八日
外務省告示第五十九號

千九百八十八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル文學的及美術的著作物保護ニ關スル千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約ニ對スル帝國ノ批准書寄託ニ際シ帝國政府ハ在伊帝國大使ヲシテ左ノ宣言ヲ爲サシメタリ

宣言

ハ其ノ日本國ニ實施セラルルヨリ及日本國ニ付爲サレタル留保ト同一ノ留保ノ下ニ下記地域即チ朝鮮、臺灣、樺太及關東州租借地ニ適用セラルベキ旨本官ハ本國政府ノ訓令ニ依リ同條約第二十六條(一)ニ從ヒ閣下ニ通告スルノ光榮ヲ有シ候

尙日本國政府ハ其ノ國際事務局經費分擔額ニ關シ千九百三十二年度ヨリ同盟國ノ第二等ニ代フルニ第一等ニ列セラレ度キ旨條約第二十三條(四)ノ規定ニ從ヒ希望致候

他方日本國政府ハ前記條約ガ日本國ニ實施セラルル日ヨリ音樂の著作物ノ公ノ演奏ニ關シ千九百八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ改正セラレタル「ベルヌ」條約ノ批准書寄託ニ際シ千九百十年六月九日其ノ爲シタル留保ハ之ヲ拋棄スル旨聲明致候

本官ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和六年(千九百三十一年)七月十五日「ベルヌ」ニ於テ

矢田七太郎

聯邦參議院議員、聯邦政務省長官 ジュゼツペ、モツタ閣下

美術獎勵
設施一覽

帝室技藝員

帝室技藝員の制度は明治二十三年十月我が皇室におかされて明治維新以來藝術的に衰退し經濟的に困窮して居た當時の我が美術界振興の思召しから制定せられたもので、帝室技藝員には人格藝術共に後進の師表と仰がるべき大家を、特に其の爲に選ばれたる委員をして銓衡せしめ任命せられるものである。

帝國美術院

帝國美術院官制

昭和十年六月一日
勅令第四百十七號

第一條 帝國美術院ハ文部大臣ノ管
理ニ屬シ美術ノ發達ニ關スル重要
ノ事項ヲ審議ス

帝國美術院ハ美術ノ發達ニ資スル
爲展覽會ヲ開催スルコトヲ得
帝國美術院ハ美術ニ關スル重要ノ
事項ニ付文部大臣ニ建議スルコト
ヲ得

第二條 帝國美術院ハ院長一人及會員五十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第三條 院長及會員ハ美術ニ關シ識

見聞歴卓越スル者ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

院長及會員ハ勅任官ノ待遇ヲ受ク

第四條 外國人ニ對シテ帝國ニ於ケ

ル美術ノ發達ニ關シ特別ノ功勞アル者ハ帝國美術院ニ於テ之ヲ名譽會員ト爲スコトヲ得

第五條 院長ハ院務ヲ總理ス
院長事故アルトキハ文部大臣ノ指

工藝	板谷波山	同
同	香取秀眞	同
同	清水龜藏	同
建築	佐々木岩次郎	大正六年六月

侯細川護立、正木直彦
皇室技藝員名簿

拜命年月

同	同	同	日本畫	大正六年六月
同	同	同	竹內栖鳳	
同	同	同	川合玉堂	
同	同	同	橫山大觀	
同	同	同	橋本錫雪	
同	同	同	昭和六年六月	
同	同	同	同九年十二月	

同
安田靱彦
同

同	菊池契月	同
---	------	---

洋畫 藤島武二 同

同	同
同日安奉	岡田三良助
同	同

影刻
山崎朝雲
司

彫刻
山崎朝雲
同

美術獎勵施設

定スル會員其ノ職務ヲ代理ス

第六條 帝國美術院ニ主事ヲ置ク文
部部内ノ高等官ノ中ヨリ文部大臣
ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
主事ハ院長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整
理ス

第七條 帝國美術院ニ書記ヲ置ク文
部部内ノ判任官ノ中ヨリ文部大臣
之ヲ命ズ
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從
事ス

第八條 帝國美術院ハ文部大臣ノ認
可ヲ受ケ帝國美術院ニ關スル規則
ヲ定ムルコトヲ得

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
帝國美術院規程ハ之ヲ廢止ス

帝國美術院職員

院長 清水 澄
會員 岡田三郎助
和田英作
川合芳三郎
竹内 恒吉
中村 不折
藤島 武二
荒木悌二郎
小室貞次郎
結城 貞松
北村 西望
菊地 完爾

滿谷國四郎

建昌綱一郎

和田 三造

山崎 朝雲

內藤 伸

西山卯三郎

板谷 嘉七

香取秀治郎

錦木 健一

南 薫造

松岡 輝夫

中澤 弘光

赤塚平左衛門

清水六兵衛

川村 萬藏

松林 篤

西村源次郎

土田 金二

朝倉 文夫

清水 龜藏

石井 滿吉

橋本 關一

富田鎮五郎

富本 靈吉

川端昇太郎

横山 秀濤

梅原龍三郎

山下新太郎

安田新三郎

安井曾太郎

前田 康造

小杉國太郎

小林 茂

有島壬生馬

佐藤 清藏

齋藤 知雄

平櫛倬太郎

津田 信夫

石丸 優三

青山 新

帝國美術院議事規則

第一條 會議ハ院長之ヲ招集ス

會員五人以上ノ請求アリタルトキ
ハ院長之ヲ招集スベシ

第二條 院長ハ會議ノ議長トナリ議
事ヲ整理ス

第三條 會議ハ會員三分ノ二以上出
席スルニ非ザレバ之ヲ開クコトヲ
得ズ

議事ハ出席會員ノ過半数ヲ以テ之
ヲ決ス

可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス
特別ノ必要アル場合ハ會議ノ議決
ニ依リ前二項ノ規定ニ依ラザルコ
トヲ得

第四條 會議ハ之ヲ秘密トス

帝國美術院授賞規則

第一條 帝國美術院ハ卓絶セル美術
作品ニ對シテ賞ヲ授ク

前項ノ外帝國美術院ハ美術ノ進歩
ニ貢獻スベキ顯著ナル業績アリト
認ムル者ニ對シテハ賞ヲ授クルコ
トヲ得

第二條 賞ハ賞狀及賞金トス

第三條 賞ハ帝國美術院會員ニ非ザ
ル者ニ之ヲ授ク

第四條 賞ヲ授クルハ會員三名以ト
ノ推薦ニ依リ帝國美術院會議ノ議
決ヲ經ベシ

前項ノ議決ヲ爲スタメ毎年少クト
モ一回會議ヲ開ク

第五條 前條ノ議決ハ會員三分ノ二
以上ノ出席及出席會員三分ノ二以
上ノ賛成アルコトヲ要ス

必要アル場合ニ於テハ會議ノ議決
ニ依リ缺席シタル會員ニ對シ賛否
ノ表決ヲ求ムルコトヲ得

第六條 賞ヲ授クベキ者推薦アリタ
ル後死亡シタル場合ニ於テハ帝國
美術院ハ授賞ノ旨ヲ公示シ且其ノ
者ニ授クベキ賞ノ處分ヲ定ム
(賞記様式省略)

帝國美術院常議員規則

第一條 帝國美術院ニ於ケル院務ニ
關シ院長ノ諮問ニ應ズル爲常議員
ヲ置ク

常議員ノ定員ハ十一名トシ帝國美
術院會員中ヨリ選出ス

第二條 常議員ノ任期ハ一年トス但シ重任ヲ妨ゲズ

第三條 常議員會ハ院長之ヲ招集ス

第四條 院長ハ常議員會ノ議長トナル

院長事故アルトキハ院長ノ指名スル常議員議長トナル

第五條 常議員會ハ二分ノ一以上ノ出席ヲ要シ表決ハ出席員ノ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス

帝國美術院常議員

第一部

西山 翠峰
鎬木 清方
安田 靱彦
小室 翠雲
石井 柏亨
有島 生馬

第三條

第四部

滿谷國四郎
平櫛 田中
建畠 大夢
香取 秀眞
赤塚 自得

帝國美術院顧問規則

第一條 帝國美術院ハ本規則ノ定ムル所ニ依リ顧問ヲ置クコトヲ得

第二條 顧問ハ本院ニ特ニ功勞顯著

美術獎勵施設

ナル者ニ就キ院長之ヲ委嘱ス

第三條 院長ニ於テ顧問ヲ推薦セン

トスルトキハ會員會議ニ附シ出席會員三分ノ二以上ノ賛成ヲ得ルコトヲ要ス

帝國美術院展覽會參與規則

第一條 帝國美術院展覽會ニ關スル事項ニ付帝國美術院長ノ諮問ニ應ズル爲展覽會參與ヲ置ク

第二條 展覽會參與ハ五十人以上以内トス

展覽會參與ノ各部所屬數ハ當該部會員ノ數ニ準ズルモノトス

第三條 展覽會參與ハ各部所屬會員三分ノ二以上出席セル部會ニ於テ出席會員三分ノ二以上ノ投票ヲ得タル者ニ就キ會員會議ノ議決ヲ經テ之ヲ推薦ス

帝國美術院展覽會參與

(第一部及第三部ノ參與ニ關シテハ本文一八五及一八七頁參照)

第一部

堂本 印象
小川 芋錢
川崎 小虎
上村 松園
中村 岳陵
宇田 荻邨
野田 九浦
山口 蓬春

第三部

第四部

福田平八郎
木村 武山
石井 鶴三
長谷川榮作
國方 林三
藤井 浩祐
澤田 晴廣
北村 正信
六角 紫水
海野 清
佐々木象堂

明治大正美術史編纂委員會規則

第一條 帝國美術院ニ臨時ニ明治大正美術史編纂委員會ヲ設ク委員會ハ株式會社朝日新聞社寄附ノ美術獎勵費ニ基ク明治大正美術史編纂ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條 委員會ハ委員長及委員若干名ヲ以テ之ヲ組織ス委員長及委員ハ帝國美術院長ノ推薦ニ依リ文部大臣之ヲ囑託ス

第三條 委員長ハ會務ヲ總理ス

第四條 委員ハ委員長ノ指揮ヲ承ケ編纂ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第五條 委員會ニ幹事一名ヲ置ク幹事ハ美術研究所長ヲ以テ之ニ充ツ

幹事ハ委員長ノ指揮ヲ承ケ委員會ノ審議ニ基キテ編纂ニ關スル事務ヲ掌ル

第六條 編纂ニ關スル事務ハ美術研究所ニ之ヲ委嘱ス

第七條 委員會ハ委員長隨時之ヲ招集ス

第八條 編纂セラレタル美術史又ハ資料ハ適當ナル方法ニ依リ帝國美術院之ヲ發表ス

明治大正美術史編纂委員會職員

明治大正美術史編纂委員會職員

委員長 正木 直彦
委員 結城 貞松
横山 秀齋
和田 英作
石井 滿吉
香取秀治郎
矢代 幸雄
下村 宏
和田 英作

幹事 美術研究所長事務取扱 和田 英作

帝國美術院展覽會規則

第一章 總則

第一條 本會ノ定期開設ハ毎年一回トス出品ノ種別、會場、事務所及會期ハ其ノ都度之ヲ公告ス

第二條 本會ハ出品ノ種別ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ分ツ

第一部 繪畫

第二部 繪畫(油繪、水彩畫、パ

美術獎勵施設

ステル畫、素描、創作版畫等)

第三部 彫塑 (甲種 彫刻 乙種 塑造)

第四部 美術工藝

第三條 出品ハ鑑査ヲ經タルモノニ

限リ之ヲ陳列ス

出品人ニシテ左ニ列舉スル資格ノ

一ニ該當スルトキハ其ノ専門技術

ニ依ル出品ニ限リ鑑査外トス但シ

第四部ニ於ケル綜合製作ニ依ル出

品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノトス

一 帝國美術院會員及展覽會參與

二 帝國美術院授賞規則(大正十

三年制定ニ係ルモノヲモ含

ム)ニ依リ授賞セラレタル者

三 帝國美術院ニ於テ指定セラレ

タル者

前項第三號ノ指定ハ各部所屬會員

三分ノ二以上出席セル部會ニ於テ

出席會員三分ノ二以上ノ投票ヲ得

タル者ニ就キ會員會議ニ於テ之ヲ

決スルモノトス

第四條 出品ノ荷造及運送費ハ總テ

出品人ノ負擔トス但シ遠隔ノ地ニ

在ル出品團體ニ對シテハ文部省ヨ

リ特ニ其ノ費用ノ一部ヲ補助スル

コトアルベシ

第五條 本會ハ出品ノ保管ニ關シ十

分ノ注意ヲ爲スト雖モ出品ノ紛失

又ハ損害ニ對シ一切其ノ責ニ任ゼ

第六條 出品人ノ承諾ヲ得且帝國美

術院ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出品

ノ撮影又ハ模寫ヲ爲スコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ得タル者會場ニ於テ

出品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲サントス

ルトキハ許可證ヲ掛員ニ提示シテ

其ノ指揮ヲ受クベシ

文部省ハ出品ノ撮影、模寫シ又ハ

之ヲ刊行スルコトアルベシ

第二章 出品

第七條 出品ハ自己ノ製作シタルモ

ノニ限ル

故人ノ製作ニ係ルモノハ其ノ相續

人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第八條 第三部ノ出品ニシテ原型製

作者ト實材製作者ト其ノ人ヲ異ニ

スルトキハ原型製作者ヲ以テ其ノ

出品人ト爲ス

第四部ノ出品ニシテ綜合製作ナル

トキハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ

出品人ト爲ス但シ代表製作者ハ共

同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ

得

第九條 同一人ノ出品ハ第一乃至第

四ノ各部ニ付二點以內トス

但シ第三條第二項及第四十條ニ該

當スル出品ハ一點ニ限ル

第十條 出品ノ形狀表裝等ノ如何ニ

拘ラズ同一意匠ニ依レル一箇ノ作

品ト認メ得ベキモノハ二箇以上ニ

分離セルモノト雖モ之ヲ一點ト看

做ス

第十一條 同一意匠ニ依ラザル數箇

ノ作品ト雖モ一箇ニ合裝シタルモ

ノハ之ヲ一點ト看做ス

第十二條 第一部ノ出品ハ一點ニ付

縱十二尺以內(裝飾設備ヲ含ム)

トシ出品人ノ占メ得ベキ陳列壁面

ハ横十三尺迄トス

第十三條 第二項ニ依ル出品ハ縱二十

五尺以內(裝飾設備ヲ含ム)トス

第四部ノ出品ハ一點ニ付立體ニ在

リテ八十尺平方以內ノ場所ニ陳列

シ得ルモノ其ノ他ハ縱十二尺以內

(裝飾設備ヲ含ム)トス

第十四條 會場ノ都合ニ依リ出品ノ

全部ヲ同時ニ陳列スルコト能ハズ

ト認ムルトキハ一定日數毎ニ陳列

替ヲ爲スコトアルベシ

陳列替ニ關スル事項ハ當該部審査

員ニ於テ之ヲ定ム

出品ノ陳列上必要アリト認メタル

トキハ裝飾設備ヲ適宜變更セシム

ルコトアルベシ

第十五條 左ニ掲グルモノハ出品ス

ルコトヲ得ズ

一 製作後五年以上經タルモノ

二 本會ニ陳列シタルコトアルモ

三 風教ニ害アリト認ムルモノ

第十五條 出品ヲ爲サントスル者ハ

作品一點ニ付金一圓ノ手数料ヲ納

付スベシ既納ノ手数料ハ何等ノ事

由アルモ之ヲ還付セズ

第十六條 出品ヲ爲サントスル者ハ

手数料ヲ添ヘ所定書式ノ申込書ト

共ニ作品ヲ受付掛ニ差出スベシ

其ノ期日等ハ別ニ之ヲ公告ス

故人ノ作品ヲ出品スル場合ニハ第

一項ノ申込書中解説書欄ニ製作者

ノ氏名及履歷ヲ記入スベシ

作品ニハ一點毎ニ命題及出品人氏

名ヲ記シタル紙片ヲ貼付スベシ

第十七條 事務所ニ於テ出品ヲ受理

シタルトキハ直ニ受領證ヲ交付ス

ベシ

第十八條 出品ハ撤回スルコトヲ得

ズ但シ帝國美術院長ノ許可ヲ得タ

ルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十九條 第一部及第二部ノ出品ハ

額面ト爲シ又ハ枠線ヲ附スル等出

品人ニ於テ適當ノ裝飾設備ヲ爲ス

ベシ

第二十條 鑑査ノ上陳列スルコトニ

決定シタル出品以外ノモノハ展覽

會開會一週間後ヨリ二十日以内ニ

出品人ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルモノハ

本會ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第二十一條 本會ニ於テ定メタル陳

列品ノ位置、配列等ニ對シ出品人

ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第三章 鑑査及審査

第二十二條 審査員ハ帝國美術院會

員中ヨリ之ヲ定ム

各部ノ審査主任ハ帝國美術院長之ヲ指名ス

第二十三條 鑑査ハ出品ニ就キ陳列

スベキモノヲ定メ審査ハ陳列品ニ就キ優秀ナルモノヲ推奨スルモノトス

第二十四條 陳列品ハ總テ審査ヲ受

クルモノトス

第三條第二項ニ該當スル出品ハ審査外トス

第二十五條 鑑査及審査ハ各部ニ就

キ審査員之ヲ行フ

鑑査及審査ノ方法ハ各部審査員ニ於テ之ヲ定ム

鑑査及審査ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第二十六條 鑑査及審査ノ結果ハ各部審査主任ヨリ之ヲ帝國美術院長ニ報告スベシ

第二十七條 出品人ハ鑑査及審査ニ

對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及搬出

第二十八條 陳列品ハ本會ニ於テ其

ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス出品人ニ於テ本會ヲ經ズシ賣買契約ヲ爲サントスルトキハ本會ノ承認ヲ經ベシ

第二十九條 陳列品ヲ購買セントス

ル者ハ代金ヲ添ヘテ事務所ニ申出

ズベシ

第三十條 即時ニ代金ヲ支拂ハザル

トキハ手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ得手附ノ金額ハ代價ノ三分ノ一以上トス

前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金ノ支拂ヲ爲サザルトキハ手附金ハ之ヲ抛棄シタルモノト看做ス但シ抛棄シタル手附金ハ當該出品人ノ所得トス

第三十一條 賣買契約ヲ爲シタルト

キハ出品ニ其ノ旨ヲ貼紙スベシ

第三十二條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價ヲ變更セントスルトキハ事務所ニ届出ヅベシ

第三十三條 出品人ニ於テ出品及代金受領等ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルトキハ其ノ住所氏名ヲ具シ事務所ニ届出ヅベシ

第三十四條 出品ノ搬出期間ハ閉會後三日以內トス若期間内ニ搬出セザル者アルトキハ本會ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十五條 陳列品中賣約済ノモノハ閉會後買主ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出シ自己ノ買主タルコトヲ證明スルコトヲ要ス

第三十六條 閉會後陳列品ノ搬出運送等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ

事務所ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズルコトアルベシ

第五章 觀覽

第三十七條 觀覽時間ハ開會中毎日

午前九時ヨリ午後五時迄トス但シ都合ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ觀覽ヲ停止スルコトアルベシ

第三十八條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ル

ルコトヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ從フベシ

第三十九條 觀覽人ニシテ秩序風俗

ヲ紊ルノ虞アリト認ムル者ハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムルコトアルベシ

附則

第四十條 左ニ掲グル者ノ出品ハ第三條ノ規定ニ拘ラズ今後二回ノ展覽會ニ於テ之ヲ陳列スルコトヲ得

一 從前帝國美術院美術展覽會ノ出品ニ付無鑑査ノ取扱ヲ受ケタル者

二 前號ニ準ズベキ者

前項第二號ニ該當スベキ者ハ各部會ニ於テ之ヲ決定シ會員會議ノ議決ヲ經ベシ

展覽會規則第三條第二

項該當者

(第二部及第三部ニ關シテハ本文一八五及一八七頁參照)

授賞規則ニ依リ授賞セラレタル者

(現在ノ會員及展覽會參與ヲ除ク)

第二部

熊岡 美彦

田邊 至

中村 研一

安藤 照

橫江 嘉純

佐々木 大樹

池上 秀畝

服部 有恆

小野 竹齋

金島 桂華

吉村 忠夫

村上 華岳

矢澤 弦月

山口 華楊

兒玉 希望

荒井 寛方

北野 恆富

島田 豊仙

廣島 晃甫

堀 進二

小倉 右一郎

加藤 顯清

高村 光太郎

中野 桂樹

雨宮 治郎

三木 宗策

美術獎勵施設

新海 竹藏 關野 聖雲
第四部

石田 英一 鹿島 英二
高村 豐周 堆朱 楊成
山鹿 清華 山本 安曇
松田 權六 北原 千鹿
廣川松五郎 杉田 禾堂

商工省工藝展覽會

工藝審查委員會官制

大正八年五月二十二日
勅令第二百三十號

第一條 工藝審查委員會ハ商工大臣ノ監督ニ屬シ工藝展覽會出品ノ審査ヲ爲ス

工藝展覽會ニ關スル規程ハ商工大臣之ヲ定ム

第二條 工藝審查委員會ハ委員長及委員ヲ以テ之ヲ組織ス

委員長ハ商工次官ヲ以テ之ニ充ツ委員ハ商工大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第三條 委員ノ任期ハ一年トス

第四條 委員長ハ會務ヲ統理シ審査ノ成績ヲ商工大臣ニ報告ス

第五條 工藝審查委員會ハ之ヲ左ノ二部ニ分ツ商工大臣必要ト認ムルトキハ部ヲ科ニ分ツコトヲ得

第一部 圖案

第二部 工藝品

委員ノ部屬ハ商工大臣之ヲ定ム
第六條 工藝審查委員會ニ幹事二人ヲ置ク商工部内ノ高等官中ヨリ商工大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

幹事ハ委員長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
第七條 工藝審查委員會ニ書記五人ヲ置ク商工大臣之ヲ命ス
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

工藝審查委員會委員

委員

岸田日出刀 霜島正三郎 畑 正吉 宮下 孝雄 木村 恕一 岡田三郎助 六角注多良 津田 信夫 和田 三造 海野 清 平野 耕輔 國井喜太郎 磯井 雪枝 塚本 靖 武田 五一 板谷 嘉七

赤塚平左衛門

三 褒賞ニ等賞ヲ授與セラレタル者ガ褒賞ヲ授與セラレタル出品ト同種ノモノヲ其ノ翌年出品シタルトキ

工藝展覽會規程

第一章 總 則

第一條 工藝品ノ改善發達ヲ圖ル爲毎年一回工藝展覽會ヲ開ク、開催地、會場、會期其ノ他ノ事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第二條 本會ニ左ノ二部ヲ置ク

第一部 圖案

第二部 工藝品

第一部ニ出品スル圖案ニハ之ヲ應用シテ製作シタル物品ヲ、第二部ニ出品スル工藝品ニハ其ノ圖案ヲ添附スルコトヲ妨ゲズ

第三條 出品ハ鑑査ニ合格シタルモノニ限リ之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ出品一人ニ付出品二點ヲ限り鑑査ヲ要セズシテ之ヲ陳列ス

一 工藝審查委員會委員タル者又ハ委員タリシ者ガ出品シタルトキ

二 褒賞ニ等賞ヲ授與セラレタルコトアル者ガ褒賞ヲ授與セラレタル出品ト同種ノモノヲ出品シタルトキ

三 褒賞ニ等賞ヲ授與セラレタル者ガ褒賞ヲ授與セラレタル出品ト同種ノモノヲ其ノ翌年出品シタルトキ

第四條 出品ノ搬入及搬出ニ要スル費用ハ總テ出品人ノ負擔トス

第五條 出品ノ保管ニ關シテハ十分ノ注意ヲ爲スト雖モ出品ノ亡失、毀損、汚染其ノ他ノ損害ニ對シテハ別ニ定ムルモノノ外其ノ責ニ任ゼズ

第六條 出品人ノ承諾及商工省ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出品ヲ撮影又ハ模寫スルコトヲ得ズ

商工省ハ出品ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第二章 出 品

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品スルコトヲ得ズ

一 製作後三年以上ヲ經タルモノ
二 本會、其ノ他博覽會、共進會、展覽會又ハ品評會ニ陳列セラレタルコトアルモノ（但シ本會ニ對スル出品ヲ豫選スル爲各地方ニ於テ開ク展覽會、品評會ニ付テハ此ノ限ニアラス）

三、販賣ノ爲店舗ニ陳列セラレタルコトアルモノ

四、風教ヲ害スル處アルモノ

第八條 出品セントスル者ハ附屬様式ノ申込書ヲ商工省ニ差出スベシ

前項ノ圖案者又ハ製作者ガ出品人

陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之

(附屬樣式)

記

ニ付テハ其ノ旨

ニ付テハ其ノ旨

美術奨勵施設

ホ 追註文ニ應ジ得ル者ニ在リテハ其ノ旨

ニ 出品搬出ノ方法(會場若ハ事務所ニ於テ出品ヲ引取ルヤ又ハ運送ニ依リ送附ヲ受クルヤノ別)

商工省輸出工藝展覽會

商工省輸出工藝展覽會規程

第一章 總則

第一條 總則

第一條 工藝品ノ輸出振興ヲ圖ル爲毎年一回商工省輸出工藝展覽會ヲ開ク

前項ノ展覽會ノ會期、會場其ノ他ノ事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第二條 出品物ハ輸出向工藝品ニシテ左記各號ノ一ニ該當スル者ガ製造若ハ加工シタルモノ又ハ自己ノ爲ニ製造若ハ加工セシメタルモノニ限ル

一 工藝ニ關スル官公立ノ指導若ハ研究ノ機關又ハ學校其ノ他營利ヲ目的トセザル團體

二 審査委員又ハ審査委員タリシ者

三 出品物ノ製造、加工又ハ販賣ヲ業トスル者

第三條 出品物ハ鑑査ニ合格シタルモノニ限リ之ヲ陳列ス但シ左ノ各

號ノ一ニ該當スルモノニ付テハ鑑査ヲ行ハズシテ之ヲ陳列ス

一 工藝ニ關スル官公立ノ指導若ハ研究ノ機關ノ出品又ハ學校ノ出品

二 審査委員又ハ審査委員タリシ者ノ出品

第四條 出品物ノ搬入及搬出ニ要スル費用ハ總テ出品人ノ負擔トス

第五條 出品物ノ亡失、毀損、汚染其ノ他ノ損害ニ對シテハ別ニ定ムルモノノ外其ノ責ニ任ゼズ

第六條 出品人ノ承諾及商工省ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出品物ヲ撮影又ハ模寫スルコトヲ得ズ

商工省ハ出品物ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第三章 出品

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品スルコトヲ得ズ

一 追註文ニ應ジ得ザルモノ但シ工藝ニ關スル官公立ノ指導若ハ研究ノ機關ノ出品、學校其ノ他營利ヲ目的トセザル團體ノ出品又ハ審査委員若ハ審査委員タリシ者ノ出品ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

二 商品又ハ商品見本トシテ輸出セラレタルコトアルモノ

二 風教ヲ害スル虞アルモノ

第八條 出品セントスル者ハ附屬樣式ノ出品申込書ヲ商工省ニ差出スベシ

出品申込書ノ差出期日及出品物ノ受理期間ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第九條 出品物ヲ受理シタルトキハ出品物受領書ヲ交付ス

第十條 鑑査不合格ノ通知アリタルトキハ出品人ハ遲滞ナク其ノ出品物ヲ搬出スベシ通知ヲ發シタル日ヨリ十五日ヲ經ルモ搬出セザルトキハ商工省ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第十一條 出品人ハ出品物ノ陳列ノ位置、配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第十二條 陳列品ハ開會中ニ搬出スルコトヲ得ズ

第十三條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クベキモノトス但シ第三條第一號又ハ第二號ノ出品ニ付テハ審査ヲ行ハズ

第三章 鑑査及審査

第十四條 鑑査及審査ハ商工大臣ノ任命又ハ囑託スル審査委員之ヲ行フ

第十五條 商工大臣ハ審査委員中ヨリ審査委員長一名ヲ命ズ

第十六條 審査委員長ハ鑑査及審査ノ事務ヲ統理シ其ノ成績ヲ商工大臣ニ報告ス

第十七條 出品人ニ通知ス

第十八條 鑑査又ハ審査ニ對シテハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 褒賞

第十九條 審査ノ結果優等ト認メタル出品物ノ出品人ニ對シ褒賞ヲ授與ス

第二十條 褒賞ハ左ノ三種トス

一 進歩賞 意匠及技術上ノ進歩ニ優秀ナルモノ

一 有功賞 輸出増進上ノ效果特ニ優秀ナルモノ

一 褒狀 意匠及技術上ノ進歩又ハ輸出増進上ノ效果優秀ナルモノ

第二十一條 受賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

第五章 外國ニ於ケル陳列會

第二十二條 會期終了後陳列品ノ一部ヲ選定シ政府又ハ其ノ指定スル團體ガ外國ニ於テ開催シ又ハ參加スル陳列會、展覽會又ハ博覽會ニ出品人ヲシテ出陳セシムルモノトス

第二十三條 出品人ハ前條ノ出陳ヲ拒ムコトヲ得ズ

第二十四條 第三條第二十一條ニ依リ選定セラレタル陳列品ハ會期終了後政府ノ指定スル團體ニ之ヲ引渡スモノトス

第二十五條 第二十一條ノ陳列

會、展覽會又ハ博覽會ノ名稱、開催地其ノ他陳列會ニ關シ必要ナル事項ハ其ノ都度之ヲ告知ス

第六章 雜則

第二十二條 陳列品ハ非賣品及第二十一條ニ依リ選定セラレタルモノノ外購買ノ申込ニ應ズルモノトス前項ニ依リ購買ノ申込ニ應ズタルモノト雖モ其ノ後前條ニ依リ選定セラルルニ至リタルトキハ其ノ賣約ヲ取消シ得ルモノトス
陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取扱フ

出品人ニ於テ本會ヲ經ズシテ陳列品ノ賣買契約ヲ爲サントスルトキハ本會ノ承認ヲ受クベシ

第二十三條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申出デ代金又ハ手附金ヲ支拂フベシ
前項ノ手附金ハ代價ノ三分ノ一トス

手附金ヲ納付シタル買主本會ノ閉會後十五日以内ニ殘額代金ヲ支拂ハザルトキハ手附金ハ之ヲ抛棄シタルモノト看做シ當該出品人ノ所得トス

第二十四條 陳列品ハ追註文ニ應ジ得ザルモノヲ除クノ外本會ニ於テ其ノ追註文ノ斡旋ヲ爲スコトアルベシ

第二十五條 出品人又ハ買主ハ陳列

美術獎勵施設

品ヲ閉會後指定ノ期間内ニ搬出スベシ
前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ商工省ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

第二十六條 削除
第二十七條 秩序又ハ風俗ヲ紊ルノ虞アル者ハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムルコトアルベシ

第二十八條 觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且ツ係員ノ指揮ニ從フベシ
(附屬樣式)

出品申込書

私儀商工省輸出工藝展覽會規程ニ依リ左記目錄ノ通出品致度此段申込候也

年月日

住所

職業

出品人 氏 名

商工大臣宛

目錄

類別	品名	仕向	用途	箇數	代價	備考
—	—	—	—	—	—	—

一 申込書ハ出品物ノ種類毎ニ別紙ニ認メ提出スベシ

二 出品物ハ各一點毎ニ別行ニ記入シ其ノ出品物ヲ區別スル番號

ヲ記載スベシ(一點トハ販賣ノ一單位ヲ謂フ)

三 箇數ノ欄ニハ一點ノ出品物ノ箇數ヲ記載スベシ
四 追註文ニ應ジ得ベキ價格ガ代價ト差異アルトキハ其ノ價格ヲ併記スベシ

五 非賣品ニ付テハ代價ノ欄ニ其ノ旨並ニ參考價值ヲ記載スベシ
六 出品人ノ想定セル海外仕向先及用途ヲ夫々其ノ相當欄ニ記載スベシ

七 左ノ事項ハ之ヲ備考欄ニ記載スベシ

イ 鑑査ヲ要セザル出品物ニ付テハ其ノ旨及其ノ理由
ロ 審査ヲ行ハザル出品物ニ付テハ其ノ旨及其ノ理由

ハ 出品物搬出ノ方法(會場又ハ事務所ニ於テ出品物ヲ引取ルヤ又ハ運送ニ依リ送付ヲ受クルヤノ別及運送ノ場合ハ其ノ宛先)

京都市美術展覽會

本會は昭和十年三月京都市が美術獎勵の目的を以て創設せる日本畫、洋畫、彫刻、工藝の四部に互る綜合展で、新に展覽會規程を設け五月下旬より六月上旬迄大禮記念京都美術館に於て作品公募の上第一回展を開

催した。十年度の審査委員は左の通りである。

〔日本畫〕西山翠嶂、西村五雲、富田溪仙、川村曼舟、竹内栖鳳、堂本印象、土田麥僊、中村大三郎、宇田荻郷、福田平八郎、菊池契月、水田竹園〔洋畫〕太田喜二郎、大橋孝吉、鹿子木孟郎、田中善之助、黒田重太郎、須田國太郎〔彫塑〕石本曉曠、國安稻香、松田尚之〔美術工藝〕伊東陶山、戸島光孚、河村蜻山、山鹿清華、江馬長閑、澤田宗山、清水六兵衛。他に展覽會委員廿八名

昭和十年度同展覽會規程抜萃

第一條 本會は京都市美術展覽會と稱し京都市之を主催す

第二條 本會は昭和十年五月二十日より同年六月十三日迄大禮記念京都美術館に於て新製作の美術品及美術工藝品を展覽す

第三條 本會の出品は之を左の四部に分つ、第一部日本畫、第二部洋畫(油繪、水彩畫、バステル畫、創作版畫等)、第三部彫塑、第四部美術工藝

第七條 陳列品は委員の出品を除き鑑査を経たるものに限る

第八條 出品の荷造及運送費は總て出品人の負擔とす

第十一條 本會事務所は大禮記念京都美術館事務所に置く

美術獎勵施設

第十二條 出品者は京都府に居住する者或京都の美術及美術工藝界と特に關係ある者に限る

第十三條 出品は自己の製作したるものに限る

第十四條 第三部に屬するものにして原理製作者と實材製作者と其人を異にするときは原理製作者に限り之を出品する事を得、第四部に屬するものにして綜合製作なるときは其代表製作者一名を以て出品人となす但代表製作者は共同製作者の氏名を附記することを得

第十五條 出品は一人二點以内とす

第十六條 出品は出品人に於て適當の裝飾設備を爲すべし

第十九條 出品の大きさは適宜とす但陳列上特に設備を要するものは豫め會長の承認を受けることを要す

第二十一條 出品は本會事務所に搬入すべし

第二十二條 出品の搬入期日は五月十日より五月十三日（毎日午前九時より午後四時迄）とす但委員の出品に限り五月十六日（午後四時迄）とす

第二十三條 出品には所定の書式に依る申込書を添附すべし

第三十條 出品の鑑査及審査を爲す爲め各部に審査委員を置き委員の中より會長之を囑託す各部に審査

主任を置き審査委員の中より會長之を囑託す

第三十六條 本會は審査に於て優秀と認めたる陳列品に對し左の通り授賞す、紫章賞金若干人、紅章賞金若干人、綠章賞金若干人

第三十七條 本會陳列品は大禮記念京都美術館に於て買上ぐるべし

名古屋美術展覽會

名古屋市の主催に依り同市美術獎勵の爲め秋、日、洋、彫、工、書の五科に互る公募展覽會を開催する。

〔會長〕名古屋市長大岩勇夫

〔審査員〕（日本畫）川崎小虎、山口蓬春、堂本印象（洋畫）南薫造、横井禮市、加藤靜兒（彫塑）建昌大夢、加藤顯清（工藝）板谷波山、藤井達吉（書道）尾上柴舟、大島君川、倉尾古岳、長谷川流石、佐分移山

（事務所名古屋市役所社會教育課）

同展覽會規定拔萃

一、本會の出品は左の五部に分つ

日本畫

西洋畫

彫塑

工藝

書道（一般部、學生部に分つ）

一、出品は各部共一人三點以内とす
一、出品は各自に於て枠張、額縁、

表装をなすものとす、書道は特に依頼したるものの外は大畫箋紙以下の條幅に限る

一、出品は總て審査員の鑑査を経て陳列す、但し本會より特に依頼したる作家の出品に限り鑑査をなさず

一、搬入、搬出に要する費用は出品者の負擔とす

一、出品物一點に付手数料として金三十錢を徴收す、但し入選せざる場合も右手手数料は返戻せず

朝鮮美術展覽會

朝鮮に於ける美術の發達を裨補するため、大正十一年より毎年一回春季に總督府の事業として開催され今日に及ぶ。（事務所朝鮮總督府内）

同展覽會規程拔萃

一、朝鮮に於ける美術の發達を裨補する爲め毎年一回朝鮮美術展覽會を開く、會場、事務所及會期は其の都度之を公告す

一、本會は之を左の三部に分つ

第一部 東洋畫

第二部 西洋畫

第三部 彫塑及工藝

一、出品は鑑査を経たるものに限り之を陳列す但し左の各號の一に該當する出品は鑑査外とす

一、朝鮮美術審査委員又は委員た

りし者の出品

一、朝鮮美術審査委員長に於て推薦したる者の出品但し一點に限る

一、前回の朝鮮美術展覽會に於て特選せられたる者の出品但し一點に限る

一、出品は自己の製作したるものに限り、製作者は朝鮮に本籍を有する者又は展覽會開催迄引續き六月以上朝鮮に居住する者とす引續き三回以上入賞又は特選せられたるものは此の限りにあらず

一、同一人の出品は第一乃至第三の各部に付三點以内とす

一、出品は一點に付幅四間を超ゆることを得ず、各出品人の占め得べき陳列壁面は各部毎に幅四間迄とす

一、第三部の出品は立體に在りては一點に付十平方以内の場所に陳列し得る物に限る、同一部に於ける一人の出品二點以上にして其の幅合せて四間を超ゆる時は其の出品は一定日數毎に陳列替を爲すものとす、會場の都合に依り出品の全部を同時に陳列すること能はずと認むる時は一定日數毎に陳列替を爲すことあるべし、陳列替に關する事項は委員長之を決す、出品の丈高きに過ぎ陳列に不便ありと認めたるものは其の表装を適宜變

更せしむることあるべし

一、出品を爲さむとする者は甲號様式の出品願書を添へて作品を事務所に差出すべし其の期日は別に之を公告す、作品には一點毎に命題及出品人氏名を記したる出品札を貼附すべし

一、事務所に於て出品を受理したる時は直に受領書を交付す

一、出品は額面と爲し又は枠、縁を附する等出品人に於て適當の裝飾設備を爲すべし

臺灣美術展覽會

臺灣に於ける美術の發達を裨補するの目的を以て昭和二年より毎年秋季に臺灣教育會主催の下に公募展を開催し來り、昭和十年に及び九回を重ねた。會長臺灣教育會々長平塚廣義、副會長深川繁治。審査委員長及び審査員は毎年改嘱するもので昭和十年度は左の如くであつた。

〔審査委員長〕幣原坦〔審査員〕荒木十畝、川崎小虎、郷原藤一郎（以上日本畫）、藤島武二、梅原龍三郎、鹽月善吉（以上洋畫）

（事務所臺灣總督府內臺灣教育會）

同展覽會出品規則拔萃

一、出品は東洋畫及西洋畫の二種とす

一、出品人は臺灣に居住する者其他臺灣に縁故を有する者とす

一、出品は一人三點以內とす

一、出品を爲さんとする者は其の出品に本會所定の出品申込書を添へて本會々場に搬入し所定の出品受領證を受くべし

搬入期日は別に之を發表す

出品には一點毎に命題及出品人氏名を記したる紙片を貼付すべし

一、陳列品は會期終了後地方都市に搬出し展覽に供することあるべし出品にして前項の移動展覽に應じ難き場合は出品申込書に其の旨を明記すべし

一、本會に對する照會は必ず返信封を添付し臺灣總督府構內臺灣美術展覽會事務所宛と爲すべし

美術研究施設一覽

工藝指導所（官立）

仙臺市廿八町通
電話三七六〇

「本邦固有の工藝を改善し之が全國工業化を圖り現代民衆生活の要求に合致せしむる」と共にその海外輸出の振興を圖る目的を以て昭和三年政府に依り設置され、はじめ商工省内

に假事務所を設けたが同年十一月仙臺市の廳舎竣工と共に事務所を移轉し事業を開始して現在に至つた。其

後事業の進展上東京に於ける調査研究の必要を認め昭和八年五月より商工省内に工藝指導所出張員事務室を設け常時所員を駐在せしむる事となつた。當所は「第一部」木工、洋塗工、漆工「第二部」鑄造、鍛金、金屬化學、彫塑「第三部」圖案設計、展示、寫眞、印刷等に分れ其他調査係、傳習生係、編纂係等を設置し其事業に當つて居るが、その業務一般を要覽に依つて記せば左の如し。

業務一般

一 調査研究

内外工藝に關する意匠圖案設計材料、技術、生産工藝各般に關する調査研究及參考資料の蒐集をなす

二 試驗研究

主として木、金、漆工藝に利用すべき原料、材料、意匠圖案、又は機械器具及製作技術に關する試驗研究、各種工藝品の規範原型の研究をなす

三 試作研究

主として木、竹工品、金工品、漆工品其他各種工藝品を研究的に試作し、一般業者の參考に供すると共に適當の產地又は業者

に實施せしめ工業化する製品、圖案及參考品の貸與及展示

本所の研究試作品、設計圖案又は參考品は申請により之を貸與し或は展示會、展覽會、博覽會等に出品する

五 製作加工圖案調製應需

當所では木工、金工、漆工に關する製作加工又は之が圖案的調製依頼に應じ其他當所研究による試作品及圖案的配布をする

六 傳習生及研究生の養成

當所に於ける傳習生の養成は全國斯業の發達向上を目的とし主として木工、金工、漆工業者及其子弟並に工場從業者に對し其實務に必要な技術及知識を短期間に修得せしめる。研究生は工藝の學理又は技術に關して經驗を有し特に特別の研究を希望する者を入所せしめ專任所員が指導する

七 講習、講演及審査

當所の調査研究に基き工藝に關する講習、講演を開催し又は申請により講習、講演又は審査のため當所職員を派遣し、實地の指導をする

八 質疑應答

木工、金工、漆工に關する材料

美術研究施設

技術、意匠、其他工藝各般に關する質問に對し口答又は文書を以て應答し業者を啓發する

九 設備貸與

當業者の試験研究又は製品加工のため申請のあるときは當所作業に支障のない限り設備を貸與し便宜を圖る

十 刊行物頒布

本所の試験研究及調査に基き工藝ニュースを編輯し、之を工政會から發行させ又隨時工藝に關する小冊子及圖録を編纂し關係各方面に頒布する

工藝指導所官制

昭和三年三月三十一日
勅令第四十七號

第一條 工藝指導所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ工藝ノ指導ヲ爲ス爲左ノ事務ヲ掌ル

一 木工品及金屬工品ニ關スル試験及研究

二 木工品及金屬工品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 木工品及金屬工品製作ニ關スル傳習及講話

四 試験研究ノ爲製作シタル木工品及金屬工品、加工シタル其ノ材料並ニ調製シタル其ノ意匠圖案ノ配付

第二條 工藝指導所ハ工藝ノ改善ニ

必要アリト認ムル場合ニ限り木工品及金屬工品ノ製作並ニ其ノ意匠圖案ノ調製ノ依頼ニ應ズルコトヲ得

第三條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師 專任四人 奏任

屬 專任一人 判任

技手 專任三人 判任

所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ
(第四條以下略)

同所處務規程抜萃

一、工藝指導所ニ第一部第二部第三部及庶務課ヲ置ク

一、第一部ニ於テハ木工品並ニ木工用原料及材料ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第二部ニ於テハ金屬工品並ニ金屬用原料及材料ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第三部ニ於テハ意匠及圖案ニ關スル事務ヲ掌ル

職員

技師

所長 國井喜太郎
商工技師 平野 久保

同 谷内 治橋

寺坂 毅

陶磁器試験所(官立)

京都市伏見區深草正覺町
電話 國祇園一四七八

當所は本邦陶磁器工業の改善進歩並にその輸出増進を圖る爲の國立研究指導機關にして、大正八年京都市より、元京都市立陶磁器試験場の敷地、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、時の農商務省所管としたもので後に商工省の所管となり現在に至つて居る。而して昭和八年度、政府に於て國策として工藝振興に關する經費を新に支出することになつたが、この際偶瀬戸市に計劃された市立窯業試験所の土地、建物その他諸設備一切を擧げて當所に移管し、同所を陶磁器試験所瀬戸試験場として當所に於て經營することになった。

陶磁器試験所官制

大正八年四月五日
勅令第八十三號

第一條 陶磁器試験所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一 陶磁器ニ關スル試験及研究

二 陶磁器ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 陶磁器製作ニ關スル傳習及講話

四 試験研究ノ爲製作シタル陶磁器及加工シタル其ノ材料ノ配付

第一條ノ二 陶磁器試験所ハ試験研究成績ノ普及促進ニ必要アリト認ムル場合ニ限り陶磁器ノ製作ノ依

頼ニ應ズルコトヲ得

第二條 陶磁器試験所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師 專任五人 奏任

屬 專任一人 判任

技手 專任五人 判任

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ
商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス
(第四條以下略)

同所處務規程抜萃

一、陶磁器試験所ニ第一部、第二部、第三部及庶務課ヲ置ク

一、第一部ニ於テハ陶磁器ニ關スル基礎的研究並陶磁器ノ原料、材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第二部ニ於テハ陶磁器製作ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第三部ニ於テハ陶磁器ノ意匠及圖案ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、所長ハ必要ト認ムル地ニ試験場ヲ置キ陶磁器試験所ノ事務ノ一部ヲ分掌セシムル事ヲ得

同所製品配付及受託製作規則抜萃

一、陶磁器試験所ノ試験研究ニ依リ製作シタル陶磁器及加工シタル陶磁器材料ノ配付ヲ受ケントスル者

又ハ陶磁器ノ製作ヲ依頼セントスル者ハ別記所定様式(中略)ニ依リ陶磁器試験所長ニ出願スヘシ

一、前條ノ出願ヲ許可セントスル場合ニ於テハ陶磁器試験所長ハ左ニ掲クル事項ヲ定メ之ヲ出願人ニ通知スヘシ

一、品種及數量

二、代金又ハ製作費及其ノ納付期限

三、引渡豫定期日

出願人前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五日以内ニ配付ヲ受クヘキ旨又ハ製作ノ依頼ヲ爲スヘキ旨ヲ申出テサルトキハ出願ハ其ノ效力ヲ失フ

一、陶磁器試験所長必要アリト認ムルトキハ道府縣市立商品陳列所規程ニ依ル商品陳列所又ハ學校ニ對シ無償ヲ以テ製品ヲ配付スルコトヲ得

同所傳習生規程拔萃

一、陶磁器試験所ハ陶磁器ノ製作ニ關スル技術ヲ修得セントスル者ノ爲傳習ヲ行フ

一、傳習生ノ傳習期間ハ五箇月トシ傳習開始ノ期日ハ毎年四月一日及十月一日トス 前項ノ製作期間及期日ハ陶磁器試験所ノ都合ニ依リ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一、傳習事項、傳習生ノ定員、傳習

美術研究施設

期間及傳習開始ノ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

一、傳習生ハ陶磁器ノ製作ニ經驗アル十八歳以上三十五歳以下ノ男子ニシテ官公署、學校、組合其ノ他ノ團體又ハ工場主ノ推薦ニ係ルモノタルコトヲ要ス

一、傳習料及傳習ニ要スル費用ハ之ヲ徴セス

附瀬戸試験場(同概要に依る)

瀬戸市大學瀬戸
電話瀬戸二四五六

京都本所の基礎的研究よりなる中間試験の結果を更に進んで實地的製作に移し以て陶業者と相互に聯絡を保ち、益斯業の發展を圖らんとするものであつて、當場には技術科、圖案科、及び庶務係を置く。

技術科 研究品の試作、製造、技術上の改善、研究、指導及各種の調査を行ふもので成形係、原型彫塑係、着畫係、窯係、調査係があり相互に事務の聯絡を行ふ。

圖案科 意匠圖案研究、調査及依頼調製

陶磁器試験所職員

技師 所長 平野 耕輔

小川新一郎
水町和三郎
磯松 嶺造

美術研究所(官立)

東京市下谷區上野公園
電話下谷三四八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基き、其の遺産を以て開始されたもので、昭和五年開設の準備成ると共に同子爵遺言執行人より建物、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、同年六月政府は之を帝國美術院附屬として設置した。昭和十年六月帝國美術院改革に伴ひ、新に美術研究所官制を制定、文部省所管、帝國美術院に附置される研究所として、既定の事業を進めることとなつた。其の目的は、美術に關する事項の學術的調査研究に在り、傍ら美術に關する研究資料を蒐集して美術圖書館的な貢獻をなさんとし、又調査研究の結果を出版、展覧、講演等に依つて發表せんとするものである。現在着手しつゝある事業は大略次の如くである。

一、研究資料蒐集

美術品の寫真其の他の複製、模寫模造等の標本、圖書雜誌其の他の資料

一、古美術に關する調査研究

東洋及日本美術に關する美術史的調査研究、東洋美術總目錄、落款印譜、東洋美術家辭典、美術關係史料、美術關係文獻目錄

等の編纂

一、明治大正時代美術の調査研究

明治大正美術史の編纂

一、現代美術に關する調査研究

現代美術及美術界に關する調査美術年鑑編纂

一、刊行物頒布

「美術研究」毎月一回美術懇話會より發行、「美術年鑑」毎年一回刊行、其の他隨時「美術研究資料」「研究報告」を刊行頒布する

一、研究資料閱覽及展觀

研究者の爲に當所蒐集の研究資料を閱覽せしむべく公開準備中、又隨時陳列室に於て特殊なる資料を展觀して一般に觀覽せしめる

一、黒田清輝作品陳列

所内に黒田子爵記念室を設け、其の作品を陳列して定時(毎週木曜日午後)に公開する

美術研究所官制

昭和十年六月一日
勅令第四百四十八號

第一條 帝國美術院ニ美術研究所ヲ附置ス

第二條 美術研究所ハ美術ニ關スル事項ノ調査研究ヲ掌ル

第三條 美術研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

所員 專任二人 奏任

助手 專任二人 判任

書記 專任一人 判任

第四條 所長ハ所員ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

所長ハ帝國美術院長ノ監督ノ下ニ於テ所務ヲ掌理ス

第五條 所員ハ所長ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌ル

第六條 助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ所務ニ従事ス

第七條 書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

職員

所長事務取扱

東京美術學校長 和田 英作

所員 矢代 幸雄

田中 喜作

東方文化學院

東京 研究所

小石川區大塚町五ノ二五
電話大塚五四四一六

京都 研究所

左京區北白川小倉町五
電話上五〇五〇

昭和三年十月東京京都兩帝國大學

及其他の東方文化研究者三十餘名が發起人となつて東方文化の研究、その成果及その資料の發表、有益な古書の複製、講演會の開催等を目的とする東方文化學院創立の事を議し直ちに同學院規定を定め、昭和四年四月外務省の補助により事業を開始した。規定に依る東京、京都兩研究所は初め各該地帝國大學内に設けられ、狩野直喜博士京都研究所主任となつた。後、京都研究所は昭和五年十一月現所在地に建築竣成して移轉し、東京研究所は昭和八年九月現所在地の新館に移轉した。兩研究所の完成と共に、主任の稱は所長と改められた。

現在迄に兩研究所に於て研究員及助手の研究結果を刊行したものの中美術及考古學に關係せるものは左記の通りである。

題名	研究者名
支那古器圖攷(兵器篇)	原田 淑人
遼金時代の建築と其佛像 圖版上下二冊	駒井 和愛
殷墟出土器研究	關野 貞
殷墟の考古學的考察	竹島 卓一
支那山水畫史	梅原 末治
戰國秦式銅器の研究	伊勢專一郎
支那漢以前の古鏡の研究	梅原 末治
上記の外昭和五年度より兩研究所	同

は各々東方學報なる學報を年一回發行して居る。

東方文化學院規程抜萃

一、本學院は東方文化學院と稱す
二、本學院は支那文化の研究及其の普及を圖り一般文化の向上に資するを以て目的とす

三、本學院は前條の目的を達する爲左の事業を行ふ

一 研究所の經營

二 研究及研究資料の發表

三 有益なる古書の複製

四 其他理事會の決議に依り必要と認めたる事業

四、本學院は事務所を東京市小石川區大塚町五十六番十五號に置く

五、東京及京都に夫々研究所を置く

六、東京及京都兩研究所(以下單に兩研究所と稱す)に夫々評議員若干名を置き研究に關する事業其他に付き審議す

七、本學院は當該研究所評議員會を招集し其の議長となる

八、本學院に理事七名を置き左記の者を以て之に充つ

一 兩研究所長

二 兩研究所評議員中より互選せられたるもの各二名

三 古書複製委員中より互選せられたるもの一名

十一、理事中より理事長一名を互選す

理事長は本學院を代表し理事會の議長となり理事會の委任したる常務を處理す

理事長故障あるときは其の指名したる理事其の職務を代理す

十四、兩研究所に夫々研究所長一名を置き任期は三年とし當該研究所評議員中より之を互選す

研究所長は當該研究所の事務を統轄し理事會の委任したる事項を處理す

十五、研究所の爲左の職員を置き兩研究所に分屬せしむ

研究員	四十名以内
指導員	若干名
助手	二十名以内
十六、研究員及指導員は各研究所評議員會の推薦により理事會の議を経て研究所長之を委嘱す	
助手は研究員の推薦により研究所長之を命す	
十九、本學院の經費は政府の交付金寄附金其の他の收入を以て之を支辨す	
職員	
理事長	服部宇之吉

理事 宇野哲人、萩野仲三郎、瀧

精一、狩野直喜、羽田亨、

濱田耕作

東京研究所長 服部宇之吉

京都研究所長 狩野直喜

東京研究員(昭和十年十月現在)

島田鈞一、青山定雄、伊東忠太

仁井田陞、原田淑人、牧野巽、

小柳司氣太、加藤繁、松本榮一

結城令聞、古城貞吉、服部宇之

吉、佐伯好郎、鳥居龍藏、常盤

大定、竹島卓一、阿部吉雄

京都研究員(昭和十年十月現在)

倉石武四郎、森鹿三、矢野仁一

水野清一、吉川幸次郎、高畑彦

次郎、梅原末治、長廣敏雄、塚

本善隆、内藤乾吉、小川茂樹、

能田忠亮

日本古文化研究所

事務所 東京市麹町區丸ビ

ル四階四五七號室

研究所 奈良縣立圖書館内

日本古文化に關する諸般の事項を

調査研究の上、その成果を印刷に附

して當該學界に頒布し、また研究生

を採用し有爲の古文化研究者を養成

するを目的とするもので、黒板博士

先づその設立を主唱し、近畿二府五

縣の知事の賛成を得て昭和九年四月

奈良市に設置せられた。爾來近畿地

方を初め、岐阜、群馬、九州等に於ける諸問題を調査研究しつつあり、第一回の報告書は既に學界に頒布した。

所長 黒板 勝美

常任理事 足立 康 和田 軍一

丸山 二郎 岸 熊吉

濱田 耕作 西田直二郎

萩野仲三郎 辻 善之助

梅原 末治 芝 葛盛

其の他官公立研究所

關東地方

神奈川縣工業試驗場(化學、染織、木工、醸造、窯業、圖案)

横濱市神奈川區龜住町

神奈川縣織物指導所(撚糸、機織)

神奈川縣愛甲郡愛川村

浦和染織試驗場(染色、整理)

浦和市

川越工業試驗場(染織、木工、圖案)

川越市

秩父工業試驗場(染織、圖案)

埼玉縣秩父郡秩父町

川口鑄物工業試驗場(鑄物、工藝、圖案)

埼玉縣川口町

群馬縣工業試驗場(染織、製糸、撚糸)

群馬縣川口町

前橋市岩神町

同桐生分場(染織、撚糸)

桐生市安樂土

同伊勢崎分場(染織、圖案、撚糸)

群馬縣佐波郡伊勢崎町

同館林分場 染織、圖案、撚糸)

群馬縣邑樂郡館林町

同高崎分場(染色、木工、漆工)

高崎市並榎町

栃木縣工業試驗場(染織、圖案)

足利市西宮町

町立益子陶器試驗場(陶器)

栃木縣芳賀郡益子町

茨城縣工業試驗場(染織、圖案)

茨城縣結城郡結城町

奥羽地方

宮城縣工業試驗場(染織、陶工、醸造、圖案)

仙臺市勾當臺通

市立陶磁器研究所

仙臺市勾當臺通

川俣工業試驗場(染織、圖案)

福島縣伊達郡川俣町

會津工業試驗場(染織、醸造、漆器)

若松市縣立工業學校内

岩手縣工業試驗場(木工、金工、染織、圖案)

盛岡市仁王

青森縣工業試驗場(染織、醸造、木

工、漆工)

弘前市袋町

山形工業試驗場(金工、木工、漆工、圖案)

山形市六日町

米澤工業試驗場(染織、圖案)

米澤市花岡町

鶴岡工業試驗場(染織)

鶴岡市家中新町

秋田縣工業試驗場(木工、金工、圖案)

秋田市土手長町

同川連分場(漆工)

秋田縣雄勝郡川連町

中部地方

愛知縣工業試驗場(染織、窯業、化學、醸造、圖案)

名古屋市中區花田町

三河染織試驗場(染織、圖案)

愛知縣寶飯郡三谷町

尾張染織試驗場(染織、圖案)

愛知縣中島郡大和村

靜岡工業試驗場(漆器、木工、紙、染織、圖案等)

靜岡市太田町

濱松工業試驗場(染織、能率、圖案、

濱松市北寺島町

山梨縣工業試驗場(染織、圖案)

山梨縣南都留郡谷村町

美術研究施設

美術研究施設

山梨縣工業試驗場上野原分場(染織)

山梨縣北都留郡上野原町

同吉田分場(染織)

同南都留郡瑞穂村

甲府市立試驗場(水晶、瑪瑙細工)

甲府市

長野工業試驗場(染織、製糸、化學)

圖案)

松本市榮町

同染織講習所(染織、製糸)

上田市常盤城

岐阜縣陶磁器試驗場(窯業、圖案)

岐阜縣土岐郡多治見町

福井縣工業試驗場(染織、圖案)

福井市簗川中町

石川縣工業試驗場(染織、漆工、窯業、圖案)

金澤市長土堀

同大聖寺分場(染織)

石川縣江沼郡大聖寺町

同輪島分場(漆器、圖案)

石川縣鳳至郡輪島町

富山縣工業試驗場(銅器、漆器、木工、瓦、圖案)

富山縣鳳至郡輪島町

同染織試驗場(染織、圖案)

高岡市下關

同染織講習所(染織、圖案)

富山縣東礪波郡福野町

新潟縣染織試驗場(染織、圖案)

富山縣東礪波郡福野町

新潟縣南蒲原郡見附町

同龜田機織部(機織)

同龜田機織部(機織)

新潟縣中蒲原郡龜田町

新潟縣染織試驗場三條作業所(染色)

同南蒲原郡三條町

同柄尾作業所(染色)

同古志郡下鹽谷町

同麻織物試驗場(麻織物、圖案)

同北魚沼郡小千谷町

同木工試驗場(木工、圖案)

新潟市附船町

同加茂支所(木工)

新潟縣南蒲原郡加茂町

同金工試驗所(金工)

同南蒲原郡三條町

同染織講習所(染織、圖案)

同中魚沼郡十日町

近畿地方

京都府立織物試驗場(染織、圖案)

京都府中郡吉原村

京都市立染織試驗場(染織)

上京區烏丸通上立賣上ル

國立大阪工業試驗場

大阪市西淀川區大仁

市立工業研究所(染色、化學、機械、發明、窯業)

大阪市北區北扇町

兵庫縣三木金物試驗場(金工)

兵庫縣美濃郡三木町

同山崎林業試驗場(木工、圖案)

同安栗郡山崎町

同西脇染織試驗場(染織、圖案)

同安栗郡山崎町

同安栗郡山崎町

同安栗郡山崎町

兵庫縣多可郡西脇町

兵庫縣出石窯業作業部(窯業)

同出石郡出石町

奈良縣工業試驗所(染織、醸造、化學、圖案)

奈良縣北葛城郡高田町

三重縣工業試驗場(染織、圖案、工藝)

津市大字下部田

同松坂分場(化學、漆器、製紙)

松坂市殿町

同窯業試驗場(窯業、圖案)

四日市市東阿倉川

能登川工業試驗場(染織、圖案)

滋賀縣神崎郡王峰村

長濱工業試驗場(染織、圖案)

滋賀縣阪田郡長濱村

窯業試驗場(窯業、圖案)

滋賀縣甲賀郡信樂町

和歌山縣工業試驗場(染織、漆工)

和歌山市七番町

及海南市黑江町

中國地方

鳥根縣工業試驗場(窯業、紙、醸造、圖案)

松江市殿町

岡山縣工業試驗場(染織、醸造、製紙、化學)

岡山市南方

廣島工業試驗場(化學、染織、食品)

廣島市東白島町

福山工業試驗場(染織)

福山市西町

山口縣工業試驗場(窯業、漆工、木工、竹工、醸造、化學、圖案等)

山口市堅小路

同染織試驗場(染織、圖案)

山口縣玖珂郡柳井町

四國地方

德島縣工業試驗場(化學、染織、醸造、窯業、圖案)

德島市前川町

香川縣工業試驗場(染織、製紙、木工、醸造、化學、圖案)

高松市花ノ宮町

工藝圖案研究所(圖案製作)

丸龜市米屋町丸龜商工會內

愛媛縣工業試驗場(染織、紙、圖案)

松山市宮西町

同工業講習所(染織、圖案)

今治市上河原通

同染織試驗場(染織、圖案)

今治市上河原通

高知縣工業試驗場

高知市

九州地方

福岡縣福岡工業試驗場(染織)

福岡縣福岡工業試驗場(染織)

福岡縣福岡工業試驗場(染織)

福岡縣福岡工業試驗場(染織)

福岡縣福岡工業試驗場(染織)

福岡縣福岡工業試驗場(染織)

福岡市堅沼町
福岡縣久留米工業試驗場(染色)

久留米市津福町

福岡縣八女郡福島町

福岡縣八女郡福島町

福岡縣八女郡福島町

福岡縣八女郡福島町

福岡縣八女郡福島町

學、花庭、窯業)

大分市大字大分

佐賀縣第一窯業試驗場(窯業、圖案)

佐賀縣西松浦郡有田町

同窯業指導所(窯業)

佐賀縣藤津郡鹽田町

熊本市立工業研究所(木工、漆工、圖案)

熊本市新町

長崎縣立窯業指導所(陶器)

長崎縣東彼杵郡上波佐見村

同分場

長崎縣東彼杵郡折尾瀬村

宮崎縣立工藝指導所

宮崎市

鹿兒島縣工業試驗場(製紙、醸造、染織、圖案)

鹿兒市原良町

同染織指導所(染織、圖案)

鹿兒島縣大島郡名瀬町

沖繩工業指導所(染織、窯業、漆器)

沖繩縣島尻郡真知志村

美術教育 施設一覽

東京

學校

〔官立〕

東京美術學校

下谷區上野公園
電話下谷〇三—二

東京美術學校は明治二十年十月勅令を以て設置せられ、同二十二年二月授業を開始した。翌年初代校長濱尾新に代つて岡倉覺三學校長となつたが、三十一年退職し、彼と共に教授橋本雅邦以下多數の教授、助教授が退職した。高嶺秀夫、久保田鼎に次いで三十四年正木直彦學校長となり、昭和七年に及び、次いで和田英作代つて學校長となり現在に及ぶ。昭和八年規程の改正を行つた。

本校の學科を本科と圖畫師範科とに分ける。本科は更に之を日本畫科油畫科、彫刻科、工藝科及建築科に分ち、更に彫刻科を塑造、木彫、工藝科を圖案、彫金、鍛金、鑄金、漆工の各部に分つ。修業年限は本科四年、圖畫師範科三年、本科に入學す

るには豫科の課程一年を卒へることを要する故通計五年である

昭和十年五月の統計によれば生徒總數七三六名であるが今便宜上各科豫科、及び師範科一年の生徒數を示せば次の如くである。

日本畫科 二〇名

油畫科 三七名

彫刻科塑造部 一五名

同 木彫部 七名

工藝科圖案部 一六名

同 彫金部 五名

同 鍛金部 四名

同 鑄金部 六名

同 漆工部 七名

建築科 七名

圖畫師範科 一五名

生徒募集人員は毎年多少の變更もあるが大體前表の如くである。入學資格は、中學四年修了程度(但し圖畫師範科は中學卒業程度)。實技及學科の入學試験を行ふ。

本科生は將來作家として立つべきものを養成するのであるが本科卒業生と雖も在學中特定の學課目を修了したるものには中等教員無試験檢定の特典が賦與されてゐる。

此他研究科、選科及聴講生があるが、目下の處選科生及聴講生は在學してゐない。授業料は豫科、本科、選科、一年各八十圓、研究科五十圓。

又本校には文庫があつて圖書標本を收藏し、陳列館及正木記念館があつて諸種の展觀を試み、何れも生徒學習の參考に資する。

〔校長〕

〔名譽教授〕

〔教授〕

和田 英作
正木 直彦

岡田三郎助 川合芳三郎

藤島 武二 森井 健介

結城 貞松 多賀谷健吉

六角注多良 佐々木 卓

小林 萬吾 津田 信夫

清水 龜藏 矢代 幸雄

建昌彌一郎 朝倉 文夫

北村 西望 南 薰造

和田 三造 香取秀治郎

石田 英一 田邊 至

森田龜之助 小泉 勝爾

海野 清 田邊 孝次

關野金太郎 高村 豐周

廣川松五郎

〔生徒主事〕

佐々木 卓 森田龜之助

田邊 孝次

〔助教〕

松田 義之 松垣 龜雄

水谷 武彦 松田 權六

山田 廉 岡 四郎

森田 武 野口 六三

山崎覺太郎 常岡 文龜

伊原宇三郎 西田 正秋

美術教育施設

深瀬 嘉臣 内藤 春治

〔講師〕

杉田精二、大澤三之助、北村耕造、村田良策、澤口悟一、小場恆吉、金澤庸治、羽下修三、齋藤幸晴、岡田捷五郎、鎌倉芳太郎、新規矩男、正木篤三、丸山義男、小塚新一郎、比田井鴻、白川一郎、鈴川信一、羽野禎三、入谷昇、磯矢陽、高島米峰、蒔田宗次、比田井元子、石澤正男、矢澤貞則、川崎隆一、沼田勇次郎、木村得三郎、富永惣一、平野茂

東京高等工藝學校

東京市芝區新芝町
電話三田一一五六―八

本校は大正十年十二月の設置に係る。松岡壽初代の校長となり、翌十一年開校。十二年吉武榮之進代つて校長となる。十三年東京高等工業學校附屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工藝實業學校として設置した。十四年松岡壽再び校長となり、翌年東京美術學校寫真科を本校に移管し寫真部として設置した。昭和三年安田祿造が代つて校長に任命された。同校の本科の學科は工藝圖案科、金屬工藝科、精密機械科、木材工藝

科及印刷工藝科とし、工藝圖案科には工藝彫刻部を、印刷工藝科には寫真部を附屬する。同校は他に研究生選科生、聴講生及木材工藝別科を設置するが、本科の入學資格者は中學校卒業業者、専檢合格者とし、研究生は同校又は他の實業專門學校卒業業者、選科生は中學校卒業業者は一年以上、修業年限三年の工業學校卒業業者は二年以上、かゝる學歷無きものは五年以上志望學科に關する工藝に従事したるもの及び工業學校卒業の専檢合格者等とし、修業年限は本科は三年、研究生は二年以内、選科生は三年以内とする。授業料は本科、研究生選科生は一箇年八十圓。木材工藝別科は中等程度工業學校卒業業者及其他志望學科に關する經驗を有する者を入學せしめ、專門技術を授けるを以て目的とし、修業年限は二箇年授業料は一箇年五十圓とする。

〔校長〕

安田 祿造

〔生徒主事〕

助教授 三橋 逢吉

〔工藝圖案科〕

教授 宮下孝雄、

〔工藝彫刻部〕

教授 杉山豐治

〔工藝寫真部〕

教授 畑正吉、助

教授 寺畑助之丞

〔金屬工藝科〕

教授 神矢教親、

〔精密機械科〕

教授 豐田勝

秋、益田森治

〔精密機械科〕

教授 竹屋金太郎

永澤謙藏、橋本宇一。 助教 山内一太

〔木材工藝科〕 教授 木槍惣一、

西海幸一郎、野村茂治。 助

教授 鈴木太郎

〔印刷工藝科〕 教授 鎌田彌壽治

伊東亮次、岡利亮。 助教授

星野幸衛

〔寫真部〕 教授 鎌田彌壽治、伊

東亮次、岡利亮。 助教授

長口宮吉、畑保之

〔木材工藝別科〕 教授 木槍惣一

築島棟吉

〔共通學科〕 教授 江崎歡藏、永

地秀太、岡田楠次郎、三橋逢

吉、和田香苗。 助教授 馬

場秋次郎、鈴木豐次郎

本科生徒數

工藝圖案科 六八名

工藝彫刻部 一七名

金屬工藝科 五〇名

精密機械科 八三名

木材工藝科 七九名

印刷工藝科 六五名

寫真部 二三名

木材工藝別科 二二名

〔私立〕 五十音順

女子美術專門學校

杉並區和田本町八六〇

明治卅三年女子美術學校創立。昭和四年專門學校の認可を受く。校舍は元本郷弓町にあつたが菊坂町に移り昭和十年現地に移轉した。學科は高等、師範、専修、家政、研究の五科を設置し、更に高等科は日本畫部（修業年限三年）、西洋畫部（三年）の二部、師範科は日本畫部（四年）、西洋畫部（四年）、刺繡部（三年）、造花部（三年）、裁縫部（三年）、裁縫手藝部（三年）の六部、専修科は刺繡部（二年及二年）、造花部（同上）、和裁部（一年）、洋裁部（一年）の四部に分けられてゐる。入學資格は何れも高等女學校卒業業者、專門學校入學檢定規程に依る試験合格者で、家政科（二年）も同様、研究科（一年）は高等科、師範科卒業業者及他の專門學校卒業業者である。學費は年額高等科、師範科、研究科百圓、専修科八十圓である。

〔校長〕男佐藤達次郎（主監）濱幸次郎（副主監）土田忠二（生徒主事）田村一郎

太平洋美術學校

下谷區谷中眞嶋町一
電話下谷一七九二

明治三十五年明治美術會を太平洋畫會と改稱するに及び同三十七年下谷區清水町に研究所を設置。翌三十

多摩帝國美術學校

世田谷區玉川上野毛町

八年谷中眞嶋町に屋舎を新築移轉し繪畫、彫塑の教室を備へ、中村不折、滿谷國四郎、岡精一、新海竹太郎、藤井浩祐等指導の任に當つたが、爾來三十年漸次組織を改めて今日に及ぶ。昭和四年研究所を擴張し、太平洋美術學校と改稱し同九年東京府の認可學校となる。學科は豫科(一年)本科(三年)、選科(五年)、研究科(二年)とし、豫科の入學資格者は中學校、女學校第四學年修了者、本科は同校豫科卒業者又は中學校、女學校第四學年修了者で入學試験(人體素描)に合格したる者、選科は尋常小學校卒業者である。研究科は本科若しくは選科卒業者とする。科目は何れも洋畫指導を主としその他美學解剖學等を教授する。學費は年額豫科十五圓、本科選科六十圓。

〔校長〕中村不折〔學監〕石川寅治
吉田博、高村眞夫

〔教授〕滿谷國四郎、鶴田吾郎、奧瀬英三、丸山晚霞、多々羅義雄、小野田元興、布施信太郎、三上知治、岡精一、池田永治、桑重儀一、佐々貴義雄、田原輝夫、堀進二、伊藤成一

〔講師〕金子保、石井柏亭、一氏、義良、佃武昭

昭和十年九月元帝國美術學校長北吟吉及評議員兼教授杉浦非水、牧野虎雄、井上忻治、吉田三郎等二十數名は同校を脱退、新に杉浦、牧野、北、近藤清吾等を設立者として多摩帝國美術學校を創立、同年九月九日より澁谷區千駄ヶ谷町の假校舎にて授業を開始、同年十月設立認可を受け、同十二月一日玉川上野毛町に新築の校舎に於て開校式を舉行した。目下財團法人專門學校設立認可申請中である。

同校は本科、研究科、選科を置き修業年限は本科五年、研究科、選科一年。本科を分つて日本畫、西洋畫圖案、彫刻の四科とする。入學資格は本科は中學校卒業者、專檢合格者、研究科は本校卒業者及詮衡に合格せる者、選科は詮衡により相當の實力ありと認められたる者である。他に同校所定の學科の聴講志望者は聴講生たるを得る。授業料は本科年額九十圓、研究科選科六十圓。檢定料五十圓、聴講生の聴講料は一學年一科目十圓、一科目を増す毎に六圓とす。

〔名譽校長〕北吟吉〔校長〕杉浦非水〔學監〕井上忻治〔主事〕渡邊泰亮〔教員〕(日本畫科)主任中村岳陵、安田靫彦、郷倉千靫

帝國美術學校

市外武藏野町吉祥寺
三二〇

〔西洋畫科〕主任牧野虎雄、中川紀元、大久保作次郎、鈴木千久馬、木村莊八、鈴木誠、吉村芳松、中山巍〔圖案科〕主任杉浦非水、木村和一、新井泉、小川清霞〔彫刻科〕主任吉田三郎、佐々木大樹〔學科〕主任井上忻治、北吟吉、脇本架之軒、森田龜之助、逸見梅榮、岸田日出刀、今井兼次、渡邊素舟、大隅爲三、木村雄山、佐藤次夫、長瀬誠、末吉菊磨

廣く美術家並に美術教師の養成を目的として、昭和四年三月木下成太郎に依り設立され、北吟吉校長となつたが、昭和十年の初めより設立者側と校長側の間に學校經營を繞る軋轢を生じ同年九月北吟吉並同氏支持の教授學生は同校を脱退、新に「多摩帝國美術學校」を創立したので茲に從來の「帝國美術學校」は二分する事になつた。なほ本校は分裂後昭和十年九月專門學校認可申請をなした。

科別を本科(第一部、第二部)、師範科、研究科に分ち、本科第一部並師範科の入學資格は中學卒業並專檢合格者、本科第二部は前記の資格

なきも之と同等以上の實力ありと認めたるもの、研究科は本校卒業者並詮衡に合格せる者とす。本科を分つて日本畫、西洋畫、工藝圖案、彫刻の四科とす。修業年限は本科五年、師範科三年、研究科一年以上。授業料は本科、師範科、年額八十五圓、研究科五十圓。

〔校長〕木下成太郎〔教務主任〕金原省吾〔主事〕名取堯〔教員〕楠木清方、土田麥僊、奥村土牛、藤井達吉、富本憲吉、ブルノイ・タウト、小林巢居、清水多嘉示、足立源一郎、宮坂勝、高昌達四郎、熊岡美彦、中野和高、鈴木千久馬、佐藤朝山、森田龜之助、山脇巖、佐々木秀一、金原省吾、板垣應穂、堀口捨巳、名取堯、谷川徹三、大宮健太郎、中嶋健藏、西田正秋、木村幸一郎、藤本仁平

日本大學藝術學園

本郷區金助町
電話小石川二一四

専門部藝術專攻美術科は他の創作演劇、映畫、音樂の四科と共に昭和六年の設置に係り、美術家、美術評論家、美術教師の養成を目的とし、修業年限は三箇年で、本科と別科に分ち、本科は專門學校令に依り中學校卒業者、專門學校入學檢定試驗合

美術教育施設

格者を、別科は中學校に準ずる學校の卒業生、小學校本科正教員免狀所有者を、何れも試験の上入學せしめる。授業は二部制で、日間部（午前八時—四時）、夜間部（午後五時—十時）に分れ、實習は（A）日本畫專攻、（B）西洋畫專攻、（C）彫刻專攻に分つ。

授業料學友會費、各科とも年額九十五圓七十錢、實習費、年額二十二圓、入學金、五圓。

他に實技科あり、美術、洋樂、舞踊の各科に分れ義務教育を了へたる男女の隨時入學を許し、内美術科は日本畫、西洋畫、彫刻の實技を各々專攻せしめ美術教室に出席して講師指導の下に自由に研究せしめる。月謝三圓、入學金五圓。

〔科長〕松原寛〔主任講師〕山本豐市〔教授〕相良德三〔講師〕柳宗悦、岩井大猷、清水清〔實技指導〕木村莊八、中村研一、山本豐市

日本美術學校

淀橋區戸塚町一ノ四七三
電話 牛込 八二六

大正六年紀淑雄に依り「美術研究所」創設され翌七年認可を得て日本美術學校と改稱。理論實技の兩方面から美術の製作、觀照、批評の三能力を養成せん事を目的とする。學科

を繪畫、彫塑、圖案、應用美術の四科に分ち、繪畫科は第一部初等教育第二部專門教育の二部に分つ。修業年限は繪畫科各々二箇年、彫塑科、圖案科は三年、應用美術科二年とし、尋常小學校卒業生は繪畫科第一部及その他の科に、中學校、高等女學校卒業生にして繪畫科志望者は第一部第二學年に編入する。その他美術鑑識科、美術批評科を臨時開講する事あり、又一科の實習のみを志望する者は別科生として隨時入學を許す。繪畫科第二部及研究科は同校の學生にあらざるものも考査の上入學せしめる。學費は各科とも年額七十八圓で別科生は一箇月六圓、研究生は五圓とす。昭和三年五月學校創立十周年を記念し、神奈川縣足柄下郡吉濱村に分教室を新築した。

〔校長〕紀淑雄〔講師〕（學科）紀淑雄、荒城季夫、神綱一、薄金兼次郎、青柳正廣、高橋道利、庄司大造、足立一郎、木村敬之、内山義郎、菅原又七郎〔實習〕大久保作次郎、小島善太郎、碓伊之助、小城基、高野眞美、矢澤弦月、川崎小虎、村山森人、吉田立次、吉田謙吉、吉田久繼

文化學院美術部

神田區駿河臺二ノ五
電話 神田 三二三九

大正十四年開校。洋畫の專門家養成を目的とし本科修業年限は三箇年で、男女中等學校卒業生、專門學校入學資格檢定合格者をデッサンの實技考査の上入學せしめる。專修科の修業年限は一箇年とし同校卒業生及び他の美術、研究所卒業生にして實技考査に合格せる者を入學せしめ、肖像、挿畫、版畫、圖案等實際の需要に應じ得る技術を授ける。學費は本科は一箇年百四十圓、專修科は百十圓とす。同校卒業生は留加會、青丹會を結成して作品發表をなしてゐる。

〔校長〕西村伊作

〔美術部長〕石井柏亭

〔教授〕（實技）石井柏亭、山下新太郎、有島生馬、正宗得三郎〔學科〕與謝野品子、藤田德太郎、秋田玄務、木村太郎、前川堅市、奥野信太郎、黒田朋信、仁羅山政次郎、諏訪頼雄

研究所 五十音順

朝倉彫塑塾

下谷區谷中天王寺町二〇
電話 下谷 六五四九

本塾は明治四十年朝倉文夫の門弟數名を教育するに始まり爾來誰云ふとなく朝倉塾と呼び、多數の作家を輩出し來つたが、昭和九年開塾二十

五周年を迎ふるに當りその記念に塾舎を改築し朝倉彫塑塾と改稱した。〔塾代表者〕朝倉文夫

大野洋畫研究所

豐島區西巢鴨三ノ七六六

昭和五年十月創立。洋畫一般の指導教授をなす。研究所展開催三回に及ぶ。〔所主〕大野隆徳

大森繪畫自由研究所

大森區池上德持町三七二

昭和七年創立。邦洋の各流派を問はず、自由研究の内に美術の基礎を作るを目的とする。A人體寫生、B日曜クロッキー、C石膏部、D少年少女部、E學生部、F地方部等あり。Aは午前部、午後部に分れ月謝五圓、一週間一圓五十錢。Bは午後部のみで研究費一回三十錢。Cは午前部、夜間部に分れ月謝はAと同じ。D、Eは月四圓（土曜日後）で月謝二圓。Fは作品の添削批評をなし月謝二圓。A、Cは入會金三圓、Dは入會金一圓。

川端畫學校

小石川區富坂町一九

明治四十二年創立。川端玉章が初

代校長で、初め日本畫のみの教授を行つたが大正二年玉章逝去し同年洋畫科が設置された。〔主幹〕川端玉雪〔副主幹〕川端茂章

日本畫科の研究科目は臨畫、寫生製作等で學級を分つて四級とし、入學者は實力の如何に拘らず先づ初級に編入して成績考量的上適當の級に編入する。入學隨時。月謝三圓、入學金五圓。午前部八時—十二時、夜間部六時—九時。

〔教授〕山田敬中、福井江亭、結城素明、島崎柳塲〔主任〕岡村葵園

洋畫科は石膏寫生、人體寫生の教授をなし、隨時入學を許す。午前部八時—十二時、午後部一時—五時、夜間部六時—九時。月謝四圓（夜間部三圓）、五ヶ月十七圓五十錢、十ヶ月三十三圓。入學料五圓。

〔教授〕藤島武二〔主任〕富永勝重

環堵畫塾

麹町區中六番町四〇
電話九段六二〇

明治三十七年創立。小室翠雲の主宰する南畫研究の塾。

〔塾主〕小室翠雲

〔幹事〕石川寒巖、高須芝山、關谷雲崖、岡田晴峰、久保田翠岳、杉本自沼、小川鴻城、小杉樸陵、大栗

美術教育施設

旗折、新井滋雲、大山雅堂、荒居翠湖、渡部香堂、佐川華谷、金子米軒、木村棲雲、横尾翠田、岸浪靜山、横山松雲、橘田水芳

熊岡繪畫道場

淀橋區戸塚町二ノ一二

昭和六年九月開場。油繪研究の指導を目的とし、石膏部（木炭）、人體部（木炭、油繪）の二部を置く。入場資格者は中等學校卒業者若しくはそれに相當する者とす。午前部（九時—正午）月謝七圓、午後部（一時—四時）月謝六圓、夜間部（六時—九時）月謝五圓。入場料十圓

〔指導者〕熊岡美彦、平通武男（助手）

クロツキー研究所

麹町區有樂町二ノ四
（日本新聞社ビル内）

クロツキー、デッサンの研究を目的とし、自由研究回数券を發行して何人でも隨時參加することが出来る仕組になつて居る。大正十四年開設。人體部（午後一時—四時）（午後六時—九時）、石膏部（午前九時—正午）〔經營管理者〕柳川清一郎

構造社彫塑研究所

豐島區池袋四ノ三八三

昭和三年の創立で、七年一旦閉鎖したのを十年七月より再開した。模刻部、人體部の二部を設け、前者は入所資格を要せず、後者は（イ）自作彫刻若しくは素描をもつて本研究所の考查に合格せるもの（ロ）嘗て構造社展に入選せることあるもの等を入所せしめる。月謝七圓、入所料十圓。模刻部（午後一時—四時）人體部（午前九時—十二時）

春陽會洋畫研究所

麹町區内幸町一ノ七
幸ビルディング内

昭和四年九月設立。春陽會員及會友が指導に當り、午前、午後、夜間の三部を設け、人體、石膏寫生を教授する。別に日曜研究部を設け、又隨時講習會、講演會等を開催する。

商業美術學校構成塾

淀橋區戸塚町四ノ七九一
電話牛込六三二七

昭和三年に商業美術協會の附屬研究所として設立されたが後改制されて昭和七年現稱に改めた。商業美術の技術家養成を目的とし、日本商業美術協會員が指導の任に當る。修業年限三年。授業料一箇年百圓、記名料五圓。〔塾長〕濱田増治

第三部會研究所

澁野川區上中里町一七二
電話小石川一八九八

第三部會員の指導する彫塑研究所で昭和十年十一月アトリエ落成式を挙げ十二月より授業を開始した。塑造の基礎教育を授ける外全會員が各研究生の希望により左記の分擔にて各種の實材彫刻を指導する。（動物彫刻）池田勇八（木彫、牙彫）石川確治、開發芳光、上田直次（薄肉彫刻）畑正吉、吉田久繼、日名子實三（石彫）小倉右一郎、日名子實三

高間洋畫研究所

豐島區西巢鴨町四ノ八八
電話大塚四〇六一

洋畫研究を目的とし午前（九時—十二時）、午後（一時—四時）、夜間部（六時—九時）の三部に分れてゐる。〔指導者〕高間惣七

田端國畫研究所

荒川區尾久町二ノ三五八

昭和十年設立。故速水御舟は同會の創立計畫者であつたが事前に急逝したので、四宮潤一他三名を以て設立した。同所の趣旨は綜合的な教育システムを以て東西繪畫の理論及實技を習得し、古典に確固たるつなが

同舟舍繪畫研究所

〔指導主任〕 小林萬吾、〔職員〕 前田謙一

獨立美術協會員が毎週二名づゝ交代して、指導に當り、人體科、石膏科の二部あり、人體科は午前或は午

中村版畫研究所

舊稱「創作版畫自由房」。同所は洋風版畫の研究所で、研究科目を平版科（石版、亜鉛リトグラフ）と凹版科（エツチング、アクアチント、メゾチント、ドライポイント）の二種とする。教授日は平版科は火曜日、凹版科は木曜日、自由研究日は金曜日とし、何れも午前九時より正午及一時より四時迄。記名料二圓月謝五圓。隨時展覽會を開く。〔所長〕中村義雄

昭和十年九月設立、繪畫及彫刻の實技を指導教授する。

指導者）藤田嗣治、熊谷守一、木下義謙、正宗得三郎、野間仁根、中川紀元、碓伊之助、東郷青兒、田口省吾、渡邊義知

麴町區麴町一ノ三

昭和六年設立。エツツングの研究
普及を目的とし同八年十一月より
毎月雑誌「エツツング」を刊行して
ゐる。尙同研究所の事業を後援す
る。日本エツツング協會がある。會
員三十一名。同所の研究生たらん
とする者八名。記名料五圓、一箇
月會費三圓を納むる事（幹事）西
田武雄

究所

世田谷區代田一ノ六四四

橋本八百二の指導する洋畫研究所で、午前部、午後部、日曜部を設く。

本郷繪畫研究所

本郷區春木町二ノ二八

明治四十五年六月の創立に係り、もと本郷洋畫研究所と稱し、大正十三年建物を再築して現稱に改めた。講習科目は人體寫生及石膏寫生とし午前（四時間）、午後（四時間）、夜間（三時間）の三部を設置し、又隨時必要なる講演を開催。日曜、大祭日、年末年始及七八兩月の暑中休暇を除き毎日開講す。授業料は一部二

週間二圓五十錢、一箇月四圓、二部

兼修に更に二週間一圓五十錢、一箇月二圓五十錢を納付するものとし夜間部は二週間一圓五十錢、一箇月三圓とす。記名料五圓。〔指導〕岡田三郎助〔委員〕井上雄太郎

岡田三郎助を會長

とし本郷繪畫研究所關係者を以て組織する繪畫、彫刻の展覽會で、大正十年同研究所有志に依り赤濁社繪畫展が組織され大正十三年迄四回の展覽會を開いたが、研究所出身者の成長と擴大に因り同十四年之を解散し、改めて本郷繪畫展を組織、會長に岡田三郎助を、副會長に片多徳郎を推して同年より毎春一回展覽會を開催、昭和五年「春臺美術展覽會」と改稱して今日に至つてゐる。昭和十年第十回展を開催した。

目白繪畫研究所

淀橋區下落合一ノ五三七
電話大塚四〇三七

昭和十年四月開所。油繪實技の研究を目的とし、人體、靜物、風景、石膏寫生の指導をなす。午前部（九時—十二時）、午後部（一時—四時）夜間部（六時—九時）、特設日曜研究部（午前九時—午後四時）を設け、月謝は午前、午後は七圓、夜間、日曜研究部は五圓、記名料十圓とす。

他に日曜夜間にクロツキ部を置く。男女年齢を問はず、初心者をも教授するが、女子部は午前、午後、日曜研究部のみである。

〔指導者〕大久保作次郎〔委員〕小林泰山、石原政之〔女子部〕大久保百合子

緑陰社繪畫研究所

赤坂區青山北町四ノ九
電話 青山一〇三五

大正十四年神田區中猿樂町に事務所を置いて洋畫及圖學の指導事業に着手。昭和二年より毎年夏季、冬季、春季に講習會を開催したが昭和九年現在の地に研究所を建設し、以來石膏、人體寫生及び繪畫一般に互る指導をなし、他に通信指導、講習會等を行つてゐる。

〔教授〕石川寅治、鈴木信一、佐竹徳次郎〔主幹〕東門正太郎

京 都

學 校

〔官 立〕

京都高等工藝學校

左京區松ヶ崎御所海道町
電話 上七五、〇〇三、五七〇

明治三十五年三月創立。本校は工

美術教育施設

藝に従事し又は工藝に關する學校教員たんとする者のために必要なる學理及び技術を授くるを目的とし、學科を染色科、機械科、圖案科、陶磁器科の四科に分ち、修業年限は三箇年である。授業料一箇年八十圓。昭和七年十月創立三十周年記念式を行つた。

〔校長〕村上宇一〔名譽教授〕中澤岩太、教授十七名、助教授九名、講師十名

〔公 立〕

京都市立繪畫專門學校

東山區今熊野日吉町
電話 祇園一五八

明治四十二年三月創立。同校は「專門學校規程に依り日本畫を研究せんとするもの又は師範學校、中學校、高等女學校の圖畫教員たんとする者に必要なる技術及學理を授くる」を目的とする。初め京都市立美術工藝學校の西隣に校舎を營んだが大正十五年六月現地に移轉、創立以來學生の成績品を海外の美術展に出陳し又多數の日本畫家を輩出して今日に及んで居る。現在豫科、本科及研究科（本科修了者を審議の上編入す）を設置し、豫科及本科に選科を附設

する。修業年限は豫科二年、本科三年研究科五年と定められ、豫科第一年の入學資格者は中學校卒業生及專門學校入學者檢定規程に依る試験檢定合格者で、考査の上入學せしめる。授業料は京都市内在住者のみは年額本科五十圓、研究科四十五圓、選科四十圓で其他の者は本科六十二圓、研究科五十七圓、選科五十圓である。

〔校長〕西山卯三郎〔教授〕菊池完爾、中井宗太郎、川村萬藏、西村源次郎、入江幾治郎〔助教授〕福田平八郎、寮本謹之助、中村大三郎、宇田善次郎、石崎猪四一、加藤一雄〔講師〕太田喜二郎、猪熊淺鷹、久世欽十郎〔教員〕山口米次郎、河野通一、清水光繁

京都市立美術工藝學校

東山區今熊野日吉町
電話 祇園一五八

明治十三年七月の創立で、元京都府畫學校と稱し、本邦最初の畫學校である。はじめ普通畫學のみの教授をしたが、同廿一年應用畫學科を併置したのを始めに同廿七年には校則を改正し繪畫科、彫刻科、工藝圖案科を置くに至り同卅四年には名稱を京都市立美術工藝學校と改稱した。

大正十五年現地に校舎を移轉し、昭和六年創立五十周年を迎へた。同校は工業學校規程に據り、美術及美術工藝に従事せんとする者に必要なる技能を授くる目的を以て、學科を繪畫科、圖案科、彫刻科、漆工科（蒔繪分科と髹漆分科に分つ）の四科とし、修業年限を五ヶ年とす。同校の入學者は尋常小學校卒業生若しくは年滿十二年以上の者で、授業料は京都市内在住者は一ヶ年四十圓その他の者は五十圓である。

〔校長〕西山卯三郎

〔私 立〕

關西美術院

岡崎公園東北

故淺井忠の主唱により明治三十八年三月創立。洋畫の指導をなす。

〔院長〕伊藤快彦〔教授〕黒田重太郎

研究所

京都彫塑研究所

大和路五條下ル吉野一〇〇
事務所 左京區修學院大林町
一六松田方、電話 山端一〇八

昭和八年三月松田尚之に依り開設人體寫生、石膏模刻の二部に分ち研究時間は晝間部（午前九時—午後五

美術教育施設

時)、夜間部(午後六時半—十時半)とし、模刻部は無休、人體部は日曜は休日とす。記名料五圓、月謝五圓、但し人體部では別にモデル費を臨時徴集する。(指導者)松田尙之

獨立美術京都研究所

上京區室町九太町下ル

昭和八年九月創立。獨立美術協會員が指導に當る洋畫研究所で、次の四部を設け、人體、石膏、靜物を研究せしめる。午前部(九時—正午)は人體研究、午後部(一時—五時)は石膏及靜物研究、夜間部(六時—九時)は人體及石膏研究、日曜部(午前九時—午後五時)は石膏及靜物研究をなす。月謝は各部とも三圓五十錢、記名料七圓とし、男女年齢を問はず入所することを得。現在研究生六十八名。(實技指導者)獨立美術協會々員 (常任指導者)須田國太郎

大阪

學校

(私立)

大阪美術學校

府下北河内郡殿山町御殿山

大正十三年矢野橋村が主なる發金

者となつて創立した。實技の指導を主とし日本畫、西洋畫の二科に分ち修業年限は本科三年、專攻科二年とする。入學資格は本科は尋常小學卒業、專攻科は本科卒業生若は之と同等以上の學力あるものとし各學力及人物考査の上入學を許可する。月謝五圓、入學金十圓。授業時間男子部(自午後一時至同五時)、女子部(自午前八時至十二時)。(指導者)(日本畫科)矢野橋村、福岡青嵐 (西洋畫科)齋藤與里、園部晋(學科)近藤尺夫、齋藤與里、佐伯講師

研究所

新燈社美術研究所

天王寺區勝山通一ノ五四

大正十一年創設。洋畫の研究より進んで「新日本畫」を創作せんとする。午前、午後、夜間の三部を設け初歩研究者には洋畫の基礎技法の指導をなし又婦人體部を置く。月謝一箇月三圓(婦人體部五圓)。加名料七圓。(指導者)青木大乗

中之島洋畫研究所

中之島朝日ビルディング

大正十三年四月鍋井克之、小出楯重、國枝金三の三名に依り、大阪市

西區信濃橋日清生命ビル内に開設。

信濃橋洋畫研究所と稱した。同年黒田重太郎參加し爾來夏季講習會、研究所展を屢々開催したが、昭和二年研究所展を擴充して公募展「全關西洋畫展覽會」を開催し以來引續いて今日に及んで居る。同六年現地に移轉し、現稱に改めた。研究所を普通部と日曜部に分ち普通部は午前部(九時—正午)、午後部(一時—四時)、夜間部(六時—九時)とし、各部に石膏部、人體部を置く。普通部に限り入所記名料十圓、石膏部月謝一箇月五圓、人體部同六圓。日曜部は午前九時より午後四時迄で石膏、人體寫生、クロッキーを教授。記名料五圓、月謝五圓。(實技指導者)鍋井克之、黒田重太郎、國枝金三、濱田葆光、田村孝之介、山本直治、松井正

美光會洋畫研究所

西區新町停留所前

昭和九年五月設立。齋藤與里及び美光會員の指導する洋畫研究所で普通部(午後六時—九時)、日曜部(午前九時—午後四時)に分け、石膏、人體、靜物寫生を教授する。月謝普通部三圓、日曜部二圓。

八千草會研究所

府下大軌沿線長瀬、木谷千種方、電話小阪三三三

一般家庭の青年子女に繪畫趣味を普及養成する目的を以て、大正十年春創立。人物、花鳥の日本畫を教授する。實習は毎月四回日曜日。(指導者)木谷千種

其他

アシャ洋畫研究所

兵庫縣武庫郡精道村山蘆屋冠

昭和四年四月設立。油繪、水彩畫パステル畫、デッサンの教授をなし隨時研究所展を行ふ。研究時間を毎週木曜日午後、日曜日午前午後とす。所費一年四十圓、半年廿五圓、一ヶ月五圓、記名料五圓。他に小學生部を新設した。(主宰)吉田喜藏

神戸洋畫研究所

神戸市神戸區中山手通七ノ四
栗突直木邸内電話元町三三四

昭和三年設立。舊稱山手洋畫研究所。晝間、夜間、日曜、女子の四部に分れ、初學者の指導をもなす。所費一箇月五圓、記名料二圓。

〔指導者〕濱田葆光

日本農民美術研究所

長野縣小縣郡神川村大屋

財團法人。大正八年十月山本鼎、金井正等に依つて創立された。農村に於ける農閑期副業として工藝品の製作を指導奨励し、併せて其の販路開拓を講ずるを目的とす。創設以來各地に技術の教習を行ひ、又東京、大阪等に數度製作品展覽會を開催して本邦農民美術の發達に努む。現在は技術傳習の結果、各地に凡そ四十餘の製作組合が成立して居り、各々産業團體として製作販賣に従事して居る。〔理事所長〕山本鼎 〔理事〕金井正、倉田重吉、山越脩藏、南弘〔監事〕三土忠造

美術觀覽施設一覽

關東地方

東京

帝室博物館

東京市下谷區上野公園
電話下谷六及一九九〇

同館の創立は明治五年正院中に博覽會事務局が設置せられたのに始ま

美術觀覽施設

り、其後、同局を博物館と改稱し、内務省の管轄に付したが、同十四年農商務省の主管に移し、博物館事務所（當時博物館と稱す）を上野の舊寛永寺本坊跡に移轉し翌十五年同所に新築の本館を開いた。十九年宮内省の管理となり、二十二年帝國博物館と改められ、歴史、美術、美術工藝、工藝、天產の五部を設け、三十三年六月現稱に改められた。天產部は大正十四年文部省に移管された。陳列本館は震災に大破せるため取除かれ、現在は表慶館だけを列品陳列に充て、居るが、目下、今上陛下の御即位記念の事業として帝室博物館復興興贊會に依り、復興工事を進めて居る。表慶館は大正天皇の御慶事を奉祝するため東京市民が帝室へ獻上したもので明治四十二年の竣工二階建の洋風石造建築で總坪數七百七十坪、館内を九室に分ち、階上は第一室歴史部、第二、第三室は美術部の繪畫、書蹟、第四室は美術工藝部の髹漆器具類等を陳べ、階下は第五室、美術工藝部の金屬、玉石、甲角、木竹器具、第六室陶磁器、第七室美術部の彫刻、第八、九室歴史部の考古資料等を陳列する。階上の美術部列品は毎月陳列替を行ひ、又毎年數回特別展覽會を催す。

帝室博物館官制

大正十年十月七日
皇室令第十四號

第一條 宮内省ニ帝室博物館ヲ置ク
第二條 帝室博物館ハ古今ノ技藝品ヲ蒐集シ公衆ノ觀覽ニ供スル所トス

第三條 帝室博物館ハ之ヲ東京及奈良ニ置ク

第四條 帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク
總長、事務官、鑑査官、鑑査官補、屬、技手

第五條 總長ハ勅任トス各帝室博物館及正倉院ニ關スル事務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第六條 事務官ハ專任二人奏任トス庶務ヲ分掌ス

第七條 鑑査官ハ專任五人奏任トス列品ノ鑑査解説陳列及保管ニ關スル事務ヲ分掌ス

第八條 鑑査官補ハ判任トス鑑査官ヲ助ク

第九條 屬ハ判任トス庶務ニ從事ス

第十條 技手ハ判任トス技術ニ從事ス

第十一條 奈良帝室博物館ニ館長ヲ置ク

館長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ館務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔總長〕杉榮三郎〔事務官〕矢島正昭
〔鑑査官〕溝口禎次郎、原田淑人、秋山光夫、後藤守一、石田茂作、〔御用掛〕都筑誠〔鑑査官補〕吉野富雄、濱隆一郎、伊藤起、桑野寛、高橋勇、北原大輔、鷹巢豐治、小林剛、矢島恭介、野間清六、高橋直一〔評議員〕一戸二郎、伊東忠太、久保田鼎〔學藝委員〕香取秀治郎、藤懸靜也、關保之助、入田整三

帝室博物館出品規則

第一條 所藏ノ物品ヲ本館ニ出陳セラレンコトヲ望ム者ハ口頭若ハ書面ヲ以テ申出ツヘシ、但シ書面ヲ以テ申出ツルトキハ其ノ品名形狀傳來等ヲ詳記シ且略圖ヲ添付スヘシ

第二條 物品ノ出品ヲ承認シタルトキハ物品ト引換ニ預證書ヲ交付スヘシ

第三條 出品ハ本館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災其ノ他不可抗力ニ因リ紛失毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 出品ノ輸送費用ハ所有者ニ於テ支辨スヘシ

第五條 出品ヲ摸寫模造若ハ攝影セシコトヲ請フ者アルトキハ所有者

美術觀覽施設

ノ承諾ヲ得タル後之ヲ許可スヘシ
但シ各種列品集合全體ノ形狀ヲ撮
影スルハ此ノ限ニアラス

第六條 出品ニシテ常時手入ヲ要ス
ルモノハ本館ニ於テ之ヲ爲スヘシ
但シ修繕ハ此ノ限ニアラス

第七條 出品ノ預期間ハ三箇年トス
預期間ノ計算法ハ現品ノ領收力六
月以前ナルトキハ其ノ年ノ一月ヨ
リ起算シ七月以後ナルトキハ其ノ
年ノ七月ヨリ起算ス

第八條 預期間満了シタルトキハ書
面ヲ以テ之ヲ所有者ニ通知ス
所有者前項ノ通知ヲ受領シタルト
キハ速ニ物品ノ引渡ヲ受クヘシ

第九條 出陳ヲ繼續スル場合ニ於テ
ハ本證書ノ裏面ニ繼續ノ印ヲ押シ
期限ヲ延長スルモノトス

第十條 出品預期間内ト雖所有者ノ
希望ニ因リ若ハ本館ノ都合ニ因リ
物品ヲ返付スルコトアルヘシ

第十一條 返附スヘキ物品ハ執務時
間中何時ニテモ預證書ト引換ニ之
ヲ引渡スヘシ

引渡ヲ受ケタルトキハ本人又ハ代
理人ハ證書ノ裏面ニ受領ノ旨ヲ記
載シ記名捺印スヘシ

第十二條 出品預期間満了ノ場合ニ
於テ所有者ノ所在不明ナルトキハ
官報及三種以上ノ新聞紙ニ五日間
之ヲ廣告スヘシ此ノ場合ニ於テハ

其ノ末日ニ於テ通知ヲ受ケタルモ
ノト看做ス

預期間満了ノ通知ヲ受ケタル日ヨ
リ三ヶ年ヲ經過スルモ引渡ヲ申出
サルトキハ預證書ハ無効トシ現品
ハ本館ニ於テ隨意ニ之ヲ處分ス

第十三條 出品預證書ヲ紛失若ハ毀
損シタルトキハ速ニ本館ニ届出證
書ノ再交付若ハ引換ヲ請求スヘシ
但シ紛失シタルトキハ官報又ハ新
聞紙ニ廣告シ三箇月ヲ經過スルモ
發見セサル場合ニ於テ再ヒ證書ヲ
交付スヘシ

第十四條 紛失若ハ毀損ニ因リ再ヒ
預證書ヲ交付シ若ハ引換ヲ爲スト
キハ其ノ理由ヲ證書ニ摘記ス

第十五條 本館ニ陳列ノ爲物品ヲ寄
附セントスル者ハ其ノ品名形狀傳
來等ヲ詳記シタル書面及略圖ヲ差
出スヘシ

物品ヲ寄附セントスル者輸送費用
ヲ支辨スル能ハサルトキハ本館ニ
於テ負擔スルコトアルヘシ

(觀覽日) 一月三日より十二月廿
五日迄。午前九時より午後四時迄
但し季節により多少伸縮す。

(觀覽料) 大人十錢、小人五錢、
廿人以上ノ團體は大人五錢、小人
三錢。教員引率ノ學生生徒ノ團體
は無料。

演劇博物館

東京市淀橋區戸塚町
早稻田大學構内

故坪内逍遙博士の古稀の祝賀とし
エトクスピヤ全集の翻譯完成とを記
念する爲設立されたもので、坪内博
士を始め各方面の寄附に依り昭和三
年十月開館した。同館の事業は東西
古今の演劇に關する參考資料、文獻
等を蒐集陳列して一般の觀覽に供す
る一方、劇に關する圖書館をも兼ね、
又研究室、小舞臺等をも設けて演劇
の調査研究を行ひ、演劇文化の向上
發展に資するを目的とする。同館は
早稻田大學の管理に屬するも公益機
關として一般に無料で公開されて居
る。

〔館長〕金子馬治〔副館長〕河竹繁
俊(觀覽日) 日曜及祭日の翌日を
除く外毎日、午前九時より午後四
時迄。

大倉集古館

東京市赤坂區葵町三
電話 赤坂七四〇

財團法人大倉集古館は大正六年の
創設に係り其蒐集品、建物、土地、
維持資金等悉く故大倉喜八郎男がそ
の受附記念として寄附したものであ
る。公開當時の出陳物は一、諸佛教
國民の手に成れる各種の佛教式彫像

及支那の道教式彫像、二、我國の詩
繪品、三、支那の堆朱器、四、支那
の壙磚陶俑並に石佛及古銅器等で、
就中支那堆朱器の蒐集は著名なるも
のであつたが、往年の大震災は如上
の蒐集の殆ど全部を烏有に歸せしめ
た。大正十五年再び大倉男の寄附に
因り現在の陳列館を起工、僅かに焼
失を免れた數十點の藏品を基礎に多
數の新收藏品を加へて昭和三年八月
開館した。現在の出陳物の主なるも
のは支那周代より唐に至る壙磚、墓
誌石、瓦當、畫像石、西藏の佛像類
及我國の詩繪、其他の工藝品、古書
畫の類である。本館は鐵筋コンクリ
ート支那風の三階建にして延坪二百
五十二坪。

〔理事〕男阪谷芳郎、男大倉喜七郎
大倉桑馬、〔館長〕齋藤忠郎
(觀覽日) 日曜日及大祭日並年始年
末を除く毎日。觀覽無料。

書道博物館

下谷區上根岸町一二五
中村不折邸内

本館の設立趣意は「東洋文字ヲ識
セル碑本法帖經卷名家ノ眞蹟及書籍
瓦甌瓦當彫像古碑瓦器墨印鏡鑑兵器
龜甲獸骨殷周時代ノ銅器秦漢ヨリ明
代ニ至ル諸器硯墨等ノ文房具古錢等
支那三千年間ノ物ト本朝奈良朝ヨリ
徳川時代ニ至ル諸器ヲ蒐集シ此ヲ各

種類ニ分類シ年代順ニ整理シ以テ東洋文字ノ研究ニ資スル」にあり、陳列品は何れも中村不折が過去四十年に亘り蒐集せるもの。昭和十年十月財團法人設立許可の申請をなし、開館式は十一年の秋に舉行する豫定であるが、希望者の觀覽を許して居る、(觀覽料)十錢、列品目錄二十錢。

増上寺

東京市芝區芝公園地内

源譽上人の時徳川家の菩提所となつた名刹で多數の什寶を所藏して毎年九月一般の觀覽に供する。其の建築のみは毎日午前八時より午後四時迄觀覽し得る。(觀覽料)南北靈屋各三十錢、學生及團體は半額

東京美術學校陳列館

並正木記念館

東京市下谷區上野公園
東京美術學校内

同校には參考品を豊富に收蔵するを以て陳列館及正木記念館に之を常置陳列して公衆の參觀に供してゐる併し之も元來生徒の參考に資するを目的としたものであるから、授業の關係上開館時間は極めて制限されて居る。休暇中及母土、日兩日を除く外毎日午後零時半より三時半に至る間兩館を同時に開く。兩館共階下は

彫刻、工藝類を常置陳列し、不定期に少部分の陳列替を行つて居る。陳列館階上は繪畫陳列室であるが、繪畫はその保存上常置陳列を許さないのて常時は閉鎖し、年數回特別陳列を行ふのみである。正木記念館階上は日本室であつて常置陳列は行つてゐない。兩館共入場無料、同校職員生徒以外は住所姓名を記載し入場を許される。

東京美術學校文庫

東京市下谷區上野公園
東京美術學校内

文庫の開覽施設は本校生徒の爲に設けられたものであるから一般には公開されてゐない。但し特殊の研究に従事するものはその旨を附記した履歴書及願書を校長宛提出して開覽を許可されることもある。開館時間は休日を除くの外毎日午前八時(冬期は九時)より午後五時迄、開覽を許されるのは圖書、模本の類である。又場合によりては文庫收蔵の圖書標本は學校關係者以外と雖も帶出開覽を許可される。

東洋文庫

東京市本郷區駒込上富士
前町一七、電話大塚三三八

大正六年九月岩崎久彌男が前中華

民國總統府顧問ジョーヂ・アーネスト・モリソンより購入したるモリソン文庫を核心とし東洋に關する圖書の蒐集を行つたもので、その後現在の場所(文庫を新築し、大正十三年財團法人組織とし東洋文庫と改稱した。同文庫一切の費用は岩崎男の寄附によるものである。事業として、東洋に關する圖書の蒐集をなし、學者の開覽に供すると共に、東洋學上有益なる論著の出版、史料となる稀籍の複製等をなし、又隨時講演會、展覽會を開催し、斯學の進歩普及に努める。開覽は日曜祭日を除き、毎日午前九時十五分より午後四時迄。

明治神宮外苑聖徳記念繪畫館

東京市四谷區大番町
明治神宮外苑

大正四年明治神宮御造營に際して廣く國民の獻金を募り外苑及び同繪畫館を建設し、之を神宮に献納せんとする計畫が成り、明治神宮奉讃會に依つて大正十五年建立。聖徳を讃仰するの資とする爲、各方面より奉納せる明治天皇、昭憲皇太后御一代の主要なる御事蹟を表はした繪畫(日本畫四十枚、洋畫四十枚)を奉掲する。

(觀覽日)毎日、午前九時より午後

四時迄、但十二月一日より翌年二月末日迄午後三時閉館(觀覽料)大人十錢、小兒五錢

明治神宮寶物殿

東京市代々木
明治神宮内苑

大正十年十一月開館。明治天皇、昭憲皇太后に最も御關係深き御物を永遠に保存し、國民一般に拜觀を許して聖徳を偲び奉らしめんとする。建物は優美なる流造にして和洋折衷を試みたるもの、總建坪五百五十坪明治天皇御物五十八點、昭憲皇太后御物二十三點。

(拜觀日)四月一日より十月卅一日(午前八時—午後五時)、十一月一日より三月廿一日(午前九時—午後四時)。(拜觀料)大人十錢、小人五錢

蓬左文庫

東京市豊島區目白町四ノ
四二、電話大塚二二七

昭和十年十一月開館。本文庫は徳川美術館、生物學研究所と共に徳川義親侯の創設に係り、財團法人尾張徳川黎明會の經營に依る。所藏の書籍は尾州家が三百年間に互つて儲藏せる圖書、記録類約七萬冊を中心と

美術觀覽施設

し、加ふるに近時の蒐集騰寫に係る舊尾張藩資料及國史、及び經濟史、林政史學關係の刊行物並に徳川生物學研究所圖書等約二萬冊を以てする。尙文庫に歴史研究所を附設し徳川義親侯を中心として徳川林政史の研究を進めつゝあり、更に本文庫は蓬左文庫叢刊と題して文庫中に所蔵する稀書珍籍の複製頒布をも行つてゐる。

(觀覽日)一月四日―七月十日及九月十一日―十二月廿八日(自午前九時至午後四時)、七月十一日―九月十日(自午前八時至正午)、日曜及祝祭日休館。

閱覽規程拔萃

一、外來者にして圖書を閱覽せんとする者は所定の申込書に各項を記入し之を文庫係員に提出す可し、但し官公私立學校の學生生徒は在學々校の校長又は指導教員の紹介を添ふることを要す

地方

鹿島神宮寶物陳列館

茨城縣鹿島郡鹿島町
鹿島神宮

昭和二年九月開館。甲冑、刀劍、彫刻、馬具、古墳發掘品等二百六十

四點を出陳公開す。

(觀覽料)大人十五錢、小人五錢

金澤文庫

神奈川縣久良岐郡金澤町
稱名寺境内

北條實時の創立で後年その藏書の大半を搬出せられ、世上に散佚したものも多いが、今尙和漢書一萬卷餘を藏して居る。明治三十年伊藤博文公は金澤文庫を復興し、又帝國憲法草案に使用した參考資料三百二十有餘冊を寄贈したが、その建物は現存しない。現在の文庫は其の所藏の古文書、典籍、什寶を保存して一般公衆に縱覽せしめ、兼て中世文化研究所たらしめる爲、今上天皇御大典記念事業の一として、大橋新太郎氏の寄附五萬圓と併せて十萬圓を以て昭和熟と共に建設されたもので、昭和五年八月落成式を擧げて公開された。

(文庫長)關靖(司書)木谷孝

(開庫時間)十二月二十五日より翌年一月七日迄を除き毎日、夏期午前八時より午後五時迄、冬期午前九時より午後四時迄。(觀覽料)大人十錢、小人五錢

鎌倉國寶館

神奈川縣鎌倉町
鶴岡八幡宮境内

往年の大震災の經驗に鑑み、鎌倉近在の社寺の國寶什寶を一箇所に纏めてその保存を計らうとの議が起り且つ一般遊覽者の便にも資するため昭和三年鎌倉町の事業として同館を建設した。建物は鐵筋コンクリートで外部を校倉式とし總坪數百八十坪社寺所藏の國寶、什寶及個人の委託品たる彫刻、繪畫、工藝品、古文書、武具等約五百點を展觀して居る。

(館長)清川來吉(主事)相澤善三
(觀覽日)一月四日より十二月廿六日迄(觀覽料)大人二十錢、小人五錢、學生軍人十錢、その他團體(二十人以上)割引をなす。

清澄寺寶庫

千葉縣安房郡天津町清澄

大正十一年開設。當山に關係ある先師古德の遺品並美術考古資料計七十二點を公開す。毎日開館、大人廿錢、小人十錢。(館主)玉瀧義秀

日光東照宮寶物館

栃木縣日光町大字
日光山内浩養園

大正四年の東照宮三百年祭執行の記念に創設さる。東照宮、二荒山神社、輪王寺蒐藏の寶物類(主として江戸時代的美術工藝品)計三百二十點を觀覽せしむ。毎日開館。

箱根神社寶物館

神奈川縣足柄下郡元箱根村

大正十二年六月開館。古刀、古文書、木像、佛畫等歴史資料四十點を蒐藏す。毎日開館。大人十錢、小人五錢。

奥羽地方

上杉神社稽照殿

米澤市南堀端町上杉神社

大正三年の創立に係り、蒐集品は扁額、甲冑、刀劍、武具、佛畫、古文書、陶磁器、經卷等約七百點にして國寶、貴重品が尠くない。開館毎日。大人十錢、小人五錢。

掬粹巧藝館

山形縣東置賜郡小松町大字中小松

昭和六年開設。學術參考資料として古陶磁器其他美術工藝品約三百點を常時陳列公開する。(理事長)井上庄七

北村郷土博物館

宮城縣桃生郡北村小學校

昭和四年開設。郷土資料、美術品等三百點を陳列す。

中尊寺寶物館

岩手縣西磐井郡平泉村

同寺には藤原時代の佛像、經卷及優れた工藝美術品多く、是等は藤原末期の建物たる金色堂、經藏の外、辯才天堂、本坊、寶物館に藏せられ、寶物館の所藏點數二千九百餘である。

(觀覽日) 毎日、午前八時より午後四時迄。(觀覽料) 寶物館その他を合せて六十錢。

山形縣郷土博物館

山形市香澄町木ノ實小路二〇一、山形縣教育會内

昭和二年創立。郷土に關する歴史博物館研究資料及美術工藝品等約一千三百點を陳列す。

米澤郷土館

山形縣米澤市屋代町

昭和五年創立。歴史考古資料一千七百點を陳列す。

中部地方

愛宕下美術館

福岡縣小笠郡横須賀町

昭和六年の創立にして財團法人組織。繪畫考古資料五百八十餘點を陳

美術觀覽施設

列す。

往生寺寶物館

長野市大字西長野

明治十九年創立。佛像、佛畫、古文書、佛具類等を展覽す。毎日開館。

大瀧神社寶庫

福岡縣今立郡岡本村大瀧

昭和五年寶庫新築。同社に關係ある古文書類及古軸物、古器等五百點を蒐藏す。

久能山東照宮寶物館

静岡市久能山

同寶物館は大正四年東照宮三百年祭執行の記念に建設せるもので、陳列品は家康の遺品、徳川歴代將軍の甲冑武具類、古文書等の歴史參考資料三百八十二點。年中無休開館。

大勸進寶物館

長野市大字西長野

大勸進は善光寺内にあり、其の寶物館は明治四十一年の創設で、御宸翰、御物、古代の樂器類、佛像、佛畫、古文書等約百五十點を蒐藏す。毎日開館。(觀覽料) 五錢

徳川美術館

名古屋市東區徳川町二ノ二七ノ一 電話東六六三六

昭和十年十一月開館。本美術館は蓬左文庫及生物學研究所と共に侯爵徳川義親の寄附に依る財團法人尾張徳川黎明會の建設に係るものであつて、古來徳川家に傳來する數多の貴重なる什寶美術品を私有の域を脱し世の美術家、學者の研究參考に資するを以て目的とする。同館は昭和七年十一月起工され同年四月竣工。構造は鐵骨鐵筋混凝土造で本邦城砦建築の様式を加味したもの、蒐藏品は繪畫、古筆、工藝品其他名器刀劍等約七千餘點の多數に上り、陳列替に依り逐次展覽する。尙隨時社寺私人の所藏に係る有益なる參考品を受託陳列する。

(觀覽日) 一月六日より十二月廿五日迄。月曜日、祝祭日を除く。(觀覽料) 十錢、五十人以上は一人五錢。四月及十月開催の特別陳列日は料金一人三十錢とす。

新潟縣郷土博物館

新潟市一番堀道

新潟縣主催の郷土教育研究會並に新潟縣會の決議に基いて昭和九年創立、開館した。古墳發掘品、經塚出

土品、古畫、古文書等郷土研究の資料計三千點を陳列公開する。

(觀覽日) 毎月末日及十二月廿五日より毎年一月五日迄を除き毎日開館。(觀覽料) 大人五錢、小人二錢

白山神社寶物館

福岡縣大野郡平泉寺村平泉寺

大正十五年創設。白山神社、平泉寺、平泉家の所藏に係る古器物、古軸物、古文書等百六十點を出陳公開して居る。(館主) 社司河合退藏

武山閣

静岡縣賀茂郡下田町

昭和六年創立。美術品千二百點を展覽す。(館主) 清水歸一

三島神社寶物館

静岡縣田方郡三島町

昭和五年開設。歴史、考古資料等約二百餘點を藏す。

身延山寶物館

山梨縣身延山久遠寺内

大正十五年四月開館。日蓮宗の本山に關係ある書畫、古器物等の什寶百二點を公開し、年に一回又は二回陳列替をなす。

近畿地方

京都

恩賜京都博物館

京都市東山區東大路通七
條北入、電話 祇園五四

明治二十二年五月宮内省達を以て圖書寮附屬博物館が廢止され、帝國博物館、帝國奈良博物館と同時に帝國京都博物館が設置された。二十五年四月本館の工事に着手し二十八年竣工、三十年五月開館した。三十三年官制の改革に依り京都帝室博物館と改稱。大正十三年一月、今上陛下の御成婚に際し思召を以て宮内省より京都市に下賜せられ、同年二月一日より恩賜京都博物館と改稱し、京都市の經營に屬することゝなつた。

本館は京都其他各地社寺の國寶什寶及び個人所藏の優品を蒐集して之を受託陳列し、一般の觀覽に供して居る。陳列品を大別して歴史部、美術部、美術工藝部の三部とし、更に之を細分して歴史部（一、圖書、二、古代遺品、三、祭祀宗教關係品、四、武器、五、禮式風俗關係品、六、貨幣、度量衡、信印）、美術部（一、繪畫、二、書蹟、三、彫刻、四、建築、美術工藝部（一、金屬品、二、窯製器、三、抹漆品、四、織繡品、

五、玉石甲角竹木品、六、紙革品、七、寫眞並圖繪）とす。現在の列品點數二千五百九十餘點。繪畫は略毎月陳列替を行ひ、又年に數度特別展覽會を開催する。

本館は佛國ドリツク式建築にして建坪一千二百一坪、内列品館坪數九百十二坪餘。館内は十五の陳列室に區分され、他に中央室あり、臨時陳列又は講演會場に充てられて居る。

〔館長〕和田不二男〔顧問〕關保之助、濱田耕作〔學藝委員〕猪熊淺齋、小山源治〔鑑査員〕加藤修、望月信成、松木聰二郎、土井次義〔觀覽日〕一月五日より十二月二十五日迄。

〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢、〔特別觀覽料〕一人五十錢。團體（二十人以上）大人一人五錢、小人三錢

太秦廣隆寺靈寶殿

京都市右京區太秦廣隆寺内

大正十一年、聖德太子一千三百年遠忌の記念に創設す。建物は鐵筋コンクリート造にして外觀は古代校倉の様式に倣つてゐる。建坪八十七坪。廣隆寺は聖德太子の御創建に係る名利で本殿收蔵の佛像、佛畫、古文書等には古來の傑作名品多數に上り國寶も尠くない。

北野神社寶物殿

京都市上京區北野
官幣中社北野神社

本殿は昭和三年、當社千二十五年祭執行記念として北野會の建設奉納せるもの。多數の宸翰、各種の北野緣起繪卷、古寫日本書記等の貴重な古畫、珍籍、古文書、刀劍及器具の類が出陳されて居る。

〔觀覽日〕一月一日より十二月廿五日迄大體毎日開館。（觀覽料）十錢

京大文學部考古學

陳列館

京都市左京區吉田町
京都帝國大學構内

大正三年開設。日本、支那、朝鮮の考古學研究資料及埃及、希臘、羅馬の遺物等合せて一萬餘點の標本を陳列す。平素は一般には公開しないが、學者研究者には無料觀覽を許して居る。

醍醐寺寶聚院

京都市伏見區醍醐

醍醐天皇一千年御忌奉讃會の記念事業として昭和六年三月以來工事中の醍醐寺靈寶館「寶聚院」は昭和九年末に竣工。十年四月十七日盛大な

落慶法要を嚴修した。同館は陳列館二棟（二百三十五坪）、寶庫二階建二棟（八十坪）、寶物整理室一棟（十坪）、研究室一棟（百十三坪）等より成り、構造は鐵筋コンクリート造で耐震、耐火、通風等に最善の科學的諸設備を凝した新建築であるが、外觀は入母屋造り、本瓦葺の秀麗なる日本住宅風の建築である。

同館は今後醍醐寺所藏の幾多の國寶、重要美術品、古文書等を收蔵保存すると共に研究室を解放して學者の調査研究に資し又隨時展觀を催して公衆の觀覽に供する筈である。

〔觀覽日〕公開は春秋二期即ち三月下旬より五月下旬迄、及十、十一月の二箇月と定め、開館中は月一回の陳列換を行ふ。

豐國神社寶物殿

京都市東山區茶屋町

豐國神社境内に在り。主なる寶物としては狩野内膳筆の豐國祭六曲屏風、無銘傳栗田口吉光作太刀等の國寶をはじめ豐臣家關係品を蒐集す。

仁和寺靈寶館

京都市右京區御室大内町

昭和二年四月開館。古書畫、彫刻工藝品、古文書類等の寺寶中には國

寶も多く屢々陳列替して觀覽に供する。
〔館長〕麻生靈光

〔觀覽日〕毎日、午前八時より午後四時迄。
〔觀覽料〕十錢

大阪

大阪城天守閣郷土

歴史館

大阪市東區馬場町

昭和四年二月大阪市の御大典記念事業として大阪城公園を新設し同時に天主閣の復興に着手、同六年施設成り一般に公開した。天守閣内を郷土歴史館に充て、豊公記念物並に大阪に關係した郷土研究資料を蒐集展列して居る。

〔觀覽日〕毎日
〔觀覽料〕十三歳以上二十錢、十三歳未満十錢

觀心寺寶庫

大阪府南河内郡川上村寺元

觀心寺は大寶年間の創建と傳へ、はじめ雲心寺と稱したが後弘法大師これを再興して觀心寺と改めたと傳へる。同寺の堂宇建築は何れも國寶に指定されたもの、寶庫は明治三十二年の開闢に係り、國寶の佛像彫刻をはじめ、其他寫經、古文書が多數に藏せられて居る。

〔觀覽日〕毎日、午前八時より午後六時迄。
〔觀覽料〕十錢

奈良

奈良皇室博物館

奈良市奈良御料地

明治二十二年奈良帝國博物館設置せられ同二十八年四月開館。三十三年官制の改革と共に奈良皇室博物館と改稱せられた。

陳列品は主として奈良及近縣の古社寺所藏の國寶にして政府の命令出陳によるもの、社寺その他個人よりの寄託品等にして、概して佛像、佛畫が多く、殊に彫刻は上古より鎌倉期に互る優秀品が多數蒐集されて居る。出陳物を歴史品、美術品、美術工藝品の三種類に分ち、彫刻繪畫は各室別とし時代順に、その他は種類別に陳列す。館内は十三室に分れ第一室より第三室まで彫刻、第四室より第八室まで佛器、武具、甲冑等の美術工藝品、繪畫、古文書等の順に陳列し、繪畫は毎月陳列替を行つて居る。〔官制は東京皇室博物館の項参照〕

〔館長〕山口鐵、〔御用掛〕大宮武麿
〔鑑査官補〕龜田孜、松島順正、〔學藝委員〕中村雅真、新納忠之介、水木要太郎、梅原末治

〔觀覽日〕一月五日より十二月廿五日迄。
〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢。

正倉院

奈良市御料地

正倉院はもと東大寺の勅封藏で、最初、正藏又は正藏院と呼ばれた。明治十七年宮内省の管理となる。天平勝寶八年聖武天皇崩御遊ばされるや光明皇后は御願文と目錄を添へて天皇御遺愛の諸器物を東大寺に施入せられたが、爾來その御寶物は勅封を以て收藏され、又その建物は嘗つて火災に遭遇せしことなく、今尙約三千點の名寶を保存し天平文化の精粹を傳へて居る。建物は現在、校倉造りの一棟で、桁行十八間、梁間五間、高さ五間、床下九尺の大建築で北倉、中倉、南倉の三區に分ち上下二層をなして居る。

御物は刀劍、樂器、樂面、鏡鑑、織物、經典、藥品、古文書其他多數に互り、支那渡來の工藝品及び西域關係のものも含まれてゐる。

御物は毎年秋期曝涼に際して開封され、一定の有資格者に拜觀が許されるが一般には公開されない。

昭和十年度正倉院御物拜觀規程
正倉院御物曝涼に付本年十一月三日より同十二月まで拜觀を許可せら

る其拜觀を許可せらるべき者出願手續及拜觀者心得左の如し

拜觀を許可せらるべき者

一 宮中席次第四階以上の者及其配偶者

二 帝室技藝員、學術研究會議會員、國寶保存會會長、副會長

及委員並に工藝審查委員

三 本邦駐劄各國大使公使及其配偶者並に前各號に準すべき外國人にして當該國大使公使の推薦する者

四 前各號に掲ぐる者の外宮内大臣に於て學術技藝に關し相當の經歷ありと認めたる者

出願手續

一 期日 十月二十五日限

二 拜觀願出の者は現住所資格

〔在官者は官等勲位勲章等所記のこと、特選官吏も之に準ず〕を具し

し宮内大臣に宛てたる拜觀願書を東京皇室博物館〔奈良縣下のものは奈良市〕に差出し拜觀許可證を受くべし但し前項第四號に依り許可を受けむとする者は願書に學術技藝に關する經歷書を添付すべし

三 配偶者其他數人同時に出願する場合に前項第四號に依るものを除き連名出願するも妨げなし

四 拜觀願書には拜觀許可證の送

美術觀覽施設

付先を明記したる凡そはがき版大の封筒を添付すべし

拜觀者心得

一 拜觀者は拜觀許可證を携帯することを要す

二 拜觀は毎日午前十時より午後三時までとす但し天候不良のときは之を停止す

三 御物は撮影又は模寫することを許さず

四 拜觀に關しては諸事掛員の指示に従ふべし

五 服裝は不體裁ならざる限り制限なきも男子和服の場合は必ず袴着用のこと

畝傍考古館

奈良縣高市郡
畝傍町大字久米

昭和六年四月開館。森田常治郎が大和に於て過去三十年に亙り發掘蒐集せる貴重なる歴史考古資料二千餘點を陳列公開す。公共團體及専門研究家の參觀には特殊の便宜を計る。
(觀覽日) 毎日 (觀覽料) 大人十錢、小人五錢

東洋民俗博物館

奈良縣生駒郡大軌沿線
あやめ池 畔

昭和三年十一月創設。九十九豐勝

がシカゴ大學のフレデリック・スタールと共に蒐集せるロシア、支那、印度、朝鮮、臺灣、南洋等各地の土俗研究資料約一萬點が出陳されて居る。

地方

鶴林寺寶物館

兵庫縣加古郡加古川町

同寺所藏の國寶其他三百點の什寶保存の爲、大正十年聖德太子千三百年御忌記念として寶物館を建設、觀覽の便を計る。〔館長〕住職茂渡惠寛

熊野速玉神社寶物館

和歌山縣新宮市新宮一

明治四十三年開設。同社は熊野三山の一にして歷朝御進納の神寶多數を藏し、美術工藝品其他歴史考古資料二百八十五點(内國寶百五十餘點)を保存公開して居る。

(觀覽日) 雨天を除き毎日 (觀覽料) 大人五十錢、學生三十錢、團體割引あり。

高野山靈寶館

和歌山縣高野山

靈寶館は總本山金剛峯寺の管理に屬し、同寺及山内各院所藏の寶物を

收容してその保存を講ずると共に一般の拜觀に供するを以て目的とし、

大正九年竣工、十年開館す。同館は紫雲殿(六十八坪餘)、放光閣(三十八坪餘)、南廊、西廊、寶藏(二十四坪)、寶物管理所等より成り、紫雲殿は佛畫及一般繪畫、放光閣は佛像、南廊及西廊は帝室竝に大師關係品、佛像及一般彫刻品、古文書、美術工藝品等を陳列公開して居る。

毎年春夏秋の三季に一定の期間を限つて特別展觀を行ふ。尙ほ同館はその事業として、金剛峯寺及山内寺院所藏寶物の整理並に修理、高野山寶物に關する専門的研究の編纂竝に發行、宗教美術に關する講演會の開催、寶物目錄の編輯發刊等を行つてゐる。

〔館長〕堀田眞快〔顧問〕黒板勝美 荻野伸三郎

(觀覽日) 年中開館、冬期は大體午前九時より午後三時迄。五月より八月迄は午前七時より午後五時迄。

(觀覽料) 大人二十錢、十歳以下は無料。團體割引は五十人以上一人十五錢。百人以上一人十錢。教員引率の學生及軍人の團體は一人十錢。特別展觀期日は毎年(五月十五日―廿一日)、(八月十五日―廿一日)、(十一月一日―七日)とし其期間の觀覽料は一人三十錢とす。

下郷共濟會鐘秀館

滋賀縣阪田郡長濱町字西本一〇

故下郷傳平の遺志に基き下郷共濟會の附屬事業として大正十年設立さる。新舊美術工藝品、古文書等計二萬五千餘點を藏し、就中石器時代の遺物は一萬點を算し、考古學上得難き資料として珍重される。常時には開館せず希望者あればその都度觀覽に供す。

神宮徴古館

宇治山田市外倉田山

神宮徴古館は神宮大宮司の管理に屬し、明治四十四年神苑會の手により建設獻納されたもので、神宮寶物その他歴史參考品約三千九百點を收藏、一般の觀覽に供して居る。

(觀覽日) 毎日 (觀覽料) 大人十錢 小人五錢、團體割引あり。

大正記念三田博物館

兵庫縣有馬郡三田町

大正元年大正記念事業として開設。故九鬼芳樹所藏の古畫、佛像、美術工藝品、歴史參考品等八百點を蒐藏陳列す。

(觀覽日) 毎日 (觀覽料) 二十錢

白鶴美術館

兵庫縣武庫郡住吉
村字落合一五四五

昭和六年三月嘉納治兵衛の古稀を記念して、其の蒐集に係る美術工藝品、考古資料五百餘點の保存公開を目的とする財團法人が組織され、同九年五月竣工、開館に及ぶ。同館の建築は鐵骨鐵筋混凝土造日本風のもの。事業として、美術、考古資料の蒐集保存及びその研究調査の外に美術工藝に關する指導獎勵をなす。

〔理事長〕嘉納治兵衛 〔理事〕嘉納純 〔主事〕山本規矩三

〔觀覽日〕毎年春秋二季五月一日より同二十日迄、及び十一月一日より同二十日迄定期公開し、其他隨時に開館することあり。〔觀覽料〕大人五十錢、軍人、學生、團體二十人以上及び十五歳以下半額。

湊川神社寶物殿

神戸市湊東區多聞通

大正四年十二月設立。刀劍、掛軸器物、文書類を陳列公開す。

〔觀覽料〕大人十錢、小人學生半額。

中國地方

淺野觀古館

廣島市上流川町鐵砲町

大正二年十月開館。淺野長勳侯の經營に係り、古書畫、刀劍、什器等二百六十餘點を展覧す。

〔觀覽日〕毎偶數日、午前九時より午後四時迄。

嚴島神社寶物館

廣島縣佐伯郡嚴島神社

明治二十七年四月開設。武具、扁額古書畫類等の美術品、歴史參考品百十七點を蒐集公開す。

〔事務關係主任〕武石侃一

〔觀覽日〕毎日〔觀覽料〕大人十錢 小人學生五錢、其他規程に基き特別拜觀を許す。

出雲大社寶物殿

島根縣簸川郡大社町

大正三年開設。建物は入母屋造栗棚葺二階建にして總坪四十八坪。收藏品は神像、古文書、武器、祭器、書畫、玉類、古鏡等で計四百十五點。

〔觀覽日〕毎日〔觀覽料〕大人十錢 小人五錢

忌宮神社寶物館

山口縣豐浦郡長府町

大正四年十一月開館。歴史考古資料約三百四十點を展覧す。

〔觀覽日〕毎日〔觀覽料〕五錢

大原美術館

倉敷市新川町三一二

洋畫家故兒島虎次郎を記念するため昭和五年十一月大原孫三郎が設立したもので、同十年三月大原孫三郎兒島虎次郎兩名の寄附により財團法人組織に改められた。主として繪畫並に其他の美術品を保管陳列する。

〔理事〕大原總一郎、藥師寺主計、武内潔眞

〔觀覽日〕毎月曜日、四大節、年始年末を除き、毎日午前九時より午後四時迄。〔觀覽料〕大人三十錢、學生二十錢。

山陰徵古館

鳥取縣西伯郡淀江町

同地方の考古學研究家の建設に依るもので、蒐集品は山陰地方の出土品を始め各地方の考古學資料を主とし、其他歴史參考品、工藝美術品等合せて約一千八百餘點に上つて居る。

〔館長〕足立 正

四國地方

大山祇神社國寶館

愛媛縣越智郡大三島宮浦

大正十五年六月開館、當社所藏の什寶は千九百餘點を算へ、内國寶指定のもの百十五點、中にも國寶の甲冑は全國總數の六割を占める。

〔觀覽日〕毎日〔觀覽料〕大人二十錢、小人十錢

金比羅宮寶物館

香川縣仲多度郡琴平

明治卅八年開館。石造二階建。佛像、書畫、刀劍、古文書、甲冑、古寫經等の什寶百三十餘點を展覧す。

善通寺寶物館

香川縣中多郡善通寺町善通寺内

大正二年開館。佛像、佛畫、古文書、古寫經、美術工藝品、歴史資料等約三百點を陳列公開する。

〔觀覽日〕毎日、午前五時より午後六時迄。〔觀覽料〕十錢

美術觀覽施設

白峯寺寶物館

香川縣綾歌郡松山村

大正元年創設。佛畫、經卷等寺寶五十餘點を展覽す。

(觀覽日) 毎日 (觀覽料) 五錢

九州地方

宇佐神宮寶物館

大分縣宇佐郡宇佐町

大正十年開館。刀劍、什器、書畫能面等の什寶を展覽す。

鹿兒島市立尙古集

成館

鹿兒島市外磯

同館は慶應元年の建設で大正四年まで島津家經營の鐵工場であつた建物而同十二年歴史資料陳列館に改めたものである。刀劍、武器、文書、薩摩陶磁器等千五百餘點を陳列する。

(觀覽日) 毎日 (觀覽料) 大人十錢、學生軍人五錢

菊池神社寶物館

熊本縣菊池郡隈府町

菊池神社鎮座五十年記念事業として大正八年創設す。菊池氏關係の古文書、武器、軸物等の什寶類七十點

を保存公開す。

(觀覽日) 毎日

佐賀市徴古館

佐賀市松原町

昭和二年鍋島侯爵家に依つて設立さる。舊佐賀藩時代の文化を偲ぶべき歴史考古資料三百九十點を收藏す。

(觀覽日) 祝祭日の翌日及毎月最終日を除く毎日 (觀覽料) 大人五錢 小人學生二錢

太宰府神社寶物殿

福岡縣筑紫郡太宰府町

昭和四年一月開設。國寶其他歴史考古資料百六十八點を藏す。

(觀覽日) 毎日 (觀覽料) 大人十錢、小人、軍人、學生半額

宮崎宮寶物殿

福岡縣柏屋郡宮崎町

昭和二年開設。當神社の什寶、御宸翰、繪卷物、刀劍、器物等九十餘點を陳列す。

別府美術館

大分縣別府市雲泉寺

昭和八年創立。書畫、刀劍、工藝

品三百五十點を陳列公開す。

本妙寺寶物館

熊本市花園町本妙寺内

明治四十二年四月清正公三百年祭の際開設。清正公及本妙寺に關する什寶百六十點を陳列す。

(觀覽日) 毎日 (觀覽料) 十錢

宮崎神宮徴古館

宮崎市神宮町宮崎神宮神苑

明治四十二年創立。皇祖發祥の地日向に於て發掘された考古資料を主とし、其他一般歴史、美術上の參考品を陳列す。(館長) 宮司神尾清澄

(觀覽日) 毎日 (觀覽料) 大人十錢 小人半額

臺灣、朝鮮、

關東州

臺灣總督府博物館

臺北市文武町三ノ二

明治四十一年民政部殖産局の事業として創設、その後大正四年に竣工せる元兒玉總督、元後藤民政長官記念建築物に移轉し、大正六年商品陳列館設立さるゝに及び、商品關係の陳列品を一切移管分離し、純然たる

博物館となり大正九年殖産局より移され内務局の管轄となつた。

陳列品の主なるものは歴史、土俗動物、植物、地質、鑛物であつて、歴史部は參考品を展示し、略説し、土俗部は本島人士俗、蕃人士俗及南洋土俗研究上貴重な資料を蒐集して居る。昭和十年三月末現在の蒐集品は歴史部二、六九二點、蕃族部三、〇七一點、南洋部一、一四九點、地質鑛物部二、三四點、動物部三、四三七點、植物部三八二點、雜部三四一點である。

(館長) 王野代治郎

(觀覽日) 七月一日より九月卅日迄(午前八時—午後二時)、十月一日より翌年六月卅日迄(午前九時—午後四時)。毎週月曜、祝祭日の翌日及十二月廿八日より翌年一月五日迄休館す。

朝鮮總督府博物館

京城府光化門通景福宮内

大正四年、施政五周年記念朝鮮物産共進會の開催に際し京城舊王宮景福宮構内に新築した美術館を中心とし同構内の舊宮殿をも併せ利用して同年二月開館に及ぶ。本館陳列品は朝鮮石器時代、金石併用時代遺物、樂浪帶方郡發掘品、三國時代、新羅統

一時代遺物、高勾麗時代古墳壁畫、高麗時代陶器、李朝時代書畫、陶器漆器、中央亞細亞發掘品等で、凡そ朝鮮各時代に互る美術考古資料約一萬三千餘點が蒐集されて居る。

〔主任〕藤田亮策

〔觀覽日〕月曜、祭日の翌日を除き毎日開館。〔觀覽料〕一人五錢、引率者を有する學校生徒並軍人は無料。

同慶州分館

朝鮮慶尙北道慶州邑

豫て同地の考古研究家の設立に係る慶州古蹟保存會陳列所を、大正十五年朝鮮總督府に移管し、同年六月總督府博物館分館となして開館したるもの。石器時代から李朝時代までの慶州を中心とする考古資料、美術品、歴史參考品等約八百五十點を陳列す。

〔觀覽日〕月曜、大祭祝日の翌日を除き毎日開館。〔觀覽料〕五錢

開城府立博物館

開城府東本町子男山

昭和五年五月府制實施せられ、開城郡が開城府に昇格せられた記念として昭和六年十一月建設。主として高麗朝時代的美術工藝品、殊に高麗

美術觀覽施設

燒の優れたものが多數蒐集陳列されて居る。〔館長〕高裕燮

〔觀覽日〕毎週月曜日、年始年末及大祭日を除き毎日開館。〔觀覽料〕大人五錢、小人二錢

扶餘古蹟保存會陳列館

朝鮮忠清南道扶餘郡扶餘

保存會は大正四年扶餘に於ける百濟の古蹟保存並調査研究を目的として設立。陳列館は同古蹟遺品約六百點を蒐集公開して居る。

〔會長〕李範益〔副會長〕大河原重信

平壤府立博物館

平壤府慶上里一五

昭和三年八月開館。樂浪及高勾麗時代の遺物、新羅統一時代の慶州出土品等の郷土考古資料を陳列す。昭和八年九月現在の地に新築移轉す。

〔館長〕小泉顯夫

〔觀覽日〕毎週月曜、毎月一日、大祭日、年末年始を除き毎日開館。〔觀覽料〕五錢、十人以上の團體は一人二錢。

李王家德壽宮石造殿

京城府貞洞五ノ一

朝鮮に於ける美術獎勵の目的を以て、昭和八年十月德壽宮を公開するに當り石造殿の内部を改造して日本近代美術の陳列館となし、李王家御所藏品及び他からの出陳に係る日本畫、洋畫、彫刻、工藝の優秀作品を常設陳列して一般に觀覽せしめる。

〔觀覽日〕一月四日より十二月廿八日迄毎日開館。〔觀覽料〕大人廿錢、小人十錢、其他團體割引をなす。

李王家博物館

京城府臥龍洞二ノ一

李王家博物館、動植物園を總稱して昌慶苑と言ひ昌德宮の一部をなすもので、明治四十年時の韓國總理大臣李完用に依り故李王殿下の御慰樂に供する爲發企計畫されたものであるが、後殿下の思召により一般民衆に公開し實物教育機關となしたものである。博物館は主として朝鮮古今の美術、土俗品等各種の考古資料約一萬八千餘點を藏し、これを明治四十四年に建築せる博物本館と、朝鮮古式の宮殿建物（明政、景春、歡慶、通明の各殿）に陳列公開して居る。

〔觀覽日〕一月四日より十二月廿八日迄無休開館。〔昌慶苑觀覽料〕大人十錢、小人五錢、軍人、小學生等の團體は一人二錢、それ以外の團體は一人五錢とす。尙ほ博物本

館は別に觀覽料、大人十錢、學生團體一人五錢を徴收す。

旅順博物館

旅順市大迫町

本館はもと關東都督府物產館と稱し大正六年の創設で、翌七年現在の建築の成るに及び博物館と改稱、次で同八年四月より都督府の改制と共に關東廳の名を冠したが昭和九年關東局令を以て旅順博物館と改められた。本館は露國統治時代に將校集會所として起工したが半成の儘であつたのを大正五年工費三十萬圓を投じ同七年竣工したものである。

陳列品は主として滿洲、蒙古及支那本土に於ける考古、美術及土俗資料で約六萬九千點を算へ殊に蒙古小京倫、南滿洲旅順附近、魏子窩、牧羊城址等よりの考古的遺物は特有のもので、その他支那各時代に互る陶磁器の蒐集を始めとして、數多の銅器、瓦器、壁畫、經卷等、東亞考古學上貴重な研究資料を蒐集する。

〔館長〕白石喜太郎〔主事〕島田貞彦

〔觀覽日〕大祭日、年末年始を除き毎日開館。〔觀覽料〕本館及記念館各一人十錢、二十人以上の團體は半額。〔特別觀覽料〕一點一日に付五十錢。

美術團體一覽

主要團體(五十音順)

構造社(彫)

東京市豊島區池袋四ノ元三
電話大塚一八四四(呼出)

大正十五年九月立體藝術の研究及發表を目的として齋藤素嚴、日名子實三の兩人を以て發會、昭和二年東京府美術館に第一回展を開いた。同年神津港人入會し、同三年の第二回展より洋畫部を加設、四年構造社彫塑研究所を開設。七年會内に紛擾が起り九月第六回展終了後齋藤素嚴が脱會し、引續き日名子實三、清水三重三も退會するに及び、一時、同會解散を聲明したが、同月繪畫部の提唱に依りそれを取消して事務局を神津方に移し第七回展を開く旨を宣言し且つ彫塑研究所を閉鎖した。八年齋藤素嚴復歸し、九年會則を改め新會員、彫塑部三十三名、繪畫部二十一名を加へた。十年五月齋藤素嚴帝國美術院會員任命を受けるや彫塑部會員は彼の行動を承認せず一時齋藤、濱田、陽三名を残すのみにて全會員脱退したが内十名は前記三名の要請に依り留まつた。而して、繪畫部は依然彫塑部の新帝院に對する方針に

反對せるため繪畫部會員神津港人は六月脱會し、同月彫塑部は繪畫部解消を聲明した。

〔會員〕 濱田三郎、荻島安二、河村龍興、中野五一、野村公雄、安永良徳、後藤泰彦、後藤清一、寺畑助之丞、齋藤素嚴。

國畫會(洋、彫、工)

東京市品川區北品川
三ノ三二一、益田方
電話高輪三〇三六

大正七年一月小野竹喬、土田麥僊村上華岳、野長瀬晩花、榊原紫峰の五名は從來の文展の藝術に飽き足らずとなし、竹内栖鳳、中井宗太郎を顧問として國畫創作協會を設立。爾來每年秋季に東京及京都に於て協會展を開催し來り又入江波光はじめ數名の若い作家を同人に推舉したが、大正十五年梅原龍三郎、川島理一郎の兩名を迎へて第二部を新設し更に富本憲吉、金子九平次を加へて彫刻と工藝美術を第二部に置いた。その後會の經營維持困難となり、昭和三年七月終に國畫創作協會は解散となつたが、第二部は其儘留つて、國畫會と改稱し、大橋幸吉、梅原龍三郎、川島理一郎、金子九平次、富本憲吉、山脇信徳の舊會員に新に高村光太郎、椿貞雄、河野通勢の三名が参加し、

翌昭和四年「第四回國畫會展」と稱して洋畫、彫刻、工藝に互る公募展を開催した。爾來同展を繼續して昭和十年第十回展に及ぶ。十年五月帝國美術院改組に際し梅原龍三郎及富本憲吉は新帝院會員に任命された。六月川島理一郎は聲明書を公表し、同會を脱退するに至つた。

〔會員〕 梅原龍三郎、大橋幸吉、川西英、河野通勢、柏木俊一、清水多嘉示、芹澤銑介、椿貞雄、辻愛造、富本憲吉、濱田庄司、バーナード・リーチ、平塚運一、宮坂勝山脇信徳、山下品藏
〔會友〕 二十九名

同會第十一回展出品規程拔萃

一、本展覽會は東京及び大阪に於て左記の規定に據り開催す
一、本展覽會は何人と雖も自己の製作したる繪畫、彫刻、美術工藝品版畫を出品することを得
一、出品作品はすべて鑑査を行ひたる上陳列す
一、鑑査審査は本會々員會友其の任に當る
一、陳列中の作品を審査し卓越せる作品に對して國畫會獎學金を贈る
一、工藝部は之を一部二部に分け左記の者各部の審査を擔當す出品者は希望部を目録に明記され度し

第一部 富本憲吉

第二部 濱田庄司、芹澤銑介

一、出品作品に對しては左記の手續料を要す
一點毎に 金五十錢

一、出品作品は必ず本會所定の出品目録及び出品手續料を添へ所定の期日内に上野公園東京府美術館内本會臨時事務所に搬入せらるべし
一、地方出品は豫め所定の期日まで目録及び上記の手續料を添へて所定の場所に着する様に送附せらるゝを要す(地方より會場宛に發送せられたるものは受理し難きことあるべし)

一、出品作品はそれ〴〵陳列に適當なる裝置をなし、また其の裏面に本會所定の出品票に題名氏名等を明記の上貼附せらるべし
一、出品作品に對する不慮の損害に就ては本會其の責を負はず
一、出品作品の撮影印行等の權利は本會是を保留す
一、鑑査に入選せざる出品作品は鑑査結果發表後出品者に通知す。通知後五日間以内に通知書と引換に搬出せらるべし。若し通知期間を経過するも搬出なき時は運賃先拂にて送附すべし

春陽會(洋)

東京市大森區田園調布
四二二、足立源一郎方
電話田園調布三四六

大正九年秋、藝術の自由を唱へて
決然日本美術院元洋畫部を脱退した
小杉未醒、山本鼎、倉田白羊、森田
恒友、長谷川昇、足立源一郎の六名
は同十一年一月、新歸朝の梅原龍三
郎を加へ、更に九名の客員を迎へて
同會を創立した。發會に際し「春陽
會は從來屢々見たる如き既成會への
社會的對抗として興らず、單なる藝
術家の心を以て因縁相熟したるもの
です」と聲明した。翌年五月上野竹
之臺陳列館に第一回展を開き、爾後
毎年春季に公募展を開催し、又東京
開催後大阪、名古屋等に地方展を催
して居る。昭和四年麹町區内幸町に
春陽會研究所を開設、その指導には
會員が當る。昭和十年帝院改組の結
果小杉放庵新帝院會員に推擧される
に及び同會は六月新帝院に對し第一
次の聲明を發表、更に九月に至り「帝
展第二部開催に對する試案」を進行
したが、此の試案は帝院に容れられ
ず、十一月同院總會後に至り、新帝
展は「本會の理想と反する」爲之に參
加せず「春陽會は依然純粹の在野團
體として行動」するとの意味を聲明
し、小杉放庵は帝院會員を辭任した。

美術團體

(本欄報參照)而して山本鼎、山
崎省三の二會員は向後帝展側へ移る
ことになつたので同會を離脱した。

〔會員〕足立源一郎、長谷川昇、木
谷川潔、今關啓司、石井鶴三、木
村莊八、小杉放庵、小林德三郎、
小穴隆一、國盛義篤、栗田雄、倉
田白羊、水谷清、中川一政、田中
善之助、島海青兒、若山爲三、横
堀角次郎〔會友〕二十名

同會第十四回展覽會規定拔萃
一、昭和十一年四月三日より四月二
十日迄
一、上野公園東京府美術館にて開催
す

一、出品畫は當會々員之を鑑査す
鑑査公開の意味を以て新聞及美術
雜誌記者之に立合ふ

一、陳列中の作品を審査し、春陽會
賞金を贈るべし

一、當會に出品せんとする者は出品
目録に鑑別手數料を添へ三月二十
八日二十九日の兩日中に上記會場
當會受付に差出さるべし

既に本邦に於て發表したる作品は
出品することを得ず

出品畫は陳列に適當なる裝置をな
し、各裏面に目録通りなる番號畫
題、價格、氏名、居所を明記せら
るべし

目録及裏面貼付用紙は當會印刷の
ものたるべし。出品畫を受領した

る時は領り證を交付す。地方の出
品者は出品目録に鑑別手數料を添
へ便宜上三月二十七日迄に到着の
豫定を以て東京市芝區新櫻田町十
九番地長尾健吉商店宛に發送せら
るべし。出品は一般繪畫(素描、
版畫を含む)

一、賣約品價格の割を當會に收
む。陳列畫買約者は即時に代金を
支拂ふか又は價格の三分の一以上
を手付金として前納せらるべし。
破約の場合と雖も手付金は返却せ
ず。買約者には關西閉會後當會よ
り該出品を送達すべし

一、東京閉會後引續き名古屋及び大
阪に於て開催することあるべきに
つき出品者は豫め是を承認し置か
るべきものとす

此の場合出品畫の返付期限は更に
通知すべし
但し出品畫の關西往復費は當會之
を負擔す

青龍社(日)

東京市大森區新井
宿四ノ一〇五三
電話大森一〇一二

昭和三年川端龍子日本美術院を脱
退するに及び、龍子及び其御形藝員
の制作發表の機關として昭和四年六
月青龍社創立さる。同年九月第一回

展を東京府美術館に開催。六年第三
回展に際し紹介出品を登用し八年よ
り一般公募制に改む。又同年三月春
の青龍社展第一回展を三越に催す。

翌年落合期風、川口春波同社を脱退
して明朋美術聯盟を創立す。帝院改
組に際し龍子帝國美術院會員となる
も、社人は「畫業精進の過程の上か
ら、決して二兎を追はず、只管に青
龍社に依つて自己を發揮すると同時
に、在野團體としての青龍社の主張
を一層確立する事に努力する」との
旨を聲明した。同社の主張として常
に在來の所謂床の間藝術に對して、
「健剛なる會場藝術」の創建を唱へ、
又大衆と藝術の接觸に留意して、八
年より展覽會に際して入場無料(目
録必買)の新制を採用する。

〔主宰〕川端龍子

〔社人〕川端龍子、坂口一草、加納
三樂、福岡清風〔社友〕安西啓明
渡邊綱雄 小島鼎子 谷口富美枝
〔社子〕五名

昭和十年度同展出品規則拔萃

一、作品面積の制限は付しません。
但し二曲屏風以上の作品にして、
運送上の考慮を缺く物は、大阪開
催に際して陳列不能の場合があり
ます。

一、出品點數にも制限がありません

ん。

一、出品作品は未だ他展に公表せざる新作品に限る事。

一、出品作品は、陳列の上に於て不體裁の無い様に枠飾の考慮をされること。此の點に不十分の場合は入選後に於て改裝を要求する事を豫約します。

一、搬入作品は、勿論慎重取扱に従事することですが、不可抗力に依つて生じた作品の損害に就ては、本展覽會ではその責任を負ひません。

一、出品作品にして買約された場合、本展覽會に於ては其の一割を手數料として受領します。但し破約の場合は本展覽會に於てはその責任を負ひません。

一、出品に關しての御照會の件は事務所に御質し願ひます。

第二部會(洋)

東京市赤坂區新坂町六五
電話 青山五〇二六

昭和十年六月帝國美術院改組に際し、舊帝展第二部の無鑑査級有志に依つて結成。同會の趣旨は「新帝展不出品同盟を強調し、當局の反省を促す」と云ふにある。同年十月東京府美術館に於て第一回展を開催す。以後年一回東京に於て公募展開催の

豫定。

〔會員〕伊原宇三郎、猪熊弦一郎、池部鈞、石川寅治、濱地清松、橋本邦助、富田溫一郎、太田三郎、太田喜二郎、大久保作次郎、大野隆徳、奥瀬英三、緒方亮平、河井清一、河合新藏、加藤靜兒、金山平三、金澤重治、片岡銀藏、角野判次郎、吉田苞、吉田博、吉村芳松、高村真夫、多々羅義雄、田邊至、田中繁吉、相馬其一、辻永、永地秀太、中野和高、中村研一、中西利雄、内田巖、桑重儀一、矢島堅土、山喜多二郎太、松郵興、牧野虎雄、牧野司郎、小磯良平、小林萬吾、小林眞二、香田勝太、小寺健吉、小柴錦侍、五味清吉、權藤種男、江藤純平、寺内萬治郎、相田直彦、阿以田治修、佐藤敬、宮部進、跡見泰、有馬さとえ、有岡一郎、安宅安五郎、新井完、赤松麟作、佐竹徳次郎、三田康、北蓮藏、北島淺一、鬼頭鍋三郎、柚木久太、三上知治、三宅克己、耳野卯三郎、白瀧幾之助、清水良雄、平岡權八郎、關口隆嗣、鈴木千久馬、鈴木誠

獨立美術協會(洋)

東京市中野區新井
町五〇二 林武方

昭和五年十一月二科會員兒島善三郎、里見勝藏及び會友七名は新たな

藝術主張の下に結束、同會を脱退、春陽會の三岸好太郎、國畫會の高島達四郎、二科出品の伊藤廉、清水登之を加へ「我々は既設の團體より絶縁し新時代の美術の確立を期す」と宣言して獨立美術協會を創立した。昭和六年一月、作品公募の上東京府美術館に第一回展を開催して以來毎春同所に公募展を開催し且つ大阪京都、名古屋、神戸、福岡、熊本、鹿兒島、長崎等に地方展を催す。又毎秋季、會員の小品展觀をなす。其他會の事業として、夏季講習會、出版の諸事業をなし、又自治制の研究所を東京、大阪、京都に開く。

〔會員〕伊藤廉、井上長三郎、海老原喜之助、川口軌外、兒島善三郎、小島善太郎、小林和作、里見勝藏、清水登之、鈴木亞夫、鈴木保徳、須田國太郎、妹尾正彦、曾宮一念、高島達四郎、田中行一、田中佐一郎、中山鏡、野口彌太郎、林重義、林武、福澤一郎

昭和十一年度同會展規則抜萃

會場 東京府美術館

會期 昭和十一年四月二十五日より

五月十四日まで

出品受付 四月十五日、十六日(朝

九時より夕五時まで)

受付場所 上野公園東京府美術館

地方出品 東京市淀橋區角管新町三八加藤運送店電話四谷一四九〇

(振替口座東京三九九四二)に委託せらるべし

出品規定

一、出品は洋畫とし一人五點限りとし(未發表の作品に限る)

一、出品畫は本會規定の出品目錄及び出品手數料を添へ搬入せらるべし

一、各出品畫には額縁を附し(釘附嚴重)裏面には本會規定の用紙に畫題、氏名、出生地、現住所、取扱所(運送店、洋畫材料店等に委託の場合)を明記せらるべし此等を明記せざる場合に生ずる事故に就ては本會その責を負はず

一、出品手數料は一人に付金貳圓とす

一、出品畫に對する不慮の損害に就ては本會その責を負はず

一、陳列畫は展覽會閉會後に非ざれば搬出する事を得ず

一、陳列畫及び陳列せざる作品は規定期間内に通知書と引換に搬出せらるべし然らざる時は本會の適宜の處置に任ぜらるゝものとす

一、陳列畫買約は即時全價格を支拂ふか或は價格の三割を手附金として前納せらるべし(破約の場合は手附金を返却せず)

一、陳列畫賣約の節出品者は手数料として價格の一割を本會に納むるものとす

二科會(洋、彫)

東京市四谷區番柴町一七
電話 四谷 四九七八

大正三年文展第二部に二科設置運動が起つたが、當局に容れられず、同年十月つひに文展より分離して、上野竹之臺陳列館に二科美術展覽會が開催された。同展の開催に際して其の任に當りたる鑑査委員十一名は翌年そのまゝ會員となり、二科會は茲に在野團體として獨立した。(其の中柳敬助、田邊至の二名は直ちに脱會)爾來同會は常に新進流派の作家を包容して我が洋畫史上に啓蒙的功績を擧げて居る。大正八年第六回展の開催に際し藤川勇造會員に推され初めて彫刻の加入を見た。昭和五年十一月兒島善三郎、里見勝藏外會友七名は脱退して獨立美術協會を創立した。昭和十年帝院改組に際して同會々員たる石井柏亭、山下新太郎、安井會太郎、有島生馬、藤川勇造の五名が新帝國美術院會員の任命を受けるや同會は其の盟約に基いて右五名と訣別し、その同會に對する功勞を謝して名譽會員に推した。

昭和十年九月第二十二回展を開催

した。同會は東京の展觀後京都、大阪、福岡、名古屋等に於て隨時地方展を開催する。

〔會員〕アスラン(在外)、碓伊之助、國枝金三、小山敬三、正宗得三郎、齋藤豐作(在外)、東郷青兒、ビシエール(在外)、濱田葆光、國吉康雄(在外)、木下義謙、鍋井克之、坂本繁二郎、横井禮市、藤田嗣治、熊谷守一、黒田重太郎、ロート(在外)、野間仁根、田口省吾(以上繪畫部)、渡邊義知、ザツキン(在外)(以上彫塑部)〔會友〕繪畫部十五名、彫塑部三名
昭和十年同展覽會規則拔萃

第一章

本展覽會は本年九月三日より十月四日迄上野公園東京府美術館に開催す

第二章

本展覽會は何人と雖隨意出品をする事を得。但し鑑査の上陳列決定せられたる作品の作者は他の對立的公募展覽會へ出品するを得ず

展覽會には繪畫、彫塑の二部を設く

本年の出品點數は繪畫彫塑とも各五點以内とす

同一作者にして同時に兩部へ出品する事を得。但し其場合は兩部各々指定點數以内とす

既に本邦に於て發表したる事ある作品は受理せず

第三章

出品はすべて鑑査を行ひ入選作品のみ陳列す

第四章

繪畫部、彫塑部の出品に對しては左の會員之が鑑査に當る

藤田嗣治、濱田葆光、碓伊之助、熊谷守一、國枝金三、黒田重太郎、小山敬三、木下義謙、正宗得三郎、鍋井克之、野間仁根、坂本繁二郎、田口省吾、東郷青兒、横井禮市(以上繪畫部) 渡邊義知(彫刻部)

第五章

出品希望者は來る八月二十一日、二十二日の兩日間午前九時より午後五時迄の間に會場へ作品を搬入せらる可し、額様なきものは受理せず
作品には出品目録及出品料一點につき金五拾錢を添へ搬入せらるべし

作品裏面には必ず目録に記入せると共通の番號、命題、扱所氏名を明記せらるべし

前項出品目録及裏貼の用紙は必ず本會印刷のものに限る

地方出品は八月二十日迄東京府美術館宛に到着する様又出品目録及出品料は(振替口座三八五〇五番或は小爲替にて)事務所宛にてそれ〴〵

發送せらるべし。箱詰の出品は出品目録氏名の側に「箱」と大書せらるべし

開會中出品の複寫及刊行の權利は本會に於て保有すべし

第六章

陳列作品の買約は本會に於て取扱ひ價額の一割を申受くものとす

日本美術院(日、彫)

東京市下谷區谷中上三崎南
町五二、電話下谷二五一〇

同院は明治卅一年十月、當時東京美術學校長を退いた岡倉覺三を盟主とし、橋本雅邦以下二十六名を正員として結成された。「新時代に於ける東洋美術の維持並開發」が創立に際して内外に宣稱した二大主張であつた。同年十月第一回展を開催、且つ研究所を下谷谷中初音町に設置して後進の養成に努め雑誌「日本美術」を發刊した。同三十九年十二月に至り一時東京の研究所を撤廢、同人四名は岡倉覺三と共に常陸の五浦に退去し専念研鑽に努めたが、大正二年岡倉覺三病歿するに及び、直に院の再興を劃し新に院舎を谷中上三崎南町に起し翌三年九月開院式を舉行、十月再興第一回展覽會を開催した。再興に當りしは横山大觀、下村觀山、木村武山、安田靉彦、今村紫紅、

小杉未醒、辰澤延次郎、笹川種郎、齋藤隆三等で其中實技者六名を以て同人とした。再興美術院には彫刻部並に洋畫部を設けたが、洋畫部は大正九年小杉未醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消滅した。毎年秋期に公募展を開き、昭和十年再興第廿二回展を開催す。又春季には内部の試作展を開く。大正十年米國クリブランド美術館の要請に應じ、同國主要都市六箇所に巡回展を開き、以降日本美術の海外紹介にも努む。今回の帝國美術院改組に際しては、同人合議の上断然新帝國美術院への参加を聲明し同時に同院は從來の如く嚴然たる存立を保つ旨宣言した。

同人中、横山大觀、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、富田溪仙の五名は第一部會員に、平櫛田中、佐藤朝山の二名は第三部會員に擧げられた。又藤井浩祐は故藤川勇造の後を繼ぎ第三部會員に就任した。

田中青坪(以上繪畫)。平櫛田中、吉田白嶺、佐藤朝山、藤井浩祐、石井鶴三、保田龍門、喜多武四郎、新海竹藏、犬内青圃、橋本平八、山本豐市、武井直也(以上彫塑)。他に院友は繪畫部六十八名、彫塑部十九名、研究會員は繪畫部八十二名、彫塑部十六名あり。

日本美術院展覧會規則拔萃

二、出品は繪畫及彫塑の二種とす
三、本會に出品せんとするものは出品目録を添へ——迄(毎日午前八時—午後六時)に出品物を東京府美術館内日本美術院出品受付事務所に差出さるべく本院は鑑査の上之を本會に陳列す

四、鑑査は本院同人之を行ふ

五、陳列されたる作品中特に優秀なるものある時は詮衡の上本院は之に賞を附することあるべし

六、出品物は陳列に適當なる裝置をなすを要す又解説を要するものは之を添付せらるべし

七、出品物は總べて新製作に限る公私展覧會に一たび公表したるものは採らず

十、陳列されたる出品物は閉會後にあらざれば之を搬出する事を得ず
十四、賣約されたる出品に對しては手數料として賣價の二割を本會に申受くべし

十五、出品物は成るべく鄭重に保管すべしと雖も避くべからざる事變より生じたる損害或は裝置の不完全より得たる損傷に對しては本院賠償の責に任ぜざるべし

日本美術協會

東京市下谷區上野公園櫻ヶ丘、電話下谷一九一〇

明治十一年日本美術の衰頹を憂へ河瀬秀治等の同志會として美術品評會を開き、翌十二年會名を選んで龍池會と命名し、佐野常民を會頭に推し明治十六年有栖川宮熾仁親王殿下を總裁に奉戴した。而して明治十二年内務省博物館の開設せる第一回觀古美術會を第二回より繼承して開催し明治二十年に至つた。此年十二月規則を改正し、會名をも亦日本美術協會と改め、其後毎年春季(彫刻、美術工藝)、夏季(書、篆刻)、秋季(繪畫)の三季に展覧會を開催するを例とし、既に百回に垂としてゐる。即ち昭和十年度の展覧會は第九十七回(彫刻、美術工藝)、第九十八回(書、篆刻)、第九十九回(繪畫)であつた。

大正十四年組織を改めて財團法人とした。而して現在其組織は第一(繪畫)、第二(書、篆刻)、第三(彫塑)第四(建築、圖案)、第五(玉、石、

木、竹、牙、角、介甲彫品、木雜嵌、第六(彫金、鍍起、鍍金)、第七(鑄金、鍛金)、第八(陶磁、七寶、玻璃)、第九(漆器、蒔繪)、第十(織物、刺繡)、第十一(寫眞、製版)の十一部から成つて居る。

〔總裁〕 高松宮宣仁親王殿下

〔會頭〕 伯金子堅太郎〔副會頭〕 中田敬義〔事務理事〕 溝口禎次郎〔理事〕 東郷安、山崎朝雲、島崎柳塙、八木岡春山、香取秀眞、板谷波山、千葉胤朗、大坪正義〔監事〕 星野錫、下啓助〔主事〕 安井易市〔評議員〕 三六名、委員顧問一二名、委員一一一名、名譽會員三二名、特別會員五名、通常會員九一九名

其他 (五十音順)

愛知社(日、洋、彫、工)

大正七年創立。愛知縣出身の在京美術家(日、洋、彫、工)を以て組織す。相互の研究及親睦を目的とし同時に郷土美術界の爲に盡す。毎年公募展を開催。會員十六名(東京市澁野川區田端六一二、朝蔭其明方)

秋田美術會(日、洋、彫、工)

昭和三年秋田縣出身の平福百穂を中心として、同縣出身の在京美術家

有志(日、洋、彫、工)を以て組織す。會員相互の研究並に親睦を主とし併せて郷土の美術觀賞の啓蒙に盡す。年一回東京及秋田市に展覽會を開催。會員六十四名。(東京市本郷區眞砂町三六、清和寮、東海林恒吉方、電話小石川五六四〇)

油繪五人會(洋)

昭和八年四月組織す。同人の油繪研究並に發表機關。(會員)大貫松三、竹村義司、圓山信一、榎戸庄衛、須田壽。(東京府千歲村船橋三一五、竹村義司方)

青丹會(洋)

昭和七年、文化學院卒業生を以て組織。油繪研究並に發表を爲す。會員十二名。(東京市中野區宮園通一丁目一〇大石俊彦方、電話中野五一七四)

一軌社(洋)

舊スクラム社の改稱。昭和八年の美校師範科卒業生により組織。同人相互の研究を目的とす。同人六名。(東京市豊島區池袋二ノ九四三、桑原實方)

烏城會(日、洋)

岡山縣出身京都在住の畫家を以て

組織す。大正十五年の創立にして、以來數度展覽會を開催す。(會員)鹿子木孟郎、寺松國太郎、小野竹齋、池田遙郎、東原方僊以下二十三名。(京都市上京區下加茂西林町廿七、鹿子木孟郎方)

SPA集團(洋)

昭和十年六月駿河臺洋畫研究所を解散して現在の研究團體に改組す。藤田嗣治、野間仁根の二名は同會の指導の任に當り、展覽會開催の他毎月作品批評會、寫生會等を行ふ。

〔會員〕二科會出品者八名、他四十一名。(東京市牛込區柳町三八、炭康三方)

越佐工藝美術會(工)

昭和九年、新潟縣出身の工藝美術家を以て組織す。會員は何れも舊帝展第四部に關係の作家で會員相互の研究並發表に努むると共に郷土工藝の指導啓蒙に盡力する。同年十二月第一回展を開催す。(會員)原直樹、富樫光成、小澤天來、小川英鳳、吉田醇一郎、高井白陽、山本光次、山本自爐、佐々木象堂、佐藤陽雲、齋藤鏡明、齋藤玉城、品田愼一、廣川松五郎、森三樹、市橋鷺山、原宗治、小野爲郎、眞藤玉眞(東京淀橋區下落合一ノ四二〇、佐々木象堂方)

一樹社(洋)

田中善之助、國盛義篤、川端彌之助等を中心とする春陽會の京都出品者を以て組織し、昭和十年十一月第一回展を京都朝日會館に開催した。

〔同人〕岩崎又二郎、石井彌一郎、徳力富吉郎、加藤啓三、川端彌之助、龜井藤兵衛、田中秀雄、田中善之助、村上尙雄、國盛義篤、藤野龍、琴塚英一、榎信太郎、淺木勝之助、調蘆山(京都市左京區中町五、川端彌之助方)

旺玄社(洋)

牧野虎雄を主宰者とする青年洋畫家の團體で各自の自由なる發展並に融合を目的とす。昭和八年より毎年春季に東京府美術館に公募展を開催し又臨時小品展を開く。昭和十年より夏季講習會を東京及び各地方に催す。

〔主宰者〕牧野虎雄〔同人〕岩井彌一郎、千木良富士、尾崎三郎、甲斐仁代、田邊嘉重、田澤八甲、橋作治郎、塚本茂、中出三也、村田榮太郎、内田象水、能勢眞美、野田信、牧野醇、馬越栞太郎、福田新生、小林清吉、小林獺治郎、青柳喜兵衛、秋山良太郎、櫻庭彦治、樹下行雄、宮部進、東久世小六、

鈴木金平、鹽利彦(東京市杉並區方南町五三六、中出三也方、電話呼出荻窪三四七二、中栞酒店)

大阪美術展覽會(日)

關西に於ける青年日本畫家の向上を目的とし、毎春一回三越主催にて開催す。大正八年より現在の鑑査委員に依つて公募作品の審査が行はれて居る。昭和十年第二十一回展を開く。〔鑑査委員〕西山翠嶂、西村五雲、土田麥僊、矢野橋村、菊池契月、北野恒富、水田竹園、菅楯彦〔委員〕白川朋吉、岡本大更、岩本一成

出品規定抜萃

一、本會は昭和十一年三月一日より五日迄大阪三越に於て開會す
一、本會に出品せんとするものは出品目錄を添へ昭和十一年二月二十五日、六日の兩日中に大阪三越内大阪美術展覽會係迄出さるべし
一、出品は二點以内にして寸法に制限なし但し陳列に適當なる裝置をなすことを要し又解説を要するものは之を添附せらるべし
一、出品物の運搬費用は凡て出品人の支辨たるべし(三越大阪支店)

大阪府工藝協會

大正十三年十月創立。同協會は各

美術團體

科の工藝家、意匠圖案家及斯道關係者に依つて組織され、各科工藝品並意匠圖案の調査研究を爲し斯業の向上を圖るを目的とする。事業として

古屋市西區臺所町三丁目一、石田方)

工藝及意匠圖案資料の蒐集展示、圖案の作製、工藝品の調整並紹介、技術の傳習、内外販路の調査研究及宣傳、官公署其の他に對する建議、會報圖書雜誌の刊行等をなす。毎月「大阪の工藝」誌を發行す。(會長)兒玉孝顯、顧問三十七名、委員三十名、會員三百五十名。(大阪市東區大手前町、大阪府廳工務課内)

昭和八年一月後藤良社中によりて組織。彫塑研究を目的となし、年一回展覽會を開催す。會員廿一名。會友三名。(東京市本郷區駒込神明町三四一後藤良方電話小石川五五一)

燠土社(日)

野田九浦の藝、居仁洞の改稱。昭和十年五月日本橋白木屋にて第一回展を開く。(東京市杉並區上高井戸町五ノ一八九〇、野田九浦方)

華陽會(彫)

昭和八年一月創立。名古屋に於ける新進彫塑家の團體。年一回同市に於て展覽會を開く。會員十名。(名

塊藝會(彫)

大正十一年度東美校彫塑科卒業生が主となり、是に新人の参加を得て昭和十年東京府美術館に於て第五回展を開催した。

塊人社(彫)

昭和十一年度東美校彫塑科卒業生が主となり、是に新人の参加を得て昭和十年東京府美術館に於て第五回展を開催した。

〔同人〕泉谷喜一郎、小笠原貞弘、河内山賢祐、田中林藏、村田勝四郎、松田尚之、藤澤古實、小室達安藤照、荒居徳亮、三澤寛、堀江赴、長谷川耕藏、中野右左人、古屋太郎(東京市澁谷區代々木初町臺五九一)

各人社

昭和六年八月結成。藝術一般の研究並に會員相互の向上を目的とす。毎年展覽會を開く。(會員)日、洋、彫、工、版畫に従ふ者十五名。(京都市押小路富小路角、岡本庄三方)

董丙會(日)

大和繪系の國史畫研究並に創作を目的とす。明治四十年故小堀鞆普門下に依りて組織され、大正十年第一回展を催し、爾來展覽會を繼續して昭和十年第十三回展を開催した。

〔會員〕磯田長秋、伊東紅雲、岩田豐磨、太田天洋、川崎小虎、川船

水棹、棚田曉山、舟波緑川、山川永雅、安田靉彦、小山榮達、小堀安雄〔幹事〕棚田曉山(東京市本郷區弓町一丁目二六、棚田曉山方)

學校美術協會

昭和二年十月設立。我が國の小學校、中等學校に於ける圖畫手工教育の健全なる發達を側面より助成するを以て目的とする。現在小學校、中等學校圖畫手工教師一萬數千名の加盟を得、教育者の指導獎勵、教材用具の研究製作供給、本邦圖畫手工作品の海外への紹介展覽等の事業を行つて居る。毎月雜誌「學校美術」を發行する。

〔會長〕岸邊福雄〔常務理事〕後藤福次郎〔理事〕板倉贊治、山本鼎霜田靜志、赤津隆助、石谷辰治郎(東京市荒川區日暮里町三ノ一九六)

關西水彩畫協會(洋)

昭和九年十月關西在住の水彩畫家十一名を以て組織す。年一回大阪、神戸、京都に於て協會展を開催。夏期講習會並に毎月研究會を催す。

〔會員〕池島勘治郎、別車博資、桂龍雄、米倉兌、吉倉三郎、中岡恒雄、中谷武雄、松下泰次郎、青野馬左奈、元川克己、平川要。他に

研究會員四十名。(大阪市住吉區旭町一丁目一、桂龍雄方)

佳都美村(工)

明治四十二年神坂雪佳を中心に佳都美會設立され、後佳都美村と改稱す。大正十三年これを解體し殆ど舊同人を以て京都工藝美術會を組織し、同十五年美工院と改稱したが更に昭和十年佳都美村に還稱した。京都工藝美術會組織以後は公募展を開催して斯道の向上に努めたが現在再び佳都美村に還り専ら同人の研究を目的とする。隨時作品發表をなす。

〔村長〕神坂雪佳〔村員〕伊東陶山、伊東翠臺、岩村哲齋、岩村光眞、一瀬小兵衛、丹羽多橋、神坂祐吉、神坂松壽、江馬長閑、鈴木表朔、三木表悦、魚野自醒、奥村霞城、山田樂全、清水六兵衛、宮永東山、溝口安太良、古市垣太郎、皆川月華、山鹿清華〔事務理事〕會見延藏(京都市上京區小山初音町會見延藏方)

九科會

大正十四年創立。日本農民美術研究所々員並に同所の顧問、嘱託を會員とし、平素産業的な諸制約の下に仕事をしてゐる所員の自由なる純技術家としての制作發表を目的とす。創立以後二回展覽會(繪畫、木彫、

木工、染術、染色、機織、刺繡、建築、版畫の九科を含む)を東京に開催し今日に及ぶ。(長野縣小縣郡神川村大屋、渡邊進方)

九阜會(日)

昭和九年九月、關尚美堂に於て太田聰雨、奥村土牛、吉岡堅二、高橋周桑、田中青坪、常岡文龜、寺島紫明、溝上遊龜、森白甫の九名を以て組織す。十年五月第一回展を開催。其後、徳岡神泉、山口華楊の二名加入し、現在會員十一名。年一回展覽會を開く。(東京市麹町區九段四丁目一五、關尚美堂内)

九年會(洋)

昭和九年度の東美校洋畫科の卒業生を以て組織す。相互の親睦、向上を目的とし、年一回展覽會を開く。會員四十一名。(東京市杉並區阿佐ヶ谷一ノ七九六、今村俊夫方)

京都工藝美術協會

京都工藝界の各部門及各流派の作家を網羅して相互の連絡統制を圖り京都工藝界の全面的進歩を裨補せんことを目的とする。事業として毎年春季京都市に工藝展を開催し勸奨を爲して新進優秀作家を世に紹介し又新興工藝美術の發達を助長する爲に必要な施設を爲す。機關雜誌を發

刊す。(名譽顧問)中澤岩太〔會長〕鈴木信太郎〔副會長〕淺山富之助、田中博〔評議員〕四十一名、會員四百五十名。(京都府廳經濟部内)

同會展覽會規程拔萃

- 一、本會に於ける出品物の範圍は工藝美術的の製作品(創作版畫を含む)及圖案に限る
- 一、完成後二年以上を経過せるもの又は既に公開展示したるものは之を出品することを得ず
- 一、本會に於ける出品者は京都府下在住者にして當該出品物の製作者に限る。前項の外自己の爲に製作せしめたる本協會の會員は製作者及圖案家と連名にて出品を爲すことを得
- 一、出品を爲さんとする者は附屬様式第一號に依る出品申込書を別に定めたる期日迄に本會に提出すべし
- 一、出品物には附屬様式第二號に依る搬入目録を添へ別に定めたる期日に之を指定の場所に搬入すべし
- 一、出品物の裝飾設備並に搬入及搬出に要する費用は總て出品者の負擔とす。但し參考品にして特別の事由あるものに付ては此の限に在らず
- 一、出品物は第十八條に依る鑑査を経て之を陳列す。但し參考品に付

ては鑑査長の同意を得て之を陳列するものとす

一、鑑査員(鑑査長を含む)は京都工藝美術協會評議員會の推薦に依り會長之を囑託す

一、審査の結果優秀と認めたる陳列品の出品者に對しては褒賞を授與す

京都漆藝會(工)

昭和十年五月京都漆藝家二十數名を以て組織し同年十一月京都美術館に於て第一回展を開催した。

〔顧問〕神坂雪佳、清水六兵衛〔會員〕江馬長閑、鈴木表朗、三木衷悦、平館富、堂本五三良、迎田嘉亭、奥村霞城、井田宣秋、湯淺守一、魚野自醒、三木玉眞等二十餘名。(京都市左京區中門前町一ノ二、江馬長閑方)

京都裝飾藝術協會(工)

昭和二年七月設立。織染繡、及其他の裝飾藝術の向上普及を圖るを以て目的となし、作品展覽會、互評會講演及出版等の事業をなす。

〔理事長〕澤田宗山〔維持員〕福田翠光、箸尾清、岩佐有彩、狩野秀峰、岸本景春、森守明、内藤良耕、大高爲山、澤田宗山、山田江秀、吉田元三。其他協賛員七名顧問六

名。(京都府伏見桃山宗和園内)

京都陶磁器工業組合

昭和九年十二月設立。製作品檢査共同販賣、金融統制の諸事業をなし同地方美術陶磁器の産業化を計る。

〔理事長〕中村孝藏〔別理事長〕淺見五郎助、藤岡幸二、組合員五百八十七名(京都市東山區東大路五條東)

郷土會(日)

大正六年六月鍋木清方門下に依り創立さる。昭和六年迄毎年展覽會を催したが以後開催を休止し現在月一回鍋木宅に研究會を催して居る。

〔顧問〕鍋木清方〔幹事〕渡邊泰次〔會員〕伊東深水、石井滴水、西田青坡、島居言人、千島華洋、門井掬水、川瀬巴水、龜永吾朗、笠松紫浪、柿内青葉、山川秀峰、山田喜作、松田青風、小早川清、榎本千花俊、寺島紫明、櫻井霞洞(東京市京橋區入船町一丁目五ノ一、渡邊泰次方)

行人社(洋)

昭和四年創立。會員の相互研究並に作品發表を目的とす。年一回展覽會を開く。〔會員〕金原五郎、齋藤二男、安達眞太郎、中村節也、白石隆一、倉員辰雄、新道繁、佐藤章、水

〔船三洋、井上脩、福原達朗、岡田一馬、小林榮（東京市淀橋區東大久保一ノ宮、岡田一馬方、電話四谷九三七）〕

金城畫壇（日、洋）

大正十四年石川縣の畫家に依つて設立さる。繪畫の研究發達を圖るを以て目的とし、年一回公募展を開催する。初め中央より大家を聘して鑑審査を行つたが昭和八年より同人に於て總てを處理することゝなつた。

〔同人〕市川昌徳、原田太致、八田一路、玉井敬泉、高光一也、田邊榮次郎、中村皓、武藤直信、安井雪光、山科杏亭、紺谷光俊、越田勝治、相川松瑞、淺川修三、澤村冬岳、新納琢川、〔會長〕青水外吉特別會員四十六名。會友六十六名〔研究部幹事〕工藤作平（金澤市兼六公園内石川縣商品陳列所）

錦葵會

本會は東美校圖畫師範科卒業生を以て組織し、本部を東京に置き各地方に支部を設けて、會員相互の親睦を圖ると共に技能教育の振興に資するを以て目的とする。毎月雜誌「圖畫と手工」を發行す。

〔會長〕伯平田榮二〔理事長〕三尾與喜藏〔理事〕接待庸夫、岩壁三郎、松岡正雄、麻生隆秀、三浦直政、倉田三郎〔幹事〕高橋重雄、

橋本與家（東京市麻布區東町四〇、三尾方電話高輪三七〇七）

銀濤社（洋）

香川縣出身の在京洋畫家を以て結成。昭和七年十二月第一回展を開催した。〔會員〕小林萬吾、猪熊弦一郎、今村俊夫、富田千秋他三十名（東京市杉並區荻窪一ノ二、武内英男方）

華嚴社（日）

昭和四年四月、故小堀柄音、小杉未醒、荒井寛方等の主唱により栃木縣出身の在京日本畫家有志を以て組織す。隔年東京及び郷土に展覽會を催し、又隨時、同人以外の同縣出身畫家を網羅せる作品展を開催し、後進の誘導に任ず。

〔理事〕石川宰三郎、田口勝三郎〔會員〕小杉未醒、荒井寛方、松本姿水、石川寒巖、福田浩湖、關谷雲崖、岡田蘇水、小林草悅、武井晃陵、河内舟人、大貫欽心（東京市下谷區谷中坂町七九、田口勝三郎方）

月耀會（日）

大正九年一月創立。女流畫家の研究團體で隨時作品發表を爲す。〔會員〕石川丹麗、柿内青葉、長山はく、上野秀藏、淺見松江、原け

ん（東京市荒川區渡邊町一〇四〇、石川方電話下谷八四六六）

五月會（洋）

昭和七年東美校洋畫科卒業生有志を以て結成。年一回展覽會を開く。〔會員〕石川滋彦、濱口喬夫、田邊門樹、玉置弘三、佐久間忠助、圓城寺昇、廣田威安、廣田重男（東京市外砦村成城南六、田邊門樹方）

五條會（工）

昭和五年京都在住の作陶家を以て組織す。相互の親睦、向上を圖り毎年一回展覽會を開催し、又隨時研究會、講演會を開く。

〔顧問〕清水六兵衛〔理事〕清水正太郎、米澤蘇峰、森野喜光、近藤修三、浮田樂徳〔評議員〕中谷小太郎、瀧本蘇嶺、淺見與志三、淺見隆三。外四十六名、京都市東山區五條橋東五ノ四六七清水六兵衛方）

工畫會（工）

昭和九年創立。染織圖案家を以て組織し、工畫の創作に努む。昭和十年京都市美術館に於て第一回展を開催す。毎月互評會を開催す。

〔會員〕小倉友之助、横山英明、中村鵬生、梅原榮二、山田恭三、佐藤久吉、平尾周叟（京都市蛸薬

師新町西入、梅原榮二、電話本局一三二三）

工華社（工）

昭和六年設立。工藝の研究並に發表の團體。年一回展覽會を開く。

〔會員〕長谷川昇、唐杉榮四、笠木敦次郎、内藤四郎、山口寅男、深瀬嘉臣、小柳今朝一、湯川豊、島崎正二郎、下鴨（東京市小石川區宮下町六〇、深瀬嘉臣方）

工人社（工）

昭和二年十一月創立。現代意識に立脚した金工藝の創作研究を目的とし、年一回作品展を開催す。

〔同人〕富田稔、大須賀喬、岡部達男、川本吉藏、鴨政雄、鴨幸太郎、各務鐵三、田村泰二、村越道守、信田洋、山脇洋二、安井喜一、松原南海、福田三郎、古橋茂、後藤學一、佐藤潤四郎、北原千鹿、東京市世田ヶ谷區深澤町四ノ五〇八、北原千鹿方、電話世田ヶ谷三〇九一）

工藝濟々會（工）

大正十四年三月創立。東西文化合一の基礎の上に新らしき工藝美術を創造せんとす。隨時展覽會を開く。

〔會員〕板谷波山、石田英一、六角紫水、香取秀真、桂光春、堆朱楊成、海

野清、山本安曇、北原千鹿、清水龜藏（東京市澁野川區田端四三八）

工友團（工）

昭和十年九月創立。京都在住の各科の工藝家を以て組織し、相互の研究に資し、且つ親睦を計るを目的とする。

〔幹事長〕山澤松篁 〔同人〕陶藝部廿三名、金藝部八名、漆藝部廿六名、染織部十六名、竹木部一名（京都市東山區澁谷通大和路東入ル、山澤松篁方）

光風會（洋）

明治四十五年創立。舊宿展系の洋畫家の團體で、各自の研究、後進の誘導を目的とし、年一回春季に公募展を開く。昭和十年二月第二十二回展を東京府美術館に開催した。〔會員〕嵯峨弦一郎、太田三郎、大野隆徳、加藤静児、辻永、中澤弘光、中村研一、小林萬吾、小寺健吉、小絲源太郎、小磯良平、寺内萬治郎、南薫造、三宅克己、清水良雄等五十名（東京市杉並區西荻窪町三ノ一二九、太田三郎方）

紅日會（日）

昭和十年松岡映丘門下の創立せる大和繪研究並にその發表機關。六月日本橋高島屋に第一回展を開いた。

美術團體

〔顧問〕服部有恒〔同人〕林雲鳳、橋本明治、河村東次郎、横山孝行、中村徳二、名古屋謙一、森村稻門（東京市下谷區谷中眞島町七、横山孝行方）

神戸創作圖案協會（工）

昭和七年五月創立。商業美術の向上を目的とし、研究會展覽會等を開き又商業美術に關する相談に應ず。昭和十年十月第十三回展を開催す。〔同人〕木島武雄、久保田郁良、梶原庄之助、佐藤湖南、關山金市。其他會員五名（神戸市神戸區梁町通五丁目三〇、關山金市方）

曠技會（彫）

東京彫工會が大正十三年解散して日本美術協會に合併後、第七部の彫家が大会會を組織、後曠技會と改稱したものである。象牙彫刻の向上に努め展覽會を開催する。

〔會長〕吉田道樂 〔副會長〕森田藻己、中山昇民。會員百五名（東京市澁野川區上中里町一七、菊地互道方）

構造社（繪畫）

昭和十年六月二十五日、構造社繪畫部同人神津港人は新帝展參加問題を繞る彫刻繪畫兩部の衝突の爲退會したが、同月二十七日彫刻部は繪畫

部の解消を聲明したので、繪畫部は翌日構造社臨時總會を開催し、一、曠の繪畫部解消聲明は彫塑部の專斷であるから之を拒絶し、二、齋藤素巖はじめ彫塑部會員は辭職退會したものと認める」と決議し七月新に會規を制定し、同年十一月東京府美術館に第九回構造社繪畫展を公募して開いた。以後年一回公募展を開催の豫定。（便覽五六頁參照）

〔會員〕市川兼治、伊勢幸平、本間勘次、本間勝太郎、大澤左一、大澤彦六、改井徳寛、神山恒、多比羅榮一、上田重正、倉本七郎、福崎精哉、赤川英雄、足立重興、三村英一、森恒夫（東京府北多摩郡小金井四四八、三村英一方）

國畫院（日）

我が民族精神の精華たる古典の素養に基いた新興藝術の創造を目的として昭和十年九月松岡映丘盟主となつて設立す。事業としては研究所を設けて國畫の技術的教習と學術的攻究とに勉め更に展覽會を開催して盟主同人の作品を發表する。研究所は當分松岡映丘の畫室を開放して之に充て又古典の研究に關しては洋畫家たると彫刻家工藝家たるとを問はず廣く同志を迎へる。又同人の官設展覽會への出品は個々の自由とす。

〔盟主〕松岡映丘 〔同人〕服部有恒

山口蓬春、小村雪岱、吉田秋光、穴山勝室、岩田正巳。狩野光雅、高木保之助、吉村忠夫（東京市小石川區雜司ヶ谷町一二二松岡映丘方）

國風畫會（日）

昭和五年十一月創立。倭繪の進歩發達を圖るを以て目的とす。創立後間もなく同人一同の謹作に係る伊勢物語繪卷を陛下に獻上す。毎月研究會を開き又隨時作品發表を爲す。

〔會頭〕子入江爲守 〔幹事〕岩田豐磨〔會員〕安田靫彦、伊東紅雲、磯田長秋、大坪正義、棚田曉山、津端道彦、川崎小虎、永井幾麻、前田氏實小山榮達、荻生天泉、森村宜稻、公文貞淵、兒玉輝彦（東京市杉並區天沼二丁目三一）

國民美術協會

大正元年、第六回文展洋畫部の出品者懇親會の席上「美術全部門を包容する協會組織」の設立が發議され、翌二年三月創立總會を開催、森林太郎、黒田清輝、岩村透、松岡壽、和田英作の五名が理事となつた。同會は作家並美術關係者を以て組織し、繪畫（日本畫洋畫）、彫塑、建築、裝飾美術、學藝の五部を設置し、藝術家共通の利益擁護並美術の社會的普及を圖るを以て目的とする。既往に於ける主要なる業績は大正年間に於ける

美術團體

美術館建設、美術學校改革、裸體畫取締り、文展工藝部増設等の美術行政上の諸問題に關する政府當局への進言、及數回に亘る佛蘭西及獨逸現代美術展覽會の開催等で、尙前後十二回に亘り本會員の綜合展を開催したが昭和三年以後中止となつた。

〔會頭〕子大河内正敏〔主事〕石井柏亭、太田三郎、加藤靜兒、神矢教親、〔理事〕子大河内正敏、石井柏亭、太田三郎〔主計〕加藤靜兒、神矢教親〔常議員〕石井柏亭、石川確治、太田三郎、加藤靜兒、神矢教親、黒田鵬心、武石弘三郎、前田公篤、坂井義三郎、佐藤功一、島田墨仙、長野宇平太（東京市本郷區湯島切通坂町五一、電話小石川一七七）

異生會（洋）

昭和三年創立。年一回油繪、水彩版畫等に亘る會員の創作を發表す。

〔會員〕五味清吉、前田慶藏、高嶋野十郎、小室孝雄、佐藤醇吉、渡邊光徳（東京市澁野川區澁野川町六八五、渡邊光徳方）

黒色洋畫展（洋）

昭和十年三月結成。「新精神にもとづく純粹藝術の綜合」を目指すといふ。毎月展覽會を開催する。

〔會員〕野原隆平、小野里利信、清

野恒、内山義郎、山本敬輔、山本直武（會期中事務所、東京市銀座紀伊國屋書店美術部）

黒樹社（工）

昭和六年の結成にして、漆藝研究の團體。毎年展覽會を開催する。

〔會員〕大田自適、岡本昇三、高井白陽、松田權六、福澤健一（東京市豊島區池袋二ノ一〇二六、松田權六方）

綵工會（工）

昭和二年四月創立。染色刺繡工藝の發達を計るを目的とし、室内裝飾品及服飾の研究をなす。毎年東京、大阪、京都に於て展覽會を開催し、其他見學、講演、製作等の依頼に應ず。

〔會員〕石田玉英、井下阿木良、井口紀、岩崎眞也、長谷川文平、林雨染、馬場笛山、星流、小合友之助、太田光嶺、長村華城、横山英明、田中初雄、田中貞造、田井修一、村田春祿、中村鵬生、山鹿清華、山崎茶平、安竹聖果、福村健、悟道卯一、駒井宗悅、皆川日華、島田勝四郎、平尾周叟（京都市岡崎北御所町三七山鹿清華方）

三春會（洋）

昭和三年の東美校洋畫科卒業生を以て組織。同十年東京府美術館に第二回展を開く。會員三十五名（東京

市小石川區丸山町二二山村方）

山樹社（日）

吉岡堅二、福田豐四郎、小松均の三名にて組織。昭和十年六月銀座松坂屋にて新日本畫研究會と合同して第二回展を開催す（東京市世田ヶ谷區代田一ノ七六六福田豐四郎方）

燦木社（日）

大正十五年五月創立。東美校圖畫師範科出身の在京日本畫家有志を以て成る。年一回展覽會を開く。

〔會員〕穴山勝堂、山田義雄、東谷桃園、松垣龜夫、新田梨花、小林澄心、福宿一穂、中居良次、藤原芳春、大島正記、伊藤昇。他準會員四名（東京市板橋區中村町三丁目六二二、東谷桃園方）

珊々會（日）

高島屋美術部の主催する日本畫發表の團體。昭和九年十二月第一回展を開催す。〔會員〕西山翠嶂、鍋木清方、菊池契月、西村五雲、松岡映丘、結城素明（東京市日本橋高島屋美術部）

四皓會（洋）

高島屋美術部主催にて年一回四人展を開く。昭和八年第一回展を開催す。〔會員〕藤島武二、滿谷國四郎、

岡田三郎助、和田三造（東京市日本橋高島屋美術部）

時習園（工）

大正九年十一月創立。嶄新なる意匠圖案的創作並に其工藝品への應用を研究するを以て目的とし、年一回作品發表を行ふ。

〔顧問〕中澤岩太〔指導者〕霜島正三郎〔會員〕澤田宗山、稻葉七穂、淺見五郎助、井本米泉、小川文齋、浮田樂徳、中谷小太郎、池田泰山、淺見隆三、米澤蘇峰、井田宣秋、平井香秋、櫻田光可、平野泰三、西澤玉舟、永野金泉（京都市東山區五條橋東四丁目淺見五郎助方）

七弦會（日）

昭和五年創立。毎年一回作品發表をなし、同十年六回を重ねた。平福百穂の歿後速水御舟代つて入會したが、昭和十年逝去の爲、現在會員數六名。〔會員〕鍋木清方、小林古徑、菊池契月、安田靫彦、前田青邨、土田夢徳（東京市日本橋三越美術部）

七人社（圖）

圖案及實用美術の研究を目的として昭和元年創立。毎年一回創作圖案展覽會を三越に於て開催す。又ボスター研究の雜誌「アフィツシュ」を發行す（現在休刊）。〔主宰者〕杉浦非水

〔會員〕岸秀雄、野村昇、新井參夫、關口謙輔、小池巖、金丸重嶺、原萬助、須山浩、田中富吉、毛利滋、小川金重、金田德郎、野依健、前島誠一（東京市澁谷區伊達町一七、杉浦非水方）

漆藝會（工）

明治三十一年東京在住の青年漆工家の希望に依り、日本漆工會の商議員故柴田令哉、故植松包美等七名が發企者となつて日本漆工青年會を創立。久保田鼎初代の會頭に就任す。爾後日本漆工會に從屬して作品發表をなしたが、同四十年より獨立展を開催、四十二年に及び、正木直彦代つて會頭となり、大正七年會名を漆藝會と改む。其後毎年日本橋三越にて展覽會を開催し、大正十五年よりは東京府賞及び補助金を下附せらる。事業として展覽會を開催する外斯道に關する圖書の發刊、講演會の開催、内外の展覽會への會員の製作出品の便宜を計る等の事をなす。

〔會頭〕正木直彦 〔顧問〕都筑幸哉、梅澤隆眞、堆朱楊成、會員四十五名（東京市澁谷區田端町六五三）

漆工藝社（工）

昭和八年太齋春夫、漆膜、漆繪膜、蛇皮漆加工法の研究を完成し、翌年

特許許可を受けたが同年九月小澤秋成を主宰者として同社を結成し事業を起す。漆工の勃興及び建築、家具工藝等各方面に對する漆の進出等に努む。十年十一月東京府美術館に第一回展を開いた。（主宰者）小澤秋成〔會員〕太齋春夫、太田久美、荻原孝一、尾澤勝郎、藤森史郎（東京市王子區豐島町七三二）

靜岡縣美術協會（日、洋、彫工）

地方美術の向上を圖る目的を以て昭和九年十一月靜岡縣に關係ある美術家を以て組織す。年一回靜岡市に於て日、洋、彫、工の四部に互る綜合公募展を開催する。

〔總裁〕靜岡縣知事阿部嘉七（會長）尾崎元次郎（靜岡市江川町一一）

實在工藝美術會（工）

昭和十年十月創立。從來の帝展第四部の鑑賞本位にのみ向ふ傾向に飽き足らずとなし、生産的工藝に新境地を開拓するを目的とする。十一年度春季より公募展開催の豫定。

〔會員〕豐田勝秋、河村喜太郎、吉田源十郎、高村豐周、内藤泰治、山崎覺太郎、丸山不忘、新井謹也、佐藤陽雲、木村和一、廣川松五郎（東京市本郷區駒込林町一五五、高村豐周方）

芝浦工藝會（工）

東京高等工藝學校出身者及び同校關係者を以て組織し、會員相互の親睦を計り併せて本邦工藝の發展に資するを目的とする。〔會長〕安田祿造〔副會長〕鎌田綱壽治 〔幹事〕杉山豐祐、益田森治、星野幸衛。會員一三〇七名（東京市芝區新芝町二、東京高等工藝學校内）

聚工會（工）

昭和八年解散した凸凹會の會員が中心となつて昭和十年六月結成せる工藝各科の作家の集團にして相互の研究をなし、年一回新作品の發表をする。且つ隨時小品展開催の豫定。

〔會員〕磯矢阿俊良、武樋貞波留、田中武雄、多田茂吉、山本達次、宮井連平、三好弘、清水巖、森羅一郎（淺草區向柳原町一ノ一七、多田茂吉方）

下萌會（日）

明治三十二年川合玉堂門下長流畫塾々生によつて組織さる。毎月一回定期研究會を開催し、又隨時展覽會を催す。

〔理事〕長野草風、菊池華秋、松本委水、佐々木尙文、今中素友、兒玉希望、大島佳山、伊藤馨浦（東京市牛込區宮町二九、川合玉堂方）

朱葉會（洋）

大正七年創立。婦人の洋畫研究團體で年一回公募展を開催する。

〔會員〕飯守米子、長谷川春子、土肥正枝、遠山陽子、小寺菊子、大久保百合子、大久保爲世、龜高みよ子、吉田ふじを、谷島豐子、谷貞子、中川幸江、八星三代、秋元松子、木下壽々子、喜多春子、宮崎美喜、鹽川時子、清水信子、平岩夏子、新會員 伊佐エツ子、一木徹子、徳川禮子、高倉孝子、仰木ゲルトロッド、黒瀬雅子、山口葉子、町田典子、櫻井その子、島田鉦子、下田愛子（東京市淀橋區下落合一ノ五四〇、大久保百合子方電話大塚四〇三七）

朱葉會展覽會規則

- 一、展覽會は毎年一回東京にて開催す
- 一、本展覽會は會員及女子洋畫研究者の作品を陳列するものとす
- 一、本會は會員協議の上新會員を推薦することあるべし
- 一、本會々員の出品數は四點以内
- 一、一般搬入者の出品は三點以内
- 一、出品畫の鑑別手数料として一人に就き金壹圓を徴す
- 一、本會々員外の出品畫は總て本會顧問岡田三郎助、安井曾太郎、有島生馬、滿谷國四郎、藤田嗣治諸

氏の鑑別を経たる上にて陳列するものとす、尙優秀作品に對しては褒狀を授くることあるべし

十年社(日)

大正十年度東美校日本畫科卒業生に依り組織。昭和十年五月銀座紀伊國屋にて第一回展を開催した。

〔同人〕池田幸太郎、中井三介、石井喜三郎、野津唯升、石田粧秋、小野路青、畠山錦城、山崎良夫長谷川路可、柳晴一、花村晃觀、松島白虹、中村青以、榎本千花俊、遠藤教三(東京市淀橋區下落合四ノ一六八八、石田粧秋方)

自由學園工藝研究所(工)

自由學園卒業生を以て昭和五年創立す。工藝品の創作並に發表をなし、八年より東京、大阪、名古屋、神戸等に展覽會を開催す。(東京市豊島區雜司ヶ谷六丁目)

春光會(洋)

春陽會、新興美術展の出品者にして、伊藤慶之助の指導下にある洋畫家の集團。昭和九年以降毎年大阪、神戸に展覽會を開催す。會員十七名(兵庫縣武庫郡本山村田中四四五、伊藤慶之助方)

春虹會(日)

昭和十年京都在住の畫家十七名に依つて組織さる。毎年一回東京、大阪の三越に於て展覽會を開催する。

〔會員〕石崎光瑤、西山翠嶂、西村五雲、富田溪仙、堂本印象、小野竹齋、川村曼舟、竹内栖鳳、土田麥僊、中村大三郎、菊池契月、上村松園、宇田荻郎、福田平八郎、柳原紫峰、山口華楊、窠本一洋(東京日本橋三越氣附)

如水遊心畫談會(日)

昭和七年六月創立。如水會員及其の家族を以て組織す。岸浪百艸居を講師として日本文人畫の創意に努む。昭和十年二月第一回觀覽展、催す。會員廿名。(東京市神田區一ツ橋如水會館内)

昭和工藝協會(工)

昭和二年創立。京都在住の各部門の工藝作家三十五名を以て組織し、毎年京都及東京に於て展覽會を開催、昭和十年第七回展を開く。

〔會長〕中澤岩太(總務)村上宇一〔理事長〕澤田宗山(京都市岡崎公園京都市商品陳列館内)

昭和工藝美術展覽會(工)

昭和九年三月創立。舊帝展特選級の作家の集團にして、會員の創作發表、工藝美術の研究等をなす。昭

和九年東京高島屋に於て第一回展を開催し、以後年一回展覽會を開く。

〔會員〕伊藤隆光、二橋美衡、大須賀喬、各務鐵三、香取正彦、吉田醇一郎、高野建夫、信田洋、山本自雄、北原三佳、宮之原謙、三田村自芳(東京市日本橋區高島屋美術部)

昭和美術會(洋)

昭和三年五月結成。會員の自由製作發表、相互研究を目的とす。年一回展覽會を開く。

〔會員〕蘆原曠、平井武雄、小林茂藏、康三、西村久二、野村百合子(東京市赤坂區青山南町六丁目一〇八平井武雄方、電話青山五五七九)

昭和みづゑ會(洋)

水彩畫の振興發達を目的として、昭和十年十月創立。東京其他に於て隨時展覽會、講習會を開催し、現在全国各地に會員、會友併せて七十三名を擁す。主なる會員、山口敏男、桂龍雄、青野馬左奈、中島敏男、水谷金造、野村房雄、中岡恒雄、石野隆、渡邊多平等(横濱市神奈川區岡野町一三一、石野隆方)

上杜會(洋)

昭和二年度東美校洋畫科卒業生に依り組織、年一回展覽會を開く。

〔會員〕林炳東、張秋海、顔水龍、犬丸順衛、池田幸太郎、石井清夫、猪熊弦一郎、植松治郎、荻野映彦、染木照、加山四郎、田村義夫、高橋弘二、瀧澤健三、中西利雄、牛島憲之、矢田清四郎、深井修次、藤岡一、小堀四郎、近藤啓二、小磯良平、水上信雄、島野重之、白井次郎、日高政榮、森寅雄、森達雄、菱田武夫、橋口康雄、高野三三雄、荻須高德、山口長男、太刀川英次郎(東京市豊島區駒込一丁目二八藤岡一方)

新興工藝協會(工)

昭和七年の創立にして、京都在住の各部門の工藝作家を以て組織す。

〔顧問〕清水六兵衛、澤田宗山。會員三十數名。(京都市東山工業試驗所内)

新興美術協會

昭和九年二月創立。學校教育に於ける圖畫、手工、作業科教育の擴充を期し、事業として月刊雜誌「新興美術」を刊行し又全国各地に講習、講演、研究會等を開催す。

〔理事長〕石野隆(東京市豊島區堀内町三〇)

新興美術家協會(油彩、膠彩、彫、工)

昭和十年七月、ホクト社の玉村方久斗、笹川巴流夫、平川清藏、船崎光治郎、院展の大内青圃、木村五郎國畫會の清水多嘉示、大乘美術の大内青坡等の八名が發起者となつて「新興精神に據る諸種の藝術運動」及其の造型藝術作品の發表を目的として同協會を創立。同年十月第一回の公募展を開催す。又春季にも作品發表を行ふ。

昭和十年度同會委員玉村方久斗、笹川巴流夫、平川清藏大内青圃、清水多嘉示、大内青坡、〔協議員〕船崎光治郎（東京市杉並區井荻町二ノ一）

新自然派協會（洋）

昭和十年七月小城基門下によつて創立。新自然主義派の研究發達を期す。年一回同人の作品を發表す。〔主宰〕小城基。同人四十三名。（東京市目黒區中目黒四ノ一四四一）

新時代洋畫展（洋）

昭和九年四月、現行諸大展覽會の鑑審査制度を否定し、左記の同人を以て創設。同展は會員各自の個人展の集合たるの意義を有し、各自は最も自由なる作品を發表する。同年五月以來略毎月一回展覽會を開く。

〔會員〕長谷川三郎、村井正誠、大津田正豐、津田正周、シヤルル・ユグ、矢橋六郎、山口薫（東京市品川區上大崎長者九二七〇、長谷川三郎方）

新造型美術協會（洋）

昭和九年四月「新傾向繪畫」を標榜して獨立美術協會と絶縁せる同志を以て設立。「新超現實主義」の繪畫運動を起す。十年一月東京府美術館に第一回展を開いた。

〔會員〕藤田鶴夫、長谷川善四郎、今井滋、池ノ内篤人、中野政行、内藤外次、成田重文、下郷半雄、島津純一、鈴木綾子、内田慎藏（東京市本郷區弓町一ノ二五、内藤外次方）

晨島社（日）

西村五雲社中にて結成し、日本畫の研究並に發表を目的とする。會員凡そ五十名。（京都市新島丸切通南入、西村五雲方）

新彫塑協會（彫）

昭和十年八月二科會彫塑部の故藤川勇造門下早川鐵一郎（後に脱退）太田三郎、飯島三四二の三會友外九名は、故藤川勇造の藝術的主張を繼ぎ新に同協會を組織、二科會と訣別

して帝展支持の立場を取る事となつた。同會は年一回公募展を開催し併せて海外作家の紹介に努むる由。

〔同人〕飯島三四二、岩田滿平、大川逞一、太田三郎、小田定一、菊池一雄、酒見恒、戸田敬次郎、元野木昇一、中澤安雄、中村米藏、中島武（世田谷區北澤四ノ五〇四、菊池一雄方）

同會第一回展出品規定拔萃

一、本展覽會は何人と雖も自己の製作したる彫塑を出品する事を得但し公開の展覽會に於て未發表のものに限る

一、出品作品は總べて鑑査を行ひたる上陳列す

一、鑑査は本會同人其任に當る

一、陳列作品中卓越なる作品には賞金を贈る

一、出品者は手数料として金五拾錢を本會に納入せらるべし

一、出品作品は必ず本會所定の出品目録及び手数料を添へ昭和十一年五月六日午前九時より午後五時迄の間に上野公園東京府美術館内本會臨時事務所に搬入せらるべし

一、地方出品は豫め五月五日までに目録及上記手数料を添へて所定の運送店に着する様に送附せらるゝを要す（會場宛に發送せられざることを）

一、出品作品は夫々其の裏面に本會所定の出品票に題名、住所、氏名等を明記の上貼附せらるべし

一、出品に對する不慮の損害は本會其責を負はず

一、出品作品の撮影印行の權利は本會是を保留す

新圖案家集團（圖）

昭和九年十一月帝國美術學校圖案科第一、二回卒業生を中心として「生産美術に對する協同的研究を目的」として設立。年一回展覽會を開催す。目下は多摩帝國美術學校工藝圖案科會の中心たらしむ可く會則改定中。

〔顧問〕杉浦非水、金須孝、金九重嶺。會員八名。（東京市目黒區下目黒四ノ九七四、江坂實方）

新東京漫畫團（漫）

昭和十年九月創立。漫畫の向上を期し、創作研究の傍ジャーナリズムにも進出す。月一回團報發行。

〔主幹〕長充喜朗天（東京市下谷區下根岸町八六番地）

新燈社（洋）

大正十一年創設。同會の趣旨は「洋畫の研究より進んで我國の新美術として價值ある新日本畫を創作」せん

とするにある。創立以來毎年東京及大阪に公募展を開催し、昭和十年第十三回展に及ぶ。

〔主宰〕青木大乗 〔同人〕北村種三 三井文二、山田兵一、沖中賢吾 〔大阪市天王寺區勝山通一ノ五四〕

新美術家協會(洋)

昭和四年設立された鉦人社の同六年改稱せるもので、現在の會員の大部分は二科の會友及出品者である。年一回東京府美術館に同人展を開く。昭和十年春第七回展を開いた。

〔會員〕田村孝之助、宮本三郎、田崎廣助、中村三樹男、栗原信、新海覺雄、田中忠雄、清水刀根、古家新、荒井一郎、早川國彦、近藤光紀、高田力藏、藤井二郎、伊藤繼郎、吉井淳二、田邊三重松、金子博信、中村善策、松本弘二、山本直治、酒井亮吉、高橋庸男、酒本博示、中村節也、内田巖〔東京市淀橋區下落合四ノ二〇八〇、新海方〕

清光會(日、洋、彫)

昭和八年四月創立。日本畫、洋畫家の綜合團體にして、毎年春季東京と大阪に於て展覽會を開く。

〔會員〕小林古徑、安田靫彦、土田麥僊、梅原龍三郎、安井曾太郎、坂本繁二郎、佐藤朝山、高村光太郎〔責任者〕後藤眞太郎〔東京市淀橋區下落合七三五〕

青松會(日)

東西の日本畫家十五名を以て創立。昭和十年第一回展を催す。

〔會員〕伊東深水、服部有恆、堂本印象、徳岡神泉、金島桂華、中村大三郎、中村岳陵、宇田荻郎、矢野橋村、山口蓬春、山口華楊、窠本一洋、福田平八郎、兒玉希望、廣島晃甫〔大阪松坂屋內〕

青々會(日)

昭和七年二月結成。會員の自由製作發表の機關。毎年初夏東京美術俱樂部にて展覽會を開く。

〔會員〕伊東深水、服部有恆、根上富治、山口蓬春、兒玉希望、廣島晃甫〔東京市下谷區谷中初音町二ノ一五、兒玉希望方〕

青莪會(日)

大正十年創立。會員は水田竹園門下で、毎月研究會を開催し又年一回展覽會を開く。

〔會長〕水田竹園〔會員〕七十七名

〔京都市御幸町三條下ル〕

全關西洋畫協會(洋)

全關西洋畫界の綜合展開催を目的として設立。昭和二年より毎年大阪中之島朝日會館で公募展を開催す。

〔會員〕古家新、伊庭傳次郎、黒田重太郎、松本銳二、田川寛一、渡邊造酒三、早川國彦、石丸一、小出卓二、鍋井克之、高岡徳太郎、横井禮市、濱田葆光、岩崎重雄、國枝金三、錦義一郎、田村孝之介、山本直治、伊谷賢藏、小磯良平、向井潤吉、小野藤一郎、塚口正一 〔大阪市南區西振町六、國枝金三方〕

染織刺繍作家協會(工)

染色、織物、刺繍の研究を目的として昭和三年創立。展覽會を開く。

〔常務委員〕山形約太郎、齋藤五百枝、木村和一、大槻一雄、遠藤順治 〔東京市赤坂區青山南町三ノ二六、大槻一雄方〕

梳風會(日)

島崎柳塲の栩々亭畫塾門下一同によつて組織され、大正二年以來隨時會員の作品展覧を行つて居る。

〔會長〕島崎柳塲〔幹事〕清田柳莊、木島柳鴈、石川綠雨、高橋樵塲、

仲村眞齋〔東京市荒川區日暮里町九丁目一二四〕

創工社(工)

大阪在住の工藝家を以て昭和四年に結成した無絃社は同年八月解消に及んだが、元同人有志が相寄つて同年十一月創工社を結成した。同社の趣旨は優れた美的價値を獲得しつつ同時に産業工藝に力強い示唆を與へ得るが如き一品製作工藝の意義と權威を確立するにある。隨時研究會展覽會等を開催す。

〔顧問〕白川朋吉 〔會員〕今井千尋、羽原秋芳、中條義男、川口虚舟、橋外波、田邊小竹雲齋、津田禎二、根箭忠雄、山本竹龍齋、山本立軒、深田光馬、福岡萍哉、福田作次郎、越田尾山、會田裕宣、阪口宗雲齋、平松宏春、森田誠之助、杉田禾堂 〔客員〕入江來布〔代表者〕柴崎風岬 〔大阪市住吉區住吉町一〇〇、汎工藝社內〕

草芽會(工)

京都高等工藝學校圖案科卒業生有志を以て昭和八年組織せる各種工藝の研究團體で同年東京に於て第一回展を催した。

〔同人〕川那部澄、塚本繁、赤澤鉞

太郎、峯親吉、加藤八洲男、今井重季、宮永友雄（京都市東山區山科竹花、塚本方、電話山科二一五）

蒼原會（洋）

大正十一年小山周次の勧告に基き日本水彩畫會假研究所の小山良修、富田道雄、中西利雄等に依つて設立された東京三脚會を同十三年改稱せるもので水彩畫專門の研究團體である。在京本部會員三十八名。地方會員二十名。他に各地方に支部を設く。（東京市神田區淡路町二ノ一一、水谷景房方、電話神田七四九）

蒼淵社（工）

昭和十年九月京都在住の各種の新進工藝家を以て組織す。發會に際し「われわれは過渡期の工藝家氣質を清算し内面的に工藝の水準を高め飽くまで純真明朗に行動する」と宣言した。懇話會見學等を催し新古工藝美術の研究に努め又展覽會を開く。

〔同人〕井下阿木良、井上彦之助、今大路長光、伊東翠壺、香浦省吾、堂本五三郎、小合友之助、河合榮之助、米澤蘇峰、田中貞造、中村鵬生、魚野自醒、浮田樂德、黒井光珉、楠田撫泉、迎田嘉亭、近藤悠三、清水正太郎、岸本景春、皆川月華、清水祥次、森野嘉光、鈴木貞路（京都市上京區中野丸太町

上ル）

造形文化協會

昭和九年四月創立。美術批評家を以て組織す。美術批評の研究並に實踐を中心として造形一般の文化的事業を行ふ。〔會員〕横川毅一郎、荒城季夫、大島隆一、尾川多計、佐波甫〔顧問〕森田龜之助、外特素心庵（東京市中野區本町通六ノ一八、大島隆一方）

大東會（日、洋）

昭和十年創立。全國初中等學校の圖畫教育關係者の描畫技能の向上及び中央畫壇への進出を目的として毎年秋季に公募展を開催する。〔會長〕林毅陸〔常任理事〕浦崎永錫

一、出品人は在職教員並に美術關係者に限る

一、且て公展に發表したる作品は出品することを得ず

一、一人の出品點數は五點迄とす

一、出品料は一人に付金二圓とす。（王様商會藝術部の額様を利用し一人三點出品さるゝ場合は上記二圓の外一圓五十錢加算して送附せらるべし）

一、出品畫は洋畫、日本畫とす（洋畫は油畫、水彩、版畫、素描、パ

ステル、マンセル、クレイヨン等）

一、出品畫の裏面には畫題、氏名を明記し本會規定の出品目録及出品料を添へて搬入せらるべし

一、出品畫の大きさ限度は油繪日本畫は六十號大（四尺三寸、三尺二寸）以内とし、水彩畫類はデビット・コックス全紙大（二尺五寸、一尺九寸）以内とす

一、〔十年度審査員〕石井柏亭、石川寅治、伊原宇三郎、和田三造、熊岡美彦、權藤種男、寺内萬治郎、結城素明（東京市豊島區堀之内町三〇、新興美術協會内）

大日本體育藝術協會

體育に關する美術建築音楽及び文學の普及發達を目的とす。昭和七年第十回國際オリムピック大會藝術競技に参加す。〔會長〕男森村市左衛門〔顧問〕男山川建、岩原拓

〔審査員〕（日本畫）川崎小虎、鍋本清方、野田九浦、矢澤弦月、松岡映丘、結城素明（西洋畫）東郷青兒

和田三造、金山平三、中村研一、牧野虎雄、藤田嗣治、小杉放庵、安井曾太郎、南薫造（版畫）石井鶴三、猪熊弦一郎、裕伊之助、田邊至、山本鼎、小磯良平（彫彫塑）

池田勇八、藤井浩祐、北村西望、日名子實三（工藝）豐田勝秋、高

村豐周（建築）土浦龜城、小林政一、佐野利器、佐藤武夫、岸田日出刀（寫眞）成澤金兵衛（音楽）信時潔、山田耕作、諸井三郎（東京市麹町區丸ノ内、丸ノ内ビルディング三七七、大日本體育協會内）

大日本窯業協會（工）

明治二十五年創立、社團法人組織。本邦窯業の進歩發達を圖るを以て目的とし、事業として雜誌圖書の發行講演會、講習會の開催、調査、建議公共事業の助長等をなす。毎年一回四月に總會を開催す。京都、大阪、名古屋、九州八幡等に支部を設く。〔會頭〕伯金子堅太郎〔理事長〕梅田晉五郎〔理事〕飯塚誠厚、伊藤亮、熊澤治郎吉、倉田昌修、近藤清治、永井彰一郎、原田直道、不破橋三〔常議員〕六十四名（東京市京橋區銀座西四丁目五ノ六號、銀座商館第四階、電話京橋五五一九）

太平洋畫會（洋、彫）

明治二十二年創立の明治美術會を同卅四年大改革して其組織を一新し翌年一月太平洋畫會と改稱第一回展を上野公園第五號館に開催した。爾來略年一回公募展覽會を開き昭和十三年二月第三十一回展を催した。明治三十七年下谷區谷中清水町に洋畫研究所を開設、洋畫、彫刻の指導をし

たが、昭和四年研究所を太平洋美術學校と改稱、同九年東京府の認可を受けた。昭和七年四月上野松坂屋に創立三十年記念展を開催した。

〔會員〕淺井眞、蘆原曠、府川道徳、布施信太郎、早川國彦、堀進二、池田永一治、石井柏亭、石川寅治、伊藤成一、石橋美三郎、龜高文子、金子保、鹿子木孟郎、河合新藏、小宮宗太郎、桑重儀一、丸山晚霞、三上知治、滿谷國四郎、光安浩行、間所一郎、永地秀太、中村不折、中野桂樹、岡精一、奥瀬英三、小野田元興、齋藤俊雄、佐々貴義雄、澁谷榮太郎、菅谷元三郎、新海覺雄、澤田晴廣、清水刀根、佐藤三郎、末長護、高橋虎之助、高村眞夫、多々羅義雄、都島英喜、鶴田吾郎、田原輝夫、佃武昭、渡部審也、渡邊正太郎、若山爲三、吉田ふじを、山下繁雄〔昭和十年度新入會員〕藤坂太郎、飯田實、北島吾次平、前田眞一、松本金三郎、野田半三、大沼靜巖、清水敦次郎〔會友〕三十二名（東京市下谷區谷中眞島町一、電話下谷一七九二）

第一美術協會（洋、彫）

昭和四年の創立にして毎年初夏、洋畫及彫刻の公募展を開催す。昭和十年六月第七回展を開く。〔會員〕濱地清松、林明善、河越虎之進、栗原

忠二、三國久、御厨純一、中原實、佐藤哲三郎、鈴木巖、吉田久繼、吉澤廉三郎〔會友〕十九名（東京市澁野川區田端町四五五、三國久方）

第三部會（彫）

昭和十年六月、舊帝展第三部無鑑査級有志は「帝院改組は全然誤れる措置」なりとして、帝展不開催新帝院解散等を要望する旨聲明したが、其の趣旨から反帝展を標榜して同七月下記の人々が同會を結成した。所謂展覽會むきのものを見せるよりも常に作りつゝあるものをすべてさらけ出した方が「好い」との意味で個展の集合形式を取り、同年十月公募の第一回展を開いた。

〔會員〕石川確治、池田勇八、畑正吉、小倉右一郎、開發芳光、吉田久繼、上田直次、日名子實三（東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇）石川確治方、電話下谷八四六六

淡交會（日）

大正十三年三越の主催で會員の新作展観を目的として創立。同年第一回展を開き昭和十年第九回展に及ぶ。創立當初の會員中小堀鞆音、下村觀山、山元春舉の三名は物故し現在の會員は川合玉堂、竹内栖鳳、横山大觀の三名である。（東京市日本

橋區室町三越内）

知書社（工）

昭和六年一月故植松包美社中に依り組織さる。同七年夏第一回社中展を開催す。會員五十名。（假事務所東京市江戸川區小岩町七ノ一一五、吉田方）

筑前美術會（日、洋、彫）

福岡縣出身作家の親睦と鞭撻を期し、昭和八年二月發會、帝展及其他有力の展覽會に三回以上入選せる者を以て會員とす。十年六月東京に於て第三回展を開催。〔顧問〕山崎朝雲和田三造（東京市澁谷區幡ヶ谷本町一ノ四八今中素友方）

中央美術會（日、洋）

大正四年以來雜誌「中央美術」を刊行、昭和四年一時休刊したが、同八年復興第一號を發行し現在に及ぶ。年一回同會主催にて日本畫、洋畫の公募展を開く。（東京市豊島區長崎南町一ノ一九四〇、田口掬汀方）

朝鮮南畫院（日）

久保田南天を中心として大正三年創設されたもので、現在では全鮮に六百餘名の會員を擁して毎年展覽會を開催し、昭和十年十月京城に於て第

十八回展を開いた。（京城府並木町二四）

チンジェ 沈蘭留（彫）

東美校彫刻科製造部の卒業生に依つて昭和二年發會、六年より毎春作品展を開く。〔同人〕長谷川正雄、林是、大須賀力、奥田勝、黒田喜治、佐土哲二、喜田三五、三木凱歌（東京市目黒區自由ヶ丘二二七、林是内）

圖案家協會

大正十一年創立。京都在住の圖案家を以て結成。斯道の發展及共同の利便増進を目的とし、随時講演會、見學、研究會、展覽會等を催す。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕澤田宗山、山鹿清華、田村春曉、落合萬水、狩野秀峰、福岡玉偶。正會員百六十五名（京都市伏見區桃山町宗和園、澤田宗山方）

帝國工藝會（工）

大正十五年七月創立。本邦工藝の産業化並其の進歩發達を圖るを目的とし、事業として生産業者、販賣業者、美術工藝家に科學者の聯絡提携に努め、産業工藝の情況を調査研究し、又地方特産工藝品の改良並に販賣の紹介等をなす。毎月雜誌「帝國工藝」を發刊す。〔會長〕男阪谷芳

郎〔副會長〕鶴見左吉雄〔顧問〕金子堅太郎、伯牧野伸顯、伯清浦奎吾〔理事〕安田祿造、和田嘉衡、日野厚、宮下孝雄〔東京市芝區新芝町七、東京高等工藝學校内〕

斗南社(洋)

昭和十年度東美校油繪科の卒業生を以て結成す。隨時展覽會を開く。會員十名。(東京市淀橋區下落合一ノ四三五、井手坊也方)

等進會(洋)

大正十二年度東美校洋畫科出身者を以て組織する。東京に於ける展覽會開催八回に及ぶ。〔會員〕一木隼二郎、飯守好雄、大海清三、小野藤一郎、長屋勇、窪田照三、松本銳二郎、小平正彦、三田康、三谷浩二、光石藤太、鈴木誠、鈴木啓二〔東京市澁谷區松濤町二五、一木隼二郎方〕

稻花會(工)

大正十一年赤塚自得の社中を以て組織す。相互の親睦並向上を目的とし、漆工藝をあらゆる方面より研究せんとする。昭和十年東京に第二回展を、大阪に第一回展を開催した。

〔會員〕三田村自芳、魚野自醒、太田自適、久慈自然、横越自入、岡本昇三、石川古堂、關聰雨、井澤靈山

辻喜一郎、月尾慶水、金井正之、村田義忠、吉岡郁三、南忠、池田自勝、小澤裕、工藤嘉代志、土方吉雄〔顧問〕赤塚自得〔東京市芝區濱松町一ノ九、赤塚工房内〕

東海美術協會

明治四十三年創立。美術及び美術工藝の振興を圖るを以て目的とし、會内に東洋畫、洋畫、彫塑、工藝の四部を置き、毎年同協會展を開催の傍、帝展への出品の獎勵並に之に關する各種の事務の取扱、研究會、講演會の開催をなす。昭和十年第廿五回展を開く。

〔會頭〕伊藤次郎左衛門〔副會頭〕岡谷惣助、菅原省三〔正會員〕〔東洋畫〕六十一名〔洋畫〕十五名〔彫塑〕一名〔工藝〕一名〔名古屋市中區新榮町陸ビル愛知縣商品陳列所内〕

東京鑄金會(工)

明治三十六年の創立にして主として東京在住の鑄金家を以て組織し毎年秋季、展覽會を開催する。昭和十年十月日本橋三越に於て第二十五回展を開催した。

〔顧問〕大島如雲、和泉整乘〔幹事〕香取秀真、渡邊長男、佐々木象堂、山本安藝、香取正彦〔東京市下谷

區谷中眞島町一ノ一號)

東京みづゑ會(洋)

水繪の研究並に普及を目的として昭和二年春創立。寫生會、作品批評會等を行ひ、昭和十年第七回展を開催す。〔總務〕佐藤平太郎〔會員〕三十二名〔東京市淀橋區下落合三ノ一七二七、佐藤平太郎方〕

東光會(洋)

昭和七年、舊帝展第二部出品者たる橋本八百二、堀田清治、岡見富雄、高間惣七、熊岡美彦、齋藤與里の六名に依り結成さる。八年二月東京府美術館に第一回展を開催、以來毎年春季に公募展を開き昭和十年十月〔同年は春秋〕第四回展を開催した。會員は前記六名の外渡邊浩三、國部晋、野口謙藏、胡桃澤源一、小早川篤四郎、佐藤章、水船三洋の十三名。〔東京市淀橋區戸塚二ノ一一二〕

東漆苑(工)

漆藝の研究と作品發表を目的として昭和九年創立。年一回展覽會を開催する外、同人の作品を常備展觀し且つ同人の製作を内外の博覽會及び展覽會に出品する爲の便宜を圖る。

〔同人〕石井青士、横越自入、高山光明、田島耕太郎、村田義忠、船本汀、古山英司、佐藤紫川、三田

村自芳、守屋松亭〔東京市板橋區中村町一ノ八七八、守屋方〕

東瀛邦畫會(日)

大正十四年舊池畔俱樂部の組織を擴張し、在京の東美校日本畫科出身者を網羅して設立す。同年第一回展を開き、以來引き続き展覽會を開催して昭和十年第十回展に及ぶ。

〔會長〕結城素明〔副會長〕松岡映丘、〔名譽會員〕渡邊香涯、川合玉堂、横山大觀、正木直彦、木村武山、溝口順次郎、島田佳矣、鈴川信一〔會員〕二百四十名〔東京市芝區金杉濱町六八狩野探道方〕

東潮會(日)

横濱在住の院展出品者を以て組織せる津登比會を昭和八年解散し、九年舊同人に新たに神奈川県在住の帝展作家が加入して同會を設立した。十年同市に於て第一回展を開く。

〔會長〕栗原清一〔幹事〕飯田九一、中島清、中庭煥華、並木瑞穂、牛田雞村、小島一谿、新井勝利、水野陽翠〔會員〕木下春、山下日出子、鈴木鳥心、高橋万年、藤井白映、長谷川路可、座間素賢、片岡球子、中島保、冬木大丙、加藤淘綾、吉川朝衣、關曜明〔横濱市中區本牧三ノ谷一三七、新井勝利方〕

東陶會(工)

昭和四年設立、陶藝作家の團體にして年一回展覽會を開催す。〔顧問〕板谷波山、宮川香山、沼田一雅〔會員〕板谷梅樹、井高富美、井上良齋、長谷川怒、埴好、星野國太郎、土肥刀泉、大森光彦、小川雄平、唐杉榮四、各務鐵三、川本素仙、横山朝陽、竹内蘭山、田中作太郎、武藤太郎、安原喜明、小柳今朝一、古宇田正雄、湯山青崖、水野喜作、宮之原謙、清水素陶(東京市中野區川添町一、大森光彦方電話中野五八三五)

東土會(彫)

昭和六年十二月發會。東京生れの東美校彫刻科出身者にして舊帝展に出品せる者を以て組織し、隨時作品展を催す。〔會員〕淺岡重治、安藤秀吉、大須賀力、大橋清、金田豐、木内五郎、黒田嘉治、後藤光行、後藤良、杉浦藤太郎、杉本三郎、明珍勝友、安一、安田周三郎、吉田久繼、武田榮。(東京市本郷區駒込神明町三四一、後藤良方)

東邦彫塑院(彫)

昭和十年六月廿二日、舊帝展審査員級の長谷川榮作、加藤顯清、吉田久繼、國方林三、山根八春、後藤良

雨宮治郎、北村正信、關野聖雲等の九名に依り結成。同院は大體新帝院支持の立場にあるが、新帝院の「隔年制」彫刻二部制には反對の意を表明して居る。同年十一月東京府美術館に第一回公募展を開催した。

〔理事〕長谷川榮作、國方林三、北村正信、關野聖雲〔會員〕一色五郎、羽下修三、橋本朝秀、服部仁郎、新田藤太郎、富永朝堂、岡本金一郎、大須賀力、加藤顯清、田村審火、中島東洋、畝村直久、黒田嘉治、山根八春、梁川剛一、牧俊高、後藤良、雨宮治郎、安達貴一、赤堀信平、安一柴田正重、毛利教武、森大造、森山朝光、杉浦藤太郎(杉並區永福町四〇五、雨宮治郎方)

同院展覽會規定拔萃

- 一、出品は鑑査を経たるものに限り之を陳列す、但し會員の出品は鑑査外とす
- 一、一人の出品は二點以内とす
- 一、左に掲ぐるものは出品することを得ず
- イ、製作後三ヶ年以上を経たる物
- ロ、一度公開したるもの
- ハ、風致に害ありと認むるもの
- 一、出品は作品一點に付金一圓の手数料を受く、既納の手数料は何等の事由あるも之を還付せず、出品

を受理したる時は直に受領證を交付す、作品には一點毎に命題及出品人の氏名を記したる紙片を貼付すべし

一、出品の鑑査及審査は常議員之を行ふ

一、本會は卓絶せる出品作に對し賞を授く

踏青會(日)

高島屋美術部の主催する日本畫發表機關。昭和十年四月第一回展を開いた。〔會員〕富田溪仙、大智勝觀、横山大觀、安田靉彦、前田青邨、小林古徑、柳原紫峰、小川芋錢、鍋木清方、村上華岳、矢野橋村、福田平八郎、小杉放庵(東京市日本橋區高島屋美術部)

童寶美術院

昭和六年創立。童心を表現し、童心を啓發し得る様な藝術作品の向上普及を目的とし、毎年一回繪畫、彫刻、工藝、人形玩具等の各科に互る公募展を開催して居る。昭和十年第五回展を開いた。〔同人〕石井柏亭、笹川臨風、西澤笛畝、服部愿夫、山田徳兵衛、山本鼎、和田英作〔代表幹事〕西澤笛畝、山田徳兵衛

(東京市淺草區淺草橋一ノ三)

同院展覽會規則拔萃

一、本會の定期開設は毎年一回とし會期、會場、取扱場所及出品物搬出入に關する細規等は其の都度發表す

一、本會出品物を左の種類とす

イ、人形

ロ、玩具

ハ、繪畫(日本畫、西洋畫、版畫)

彫刻(木彫、塑像、ブロンズ)

工藝品(人形、玩具又は等に關係あるものを題材とせるもの)

一、本會は何人と雖出品することを

得

一、出品の寸法及點數に制限を附せずと雖、必らず新發表の作品たること

一、出品物は總て賣品とす

一、出品物は審査委員鑑別の上之を陳列す、但し本院同人、賛助員並に「年度推薦出品者」の出品に限り無鑑査とす

一、出品物は審査の上、優秀と認めたるものに對し授賞す

一、審査委員は本院同人及斯界の權威者中より其の都度囑託し毎年開催約一ヶ月前に於て發表す

童林社(洋)

童林社(洋)

昭和六年度東美校西洋畫科入學者を以て組織す。昭和十年東京府美術

館に於て第三回展を開いた。會員四十一名。(東京市下谷區谷中清水町一、岩田榮方)

讀畫會(日)

荒木寛畝を主宰として明治四十年設立さる。寛畝の歿後は十畝を會長とし、毎春展覧會を開催、昭和十年回を重ねる事二十八回に及ぶ。(東京市豊島區長崎町一ノ一八三、荒木十畝方)

栃木縣美術協會(洋)

栃木縣在住並出身者の結成する洋畫團體として昭和十年十一月宇都宮市に於て第一回展を開催す。會員十二名。(栃木縣鹿沼町下材木町、吉村勇方。東京市淺草區馬道町二ノ五、文挾勝方)

巴會(日)

故寺崎廣業の門下にて舊帝展所屬の九名を以て組織す。昭和八年新宿ほてい屋にて第一回展を開く。

〔會員〕野田九浦、矢澤弦月、吉田秋光、水上泰生、菊澤武江、鹽崎逸陵、伊藤龍涯、岡部光邦、町田曲江、角田經谷 (東京市本郷區駒込東片町三〇、鹽崎逸陵方)

奈良美術家聯盟(洋)

主として奈良在住の帝展、二科、獨立等の出品者を以て結成する洋畫研究の團體。昭和十年秋同市に於て第一回展を開催す。以後毎年春季大阪に、秋季奈良にて展覧會開催の筈。會員十四名(奈良市大佛殿裏、田中修方)

奈良洋畫會(洋)

奈良縣美術家の指導養成を目的とし昭和七年創立。毎年五月に公募展八月に洋畫講習會を開催す。

〔會員〕若山爲三、飯田衛、笠松春彦、武若武作、曾根靖雅(奈良市上高畑町若山爲三方)

南畫鑑賞會(日)

昭和七年創立。南畫の普及を計るを目的とし、會員は男女年齢の別なく、通信教授に依り習畫す。隨時會員の習畫展を開催す。

〔會長〕小室翠雲(東京市麹町區中六番町四〇、小室翠雲方)

日本インターナショナル建築會(建)

昭和二年七月創立。「各國建築家と提携して建築に關する總べての研究をなし、現代日本に最も適合する建築を完成せんとするものなり。」昭和四年雜誌「インターナショナル建築」

を發刊す。隨時展覧會、講演會を開き又毎月會員の例會を開催す。

〔會員〕本野精吾、伊藤正文、中尾保、中西六郎、新各種夫、本多正道、上野伊三郎、竹内芳太郎(京都市等持院北町五八、上野伊三郎方)

日本畫會(日)

明治三十年創立。日本畫の發達獎勵を目的とし毎春展覧會を開催す。

〔會頭〕南弘 〔顧問〕川合玉堂、鍋木清方、松岡映丘、松林桂月、小室翠雲、荒木十畝、結城素明 〔評議員〕伊東紅雲、伊東深水、磯田長秋、池上秀畝、西澤笛畝、荻生天泉、川崎小虎、勝田蕉琴、吉田秋光、吉村忠夫、永田春水、野田九浦、矢澤弦月、山口蓬春、町田曲江、松本姿水、福田浩湖、水上泰生、島田墨仙、飛田周山 〔會員〕百十八名 〔客員〕六十一名(東京市麹町區中六番町五四電話九段三七五四)

日本工藝美術會(工)

大正十五年創立。流派の新古、様式の東西を問はず、あらゆる工藝の作家、鑑賞家、評論家を以て組織せる綜合團體にして、毎年一回展覧會を開催する外、工藝美術の社會的施設に關する建言をなし、又その實現に努める。(常務委員)豊田勝秋、高

村豐周、津田信夫、赤塚自得、廣川松五郎(東京市下谷區谷中眞島町一ノ一號)

日本挿畫院(挿)

昭和十年設立。挿畫版權確立運動挿畫展開催等をなす。〔同人〕齋藤五百枝、細木原青起、小田富綱、山六郎、加藤まさを(東京市小石川區久野町八六、加藤まさを方電話小石川四二八二)

日本挿畫家協會(挿)

昭和三年創立。挿畫界の向上發展を期し、會員の權利擁護、相互扶助新人紹介、作品發表等を主なる目的とす。〔委員〕岩田專太郎、井上洗屋石井滴水、林唯一、細木原青起、田中良、武井武雄、海野精光、近藤紫雲、齋崎英朋 〔會員〕七十三名(東京市麻布區絆町一八〇海野方)

日本自由畫壇(日)

大正八年京都の青年作家に依り設立。毎年公募展を開催す。〔同人〕上田萬秋、廣田百豊、渡邊公觀、玉舎春輝、西井敬岳、林文塘、久保飛路史(京都市烏丸通水上ル西、廣田百豊方)

日本商業美術協會

大正十五年設立の商業美術家協會を改組して昭和九年現稱に改む。健實なる商業美術の發達普及を目的とし、事業として舊協會の創立以來商業美術展、講習會、講演會等の開催圖書出版等をなす。毎月機關紙「商業美術」を發刊、又研究所を經營す。

〔會長〕濱田増治 〔理事〕古田達賢 仲田定之助、田野郁温、伊藤豊、稻垣知雄。他會員百七名（東京市淀橋區戸塚町四丁目八四二、濱田増治方電話牛込六三二七）

日本漆工會（工）

明治二十三年小川松民、柴田是真川邊一朝、池田泰真、白山松哉、田邊源助等二十四名の發企によりて設立。品川彌次郎初代會頭となる。爾來隔年に漆工競技會を開催し、大正十一年迄に十六回を重ねた。而して十二年の震災後同展は一時其開催を休止したが、昭和九年三月より新に現代漆藝品展覽會の名稱の下に全國漆藝展を開催するに至つた。同會は日本特有の漆繪並に漆に關する一切の傳統保存と進歩發達を計るを主旨とし、事業として漆並に漆工業に關する諸般の施設調査及技術上の研究、漆樹栽培の奨励及其生産調査、斯道に關する圖書標本類の蒐集、講演會開催等をなす。毎月雜誌「漆と

工藝」を刊行す。〔會頭〕正木直彦 〔理事長〕手塚千代吉 〔理事〕澤口悟一、吉野富雄、都筑幸哉（東京市神田區鍛冶町一六ノ二）

日本水彩畫會（洋）

故天下藤次郎、丸山晚霞、河合新藏の三人の經營せる日本水彩畫會研究所を大正二年四月石井柏亭、石川欽一郎、戸張孤雁等三十七名の發起に依り、改組擴張して新に各派水彩畫家の綜合集團として設立。爾來毎年一回公募展を開催し今日に及ぶ。

〔顧問〕石井柏亭、石川欽一郎、丸山晚霞、眞野紀太郎、南薫造、中澤弘光、白瀧幾之助〔會員〕百十二名（東京市本郷區湯島天神町三ノ二）

日本圖畫手工協會

昭和六年一月設立。主として中等學校の圖畫手工科並作業科の教職員を以て組織し、技能科教育の振興、同科教員の地位擁護及び向上を目的とし、事業として同教育に關する研究調査、展覽會の開催、各地講習會展覽會等に於ける援助、同科教員の人事斡旋、圖書雜誌の出版等をなす。〔會頭〕伯平田榮二（東京市麻布區東町四〇、三尾與喜藏方）

日本畫家協會

昭和二年創立。童畫の向上發達、著作權の擁護等を目的とし、展覽會出版等をなす。〔會員〕初山滋、川上四郎、武井武雄、深澤省三、清水良雄。他會友四名（東京市豐島區池袋二ノ一〇二一、武井武雄方）

日本南畫院（日）

大正十年十月創立。南宗畫の發達を目的とし、毎年展覽會を開催し、昭和十年第十四回展に及ぶ。

〔同人〕小室翠雲、矢野橋村、水田硯山、赤松雲嶺、白倉二峰、岡田晴峰、河野秋邨、人見少華、石川寒巖、水田竹園、田中咄哉州、幸松春浦、矢野鐵山、横尾翠田、安田半圃、岸浪百輝居、水越松南、福田浩湖〔客員〕島田墨仙、古川北華、山口玄珠、喜多班山〔院友〕六十名（東京市麹町區中六番町四〇）小室翠雲方電話九段六二〇）

日本人形社（工）

純真なる人形藝術の向上發達を圖るを目的とし、昭和十年七月創立。

〔顧問〕西澤笛畝、有坂與太郎、笹川臨風（東京市下谷區上野櫻木町五四）

日本版畫協會

大正七年設立の日本創作版畫協會の後身で昭和六年一月内容を擴張し

作家、研究家、蒐集家等を含む版畫家の綜合團體に組織を改めた。毎年一回會員の作品發表をなす外、國際的版畫展、研究的展覧等を催し、版畫の社會的普及に努む。

〔會長〕岡田三郎助 〔副會長〕山本鼎 〔常任理事〕前川千帆、思地孝四郎、旭正秀、清宮彬、平塚運一、古川龍生、逸見享、山口進、深澤索一〔會員〕七十名（東京市澁谷區區代々木山谷町三一六、前川千帆方）

日本バステル畫會

矢崎千代二に就いてバステル畫の指導を受けた人々が主となり昭和三年八月設立せるもの、毎月研究會を開き、年一回又は二回作品展を開いて居る。（東京市神田區表神保町二、文房堂内）

日本壁畫家協會（洋）

昭和十年十月、寺崎武男、濱田増治を顧問として、橋本徹郎、猪子斗示、其他二科展の新人を以て組織す。（東京市日本橋區江戶橋二ノ四）

日本壁畫院

壁畫藝術の研究並發表を目的とし昭和十年十一月結成す。〔同人〕井上三綱、大井基光、安田豊、圓城寺昇、武野光瑠、安藤信哉（中野區昭通

二ノ三〇、大井方)

日本漫畫會

大正二、三年頃當時の都下新聞社在勤畫家の紙上藝術に飽き足らず、展覽會開催を發企したのが同會結成の起源で、現在はジャーナリスト以外の青年漫畫家を擁して年一回展覽會を開催する。

〔會員〕池田永一治、池部鈞、牛島一、江島初喜、岡本一平、小野佐世男、大森弓磨、帷子進、加藤みの助、京尾金介、北澤樂天、幸内純一、小林克己、小峰三四郎、近藤日出造、阪本牙城、清水勘一、志村和男、杉浦幸雄、杉田三太郎、田中比左良、田邊路平、名越國三郎、中村一朗、服部亮英、代田收一、細木原青起、前川千帆、水島爾保布、宮尾しげを、三宅當也、村上鐵太郎、森火山、森島直造、森山三郎、安本亮一、山本李兵衛、矢崎茂四、和田邦坊、富山まもる、生澤朗、澁谷三止朗(東京市中野區本町通四ノ一七、牛島一、刀方)

日本木彫會(彫)

内藤伸の主唱により大正十三年設立された木彫研究會と其の姉妹會たる木生會とを合併して昭和六年春結成。木彫藝術の研究、發表を目的とし、毎年東京乃至大阪に於て制作展

を開く。

〔幹事會務員〕内藤伸、佐々木大樹、三木宗策、澤田晴廣、中野桂樹、三國慶一、西村雅之〔會員〕佐崎霞村、木村威夫、橋本高昇、森野圓象、阿井瑞岑、佐伯量良、井口喜夫、西田明史、本田德義、大嶋駒藏、山助敏男、山口四郎、清水源可、平澤信男、工藤敬三。外會友十七名(東京市王子區上十條一二三七澤田晴廣方)

ねばつち社(彫)

昭和九年度の東美校彫刻科製造部の出身者を以て組織す。彫塑研究並發表をなす。〔賛助員〕北村西望、建昌大夢、同人十八名。(東京市豊島區巢鴨一ノ二二、志田達三方、電話大塚八六二)

NOVA美術協會(洋)

昭和五年結成。從來の展覽會機構審査制を否定し、新感覺、新造形意識に基いて製作せんとする青年作家の集團。昭和六年より毎年春季に無審査制に依る公募展を開催して居る。〔會員〕大竹久一、鶴岡政男、關川護、小俣球一、井澤秋雄、伊東浩三(東京市世田ヶ谷區松原町四ノ一五一)

巴里東京新興美術同盟

昭和五年成立。同會の趣旨は巴里に於けるアヴァンギャルド藝術を東京に將來し、又東京の新興美術を巴里に紹介し、一黨一派に偏せざる文化交歓を行ふに在る。昭和七年第一回展を開催す。〔盟員〕齋藤五百枝、峰岸義一〔展覽會委員〕(在佛)アンドレ・サルモン、アンドレ・ブルトン、パブロ・ピカソ、ジャン・ミロ、ジュアン・リニルサ、アンドレ・マツソン、ジャン・ド・ボツトン、モイズ・キスリング、松尾邦之助(東京)

川路柳虹、田邊孝次、森口多里、小城基、柴田勝衛(東京市中野區江古田四丁目一五五四、齋藤五百枝方電話中野四四一四)

白日會(洋、彫)

大正十三年春組織。同年六月東京三越本店に第一回展を開催す。爾來毎年春季に東京府美術館に公募展を開き昭和十年第十二回展に及ぶ。

〔會員〕池部鈞、富田温一郎、大久保喜一、笠原靱、吉田三郎、田中繁吉、竹林順一、中澤弘光、永原廣、村上鐵太郎、無線寺心澄、能勢龜太郎、野口良一、熊谷登久平、山田説義、間部時雄、小西正太郎、香田勝太、五島甚之介、秋元松子、相田直彦、笹岡了一、木村珪二、三宅圓平、三宅策郎、篠原

黨、鈴木秀雄。會友三十四名。(東京市淺草區芝崎町二二、村上芳)

白朝會(洋)

昭和九年三月舊帝展第二部審査員級有志により組織。日本橋高島屋に於て年一回同人作品發表をなす。

〔同人〕金澤重治、金井文彦、吉村芳松、田邊至、大久保作次郎、安宅安五郎、佐竹德次郎(東京市淀橋區下落谷一ノ五四〇杉本貞一方)

白鷺會(日)

舊稱交風社。日本畫の研究團體にして毎月二回寫生會、作品批評會を開催し又展覽會を開く。(大阪市東區十二軒町二一 竹村猗々軒内)

八絃會(日)

大丸美術部の主催する京都在住日本畫家の作品發表團體。昭和十年第一回展を開く。(京都市四條高倉、大丸美術部)

美校橫濱會

昭和十年五月創立。橫濱在住並同地出身の東美校卒業生、在校生及關係者を以て組織す。年一回展覽會を開き、又研究會、講演會等を開催す。〔幹事〕飯田九一、石野隆、岩井藤吉、河原丈夫、宮川澄康、森田民

美術團體

藏、鈴木泰（横濱市中區庚臺六宮川香山方）

美術公正會

昭和十年十月美術關係の記者に依て組織さる。美術行政並に美術に關する諸問題を研究し、時宜に應じて其主張を行ふものとす。隨時研究會、講議會を開催し、パンフレットを發行す。（會員）岩佐新、垣見泰山、浦崎永錫、藤本韶三（東京市淀橋區西大久保二ノ二五三、電話四谷六三二五）

福井縣美術協會

大正十五年創立。福井縣の美術及工藝の發達を圖るを目的とし、同縣出身並縣内に住の美術家を以て組織す。年一回の美術及工藝品展覽會開催の他に講習會、講演會等を催し、又他の博覽會、共進會等へ出品の斡旋をなす。（會長）根尾謙兒（福井縣商品陳列所内）

福島美術協會

昭和五年九月、福島縣に於ける美術の發達を目的として設立。年一回福島市に於て公募展開催の他、隨時講習會、講演會等を開く。（總裁）福島縣知事（會長）佐藤澤。會員十八名。（福島縣福島市役所内）

福陽美術會（日）

大正八年、福島縣出身の日本畫家を以て組織す。會員相互の親睦、後進の誘掖に努め、東京に於て三回、郷土に於て毎年展覽會を開催し現在に至る。

〔會長〕勝田蕉琴 〔理事〕荻生天泉 太田秋民、坂内青嵐 〔幹事〕渡邊晨畝、角田磐谷、石塚省三、酒井三良、渡部浩年、酒井白澄（東京市本郷區弓町一ノ二五坂内青嵐方）

兵庫縣美術家聯盟（洋）

昭和五年八月兵庫縣在住の洋畫家を以て結成、毎年春季に同人展を、秋季に公募展を開催す。

〔評議員〕中川郷一郎、山内春曉、山口久一、元川克己、牛尾桃里、中村久已、別車博次郎、大坪健飯、大石輝一、坂本益夫、松浦三郎、東清司。會員百十五名。（神戸市元町一丁目鯉川筋畫廊内）

戊辰會（日）

昭和三年創立。會員の自由製作發表を目的とし、毎年一回展覽會を開催し、昭和十年第七回に及ぶ。

〔顧問〕川合玉堂 〔會員〕磯部草丘 石渡風古、花村晃觀、太田一彩、甲斐常一、川崎求霞、田中針水、田崎美山、高田那美、長野草風、

村雲大機子、井上恒也、野添草郷 山下巖、松本委水、古家苔軒、古屋正壽、藤井霞郷、兒玉希望、水野陽翠、島春潮、鈴木有哉（東京市杉並區井萩一丁目四〇、磯部草丘方）

北陽會（日、洋、彫、工）

昭和八年創立。會員は主として東京美術卒業生にして、富山縣出身の在京美術家を以て組織す。毎年會員の製作展を開く。（會長）伯前田利男 〔副會長〕高廣三郎 〔世話人〕佐々木大樹、郷倉千靱、長谷川義起、山崎覺太郎、中谷宏運、五島甚之助。會員五十一名。（東京市麹町區大手町二ノ二、日清生命館六二一號室）

馬込美術會（洋、彫）

昭和二年春設立。馬込町在住の美術家の親睦團體で展覽會を開くこと三回に及ぶ。（會員）佐藤朝山、橋田庫次、關口隆嗣、馬越枏太郎、小林克己、須藤宗方、服部亮英、田澤八甲、井上白楊、池部一夫、青柳瑞穂、大塚金吾、眞野紀太郎、矢嶋甲子太郎。（東京市大森區馬込町東二ノ九七三、大塚金吾方、電話大森二〇五〇）

明朗美術聯盟（日）

もと青龍社の同人落合朗風、川口春波の二名に依つて昭和九年一月創立。同年第一回展を開いた。毎年一回展覽會を開催する。

〔同人〕落合朗風、川口春波 〔會員〕鈴木大藏、樋口英雄、安藤ふぢ枝、馬場和夫、渡邊實、高木古泉、朴生光、井上陵華、丹阿彌岩吉、荒井草雨、安井大游。研究員十二名。（東京市目黒區三谷町九六、電話在原四〇九六）

洋風版畫會（版）

昭和四年十二月創立。主としてエツチング及石版畫の創作發表の團體毎年一回展覽會を開催す。

〔會員〕岡田三郎助、田邊至、吉田久繼、織田一磨、中村研一、及川康雄、間部時雄、小磯良平、猪熊弦一郎、永坂春雄、大久保作次郎、寺崎武男、渡邊光徳（東京市澗野川區澗野川町六八五 渡邊光徳方）

洛黨會（工）

昭和四年創立。澤田宗山の指導を仰ぐ京都陶磁器作家の團體。毎年數回展覽會を開き、尙毎月研究會を開催す。

〔會長〕澤田宗山 〔幹事〕松本石亭 鈴木則司、伊地知仁郎、横山瑞祥 長谷川白峰、尾形周平、堯部清 〔會員〕三十名（京都市伏見區桃山宗和園）

離騷社

大正九年八月創立。會員相互の親睦を圖ると共に、毎月美術に關する月次研究會、見學旅行等を催して修養に資せんとする集りである。

〔幹事〕西澤笛畝、金井紫雲、石川昂水、飛田周山、甲口黃葵。會員三十七名（東京市牛込區津久戸町三〇、西澤笛畝方）

柳美會（工）

大正六年京都柳池校開校五十年記念に同校關係の工藝家を以て創立。毎年展覽會を開催し今日に及ぶ。

〔理事長〕澤田宗山（理事）泰藏六、吉田長春、青木俊勝（京都市伏見區桃山宗和園内）

緣人社（彫）

昭和八年度の東美校彫刻科塑造部卒業生を以て結成。毎年六月展覽會を開催す。〔會員〕岸崎良平、伊藤鉦次、西田信、星野宣、小田寛一、川口信彦、漆原馬須雄、宇佐見庄一新井喜物治、青柳利男、明田川孝北青史（東京市下谷區谷中上三崎南町六〇、伊藤鉦次方）

緣彫彫刻會（彫）

舊稱大東彫塑會。大正十二年以降の東美校木彫部卒業生有志を以て組

織す。關野聖雲の彫刻界に於ける主張を翼賛せんとす。會員六十名（東京市豐島區千川町一ノ三一七〇、中野昂方）

瑠璃畫社（日）

松岡映丘の門下生有志を以て昭和九年結成。新日本畫の創作を目的とす。十年第一回展を開く。

〔會員〕浦田正夫、山本丘人、杉山寧、河部貞夫、岡田昇（東京市下谷區上野櫻木町三四、山本丘人方）

六潮會（日、洋）

昭和六年七月成立。作家及び批評家の集りにして、交友を主とする研究團體、七年より三越に毎年一回展覽會を開催して居る。

〔同人〕中村岳陵、中川紀元、山口蓬春、牧野虎雄、木村莊八、福田平八郎、外狩素心庵、横川毅一郎（東京市目黒區大原町一一六二横川毅一郎方）

和光會（工）

昭和九年設立。同年十一月服部時計店に於て第一回展を開催す。

〔會員〕岡田三郎助、和田三造、津田信夫、沼田一雅、高村豐周、廣川松五郎、山崎覺太郎（東京市京橋區銀座四丁目、服部時計店內）

早稻田美術學會

早稻田大學校友及び學生關係者の美術同好の士を以て組織す。久しく中絶して居たのを大正十二年春高田早苗博士を會長として再興今日に及ぶ。講演會、研究會、展覽會等開催し、又圖書出版をなす。〔會長〕紀淑雄（副會長）坂崎坦（東京市淀橋區西大久保二丁目二〇一、坂崎坦方）

展覽會場
一覽

東京

東京府美術館

下谷區上野公園
電話下谷二三〇四

大正十五年竣工。建築費百萬圓は佐藤慶太郎の寄贈である。昭和四年東京府より約四十萬圓を臨時支出して別館を増築した。昭和十年三月設立十週年記念の祝賀を舉行した。

同館の敷地は約四千坪で建物の様式は近代クラシック式、軒高、地盤よりバラベツト上端迄四十八尺、構造は鐵骨鐵筋コンクリート。建物延坪數は三八〇六坪三四にしてその内譯は地中階六七坪五、壹階二〇四一坪九二、主階一六二三坪六七、中階

七三坪二五である。

同館役員

〔館長〕横山助成（次長）宮野省三
白戸半次郎（主事）尾川藤十郎
〔書記〕矢田部正造、早川治平
〔顧問〕佐藤慶太郎、宇佐美勝夫、平塚廣義、正木直彦、伊東忠太、川合玉堂、小室翠雲、荒木十畝、結城素明、横山大觀、安田靉彦、岡田三郎助、和田英作、藤島武二、中村不折、滿谷國四郎、朝倉文夫、北村西望、中野勇治郎
〔常議員〕鍋木清方、松岡映丘、野田九浦、木村武山、飛田周山、小林古徑、川端龍子、小林萬吾、南薫造、石川寅治、永地秀太、牧野虎雄、石井柏亭、小杉放庵、山崎朝雲、内藤伸、建昌大夢、小倉右一郎、藤井浩祐、平櫛田中、津田信夫、香取秀真、海野清、赤塚自得、板谷波山、田口掬汀、小池泰康、正宗得三郎、小島善太郎
〔評議員〕八十八名

職制（拔萃）

第一條 本館は美術に關する創作の展覧新古美術品の陳列其の他美術の發達に必要な事業に使用するを以て目的とす

第三條 館長は知事を以て之に充て館務を統理す

第四條 次長は内務部長並學務部長

展 覽 會 場

を以て之に充て館長の指揮を承け館務を掌理し館長事故あるときは其職務を代理す

第七條 本館に顧問評議員及常議員若干名を置き知事之を委嘱す顧問及評議員は重要な館務に關し館長の諮問に應じ又は意見を開陳するものとす

常議員は評議員中より知事之を委嘱し館の使用其の他常務に關する事項を審議するものとす

第八條 評議員會及常議員會の議長は館長之に當る館長事故あるときは館長の指名したる者之を代理す

第九條 評議員會は毎年一回之を開く但し必要に應じ臨時會を開くことあるべし

常議員會は毎年二回之を開く但し必要ある場合に於ては隨時之を召集す

使用規定拔萃

第一條 本館ハ左記目的ヲ有スルモノニ限り本使用規定ニ依り使用セシム

- 一 美術ニ關スル創作ノ展觀
 - 二 新古美術品ノ陳列
 - 三 其ノ他美術ニ關スル事業
- 前項各號ノ使用者ナキ場合ニ限り藝術等ノ諸會ニ臨時使用セシムルコトヲ得

第二條 本館ヲ使用セムトスル者ハ

別記第一號ノ様式ニ依り要項ヲ具シ館長ノ承認ヲ受ケヘシ

第三條 前條ニ依り承認ヲ受ケタルモノハ左ノ通使用料ヲ前納スヘシ但シ特別ノ事情アリト認ムルトキ

ハ相當ノ保證人ヲ附シ又ハ保證金ヲ徴シタル上後納ヲ許可スルコトアルヘシ
使用料ハ當分ノ内別表ニ依ル

場 所	時 期	月											
		七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六
全 館	一日ニ付二五〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円
第一階(彫塑室及地階)	同	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇
全部(陳列室ヲ除ク)	同	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇
本館全館(地階室ヲ除ク)	同	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇
彫 塑 室	同	八	一三	一八	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五
本館第一階全部(彫塑室ヲ除ク)	同	二三	三〇	三八	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五
同	三ヶ分區室	一五	二〇	二五	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
同	二ヶ分區室	一〇	一三	一五	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八
同	一ヶ分區室	五	六	八	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
同	地階陳列室全部	同	六	八	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
同	分 室	同	三	五	六	六	六	六	六	六	六	六	六
別 館 主 階 全部	同	一〇	一五	一八	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五
同	一ヶ分區室	同	五	八	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
同	地階陳列室	同	一〇	一一	一五	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八
同	分 區 室	同	五	六	八	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

(備考) 室ノ名稱分區ハ別紙圖面ニ依ル

第一階分室使用者ニシテA室、B室、C室ノ一ヲ使用スルモノハ更

ニ一分區室ノ使用料ノ四分ノ一ニ當ル料金ヲ加ヘ納ムルモノトス彫塑室ヲ分割シテ使用スル場合ハ全室トノ割合ニ應ジ使用料ヲ徴ス前

表以外ノ使用料ハ其都度之ヲ定ム彫塑室及第一階陳列室ニ臨時間切ヲ爲サムトスル使用者ハ之ニ要スル人夫賃等ノ諸費ヲ負擔スルモノトス

看守受付下足等ニ關スル事項ハ自己ノ負擔ニ於テ使用者之ヲ施設スルモノトス

第四條 本館使用ノ承認ヲ受ケタル後之ヲ他ニ轉貸スルコトヲ得ス

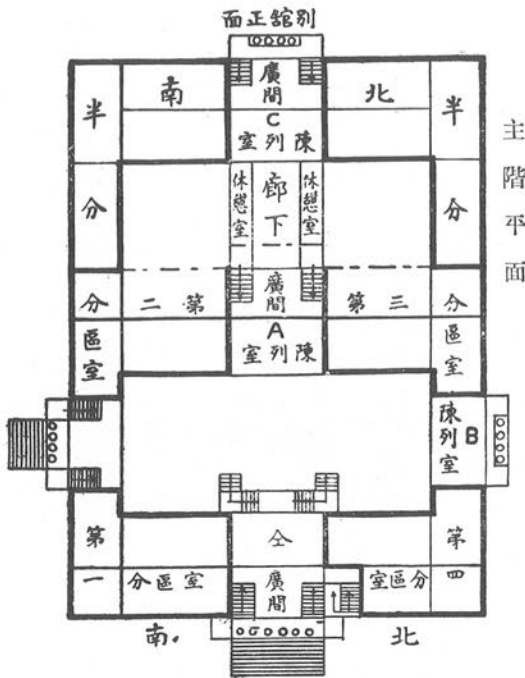
第五條 既納ノ使用料ハ之ヲ還付セス但シ左ノ場合ニ於テハ其ノ一部若クハ全部ヲ還付スルコトアルヘシ

一 不可抗力ニ因リ指定ノ場所ヲ使用スルコト能ハサルトキ

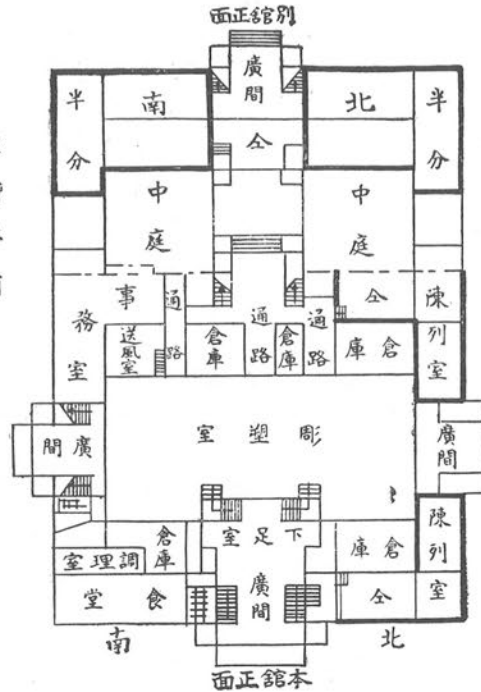
二 本館ノ都合ニ依り使用承認ヲ取消シタルトキ

第六條 使用者ニ於テ切符賣場其ノ他特別ノ設備ヲ爲サムトスルモノハ本館ノ承認ヲ受ケヘシ

第八條 使用者使用ヲ終リ又ハ使用ヲ中止シタルトキ若クハ使用ノ承認ヲ取消サレタルトキハ速ニ使用ノ場所ヲ原狀ニ回復シ館長ノ檢査ヲ受ケヘシ館長ハ使用者ニ對シ必要ニ應ジテ更ニ適當ノ措置ヲ命スルコトヲ得



主階平面



地階平面

凡例
—— 別本分
—— 館界 室

(備考)

繪畫陳列室壁面延長合計

八百三十七間

本館畫壁

五百二十五間

同 第一分區室

百十五間四尺

同 第二分區室

百〇九間五尺

同 第三分區室

百〇九間

同 第四分區室

百〇七間二尺

同 A 室

二十二間

同 B 室

二十間二尺

同 漆喰壁ノ室

四十間三尺

同 彫塑室

三百七十六坪

同 工藝陳列室

二百三十四坪

同 別館主階全部

三百一十二間

同 南分室

百四十一間

同 北分室

百四十一間

同 C 室

十九間

同 廣間

十九間

同 工藝室

三百六十一坪

日本美術協會列品館

下谷區上野公園櫻ヶ丘

電話下谷一九一〇

大正十年の竣工にして平家建、延坪五百二坪。同館は日本美術協會主催の展覧會に使用し、原則としては他に貸館しない。

紀伊國屋ギャラリー

洋畫の展觀に適す。壁面約十四間

(使用料) 一日(午前九時—午後九時) 二十五圓、借用申込の際約定金として一日分を請求す。(京橋區銀座六ノ一)

銀座・三味堂ギャラリー

會場は主に同店主催の洋畫展覧會に使用するが、主催展のなき場合特に貸貨することあり。使用料は五日間百圓程度。廣さ約廿坪、壁面約百尺。經營者、堀越震六、同店美術部責任者、西川武郎(京橋區銀座八ノ二、電話銀座一八〇八)

資生堂ギャラリー

美術及美術工藝品の展觀を主とし使用申込みを受けたる後相當の詮衡を経て貸否を決定す。最小壁面約十間、最大壁面約廿間。(使用料) 一日(午前九時—午後九時) 金四十圓、(看板費、看守費、電燈費等を含む)(京橋區銀座七丁目)

青樹社

同店の場合により洋畫展覧會に限り一箇月一回(五日乃至七日) 貸館す。陳列室は階上階下の二室より成り、使用料は階下一日廿圓、一週間百三十圓、全館使用は以上の倍額である。(京橋區銀座四ノ四、電話京橋三六七八)

展覽會場

東京堂ギヤラリー

洋畫の展覧に適す。「使用料」一日二十圓程度。(神田區神保町一ノ一七)

日動畫廊

昭和六年設立、主として同畫廊主催の洋畫並彫刻展を開催し、會場壁面は(イ)十八間(ロ)廿五間(ハ)卅間の各三通りに使用する。會場を賃貸する際の一日使用料は(イ)三十圓、(ロ)五十圓、(ハ)百圓である(京橋區銀座數寄屋橋畔、日動畫廊電話銀座四四一八、長谷川仁)

東京美術俱樂部

美術骨董品の入札羅賣を主とするが、一般席貸業をも營む。全館の使用料は一日二百五十圓である。
〔社長〕伊藤平藏 (芝區新橋七丁目、電話芝九九〇一九九二)

三	越	日本橋區駿河町
同	京橋區銀座	
松	坂	下谷區上野廣小路
同	京橋區銀座	
高	島	日本橋區通二ノ五
松	屋	京橋區銀座
伊	東	同
三	共	同

服部時計店

京橋區銀座

鳩居堂

同

紀伊國屋

四谷區新宿

文房堂

神田區神保町

東美俱樂部

日本橋區通町二ノ五

大阪

朝日會館

大阪市北區中ノ島三ノ三

會場は同會館の三階にあり、横光線に依り、壁面延長千尺。平素はその一部を割して約五十坪の小集會場にも使用出来る。「使用料」一日金五十圓、△割引(イ)使用日數五日以上に互る時は第五日より日數に對し二割引。(ロ)使用日數十日以上に互る時は(イ)と同様にして更に第十日目よりの日數に對し三割引。(ハ)使用日數十五日以上に互る時は(ロ)と同様にして更に第十五日目よりの日數に對し五割引。△展覽會用「スクリーン」使用料、一回一間に付金五十錢。△同硝子戸棚使用料(高さ十一尺二寸長さ十二尺三寸奥行三尺)、一回一組に付金十圓(何日間でも連續使用する時は一回と見做す)〔主任〕高橋増太郎。

大阪美術俱樂部

株式會社組織にして、書畫、骨董

及新古美術品の委託販賣並に一般席貸業を營む。「使用料」階上全部一日一百四圓、階下一百二十圓、全館二百圓。晝間又は夜間のみの使用は三割引とす。〔取締役社長〕兒島嘉助〔事務取締役〕太田佐七(東區淡路町四ノ四三、四四、四五合併地、電話北濱三二〇五一七)

大阪毎日新聞社 北區堂島上二丁目
美術新論社畫廊 北區中之島三丁目

三	越	東區高麗橋二丁目
高	島	南區長堀橋
白	木	東區備後町
松	坂	南區心齋橋筋
大	丸	南區日本橋三丁目
十	合	南區心齋橋筋
阪	急	北區梅田
三	角	東區淀屋橋

京都

大禮記念京都美術館

左京區岡崎公園
電話上六七〇〇

今上陛下の御即位の大禮を慶祝記念し奉る爲京都市に於て建設せるもので、昭和六年起工し、八年竣工。爾來同市並に同館主催の美術展覽會

を開催する他一般美術團體に陳列室を貸與する。本館は二階建鐵筋骨混凝土造にして建坪千四百八坪(延坪二千八百三十二坪)

同館規則拔萃

第一條 本館は美術品及美術工藝品を陳列して一般の觀覽に供し其の他斯道獎勵の用に供するを以て目的とす

第二條 本館は前條の目的を達する爲本館の所藏に係るもの及官廳團體又は個人等より出品ありたるものを陳列して一般の觀覽に供す
本館は一定の期間を限り團體又は個人に對し美術品及美術工藝品陳列の爲本館の全部又は一部の使用を許可することあるべし

第七條 本館に評議員若干人を置く
評議員は美術家及美術に關し識見ある者の中より市長之を委嘱す
第八條 評議員は重要な館務に關し館長の諮問に應じ又は意見を開陳するものとす

第十條 本館は一月五日より十二月二十五日迄毎日左の時間中開館す
但し時宜に依り之を伸縮し又は閉館することあるべし

一月二月三月十月十一月十二月
午前九時より午後四時まで
四月九月 午前八時より午後五時

使用場所	使用料(一日當り)
大陳列室(二二六坪)	一七
陳列室	
第一號	八
第二號	八
第三號	八
第四號	八
第五號	八
第六號	八
第七號	八
第八號	八
第九號	八
第十號	八
第十一號	八
第十二號	八
第十三號	八
第十四號	八
第十五號	八
第十六號	八
第十七號	八
第十八號	八
第十九號	八
第二十號	八
第二十一號	八
第二十二號	八
第二十三號	八
第二十四號	八
第二十五號	八
第二十六號	八
第二十七號	八
第二十八號	八
第二十九號	八
第三十號	八
第三十一號	八
第三十二號	八
第三十三號	八
第三十四號	八
第三十五號	八
第三十六號	八
第三十七號	八
第三十八號	八
第三十九號	八
第四十號	八
第四十一號	八
第四十二號	八
第四十三號	八
第四十四號	八
第四十五號	八
第四十六號	八
第四十七號	八
第四十八號	八
第四十九號	八
第五十號	八
第五十一號	八
第五十二號	八
第五十三號	八
第五十四號	八
第五十五號	八
第五十六號	八
第五十七號	八
第五十八號	八
第五十九號	八
第六十號	八
第六十一號	八
第六十二號	八
第六十三號	八
第六十四號	八
第六十五號	八
第六十六號	八
第六十七號	八
第六十八號	八
第六十九號	八
第七十號	八
第七十一號	八
第七十二號	八
第七十三號	八
第七十四號	八
第七十五號	八
第七十六號	八
第七十七號	八
第七十八號	八
第七十九號	八
第八十號	八
第八十一號	八
第八十二號	八
第八十三號	八
第八十四號	八
第八十五號	八
第八十六號	八
第八十七號	八
第八十八號	八
第八十九號	八
第九十號	八
第九十一號	八
第九十二號	八
第九十三號	八
第九十四號	八
第九十五號	八
第九十六號	八
第九十七號	八
第九十八號	八
第九十九號	八
第一百號	八

二 團體觀覽料(二十人以上)

一 普通觀覽料
大人一人ニ付 金十錢
小人一人ニ付 金五錢

第一條 本館の陳列品觀覽者に對しては左の區分に依り觀覽料を徵收す但し本市の區域内に在る學校の學生、生徒、兒童にして教員の引率するもの及其の引率教員又は市長に於て特別の事由ありと認めたる者に付ては之を減免することあるべし

五月六月七月八月 午前八時より午後五時三十分まで

同館使用條例拔萃

第二條 特別の陳列を爲したるとき

大人一人ニ付 金五錢
小人一人ニ付 金三錢

は前條の規定に拘らず其の期間に限り市長の定むる所に依り別段の觀覽料を徵收することあるべし

第三條 美術品及美術工藝品を展觀せんが爲本館を使用せんとする者は所定の様式に依り使用願書を提出し市長の許可を受くべし

第四條 使用の許可を受けたる者は左の區分に依り使用料を前納すべし但し特別の事由ありと認めるときは相當の保證人を立てしめ又は保證金を徵し後納せしむることあるべし

第五條 陳列室以外の館内及本館構内地は市長に於て管理上支障なしと認むる場合に限り臨時使用を許可することあるべし

同館關係職員並評議員

〔館長事務取扱〕石川芳太郎〔主事〕西野殿三〔書記〕山田一江

〔評議員〕石田吉左衛門、飯田新七、西山翠嶂、富田溪仙、鹿子木孟郎、竹内栖鳳、植田壽藏、清水六兵衛、菊池契月

京都朝日會館畫廊
中京區三條河原町京都朝日會館内、電話上五〇七

昭和十年新設。北光線を採光し冷燐房裝置あり。洋畫、日本畫、美術工藝等に利用し得る。〔使用料〕(イ)一日金二十圓、(ロ)使用日數五以上に互る時は第六日目よりの日數に對し二割引、(ハ)使用日數十日以上に互る時は(ロ)と同様にして更に第十一日目より三割引、(ニ)スクリーン使用無料、(ホ)冷房裝置費實費を請求することあり、(ヘ)監視少女、實費。

大 丸 四條高倉
高 島 丸 島丸高辻下ル
十 合 島丸四條
六角會館 六角島丸東
菊溪俱樂部 圓山公園

其他

神戸畫廊 昭和五年開廊。三室より成り總坪數三十坪。陳列壁面八十三尺。〔使用料〕一日十圓(午前九時一午後六時)。夜間使用は別に相談に應ず。〔經營者〕大塚銀次郎(神戸市元町一丁目鯉川筋)

朝日會堂 神戸市榮町大阪朝日支局

三 越 同市元町
名古屋朝日支局 名古屋市中區
名古屋丸善 同市廣小路
松坂屋 同市中區南大津町
名古屋美術俱樂部 同市東區朝日町
野澤屋吳服店 横濱市伊勢崎町通

現代美術關係定期刊行物一覽(五十音順)

一般

名稱	編輯又ハ發行所	所 在	振替番號	定價	備考
アートリエ	アートリエ社	牛込區喜久井町三四、電牛込六四二一	東京六六〇〇二	一、二〇	月刊
アトリエ	日本創作畫協會	板橋區中新井町三丁目、電練馬一六八	東京三〇四〇〇	一、五〇	隔月刊
阿々土別卷	同	同	同	二、〇〇	月刊
畫室	畫室社	神戸市須磨區離宮前町二、電須磨一〇二〇	東京五三二〇〇	三、〇〇	同
藝術	藝術通信社	本郷區湯島天神町二ノ二、電下谷一六〇八	東京五三二〇〇	三、五〇	同
藝術	東京美術親交會藝術社	小石川區西江戸川町一八、電小石川七一〇二	東京七二二四二	三、五〇	月刊
藝術	關西藝美社	神戸市湊區橋通二ノ八一、電元町三一四〇	大阪三五七七	二、五〇	同
現代美術	現代美術社	豐島區長崎東町一ノ九五五	東京五六二五九	五、〇〇	同
綜合美術	綜合美術研究所	世田谷區松原町三ノ九五八			
裝美	裝美報社	京橋區新富町二ノ一六東京表裝飾組合事務所	東京七一二六七	年二、〇〇	同
中央美術	中央美術會社	豐島區長崎南町一ノ一九四〇、電落合長崎元古	東京七二二六七	一、〇〇	同
日本美術	日本美術社	名古屋市中區西日置町中田一一	東京六三〇一五	一、〇〇	同
美術	東邦美術學院	淀橋區戶塚町二ノ一二二、電牛込一四四一	東京六三〇一五	一、二〇	同
美術	美術界社	埼玉縣大宮町三六〇五	東京二二二五	二、〇〇	月刊
美術	美術街社	京橋區銀座西五丁目S二號館		三、五〇	同
美術	美術通信社	京橋區銀座西八ノ九九州ビル、電銀座三三二七		月一、〇〇	月刊
美術	美術時報社	淀橋區西大久保二ノ二五三、電四谷六三二五		一、一五	月刊
美術	美術日報社	大阪市北區堂山町三〇	大阪六九二〇七	一、〇〇	同
美術	美術乃日本社	淀橋區戶塚町四ノ五七五、電牛込二九二三	東京三七七四九	三、〇〇	年四回
美術	美術評論社	牛込區天神町一四、電牛込二一〇九		六、〇〇	年十回

美之國美之國社
風景協會
豐島區雜司谷町七ノ九、電牛込四四三五
目黒區上目黒三ノ一七三三鷹司公爵邸内
東京二二七六六
東京五〇八五八
、八〇
、三〇
同 月刊

繪畫

エツチング 日本エツチング研究所
麴町區半藏門郵便局前、電九段五一四
東京三四四八八
、一〇
同 月刊

藝デッサン 藝デッサン社
淺草區松葉町九四
東京七六八六四
、三五
同 同

塔影 蒲田區蓮沼町二四一
鮑町區下二番町三、電九段三三四〇
東京七七〇〇六
、二〇
同 同

南畫鑑賞 南畫鑑賞會
麴町區中六番町四一、電九段六二〇
東京四一一八八
、四〇
同 同

白畫鑑賞 澁谷區代々木上原町一二九五
神田區錦町一ノ二、二松ビル、電神田一四一〇
東京七三八八一
、五〇
同 同

美術春秋 美術春秋社
小石川區關口駒井町三、電牛込二〇四三
東京三三〇九
、二〇
同 同

洋畫研究 藝術學研究會
杉並區神戶町一一四
東京一三二九九
、一〇
同 同

洋畫新報 洋畫新報社
淀橋區角筈一ノ七八八
東京一三二九九
、五〇
同 同

工藝

大阪之工藝 大阪府工藝協會
大坂市東區大手前之町大阪府廳工務課内
、二〇
同 月刊

工藝ニユース 商工省工藝指導所
神田區淡路町二ノ七小ロビル、電神田二〇一〇
東京三九八〇八
、二五
同 同

創作工藝 創作工藝獎勵會
仙臺市二十人町通、電三七六〇—三七六二
芝區田町一ノ一二、電三田一二一
、一〇
同 同

帝國工藝 帝國工藝會
芝區新芝町東京高等工藝學校内、
電三田一一五六、一一五八
東京七四八八七
、五〇
同 同

汎工藝 汎工藝社
大坂市住吉區住吉町一三〇〇
大阪八二五三九
、三〇
同 同

建築

建築研究 建築研究社
王子區神谷町二ノ一四二
東京三五一三六
、三〇
同 月刊

建築雜誌 建築學社會
京橋區銀座西三ノ一、電京橋一二三三、一二三八
東京一七八七
、一〇
同 同

建築世界 建築世界社
京橋區京橋二ノ二、電京橋一五七五
東京一二二四〇
、七〇
同 同

麻布區市兵衛町二ノ四六、電赤坂一二八四
京橋區寶町一ノ六、電京橋四七五二
大阪市西區土佐堀八、電土佐堀二三二九
京橋區西八丁堀三ノ一八
京橋區銀座西三ノ一建築會館內、電京橋六二〇
東京七〇〇八九
東京三〇六五八
大阪一三八九二
東京五二三三一

四 五 五 六 六
同 同 同 同 月
刊

繪 畫 教 習 會	學 校 美 術 協 會	教 育 美 術 社	新 興 美 育 協 會	圖 畫 與 工 業	圖 畫 與 工 業	美 術 教 育 獎 勵 會
-----------------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	-----------------------	---------------------------------

神田區錦町一ノ二、二松堂ビル内電神田一四一〇 東京三四〇九
荒川區日暮里町三ノ一九六、電下谷六九九三 東京三六五〇七
神田區一ツ橋二ノ九、教育會館内
豐島區堀ノ内三〇
瀧野川區瀧野川町三九二
世田谷區玉川田園調布二ノ七〇九
下谷區櫻木町二
東京三三一七三

三三二〇一三
〇〇五九五〇四
同同同同同同月
刊

國民美術	雙杉會誌	東美	大日本窯業協會雜誌	日本美術協會報告	博物館研究
國民美術協會	雙杉俱樂部	東京美術青年會	大日本窯業協會	日本美術協會	日本博物館協會

本郷區湯島切通坂町五一、電小石川一一七七
澁谷區向山町一〇二吉田秋光方
芝區新橋七ノ一二、東京美術俱樂部內
京橋區銀座西四丁目銀座商館四階電京橋五五一九東京二一三三
下谷區上野公園櫻ヶ丘
麴町區三年町文部省內、電銀座五七七一一九
五七八一―五（省內三八〇）
東京八〇二三

、一五	非賣	同	同	非賣
月刊	年四回	月刊	月刊	年刊

古美術關係定期刊行物一覽(五十音順)

美術

名稱	編輯又ハ發行所	所在	振替番號	定價	備考
浮世繪藝術	浮世繪藝術社	神田區須田町一ノ七合名會社巧藝社	東京二〇四七二	一、〇〇	月刊
漆と工藝	日本漆工會	神田區鍛冶町二ノ一六ノ二	三、三五	一、〇〇	月刊
京都美術青年會誌	京都美術青年會	京都市御池通寺町東入ル		五、〇〇	月刊
國華	國華社	麻布區市兵衛町二ノ一、電赤坂〇八五二		五、〇〇	月刊
史蹟と古美術	國史普及會	京都市七條通堀川西入、田住昇、電下一五七五	大阪四三六七二	三、〇〇	月刊
史迹と美術	スヰカケ出版部	京都市烏丸通二條南入ル	大阪八三七一四	三、三五	月刊
書畫骨董雜誌	書畫骨董雜誌社	牛込區南山伏町一二、電牛込二九〇五	東京六八八九	七、〇〇	同
書藝	書藝社	瀧野川區西ヶ原八四〇		五、〇〇	同
茶道	泰東書道院出版部	日本橋區江戸橋三ノ三	東京二六七三二	五、〇〇	同
茶碗	寶雲舍	日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル、電日本橋西表、三八二	東京四六七一九	四、〇〇	同
庭園	日本庭園協會	芝區白金臺町一ノ五六、電高輪七三九〇	東京二〇一七五	五、〇〇	年六回
陶磁	東洋陶磁研究所	日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル		二、〇〇	年二回
東洋美術	飛鳥園	奈良帝室博物館横、電八七二		二、〇〇	年二回
な	七	瀧野川區田端五〇〇、香取正彦		三、〇〇	年一回
寧樂	寧樂發行所	奈良市東大寺龍松院	大阪七三九四四	二、〇〇	年一回
美術研究	美術研究所	下谷區上野公園、電下谷三四八七		一、五〇	年二回
佛教美術	佛教美術社	京都市左京區北白川伊織町四五、電上二〇四七	大阪一八二七〇	二、三〇	年四回
寶雲	寶雲舍	京都市左京區岡崎眞如堂前町二	東京六七四二四	五、〇〇	月刊
燒もの趣味	鈴木伸樹舍	麴町區下二番町五四學藝書院	大阪六二六七三		年二回
夢殿鵜故郷舍		奈良縣生駒郡法隆寺二六八、電法隆寺四			年二回

美術關係定期刊行物

考古學、歷史關係

貨幣	東洋貨幣協會	荏原區戸越町二九一、電高輪七五九	東京五八三二〇	、七五	月刊
考古學雜誌	考古學會	本郷區龍岡町三一、電小石川七六八七		、四五	同
考古學	立教大學史學會	大阪市住吉區住吉町阿倍野筋三ノ一〇坪井良平方		、五〇	同
史苑	九大史學會	豐島區池袋二一、立教大學史學會		、二〇	年四回
史淵	三田史學會	神田區神保町三富山房內		、一〇	年四回
史學雜誌	史學會	芝區三田慶應義塾大學文學部研究室		、三〇	年四回
史觀誌	早稻田大學	東京帝國大學文學部史料編纂所內	東京七八九三	、四五	月刊
史潮	大塚史學會	小石川區大塚窪町東京文理科大學內		、八〇	年三回
史林	史學研究會	京都帝國大學文學部內	大阪一四五五六	、七五	年四回
東方學	東京文化學院東京京都研究所	小石川區大塚町五六ノ一 京都市北白川			年二回
東洋學	東洋協會學術調查部	麴町區內幸町一ノ三、電銀座四〇三九		、三〇	年四回
ひだび	飛彈考古土俗學會	岐阜縣大野郡高山町		、四〇	月刊
武藏野	武藏野會	芝區新橋二丁目四八	東京三九五〇〇	、四〇	同
歷史教育	四海書房	豐島區巢鴨七丁目			同
歷史地理	雄山閣	麴町區飯田町六丁目二三			同
歷史地理	日本歷史地理學會	神田區錦町三ノ二二	東京九七三五	、四五	同
其他					
思想	岩波書店	神田區一ツ橋通三	東京二六二四〇	一、〇〇	月刊
大正大學々報	大正大學	豐島區西巢鴨四ノ五三〇、大正大學出版部		年一、四〇	年二回
文化	大藏出版書籍株式會社	本郷區本郷三丁目二	東京五一六八四	、二〇	同
文	東北帝國大學文科會	神田區一ツ橋通三、岩波書店	東京二六二四〇	、五〇	同

美術家及美術關係者名簿

凡 例

一、本名簿は昭和十年十二月卅一日を以て締切つた。其後の變動による改訂は次年度に譲る。

一、本名簿に記載した美術家及美術關係者数は千六百二十五名である。本邦に於て、其の作品を公表して居る美術家は非常に多數であつて、記載の範圍を擴大する時は際限が無く、茲には美術家としての獨立した地位を社會に確保して居る人々のみを、一定の標準に従つて嚴選して記載した。初年度の事として人選洩れもあるべく、不備の點は次年度に補ひ度い。

一、建築家は美的意志の表はれとしての建築の設計家、即ち英語のアーキテクトに當る人々のみを記載した。例へば如何に優れた人も構造計算の専門家は記載せぬ。

一、本名簿は電話番号號簿の如く、氏名の頭文字の發音によつて五十音順に記載した。發音の同じものは字畫の少ないのを先にした。頭文字の同じものは二字目の發音により、其の發音の同じものは字畫の少ないのを先にした。但し使用上の便を考へて同字は訓音の異なるものもなるべく一ヶ所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一ヶ所に掲げた如くである。

一、紙數の減少及簡略を旨として左の如き略語を用ひた。

(日) 日本畫 (洋) 西洋畫 (水) 水彩畫 (挿) 挿畫 (版) 版畫 (漫) 漫畫 (彫) 彫刻 (工) 工藝 (漆) 漆藝 (陶) 陶磁器 (金) 金工藝 (染) 染色 (織) 織物 (繡) 刺繡 (硝) 硝子 (圖) 圖案 (學) 學者 (批) 美術批評家 (舊帝院) 舊帝國美術院 (帝院) 帝國美術院 (帝院賞) 舊帝國美術院賞 (舊帝展) 舊帝國美術院美術展覽會 (工藝審査委員) 商工省工藝審査委員會委員 (國寶委員) 國寶保存委員會委員 (重要美術委員) 重要美術品等調査委員會委員 (東美校) 東京美術學校 (日美校) 日本美術學校 (女子美) 女子美術學校 (東京高工藝) 東京高等工藝學校 (東京高工) 東京高等工業學校 (美術院) 日本美術院或は同研究所 (美術協會) 日本美術協會 (太平洋) 太平洋畫會研究所 (川端校) 川端畫學校 (水彩畫會) 日本水彩畫會或は同研究所 (本郷研) 本郷繪畫研究所 (南畫院) 日本南畫院 (葵橋研) 葵橋研究所 (京都美工校) 京都市立美術工藝學校 (繪專) 京都市立繪畫專門學校 (京都高工藝) 京都高等工藝學校 (大阪美校) 大阪美術學校 (信濃橋研) 信濃橋洋畫研究所 (自由畫壇) 日本自由畫壇

一、年數のみを記して、年號の略してあるのは凡て明治を意味する。住所中東京市のみは市名を略して區名を以つて初めた。

一、舊帝展出品者にして特選を得たる人々は其の旨特記したが、その人にして無鑑査の場合は、特選の事は省略した。又審査員に任ぜられたる人々は凡て無鑑査なる故、無鑑査なる旨は特記しなかつた。

一、舊帝展出品者は舊帝展出品と記したが、舊帝展にのみ出品して新帝展不出品の意で無い事勿論である。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (91～133 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.91-133)

Cut for protection of the personal information

日本美術年鑑 昭和十一年版

昭和十一年十月十五日印刷
昭和十一年十月二十七日發行

定價五圓

著作兼
發行者

美術研究所

印刷者

東京市神田區西神田一ノ九
大島秀一

印刷所

東京市神田區西神田一ノ九
太陽印刷株式會社

網目版印刷所

東京市品川區大崎本町三ノ五八二
半七製版所

發賣所

東京市神田區一ツ
橋二丁目三番地

岩波書店

電話九段(3)〇一八七番(以下4)
振替口座東京二六二四〇番

正

誤

表

(頁)		(段)		(行)		(誤)		(正)	
六	七	下	中	六	二	輸出	輸出	一	七
五	八	中	四	二	一	友連	友連	一	四
四	七	四	三	一	三	海濱	海邊	九	九
四	七	三	一	一	三	五月市	五日市	九	七
四	三	上		一	〇	クルーペー	クルーペー	八	七
四	一	下		一	〇	尾張	尾越	八	七
四	一	下		一	〇	坂一	坂鏢一	八	七
三	五	四		一	二	吉之助	吉之介	八	五
三	五	四		一	一	博吏	博吏	八	三
三	五	三		一	一	博吏	博吏	八	三
三	五	一		八		船本	船本	八	一
三	四	四		四	〇	記念	記念	七	九
一	八	上		二	〇	金各	金各	七	九
一	四	三		六		熊谷	熊谷	七	九
一	三	三		一	六	熊本	熊本	七	八
一	一	下		四		柄撰	柄撰	七	五
一	一	上		一	〇	ビツシエール	ビツシエール	七	五
九		上		二		寺崎武雄	寺崎武男	七	五
八		下		七		Y氏婦人像	Y夫人の肖像	七	三
七		上		一	九	村田	村田	六	八
(頁)	(段)			(行)	(誤)			(正)	
六	八			三	專門學校			三	專門學校
六	九			一	雙壁			一	雙壁
七	三			二	傳抱石			二	傳抱石
八	五			三	孝治			三	孝次
九	五			二	日娑春			二	日娑春
一	一			二	六回會第一華展			二	六華會第一回展
一	一			三	獎勵會			三	獎勵會
一	一			四	朱葉洋會畫展			四	朱葉會洋畫展
一	三			〇	時別			〇	特別
一	四			八	索			八	牽
一	八			四	索			四	牽
三	四			九	堅幅			九	堅幅
三	五			九	夏の「兩國」			九	「夏の兩國」
三	五			六	盛福院			六	成福院
三	五			四	遺作			四	遺作
三	五			二	遺作			二	遺作
四	一			一	上人圖			一	土人圖
四	一			四	批			四	披
四	三			九	二十廿			九	二十日
四	五			二	柴峰			二	紫峰
四	七			二	新與美育賞			二	新與美育賞
五	八			一	村田			一	村田
六	七			一	等伽會			一	等迦會

